“放言柔道王”石井慧プロ転向騒動の裏側!!

kamipro

紙のプロレ

MMA & PRO-W

enterbrain MOOK

2008

128

特別定価 940yen



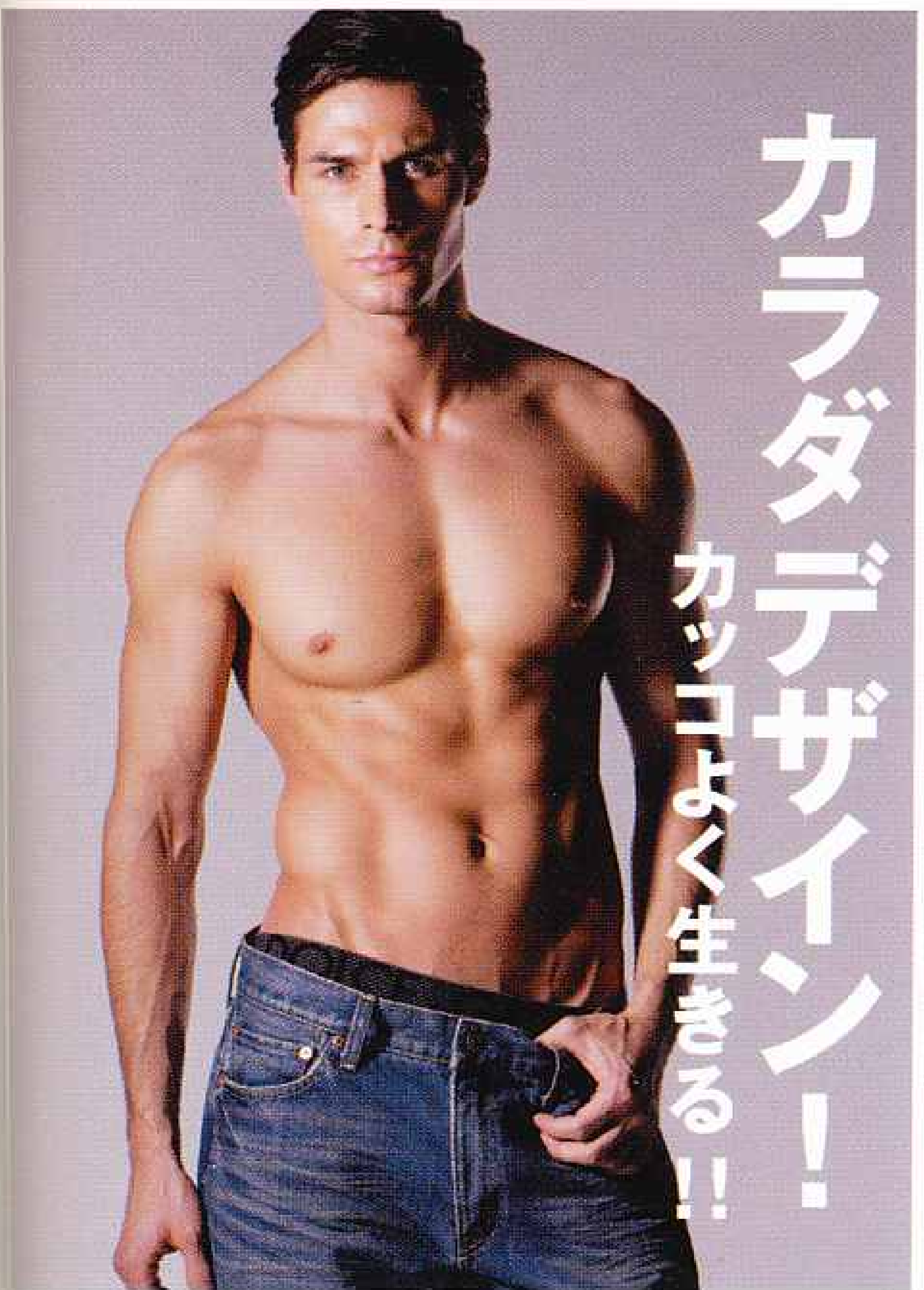
♪ダン! ダン!! ダダン!!!
今月号のテーマはPRIDEだ!

桜庭和志×青木真也

田村潔司 PRIDEの忘れ物
“60億分の1”ヒョードルの素顔
ミルコ・クロコップ クロアチアの奇跡
VTに芸術を持ち込んだ男 ノゲイラ
シウバのプロ魂
世紀のPRIDE買収劇
髙田延彦の語録の中の語録!!
アントニオ猪木と百瀬博教
谷川貞治の榊原黒魔術
特別インタビュー 鈴木みのる
リングスvs PRIDE
プロレスはPRIDEに殺されたのか?
高山善廣／永田裕志／柴田勝頼

“世界最高峰のリング”消滅から一年——!

PRIDE大好き 超愛してる!!







バーベルセット ブラックタイプ 重量	特別価格(税込)	ダンベルセット ブラックタイプ 重量	特別価格(税込)	プレート・単品(1枚) ブラックタイプ 重量	特別価格(税込)
30kg	7,980円	20kg	5,980円	1.25kg	300円
50kg	9,980円	30kg	6,980円	2.5kg	600円
70kg	13,980円	40kg	7,980円	5.0kg	1,200円
100kg	18,980円	50kg	8,980円	7.5kg	1,800円
140kg	24,980円	60kg	9,980円	10.0kg	2,400円
				15.0kg	3,600円
				20.0kg	4,800円

バーベルセット、ダンベルセットは全てシャフト付

バーベルセット ラバータイプ 重量	特別価格(税込)	ダンベルセット ラバータイプ 重量	特別価格(税込)	プレート・単品(1枚) ラバータイプ 重量	特別価格(税込)
30kg	10,980円	20kg	7,980円	1.25kg	400円
50kg	14,980円	30kg	9,980円	2.5kg	800円
70kg	20,980円	40kg	11,980円	5.0kg	1,600円
100kg	27,980円	50kg	13,980円	7.5kg	2,400円
140kg	35,980円	60kg	15,980円	10.0kg	3,200円
				15.0kg	4,800円
				20.0kg	6,400円

バーベルセット、ダンベルセットは全てシャフト付

バーベルセット、ダンベルセットお買上げの方に トレーニング解説DVDプレゼント

テクニカル・トレーナーの佐々木卓氏がバーベルやダンベルを使ったトレーニングの基本を解説・実演! 正しいトレーニング方法を学ぼう!

広い肩幅のスタイリッシュ・ボディをつくる

ラット運動による肩部の集中強化トレーニングが可能!!



●トレーニングメニュー12種類
●背もたれ角度が4段階に調節可能

キングスセット(プレートセット別売)
サイズ:W130×D137×H205cm 特別価格 **19,980円**(税込)

逆三角形のボディ・シルエットに!



キングofベンチ(プレートセット別売)
サイズ:W130×D137×H100〜130cm
特別価格 **15,980円**(税込)

ワンタッチでシットアップベンチに



ハードベンチ(プレートセット別売)
サイズ:W62×D126×H85〜105cm
特別価格 **9,980円**(税込)

省スペースで安定感抜群!



トレーニングベンチ(プレートセット別売)
サイズ:W52×D126×H100cm
特別価格 **6,980円**(税込)

割れる腹筋・男らしい背筋



シットアップベンチ サイズ:W56×D127×H123cm
特別価格 **5,980円**(税込) 5段階の角度調節が可能



床の保護、スベリ等を防ぎます。

ベンチマット
サイズ:W200×D110cm ×厚5mm
特別価格 **1,980円**(税込)

目的別に多彩なトレーニング



マルチジム
サイズ:W100×D115×H140〜220cm
特別価格 **9,980円**(税込)

有酸素運動でボディシェイプ!



フィットネスバイクfr
サイズ:W51×D65×H128cm
サドル高さ調節可能
特別価格 **9,980円**(税込)

一発の集中力が頂点を極める!

打ち応え十分! 倒れる心配無用!



ファイティングバッグ
サイズ:φ40×H180×土台60cm
特別価格 **15,980円**(税込)

ファイティングバッグお買上げの方に、トレーニンググローブ1組(赤または黒)をプレゼント!

パンチや激しい蹴りにも対応 自宅で本格ボクササイズ!



サンドバッグスタンド
サイズ:W100×D138×H200cm
特別価格 **12,980円**(税込)

高級レザー使用!



サンドバッグ・ハードタイプ
取付けクサリ付・中身入り

①φ40×H150cm	特別価格	8,980円(税込)
②φ40×H130cm	特別価格	7,980円(税込)
③φ40×H100cm	特別価格	6,980円(税込)

ファイティングロード・ショップ
フィットネスプラザ

会員登録でお得なポイントサービス

☎06-6147-4664

営業時間
11:00〜20:00

定休日
毎週水曜、第3木曜

アクセス
〈地下鉄谷町線〉
長原駅4番出口徒歩1分
〈近畿自動車道〉
長原ICより1分



大阪市平野区長吉長原3-17-12-1F



最高級本革製

総合格闘技専用グローブ
オープンフィンガーグローブ
サイズ:フリー
カラー:青・黒・赤
特別価格 **3,980円**(税込)



最高級本革製

プロフェッショナルボクシンググローブ(1組)
サイズ:8・10・12・14・16oz
カラー:白・黒・赤
特別価格 **5,980円**(税込)



最高級本革製

プロフェッショナルパンチングミット(両手)
サイズ:フリー
特別価格 **4,980円**(税込)



最高級本革製

プロフェッショナルキックミット(1個)
サイズ:W18×H40×厚10cm
カラー:黒(打面)・赤(打面)
特別価格 **4,980円**(税込)

FIGHTING ROAD
株式会社ファイティングロード
〒547-0044 大阪市平野区平野本町2-4-19
http://www.fightingroad.co.jp

お申込み方法
ご注文は電話、FAX、ハガキで! 通販OK!
TEL.06-6795-1302
FAX.06-6795-1303

◀PC、携帯からもご注文OK
Eメールでのお申込み
shop@fightingroad.co.jp
受付時間AM9:00〜PM8:00【年中無休】

ご使用OK!
VISA NICOS AMERICAN EXPRESS MasterCard JCB JADMA
社団法人日本通信販売協会会員

切手
〒547-0044
大阪市平野区平野本町2-4-19
ファイティングロード

商品名
住所
氏名
電話番号

※12月31日、1月1日〜3日のみ休業致します(1月4日より通常営業)

●代金は商品到着時、配達員にお支払い下さい。●表示価格には送料は含まれておりません。●返品・交換は未開封に限り、到着後7日以内可(送料はお客様負担になります)
●全商品に生産物賠償保険付 ●お客様の個人情報は、商品およびカタログの発送以外には使用いたしません。

2008 No.128 CONTENTS

kamipro

表紙写真／タイコウクニヨシ

PRIDEの10年、出てこいやーっ!



このたびテレビ東京系「チャンピオンズ〜達人のワザが世界を救う〜」の司会に就任した髙田延彦さん。

PRIDE

kamipro Special

Columns



〝奇跡の10年〟はマット界の何を変えたのか

「アメリカ」「悪役（ヒール）」に続き、特集主義に〝リボーン〟した今号のテーマは「PRIDE」です。

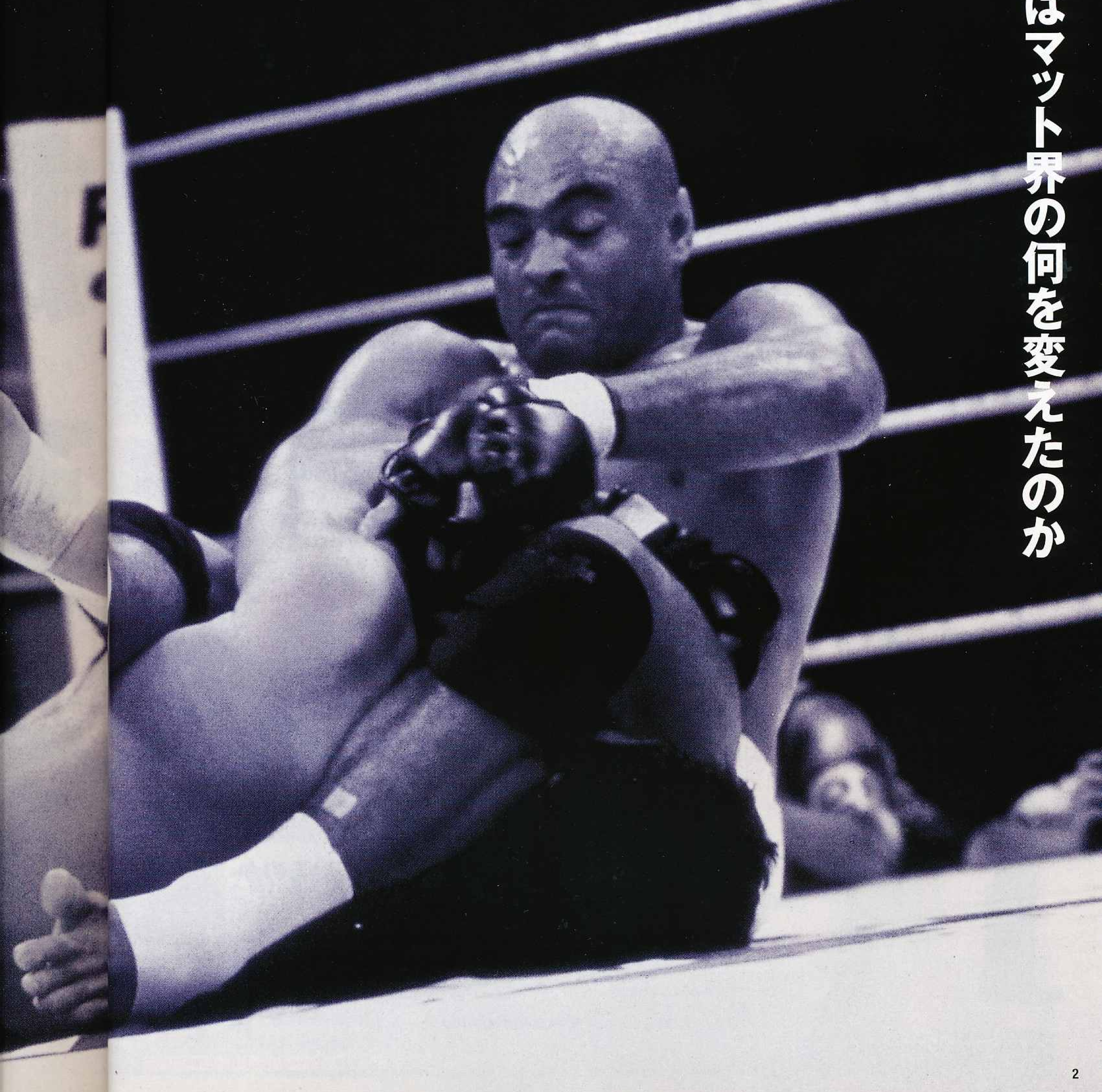
1997年10月11日、髙田延彦vsヒクソン・グレイシー戦で産声を上げたPRIDEは、ちょうど1年前の2007年10月4日、PRIDE FCワールドワイド日本事務所の閉鎖に伴ない、事実上の活動停止に陥った。誕生してから10年目の出来事だった。

あの〝奇跡の10年〟のあいだ、PRIDEには鳥肌が全部立つことがたくさん起きた。なあ、ランペイジ？（髙田延彦統括本部長調）。

髙田延彦の挑戦と敗北の反復運動、桜庭和志のグレイシー狩りにヴァンダレイ・シウバの絶対王者ぶり。ノゲイラ、ヒョードル、ミルコの史上最強の三強時代、五味隆典が『PRIDE武士道』を作りあげ、小川直也が腰を振り、佐藤大輔が煽りまくった。あのPRIDEが大好きだった。

しかし、人生同様に決していいことばかりじゃない。PRIDEには悪いこともたくさん起きた。

……表に出ちゃいけないことも。



ことばかりじゃない。PRIDEには悪いこともたくさん起きた。……表に出ちゃいけないことも。なあ、ランペイジ？（髙田延彦統括本部長調）。

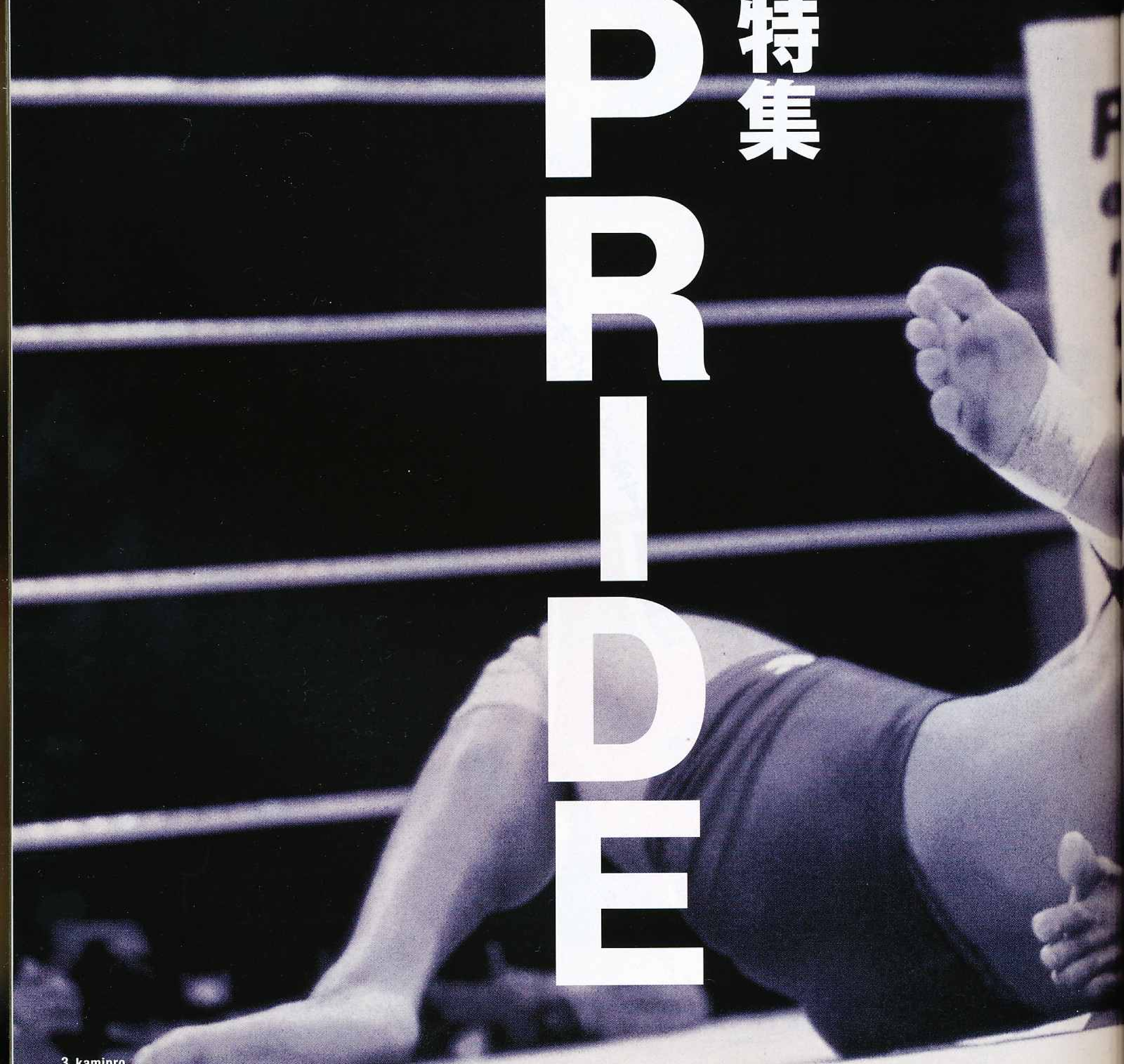
八百長疑惑に選手の引き抜き、『週刊現代』報道とフジテレビショック、選手の電撃離脱に買収劇、そして新生PRIDEの沈黙——。いや、そんな悪いこともすべて引っくるめて、PRIDEが大好きだった。

みんなが愛したPRIDEは、強烈なエネルギーで常に時代を動かしてきた。あくなきチャレンジ精神によって、時には無謀ともいえる突破者の精神によって。そう、髙田延彦vsヒクソン・グレイシー戦の昔から、合言葉は常に「やれんのか！」だったのだ。その精神が時代をダイナミックに切り開いていった。

今回のテーマ設定は、ただ〝一周忌〟だからというわけではない。PRIDEを知ることで現在を知る。PRIDEは何を変えたのか。〝消滅〟から一年——我々はまだPRIDEから学ぶことがある。そして、あの精神を持って、あの「PRIDEのテーマ」のリズムを口ずさめば、いまだって時代を変えることができる……はずだ。

♪ダン！　ダン!!　ダダン!!!

特集 PRIDE



IQレスラー×バカサバイバー
ニコニコ&ワオワオ対談

桜庭和志



**桜庭さんたちが作ってくれたもので
メシを食わせてもらって、ありがとうございます！**

聞き手／井上崇宏　撮影／タイコウクニヨシ
試合写真／乾晋也、平工幸雄

青木真也



僕、最終的にヒョードル戦のオファーが来ましたからね

語ろう！プライド!!

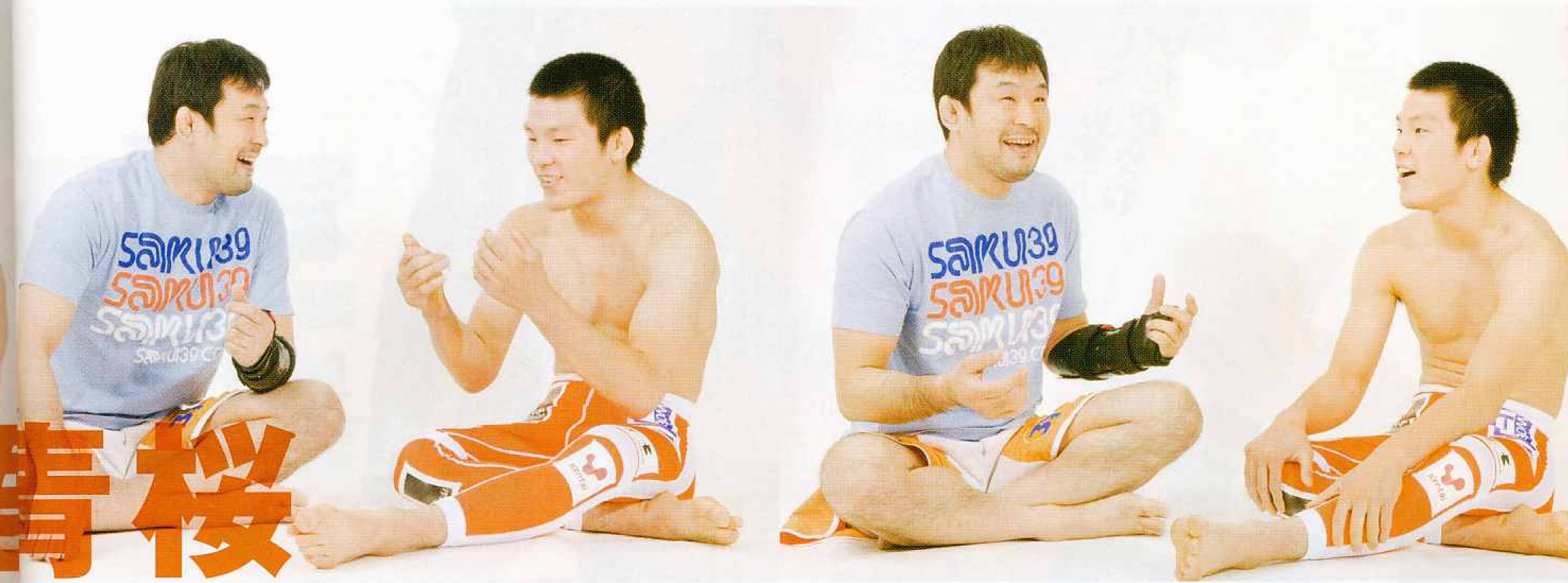
桜庭和志と青木真也には一つの大きな共通点がある——。

ご存知のとおり、桜庭和志は一連のグレイシー狩りをはじめ幾多の強豪と立て続けに闘い、PRIDEという舞台とともにジャンル自体を背負ってきたファイターであり、文字どおり〝身を削って〟格闘技界に貢献した人物である。また、青木真也においてはDREAM旗揚げ以来、じつに6試合出場。『DREAM・6』では直前のオファーにも関わらず、ファンの期待を裏切らずに一本勝利で舞台を盛り上げた、DREAMの〝大黒柱〟（という夢の途中）だ。

しかし、二人はなぜイベントに対してこれほどまでの使命感を抱けるのだろうか。それが苦悩や苛立ち、面倒くささを伴なうことは想像に易いし、格闘家という一種の〝仕事〟としてより条件のいい舞台を渡り歩くこともできる。だが、二人がそうしないのはなぜなのか。

最初に挙げた共通点に話を戻すと、二人とも自身が活躍していたイベントが潰れてしまった経験を持つ。桜庭はUインターとキングダムを、青木はPRIDEを失なった。青木に至っては、〝PRIDE消滅〟を経験してまだ1年と間もない。そんな二人だからこそ、「プロ」という言葉に重みを感じ、試合ができる喜び、イライラを乗り越えたときの痛快さ、そしてリングに対する愛着が誰よりも強いのかもしれない。

そんな二人の対談が、今回実現した。ジャンルを背負う桜庭和志、またその入り口に立つ〝始まったばかり〟の青木真也。本格的にその道に足を踏み入れようとする青木にとっては、数々の試練を乗り越えてきた桜庭からその心得を聞く対談となった。そういった視点から二人の言葉を読み込むと、本対談はいっそう意味を増す。（編集部）



桜庭和志
青木真也!

初めて観た桜庭さんの試合はニュートン戦だったと思います（青木）

——お二人は初対面ではないですよね？

青木　前に会場でご挨拶をさせてもらいました！

桜庭　そうですね。

——今回は、1年前に事実上の活動停止に陥ったPRIDEの特集ということで、このスペシャル対談がセッティングされたわけですけど。まず、お二人は先日のK―1MAXのファイナルってご覧になりました？

青木　観ましたね。あれを観て、僕はなんか凄く悲しい気持ちになりました。同じ70キロじゃないですか。なのに、あれだけイベントとして凄い盛り上がりを見せて、やっぱり誰もが注目してるイベントっていうのが、やっぱ自分のやってる団体と対比して、「クソッ！」ていう気持ちはありましたね。

——テレビでご覧になったんですか？

青木　テレビですね。

——テレビ画面からも会場の凄い熱が伝わってきましたよね。

青木　だから会場に観に行かなかったんですよ。そういう気持ちになるのがわかってたんで。悔しいから……「ま、頑張んなきゃいかんな」と。

桜庭　僕も最近ハマってますよ。カキーンカキーン！　バチーン！　ってヤツですね。

——それは……マッドマックス？

桜庭　子どもの誕生日にプレゼントしたら、凄くよくできててカッコいいんですよ！

——そ、そうでしたか。魔娑斗選手のジャンルを背負う大黒柱っぷりから〝PRIDEの大黒柱〟の話につなげようと思ったんですけど（笑）。もうストレートにPRIDEの話題に入りたいと思います。青木さんは2006年からPRIDEに参戦してるんで、当時23歳ですよね。桜庭さん、23歳の頃って何やってました？

桜庭　僕はUインターに入門して、ちゃんこ作ったり、練習をどうやってごまかすかってことばかり考えてました（ニコニコ）。

青木　あ、僕、桜庭さんのUWFインター時代って知らないんですよ。

——それは時代を感じますね。

青木　桜庭さんのことを知ったのはPRIDEからですね。初めて観たのは（カーロス・）ニュートン戦だったと思います。

桜庭　僕のPRIDE2戦目だ。

青木　ええ。当時、まさかあのニュートンからヒザ十字取れる人がいると思わなかったですからね。ホントにビックリしました！

桜庭　あれ、ヒザ十字しかなかったんですよね。

青木　あ、そうなんですか。腕十字で極めかけてませんでしたっけ？

桜庭　腕十字取って「バキバキッ！」てやっても、サクって抜かれちゃって。試合する前から「ニュートンはカラダが柔らかいよ」って聞いてたんだけど、「あれっ？　コイツどうやって極めればいいんだろう？」って思いながら最後の最後、いっぱいいっぱいの状態でなんとか足が取れて。

と、本対談はいっそう意味を増す。（編集部）

青木 あれ、凄いッスよ！ 超興奮しましたからね。そのあとも船木（誠勝）さんとやってるヤツ……（エベンゼール・フォンテス・）ブラガだ！ あとアラン・ゴエス戦とか。でも、僕にはホイラー戦が凄く印象深いんですよ。桜庭さんのミドル（キック）がすっごいきれいに入って。

桜庭 ああ（笑）。青木くんはその当時は何歳？

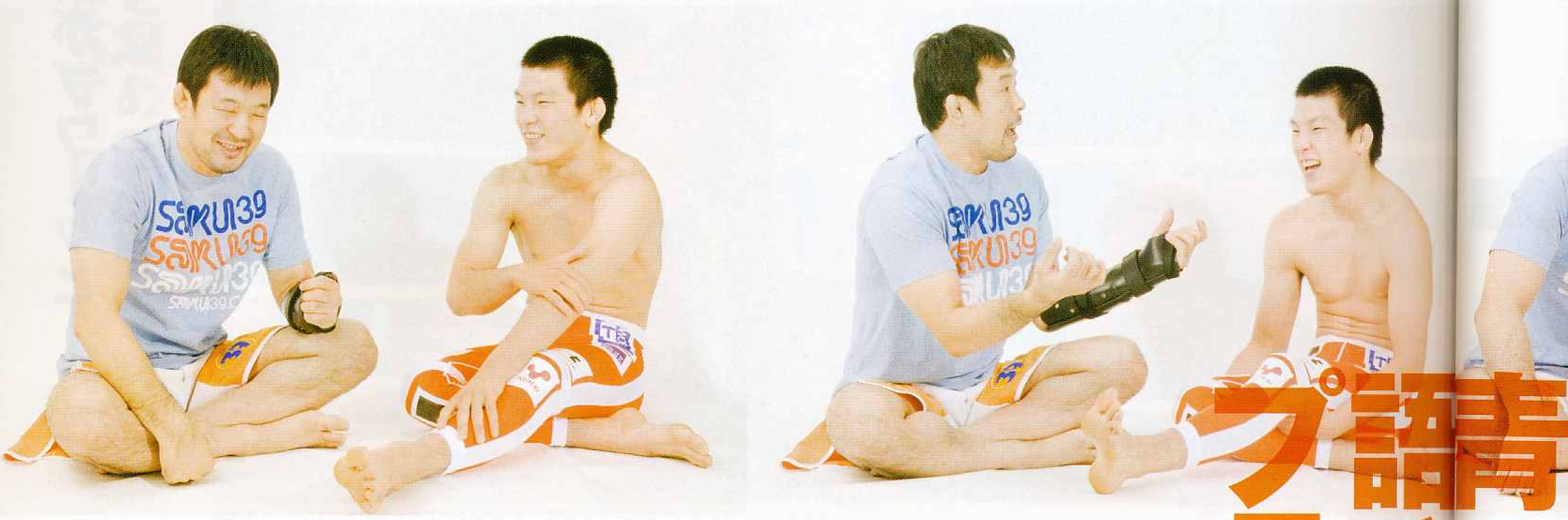
青木 中1とか中2です。僕もその当時は中学の柔道部でどうやって練習ごまかすかばっか考えてましたね、一生懸命（笑）。しかしホイラーにあのアームロックですからね。僕、後輩にやってましたもん、「これ知ってるか？」って。「痛いっス！痛いっス！」「だろ？」とか言って（笑）。

桜庭 ホイラーもカラダが柔らかかったなあ。

青木 ホイラーってテクニック的にも一番優れたグレイシーだと思ってましたからね。グレイシーの中で、テクニックだけだったらホイラーが一番うまいんじゃないですか？ 桜庭さんとやる前に修斗で朝日（昇）さんとかを圧倒したり、アブダビとかでも大活躍してましたからね。それを見て、「ヤバいな、ホイラー！」とか思ってて。やっぱ、いまだにホイラーは完成されたグレイシーだと思うんですよ。それがあそこまで圧倒されて。そこからずっとグレイシー狩りですよね？ そのあとがホイス、ヘンゾ、ハイアンで。

——じゃあ中学生の頃って、もう「この桜庭って人、すげえ！」みたいな。

青木 そうですね。僕はね、柔術っていうこともあってグレイシーが大好きだったんですよ。いまでも大好きで。だからグレイシーに勝ってる唯一の日本人っていうのが凄かったですよね。あの当時、まだ柔



青木真也 語ろう！プライド!!

ら、凄くよくできててカッコいいんですよ！

術黒帯にバーリ・トゥードで日本人が勝つっていうことが奇跡だった時代ですもん。（佐藤）ルミナさんがヒカルド・ボテーリョから取ったのとか、「おおっ！」ってなったじゃないですか？ そんな時代だから、それをまたグレイシーの本家からバシバシ取ってたっていうのは凄いなと思ってました。

桜庭 グレイシーは、その人それぞれの個性があって、みんな強かったですよ。その中でも強いっていうか、一番うまさを感じたのはヘンゾですね。ヘンゾが一番バーリ・トゥードっていう闘いの中でのタイミングを取るのがうまかった。

青木 そのヘンゾを倒しちゃうんですから。僕のファン時代は、桜庭さんのグレイシー狩りが一番熱かった時代です。競技者になっちゃうと、逆に僕は柔術ベースの寝技なんですけど、「桜庭さんは柔術に通ってないのに、どうやって寝技（の練習）をやってるのかな？」って、そういうのが興味深くなっちゃうんですよね。

桜庭 寝技は誰かが教えてくれることもあるけど、とにかく自分たちで、スパーリングで身につけるしかないんですよ。

青木 それ、ホントに凄いことですよね。逆にパスガードとかスイープの概念がそこまで強くないんで、だからこそあれだけ強いサブミッションが生まれるんだろうなって思ってました。〝極め重視〟っていうのが凄いなって。

桜庭 僕はアマレスやってるときからポイントを取りにいくのがあんまり好きじゃなかったんですよ。タックル入って1ポイントとかじゃなくて、一回バック取ったら、まず最初にフォール狙ってましたからね。

青木 アマレス時代からアグレッシブな

って思いながら最後の最後、いっぱいいっぱいの状態でなんとか足が取れて。

スタイルだったんですね。

桜庭 だってフォール狙ったほうがすぐ試合が終わるから。そういう意味でも好きなんですよ。試合時間いっぱいやりたくないから（笑）。

青木 僕もサブミッションしか興味ないですね。関節で一本！ 首絞めるか、腕取るかだけです。

——最近、青木選手が「桜庭和志になりたい」って発言をあちこちでされてると思うんですけど、具体的に桜庭さんのどこに憧れを感じてるんですか？

青木 いやあ、実際、自分が団体の中心にいさせてもらうようになって、それがどんだけこう負荷がかかるか、いかに無茶ブリをされるかってことがわかってきてからですよ！ それであらためて桜庭さん凄いなと思って。昔のPRIDEとか振り返ってみると、桜庭さんだったりミルコだったりの当時の過密スケジュールぶりが僕に勇気を与えてくれるというか。

桜庭 僕、最終的にヒョードル戦のオファーが来ましたからね。

青木 ヒョ、ヒョードルっスか⁉

桜庭 「もう無理だろ、そんなの！」って（笑）。グレイシー相手の頃はまだ同じ体重でよかったんですけど、だんだん相手の体重が増えてっちゃって、「もう無理だよ！」って。それでもなんとか自分で楽しみながらやってたけど。

青木 凄いなあ……。僕が調べたところ、桜庭さんが一番試合をやった年って年間6試合ですね。2000年かな？ で、ミルコが一番試合した年が2004年で8試合なんですよ。

——青木さんも今年すでに6戦やってるんですよね。

青木 もう6戦してるんですけど、残念な



決めた瞬間、ストレスがブワーッと発散されて、最高ですよ！（桜庭）

一連のグレイシー狩りをはじめ、芸術的な関節技と、奇想天外なムーブでファンを魅了した桜庭和志。強豪を次々と倒す様に加え、この新しい技の数々がPRIDEのリングに興奮を生んでいたのだ！

ことに今年はあと大晦日しかないですからね。どうやらミルコの記録は抜けないです。

――こないだ桜庭さんが「青木くんって今年もう6戦やってんでしょ？　すげえな」みたいな話をしてて。でも年齢の話をしたら「あ、なら大丈夫」って言ってて（笑）。

桜庭　うん、大丈夫ですよ（ニコニコ）。

青木　ああ、僕も大丈夫だと思ってやってますからね（笑）。もうランボーの世界ですからね、「痛みは無視しろ！」みたいな。

――それ、あまり大丈夫じゃないってことですよね（笑）。逆に桜庭さんが格闘技界で憧れた存在の人っているんですか？

桜庭　プロレスだったら佐山さんだけど、とくにいないですね。あっ、こないだふと思ったんですけど、ピーター・アーツが凄いですよ！　年齢を聞いたら僕の1コ下なんでしょ⁉　たった1コ下で、それも打撃のみの競技で。アーツは凄いと思う。こないだセーム・シュルトをボコボコにしたんですよね？

青木　オラオラしてますねえ。さすが暴君ですね。あ！　桜庭さんに聞きたかったんですけど、（アンドリュース・）ナカハラって強くなかったですか？

桜庭　あーっ！　強かった！

青木　この前、ユン（・ドンシク）さんとの試合観て、「桜庭さん、よくあれ普通に取ったよな」って思って。中井（祐樹）さんと二人で「いや、ナカハラはヤバいね」って話してたんですよ。実際に肌を合わせてみてどんな感じだったんですか？

桜庭　彼はね、差しが強くて、ロープの使い方もうまかった。

青木　ああ、そうですね。

桜庭　ロープとかコーナーに押しつけられるから、転がしようもなくて、あの試合ももういっぱいいっぱい。「これじゃ取れないや」と思って、最後はもうおもいっきり力でグワーッて力技で取って。

青木　相手は負けてもいいと思ってくるし、力自慢なもんで、ギーって頑張るんスよね。あれ強いッスよ。桜庭さんとやった試合でも「コイツ、けっこうやるな」と思ってたんですけど、「やっぱホントにつええじゃん！　コイツ怖いなー」って。

桜庭　まだ若いんですよね、あの人。まだ22〜23歳ぐらい？　でも、デビュー一発目っていうおいしいとこを取らせてもらいました（ニコニコ）。PRIDEのときにやったランペイジにしろ、いまチャンピオンですからね。ランペイジとやったときも、「すげえ力つええ！　これ、どうすんだよ⁉」と思ったけど。アームロック取ってもグワーって力で返されるんだもん。

青木　リングの外に投げ捨てられそうになったヤツですよね。で、最後はランペイジがグラウンドわかんないからバックチョークで取って。その当時、『近代柔道』になぜかその桜庭さんがバックチョークを取ってる姿が記事として載ってたんですよ。

桜庭和志が選ぶPRIDEベスト3

1　ムリーロ・ニンジャの入場

2　エメリヤーエンコ・ヒョードルvs 藤田和之

3　マーク・ケアーvs ブランコ・シカティック

3位は総合というものがちゃんと整備されていない頃の象徴的な試合。ああいう試合があったから、現在の整備されたルールがある。2位は、「日本人でもヒョードルに勝てるんじゃないか」というものが見えた。あの藤田のフックでヒョードルがぐらついたときは「行けえ、藤田ぁ！」って叫びました。1位は、ニンジャが忍者の格好をして入場したシーン（『PRIDE.20』）。PRIDEってああいう演出があったから盛り上がったと思う。単に、入場しました、試合しました、勝った負けたじゃなくて、試合以外のああいう演出があったからおもしろかったんじゃないかな。（談）

フラストレーションを溜める作業も意外と重要なのかもなって（青木）



奇想天外といえば、青木真也の関節技も毎試合のごとく見たことのない技が飛び出し、会場のどよめきを誘いまくる！　どんな関節技だったのかは、試合後のVTRで必ず確認が必要な選手である。

青木真也 語ろう！プライド!!

れるから、一転がしようもなくて、あの試合

桜庭　へえ～、柔道の雑誌に？

青木　はい、柔道の雑誌に載ってたんです。それを興奮して見た記憶があって。なんか「やっぱり柔道の寝技は強い！」って書いてあったんですけど、「柔道じゃねえだろ！」と思って（笑）。

――あ、誌面では「柔道サイコー！」ってことになってるんですか。

青木　……それ、無理やりっスねえ（笑）。無茶ブリですよ！　桜庭さんも道衣やってたんですよね？

桜庭　ああ、シュートボクセに行ったときにスパーリングで着てやったりしましたね。ジム内での道衣マッチとかもやらされたり。でも柔術のポイントがサッパリわからなくて、「これ、どうすんの？」って感じで（笑）。

青木　シュートボクセって、たしかクリスチアーノ・マルセロが柔術の先生なんですよね？

桜庭　そうそう。クリスチアーノ。

青木　クリスチアーノ・マルセロって強いんですよ。あの人もポイント柔術じゃないじゃないですか。サブミッションが強い感じですよね。

桜庭　そういえば、クリスチアーノはPRIDEのときも裏で試合してた（笑）。

青木　ああ、バックステージでクレイジーホースにKO勝ちしてますよね。

桜庭　うん。三角絞めで落としてた。

青木　それ、映像で観ましたね。

――その映像は各自要確認ということで、青木さんはバックステージとかで殺気みたいなものを感じたことってあります？

青木　……また微妙なフリをしますねぇ。

――いやいや（笑）。

青木　こないだ感じたばっかりですよ!!　まあ、何かあったら後輩のゲガール（・ムサシ）くんが止めてくれましたから。

桜庭　後輩？

青木　はい。ヤツもまだ21～22歳なんですよ。

――また、そんな若い選手ばっかりの中で、ホント桜庭さんとアーツは頑張ってますよね（笑）。

桜庭　だからもうイヤだって……。

青木　桜庭さん、中井さんと同級生ですからね。

桜庭　あ、同い年？

青木　ええ。だから中井さんが「俺もDREAMで闘えるかなあ？」って言ってましたよ。「いや、あんたはマズいだろ」みたいな（笑）。

――ちょっとPRIDEの話題に戻りますけど、お二人にとってPRIDEのよかった部分ってどこですか？

青木　やっぱり、控室に食べるものが用意されてある。

――ケータリング関係の充実ですか（笑）。

青木　あれ、最初はすげえ嬉しかったですね。メチャクチャお代わりしましたもん。

桜庭　ハイアンが僕の控室のバナナをもらいにきてましたね（ニコニコ）。

青木真也が選ぶPRIDEベスト3

1 桜庭和志vs ホイラー・グレイシー

2 桜庭和志vs ホイス・グレイシー

3 五味隆典vs 桜井“マッハ”速人

❶衝撃!!　語ることなんてないですよ、凄すぎて。PRIDEってあの試合でブレイクした感じですよね！　あと吉田秀彦vsホイス戦もそうですけど、“際どい判定”がまたロマンを作るんですよ！　❷柔道少年で桜庭さんのファンだった僕は、この試合、家族で観てたんですよ、「スゲー!!」って言いながら。これでPRIDEがイベントとして成熟したように思いました！　❸あの年、僕も修斗でマッハさんと試合したんですけど、マッハさんが勝つと思ってた。でも、五味さんが勝ったんで、これも「スゲー!!」って思いましたね。あんくらい注目される試合をしたい！（談）

桜庭和志 青木真也 語ろう！ プライド!!

控室も大部屋にダーって選手とかみんなを入れるんじゃなくて、やっぱいろいろ考えて分けてくれたり、常に選手が気持ちよく集中できる環境にしてくれてましたね。まあ、それはいまも変わらずですけど。

青木 いまもあいかわらずなのは、カードの決定が遅いですよね（笑）。

桜庭 あ、僕はそれ意外とかまわないです。

青木 僕も、もうそういうもんだと思ってますけど（笑）。「UFCは2ヵ月前で、DREAMは2週間前」っていう（笑）。もうホントに直前まで対戦相手がわかんないんで、ギリギリまで試合できるコンディションでいないといけない。でも、怖いのはアレですよ！ たとえば一回オファーを断るじゃないですか。でもその翌日、「で、どうする？」って（笑）。普通一回断ったらなくなると思うじゃないですか？ なのにもう一回翌日に電話とかないですか？

桜庭 あ、それっぽいのはあったかもしれない（笑）。

青木 「あれ、昨日ないって言ったけどな……」みたいな。まあ、ビックリしますよ。だけど一般社会の常識みたいな部分は最初から求めてないですからねえ。押忍ですよ。『押忍!! 空手部』ですから！

桜庭 あ、僕もあったあった！ 思い出した！ ホジェリオ戦のときですよ。何回も「相手がどうとかじゃなくてケガしてて無理です！」って言ってるのに、「じゃあ今回ソラールでいこうか？」って言われて。「いや、だから試合できないって！」（笑）。

——ホジェリオからソラールって、また凄い振り幅ですね（笑）。

桜庭 で、翌日「で、誰にする？」って連絡がきて……。

青木 きた！（笑）。

桜庭 こっちだって意地があるから、「じゃあホジェリオで」って。決まったのが前日ですからね。「キツいこと言うなあ」っていうのはけっこうありましたけどね。なんか毎回テストされてるような感じがした。

青木 でも、他人事として考えると、ストレスとかフラストレーションを溜める作業も意外と重要なのかもしれないなって思うんですよね。

桜庭 あ、そうそう。それで相手を極めた瞬間、そういうストレスがブワーッと発散されて。最高ですよ、極めた瞬間は。

青木 そうですね。僕もそういうシチュエーションを好きでやってるところがある。そんな無茶ブリをするところでしたけど、僕にとっては、PRIDEは救ってくれた場所ですからね。食えなかった選手を食わせてくれたのがPRIDEですよ。もうホントに桜庭さんたちが作ってくれたものでメシを食わせてもらって。ありがとうございます！

桜庭 いやいや、僕は自分が作ったとは思ってないですけどね。作ったのはDSEで、そこで働かせてもらった僕がいるってだけで。

青木 そんなことありません！ ところで桜庭さん、いつ復帰してくれるんですか？

桜庭 このギプスがもうちょっとしたら外れるんで、それから練習して。とりあえず、いまは長い夏休みです。初めの頃は「このまま辞めちゃおうかな」と思ったけど。なんかもうやる気しなくて。

——まあ、夏だったっていうのもありますよね（笑）。

桜庭 そうそう、暑いし。「めんどくせえな〜」って、これぐらいの歳になると思ってくるよ。

青木 うわー、そこまで思うぐらいやりたいです（笑）。

——暑いからもう辞めたいって思うぐらいまでキャリアを重ねたい（笑）。

青木 （真顔で）いや、ホントそこまでやりたいですね。

桜庭 だけど青木くんはこれからももっといろんな強い選手とやってください。

青木 押忍！

桜庭 相手を選ばずに。70キロの階級って世界にはいっぱい強い選手がいると思うんで。

青木 相手を選ばずにやります!! 押



桜庭が試合とともにファンを興奮させていたのが入場シーン。ホイス戦での“マシン増殖”から、大晦日には小林幸子かとも思われるド派でな格好で入場。この、わかりやすく、しかも“とんち”の効いたパフォーマンスは、まさに桜庭のプロ魂の感じずにはいられない場面の一つである。

PRIDE“ラストイベント”で超ド級のシークレットマッチが実現寸前だった!?



「最終的にvsヒョードルのオファーまできた」という桜庭だが、PRIDE“ラストイベント”である『PRIDE.34』ではヴァンダレイとの対戦を当日発表するというプランもあった。トレーニングに励むヴァンダレイの映像のラストにサクマシンの画像がキラリと映る煽りVが流れ、最後の最後で対戦相手が桜庭だとわかる興奮の映像を上映。そのあとに、当人が入場するという“死人が出そうなくらい”ド肝を抜く演出が予定されていたのだ。しかし、こんな仲睦まじい二人を闘わせようとするなんて、最後までPRIDEは“残酷”である！

青木くんはこれからももっと強い選手とやってください（桜庭）

ことですね？

——モテるかどうかわかんないですけど

……まあ、どっちかといえばモテるでし

青木くんはこれからももっと強い選手とやってください（桜庭）

忍！

——それでは最後に、大黒柱のたしなみというものをこの機会にちょっとお話ししたいんですけど、桜庭さんはマイクアピールとかけっこう頭の中で考えてから発言してるっていう印象があるんですけど、青木さんはけっこう思ったことをズバズバ言っちゃいますよね？

青木　バカなんですよね、間違いないと思います。リング上とかもスイッチ入っちゃうとイラッときてとっさにいろいろ出ちゃいますから。インタビューとかでもけっこう出ちゃいますよ。まあ、それで痛い思いもけっこうしてるんで……。

桜庭　僕は会見とかインタビュー取材はホントのことを答えるのが面倒くさいから、まるで違う方向になんとか持ってって相手を困らせますね。

——本音を言わない人と、本音しか言わない人っていう。

青木　昔からですよ。発言はファッションなしですから。

——そこは青木さん、いまよりちょっとだけ言葉をアレンジするだけで、またグッといいんじゃないかなって思ったりするんですよねえ。

青木　ああ、そうすりゃもっとモテるってことですね？

相手を選ばずにやります！押忍!!（青木）



あおき・しんや■1983年5月9日、静岡県出身。世界屈指の極めの力を持つ若き天才グラップラー。PRIDEには『武士道─其の十二─』から参戦し、4連勝の快進撃を見せるも、その後PRIDE"休止"という苦難に直面。その試練を乗り越え"ケジメのイベント"『やれんのか！』では涙の勝利を飾った。DREAMではライト級GPに参戦し、『HERO'S』ミドル級絶対王者・JZカルバンをはじめ、『HERO'S』勢を次々と倒し準優勝に輝く。"自称"DREAMの大黒柱。180cm、72.5kg。

さくらば・かずし■1969年7月14日、秋田県出身。PRIDEでの驚異的な活躍により日本格闘技界の礎を築いた格闘ファンタジスタ。92年にUインター入団後、97年12月にはUFC-Jヘビー級トーナメント優勝。98年PRIDE参戦以降、90分の死闘を繰り広げたホイス・グレイシー戦をはじめ、一連の"グレイシー狩り"は桜庭フィーバーとともにPRIDE人気を押し上げた。その後、『HERO'S』へと渡り、現在はDREAMに参戦中。180cm、83.6kg。

——モテるかどうかわかんないですけど……まあ、どっちかといえばモテるでしょうね（笑）。

青木　じゃあやりますか！

桜庭　ハハハハハ！　なんだ、それ（笑）。

青木　じゃあもうちょっと頑張ってやりますよ。でも青臭さを出したいんですけどねえ。僕は青臭く生きたい！

桜庭　いや、発言なんかは人それぞれのやり方でいいんじゃないですかね？　でも、リング上でのマイクアピールとかは、もっとストレートに言っちゃうほうがいいんじゃないかな。自分が闘いたい相手に対しては「僕と試合しましょうよ！」ってハッキリと。

青木　確かに、そう言われるとそうですよね。押忍！

桜庭　インタビューとか、字になるヤツは適当なこと言ってればいいと思うんだけど……。

——いきなり、何、極悪なこと言ってるんですか（笑）。

桜庭　雑誌に載った発言は「いや、言ってもないことを書かれた」って言えば、終わりなんで（笑）。

青木　そうですよね。確かに直接のときはストレートにケンカ売ったほうがいいですね。

桜庭　で、直接相手からなんか言われたりしたら、「すいません、『言え』って言われたもんで」って言っとけばいいんで（ニコニコ）。

青木　押忍！

——どっちみち逃げる、と（笑）。こういうズルい大人はどう思いますか？

青木　大好きっスよ！（笑）。

【08年10月3日／都内・ラフター7にて収録】

断るじゃないですか。でもその翌日、「で、

——ホジェリオからソラールって、また凄

ど。なんかもうやる気しなくて。

青木　相手を選ばずにやります!!　押

プライド!!



あのPRIDEはまだ生きているのか、もう死んでしまったのか。我々はいま、その生存を正確には確認することができない。UFCおよび新生PRIDEのオーナーのロレンゾ・フェティータと、前PRIDEオーナーの榊原信行のあいだでは、PRIDEをめぐる訴訟が起こっている。係争中のため両者ともPRIDEに関するコメントを控えているが、それは一つの言葉が裁判の行方を左右しかねないということだ。PRIDEの生死でさえ、彼ら当事者たちはしゃべることができないのである。

08年2月1日、ロレンゾ&フランクのフェティータ兄弟が設立したPRIDE FCワールドワイド・ホールディングスLLCが榊原信行とドリームステージエンターテインメントを提訴した。

ネバタ州クラーク郡裁判所に提出された訴状によると、「PRIDEを買収した際に結んだ合意書の内容について、元オーナー側が協力しなかった」というのだ(訴状の中で最も強調されていたのは、バッググラウンド・チェック、すなわち「身元調査」の件だった)。

ロレンゾ側は、その行為を詐欺とし、すでに支払った買収金の返還と今後の支払いの拒否、そして「PRIDEを維持する義務」の免除を求めている。これに対して、榊原サイドも「PRIDEを存続させるという条件を守らなかった」として、逆にロレンゾたちを提訴している。

——この買収劇の始まりは、PRIDEのフジテレビ中継打ち切り直後の06年7月頃とされている。その年の10月、PRIDEはアメリカ初

新生PRIDEはなぜ幻に終わったのか？

不定期連載 第1回

PRIDEの“消滅”から早1年――。UFCオーナーのロレンゾ・フェティータがPRIDEを“買収”して以降、いまだにPRIDEは再開されていない。では、なぜ新生PRIDEは幻に終わってしまったのか。いまだに謎の多いPRIDE“消滅”について、この一周忌を機に不定期連載で追っていきたい。

取材・文／ジャン斉藤





07年3月27日、六本木ヒルズにて華々しく会見を行なったPRIDE＆UFC陣営。この日は“PRIDEファイター”たちも勢揃いし、新たなスタートを切る特別な日になるはずだったのだが、まさか、PRIDEがそのまま“消滅”してしまうとは……。



IDEのフジテレビ中継打ち切り直後の06年7月頃とされている。その年の10月、PRIDEはアメリカ初進出となるラスベガス大会を控えていた。当時のPRIDE代表だった榊原は大会準備のために渡米。その折にロレンゾ＆フランクのフェティータ兄弟、そしてUFC代表のダナ・ホワイトらと会談している。場所はロレンゾが経営するホテルのレストランだったようだ。

ロレンゾはそのときに初めて榊原にPRIDE買収の話を持ちかけた。ロレンゾはPRIDEで行なわれた桜庭和志vsホイス・グレイシー戦に魅せられたことがきっかけとなって、MMAビジネスに参入（当時SEGが主宰していたUFCを買収）している人物だ。PRIDEという憧れの団体を自分のものにしたい、自分の手でもっと大きくしたい。噂によれば、ロレンゾは数十億円もの金額を提示したが、榊原にその場で断わられたという。榊原は自活の可能性を探っていた。

PRIDE起死回生の策として、榊原は大晦日までに地上波放映の再獲得を宣言していた。フジテレビの撤退によって地上波中継の放映権料や企業協賛金が途絶えたPRIDEは、世界最高峰のリングにふさわしい高額なファイトマネーを維持するために負債が膨れ上がっていた。地上波の復活はPRIDEの再生にそのままつながるものだった。

また、もう一つの策は、PRIDEの基盤をアメリカに移すというもの。06年大晦日『PRIDE男祭り－FUMETSU－』で発表された07年の年間日程によれば、その半数がアメリ

カ開催の予定だった。アメリカの市場規模は日本の30～40倍。その圧倒的なPPV市場とリアリティショー人気を背景に、UFCは経済的にはPRIDEを凌駕していた。

UFCの08年の推定売上高は250億円を記録しようとしている。07年のPPV有料利用者は510万人。それでもアメリカのMMAバブルは始まったばかりという恐ろしさよ。PRIDEが日本市場のみにこだわれば、その差はますます広がるのみ。たとえフジテレビショックが起きなくても、いずれPRIDEの危機は訪れていた。

榊原信行の決断

PRIDEを手中に収めようとしていたのはロレンゾだけではない。榊原のもとへはMMAビジネスに目をつけたアメリカ中の投資家たちから買収や投資のオファーが殺到していた。たとえば榊原とWWEのビンス・マクマホンとの会談が業界を騒がせ、ウォールストリートの関係者やハリウッド映画関係の投資家、なんとNBAのプレイヤーたちの資産管理組合からの話もあった。

こうしたPRIDE争奪戦に火をつけたのは、ラスベガス大会の完成度の高さだった。日本では見慣れたPRIDE独特の世界観は、アメリカにはずいぶんと刺激的だった。「こんなドラマチックなMMAショーは観たことがない」「このエモーショナルな煽り映像は何?」「リングはオクタゴンより観やすいし、広告もつけやすい」――UFCからすれば、新しい価値観をもたらすPRIDEは、邪魔者以外の何者でもなかった。

「毎週末、アメリカでは山ほど大会が開かれていますけど、前回のラスベガス大会のようにチケットだけで2億円以上売れるような大会なんて我々以外にはないんですよ（中略）けれど、僕らが10月の大会でめちゃくちゃ儲かったというわけでもない」（榊原信行／『ゴング格闘技』No.179）

榊原が内容的には成功を収めたと語る初のアメリカ大会だったが、PPV収益はUFCにははるかに及ばなかった。また、日本における地上波中継獲得も思うように事が進まなかった。ミルコの電撃移籍、ノゲイラの契約未更新。帝国の崩壊はあきらかに進んでいた。それはこのインタビューからもわかるとおりだ。

「年明けからは地上波復活のため、そしてPRIDEの資金力や信用力を増すために、自分がPRIDEを去ることを大前提としたうえでの最善の策を探し求めてきました。（中略）僕が辞める以上は、PRIDEの未来が安定し、もっともっと大きくなれる環境が整えられることが大前提だし（中略）その準備がすべて整ってからじゃなきゃその決断は下せなかった」（榊原信行／『kamipro』No.109）



PRIDE日本事務所閉鎖後、笹原圭一、佐藤大輔をはじめとする元PRIDEスタッフがDEEP後楽園大会のリングサイドに集結し、PRIDE再開を無言でアピール。この結束がのちに谷川貞治率いるFEGとの大連立を実現し、伝説的イベント『やれんのか！』の成功につながったのだ。

榊原の最後の決断とは、「その後のPRIDE」をしっかりと約束してくれる相手にPRIDEを譲ることだ。その一番の条件とは、PRIDEを必ず存続させるということ――。その候補として、新興勢力のエリートXCも噂に上がっていたが、榊原が選んだのは、PRIDEに魅せられていたロレンゾだった。

UFCのオーナーでもあるこの男がPRIDEを手にすれば、プロモーター同士の血で血を争うような不毛な選手の獲得競争や足の引っぱり合いはなくなるはずだ。20年、30年先の将来を見据えたときに、ロレンゾならMMAを地に足を着けたエンターテイメントとして確立しているはずだ。そうなってほしかった。

榊原がロレンゾとの契約書にサインした場所はロサンゼルス。榊原の弁護士と、ロレンゾ側の弁護士が同席し、ロレンゾはカンファレンス・コールでの参加だった。そろそろサインをと促された榊原は、機械的に無機質な流れにためらいを感じた。席を立ちスターバックスに向かった榊原は、そこでコーヒーを飲むこと30分――、弁護士のもとへ戻り契約書に再び向かい合った。

あの、六本木会見

営業権の譲渡が正式に発表されたのは、07年3月27日、場所は六本木ヒルズで行なわれた記者会見のことだった。ロレンゾはダナ・ホワイトらともに来日。あの六本木ヒルズアリーナのイベントスペースを人通りが激しい昼から夕刻にかけて、ほぼ半日にわたって借りきった。滞在費などを含むおよそ3000万円もの会見費用はロレンゾが全額支払った。

当時、DSEに関わっていた業界関係者はこう語る。

「3000万円ですよ、3000万。そりゃあPRIDEを絶対にやる気なんだなって思いますよ。それでもシニカルに言う人間は、よほどPRIDEに復活してほしくなかったんじゃないですか?」

でも、その3000万円はハッタリだったかもしれない。彼らは一枚も二枚も上手だったんじゃないのか。

「なんのために? だってWOWOW中継も打ち切って、PRIDEとセットでテレビ局に売り込んでいた。PRIDEという切り札を最初から

埋めようだなんてありえない」

六本木会見前の控室。ロレンゾは榊原にこう尋ねたという。

「DEEPとはいったいどういう関係なんだ?」

DEEPとPRIDEは契約書を交わさず、互いの信頼だけで協力関係を結んでいた。契約社会のアメリカでは考えられない。DEEPは新生PRIDEの力になってくれるのか。ロレンゾの新生PRIDEのビジョンは確かに拡がっていた。

その晩、ロレンゾたちは榊原やPRIDE統括本部長の髙田延彦たちと祝宴を開いている。髙田延彦のブログには、ロレンゾやダナたちと仲良く肩を組んだ写真がアップされている。

「昨夜のロレンゾ、バラちゃん、ダナたちとの親睦会を押さえた。1年前の今日、誰がこの現実を想像出来たであろうか。戦いの神様に感謝である。そして素晴らしい夜であった。さてスイッチを入れ替えて4月8日の『PRIDE・34』に向けて走ろう!」（PRIDE統括本部長 髙田延彦フォトノート「日々是発見～毎日が人生だ～」3月29日付）

榊原体制最後の大会となった『PRIDE・34』は、そのままPRIDE自体の最終興行として〝いまのところ〟位置づけられている。

立ちこめるテレビという暗雲

「私たちはPRIDEを買い取って、前のオーナーとは縁を切った。なのに、なぜテレビ契約を結べないんだ? そしてPRIDEのスターを集めているUFCもテレビで放映できない。

新生PRIDEはなぜ幻に終わったのか？

不思議でしょうがないよ、まったく。たぶん誰か日本で権力を持った人間が我々を妨害しようとしている。そして彼らは独自で団体を旗揚げしようとしているに違いない」

新しく生まれ変わったPRIDEと飛ぶ鳥を落とす勢いのUFC。ところが日本のテレビ局はこんな魅力的なコンテンツにどこも飛びついてこない。ダナ・ホワイトは本誌の取材にこう苛立っていた。おかしい。あのPRIDEとUFCが一緒に放送できるんだぞ。そのうちに陰謀説を重ねるようになっていた。

「日本のテレビ業界とMMAビジネスには、妙な力が働いている。いいか、これを腐敗と言うんだよ！」

UFCがPRIDEをはじめとする対抗勢力に仕掛けてきた〝妨害工作〟も、彼の言う腐敗に該当するのかどうかは知らない。一つだけ確かなのは、新生PRIDEの生命線の一つにテレビの獲得があった。ダナいわく「一大会につき12億円もかかる」というPRIDEは、テレビのバックアップなしではとても運営はできない。だからPRIDEは立ちゆかなくなったんじゃないか。それがダナの言い分だった。

しかし、PRIDEだろうが、UFCだろうが、そんなに簡単にテレビ番組が成立するわけがない。放送枠を調整するのは編成局、スポンサーを獲得するのは営業局。あらゆるセクションにまたがって一つの番組は作られていく。そのためそれぞれの思惑もあるのだろう。いまは消滅した格闘技イベントでは、現場と事業局の主導権争いもあって、テレビで放送されるはずの煽り映像が会場では流れなかった。内部の軋轢が平気でイベントの歯車を狂わせたのだ。

フジテレビの格闘技番組がスマートに見えたのは、部署をまたいで超党派で結成された『フジテレビ格闘技委員会』という集団があったからだ。編成、営業、中には取締役の人間も名を連ねたこの組織は、94～96年頃、K―1のゴールデンタイム進出のために各方面で各人が尽力した。先日惜しまれつつも終了した格闘技情報番組『SRS』がスタートしたのもその成果であり、要するに局を挙げての格闘技に対するバックアップが整っていたのだ。それはK―1はもちろんのこと、PRIDEのブレイクの基盤を作ることにもなった。



PRIDE事務所閉鎖に対し、「ざまあみろ」と刺激的な言葉を発した前田日明。PRIDEには人をおおいに興奮させる力がある一方、とんでもない怒りを誘う力もあり、いろんな意味で渦を巻き起こすイベントだった。

このように局を挙げて格闘技に力を入れていくかといえば、いまのタイミングでは相当に難しいことだ。

それにUFCというコンテンツにしても、オクタゴンにはバイオレンス性のイメージが強く、ゴールデンタイムに不向きである。マニア層はともかく、一般層を取り込んでの視聴率が見込める要素は薄い。PRIDEの場合は当初は深夜枠や夕方枠で時間をかけてブランドが磨かれていき、初めてゴールデンタイムで中継されたのは、03年のミドル級GP開幕戦だった。『PRIDE・1』から7年の月日が経っていた。UFCは全盛期のPRIDEと同じ待遇を求めるのではなく、まずは〝新参者〟として扱われるべきだった。そして生まれ変わったとはいえ、PRIDEには『週刊現代』の報道から端を発したネガティブなイメージがいまだにつきまとっていた。

身元調査をめぐって

テレビ獲得と並んで大きな焦点となっているのはバッググラウンド・チェックだ。かかった費用は1億円を下らなかったとされている。それほどの費用を使ってロレンゾがバッググラウンド・チェックにこだわるのは、経営面での透明性を求められるカジノビジネスを手がけていたからだ。現在進行中の裁判の訴状でも「フェティータ氏がネバダ州でゲームビジネスに関わり、ステーション・カジノのオーナー兼運営者としてライセンスを獲得している以上、元オーナー側がバッググラウンド・チェックを受けることは必須であった」と説明されている。フェティータ兄弟からすれば、あくまで一投資案件であるPRIDEのために、本業であるカジノのライセンスを失なうことになるのは悪夢だろう。また、ロレンゾ側の言い分ではあるが、バッググラウンド・チェックだけではなく、資産査定においても問題が発生していたことが裁判資料で明らかになった。

「07年4月（の買収時）より預金や支払い、集金の記録、顧客情報、取引報告、銀行残高証明などの情報が提供されず、さらには物理的な妨害行為が行なわれた」

そのために事業の継続が難しくなったと説明されている。しかしながら、この説明では到底納得できるものではない。『MMA WEEKLY』のスコット・ピーターソンはロレンゾ側の失策をこう指摘していた。

「カジノを運営しているなら、バッググラウンド・チェックを優先するのは、なおさらあたりまえのこと。資産査定についても、大金を使って買収しているのだから、どうして買収前に行なわなかったのか」

なぜロレンゾは準備が整わないうちに走ってしまったのか。実際、同じく買収のオファーを申し出たというエド・フィッシュマンは「資産査定のために、30日間の確認期間を用意してくれないと買えない」と話している（※榊原側はエドとの売却交渉そのものを否定しているが）。

PRIDE FCの日本事務所閉鎖直後の07年10月31日、ダナ・ホワイトは本誌の取材に「ある情報が私たちに上がってこなかった。このことは私たちのビジネスにとって大きな問題なんだ」と身元調査の不明瞭さを語っていたが、ところが事務所閉鎖前のコメントとは180度、食い違う。

「一部の報道では、PRIDEの関係者や社員の身辺をまだ調べているために、イベントが開催できないと言われていますが」という本誌の質問に対してこう答えている。

「そんなことは断じてない！ PRIDE FCワールドワイドについていえば、私たちがイベントを走らせるために乗り込んだわけだ。でも、（イベントの開催実現に必要なテレビとの交渉が）動かない。サカキバラが問題だったんだろ？ でも彼はすでにPRIDEから離れているし、クリアにした。でもまだ、ダメなんだ。クリーンじゃない人間は新組織にいないのにね」

こうなると、バッググラウンド・チェックは訴訟をするための後づけの理由に見えてくる。問題があるとされる旧DSE社員を解雇したものの、新たな人材を雇って日本はもちろんアメリカで開催する動きも見えてこ

新生PRIDEはなぜ幻に終わったのか？

ない。実際、ロレンゾは本当にPRIDEを開催するつもりはあったのかという話にもなってくるのだ。

公式発表されることはなかったが、新生PRIDEの新社長にはジェイミー・ポラックが就任していた。業界内では、その人事には落胆の声が上がっていた。彼はズッファの顧問弁護士であり、つまりはダナの部下だ。MMA事情には明らかに疎い人物ともっぱらの評判。ダナ・ホワイトの影響下にあるのは自明の理だ。

そして、マッチメイカーにはUFCと同じくジョー・シルバが手かげるという話もあった。……UFCサイドの人脈をもって新生PRIDEを管理するというのか。それは榊原からすれば決して望んでいなかった環境だ。PRIDEはUFCの二軍なんかじゃない。別ブランドで運営するのが約束だったはずだ。

いまでも多くの関係者、マスコミは「結局はUFCへの売却だった」と論じるが、実際にそうであればPRIDEは、かたちはどうであれ再始動していた可能性は非常に高い。なぜならダナおよびズッファがPRIDE FCワールドワイドに出資していれば、新生PRIDEの役員として積極的に善後策を練らざるをえないからだ。中軽量級に特化したWECのように、〝リング〟のブランドとして活動していたかもしれない。

PRIDEが再開しないなら、PRIDEファイターはUFCで使えばいい。ダナはべつにPRIDEが復活しなくてもかまわなかった。すべてがUFCの踏み台だった。

「ミルコとPRIDEは深い友好関係にあった。彼がUFCに移籍したと聞いて、ほかの選手たちもオレたちと話をするようになった。つまり、クロコップと契約したのは、PRIDEを潰すためのビジネス的戦略だ。クロコップにUFCのヘビー級で活躍してもらおうなんて思ってなかったよ」（ダナ・ホワイト／『MMA Convert.com』より）



UFCをはじめ、米格闘技イベントにない演出力をもってPRIDEラスベガス大会は大成功に終わった。現地記者の中には「子どもの前であんな残酷な闘いを見せるなんて」という批判もあったが、“バローニ劇場”（各自調査）も手伝って、PRIDEのアメリカ進出はより感動的なものとなった。

強がるにもほどがある発言だが、UFCの利益を追求するのが彼のあたりまえの役目だ。何も間違ってはいない。一方、「UFCと同じくPRIDEを我が子のように愛す」ことを誓ったロレンゾはこう漏らしている。

「何が起こったかというと、DSEが選手を私たちに引き渡すのに時間がかかりすぎた。（中略）他にも数多くの問題があって、実際にPRIDEを買収するのに5月の下旬までかかってしまった。その時点で、我々はある意味勢いを失なってしまって、選手たちも他の団体と交渉し始めた」（『GONKAKU』No・006）

DSEからPRIDE FCワールドワイドへの選手契約移管については、それぞれの選手、マネージャー、関係者の立場から見方は異なってくる。契約形態も違うことだし解釈も違う。

契約の移管を拒否したファイターはわずかだった。エメリヤーエンコ・ヒョードル、ジョシュ・バーネット、デニス・カーン、ある大物日本人選手も。移管を拒んだ理由はそれぞれだが、榊原とロレンゾのあいだで営業権の譲渡契約はすでに締結されている。選手の移管が思うように進まないのであれば金額の帳尻を合わせるしかない。最終的に両者が合意に至ったのは5月末だったとされている。

実際、新生PRIDEがイベントを開催しなかったことで、移管に合意をしてしまったために身動きがとれなくなった選手は多い。UFCの提示してきたギャランティが、PRIDE時代と比べて低かったため、契約の書き換えを断った選手も存在する。結局PRIDEは動かず、あまりの不条理に契約不履行でUFCを提訴したという話も聞く。

郷野聡寛は新生PRIDEの幹旋によってオクタゴンに足を踏み入れた。五味隆典サイドは『シャードッグ』のインタビューでUFCからのオファーがあったことを認めた。青木真也は独占契約により日本で活動できなくなるのを憂いて、UFCとの契約を断わった。

「そこで自分たちの身を守るために代わりにとった手段は、できるだけ多くの選手がUFCで戦えるように契約することだった。（中略）我々は彼らに試合の機会を与えることができたが、皮肉なことに我々のしたことは、PRIDEを悪い状況に追い込んでしまった。なぜなら選手たちは今ではUFCファイターになってしまったから」（ロレンゾ・フェティータ／『GONKAKU』No・006）

いや、選手だけじゃない。ベルトでさえもUFCのもとへと書き換えられてしまった。9月8日『UFC75』、PRIDEミドル級王者ダン・ヘンダーソンと、UFCライトヘビー級王者クイントン〝ランペイジ〟ジャクソンがお互いのベルトを懸けて、UFCルールのもとで統一戦を行なった。ダンヘンは敗れ、そのままPRIDEのベルトは静かに〝封印〟された。その1カ月後、日本事務所が閉鎖されてしまった。10周年を迎える直前のことだった。

——今年（07年）の10月11日は、PRIDEがスタートして満10周年の記念日なんですよ。

ダナ そうなのか。それは知らなかった。

——だからこそ、10周年のアニバーサリーである今年は、PRIDEにとって大きなビジネスチャンスのはずなんです。

ダナ 確かにそれはそうだ。このインタビューを読んでスポンサーが飛びついてくれれば最高なんだがね（笑）」（ダナ・ホワイト／『kamipro』No・115）

……〝兄〟からすれば、急にできた〝弟〟の誕生日を知らなくてもかまわないのだろう。誕生日の直前の10月4日の午前10時、PRIDE FCワールドワイドの日本事務所にて会議が行なわれ、国際電話を通じてジェイミー・ポラック社長が全社員20人に事務所の閉鎖と解雇を通告した。呆然とする社員たちは、ポラック社長の代理人や弁護士の立ち会いのもと、20分以内に事務所から退去するように指示されたという。アメリカ本国から契約選手たちへの連絡はなかった。

本誌は事務所閉鎖直後から、アメリカのポラック社長の携帯電話を何度も何度もコールした。翌5日の午前10時、ついにポラック社長が電話に応対する。矢継ぎ早に質問を投げかけるが「広報を通じてなければ、私は何も言うことはできない」という言葉を繰り返すのみ。致し方なくズッファに問い合わせると、ちょうどズッファ社にヴァンダレイ・シウバが訪れていた直後だった。ヴァンダレイは日本での騒ぎを知らずに、日本から送付した『kamipro』を受け取りに来ていた。

ヴァンダレイ、PRIDEは終わ

アメリカからの声明文

られるため、以下の声明を発表いた

なうという大きな希望を持ってPR

MMAのモンスターが我々のテリ

「ミルコとPRIDEは深い友好関

がかかりすぎた。（中略）他にも数多

りの不条理に契約不履行でUFCを

ダナ　そうなのか。それは知らなか

け取りに来ていた。



PRIDEイベント最後の最後で『HERO'S』に移籍した桜庭がリングに登場、しかも田村まで現われるという名シーンもあり、大興奮のまま幕を閉じた『PRIDE.34』。この興奮はいつまでも続くと思われていたのだが……。

ヴァンダレイ、PRIDEは終わってしまったよ……。そう叫ぶ代わりに、ズッファ広報に事務所閉鎖の公式見解を求めた。電話器を切ると、前田日明が「ざまあみろ、PRIDE!!」と叫んでいた。

アメリカからの声明文

〈PRIDE FCワールドワイドの東京事務所および社員について〉

PRIDE FCワールドワイドは、表題の件に関し、いくつかのメディアにおいて誤まった報道が見受けられるため、以下の声明を発表いたします。

弊社は先週、東京事務所の賃貸借契約を更新しないという経営的判断をやむを得ず下すことに至りました。かかる決定は軽々しく下されたものではありませんが、しかし、それはDSEの元役員たちの協力が得られず、弊社が現在、日本でイベントを開催することが不可能となったため、必要に迫られた判断でした。

日本の法令の下、弊社は顧問弁護士より、適切な事務所スペースなくして社員を雇い続けることは困難であるとのアドバイスを受けました。その結果として、社員は職を解かれましたが、しかし一部のメディアで報じられている内容とは反し、弊社は大半の社員に対して、充分な退職金を支払いました。

弊社は今後も日本、アメリカ、そして世界中において、PRIDEブランドを展開する機会を追求してまいります。そして今後も、これまでの歴史に残るPRIDEの試合や未公開映像をテレビやDVD、またはオンライン配信などで提供し、PRIDE関連商品の販売も継続してまいります。

日本にいる優秀なファイターたちについては、ほかの世界中のファイターたちと同様、MMAのナンバーワン・グローバル・ブランドであるUFCとすぐにでも交渉する機会を持つことができます。

以下、ジェイミーPRIDE FCワールドワイド社長のコメント

「我々は日本でライブイベントを行なうという大きな希望を持ってPRIDEの資産を購入しましたが、残念ながら、DSEの元役員たちの協力を得ることができず、現在、イベントを開催することができません。

我々は、このPRIDEというブランドをリスペクトしています。また、我々はPRIDEを愛する日本のファンに対しても尊敬の念を抱いております。我々は、ファンの皆様がPRIDEブランドを維持しようという弊社の取り組みに理解してくださり、これまでと同じように、UFCの下にあっても、MMAという素晴らしいスポーツと、そこで闘うアスリートたちを応援して、ともに歩み続けてくださることを願っています」

……UFCの下にあっても、か。

PRIDEへの怯えと憧れ

「凄く金はかかったよ。バリー・ボンズが稼ぐ額よりはるかにね」（ダナ・ホワイト『reviewjournal.com』）

テレビ獲得の失敗、資産査定、選手移管、バッググラウンド・チェック、選手契約の書き換え……。新生PRIDEが幻に終わった理由を一つだけに絞りきることは到底できないが、なぜロレンゾは慌てるように、それほどの大金をかけて、PRIDEを手に入れたのか。

10月のPRIDEラスベガス大会。リングサイドにはフェティータ兄弟が並んで観戦していた。熱狂する会場の様子にこうつぶやく姿があったという。

「これはまずいな……」

MMAのモンスターが我々のテリトリーに侵入してきやがった。憧れのプロモーションが我がアメリカ合衆国にやってきてくれた。クロスオーバーするPRIDEへの怯えと憧れ――。手に入れるか、潰すか。

そしてロレンゾはPRIDEを手に入れた。しかしそのうち湧き出てきた日本市場の見込み違い、テレビ業界に対する認識不足、そしてUFCへの選手吸収。憧れは失望へと変わっていたのではないか。

日本のマーケットではもはやPRIDEを支えきることは不可能であり、アメリカ市場はUFCだけで充分だった。PRIDEは日本とアメリカのはざまで行き場所をなくした。とどのつまり、PRIDEは大きくなりすぎた。榊原も、そしてロレンゾでさえも、誰の手にも負えない怪物となっていた。

PRIDEが宿していた魂は、あらゆる選手やプロモーションに受け継がれている。魂が空っぽとなったPRIDEは、ロレンゾ・フェティータのかたわらで横たわっている。脳死状態のように生きていると言えるし、死んでいるとも言える。再び魂を吹き込んだとしても、裁判の結果がどうなろうとも、あのときのPRIDEがよみがえることは、ない。我々はただPRIDEを失ない、選手たちはいたずらに時間と闘う場所を失ない、PRIDEに携わったスタッフは職を失なった。

ちなみに、PRIDEを封印したことでMMA市場を独占することになったUFCの資産価値は、いまや1000億円を超えるという。



PRIDEによって〝皇帝〟と呼ばれるようになった男の素顔

ロシアのMMAはスタールイオスコルという小さな田舎町から始まった

2003年1月、モスクワを経由してロシア中央にそびえるウラル山脈の麓にあるエカテリンブルグ市を訪れた。ロシアン・トップチームが合同キャンプを行なうという話を聞いたからだ。主力参加メンバーはエメリヤーエンコ・ヒョードルとセルゲイ・ハリトーノフ。監督は先日飛行機事故で亡くなったウラジミール・パコージンだった。

コーチであるアンドレイ・コピィロフに命令されると、ヒョードルとハリトーノフは元気よく吹雪の中をロードワークに出かけた。当時ヒョードルは26歳、ハリトーノフは22歳の若さだった。

練習後、ヒョードルに初めてインタビュ

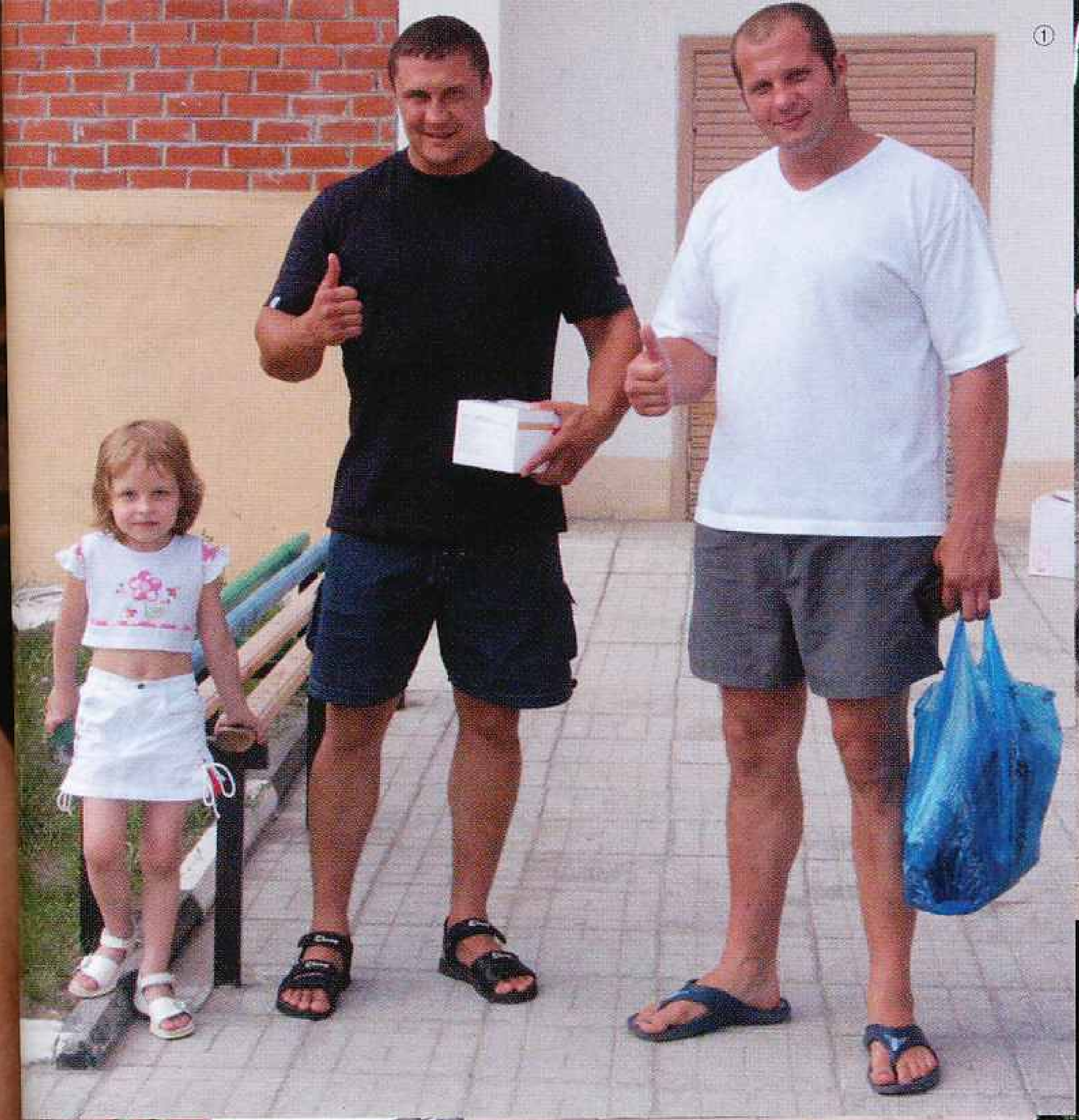
ノフは22歳の若さだった。
練習後、ヒョードルに初めてインタビューした。まだ取材慣れしていないヒョードルは時にははにかみながら、どんな質問にも実直に答えてくれた。
――プロ転向後、すぐに成功した理由は？
「何を言ったらいいのかよくわからないけど、私はとても頑張り屋です。練習を始めたら、その時間も長い。強い格闘家になるために、私はできる限り練習時間を長くして、その時間内は目一杯練習に打ち込むように心がけます」
――他のヘビー級の選手と比べてみると、あなたは決して大きなほうではない。自分より大きな相手と闘っても問題ない？
「問題ないです。恐怖心？　全然ない」
当時、日本ではボブ・サップが一大ブームを巻き起こしていた。いまでこそアンビリーバブルな話だが、サップは最強を争うにふさわしいファイターだと見なされていた。もしサップと闘わばという質問を飛ばすと、ヒョードルは表情一つ変えることなく淡々と答えた。
「闘えといわれたら闘うだけです。私は格闘家として常に自分の力を信じています。だからどんなに大きな相手と闘っても平気です」
もしチャンピオンになったら、次はミルコ・クロコップとの一戦がマッチメイクされるかもと水を向けると、ヒョードルはキョトンとした表情を浮かべた。
「ミルコ？　誰ですか？」
――K―1に出ていた、ハイキックが得意なクロアチアのキックボクサーです。
「すいません、その人のことはよく知りません」
この時点でヒョードルはミルコについて何も知らなかった。ちょうど前年度の



エメリヤーエンコ・ヒョードル

モスクワから寝台列車に揺られること約13時間、ウクライナとの国境近くにあるスタールイオスコル市。『地球の歩き方』にも掲載されていないロシアの名もない田舎町は、一人のMMAファイターを輩出したことによって、一躍その名を世界に知らしめた。その男の名はエメリヤーエンコ・ヒョードル。億万長者となった現在もヒョードルはこの町から離れようとしない。スタールイオスコルで見て聞いて感じた60億分の1の男の実像――。

文＆写真提供（P20）／ロシアンRU0―10　構成＆扉写真／堀江ガンツ





①ヒョードルのアパート前にて、ローマン・ゼンツォフと。左のかわいい女の子はヒョードルの愛娘マーシャちゃんだ。②近代的な器具を使わないヒョードル。カール・ゴッチのようだ。③お父さんの務める鉄鋼コンビナートで。じつはヒョードルも社員に名を連ねていたりする。④父・ウラジミール・アレクサンドロビッチとともに。昔、父はボクサーだったという。⑤地元の看板。君も牛乳を飲んで強くなろう! ⑥ 地元の柔道場にはもちろんヒョードルの写真が飾られている。









「私にとってスタールイオスコルは世界で一番美しい町です」。初対面時、ヒョードルは自慢げに言った

大晦日、ミルコは藤田和之との二度目の一騎討ちを行なっている。他のMMAファイターにとっては、まだ〝射程距離外〟だったのだろう。続いて故郷であるスタールイオスコルに話が及ぶと、うれしそうに自慢話を始めた。

「私にとってスタールイオスコルは世界中で一番美しい町です。毎年どんどん新しい建物が建設され、どんどんきれいになっていく。夏になると、花が咲き乱れています」

正直、零下30度を越す厳寒の地で花が咲き乱れていると言われても、いま一つピンとこなかった。2カ月後、ヒョードルはアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラを破り、PRIDEヘビー級王者に就く。そうなると、ヒョードルを育んだ町であるスタールイオスコルが気になって仕方がなかった。

人口30万人で郊外にヒョードルの父が勤める大型の鉄鋼コンビナートがある。知っているのはヒョードルから直接聞いたわずかな情報のみ。地球の歩き方をめくっても紹介されていない町を自分の目で確かめたいという祈りが通じたのか、ちょうど1年後、私はスタールイオスコルに行く機会に恵まれた。

モスクワから夜行列車に乗り、南西方向に約13時間、車窓から見えた風景はくすんだ青白い空に覆われていた。駅にはかろうじてプラットホームがあり、迎えに来た自家用車が列車に横づけできるようになっていた。うれしいことに駅にはわざわざヒョードルのコーチであるウラジミール・ボロノフが迎えに来ていた。現地のボクシングジムへ連れていってもらうと、練習中のちびっこボクサーが目を輝かせながらヒョードルについて語り始めた。

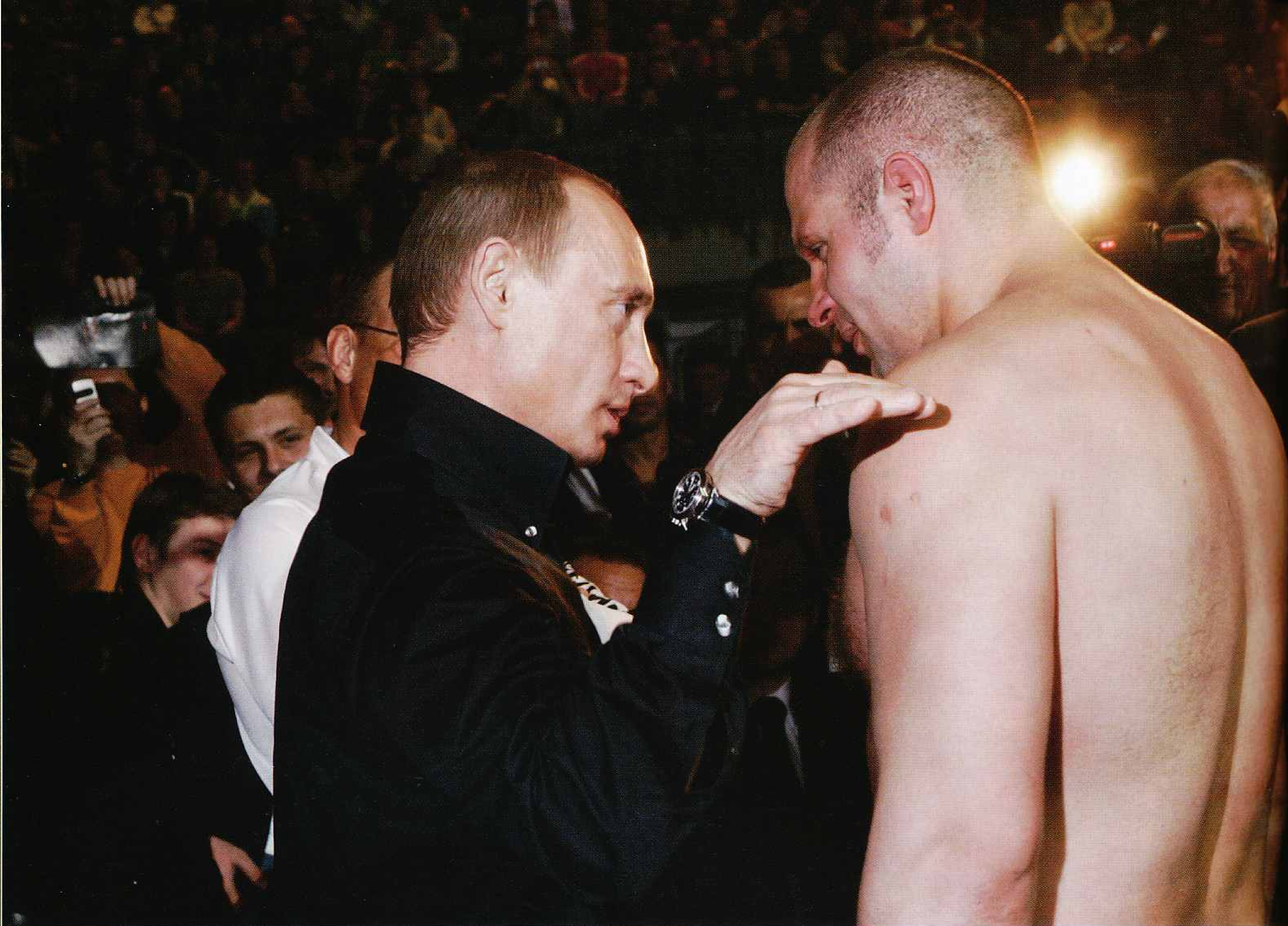
「この町でヒョードルを知らない人はいないよ。なんてたって世界チャンピオンなんだからさ。僕も大人になったら、ヒョードルのような世界で一番強い男になりたいね」

スタールイオスコルのローカルテレビ局『チャンネル9』ではPRIDEにおけるヒョードルのファイトをレギュラー放送していた。中継の仕方はヒョードルが日本で試合→日本でヒョードルが試合ビデオを調達→それをヒョードル自身が持ち帰り、地元のテレビ局で試合映像を見ながら本人が解説するというスタイルをとっていた。

チャンネル9の担当プロデューサーは正直にロシアにおけるMMA事情を話してくれた。

「一度ヒョードルのファイトを放送すると、すぐに視聴者から『再放送してくれ』というリクエストがあります。ロシアでMMAは〝ボイーベスポラービル（規則のない格闘技）〟と呼ばれています。でも、私の知っているかぎり、ロシア全土に浸透しているわけではない。少なくともモスクワのテレビ局がMMAを特集したという話は聞いたことがない。それでもスタールイオスコル市があるベルゴロド州でヒョードルのファイトを衛星中継すれば、大きな反響があるでしょう」

知ってのとおり、ロシアは広い。その面積は日本の約45倍！　そのせいで格闘技は地方分権が進んでおり、日本海に面したウラジオストクの格闘技事情など、モスク



ロシアのMMAはスタールイオスコルという小さな田舎町から始まった

ワの格闘技関係者が知る由もない。ヒョードルもその例に漏れず、〝オラが町のヒーロー〟だった。

スタールイオスコルには日本人が一人も住んでいなかったが、少なくとも私が接した人々はヒョードルにチャンスを与えてくれた国に対して好意を持っていた。PRIDEという団体名も知れ渡っていた。いまでもスタールイオスコルの人々にPRIDEとは？　と聞けば、ヒョードルがチャンピオンになった日本のMMA組織の名称を真っ先に思い出す気がしてならない。

ロシア国内でのヒョードルのステータスが劇的に変化したのは、昨年4月、サンクトペテルブルグで行なわれたM―1でのマッド・リンドランド戦に出場したのがきっかけだった。そもそも体格的に一回り小さいリンドランドは明らかな噛ませ犬。正直、日本から見ると「？」をつけざるをえないマッチメイクだったが、愛国心が人一倍強いロシア人に対して〝強いロシア〟というイメージを植えつけるためには、最高のマッチメイクだった。

決定打はこの一戦を当時大統領だったプーチンがリングサイドで観戦したことだろう。ロシアにおける大統領の権限は絶大。些細な公式行事に出席しても、トップニュースとして扱われる。案の定、プーチンのMMA観戦はローカルではなく、全国放送として何度もリピート放送された。

この日、それまでローカルヒーローにすぎなかったヒョードルはロシア全土にその名を轟かせるMMAファイターになった。プーチンの思惑どおり、一夜にして〝強いロシア〟の象徴になったのだ。

M―1の2カ月後、私は久しぶりにスタールイオスコルに足を運んだ。すでにヒョードルは現地で超有名人になっていた。町中にヒョードルをタレントとして起用した大看板があふれ返っているではないか。たとえば、地元のメーカーが生産しているミネラルウォーターの看板には、ヒョードルの台詞としてこんなコピーがつけられていた。

「この水を飲んだら、あなたは勝つ」

牛乳の看板のコピーもふるっていた。

「僕は世界一強い。なぜなら子どもの頃から地元の牛乳を飲んでいるからです」

爆発的な人気にヒョードルは少々戸惑いを覚えているようだった。

「人気が高まってきたことで楽しいこともあるけど、そのせいで責任感も増したような気がします。もう、いままでのように市内を散歩することすらできなくなってしまいました」

現地の図書館に行くと、ヒョードルの記事だけを抜粋したスクラップが用意されていた。通訳を通してその記事を読んでいるうちに、私はヒョードルがじつはリングスでデビューする前、ロシアン・トップチームの拠点トゥーラでMMAの試合に出ていた事実を知った。

「デビュー戦は2000年の8月だったと思います。相手はグルジア人。トゥーラではもう一度闘っています。その時はブルガリア人が相手でしたね」

このとき、ヒョードルは市内に新居を建築中だった。ロシアで一般人は共同住宅に入居するのがあたりまえ。一軒家はよほどステータスが高い人間でないと住むことが許されない。いままで住んでいたマンションは母親にプレゼントすると言っていた。スタールイオスコルで一番の有名人になったヒョードルの新居は、もう完成したのだろうか。



自家用車が列車に横づけできるようにな

ウラジオストクの格闘技事情など、モスク



国民的英雄。

スポーツの世界でたびたび使われるこのフレーズ。格闘技界でも何人かは、こう呼ばれる選手もいるが、真の意味で「国民的英雄」と呼べるMMAファイターは世界でただ一人。このミルコ・クロコップをおいてほかにいないだろう。

国際的なスポーツヒーローであり、昨年まで国会議員でもあったミルコのクロアチアでの知名度は、なんとほぼ100パーセント。

僕も2005年夏にクロアチアの地方都市プーラに取材に行ったとき、驚いたことがある。タクシーに乗車した際、運転手に「ミルコ・クロコップを知っているか?」と聞くと「もちろん知ってるよ。このあいだの、さいたまスーパーアリーナでの試合もよかったよな」という答えが返ってきたのだ。

まさかクロアチアのタクシーで「さいたまスーパーアリーナ」という言葉を聞くことになるとは……。これは日本人がイチローが所属するシアトル・マリナーズの本拠地セーフコフィールドの名前を知っているのと同じような感じだろう。クロアチアでのミルコは、まさに日本におけるイチロー級の国民的英雄なのである。

では、ミルコはいかにして、そこまでの存在になったのか。その過程を語るうえで避けられない人物がいる。K−1GP初代王者ブランコ・シカティックだ。

93年5月、クロアチア人キックボクサーが、遠く離れた日本で世界チャンピオンになったことが、地元紙のスポーツ欄に掲載された。それがクロアチアにおけるK−1の歴史の始まりだ。シカティックは当時、内戦の傷跡が生々しく残る首都ザグレブで自身のジム「タイガージム」をオープンしており、そのベニヤ板が打ちつけられたボロボロのジムに入門してきたのが、まだ

祖国を背負って闘い続けた男の軌跡

PRIDEが生んだ クロアチアの 国民的英雄

ミルコ・クロコップ



母国クロアチアで絶大なる人気を誇り、昨年までは国会議員も務めた文字どおり国民的英雄ミルコ・クロコップ。"MMA不毛の地"であったクロアチアで、ミルコはいかにして、そこまでの存在になることができたのか? 英雄の軌跡をここではたどってみたい。

文／堀江ガンツ　写真提供／産経新聞社　試合写真／乾晋也

しており、そのベニヤ板が打ちつけられたボロボロのジムに入門してきたのが、まだ十代のミルコ・フィリポビッチ。のちのミルコ・クロコップだった。

　シカティックはクロアチア内戦で勇敢に闘った兵士でもあり、そんなバックボーンからメディアに取り上げられることも多かった。しかし、その一方で、粗野でお金にルーズなトラブルメーカーという一面も持っていた。ミルコと袂を分かつことになったのも、金銭問題だ。

　96年、ミルコが初来日する際、K—1は事前にミルコとシカティック、そしてコーチの3人分の飛行機代を送っていたが、シカティックはこれを自分の懐に入れてしまう。そしてミルコには「おまえにK—1出場のチャンスがめぐってきたが、日本に行くには金がかかる。金を用意してこい」と命じたのだ。

　当時のミルコは父親を内戦で亡くした母子家庭で、生活は困窮をきわめていた。ミルコ自身、警察官の仕事をしていたが、その月給はわずか4万円程度。3人分の日本への渡航費は、当時のミルコには莫大な額だった。それでも母親がミルコのために、親戚中に頭を下げてお金を集めて旅費を工面してくれたことで、ミルコは日本に行くことができたのだ。

　K—1に初登場したミルコは、いきなり前年度のK—1GP準優勝者ジェロム・レ・バンナを撃破。GP準々決勝でアーネスト・ホーストには敗れたものの、大器の片鱗を見せつけた。

　しかし、この試合後、旅費とファイトマネーの両方をシカティックに搾取されていたことを知ったミルコが激怒。師弟関係を解消することとなる。

　これに対し、シカティックもK—1初代

王者という立場を利用して、自分を裏切ったミルコをK―1で使わないように要望。ミルコは干され、K―1のリングから遠ざかることとなってしまった。

3年後の99年2月、かねてからミルコの才能を買っていた今井賢一氏（当時のK―1渉外担当および知的所有権統括、現ミルコの全権代理人）が石井館長（当時）の許可を得て、クロアチアに渡り、ミルコと接触。ミルコは3年の時を経てK―1に復帰することとなる。ミルコと今井氏の関係はここから始まっているのだ。

K―1に復帰したミルコは、K―1 WORLD GP99開幕戦で、当時のK―1四天王の一人、マイク・ベルナルドをいきなりKO。ド派手な復帰戦を飾る。この模様は、クロアチア国営放送のスポーツ番組で繰り返し流されたため、ミルコの存在が国民に知られ始める。2000年には首都ザグレブで、ミルコのスーパーファイトをメインに、K―1欧州予選を開催。この大会もクロアチア国営放送が協力。ミルコの人気は少しずつ上がっていった。

ただ、この時点でK―1の試合が放映されていたのは、欧州のスポーツ専門チャンネル『ユーロスポーツ』。これはケーブルテレビだったため、ミルコの名前もようやく一般に知れ渡ってきた程度だった。

そんなミルコの知名度が全国区になるきっかけとなった試合が、2003年3月のボブ・サップ戦だ。

この一戦は、クロアチア国営放送がお昼の12時から初めてK―1を生放送。K―1王者アーネスト・ホーストを二度にわたり倒した身長2メートル、体重180キロを誇るアメリカ人の〝ビースト〟をクロアチアの戦士が倒す。このわかりやすい構図が大衆に受け、視聴率はなんと昼の時間帯にもかかわらず50パーセントを記録。

ここでミルコは1ラウンドKO勝ちという最高の結果を残し、一夜にして大ブレイクをはたしたのだ。

ところが、ミルコはこのサップ戦を最後にK―1を離脱。主戦場を総合格闘技PRIDEへと移す。これを機にクロアチアで、PRIDEの放送がスタート。これがクロアチアにおけるMMAのスタートと言っていいだろう。

そしてミルコのPRIDE本格参戦第1戦であるヒース・ヒーリング戦は、当日夜のプライムタイムにディレイ放映され、なんと視聴率70パーセントを記録。この時点で、クロアチア人の大半は、K―1とPRIDEの違いもよく理解してはいなかったが、とにかく英雄ミルコの活躍に酔いしれていたのだ。

この年の11月、ミルコはノゲイラとのPRIDEヘビー級暫定王座決定戦で敗れたものの、勇敢な闘いぶりで人気はさらに上昇。この人気に目をつけたのが、ときのクロアチア首相、ラチャンだ。

クロアチア議会は152議席の一院制。



栄光と挫折の繰り返しだったミルコのファイティングロード。ついにヒョードル戦にたどり着いたとき、ミルコは国歌吹奏時、肩からクロアチア国旗をかけ、胸に手を当てていた。

政権交代がかかった大事な選挙を前に、ラチャン首相は自らミルコに出馬を交渉。選挙活動の時間が取れないミルコのために、比例区で出馬させ、名簿順はラチャン首相本人、ザグレブ市長に次ぐ3番目を用意した。これほどの厚待遇でミルコは政界へ進出したのだ。

こうしてミルコは社会民主党から出馬し、当選。国会議員ファイターとなるが、

この選挙で社会民主党はクロアチア民主同盟に敗れ、野党に転落してしまう。ミルコも野党議員となるが、絶大なる人気を誇るスポーツヒーローはクロアチア民主同盟の重鎮たちにも重宝された。

そのミルコの議員生活でハイライトとも言えるのが、2004年2月13日に実現した小泉首相（当時）との会談だろう。1年生議員のミルコが首相官邸に招かれ、サナデール首相からの親書を日本の首相に手渡したことは、クロアチアでも大きく報じられた。こういった活動により、ミルコはスポーツヒーローの枠を超えた存在となっていったのだ。

その後、ミルコのPRIDEでの試合は、放映するたびに40パーセント以上の視聴率を獲得。ケビン・ランデルマンにKO負けするなど、幾多の困難に遭いながら、打倒ヒョードルを目指す、そのドラマチックな流れはクロアチア国民をPRIDEに夢中にさせるに充分なものがあった。

そして、2005年8月、ついにヒョードル戦に到達。

倒すべき最強の相手がロシア人であることは、クロアチア人にとって特別な意味があった

倒すべき世界最強の男がロシア人であるということも、じつはクロアチア人にとって特別な意味合いがあった。

クロアチアには、〝鉄のカーテンの向こう側〟旧共産圏に長年封じ込まれ苦しめられた歴史がある。中でも大国ロシアに対しては、怨念に近い感情がいまだ残っているのだ。ロシア人世界チャンピオンをクロアチアの英雄が倒す。それはクロアチア国民にとって悲願でもあった。こうした背景があったからこそ、ミルコは脇目もふらずにヒョードル戦への連戦ロードを突き進んでいったのである。

残念ながらこのとき打倒ヒョードルはならなかったが、その2年後、ミルコはPRIDE無差別級GPに優勝。ついにPRIDEの頂点に輝く。初めてPRIDEのベルトを腰に巻いたミルコは、大粒の涙を流し、マイクを握ってクロアチア語で長い長いスピーチを行なった。普段、国外では英語を話すミルコが、クロアチア語でスピーチしたのは、もちろんこの試合がクロアチアで生放送されていたからだ。


ミルコはクロアチア国民に対し、悲願達成を報告し、応援に対する感謝の気持ちを母国の言葉で語りかけたのだった。

その後、ミルコはUFCに参戦。このときのモチベーションも「世界にクロアチアを知らしめたい」というものだったが、UFCでの闘いは自分の思いどおりにはいかないものだった。そして、出直しを誓ったDREAMでも苦闘は続いている。

地位も名誉もお金も得たミルコが、それでもいまだ頂点をあきらめず闘い続けるのは、彼がクロアチア国民の期待を一身に背負った、文字どおり国民的英雄であるからにほかならないのである。

PRIDEが生んだ クロアチアの 国民的英雄





〝技術と勇気〟のピープルズ・チャンピオン

PRIDEに技術革命をもたらした男

衝撃のデビュー戦。スポーツにおいて
それをものにする幸運に恵まれる選手が

アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ

ヒョードル、ミルコと並んで〝ＰＲＩＤＥ三強〟と呼ばれ、初代ヘビー級王者にも輝いたのがアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラだ。〝柔術マジシャン〟という異名どおりのハイレベルな寝技を武器にＰＲＩＤＥのリングでいくつもの名勝負を繰り広げてきたノゲイラ。本誌連載コラム『サムライ三昧』でもノゲイラネタをたびたび執筆してきた椎名基樹が、ノゲイラがＰＲＩＤＥに与えた影響を独自の視点で徹底分析！

文／椎名基樹　撮影／Fernando Ramos　試合写真／乾晋也

衝撃のデビュー戦。スポーツにおいてそれをものにする幸運に恵まれる選手がいる。たった1試合でファンを納得させ、一夜にしてスターになる。その後、勝利を重ねれば、ファンはそれを語り、伝説になる。タイムリーにその衝撃を味わったことはファンにとって何よりも自慢だ。

衝撃のデビュー戦をものにする条件は、頭一つ抜けた実力と、明らかな新しさである。最先端の技術、最先端のファイトスタイル、プレイスタイルを見せつけ、それまでの世界を置き去りにして勝って、初めて伝説のデビュー戦になる。世界が古くなったとき、まったく新しい武器を携えて現われるタイミングにめぐり会う幸運。

アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラのＰＲＩＤＥデビュー戦となった、ゲーリー・グッドリッジ戦、それに続くマーク・コールマン戦は、まさに衝撃のデビュー戦であった。

そして、とくにマーク・コールマン戦は、それまではバーリ・トゥード（以下ＶＴ）と呼ばれていた闘いが、ＭＭＡ（総合格闘技）という競技に変わるエポックであったと、筆者は思っている。

グッドリッジ戦は、２００１年2月にリングスＫＯＫトーナメントで優勝したノゲイラが、リングスからＰＲＩＤＥに電撃移籍、その年の7月に開催された『ＰＲＩＤＥ・15』で対戦が実現した。この流れを見ても、ノゲイラが完成しつつあるＭＭＡ世界の過渡期にいることがわかる。ＭＭＡのスタンダードとなるルールや競技体系が固まるのと同時進行で、以前から未来を見つめていたノゲイラは、ＭＭＡのファイトスタイルを完成しつつあった。

試合内容は、ゴングからいきなり片足タックルにいったノゲイラが、ハーフガードになり、そのまま腕でグッドリッジの空い

ているほうの足を抱え簡単にスイープ。柔術でいう「もぐり」という技術でまたたく間にトップポジションを奪い、最後は三角絞めで仕留めた。グッドリッジは終始何をされているのかわからぬまま、あっという間にマットを叩くことになる。また、筆者にとってはMMAにおいて「もぐり」を見た最初の試合であった。

続くコールマン戦は、ガードポジションからオモプラッタ、腕を極められそれを嫌がったところをカウンターで三角絞め、最後は腕を伸ばされてタップアウト。グッドリッジ同様、何をされているかわからないコールマンは、操り人形のようにいいようにコントロールされてしまった。

試合終了後、溺れた者が水面に顔を出したように、呆然とした表情でただプハプハと大きく呼吸をしながら立ちつくす、コールマンの姿が強烈なインパクトを残した。信じられないといった表情は、MMAの新たな世界に驚いているようにも見えた。

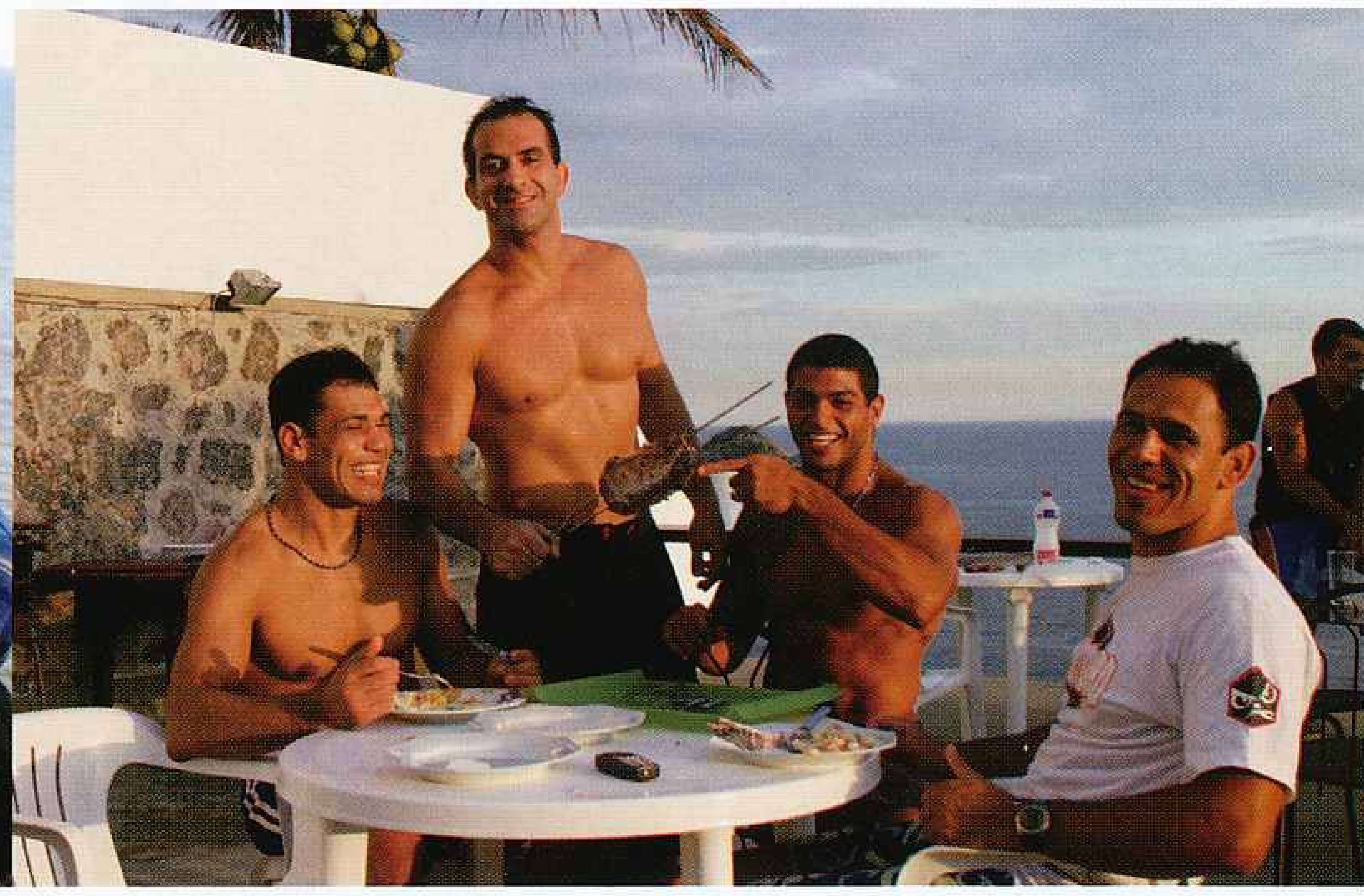
また「もぐり」に続いて「オモプラッタ」もこのとき初めて見た技術だった。こうした最新の技術を、ヘビー級ファイターのノゲイラが初公開したところにノゲイラの革新性がある。モハメド・アリがそれまでブン殴り合いだったヘビー級のボクシングにフットワークを持ち込んだように、世界はガラリと姿を変えてしまった。ヘビー級であろうと、ただの体力自慢じゃもう勝てない。

ファイトスタイルの新しさを見せつけて勝った相手がコールマンであることの意義も大きい。この試合がVTからMMAにシフトチェンジしたエポックである理由がそこにある。

ホイス・グレイシーがUFCでVTを知らしめて以来、さまざまな〝最強かもしれない〟選手が登場した。ビクトー・ベウフォート、ドン・フライなどに続き、VTを席巻したのが、マーク・コールマン、マーク・ケアー、トム・エリクソン、ケビン・ランデルマンらアメリカのアマチュアレスリング出身の、圧倒的な体力を誇るエリートアスリートたちだった。

下の２枚の写真は04年5月に当時の榊原信行DSE代表と高田延彦PRIDE統括本部長がブラジル・リオデジャネイロのノゲイラ邸を訪れたときのもの。右はノゲイラ同様、PRIDEマットで活躍した弟のホジェリオ、マリオ・スペーヒー、ヒカルド・アローナとの食事風景。これから数年後、分裂してしまったブラジリアン・トップチームだが、このときは、みんなバツグンの笑顔だ！





PRIDEに技術革命をもたらした男

PRIDEとは、勇気を最大の武器に闘うノゲイラのためのイベント名のようでもある

いまの「THE ULTIMATE FIGHTER」の出場者のように、最初からMMAファイターを目指してトレーニングした者が世に出てくる前のことで、オリンピックスポーツの層の厚い世界で鍛えられた体力は他を圧する武器となっていた。アホなことに筆者はその頃、MMAファイターを目指してトレーニングを積んでも、他の層の厚いオリンピックスポーツで鍛えられ、選りすぐられた者には勝てないのだろうか？　しかし、効率的には最初からMMAファイターを目指してトレーニングしたほうが絶対に有効なはずなのだが……、なんて真剣に考えていたりした。

その頃、UFCとPRIDEの力関係は拮抗しており、UFCがバイオレンスを理由にアメリカ社会で立場をなくしつつあるのをきっかけにPRIDEが力をつけつつある状況だった。いずれにしても〝最強〟の座は混沌としていたが、アメリカン・アマチュアレスラーが一番の評価を得ていた。また、その頃のPRIDEといえばまだ異種格闘技戦の様相を帯び、無差別級で行なわれていた。

そんな中『PRIDE・GP2000』が行なわれた。マーク・コールマンは1997年にモーリス・スミス、1999年にペドロ・ヒーゾといった打撃系の選手に敗れ、評価を下げていた。しかし優勝候補の筆頭はやはりアマチュアレスリング出身のエリートアスリート、マーク・ケアーだった。何せケアーはその頃〝霊長類ヒト科最強〟なのだ。

結果、優勝したのは、マーク・コールマンだった。それまでに桜庭がグレイシーやビクトー・ベウフォートを撃破したり、イゴール・ボブチャンチンなどのスターが誕生し、新しい世界が見えかけたところのコールマンの優勝は、どこか時代を戻された感じがした。と、いってもよくよく見れば、他の出場選手にコールマンを上回る確固たる強さなどどこにもなかった。

しかし、それからたった1年あまりのちのノゲイラ戦で、コールマンの優勝はGP開催のタイミングがよかっただけだと証明される。前記のとおり、ノゲイラと比べてコールマンのファイトスタイルはオールドファッションで冗談のようだった。ここにエリートアスリートへの幻想は消え去り、真性MMAファイターの時代が到来した。いまではアマチュアスポーツをやったあと、30歳近くになってMMAを目指したって遅すぎると誰もが思うだろう。

『PRIDE・GP2000』は無差別級で行なわれたが、その後、ノゲイラをはじめとする真性MMAファイターが続々登場するのに合わせて、VTは体重別の競技化したスポーツへ一直線に進む。技術の浸透により、異種格闘技戦の色合いは薄れ、打・倒・極、どの分野もある一定のレベルに達していなければ、勝つことはできなくなる。総合格闘家を目指さなければ、総



06年大晦日『男祭り』でのジョシュ戦を最後にPRIDEを離れ、戦場をUFCに移したノゲイラは移籍後2戦目でヘビー級暫定王者に。ノゲイラは12.27『UFC92』ではフランク・ミア戦が決定しており、この試合に勝った選手と11月の『UFC91』でのクートゥアーvsレスナー戦の勝者のタイトルマッチも確実視されている。

合格闘家になれない時代が到来した。

ノゲイラはUFCでのホイス・グレイシーを見て、格闘家になる決心をしたという。筆者たちファンと同じ衝撃を受け、同じようにこの新たなフューチャースポーツに可能性を感じて柔術道場の門を叩いたのだ。いわばMMAの第一世代なのだ。自分の人生をこの新しいスポーツに賭けようと決意した最初の世代。まだどうなるかもわからないスポーツに魅了された若者が、トレーニングを積み強くなり、そのスポーツを作り上げた世代とやっと闘うところまできたのが、ノゲイラvsコールマンであった。そして、ノゲイラはコールマンを軽々と一蹴した。ここにおいてVTはMMAにシフトチェンジした。

競技体系、ルール、そして選手の顔ぶれ。いまあるMMAはすべてノゲイラ以前か以降で考えることができる。旧世代でMMAファイターに脱皮できたのは、ランディ・クートゥアーだけだ。ノゲイラはこの新しい格闘技のニュー・ワールド・オーダーとなった。それを表わすようにPRIDE、UFCの両方でチャンピオンベルト巻いた実績は感嘆すべき偉業である。

ノゲイラ登場のPRIDEにおける意義をテーマに書いてきたので、理屈っぽい話になってしまった。しかし〝追悼・PRIDE〟でノゲイラを語るなら、誰の試合よりも人を熱くさせる、ノゲイラのとんでもない大逆転劇の数々を変態的にうっとりと、嬉々として書くべきだっただろう。

ノゲイラの、いやMMA史上で最高の試合と問われれば、真っ先にノゲイラvsサップと答える。ノゲイラはVTからMMAへ移行する先人となったと書いてきて、恐縮だが、この試合はVTというべき荒々しさに満ちた試合だった。闘いの原始的な魅力にあふれていた。古（いにしえ）のヒクソンvsズールはこんなだったのだろうかと思いを馳せた。

シチュエーションも最高だった。もう二度とこんなことは起こらないだろう、奇跡的なビッグイベント第1回目の『Dynamite!』。真夏の国立競技場。オープンエアに10万人の観客。そこで誰も攻略法が見いだせない怪物と対戦。こういう運命にめぐり会うのがノゲイラであり、それは誰とでも闘うと公言し実行してきた結果だ。ノゲイラはメチャクチャにダメージを受けながら、暴力を技術でねじ伏せる最高にカッコいい大逆転勝利。そして何より印象的だったのは、勝利の瞬間、両腕を広げて天を見つめる、ノゲイラのなんとも神々しい表情だった。生の喜びに打ち震えているような、恍惚の表情。こちらが知るよしもない、ある精神の高みに到達しているように見えた。

とくに体力に恵まれているわけではないノゲイラは、常に下からの闘いを強いられダメージを負わされる。そこから、いわば人間の知恵と言える技術と、絶対あきらめない精神力で勝利をつかみ取る。格闘技に何を見たいかと問われれば、研ぎ澄まされた技術であったり、信じられないような身体能力だったりもするが、やはり一番見たいのはファイターの勇気だ。ノゲイラは勇気の固まりだ。

誰もが本気で求めれば得られるかもしれないもの〝技術と勇気〟で闘うノゲイラには、誰もが感情移入せずにはいられないだろう。PRIDEとは、勇気を最大の武器に闘うノゲイラのためのイベント名のようではないか。見かけは地味だが、ノゲイラこそ日本人のピープルズ・チャンピオンだった。

まずは結論から書いてしまおう。

く。それがシウバの日常だった。ＰＲＩＤ

をするうえに予算が少なくて済むという

アグレッシブな試合をするからファン



プロ魂の恐ろしさよ!!

ミスターPRIDE

ヴァンダレイ・シウバ

1997.10.11-2007.10.4
PRIDEは何を変えたのか?

文／橋本宗洋　試合写真／乾晋也

まずは結論から書いてしまおう。

ヴァンダレイ・シウバとはPRIDEの申し子であり、彼こそが〝ミスターPRIDE〟である。

エメリヤーエンコ・ヒョードルやアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラは、リングスでの実績を引っさげてPRIDEに登場した。桜庭和志にも、Uインターでの若手時代やUFC—J優勝という背景があった。しかしPRIDEに参戦する前のシウバは、何者でもなかったのだ。ゼロからサクセス・ストーリーを描いてみせたのである。

シウバをPRIDEに導いた〝ブッカーK〟川崎浩市氏が惹かれたのは、シウバのアグレッシブな闘いぶりとハングリーさだったという。いつでも、誰とでも、あくまでも攻撃的に闘う。それがシウバという選手だった。

「ヴァンダレイは相手が誰なのかを一切、気にしませんでしたね。とにかく試合がしたい、稼ぎたい。そういう思いが強かった。『PRIDE・GP2000』ではリザーブマッチに出場したんですが、一方で本戦にエベンゼール・ブラガが出ていたんですよ。これに（シュートボクセの会長）フジマールが激怒したんです。ブラジルの大会でブラガがヴァンダレイとの対戦を拒否したらしく〝どうして逃げたヤツが本戦に出られるんだ！〟と。でもヴァンダレイ本人に確認したら〝試合ができればOK、OK〟でした。あとで聞いたのですが、このときヴァンダレイは娘の治療費のためにどうしても稼がなければならなかったんです」

実戦さながらの激しいスパーリングを行なうことで知られるシュートボクセで腕を磨き、夜は父親の経営するバーで働く。それがシウバの日常だった。PRIDE以前に出場していたのは、ローカルな大会。そういうシウバにとって、格闘大国日本での試合はどんなものであれチャンスに違いはなかった。

ただし、シウバにはなかなか本当のチャンス、大きな試合の機会はめぐってこなかった。PRIDEデビュー戦の相手はカール・マレンコ、2戦目は一本・KOを取られない闘いをするタイプの松井大二郎。決して鳴り物入りでPRIDEに参戦したわけではないシウバは、着実に結果と内容を積み上げるしかなかった。一時期PRIDEの契約を切られ、UFCに出場した時期もある。



04年『PRIDE男祭り』マーク・ハント戦。当初の対戦予定だった桜庭がケガで欠場。ヴァンダレイは相手が決まらぬまま飛行機に乗り込み日本へ。そしてハントと殴り合いをするんだから、男の中の男にもほどがある。

驚くべきことに、桜庭和志をKOしてトップファイターとしての地位を確立するまで、彼が住んでいたのは実家の四畳ほどの小さな部屋だったそうだ。川崎氏は言う。

「無名だったヴァンダレイのファイトマネーは、デビュー当初は非常に安かったんです。彼の試合数が多いのには、いい試合をするうえに予算が少なくて済むという事情もあったんですよ。ちょっとずつ、本当にちょっとずつファイトマネーが上がっていった。そういう感じでした」

「見ろよ、俺が倒れたら客がこんなに盛り上がってるんだぜ」ヴァンダレイは手を叩いて喜んだ

シウバは最初からスターだったわけではない。高額のファイトマネーも観客の支持も、すべてPRIDEのリングで、その実力でつかんだものだった。アグレッシブな試合をする。そして勝つ。そうすればファンは喜び、そのことで自分のファイトマネーが上がっていく。あたりまえの仕組みではあるが、シウバほどそれを実感しながら闘っていた選手は少ないかもしれない。

「ファンのことを本当に愛していましたね、ヴァンダレイは。自分に豊かな生活をもたらしてくれたのが誰なのかを知っていたんです。だから、彼にとってはファンの歓声を聞くのが最大の喜びだった。ビデオでヴァンダレイの入場シーンをチェックしてみてくださいよ。これから殴り合いをしようっていうのに、満面の笑みを浮かべてるんです。サインも絶対に断りませんでしたね。どんなに時間がかかっても、最後の一人までサインしてました。そしてファンが喜ぶから、試合もどんどんアグレッシブになっていく」

川崎氏には忘れられない光景があるという。シウバがホテルで自分の試合VTRを見ながら、手を叩いて喜んでいた姿だ。しかも、それはクイントン・〝ランペイジ〟・ジャクソン戦やマーク・ハント戦で自分自身がダウンするシーンだったという。

「もうね、大ウケしてるんですよ。〝見ろよカワサキ、俺が倒れたら客がこんなに盛り上がってるんだぜ〟って。たとえ自分のピンチや負けた試合であっても、ヴァンダレイはファンが興奮していること自体に喜びを感じていたんです」

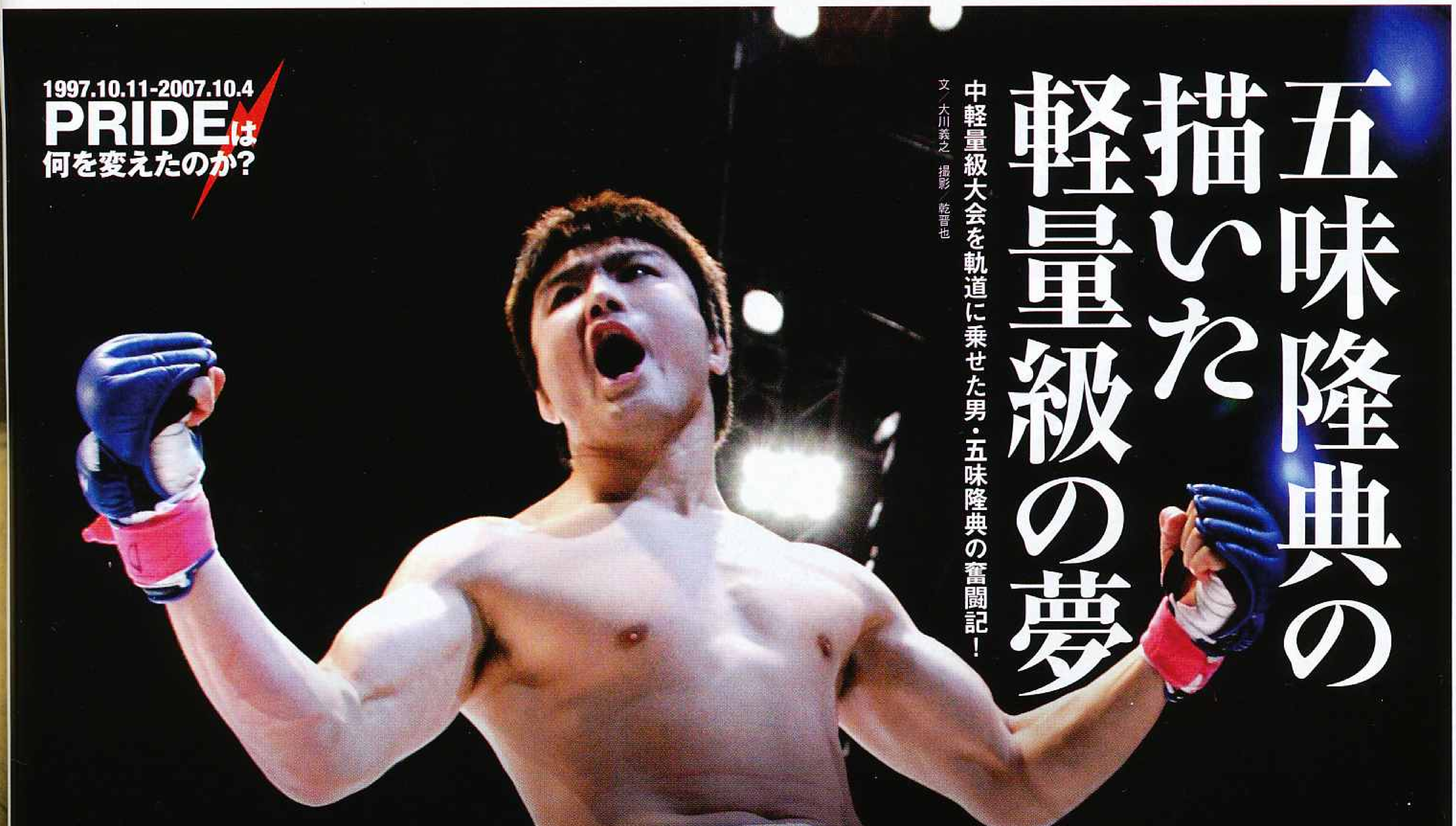
アグレッシブな試合をするからファンは喜ぶ。ファンが喜ぶからよりアグレッシブに闘う。当時、PRIDEは世界で最も〝熱〟のある大会だった。その観客と磨き、磨かれ……シウバがいたからPRIDEには〝熱〟が生まれ、その〝熱〟がさらにシウバを磨いていったのである。ファイターと観客の、最も幸せな関係がそこにはあった。

自らの幸福を、シウバは他の選手たちにも伝えようとした。シュートボクセの後輩には「どんどん踏みつけろ。そうすればファンは喜ぶぞ」とアドバイス。実力は申し分ないがキャラクター性が弱かったヒョードルには、こんな言葉をかけたそうだ。

「〝プロレスを見ろ。勉強になるぞ〟って。ヴァンダレイも最初は興味がなさそうだったんですが、僕がビデオを見せたら〝パフォーマンス、自分の見せ方という面で凄くおもしろい〟と言ってましたね。それからはよく、WWEの中継を見てましたよ。そのへんもプロ意識が高かった」

シウバの最大の好敵手といえば、もちろん桜庭である。ただ彼自身は、ジャクソンにもライバル意識とリスペクトを抱いていたようだ。過去2戦して2勝、いずれもKO。それでもシウバは「俺はいつか、この男ともう一度闘うことになる」と川崎氏に語っていたそうだ。ユン・ドンシク戦に勝利した直後、ジャクソンはリング上から最前列で試合を見守っていたシウバにアイコンタクトを送り、シウバもそれに応えたという。

いま、シウバはUFCでもトップの座をつかみつつある。UFCではその先を行っているのはジャクソン。もし、金網の中で両者が対峙するときが来たら——それは二人にとっての〝夢の続き〟なのだろう。



五味隆典の描いた軽量級の夢

中軽量級大会を軌道に乗せた男・五味隆典の奮闘記！

文／大川義之 撮影／乾晋也

93年にアメリカでUFCが誕生して本格化した日本総合格闘技の草創期、日本人選手はグレイシー一族や外国人選手に次々と惨敗し、格闘技雑誌には〝日本最弱〟の文字が踊った。修斗がグラウンドでのパウンド攻撃を解禁した96年のことである。

その翌年、東京ドームで高田延彦vsヒクソン・グレイシーをメインとした史上最大の格闘技イベント、PRIDEが誕生する。格闘家にとっては魅力的な舞台であったが、そこで活躍できるのは重量級の選手に限られていた。当時、MMAの中軽量級のプロ選手として充分な報酬を手にしていたのは、修斗の佐藤ルミナや桜井〝マッハ〟速人など、ほんの一握りでしかなかった。

だが、立ち技格闘技のK―1では、02年からいち早く中軽量級の新ブランド『K―1 WORLD MAX』を立ち上げ、TBS系列で中継を開始する。エースの魔裟斗を中心に、須藤元気、山本〝KID〟徳郁といった個性豊かな選手に人気が集まり、これまでヘビー級のイメージの強かったK―1に新風を巻き起こした。

一方のMMAの世界では、依然としてヘビー級中心のマッチメイクが続いていたが、03年にようやくPRIDEが〝武士道シリーズ〟を開始する。だが、当時のPRIDE武士道は中軽量級の大会というより、急造の日本チームvs外国人チームの対抗戦が行なわれたり、PRIDEの中堅選手や覆面プロレスラーのドス・カラス・ジュニアが出場するなど、ごった煮感の強いイベントだった。

また、エースと見込んだ桜井〝マッハ〟速人が不調で結果を残せず、結局ミルコ・クロコップやヴァンダレイ・シウバらを投入して興行のテコ入れをしなければならなかった。当時の武士道には常に〝PRIDEの二軍〟というイメージがついて回った。興行的にも利益を生んでいるとは言えなかったため、『PRIDE武士道～其の四～』の際にはDSEの榊原信行社長が、内容次第ではシリーズの打ち切りも示唆するなど、〝お荷物イベント〟の雰囲気さえ漂っていた。

だが、そのイメージを一新したのが五味隆典だった。『PRIDE武士道～其の弐～』に初めて登場すると、そこから怒濤の6試合連続1ラウンドKO＆一本勝ちで鮮烈な印象を残した。実力でエースの座をブン獲った五味は武士道シリーズに活を入れ、イベントの進むべき道筋を指し示したのである。破竹の勢いで勝ち進む五味の姿は、むしろ中軽量級こそが最も実力を発揮できる階級であることを印象づけた。

こうした五味の活躍をきっかけに、PRIDE武士道は第7回大会から本格的に中軽量級に特化したイベントへと方向性を定めていく。ただし、PRIDE武士道は五味、マッハ、川尻、石田といった修斗出身者を多く抱えながら競技性を強める方向に針を振り切ることなく、劇場的な煽り映像などで、試合に人間味あふれるドラマを注入し、それまで格闘技マニアたちの楽しみでしかなかった中軽量級の魅力をより多くの人に伝えることに成功した。のちにPRIDE消滅後の一夜限りの復活イベントの大会名称になった「やれんのか!」も、もとはと言えば五味の試合を煽るための名フレーズでもある。

そして、五味隆典は『PRIDE武士道～其の九～』(05年9月25日)で〝最強の挑戦者〟、川尻達也と両者の意地が真っ向からぶつかり合うド派手な殴り合いを展開し、この年のPRIDEナンバーシリーズを含む全試合の中で〝年間最高試合〟と称されるほどの名試合をやってのけた。それは中軽量級の試合が迫力の面でもヘビー級を凌駕した瞬間でもあった。

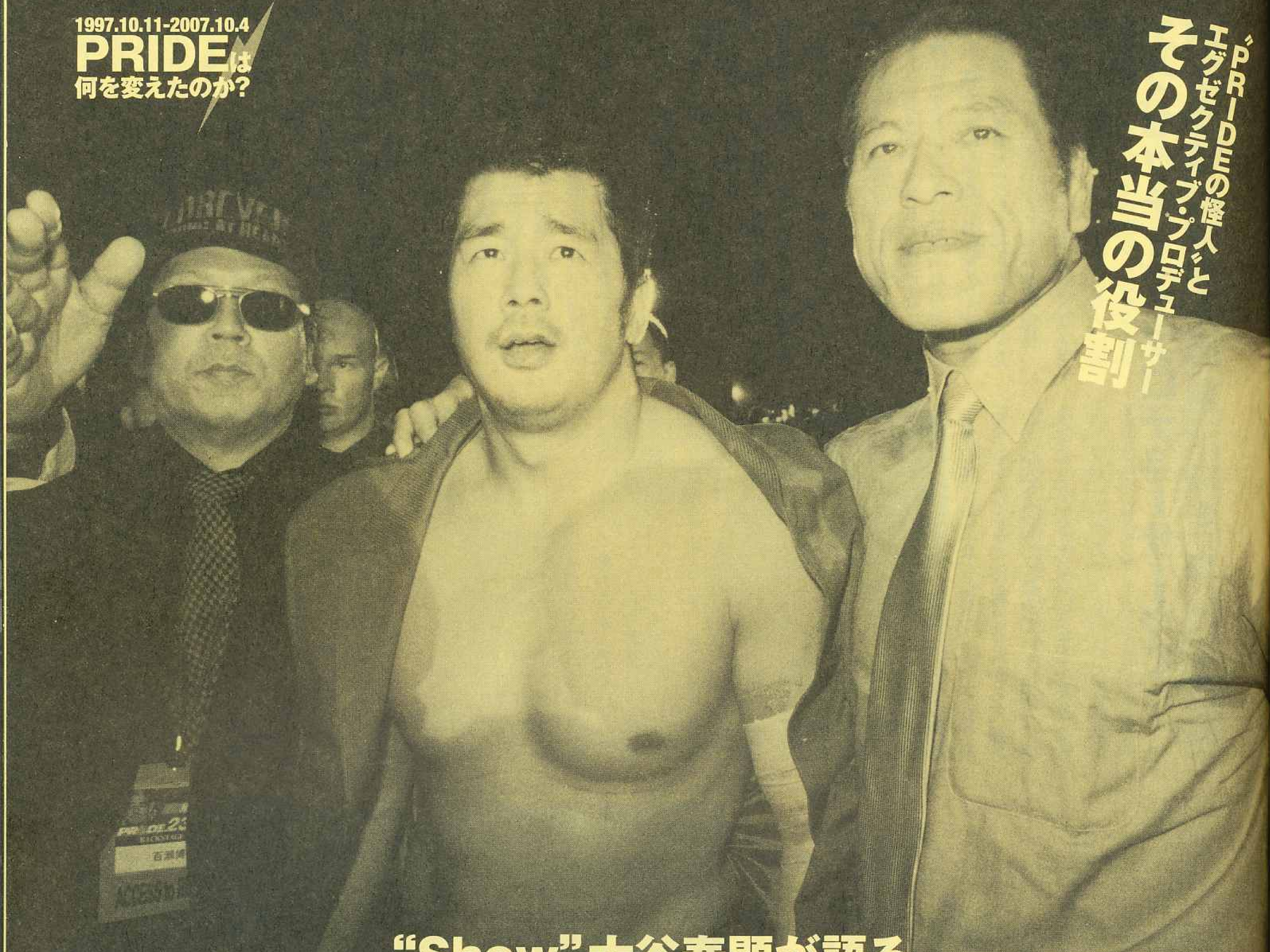
さらに、同年大晦日の『PRIDE男祭り2005 頂～ITADAKI～』で、中軽量級の象徴的な存在である桜井〝マッハ〟速人をKOで倒して初代ライト級王者となり、名実ともにPRIDE武士道＝五味隆典というイメージを植えつけた。

しかし、五味には大きな不満があった。いくら勝ってもK―1の中軽量級イベント『K―1 WORLD MAX』の看板選手である魔裟斗たちとの知名度の差は埋まらなかったのである。それはすなわち、ゴールデンタイムでの放送があるかないかの差であった。

いつまで経ってもメジャーになれない五味は、心に勝利や名声に対する色気と野心を深く宿していく。そのような満たされない欲求、そしてイラ立ちが、やがて〝ワル強い〟五味のキングキャラを創り上げていった。06年に入って、ついに武士道の地上波ゴールデンタイム中継開始が内定していたが、同年6月の〝フジテレビショック〟により、ついに実現することはなかった。

だが、こうした五味を中心に据えながら目指した中軽量級に特化したPRIDE武士道というイベントは、PRIDEなき現在の総合格闘技界において、DREAMや『戦極』の興行形態のお手本となっている。また、ゴールデンタイムでの地上派放送という五味隆典の夢は、DREAMや『戦極』において、姿を変えながら確実に受け継がれている。

五味隆典の活躍、そしてPRIDE武士道というステージがなかったならば、現在の日本の総合格闘技界もなかったに違いない。



〝PRIDEの怪人〟と
エグゼクティブ・プロデューサー
その本当の役割

“Show”大谷泰顕が語る

PRIDEにとっての アントニオ猪木 と 百瀬博教

世界中のトップファイターが集結し、数々の名勝負を残したPRIDEの歴史。
それを振り返る上で、“PRIDEエグゼクティブ・プロデューサー”アントニオ猪木と
“PRIDEの怪人”百瀬博教氏の存在も避けては通れないだろう。中期のPRIDEを隆盛に
導いたキーマンであるこの二人は、PRIDEにどんな影響をもたらしたのか?

聞き手／堀江ガンツ　撮影／乾晋也

〝ＰＲＩＤＥエグゼクティブ・プロデューサー〟アントニオ猪木と、〝ＰＲＩＤＥの怪人〟と呼ばれた作家の百瀬博教氏。

ＰＲＩＤＥ中期でよくも悪くも目立っていたこの二人だが、実際にＰＲＩＤＥでは、どんな立場で、どんなことをしていたのか、知っている人は意外と少ないのではないだろうか。

とくに百瀬氏はいつもリングサイド最前列でアポロキャップを被って座り、ＰＲＩＤＥファイターたちが試合後に挨拶に行く姿がたびたびＰＰＶ放送などで映り、そのたびに「この人は何者なんだ？」と思っていたファンも多いはずだ。

そんな謎が多い二人の素顔とＰＲＩＤＥでの本当の役割を、当時、親交があった〝Ｓｈｏｗ〟大谷泰顕氏（この人自身もいったい何をやってる人なのか謎が多い）が、初めて語ってくれた。

格闘技界激動の時代の舞台裏をじっくりと読んでいただきたい。

――今日は、アントニオ猪木さんと、作家の百瀬博教さんというＰＲＩＤＥ中期の重要人物であるお二人が、ＰＲＩＤＥにどういう影響を与えていたのかということを、猪木さんや百瀬さんと親交のあった大谷さんにうかがいたいんですよ。

大谷　親交といっていいのかわからないけど、確かにあの当時、百瀬さんや猪木さんを間近で見させていただいたよね。ただ、最初に言っておくと、その頃の記憶って毎日が目まぐるしくて自分の中でもまだ整理しきれてないから、もしかしたら記憶違いがあったりするかもしれない。だから、あらかじめその点は何とぞご容赦願いたいんだけど（苦笑）。

エグゼクティブ・プロデューサーって肩書きは猪木さんの自己申告らしいよ（笑）

――了解しました。まずはどういったきっかけで、百瀬さんや猪木さんとの親交が生まれたんですか？

大谷　百瀬さんがＰＲＩＤＥに関わりだしたのって、たしか正式にはＫＲＳ体制からＤＳＥに変わった『ＰＲＩＤＥ．５』からだと思うんだけど、その頃ってヒクソン戦の流れもあって、俺はけっこう高田さんを追っかけててさ。そのとき、どこかの中華料理店で高田さんの取材をしてたら、そこに百瀬さんが来たの。

――それは同じ席にってことですか？

大谷　そう。俺はそのとき、百瀬さんがどういう人なのか知らなかったんだよね。でも、俺は自分より一秒でも早く生まれた方は敬わないといけないって純日本的教育をされてきたから（笑）、まずは「お疲れさまでございます」って挨拶したら、百瀬さんは俺に「君、これは俺のぶんだけど召し上がれ」って、料理を取り分けたお皿をくれたの。その「召し上がれ」って言葉って凄い上品でしょ？

――そうですね。

大谷　パッと見、強烈な存在感のおじさんなのに「召し上がれ」だから、凄く上品な言葉を使う方だな、と思ってさ。それが初めて会ったときの印象。それから百瀬さんとは徐々に親しくなっていく過程で、事あるごとに「キレイな言葉を使わないとダメだぞ」って教えられたね。そこから俺は当時、谷川（貞治）さんが編集長をしてた『ＳＲＳ・ＤＸ』に関わってたから、いろいろやってるうちに百瀬さんと接する機会が増えてね。百瀬さんとか猪木さんの周りでなんかあると呼ばれるようになったの。

――要は百瀬さん、猪木さんのお付きみたいなかたちで。

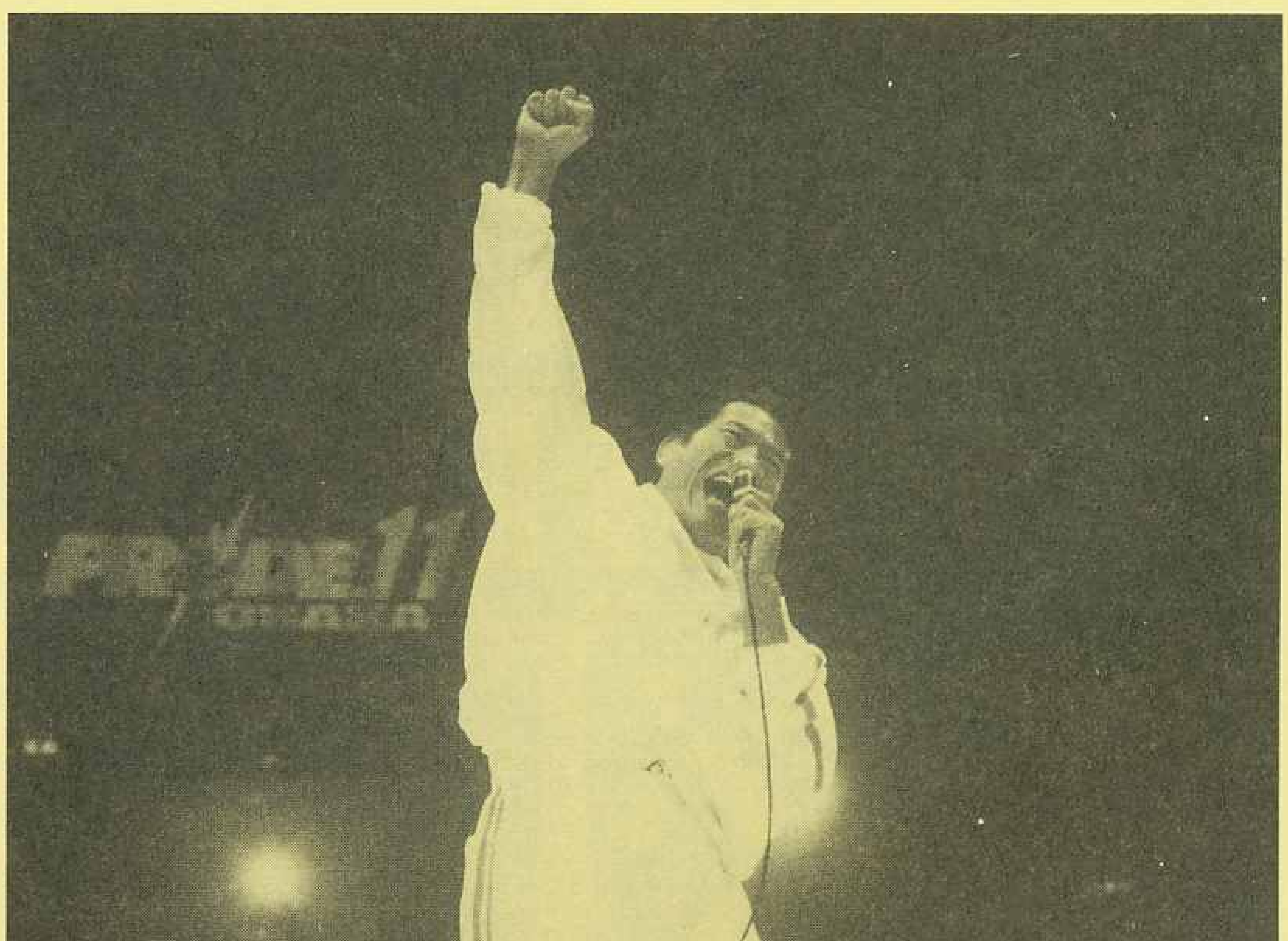
大谷　それはおこがましいけどね。だから、よく俺が運転手役というかさ、百瀬さんからお付きの方を通じて電話をいただいて「Ｓｈｏｗ、いまからアントンに会いに行くから一緒に行こう」って車を出してさ。一時期は、ほぼ毎日それをやってたね。

――猪木さんや百瀬さんと、毎日顔を合わせてるっていうのも凄いですね（笑）。

大谷　いや、そもそも百瀬さんは格闘技界の人じゃないから、基本的なこと以外はよくわかってなかったと思うんだよ。かえってそれがよかったんだろうし。でもね、なんか当時は、猪木さんも百瀬さんも、格闘技の仕事をしてるって感じはあんまりしなかったよね。

――どういう感じだったんですか？

大谷　真剣に遊んでる感じ（笑）。百瀬さんと猪木さんが会って、食事をしながら肝心な話もするんだけど、それは5分で済む話でさ。あとは大勢で2〜3時間わいわいやるわけよ。でも、じつはその5分以外



PRIDE中期、試合以上に盛り上がっていたのが休憩開けのアントン挨拶コーナー。「猪木コール」や「ダーッ!」の盛り上がりは、新日本をはるかに上回っていた。

の時間が人間関係には凄く大事だったり
言うらしいよ。「よくも悪くも百瀬さんは
ティをやったり、誕生会をやったり。
なりのものですよね（笑）。

の時間が人間関係には凄く大事だったりするじゃん。当然、仕事はちゃんとしてたし、俺も『SRS・DX』の発行人をしてた柳沢（忠之）さんとか谷川さんに「こんな感じのことを百瀬さんから猪木さんに伝えてもらうはずだから、Ｓｈｏｗも頭の中で把握しとけよ」とか言われてね。

――なるほど。で、そもそも猪木さんをPRIDEに呼んだのが百瀬さんなんですよね？

大谷　呼んだっていうか、百瀬さんはPRIDEにおいて、猪木さんの首に縄をつけていた人だよね（笑）。

――それは猪木さんに何かをお願いするときに、谷川さんや榊原さんから話すよりも、百瀬さんから話したほうがいいってことですか？

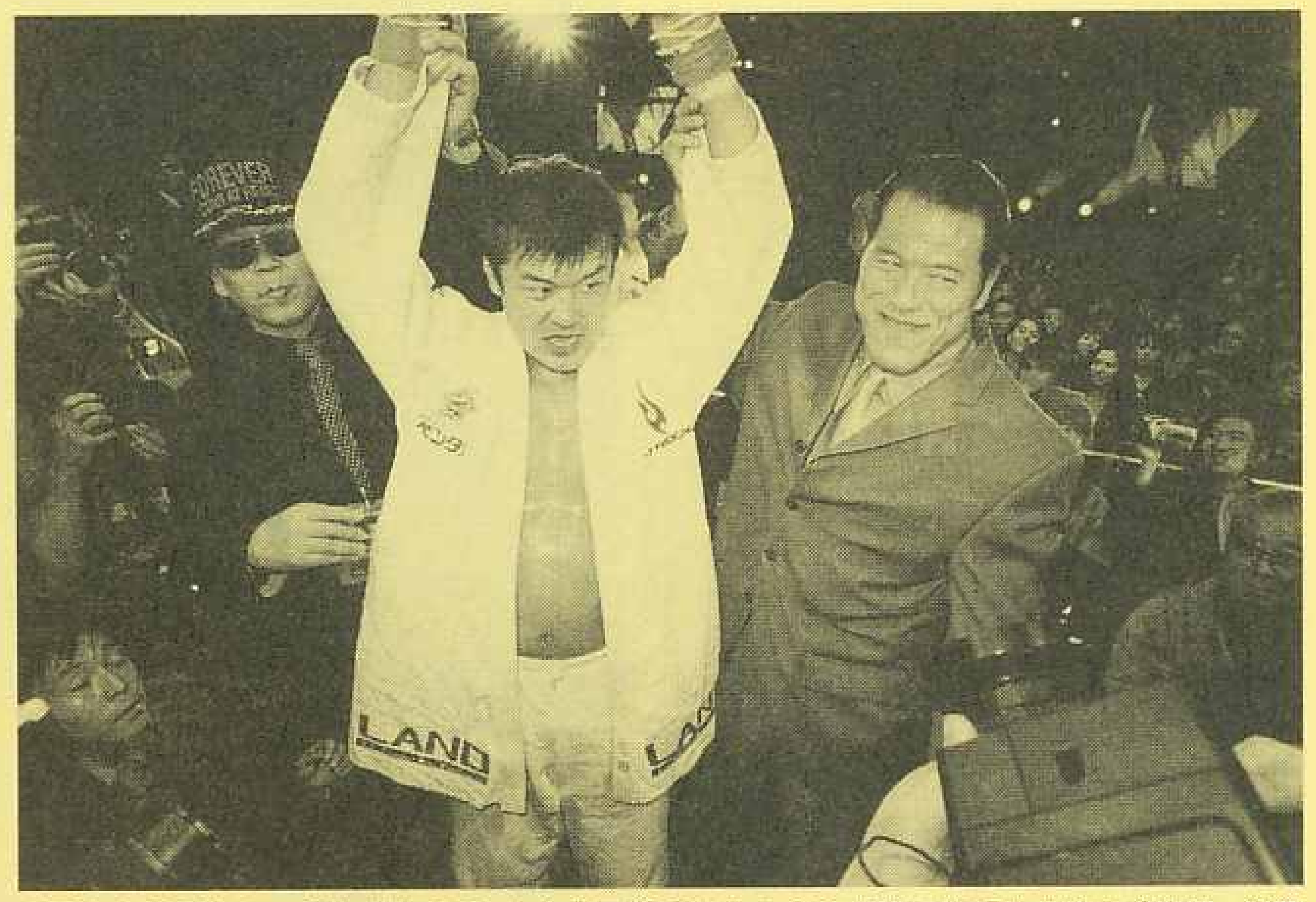
大谷　そうそう。谷川さんは石井館長といろんなことを話す人だったからさ、K―1だけやってたら谷川さんだけで事足りるんだろうけど、とくに2001年からはPRIDEやK―1を集約して、今度は地上波で『猪木祭り』をやろうとしたときに、百瀬さんのほうから猪木さんに話をして、業界をみんなで盛り上げていこうっていう役割をしてたよね。で、猪木さんは当時、藤田和之、石澤常光といったところと話をつけられる距離にいる人だったから、そういう選手をPRIDEに出そうとするとき、百瀬さんから「アントン頼むよ」って言ってもらうと、話がスムーズに進むってことだったんでしょう。

――では、猪木さんにとって百瀬さんっていうのはどういう人だったんですか？

大谷　「俺を踊らせてくれる人」だったんじゃない？

――踊らせてくれる人、ですか？

大谷　うん。猪木さんが最近、親しい人に言うらしいよ。「よくも悪くも百瀬さんは俺を踊らせてくれた。誰か俺を踊らせてくれるような人はいないのかよ」って。いま猪木さんはIGFを立ち上げて、周囲の方々も目一杯頑張ってるけど、猪木さんは自分をいい意味でもっともっと神輿に乗せて、調子に乗せてくれる人を求めてるのかもしれないね。


活躍した選手をリングサイドでアントンと百瀬氏がたたえる中期PRIDEおなじみの光景。後期の高田延彦統括本部長以上というか、ある意味、選手以上に目立つ存在だった。

――猪木さんは全盛期には新間寿さんがいたり、現役末期には永島のオヤジがいたり、常に自分を盛り立ててくれる人が必要なんでしょうね。

大谷　その役をこれから宮戸（優光）さんがやってくれるのか期待してるんだけど、まさにそうだよね。

――で、百瀬さん自身もアントニオ猪木っていうスターをプロデュースするのが好きだったみたいですね。詩集の出版パーティをやったり、誕生会をやったり。

PRIDEにとってのアントニオ猪木と百瀬博教

大谷　百瀬さんは「アントン、アントン！」って呼んで、ホント蜜月って感じでね。この二人の縁はどうやったら切れるんだろうっていうくらいの感じだったよ。

――それこそ親友みたいな感じでもあったわけですか。

大谷　親友というか悪友というか（笑）。結果的に大きな仕事をやってるんだけど、仕事を根詰めてやってる感じはしなかった。業界全体もそういうノリで、ワーッと盛り上がって、PRIDEとか『猪木祭り』ができたんじゃないかな。

――そういう実力者が「なんかデカいことしようか」って言って、ホントにやっちゃうみたいな。

大谷　その最たるものが、猪木軍 vs K―1をやった2001年の『猪木祭り』だよね。でも、あれはホントにメチャクチャで大変だったなぁ（しみじみ）。

――オーちゃん（小川直也）が出る出ないで、最後まで揉めて、藤田和之がケガで出られなくなって、一向にカードが決まらなかったんですよね（笑）。

大谷　そうそう。大晦日に『猪木祭り』があって、その1週間前の12月23日に福岡でPRIDEがあったんだけど、その時点でも全然カードが決まってなくてね。試合前のイベントに佐竹（雅昭）が出てきて「俺にやらせてください」みたいに宣言したりしてさ。

――『猪木祭り』といえば、2003年のズンドコが有名ですけど、2001年もかなりのものですよね（笑）。

大谷　だって、猪木軍 vs K―1っていう企画なのに、小川も藤田も出ないってことで、猪木軍の大将がいないんだもん。でも、初めて大晦日にTBSのゴールデンで放送される大会なわけじゃん。それなのに猪木軍の大将不在じゃ関係各所に申し訳が立たないから、苦肉の策で、一時は「ガイ・メッツアーにマスクを被らせて、タイガーマスクとして出そう」って話もあったもんなぁ。

――ガイ・メッツアーがタイガーマスクに変身！　なんか、そんな話もありましたねえ！

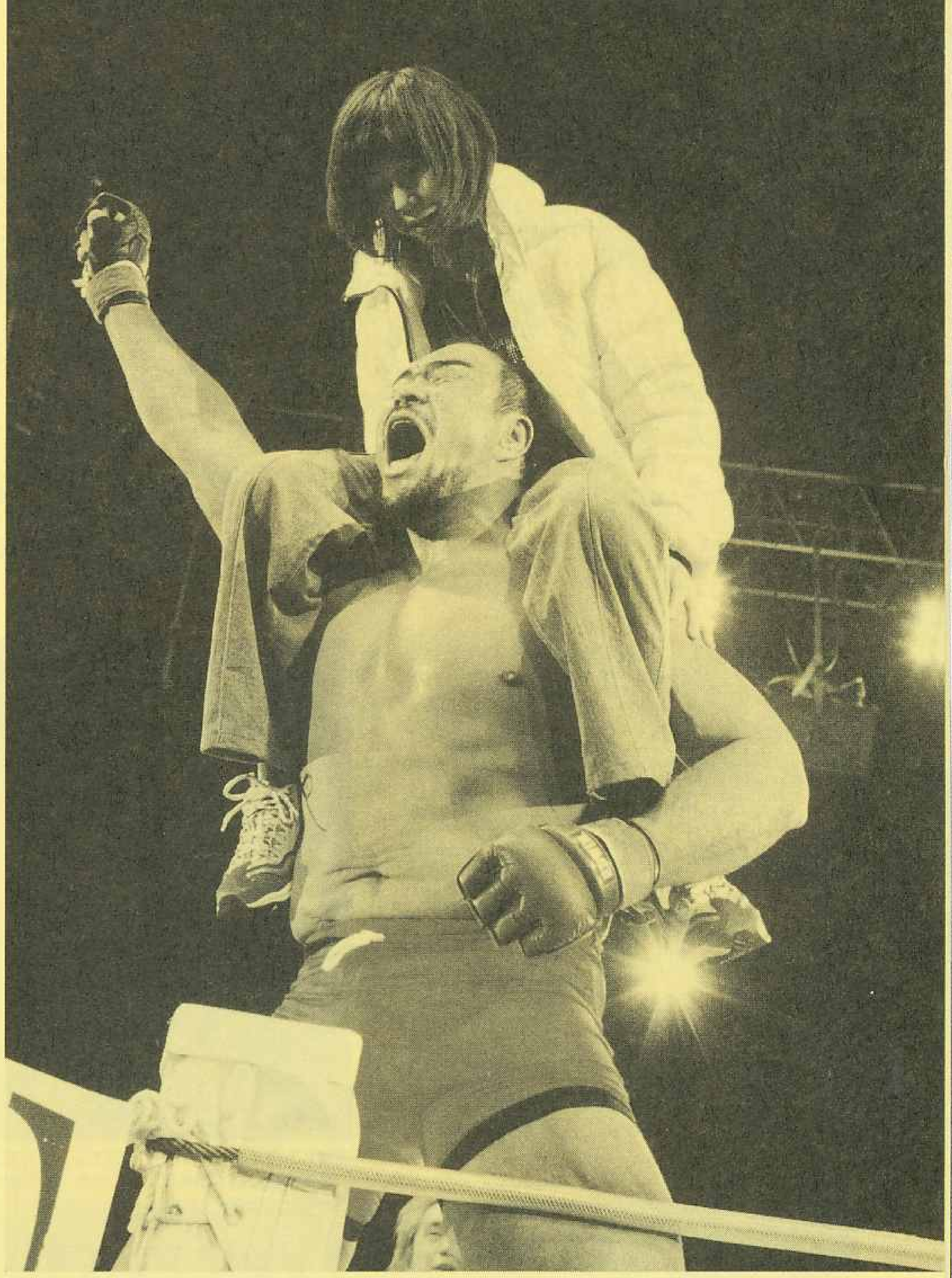
大谷　それがたしかクリスマスイブだったよ。猪木さんはPRIDE福岡大会のあと、大阪に行って街宣車に乗って『猪木祭り』の宣伝活動をして、大阪から新幹線に乗って東京に戻ったんだけど、その新幹線内で百瀬さんから猪木さんに、「メッツアーにマスクを被らせて出す」ってことを話してもらって、猪木さんの承諾を得るっていう手はずだったの。

――凄い展開ですね（笑）。

大谷　俺も一緒に新幹線に乗ってたからさ、柳沢さんから「おまえからタイガーマスクの話を振って、必ず百瀬さんに猪木さんの承諾を取ってもらえよ」って言われてね。結局、なんでタイガーマスクがなくなったのかはわからないけど、最終的にやっさん（安田忠夫）をメインにしようってことになったんだよね。

――あれは、なんで安田 vs バンナになった

猪木さんは「百瀬さんは俺を踊らせてくれたんだ」って言ってたよね



一時はどうなるかと思われた2001年の『猪木祭り』だが、急きょメインに抜擢された安田忠夫がバンナ相手に感動的な勝利！　このとき以来、アントンは安田を気に入っているのだ。

んですか？

大谷　もう安田しかいないだろってことじゃない？　あのときTBSは早くからやっさんと娘の親子を追いかけてたし、そこにドラマはあったからね。あれはたしか猪木さんが新宿の中央公園で年末恒例のホームレスへの炊き出しをやって、そのあとに猪木さんが、百瀬さんや俺らがいるところでやっさんに電話するんだよ。ちょうどいま俺らがいる京王プラザホテルのレストラン『樹林』でね。で、猪木さんがやっさんに「取組が変わる。バンナとやってくれ」って言ってさ。このマッチメイクのことを「取組」っていう言い方が、もの凄く猪木さんらしくて（笑）。もう、あのときはムチャクチャだったよね。

——そのムチャクチャな年末の一部始終を、大谷さんは猪木さんや百瀬さんの間近で目撃してたわけですね。

大谷　そう。猪木さんもなかなかメンバーが決まらなくて、つらそうだったよ。たしか、あれは12月20日だったと思うけど、あるホテルのバーで、猪木さんがUFOの川村（龍夫）社長と小川の『猪木祭り』参戦について、最後の会談を持ったんだよ。そして、同じホテルのレストランには、百瀬さんが会談の結果報告を待っててね。

——それはまた凄いシチュエーションですね。

大谷　結局、その会談は物別れに終わっちゃって、オーちゃんの『猪木祭り』参戦はなくなっちゃったんだよね。そのあと猪木さんは百瀬さんのいるレストランのほうに来て、「これからどうするか」っていう話になってさ。俺は同じ店内にある別の席でそれを遠目に見守ってたんだけど、その途中で猪木さんがいきなり立ち上がって、出口のほうに行っちゃったの。そのとき、俺は百瀬さんに「Ｓｈｏｗ、おまえアントンについてけ」って言われて、よくわからない状態でついてったら、猪木さんはもの凄く複雑な表情でトイレに入っていってさ。たぶん猪木さんは悔しかったんだろうね。

——というと？

大谷　要は大会名が『猪木祭り』で、企画は猪木軍vsK−1なのに、肝心の猪木軍がまったく集まらないわけじゃん。そういうジレンマがあって。猪木さんにしてみたら、みんなが神輿を担いでくれて、気持ちよくやれるかと思ったら、嫌な思いばっかりしたんじゃない？　だから猪木さん、その翌日になぜか髙田道場で会見を開いて「誰もやらないなら俺がやる」って言いだしたでしょう。

——ああ、そんなこともありましたね！　あれは本気で言ってたんですか。

大谷　本気っていうか、もうヤケクソだよね（笑）。「俺が伸されりゃいいんだろ」って言ってたから。

——凄い責任の取り方ですよね。

大谷　猪木さんとしては、大晦日なんだから、あんまりシリアスにガチンコ勝負とかじゃなくて、とにかくお祭りにしたいって思いが最初からあったんだよ。だから、猪木軍の人選で揉める前は、自分がエキシビションで当時、TBS系列で放送してたウルトラマンと闘うとか、そういうことをいっぱい考えてたよね。

——猪木さんらしい、笑えるネタをいっぱい考えてたんですね（笑）。

大谷　極上の笑えるネタね。最終的にはジャイシルとサスケが出てきて、紅白仮面を卍固めで仕留めたりしてたけど、そういう遊びをいろいろやりたかったんだよ。やっさんが、バンナ戦決定の記者会見で寅さんの格好で出てきたけど、あれも猪木さんのアイデアで、ホントはあの格好で大晦日も入場させて、セコンドに佐藤蛾次郎さんがつくはずだった、とかさ（笑）。

——そういえば蛾次郎いましたね（笑）。

大谷　でも、やっさんがメインイベントになっちゃったからさ。さすがに猪木軍vsK−1の大将戦で、セコンドが佐藤蛾次郎ってわけにもいかないから（笑）。結局、もう蛾次郎さんをブッキングしちゃったし、せっかくだからってリングサイド最前列で観てもらってたもんね。

——猪木さんが『猪木祭り』で本当にやりたかったのは、ウルトラマンや紅白仮面と闘ったり、佐藤蛾次郎をセコンドにつけたりすることだったとは驚きですね（笑）。

大谷　でも、あのときはホントにいろんなことがあったからさ、最後にやっさんが勝ったときは、「ヤッターッ！　これですべて終わるぅ～！」って、俺もリングサイドで大泣きしたもんね。ムチャクチャだったけど、最高のかたちで終わってさ、神がかり的なところがあったよね。

——ホントにあの成功は奇跡的だったん

安田に寅さんの格好させて、佐藤蛾次郎をセコンドにつけるのは猪木さんのアイデア

ですね。

で、だからこそ猪木さんも協力を惜しまな

さんが浦安のヘリポートに向かうとき、俺

ぞーーッ！」でしたもんね。

パラシュートで飛ぶ前に猪木さんは「百瀬さんのために飛ぶ」って言ってたね

ですね。

大谷　こっちはほとんどPTSD（心的外傷）に陥って、冗談抜きでバラさん（榊原信行氏）から「Ｓｈｏｗ、そんなにのめり込むなよ」って言われたもん（苦笑）。あ、あの頃、石井館長が『オールナイトニッポン』のDJをやっててさ。

——ありましたね！

大谷　よく俺も谷川さんと一緒に出させていただいたんだけど、年が明けて、正月に石井館長がハワイに行かれるってことで、谷川さんと二人で大晦日の話をしたりしながら『オールナイトニッポン』をやったもんね（笑）。

——谷川さんと二人で『オールナイトニッポン』（笑）。

大谷　でさ、今度はその夏に国立競技場で『Ｄｙｎａｍｉｔｅ！』をやったじゃん。あのとき俺は、百瀬さんと猪木さんの絆を凄く感じたんだよね。

——どういったところで？

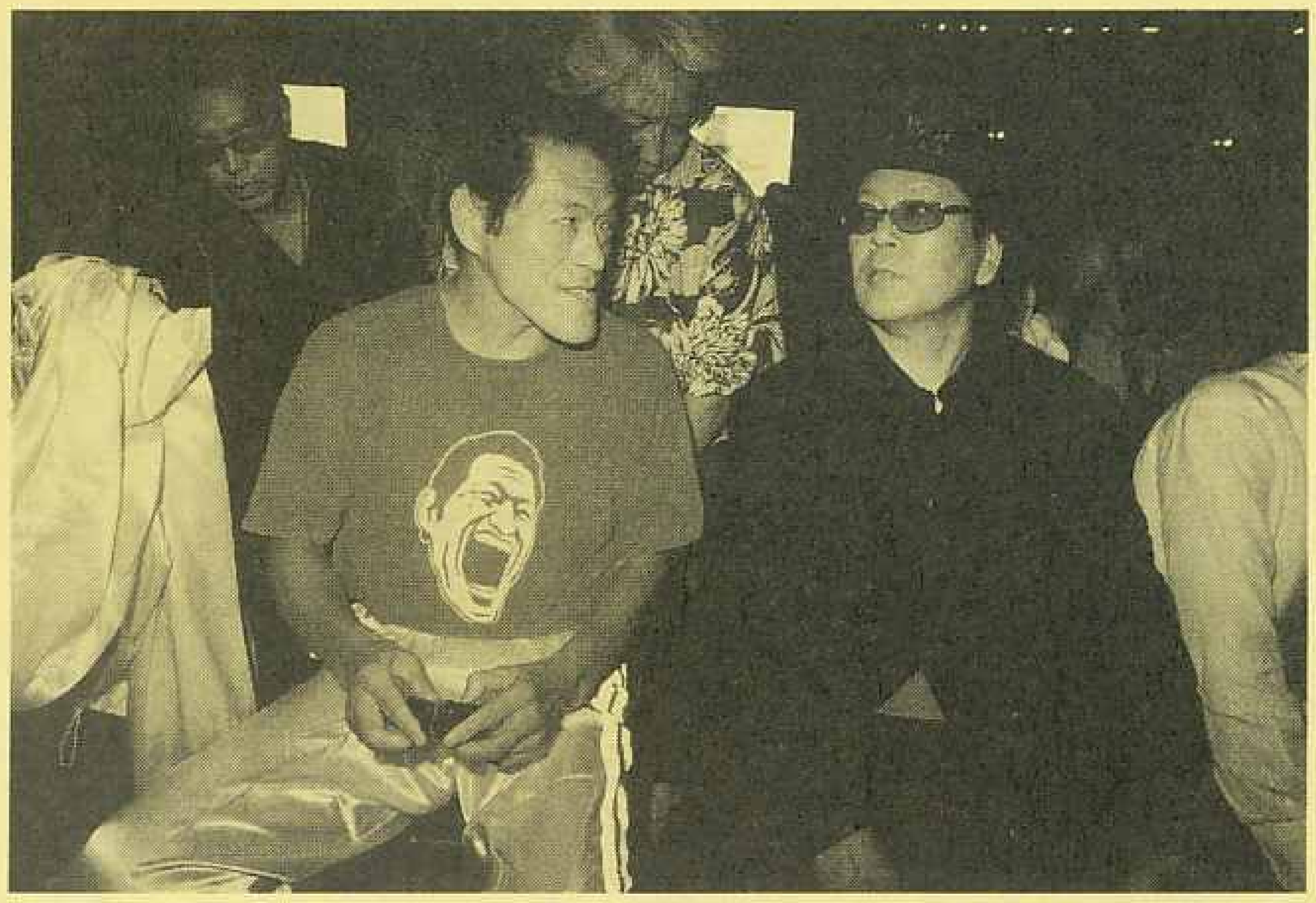
大谷　あのとき猪木さんが、ヘリコプターからダイビングして、パラシュートで国立に降り立ったじゃん。あれをやる承諾を猪木さんからとったのが百瀬さんだったけど、当初、猪木さんは『Ｄｙｎａｍｉｔｅ！』を開催することには賛成してなかったんじゃないかな。

——そうなんですか!? それは同時期に『ＬＥＧＥＮＤ』があるからってことですか？

大谷　そうじゃなくて、『猪木祭り』っていうのはさ、自分の名前がついたイベントで、だからこそ猪木さんも協力を惜しまなかったわけじゃん。でも、『Ｄｙｎａｍｉｔｅ！』っていうのはK―1とPRIDEが協力してやるイベントで、猪木さん的には直接は関係ないだろう、みたいなさ。

——そうですね、PRIDEのエグゼクティブ・プロデューサーとはいえども。

大谷　要は「K―1のイベントだろ？」みたいなね。猪木さん的には石井館長の功績はこれ以上ないくらいに認めつつも、だからこそ譲れない一線があったりしたんだろうし。そこを百瀬さんがうまくまとめたんだけど、当日、国立競技場から猪木さんが浦安のヘリポートに向かうとき、俺も一緒の車で行ったのよ。その車内で猪木さんは「俺はこの『Ｄｙｎａｍｉｔｅ！』にどこまで協力していいのか……」って感じだったね。


国立競技場で行なわれた『Dynamite!』で、アントン総帥がパラシュート降り立ち、リング上で挨拶をしたあとのショット。「百瀬さんのために今日は飛ぶ」という言葉どおり、二人は笑顔で談笑していたのだった。

PRIDEにとってのアントニオ猪木と百瀬博教

——飛ぶ直前でも、まだそういう状態だったんですか。

大谷　凄い複雑な心境だって言ってた。そのあと「でも、百瀬さんが、俺にどうしてもやってくれって言ったから、俺は今日、百瀬さんのために飛ぶから」って言ったんだよ。

——へえ、そうなんですか。

大谷　で、浦安のヘリポートに着いて。猪木さんが腕時計を外して、半分ジョークで「Ｓｈｏｗくん、これ形見に取っといてくれ」って言ってね（笑）。猪木さんがヘリコプターに乗るところを見届けて、俺はすぐに乗ってきた車で国立競技場に戻ったの。そしたら、ちょうど猪木さんが降ってくる前に到着できたんだけど、あのときパラシュートで降りてきた猪木さんがマイクを持って「今日はPRIDEのリングに〝ヘリ下って〟まいりました」って、ダジャレまじりで言ったんだよね。

——いつ何時でもダジャレは忘れないのはさすがですね（笑）。

大谷　でも、このとき「『Ｄｙｎａｍｉｔｅ！』のリング」じゃなくて「PRIDEのリング」って言ったんだよ。これは、言い間違えたんじゃなくて、わざと言ったというか、無意識に出ちゃったんだと思う。『Ｄｙｎａｍｉｔｅ！』に協力してるわけじゃない。俺はPRIDEのリング、つまり百瀬さんのリングに協力した」ってことなんだと思うよ。

——なるほど。確かに猪木さんのマイク第一声は「馬鹿野郎——ッ！　俺は怒ってるぞ——ッ！」でしたもんね。

大谷　結局、そのあと2003年の大晦日でグチャグチャになって袂を分かっちゃったけど、そうなる前までは、俺は凄くいい関係だなと思ってた。あの頃の猪木さんと百瀬さんっていうのは、あるときは三越の前にライオン像があるんだけど、夜中にそこまで行って二人でまたがって写真撮ったりさ（笑）。還暦前後の著名人が何をやってるんだって感じだけど、常にそんな感じで。俺は一緒にいて、大人の遊びを教わってるような感じだったな。

——もの凄いお金を使った真剣な遊びというか。

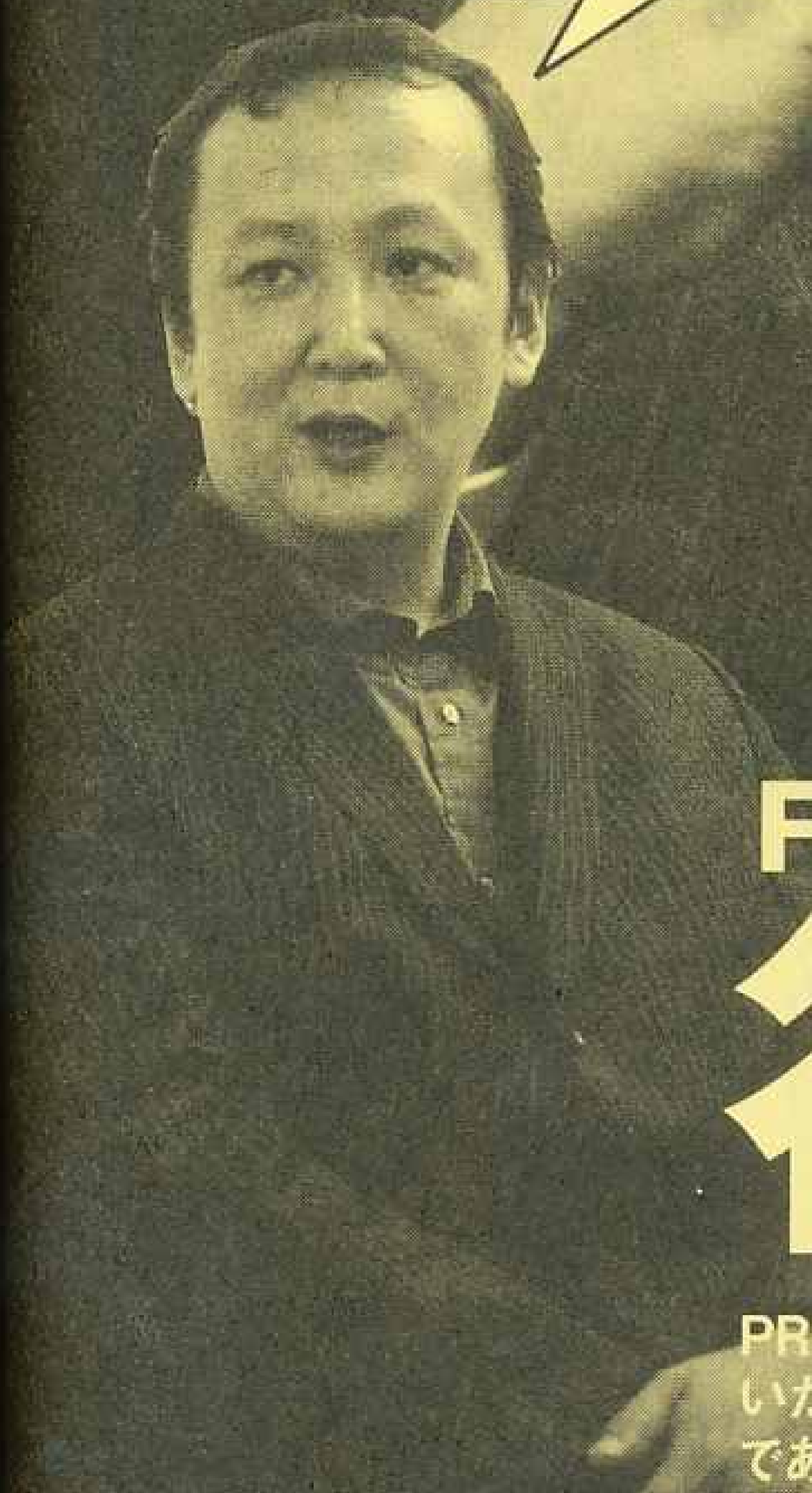
大谷　だからさ、PRIDEなんかもその延長だったと思うよ。大人が真剣に遊んで、あれだけのイベントをやってさ。百瀬さんって、祭りの神輿を出したりするのが好きだったでしょ？　そして猪木さんは神輿に乗るのが好きだった。そんな感じで、毎回、わっしょいわっしょいやってたのが、PRIDEでの猪木さんと百瀬さんなんだと思うよ。

【08年10月6日／都内・京王プラザホテル『樹林』にて収録】


しょう・おおたに・やすあき■数々のプロレス・格闘技書籍の監修を務める「闘想家（車田正美先生命名）」。あの田村潔司と腹を割って話せる数少ない人間の一人でもある。

〝黒魔術師〟サダハルンバが語る 榊原黒魔術





FEG代表 谷川貞治

PRIDEの最大のライバルであったサダハルンバはPRIDEをどう見ていたのか。いまや、“谷川黒魔術”というワードが定着しつつあるマット界であるが、そのサダハルンバにPRIDEで繰り広げられてきた“榊原黒魔術”を斬ってもらった! そこから浮き上がるPRIDEの姿とはいったい!?

聞き手／ジャン斉藤　撮影／乾晋也、平工幸雄

――谷川さん、今回は「PRIDEは何を変えたのか?」というテーマでお話を聞かせてください。

谷川　何を変えたのか……。ホントにね、PRIDEのことについては、いいこともイヤなこともすべて忘れて、もう振り返ることさえもしてないいんだけど。忘れちゃったよぉ。

――まるで大恋愛の果てのような口ぶりですねぇ。

谷川　何を変えたんだろうね。……ま、ボクの中で、深く考えたわけじゃなくて、インスピレーションで思いついたのは、いい意味でのK-1の対立概念であり、そしてプロレスの代わりだという感じがしますね。PRIDEは〝新しいプロレス〟だという感じがしました。

――確かに、それまでプロレスが内包していた魅力を根こそぎPRIDEが奪い取った感はありましたね。

谷川　うん。だから、何よりもPRIDEが変えたものって、プロレスそのものだと思うよ。

――なんかPRIDEが始まって以降、谷川さんってプロレスへの興味を失なっていったように感じたんですけども。

谷川　そうだねぇ………、っていうか、完全に吹っ切れましたよ、プロレスに!!

――なんですか、その〝吹っ切れた〟という表現は(笑)。

谷川　いや、ボクはもともとね、猪木さんのことが凄く好きだったし、プロレス自体に深い愛情は常に持っていたんだけど、もう闘魂三銃士(橋本真也、武藤敬司、蝶野正洋)の時代からプロレスはあまり観なくなったんだよね。それはなぜかというと、忙しくなったのもあるけど、ボクが一番好きなのは〝灰色のプロレス〟が凄く好きな

ガチンコ自体が好きなんじゃなくて ガチンコによって生まれる感情が好き

の。つまり、長州vs藤波とか、猪木さんが維新軍やら国際軍団とやったりとか、怒りが見えるプロレスが一番好きだったの。

—なるほどそんな憧憬があるから、試合前にいまいち表情が冴えなかった所（英男）くんに「顔がゼロ点！」とかってダメ出ししたりするんですね。

谷川 そうそう。昔から感情が見えるプロレスが大好きで、それは猪木さんのプロレスはもちろんだけど、昭和のプロレスの中にはよく見ることができたんだけどね。でも、だんだんとそういった試合がなくなっていったからねぇ。

—そういう感情的なものって、ガチンコの場だからこそ浮き上がりやすいというのはありますね。

谷川 それはあるよねぇ〜。感情表現としてのガチンコだよね。だから、ボクはガチンコ自体が好きなんじゃなくて、ガチンコをやることによって生まれる感情が好きなの。やっぱり、感情ってガチンコをやることによって凄く出やすいんですよ。K−1甲子園でも、負けた選手はみんな泣いてるじゃん。あれは彼らなりのガチンコを味わったうえでの感情だから。

—ガチンコだからなんでもおもしろいというのはボクもないんですね。

谷川 うん。好きなのはガチンコの感情であって、ただガチンコの試合が好きじゃないの。だからボクがPRIDEで好きな試合というのは、あたりまえのようにホイスvs桜庭なんだけど、そのホイスvs桜庭もガチンコの感情と、試合内容が見事にリンクしたから好きなんだよ。

—どちらかがもし欠けていたら、名勝負足りえてなかったでしょうね。

谷川 うん。あの試合はみんなあたりまえのようにベストバウトとして挙げるじゃない。で、もう一方で高田延彦vs田村潔司も好きなんだわ！

—納得です！ ただ、試合のクオリティでいうと、1ラウンドが終わったときにブーイングが発生したじゃないですか。膠着気味なところもあって。

谷川 うん。出てたねぇ。でもね、あの試合のポイントは、試合のクオリティじゃないんだよ。二人の感情そのものを見なくちゃならなかったし、結末もドラマチックだった。あんな試合をやられたら、そりゃあプロレスの人気は落ちるよ。だって、PRIDEのほうがよっぽどプロレスだったもん。だからPRIDEの一番の功績は、総合格闘技のレベルを上げたということだけじゃなくて、プロレスが見せてきた感情のガチンコ性を、たとえば柔道家とかでも見せやすくなったというか、そういう場を作ったことが凄いんだよね。



サダハルンバが以前からラブコールを送っているのが佐藤大輔。“感情のガチンコ性”を引き出す要素として、PRIDEでは佐藤氏によって煽りVという一つの文化が生み出された。

—仮にPRIDEがなかったとしても、プロレスがPRIDEの代わりにあの魅力を持続していたかというと……。

谷川 それは絶対にないだろうね。ホントは失なわれていくはずだったけど、それを受け継いだのがPRIDEの功績だと思ってる。だから、総合格闘技を競技というふうにしていくのも凄く大切だし、試合のレベルを上げていくというのも絶対になきゃいけないんだけど、感情のガチンコ性というかドラマ性というものをどういうふうに見せていくのか。主催者やら、イベント側がどう見せていくか。そこにやっぱりこのジャンルが栄えるヒントがあると思いますね。だから、UFCの試合を観てて思うのは、ボクの興味はもうあの巨大なマーケットであり、ビジネスの構造だけなんですよ。

—ビジネスとしての興味はUFCにはあるけども。

谷川 うん。もちろんUFCでもリアリティショーとか独自の感情の見せ方があったりするんだろうけど。ボクはやっぱりPRIDEのやり方のほうが好きですよね。うらやましいと思ったのは、やっぱり『kamipro』ではさんざん言ってるけど、佐藤大輔という存在なんだよ。それはなぜかというと、佐藤大輔は感情の表現がうまいから。昔から古舘伊知郎の実況だったり、ターザン山本の『週刊プロレス』だったり、この業界には伝え手の名手がいたでしょ？

—いわゆる触媒ってヤツですね。

谷川 それが現在では佐藤大輔の映像だと思うんだよ。それはやっぱりガチンコをやってるからおもしろいんじゃなくて、いわゆる佐藤大輔の表現の仕方がおもしろいんだよね。

—これからの格闘技を考えるうえでも、そこは大きなポイントなのかもしれないですね。

谷川 うん。あとは感情のガチンコ性で言えば、プロレスラーの幻想をホントに引き継いだのってグレイシー一族だよね。

—グレイシーって、いまだにギミックとして通用してますね。

谷川 するする。グレイシーがプロレスラーに代わり、PRIDEがプロレスに代わったって感じですよね。だから、K−1はよりそれと比べると、本当に競技の世界なんだよ。ボクも一時PRIDEをお手伝いしてたんだけど、そこがうらやましいというところがあった。

—PRIDE的ドラマを演出できないのか？ と。

谷川 うん。だから、ボクが関わっていたときの『猪木祭り』でやった安田忠夫vsジェロム・レ・バンナなんて、自分たちの中で「してやったり」という感じなの。

—ああ、あれも感情の名勝負ですね。

谷川 バンナの相手に予定していた藤田和之がケガをしちゃって、小川直也には断られて、しょうがないから安田になったんだけど、あんなオッサンがバンナに勝ってしまう。そんな奇跡的なドラマはK−1の世界観で作るのは絶対に無理。だけど、それが総合格闘技だとできちゃうんだよなあ。

—何が違うんですかね。競技性だけではとても片づけられない気もしますけど。

谷川 どこが違うんだろうなあ……。

—誤解されるかもしれませんが、K−1の場合って、〝一敗の重み〟ってそんなにないですよね。

あの先を見ないお金の突っ込み方はホントにね、バラさんの性格だよね

谷川　あ～ぁ。そういうこともあるかもしれないね。総合格闘技だと、一回の負けが致命的だという印象が凄くある。そこはゲーム性と格闘技性の差かもしれないけど、K―1は負けてもいくらでもとりかえしがつくし、また頑張れば返り咲くなんて可能性も充分にあるでしょ。でも、総合格闘技って、一回負けただけで本当に落ちちゃうよね。

――ちょっとやそっとのことで敗戦を挽回するのは難しいですよね。

谷川　一敗の重みがあるってことは、つまりその勝負に求心力が生まれるし、ドラマ性に富みやすいってことだからね。PRIDEがおもしろいわけだよなあ。

――K―1からすると、そんなPRIDEはジャマじゃありませんでした？

谷川　それはないなあ。

――またまた、ご冗談は黒魔術だけにしてください。

谷川　ホントだよ～（無表情で）。

――でも、選手争奪戦でファイトマネーが高騰して大変だったじゃないですか。

谷川　ああ、確かにファイトマネーでの闘いは苦しかったですよ。苦しかったというか、PRIDEは先を見ない突っ込み方をするからさ。あれは大変だったな……うん。あれはジャマだったなあ（ボヤキ気味に）。

――ほら、やっぱりジャマだったじゃないですか！（笑）。

谷川　ホントにさ、PRIDEって「そんな選手になんで？」っていうようなお金の突っ込み方をするじゃない。それは凄いなと思ったね。あれはホントにね、バラさんの性格だよね。

――あの札の張り方は榊原さんにしかできない博打ですよね。

谷川　難しい、難しい。「ここだ！」ってときにボンと払っちゃう。後先考えない突っ込み方だもんね。どっかでボクなんかは計算しちゃうからさ。

――稀代のプロモーターって昔からいたと思うんですよ、力道山から始まって。たとえば石井館長というのは身近で見ていてどういうタイプでしたか？

谷川　館長はね、絶対に赤字を出さない人だった。館長はイベントを黒字にする人ですよ。で、館長の大きな特徴というのは、やっぱり空手の先生の出身ならではで、選手を育てようという意識が凄く強いね。で、バラさんなんかはべつにそんな格闘技自体は好きじゃないと思うんだけど、ファンの声を聞いてバンとやっちゃうんですよ。館長はそういう頭はしてないですね。試合を重ねて選手を強くしていって、どっかで大一番を組む感じだよね。

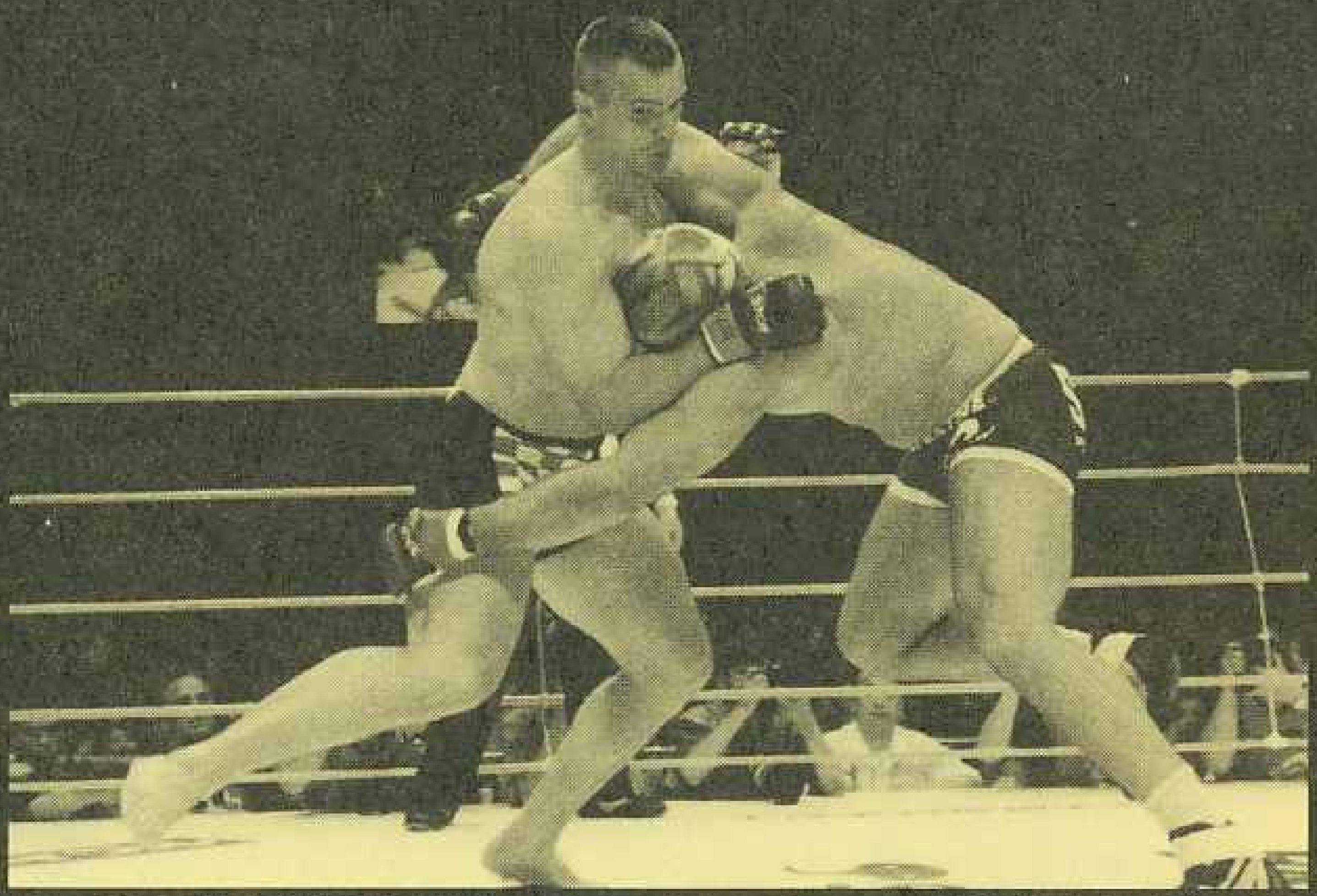
――その館長イズムは、いまのFEGにカラーとして残ってますよね。

谷川　うん。コッチは選手を育てようというマッチメイクだけど、バラさんの場合は最初から試練を与えることが多かったよね。ドカーっと大金突っ込んで、ドカーっと負けて、価値がなくなっちゃう。ある意味、PRIDEで負けた選手って、もうその時点で通用しなくなってるイメージがあるね。だからPRIDEの選手に手を出しづらいところがあったし、ドン・フライとかヒース・ヒーリングとかにしても、PRIDEで負けっちゃった選手というイメージがボクの中にあって、あんまりうまく使えなかった。

――PRIDEは厳しい使い方をしてましたよね。パウエル・ナツラなんて、デビュー戦の相手がノゲイラですよ？（笑）。

谷川　しかも、ナツラにはとんでもない大金を払ってやらせてるんだよ（目を丸くして）。

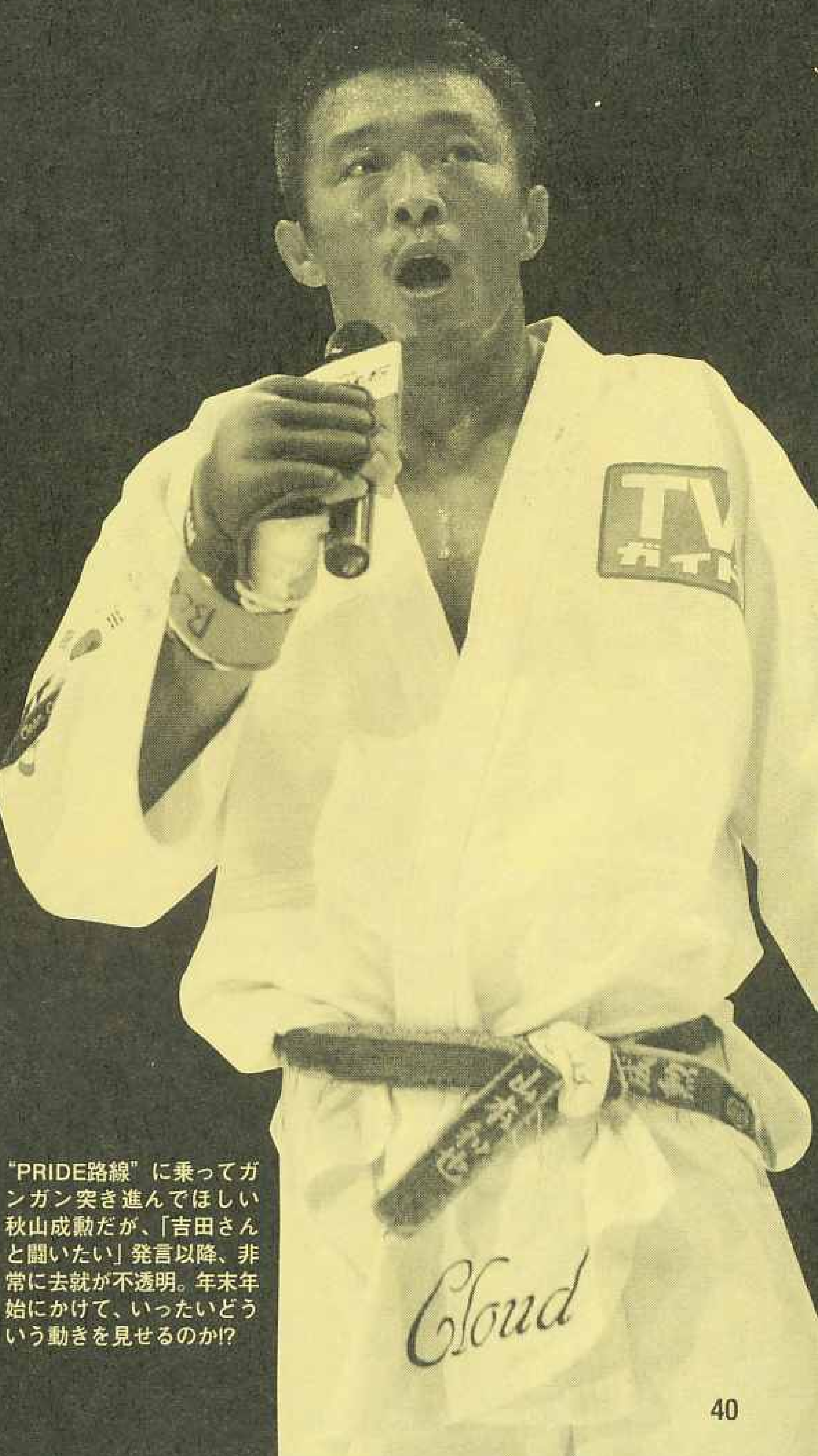
――でも、そんなマッチメイクがPRID



K-1vsPRIDE対立時代突入の引き金ともなったミルコのPRIDE電撃移籍。その初戦の相手が当時、百戦錬磨の活躍を見せていたヒーリングだ。見事TKO勝利を収めたミルコだが、初戦から敗戦の可能性もあるカードであるこのマッチメイクは、当時は危なすぎた！



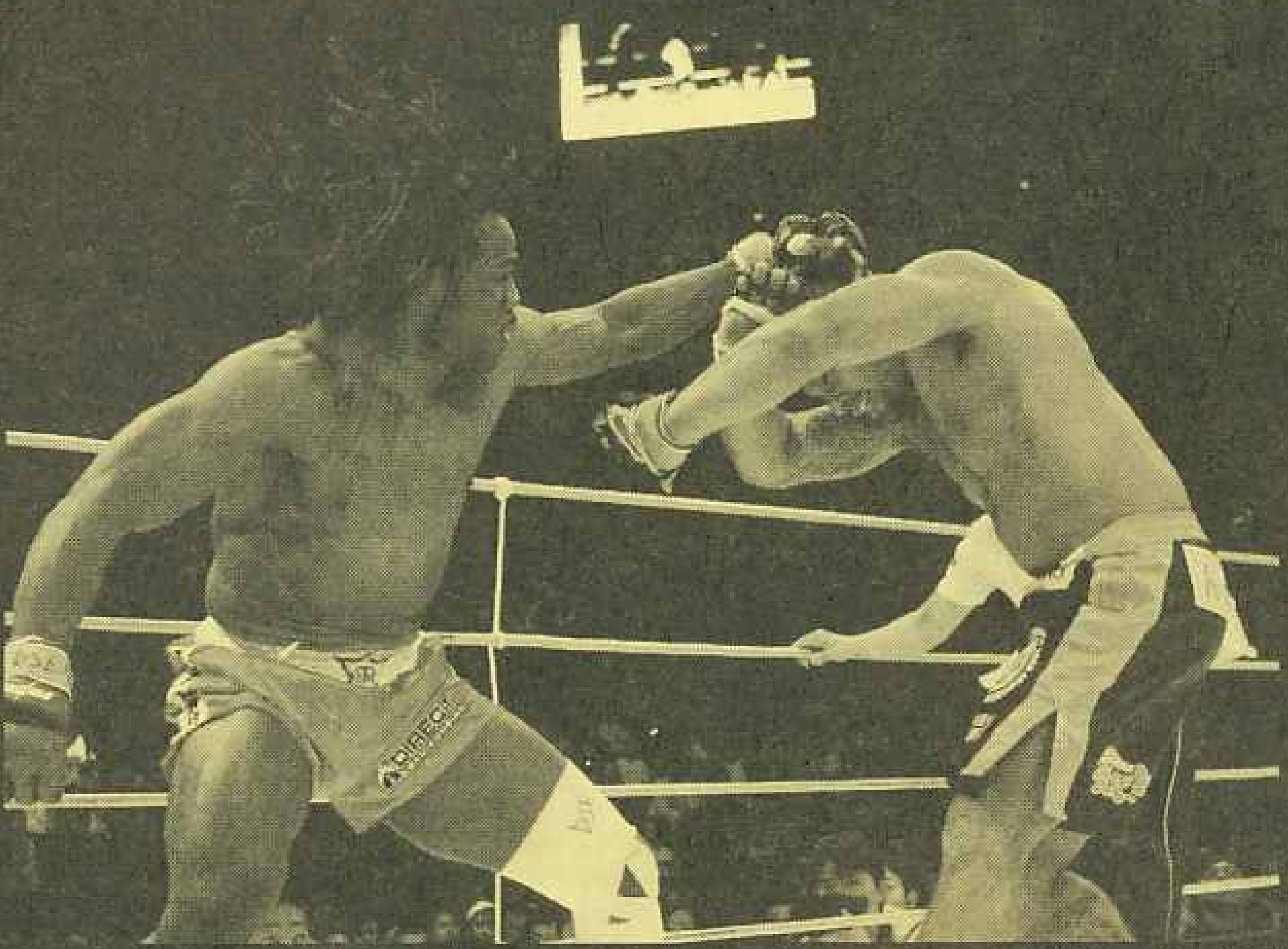
"韓国の柔道王"ユン・ドンシクが満を持して参戦したPRIDEだが、初戦は桜庭和志、さらにその後もランペイジ、ブスタマンチと、強豪ばかりと対戦。『HERO'S』移籍後は徐々に実力を発揮したが、PRIDEでは伸び悩んでいた感も。



"PRIDE路線"に乗ってガンガン突き進んでほしい秋山成勲だが、「吉田さんと闘いたい」発言以降、非常に去就が不透明。年末年始にかけて、いったいどういう動きを見せるのか!?

Eのブランドイメージを磨いていったところもあります。逆にFEGの場合は選手をうまく再生してますよね。たとえばユン・ドンシクとか。
谷川　そうそう。『HERO'S』なんかはPRIDEよりもファイトマネーは安かったけども、逆にユン・ドンシクを活かそう活かそうと、こんな才能があるヤツを活かそうっていう感じでやってたら生き返ったんですよ。FEGにはFEGなりの長所はあるんですよね。
――どっちにも短所もあり長所もありますよね。PRIDEの方法論だと、ソクジュみたいにガッとブレイクする場合もありますし。
谷川　あのときのソクジュに、アローナなんて怖くてぶつけられないよ！　あのマッチメイクはたいしたモンだよ～。
――そのうえホジェリオに勝った直後ですからねぇ。ちょっとはプロテクトしてもいいのに（笑）。
谷川　そうそうそう。ああいうセンスはボクらには全然ない感覚。やっぱり高いお金を払うんなら選手を育てたいんですよ。へんな話、成功例ではないかもしれないけど、金子賢やボビー・オロゴンだって育てたいんだよ、お金を払うかぎりは。曙だって一生懸命やってたんですよ。ボブ・サップを当てて、武蔵を当てて、角田さんを当ててという感じで。そんなボクからすると、ソクジュvsアローナなんて意味がわからない！
――リスキーすぎますよね。勝てばジャン

お金を払うかぎりは選手を育てたい。ソクジュvsアローナは意味がわからない


榊原黒魔術が見事に功を奏し、「キリンのほうが強い!」の名コメントとともに一気に大ブレイクした典型的な例がこのソクジュである！ PRIDE初戦がホジェリオ、その次がアローナと、いずれも強豪ながら衝撃的なKOを見せたのは記憶に新しい。


アトランタ五輪柔道金メダリスト・ナツラのPRIDE初参戦は、なんとvsノゲイラというこれまた大試練。寝技の攻防が期待されたが、勝負はなんと打撃決着でノゲイラの勝利。しかし予想以上の好勝負にナツラの評価もはなまる状態。これぞ榊原黒魔術の真骨頂か。

プアップするけど。
谷川　あのバラさんの感覚というのはちょっと信じられない。そこがPRIDEがK-1と別れたときにうまく作用したよね。だってそれまでのPRIDEって、僕らと同じ感覚だったもん。
――谷川さんたちと別れてからのPRIDEは〝明日なき暴走感〟があふれ出てきました。ミルコのPRIDE移籍第一戦がヒース・ヒーリングって、谷川さんからするとありえないですよね？
谷川　ありえない！「んあ～、ミルコをどうするつもりなの？」って感じでしたよ。だって、ボクらが関わっているときのミルコは、ルールを変えてヴァンダレイと闘わせたりとか、永田選手を呼んだりとか、そういう経験を踏んでいってだんだんと強くなったと思うんだよ。勝たせて、勝たせて、勝たせて、「オレ、世界で一番強いんじゃないか」と思わせた。でも、あの日を境に、突然ミルコは暴走してたもんね～。
――その後の試合ペースも凄かったですよね。そう考えると、DREAMの青木真也の扱い方もその片鱗を感じますよね。
谷川　凄く感じる。青木くんとか川尻くんは〝PRIDEファイター〟って感じがするよね。
――あんなプロデュースはできないですか、谷川さんには。
谷川　できないなあ。
――逆にPRIDEイズムにのっとった選手で、FEGのカラーに染めたいなという選手っています？　さっきのユン・ドンシクみたいなタイプは。
谷川　FEGカラーねぇ。外国人で言えば、ちょっと頭に浮かんだのはメイヘムぐらいですね。
――確かに噛めば噛むほど、メイヘムは味が出そうですもんね。
谷川　メイヘムはブッチギリでスターになる可能性があるよ。あのおもしろさは、ジョシュ・バーネットを超えてると思うんだけどね。
――ジョシュはセルフ・プロデュースに走っちゃうときがありますからね。
谷川　育てればブッチギリのスターになる可能性があるのはメイヘムと、あとはエディ・アルバレスだなあ。でも、エディは強いヤツとやっても全然いいからなあ。逆にいうと、P路線に乗ってもらいたいのは、秋山くん！
――ホントですよ！　魔王って、マッチメイク自体にファンから反感を買ってしまうという、一番最悪のパターンに陥ってますからね。つまり、団体側が守ってるんじゃないかっていう。
谷川　そんなつもりはないんだけどなあ。いまの秋山くんに必要なのは、〝ソクジュvsアローナ〟のセンスだなあ。
――いまこそ魔王にPRIDEを！　という感じですね。今日はありがとうございました！

【08年9月4日／都内・ウラク青山にて収録】

谷川貞治が選ぶPRIDEベスト3

1	桜庭和志vs ホイス・グレイシー
2	髙田延彦vs 田村潔司
3	アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラvs ボブ・サップ　※正確には02.8.28『Dynamite!』での試合です

❶90年代、突如歴史に現われた幻想体グレイシーを誰が破るかという、一番ドンピシャなテーマに"サクちゃん"という最も遠い存在のキャラが結論を出した歴史に残る一戦! これを超えられるものはなかなかない! 僕はこういうの好きです。❷進化する総合格闘技とは無縁の試合だが、線でつながる大河ドラマと生の感情のガチンコが見られた試合。僕はこういうの好きです。❸総合格闘技の試合は、一般的にはわかりづらい。残酷だと言われがちだが、これぞ耐えて耐えて最後に逆転するという"風車の理論"が見られたプロレス的試合。僕、こういうの好きです。

いるのに、地上波はもちろん、スポ
金原 凄いメンバーだったよね。で
りゃガイジンはみんな行っちゃう
グスの業績も目に見えて落ちていっ
し、最高の環境だったよ。だから、選



“前田日明王国”リングスはPRIDEに滅ぼされたのか？

リングスはテレビとイメージ戦略でPRIDEに負けた

リングス最後のエース

金原弘光

PRIDEの影響を最も多く受けた格闘技団体として、真っ先に挙げられるのはやはりリングスだろう。アイブルを皮切りに、ダンヘン、ノゲイラ、アローナなど、チャンピオンが次々とPRIDEに流出。そして最後は団体休止に追い込まれたリングス。そんなリングス側から見たPRIDEを“リングス最後のエース”金ちゃんに語ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／平工幸雄、乾晋也

――今日は「PRIDEがリングスに与えた影響」というテーマでうかがいたいんですけど、金原さんはリングス時代、PRIDEをどう見ていました？

金原 最初の頃ってPRIDEはルールも定まってなかったじゃん。だから、初期は凄くつまらないイベントだと思ってたよね。もちろん髙田さんや桜庭に頑張ってほしいって気持ちはあったけど、ほかは膠着した試合も多かったし、途中で帰りたくなる試合もあったからね。

――玉石混淆でしたよね。

金原 だから、最初の頃はお客さんもそんなに入ってなかったし、ルールも確立されてなかったから、リングスにとって脅威じゃなかったし、俺自身、憧れもなかった。ただ、グローブを着けたバーリ・トゥードでやってたのは、うらやましかったよね。俺はキングダムでグローブ着けて試合してたのに、リングスはまだ掌底だったから、「掌底でやってる時代じゃないだろ」とは思ってたからさ。

――確かにリングスは99年まで掌底でしたからね。

金原 そういう点ではリングスは遅れてたよね。だから、それ以外ではPRIDEは脅威じゃなかったんだけど、やっぱりフジテレビがついたのが大きかったよね。とたんに華やかになって、露出も増えたからさ。リングスもWOWOWで放映してたけど、どうしても地味なイメージがあったからね。選手の実力ではなく、マスコミの露出で負けてるな、とは思ってたよ。

――リングスは強い選手がたくさん

第2回KOKはノゲイラ、ヒョードル、クートゥアーが出てたんだよ！

いるのに、地上波はもちろん、スポーツ新聞とかにもほとんど載りませんでしたからね。

金原　だから当時、桜庭の活躍を「凄いなぁ」って見てたけど、「リングスのほうが強い選手もいっぱいいるし、大変な世界なんだけどな～」っていつも思ってたよね。

—無差別級で化け物みたいな選手とやってたわけですからね。

金原　だって、グレイシーとやるより、ヘビー級のノゲイラとやるほうがずっとキツいわけじゃん。

—そうですよね。いま思うと、KOKトーナメントなんて信じられないほど強い選手がズラリと揃ってますもんね。

金原　そうだよ。ランディ・クートゥアーも出てたもんね。

—クートゥアーは準決勝敗退で、金原さんと同率3位ですもんね（笑）。

金原　そうだよ。俺と一緒だよ（笑）。

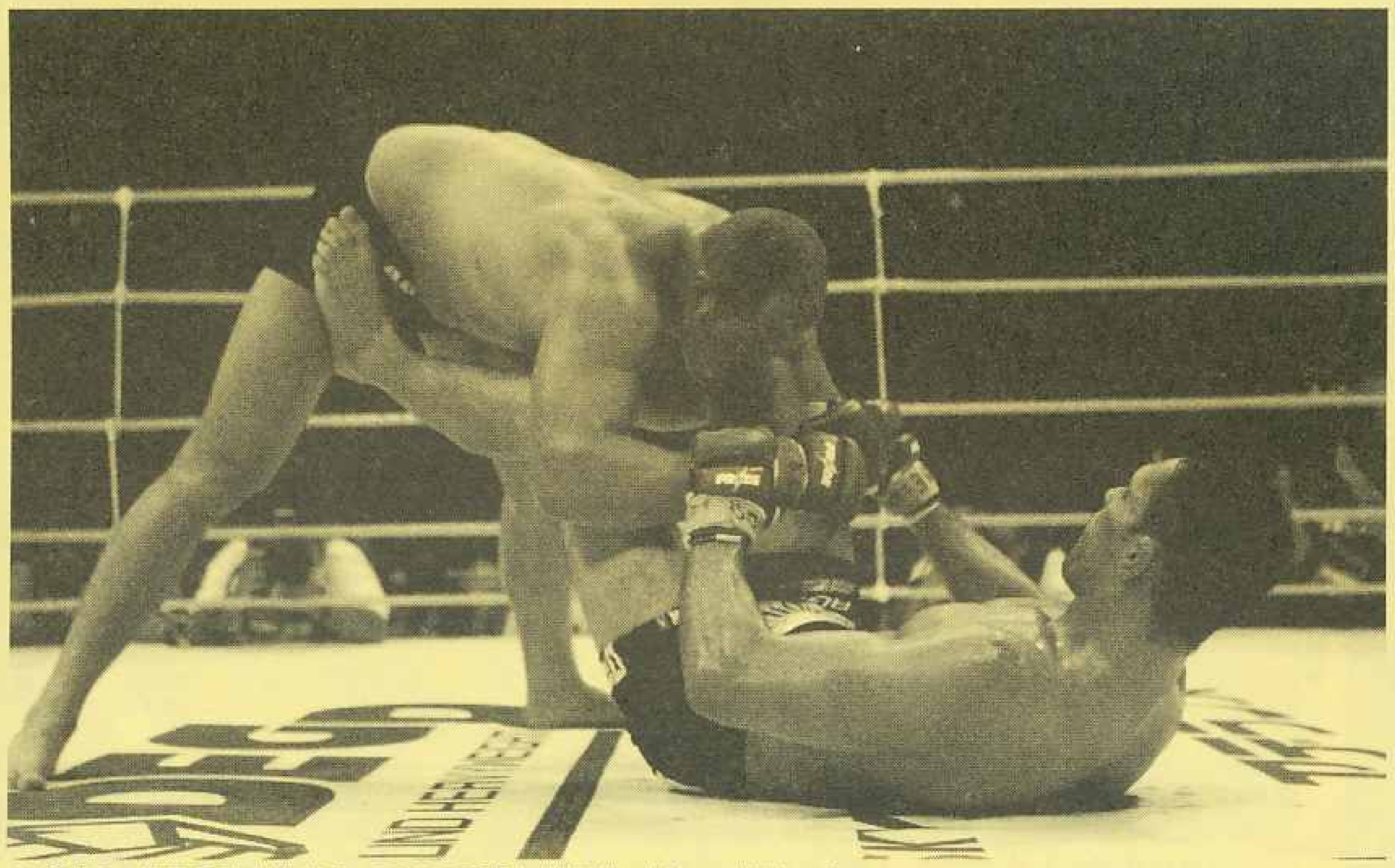
—その第2回KOKって、ノゲイラ、ヒョードル、クートゥアーがそろい踏みしてるんですよね（笑）。

金原　そんな3人が集まる大会ってないでしょ！

—UFCですら集められませんからね。

金原　そこに柔術の世界チャンピオンとかも出てたでしょ？

—そうですよね。いま『戦極』でホジャーだ、シャンジだって言ってますけど、KOKは普通に柔術世界王者は出てましたからね（笑）。



60億分の1世界最強を決める、PRIDEの頂上対決だったヒョードルvsノゲイラ。考えてみれば、ヒョードルはリングスの無差別とヘビーの二冠王、ノゲイラはリングスKOK優勝者。まさに「世界最強の男はリングスが決める!」のキャッチフレーズどおりの闘いがPRIDEで展開されていたのだ。

金原　凄いメンバーだったよね。でも、当時はPRIDEの試合のほうが凄いってイメージができちゃってたからさ。それはマスコミやテレビの影響力が強いよね。

—だからこそ、リングスに出てた強いガイジン選手がどんどんPRIDEに出るようになってしまって。

金原　そうだよね。当時、PRIDEのファイトマネーはべらぼうに高いって噂をみんなしてたもんね。そりゃガイジンはみんな行っちゃうよ。

—リングスを足がかりにして、PRIDEに行こうみたいな感じでしたもんね。

金原　だからノゲイラなんかもKOKで優勝したとき「次はPRIDEでサクバラとやりたい」とかコメント出してるんだよ。ノゲイラおまえ、何言ってんだよって思ったけどね。

—なんでリングスの会場でPRIDE出撃宣言してるんだっていう（笑）。

金原　そうそう。自分よりずっと小さい選手の名前出してさ。ダンヘンにしても、アローナにしても、みんな行っちゃったもんな。

—そのへんからリングスの業績も目に見えて落ちていったんですか？

金原　いや、リングスは固定ファンがいたから、ガイジンが抜けるぐらいどうってことなかったんだけど、日本人が一気に抜けたのが大きかったよね。

—2001年春に田村潔司、山本宜久、成瀬昌由の3選手が一気に抜けちゃいましたよね。

金原　あれは、俺も知らなかったからビックリしたよ。やっぱりみんなPRIDEで試合したい気持ちはあったのかな。隣の芝生は青く見えるって感じじゃないのかな？

—リングスに対する不満も溜まってたんでしょうかね。

金原　だから、俺なんかもPRIDEがうらやましく見えたけど、いま考えると、リングスの環境って凄く良かったと思うよね。やっぱり練習施設も充実してたし、ケガの保証もあるし、毎月給料もあるし、こんな素晴らしいシステムはないよ！

—それなのに、なんでみんな辞めちゃったんですかね？

金原　でも、当時はみんな年間6試合ぐらいやってたから、1試合あたりのファイトマネーに換算すると安いじゃん。それにケガしても毎大会休めなくてつらかったりしたからね。環境でいえば、タイ人の打撃コーチがいて、整体のトレーナー、ウェートのトレーナーもいるし、最高の環境だったよ。だから、選手にとっては闘う場よりも、前田道場のシステム、環境がなくなったことが痛いよ。でも、当時はそれに気づかないんだよね。

—リングスもなくなるぐらいだったら、前田軍としてPRIDEに乗り込んでほしかったですけどね。

金原　それをやってたら、盛り上がってただろうね。リングスとPRIDEも途中までは前田さんと百瀬（博教）さんのあいだで、話ができる関係だったんだけどね。でも、何かを境に急に悪くなっちゃったらしいんだよね。前田さんがPRIDEとうまく話ができたら、よかったと思うんだけどなあ。

—もしヒョードル、ノゲイラが前田軍としてPRIDEに出陣してたら、前田日明の名前ももっと上がってたんでしょうけどね。

金原　かなりの資産を残してただろうね（笑）。いや～、ホントにリングスはもったいなかったと思うよ。

【08年10月7日／川崎市・某中華料理店にて収録】

金原弘光が選ぶPRIDEベスト3

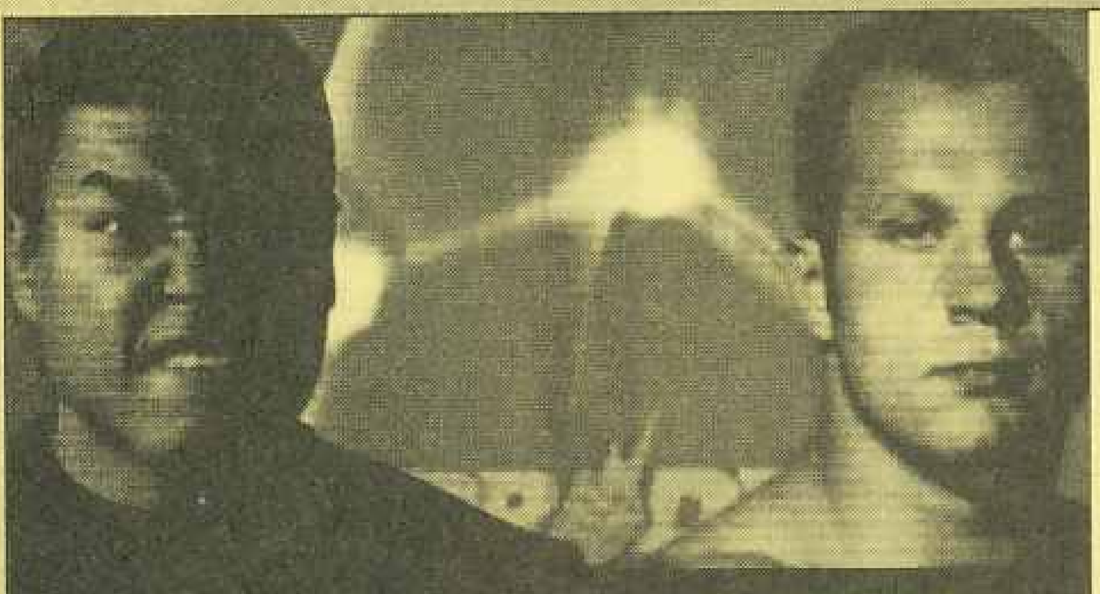
1. エメリヤーエンコ・ヒョードルvs ミルコ・クロコップ
2. アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラvs ミルコ・クロコップ
3. ヴァンダレイ・シウバvs ミルコ・クロコップ（1回目）

やっぱりPRIDEの試合で一番おもしろかったのは、ミルコ絡みの試合だよね。ミルコの試合はさ、とにかくいつ左ハイキックが決まって勝負がつくかわからないじゃん。一時も目が離せないんだよね。それにいつも緊張感も凄かった。その緊張感が最大に達したのが、ヒョードル戦じゃない？　あれはホントに俺が観てもハラハラドキドキしたからね。ノゲイラの逆転勝ちもよかったし、最初にシウバとやったときの他流試合っぽいところもよかった。やっぱりミルコはプロとして凄い選手だと思うよ。

PRIDE名作煽りV劇場!!

**PRIDEの功績の一つに、煽りVの飛躍的な注目度アップがある。
中でも"60億分の1煽りVアーティスト"佐藤大輔氏が手がけた作品群は、
いまもファンの心に焼きつく名作揃い。そんなPRIDE劇場を誌上プレイバック!**

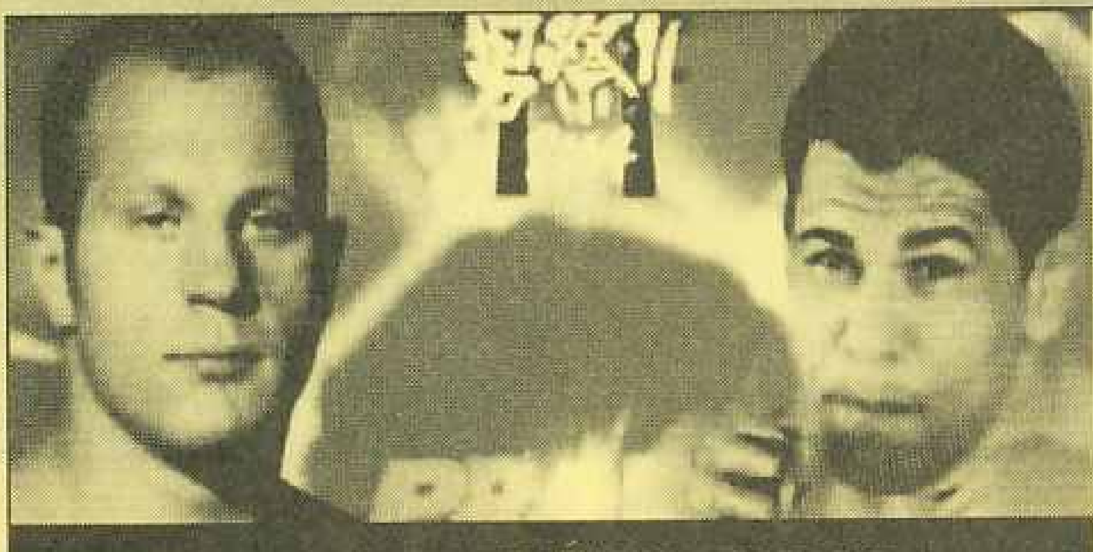
構成／真下義之



2004.8.15『PRIDE GRANDPRIX 2004 FINAL ROUND』
小川直也 vs エメリヤーエンコ・ヒョードル



「また夏がやってきてしまった……」。小川直也が銀メダルに終わったバルセロナ五輪を回想する叙情的な流れの中で、恐怖の"皇帝"ヒョードルが「あのパフォーマンスは下品すぎる」とハッスルポーズをキッパリ否定。『新世紀エヴァンゲリオン』の最終決戦前の曲も使用されるなど、瀬戸際の小川を「逃げちゃダメだ」とばかりに盛り上げまくった傑作V。



2004.12.31『PRIDE男祭り 2004 -SADAME-』
**エメリヤーエンコ・ヒョードル vs
アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ**



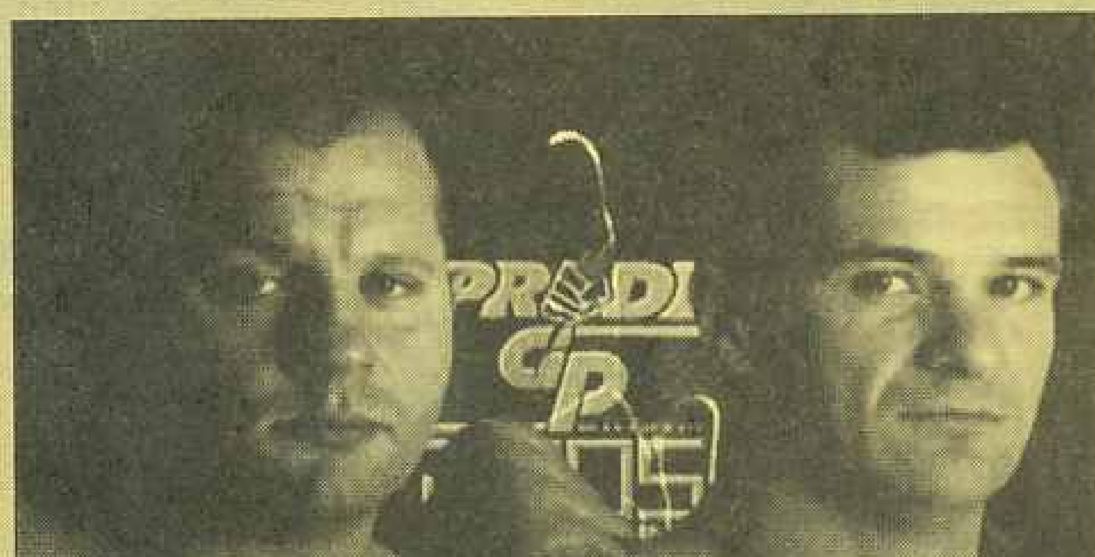
いまでは秋山成勲の入場テーマとして知られている『TIME TO SAY GOOD BYE』(サラ・ブライトマン) だが、もともと『PRIDE GP 2004』のテーマとして使用されたもの。"60億分の1"を決するこの試合のVでは、同曲をバックに南米のノゲイラと北の地のヒョードルという両雄が同い年という運命に着目し、後半は「最後の審判」として、第九の調べをバックに盛り上げまくる大晦日らしい逸品。



2005.6.26『PRIDE GRANDPRIX 2005 2nd ROUND』
桜庭和志 vs ヒカルド・アローナ



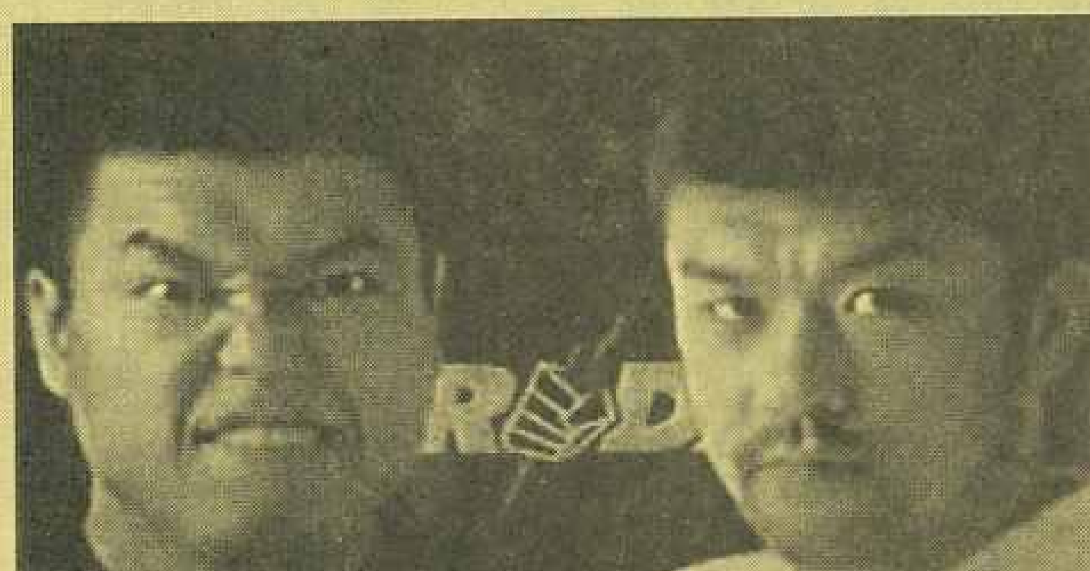
「桜庭和志という生き方」という直球なコピーと、BGMはFantastic Plastic Machineの『Reach For The Stars』という泣きのメロディライン。「おもしろい試合はしなくていい」と豪語する"勝利至上主義者"アローナと"ファンタジスタ"サクとのコントラストを際立たせたうえで、ラストは敗戦の予感に美しい夕焼けがカットイン。サクの内面とファン心理を絶妙にクロスオーバーさせた切なすぎる傑作だ。



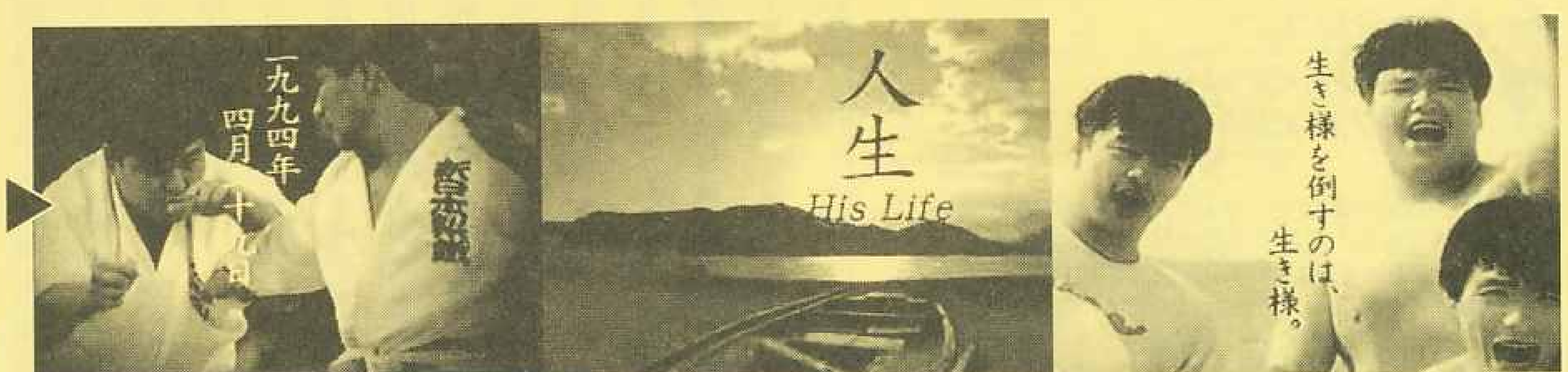
2005.08.28『PRIDE GRANDPRIX 2005 決勝戦』
エメリヤーエンコ・ヒョードル vs ミルコ・クロコップ



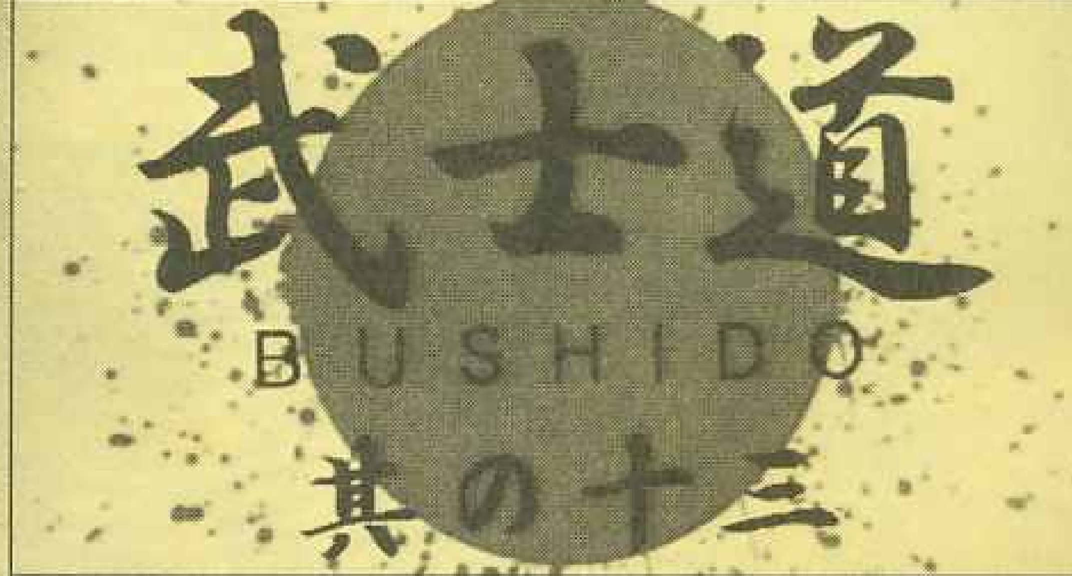
誰が見ても問答無用の"世界最高峰の舞台"だったPRIDE最盛期を象徴するこの試合の煽りVは、「ダダン、ダダン!」という映画『ターミネーター』のヘビーな旋律で、ミルコの人生劇場をクロアチアロケで丹念に追う。内戦と父の死という"生と死"のイメージが反復され、敗北を予期するような母の言葉など、ミルコの"闘う理由"を描ききった秀逸な4分34秒。



2005.12.31『PRIDE 男祭り 2005 頂-ITADAKI-』
小川直也 vs 吉田秀彦



柔道時代から約11年にわたる宿命の一戦の"光と影"。過激な舌戦のBGMはモーツァルトの『レクイエム』でスタート。プロレスを選んだ小川 (破壊王の墓参りシーンも登場) と真剣勝負を選んだ吉田の対比に、「生き様を倒すのは、生き様」のキメ言葉、さらに巌流島の夕陽とサディスティック・ミカ・バンド『黒船』が見事にハマり、観る者を震撼させた。



2006.11.5『PRIDE 武士道 -其の十三-』
PRIDE 武士道 オープニング



フジテレビショック以降、佐藤大輔氏による煽りVがファンのあいだで幻となっていたが、『PRIDE 武士道 -其の十三-』オープニングで、ナレーター・立木文彦氏の声とともに完全復活! やがてイベント名となる「やれんのか!」のコピーを軸に、ダイナミックなタイポグラフィと凄まじい高揚感で煽りまくり、"60億分の1煽りVアーティスト"の健在ぶりを証明した。



2006.12.31『PRIDE 男祭り 2006 -FUMETSU-』
田村潔司 vs ミノワマン



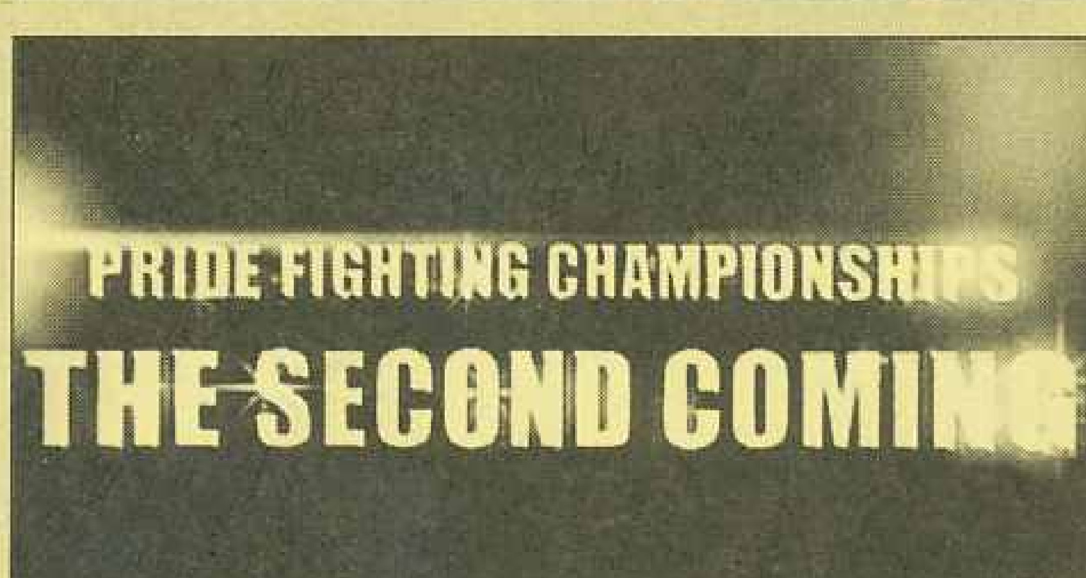
数々のトンデモ発言&奇行特訓の煽りVで人気者になった美濃輪が、ついに名前まで変えてしまった"変身"煽りV。「美濃輪の様子がおかしい」という伏線から、「超人になる手段」として「ミノワマン」誕生を煽りV内で突如宣言! いまでこそすっかりミノワマンな美濃輪だが、田村は困惑&会場はバカ受け。リングや入場と連動した煽りVの大成功例である。



2006.12.31『PRIDE 男祭り 2006 -FUMETSU-』
五味隆典 vs 石田光洋



「勝てない相手じゃない」という石田の会見の発言から、「いい子ぶってんじゃねぇ!」と一気に番長モードに突入した"ワル五味"の魅力が詰まった一作。ミディアムテンポの東京スカパラダイスオーケストラの『Just Little Bit of Your Soul』をバックに、佐藤氏が狙った「昭和スター同士のキャバレーのケンカ」的なムードで相手をコキ下ろし合う、正調の"大喧嘩"式煽りV。



2007.2.24『PRIDE.33 "THE SECOND COMING"』
PRIDEラスベガス大会 オープニング



PRIDEアメリカ進出第2弾のタイトルとなった『THE SECOND COMING』は、"キリストの再来"、"世界が終わる日"という不吉なイメージを含むことから、重々しい交響曲に乗せた"恐怖の大王"ヴァンダレイ・シウバの上陸を煽ったうえで、「The Cage is your world. Ring is the Universe(金網はあなたの世界、リングは宇宙)」とUFCを意識した強烈なメッセージを投げかけた。



2007.4.8『PRIDE.34』
PRIDE最終大会 オープニング



PRIDEの終幕を飾る大会オープニングは、ミラーボールとターンテーブルがクルクル回りつつ、『Do You Remember Rock' n' Roll Radio』(原曲はRAMONES、kissのカバー)に乗せ、名シーンが矢継ぎ早にカットアップ!『PRIDE.1』の高田vsヒクソンの会見からドン・フライと高山のどつき合い、ミルコ劇場に武士道まで、ポップかつ感動的なスタイルで、10年間を振り返ってみせた。





まだまだあるぞ!!
魅惑の煽りVワールド!

PRIDEの煽りVは、まだまだ紹介したいものが山ほどある。たとえば、バローニ&ランデルマン&コールマンの「筋肉って素晴らしい」「仲間って素晴らしい」筋肉3兄弟劇場や、ムリーロ・ニンジャが号泣しながら「母ちゃん、勝ったよ!」と報告する電話忍者ぶり(のちに相手が彼女に変更)。またドン・フライに「やれんのか!」を連呼して、"プライド男塾塾長"化させたのも煽りVの功績。そして、『PRIDE.34』の大会終了後に流れた選手のプライベートの素顔を集めた感動的エンディング。最後までファンの気持ちをくみ上げたPRIDEの煽りV。こうした熱量が総合格闘技の世界を大きく変質させたのは間違いない。

PRIDE 世界最高峰の大会コピー ほぼ完全リスト!!



『PRIDE・1』の「この戦いを見終わったら、20世紀も、もう終わっていい。」をはじめとして、大会ごとに刺激的なキャッチコピーをつけていたPRIDE。大会を象徴する一本の芯として、じつにさまざまな名コピーが誕生、そのあとの格闘技イベントにも影響を与えた各大会のコピー群をイッキにプレイバック!

構成/真下義之

この戦いを見終わったら、20世紀も、もう終わっていい。

▼1997・10・11『PRIDE・1』東京ドーム
「世紀の激突」と謳われた髙田延彦vsヒクソン・グレイシーという一戦を世紀末に表現した第1回にして屈指の名コピー。髙田の歴史的敗戦によって、PRIDEはスタートした。

最強を決めるのは、もう少し待ってくれないか。

▼1998・3・15『PRIDE・2』横浜アリーナ
当初はホイス・グレイシーvsマーク・ケアーが予定され、刺激的なコピーのポスターも複数用意されていたが、ホイスは欠場。代打にフランコ・シカティックが参戦した。

髙田延彦、という生き様。

▼1998・6・24『PRIDE・3』日本武道館
対ヒクソンの歴史的敗戦から約8カ月。髙田が柔術のカイル・ストゥージョン相手に復活戦に挑み、快勝。すでに発表されていた同年10月のヒクソンとの再戦に気勢を上げた。

3度目はない。

▼1998・10・11『PRIDE・4』東京ドーム
ヒクソンとの再戦に背水の陣で挑んだ髙田はスタンドの攻防で善戦も、最後は腕ひしぎ十字固めで敗戦。アレクサンダー大塚はマルコ・ファスに奇跡の勝利でファンは溜飲を下げた。

野獣の恐宴、名古屋に上陸。

▼1999・4・29『PRIDE・5』名古屋レインボーホール
PRIDE初の名古屋大会が開催。髙田がマーク・コールマンを撃破し、桜庭和志は強豪のビクトー・ベウフォートに完勝など、新章への突入を印象づける大会になった。

そういえば、あの、7の月。

▼1999・7・4『PRIDE・6』横浜アリーナ
99年7月のノストラダムスの大予言にかけたコピーだが、小川直也が初参戦でゲーリー・グッドリッジに快勝、桜庭も連勝街道を驀進し、上昇ムードに拍車をかけた。

殴る。そこに顔があるから。折る。そこに腕があるから。

▼1999・9・12『PRIDE・7』横浜アリーナ
メインでは髙田vsアレクサンダー大塚の日本人対決が実現。桜庭はアンソニー・マシアスに快勝して通算6連勝、試合内容の評価もうなぎ上りでニューヒーローの期待が充満。

路上なら、警察ざた。

▼1999・11・21『PRIDE・8』有明コロシアム
グレイシー一族vs日本人の2連戦が実現。アレクはヘンゾに惜敗も、桜庭はホイラー相手に見事な圧勝劇、悲願のグレイシー超えをはたし、桜庭時代の到来を告げた。

みんな好き勝手に最強を名乗っている。そろそろ結論を出そうじゃないか。

▼2000・1・30『PRIDE GRANDPRIX 2000 開幕戦』東京ドーム
人気上昇中のPRIDEが、大仕掛けの最強決定トーナメントを東京ドームで開催。ついにホイス・グレイシーが初参戦、藤田和之や佐竹雅昭など豪華メンバーが話題に。

最強誕生。ついに結論が出る。

▼2000・5・1『PRIDE GRANDPRIX 2000 決勝戦』東京ドーム
PRIDE GPのトーナメント内で、ついに桜庭vsホイスが実現。ルール問題で紛糾したあと、90分にわたる大熱戦を制した桜庭が劇的TKO勝利。GP優勝はマーク・コールマン。

プライド、超バージョンアップ。

▼2000・6・4『PRIDE・9』名古屋レインボーホール
絶好調状態のPRIDEが名古屋に再上陸。ヒース・ヒーリングが初参戦し、ケンドー・カシンこと石澤常光も出現してハイアンに挑戦表明など、新展開の予感が満載。

格闘技テーマパークへようこそ。

▼2000・8・27『PRIDE・10』西武ドーム
桜庭はヘンゾに逆転一本勝利。石澤はハイアン・グレイシーに無惨なTKO負けなど、「格闘技テーマパーク」のコピーどおり、真夏の西武ドームで好勝負が続出した。

来まっせプライド 燃えてまっせ大阪。

▼2000・10・31『PRIDE・11』大阪城ホール
PRIDEは大阪初進出で小川vs佐竹という黄金カードを惜しげもなく実現!! あの桑田佳祐がゲストで弾き語り、チケットは大会前に完売など完全なイケイケ状態に突入。

総理、この男にも国民栄誉賞を。

▼2000・12・23『PRIDE・12』さいたまスーパーアリーナ
00年シドニー五輪の金メダル・高橋尚子の国民栄誉賞にかけたコピー。桜庭、藤田の2種のポスターが制作され、桜庭はハイアンに、藤田はギルバート・アイブルにそれぞれ勝利。

13か——とんでもないコトが起こらなきゃいいが。

▼2001・3・25『PRIDE・13』さいたまスーパーアリーナ
不吉な数字〝13〟を危惧したコピーだが、この大会から「4点ポジションでのヒザ蹴り」解禁に伴ない、連勝街道を走っていた桜庭がシウバにTKO負けのバッドエンディング。

※コピーなし(!?)

▼2001・5・27『PRIDE・14』横浜アリーナ
今回、徹底調査を行なうも、この大会の確定情報のみ得られず。ポスターは文字がタイポグラフィ的に多数表示し、「コピーはなかった」という説が有力。真相をお知りの方はご一報を!

7月29日は忘れずに、参議院選挙とPRIDE・15。

▼2001・7・29『PRIDE・15』さいたまスーパーアリーナ
参議院選挙との同日開催を逆手にとったコピーの大会は、ノゲイラがPRIDE初参戦、桜

プライド名物 マウントパンチや！

▼2001・9・24『PRIDE・16』大阪城ホール
パチパチパンチにかけたコピーの大阪大会。2戦目となるノゲイラがメインでGP優勝のコールマンと激突、劇的にタップ勝利を奪取。PRIDE新時代を予感させた。

大満足間違いなし。なんてったって東京ドーム。

▼2001・11・3『PRIDE・17』東京ドーム
東京ドームで桜庭がシウバにリベンジマッチに挑むも1R左肩脱臼で悪夢のレフェリーストップ。初参戦のミルコ・クロコップは、髙田相手に消化不良のドロー決着。

男の州に、最強の漢達がやってくる。

▼2001・12・23『PRIDE・18』マリンメッセ福岡
PRIDEが九州地方初上陸。メインでは高山がセーム・シュルトに玉砕負け、アレクはシウバに鼻骨骨折に追い込まれるも、日本人の健闘が光る好試合が続いた。

カードを見ればわかる。PRIDEの本気度！

▼2002・2・24『PRIDE・19』さいたまスーパーアリーナ
02年初大会は初参戦の田村潔司がシウバといきなり激突して壮絶KO負け、エンセン井上は引退試合でノゲイラと対戦など、"本気度"あふれるマッチメイクが並んだ。

二十の誓い　もっとぶっ壊します。

▼2002・4・28『PRIDE・20』横浜アリーナ
ナンバーシリーズ20回大会のメインは、ともに充実しまくりのシウバvsミルコが惜しげもなく実現。5R終了してドローも凄みのある攻防で魅了。第1試合にはボブ・サップが初登場。

こっちのスポーツはタマを蹴ってはイケマセン。

▼2002・6・23『PRIDE・21』さいたまスーパーアリーナ
02年日韓共催のワールドカップで日本列島が盛り上がる中、開催。メインではドン・フライと高山がPRIDE史に残るどつき合いを展開。第1試合では田村がサップに秒殺負け。

名古屋の皆さんお久しぶりです。相変わらずこんな事ばかりやっています。

▼2002・9・29『PRIDE・22』名古屋レインボーホール
DSEのおヒザ元、名古屋で2年ぶり開催。メインは兄・ヘンゾを破った大山峻護とハイアン・グレイシーが激突。ハイアンは一本勝利後も腕を離さず、大山を罵倒など無軌道な暴走ぶり。

「青春のエスペランサ」「UWFのジェームス・ディーン」「わがままなヒザ小僧」「平成の格闘王」「最強」「アイ・アム・プロレスラー」ありがとう、ありがとう。君と同じ時代に生きたことを誇りに思う。髙田延彦、ラストマッチ。

▼2002・11・24『PRIDE・23』東京ドーム
PRIDE誕生の功労者・髙田延彦引退試合が東京ドームで開催。髙田は、新弟子のように頭を丸めた田村にKO負け。メインの桜庭は花道で髙田を出迎えたあと、試合に挑んだ。

九州 急襲!!

▼2002・12・23『PRIDE・24』マリンメッセ福岡
PRIDEが1年ぶりに九州再上陸。メインではノゲイラがリングス時代に唯一の敗戦を喫した男、ダン・ヘンダーソンと対戦。一本勝利でキッチリとリベンジをはたした。

PRIDEは俺たちが守る。

▼2003・3・16『PRIDE・25』横浜アリーナ
年始に森下直人社長が亡くなるという大激震の中で開催。メインはヘビー級王者ノゲイラにヒョードルが挑み、判定勝利。桜庭はニーノ・"エルビス"・シェンブリに1RKO負け。

再生。

▼2003・6・8『PRIDE・26 REBORN』横浜アリーナ
"REBORN＝再生"を掲げ、榊原信行社長による新生PRIDEが本格スタート。ヒョードルは藤田に激勝。ミルコはヒーリングに完勝と両雄の対決の機運が高まった。

底辺か。てっぺんか。

▼2003・8・10『PRIDE GRANDPRIX 2003 開幕戦』さいたまスーパーアリーナ
ミドル級GPが初開催。3度目の正直とばかり、シウバと激突した桜庭は無念のKO負け。田村と吉田秀彦の緊張感あふれる日本人対決も実現、最後は吉田が袖車で一本勝利。

サムライに帰る道は無し。

▼2003・10・5『PRIDE武士道』さいたまスーパーアリーナ
日本人育成、中軽量級にスポットを当てる新ブランドが発進。日本vsグレイシー5対5対抗戦はグレイシーが3勝2敗で勝ち越し。緊急参戦のミルコはドス・カラスJrを秒殺。

最強、ただ一輪。

▼2003・11・9『PRIDE GRANDPRIX 2003 決勝戦』東京ドーム
ミドル級GP決勝は、吉田を破ったシウバがチャック・リデルを破ったジャクソンを下して優勝。ヘビー級暫定王者決定戦では、ノゲイラがミルコからドラマチックな逆転一本勝利。

本物の闘いは、ここにある。

▼2003・12・31『男祭り2003』さいたまスーパーアリーナ
三つ巴の大晦日戦争でもPRIDEはコピーどおりシリアス路線を貫く。吉田はデビュー戦の相手、ホイスに挑むもドロー。桜庭はアントニオ・ホジェリオ・ノゲイラに敗戦。

2004年、プライドは、アテネではなく大阪を選ばせていただきました。

▼2004・2・1『PRIDE・27 TRIUMPHAL RETURN』大阪城ホール
オリンピックイヤーのこの年、大阪から幕開けしたPRIDE。メインではミルコがロン・ウォーターマンから鮮やかなKO勝利で復活宣言。PRIDE GP出場に名乗りを挙げた。

世界へ。

▼2004・2・15『PRIDE武士道 ―其の弐―』横浜アリーナ
ミルコが前大会から中2週間で連戦に挑み、山本宜久からKO勝利。「世界」を意識した日本vsシュートボクセの3対3対抗戦は、大将戦でシウバが美濃輪を秒殺KO。

王者よ、美しく咲き誇れ。

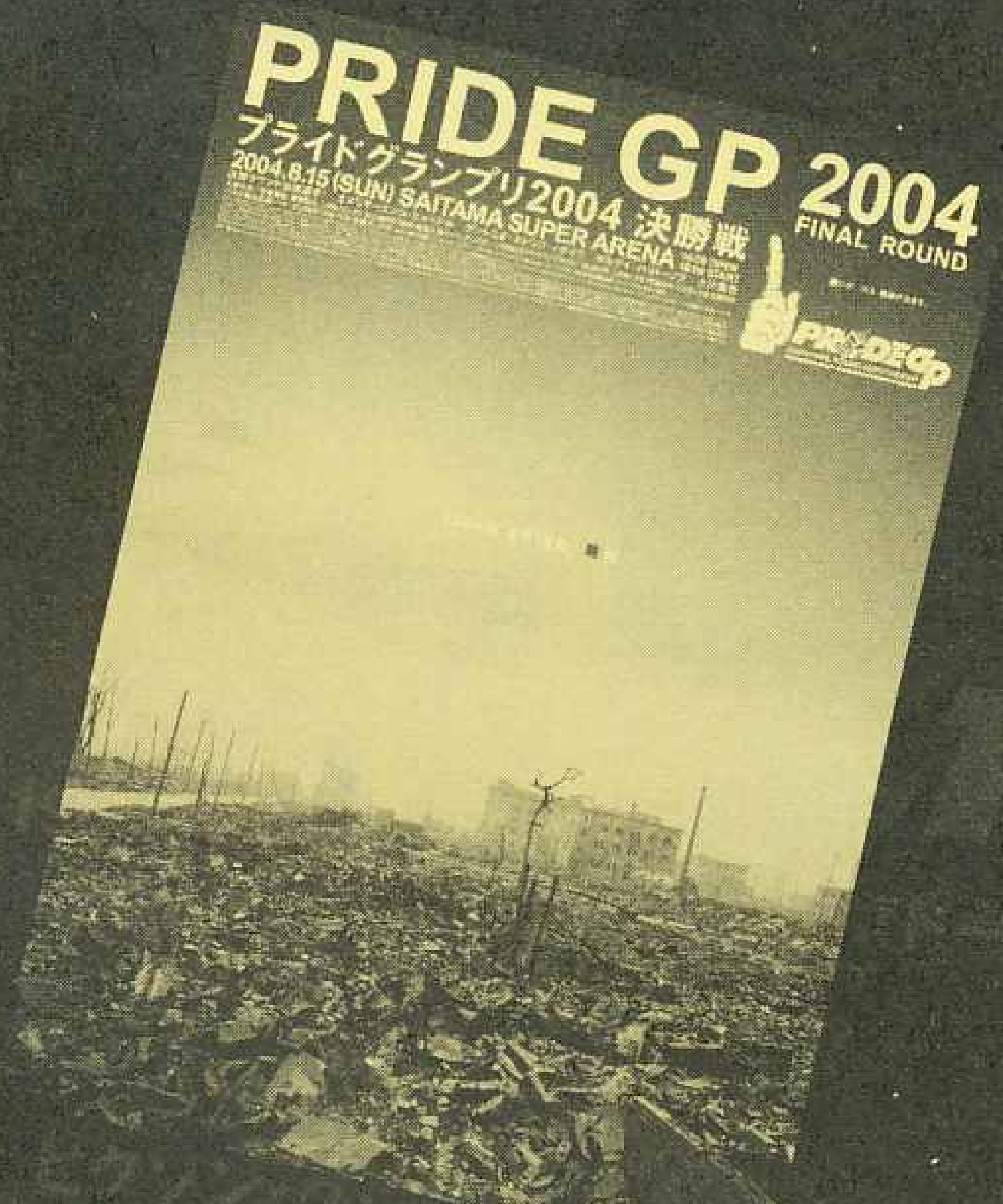
▼2004・4・25『PRIDE GRANDPRIX 2004 開幕戦』さいたまスーパーアリーナ
PRIDE GPに小川が緊急参戦！ ステファン・レコに勝利してのハッスルポーズで一躍、台風の目に。ミルコはランデルマンにまさかの1回戦負けなど波乱満載のスタート。

Who is REAL SAMURAI of the 21st century?

▼2004・5・23『PRIDE武士道 ―其の参―』横浜アリーナ
悪夢の敗戦から1カ月。ミルコが復帰戦で金原弘光に判定勝利。日本vsグレイシーの3対3対抗戦は、五味隆典がハウフ・グレイシーを6秒KOも、日本の1勝2敗という結果に。

死ンデモ、生キ残レ。

▼2004・6・20『PRIDE GRANDPRIX 2004 2nd ROUND』さいたまスーパーアリーナ
ジャイアント・シルバに勝利し、決勝に"生き残った"小川が人気爆発。ヒョードル、ノゲイラ、ハリトーノフら4強も決定。吉田は初参戦のマーク・ハントから一本勝利。



「こんなのあった?」と思った人は鋭い！　編集部から発掘された『PRIDE GRANDPRIX 2004決勝戦』ポスターは、開催日の8月15日と"終戦"をかけたイメージが問題となってお蔵入り。一部関係者にだけ配られた超レア品だ。

庭はクイントン・"ランペイジ"・ジャクソンに勝利して復活ののろし。

斬り捨て御免の左ハイ。ミルコ・クロコップ見参！

▼2004・7・19『PRIDE武士道 ―其の四―』名古屋レインボーホール
コピーのように武士道レギュラー状態のミルコが、大山峻護に秒殺勝利で完全復活。日本vsブラジリアン・トップチームの3対3対抗戦に出場した五味は3連続となるKO勝利。

父よ、我が右手に力を与えよ。母よ、我が左手に慈悲を与えよ。友よ、我が心に勇気を与えよ。愛する人よ、我が闘いを胸に刻め。

▼2004・8・15『PRIDE GRANDPRIX 2004 決勝戦』さいたまスーパーアリーナ
当時、PRIDE最高動員の4万7692人をマーク。小川はヒョードルに秒殺負けも、ハッスルポーズをキメて喝采を浴びた。決勝のノゲイラvsヒョードルは不慮のケガで無効試合に。

侍は、何処だ。

▼2004・10・14『PRIDE武士道 ―其の伍―』大阪城ホール
「武士道のエース」を自認する五味隆典が止まらない。チャールズ・〝クレイジー・ホース〟・ベネットを破り4大会連続の1R勝利。試合後は、大晦日の『男祭り』出場もアピール。

倒す誇り。倒れぬ誇り。

▼2004・10・31『PRIDE 28』さいたまスーパーアリーナ
年末の『男祭り』に向け、シウバはミドル級王座戦でジャクソンから劇的KO勝利。ミルコは初参戦のジョシュ・バーネットと対戦も、ジョシュが左肩脱臼のアクシデント。

男は、どうだ。

▼2004・12・31『PRIDE男祭り 2004 ―SADAME―』さいたまスーパーアリーナ
PRIDE GP決勝のヒョードルvsノゲイラは、ヒョードルが判定で〝60億分の1〟の座に。シウバと対戦予定の桜庭は緊急欠場で急きょ、シウバvsハントが実現し、両者とも〝男〟を見せた

SURVIVAL

▼2005・2・20『PRIDE・29 SURVIVAL』さいたまスーパーアリーナ
コピーのように、この年4月のミドル級GP出場をかけたサバイバルマッチが展開。メインでコールマンをKOしたミルコは、ヒョードルに対戦表明、頂上決戦の機運が再燃。

切り札は、どいつだ。

▼2005・4・3『PRIDE武士道 ―其の六―』横浜アリーナ
リングス時代、ヒョードルに唯一勝利した〝切り札〟高阪剛が〝皇帝〟と再戦、パウンドの嵐をしのぐもレフェリーストップ負け。美濃輪はギルバート・アイブルを秒殺して本格ブレイク。

2005年4月23日、ミドル級最強決定戦　大阪直撃。

▼2005・4・23『PRIDE GRANDPRIX 2005 開幕戦』大阪ドーム
05年のミドル級GPは大阪ドームで開幕。欠場が続いていた桜庭は初参戦のユン・ドンシクを秒殺して1回戦突破。吉田vsシウバは一進一退の攻防からシウバが判定勝利。

明日が見えない大人になるか。明日しか見えない若者でいるか。

▼2005・5・22『PRIDE武士道 ―其の七―』有明コロシアム
中軽量級に特化した〝新生・武士道〟が再出発。日本人vs外国人のマッチメイクは5勝5敗も、五味はルイス・アゼレードにまたも1R勝利でメインの重責をはたす。

はじめはみんな少年だった。

▼2005・6・26『PRIDE GRANDPRIX 2005 2nd ROUND』さいたまスーパーアリーナ
ミドル級GP2回戦、ヒカルド・アローナと対戦した桜庭は、ヒザ攻撃で両目を腫らす壮絶TKO負け。シウバと対戦した中村カズは道衣を脱ぎ捨てた直後に攻め込まれ敗戦。

日本が小さくなったのか。俺が大きくなったのか。

▼2005・7・17『PRIDE武士道 ―其の八―』名古屋レインボーホール
この日もメインに登場した〝エース〟五味はジーン・シウバに判定ながら勝利。ライト級とウェルター級同時開催となる『武士道グランプリ』で主役奪取を宣言。

人間って、すごい。

▼2005・8・28『PRIDE GRANDPRIX 2005 決勝戦』さいたまスーパーアリーナ
シンプルなコピーの示すとおり、〝地上最強〟を決めるヒョードルvsミルコが実現。白熱の攻防の末、ヒョードルが判定勝利。ミドル級GP決勝はショーグンがアローナを破って初優勝。

上だけを、頂点だけを向いて。

▼2005・9・25『PRIDE武士道 ―其の九―』有明コロシアム
中軽量級の〝頂点〟を決するライト級&ウェルター級トーナメント開催。五味は川尻と名勝負を展開した上で一本勝利。桜井〝マッハ〟速人と『男祭り』の決勝に進出。

歴史のない、未来はない。

▼2005・10・23『PRIDE・30 STARTING OVER』さいたまスーパーアリーナ
シュートボクセにて武者修行した桜庭が、ケン・シャムロックにKO勝利で再出発。メインでは、ヒョードルに敗戦後のミルコがジョシュに判定勝利で同じく再出発をはたした。

生き様を倒すのは、生き様。

▼2005・12・31『PRIDE男祭り 2005 頂 ―ITADAKI―』さいたまスーパーアリーナ
吉田vs小川の因縁マッチが実現。柔道からプロレスと格闘技に分かれた両者の生き様が交錯した一戦は、吉田がTKO勝利。五味はマッハに勝利し、初のPRIDE日本人王者に。

夢に、必死になったことはありますか。

▼2005・2・26『PRIDE・31 Dreamers』さいたまスーパーアリーナ
メインではPRIDEデビュー戦となる元世界ボクシング王者であり、〝夢追い人〟西島洋介がハントと対戦、あえて打撃勝負に付き合ったハントが一日の長で貫禄のKO勝利。

逃げも、隠れも、倒れもしねぇ。

▼2006・4・2『PRIDE武士道 ―其の拾―』有明コロシアム
ライト級の頂点に上り、まさに「挑戦者が見当たらない」ほどの〝絶対王者〟五味が燃えつき症候群（?）でマーカス・アウレリオにまさかの敗戦。波乱の幕開け。

1／6000000000

▼2006・5・5『PRIDE 無差別級グランプリ 2006 開幕戦』大阪ドーム
原点回帰の無差別級グランプリ実現で、コピーもシンプルな〝60億分の1〟に。ヒョードルはケガで欠場も、吉田、ノゲイラ、ミルコ、藤田、ジョシュ、ハントらが順等に2回戦へ。

最強未開。

▼2006・6・4『PRIDE武士道 ―其の十一―』さいたまスーパーアリーナ
コピーどおり、本命なき激戦区と言われたウェルター級GPが開幕。郷野はDJ GOZMAに変身し入場パフォーマンスを披露しつつ勝利。三崎、長南も2回戦に進出。

奈落へ昇れ。

▼2006・7・1『PRIDE 無差別級グランプリ 2006 2nd ROUND』さいたまスーパーアリーナ
フジテレビショックという逆境を跳ね返す意のコピー同様に、ミルコは吉田を、シウバは藤田を、ジョシュはハントを、ノゲイラはヴェウドゥムを破る白熱戦でファンを熱狂させた。

さぁ、世界を驚かせる旅に出よう。

▼2006・8・26『PRIDE武士道 ―其の十二―』名古屋レインボーホール
よみがえった〝絶対王者〟五味隆典がメインでデビッド・バロンを破って完全復調へ。ウェルター級GP2回戦は三崎、郷野、パウロ・フィリオ、デニス・カーンが進出。

独りで挑んだ。独りじゃなかった。

▼2006・9・10『PRIDE 無差別級グランプリ 2006 決勝戦』さいたまスーパーアリーナ
ファン約500名の顔を配したポスターの今大会は、凄まじい潰し合いが展開。準決勝でシウバをKOしたミルコが、ノゲイラを破ったジョシュを下して、悲願のGP制覇。

THE REAL DEAL

▼2005・2・26『PRIDE・31 THE REAL DEAL』トーマス&マックセンター
PRIDEがついにアメリカ初進出。〝皇帝〟ヒョードルの登場に沸き、ショーグンはランデルマンと好勝負を展開など、日本まんまのファイトがアメリカで通用することを証明。

頂点なんかじゃ、止まれねぇ。

▼2006・11・5『PRIDE武士道 ―其の十三―』横浜アリーナ
ウェルター級GP決勝はフィリオのケガで、準決勝で破れた三崎が急遽出場。カーンを判定で破る奇跡の優勝劇。五味はアウレリオと王座戦も慎重な試合運びで辛くも防衛。

誇りは、誰にも奪えない。言葉ではなく、闘いでありがとうを。

▼2005・12・31『PRIDE男祭り 2006 ―FUMETSU―』さいたまスーパーアリーナ
PRIDE激動の1年を締めくくったのはヒョードル。ハントに追い込まれながらも見事に王座防衛。五味は挑発された石田光洋を相手に、問答無用の喧嘩ファイトで大復活。

THE SECOND COMING

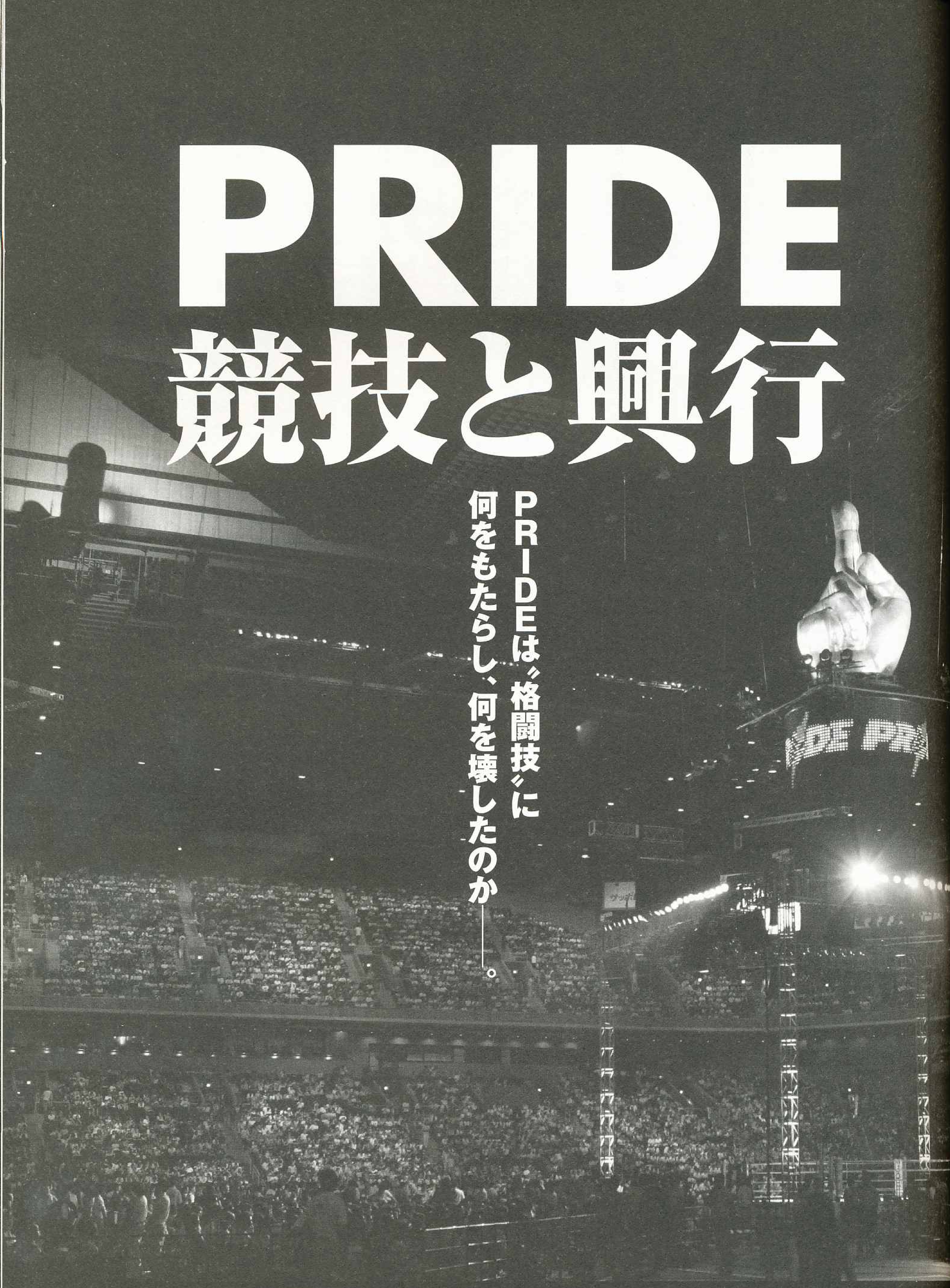
▼2005・2・26『PRIDE・31 THE SECOND COMING』トーマス&マックセンタ
二度目のアメリカ上陸。「SECOND COMING」は、アルマゲドンの意もあるが、シウバをダン・ヘンダーソンが返り討ち。五味もニック・ディアスに敗戦と大波乱続出。

最強は、10年かけて強くなった。

▼2007・4・8『PRIDE 34』さいたまスーパーアリーナ
10年目にして突然のPRIDE最終大会。メインはUFC代表のジェフ・モンソンに藤田が完敗。PRIDEを離脱した桜庭は田村と挨拶に出現するサプライズで花を添えた。

PRIDE
競技と興行

PRIDEは〝格闘技〟に何をもたらし、何を壊したのか――。



原点回帰の無差別級グランプリ実現で、コピーもシンプルな〝60億分の1〟に。ヒョードルは完敗。PRIDEを離脱した桜庭は田村と挨拶に出現するサプライズで花を添えた。



格闘技界の黎明期から
バブル期を生き抜いた男が語った！

格闘家はいかにして“食える”ようになったのか
郷野聡寛

修斗やパンクラスなど、さまざまな格闘技イベントがある中で98年に誕生したPRIDE。その出現によって、既存の格闘技イベント、そしてそこで闘っていた選手の環境はいかに変わっていったのか。まさに、修斗からパンクラスに渡り、全日本キックを経てPRIDEに参戦した郷野聡寛に、選手の立場から語ってもらった。

聞き手／ジャン斉藤　撮影／乾晋也



格闘家はいかにして食えるようになったのか——。

いまでこそ“専業格闘家”として生活できるファイターが増えつつあるが、日本格闘技界の黎明期ともいえる90年代初期——、第一線で活躍していた選手でさえも、別の仕事をしながらリングに上がるという環境に身を置くのがあたりまえだった。いまでもそれが大多数と言えるような状況なのである。90年代半ばにプロデビューした郷野にとっても、「それが常識だった」というのは本インタビューで語られているとおりだ。

郷野聡寛は、95年『トーナメント・オブ・J』に出場以降、96年に修斗でプロデビュー。その後、00年初期まで修斗で闘い、01年には現在も所属するGRABAKAに籍を置き、パンクラス、PRIDE、そして現在ではUFCに継続参戦している。

そのGRABAKAも立ち上げ当初は、新宿スポーツセンターを借りて練習をする“流浪の集団”だった。都内に2カ所のジムを持つ現在のGRABAKAからすると、考えられないような環境の変化だ。

このような経歴を経てきた郷野に話を聞くことで、90年代から劇的に変化した格闘技界の状況を探ってみたい。

——今日は「PRIDEは何を変えたのか?」というのがテーマなんですが、格闘技の隆盛によって選手の生活もずいぶんと変わってきたと思うんです。郷野さんって、この業界にはずいぶんと古くからいらっしゃいますよね。

郷野　長くなってきましたねぇ。もう13年目ですからねぇ。

——闘ってきたリングもさまざまで、郷野さんは修斗、パンクラス、PRIDE、UFCといろんな団体で活躍されてきましたけど、いい意味で修斗の郷野、パンクラスの郷野だったりと、その時々の団体のカラーといつもうまく噛み合ってるなあという印象がボクの中にはあるんですけど。

郷野　そうなんですかね。でも、オレとしては「どこどこの郷野」じゃなくて、「郷野聡寛」だけで売れる選手になりたいと常に思っていて、だから「パンクラスの火薬庫」とか「GRABAKAの火薬庫」って呼ばれ方だったときに思っていたのは、まだまだ「郷野聡寛」単品じゃ売れないって評価なんだろうなって。だから「どこどこの」ってつくのが本当に嫌で、そうやって呼ぶ周りに対してではなくて、そう呼ばれてしまう自分が許せないっていうのがありましたね。

——いまは「〇〇の郷野」という呼ばれ方はされてないですよね。

郷野　「GRABAKAの」がとれたときは、オレもやっとここまできたかと思いましたねぇ（笑）。

——そのときのことは覚えてますか?

郷野　あれはたしか一回目の『PRIDEウェルター級GP』のときですね。ダニエル・アカーシオに勝ってダンヘンに負けたとき。煽り映像で「難攻不落のビックマウス」って呼ばれて、オレもついに一人立ちかぁ、と（しみじみと）。

——そうやって個性が一人立ちしたときがPRIDEなら、ファイトマネーだけで食べていけると思ったのはいつくらいのことなんですか?

郷野　その前に言っておきたいのは、いくらファイトマネーの額が上がっても、いくら闘うステージが上がっても、オレとしては、常にあとがないって感じがつきまとっているんですよ。だから、デビュー当時か

ら比べたら、かなり見上げるところにいまのオレはいると思うんだけど、それでもやっぱりあとがないというか、切羽詰まった感は変わらないんですよね。

──UFCのサブミッション・オブ・ザ・ナイト（大会中、一番衝撃的なサブミッションで勝利した選手に贈られる副賞）で600万円の賞金をもらおうが。

郷野　そう。昔の自分が見たら「600万円かよ！ すげえな！」って思うんでしょうけど、あとがない感じは当然いまでもありますよね。でも正直、格闘技を始めた頃というのは、格闘技だけで食っていけるというのはありえない話でしたからね。当時、オレが憧れていた平（直行）さんは、昼間に牛丼を作りながら格闘技をやっていて。その頃のトップ選手がそういう感じの時代だったんですよ。

──あの当時の平さんは、『すき家』なんかを経営するゼンショーの格闘技部所属としてやってましたね。

郷野　オレも昼間に仕事して、夜に練習をして、たまに試合があって、そこに職場の女の子を呼んで（笑）。職場ではモテモテな存在になれるかなというような、そんな小さな考えしかなかったですからね。

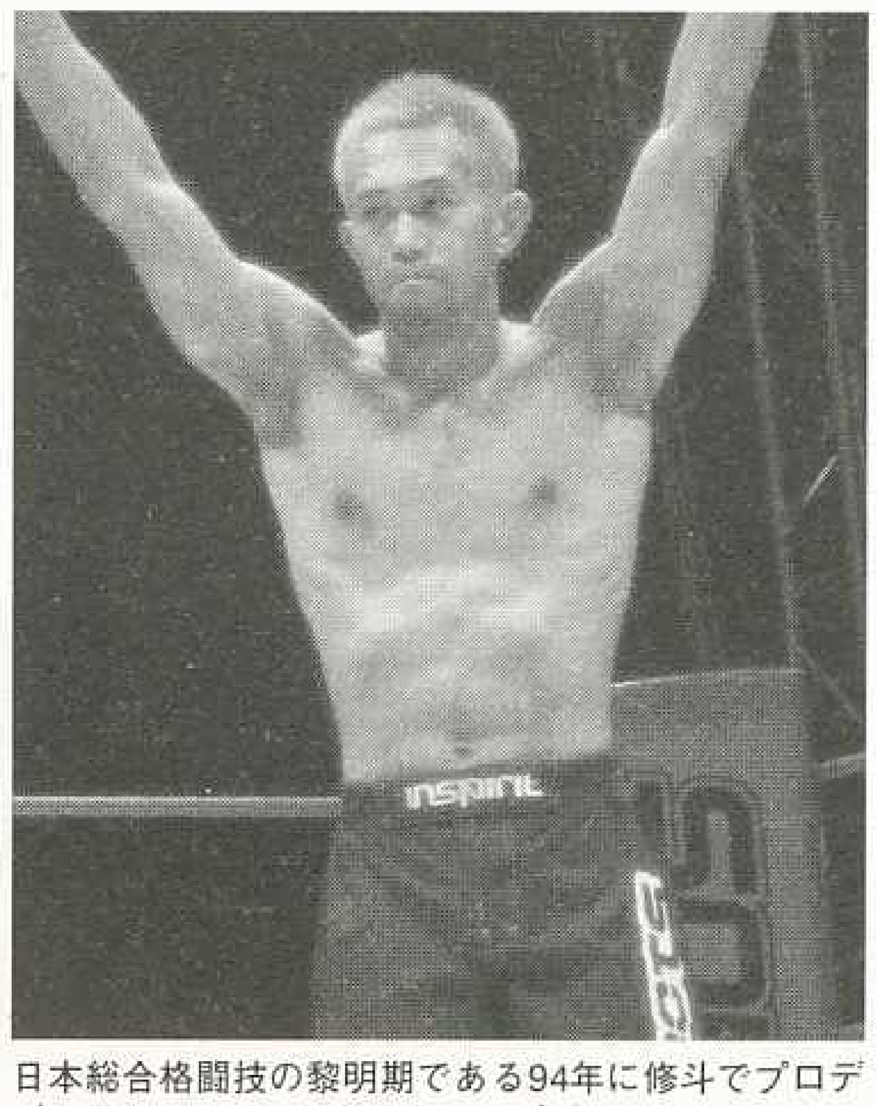
──平さんですらそういう状況だから、郷野さんの夢もそこまで大きくなかったということですね。

郷野　大きくなかったですねぇ。格闘技はほかの仕事しながらやるもんだと思ってましたから。もしかしたら格闘技一本で食えるようになるのかなと思ったのは、（佐藤）ルミナさんがそうなってからですよね。

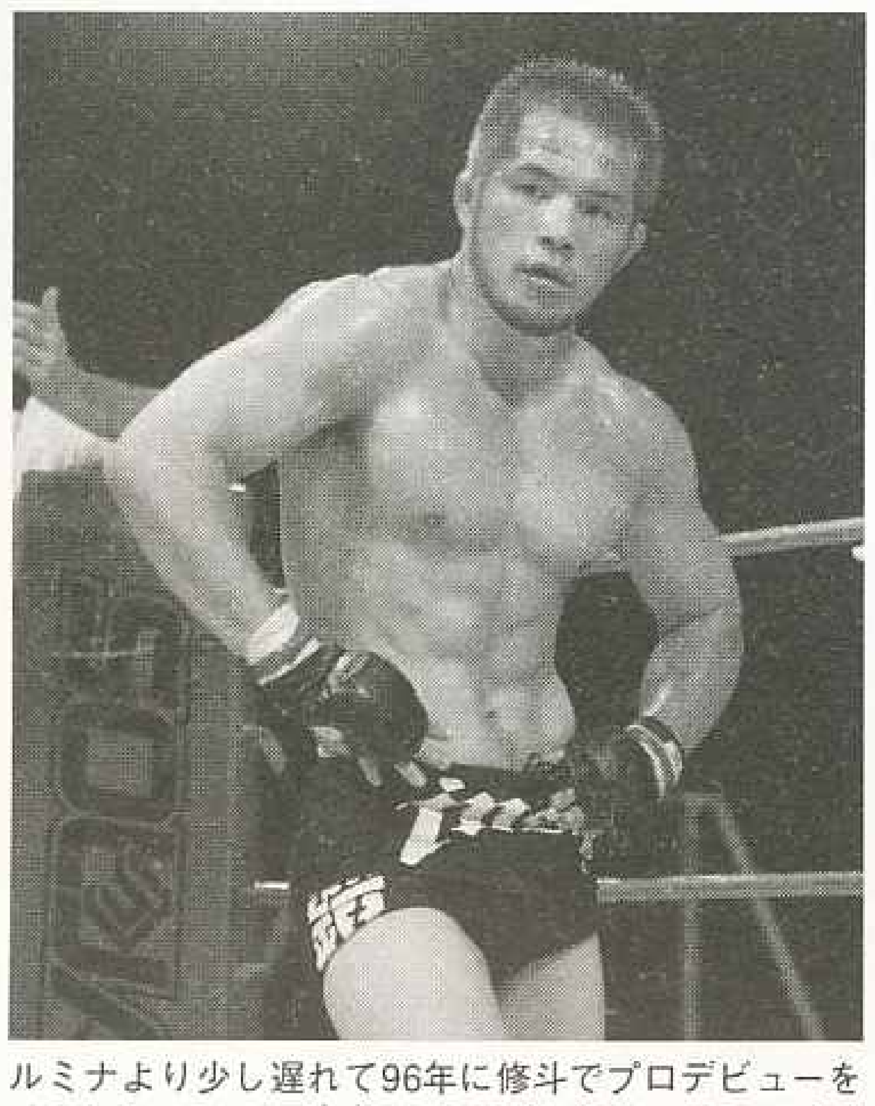
──つまり、修斗がブレイクし始めた頃。当時の郷野さんにとって、格闘技は人生のどういう位置づけにあったんですか？

郷野　べつに考えてませんでしたね。やっぱり若いときって、その時間がいつまでも続くような感じがあるじゃないですか。将来のことをそこまで真剣に考えてないというか、いまはこのままでいいけど、この先どうなるかは時間が経てばなんか見えてくるんじゃないか……、という感じでしたけどね。

──そういう意識だったのが、ルミナさんが出てきたことで「もしかしたら……」という感じになったということですね。



日本総合格闘技の黎明期である94年に修斗でプロデビューをはたした佐藤ルミナ。デビュー以降、破竹の一本&KO勝ちを築き上げると、数々のファッション雑誌でそのルックスもフィーチャーされ、モデルとして"おしゃれ格闘家"の第一線を走った。



ルミナより少し遅れて96年に修斗でプロデビューをはたしたマッハ。デビューと同時に驚きの強さで連勝を重ね、"修斗ブーム"呼び寄せた人物の一人。当時はここまでの実力をもって、ようやく格闘技だけで食べていける時代だったのだ。

当時、オレが憧れていた平さんは、昼間に牛丼を作りながら格闘技やってて

郷野　それがたぶん一番最初だったと思いますよ。でも、ルミナさんが弾けたのは、ファッション性というか、カッコよさという要素も多分にあったわけじゃないですか。

──見た目もカッコイイし、ファッションセンスもあって。あの頃の修斗ブームって、Tシャツブームだったんじゃないかというような見方もありますしね。

郷野　エンセン（井上）の大和魂Tシャツが凄く売れて、隣の家の兄ちゃんも着ていましたし。で、「もしかしたらオレも格闘技だけで食えるようになれるかも」と期待はしながらも、自信はまったくなかったんで。

──それは、自分をどうプロモーションしたらいいかというのがわからなかったとか？

郷野　そうですね。だから「オレなんて……」という感じがあったんですよ。そこで「じゃあ上にいくためにはどうしたらいいか？」というような考えをまったくしなかったですね。「オレはあんまりカッコよくないからダメだな……」とか、そういう考えしかなかったですよね。考えること自体を放棄していた。

──く、暗いですねぇ。当時の郷野さんというと、長南（亮）さんとの対談でも全否定されてましたけど、ファミレス発言（※52ページ、カコミ参照）の印象しかなくて。

郷野　またそのネタかよ！　でもあれだって、プロとしては当然、ゲラチェックをしておくべきだったんですよ。でもその頃はゲラチェックをするという概念もまったくなかったし、もしかしたら「こうやってファミレスでおごってもらって喜んでるオレっておもしろい？」っていう勘違いもありましたし。

──逆にそれが個性になるんじゃないだろうか？　って。

郷野　そうしたらやっぱり、そこはまったく違ったみたいで（笑）。もう本当にあれはね、オレの選手生活の中でもダントツで汚点ですね！　もう10年近く前の話なんですけどね。

──でも、当時は悩んでたんじゃないんですか？　プロで食っていけるかもしれないと思ったぶん、よけいに。

郷野　迷いながらも、プロ一本で食べていこうという決意はしてましたけどね。そのファミレス事件の頃はね、修斗でチャンピオンになったら、契約選手みたいな感じで、要は年俸制でやっていける。そんな話はオレにもあったんですよ。まあ、これはどっちが悪いという話じゃないですけど、オレもそういう話に期待をしすぎてたところもあるし、でも自分の思ったとおりにもいかなくて、いろいろ悪いほうに考えちゃったんですよね。疑心暗鬼になるというか。

──あの頃の修斗で食えたのってルミナさんくらいですか？

郷野　いや、マッハ（桜井"マッハ"速人）も食えてたんじゃないですか？　あとエンセンとか。

──うらやましさとかありました？

郷野　ありましたけど、当時のオレの力ではルミナさんやマッハみたいに、客を呼んだり、お金を発生させるのは、修斗でやっているかぎりは難しいかなと思い始めていたんで。そう思ったからパンクラスに行ったんですけどね。

──パンクラスのほうが舞台として魅力的だったんですか？

郷野　やっぱりそうでしたよね、オレの階級からすれば。修斗のライトヘビー級は、なかなかコンスタントに試合を組むというのは難しい状況でしたけど、パンクラス

に行けば日本人でも同じような体格の人間はいっぱいいましたから。「試合をやりたい」って言えばいつでも組んでくれるような環境だったんですよね。

——ファイトマネーはどうでしたか？

郷野　単価も上がったし、試合の回数も増えたし、年単位で見たらかなり大きく変わって、格闘技だけでやっていけるようになりましたね。

——じゃあ、ファイトマネーで食べていけるようになったのはパンクラスになってからですか？

郷野　パンクラスに行って、そこは大丈夫になりましたよね。うん。

——じゃあ、パンクラスに移るという決断をするのは、あまり考え込まなかったんですか？

郷野　いや、けっこう悩みましたよ。もちろん修斗でお世話になった方もいましたから、そういった人間関係で相当悩んだんですけど、でも自分の人生は自分で決めるべきだし、応援してくれる人はどんな状況でも応援してくれるんじゃないかって。そこで人間関係に亀裂が入ったとしても、それはもうしょうがないって割り切って。いま思えばあの決断をしたことで、自分自身、凄く成長したなと思うし、人生のターニングポイントだったと思いますね。

——そうやって深く考えたことが人生の糧になった、と。

郷野　やっぱり自分の道は自分で決めて、結果がどうであれその責任も全部自分で取るという、そういう覚悟を初めてできたときじゃないですかね。もう前に進むしかないって、ほとんど開き直りでしたけどね。

——パンクラスというプロモーションはどうでした？

郷野　プロ意識をどんどん芽生えさせてくれて育ててくれたというか、頑張れば頑張っただけ返ってくるものがありましたね。あと、一番大きかったのは、パンクラスはスタッフが選手を立てて丁寧に扱ってくれた。たとえばスタッフは、いくら選手が年下でも敬語で話すとか。修斗では、かつては選手だった人が引退してスタッフに回っていたりで、どうしても先輩後輩のような、上からものを言われているような感覚があったんですよね。



01年にGRABAKAに移籍し、その後、パンクラスを主戦場とした郷野。試合したいと言えばさせてくれるし、試合したぶんだけ収入を得られる当時のパンクラスの環境は、選手側からするとモチベーションの上がるリングである。

応援してくれる人はどんな状況でも応援してくれるんじゃないかって

——要するにパンクラスは選手を「商品」として扱ってくれたということですね。

郷野　スタッフは、選手あってのパンクラスだからという気持ちを持って接してくれていた。坂本（靖）のおっさん以外はね（笑）。そういうところだったから本当に気持ちよく試合ができたし、より頑張ろうという気にもなれたし、これがプロだよなぁって感じましたよね。

——で、そのパンクラスを通してPRIDEにも上がりましたけど、PRIDEにはどんな印象がありましたか？

郷野　一番最初は正直ビビりましたね。前日のルールミーティングや計量にしても、それまではパンクラスの広尾の道場でこぢんまりとやってたのが、一流ホテルになり、そのホテルの部屋を使った各メディアへのインタビュー収録というのもあって。何よりも、出場選手が一堂に会した計量兼ルールミーティングで、あれだけ外国人選手が多いと、外国人選手特有の香りがすっごいするんですよ。

——ありますねぇ。

郷野　その香りにビビっちゃって。あんな雰囲気を感じたのは、惨敗したアブダビ・コンバット以来のことで、そのときのイヤな記憶が匂いでよみがえってくるんですよね。過去の記憶がよみがえる一番のきっかけは匂いらしいんですよ。昔の女の使ってた香水とかね……（しみじみと）。

——はあ。

郷野　で、2位が音楽なんですよ。昔の女と聴いていた音楽とか……（遠い目で）。

——郷野さん、話を進めましょうか。

郷野　で、その1位の匂いでもうビビりまくったわけですよ。「PRIDEにはこびねえ！」って吠えて出ていったんですけど、こびてはいなかったけど、ビビってたという（笑）。

——でも、郷野さんもパンクラスのビッグマッチをけっこう経験してきたわけじゃないですか。

郷野　でも、やっぱりPRIDEにはフジテレビも入ってましたからね。そこのメジャー感は違いましたよね。

——じゃあ、PRIDEに上がったことによって、さらにプロとして広がりを持ったということはあるんですか。

郷野　そうですね。継続参戦することによって、オレの中でいろいろと伸びてきたと思いますけどね。

——何が一番違いましたか？

郷野　まあ、一番の違いは経済的なことになるんですけど、やっぱり一般層への浸透というか、反応が違いましたよね。PRIDEといえば、誰でもある程度わかってもらえる。中には「それK-1？」って言う人もいますけど。パンクラスとか修斗のときよりは、PRIDEっていう単語を出すだけでそのほかの説明をせずに済むというところはありましたよね。あと何が一番違ったって、ファンレターの数が違いま

ファミレス事件とは

かつて、某格闘技雑誌の郷野インタビューで「ファミレスで値段を気にしないで注文できるようになりたい」という発言が掲載されたこと。のちに、その件について『kamipro Special 2008 SPRING』で郷野本人に発言を求めているが、郷野はこれをキッパリ否定。「そんなに俺は贅沢したいと思わない。ファミレスで値段気にして注文するのは嫌だけど、普通に好きなものを食べられるぐらいの生活ができればいい」と言った畑山隆則の発言に郷野も共感したといった内容が、何かの手違いで"ファミレス事件"になったのだとか。郷野本人はこの事件について、「大損失だ！」と眉間にしわを寄せている。というわけです、布施さん。

したよ（笑）。

——そんなに違いました？

郷野 もうね、写真入りのファンレターが来る来る!! これ、本当に凄かったんだから。なんかどっかのモデルをやってるっていう女の子から、自分が載ったファッション誌の切り抜きを同封して送られてきて。「これ私です。彼女にしてください♥ダメですか？」みたいな。それを読みながら「オレもここまできたかあ……」みたいな。

——はっはー（笑）。

郷野 そんな感じだったんですけど、いま思うと彼女にしとけばよかったなぁ……。

——返事をしなかったんですか？

郷野 いや、普通にファンレターには返事は書くんですよ。でもつまらない返事で、そこから踏み込んだりとかはできなかったんですよね。

——もしかして、罠かもしれないとか？

郷野 そうなんですよっ！ 待ち合わせ場所に行ったら、その陰で「来てるよ、郷野がダマされたよ～！」って笑われてるかもしれないじゃないですか!!

——考えすぎですよ（笑）。話は戻って、PRIDEって、確かにお客さんは入るし、ファイトマネーはいいかもしれない。でも、興行論に軸足を置きすぎじゃないかという声もあったじゃないですか。そういう声についてはどう思いますか？

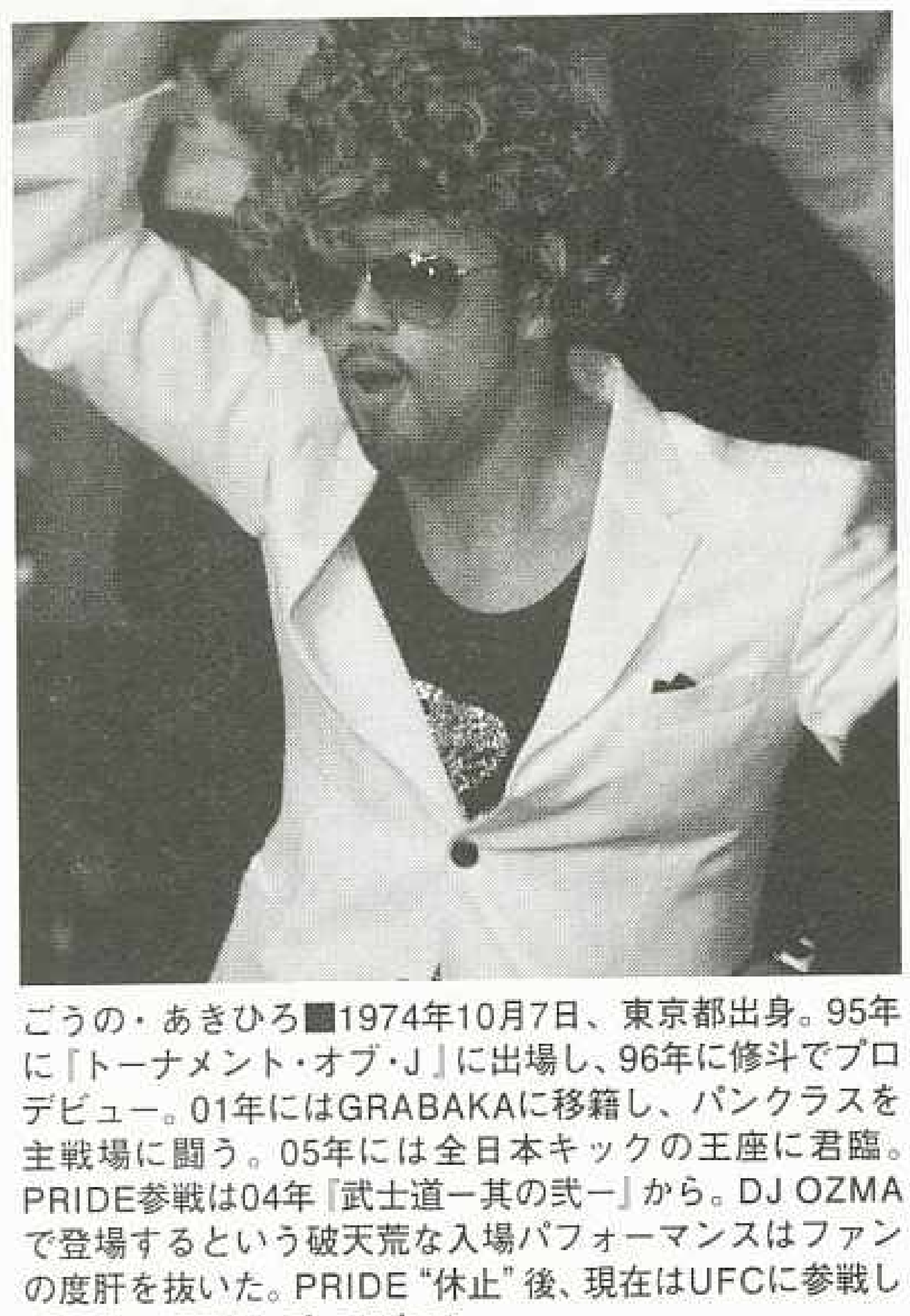
郷野 なんだろな。まあそうは思うんですけど、やっぱりPRIDEなんかの世界を知っちゃうとそこから離れられなくなりますよね。

——そういうもんですか。

郷野 人間なんてそんなもんですよ。人間なんて、滑稽な生き物ですから、いくらなんだかんだ建前を言ってても、本音の部分はやっぱり煩悩の塊なわけですから。だからたくさんのお客さんの前で試合ができて、ファイトマネーもいっぱいもらえて、それでいて知名度も上がるんだったら、そりゃそっちを選びますよ。

——そりゃそうですよね。

郷野 でも実際、オレも修斗が一番みたいに思ってた頃もありましたけどね、やっぱりそこは若かったなぁというか。たとえば、いまだとDREAMを知って、『戦極』も知って、UFCも知って、いろんな舞台をひと通り経験したうえで「○○が一番」というのであれば、その気持ちは本物だと思うんですよ。でも、どこか一つしか知らないで、そこが一番って言いきっちゃうのは、こう言っちゃうとまた語弊があるかもしれないけど、ある意味、洗脳に近いというかね。ほかの世界を知らないわけですから。それしか知らないというのは洗脳に近い状態だと思うんですよね。昔のオレもそうだったけど、若い選手はそうなりやすいですよね。



ごうの・あきひろ■1974年10月7日、東京都出身。95年に『トーナメント・オブ・J』に出場し、96年に修斗でプロデビュー。01年にはGRABAKAに移籍し、パンクラスを主戦場に闘う。05年には全日本キックの王座に君臨。PRIDE参戦は04年『武士道ー其の弐ー』から。DJ OZMAで登場するという破天荒な入場パフォーマンスはファンの度肝を抜いた。PRIDE"休止"後、現在はUFCに参戦している。176センチ、77キロ。

一つの団体しか知らないで、そこが一番と言いきるのは、ある意味洗脳に近い

AKIHIRO GONO

——逆にPRIDEがもっと競技面を整備してほしかった気持ちはありませんでしたか？

郷野 それはありましたね。そのへんのバランスは、現状ではUFCが一番いいんでしょうけど、でも、日本とアメリカの土壌の違いで、日本で同じことをやるのは難しいというのもわかるし、UFCも完全ではないんだろうし。そういった中でも「さすがにそれは違うんじゃないの？」って思ったことは自分のブログで書いたりしてますけど。

——いまでも、格闘技だけで食べていくというのはけっこう難しいところはありますよね。

郷野 ホントに（ジムの）指導なしでファイトマネーとか、それに付随する収入だけで食べている選手がどれくらいいるのかというのはちょっとわからないですけどね。ただ、ジムの数もいまは多いですし、試合＋指導というかたちで格闘技のみで食べていけてる選手は相当いるんじゃないですか。

——10年前の郷野さんからすれば、とても信じられない環境なんでしょうね。

郷野 そうですよね。プロとしてここまで来られたのは嬉しいですよね。自分の場合はこういうふうに格闘技の隆盛がくるというのがわかってて始めたわけじゃないですから。そのときは純粋に強さに憧れて始めて、正直有名になれるというのはありえないと思ってましたからね。

——郷野さんはUFCに参戦されてますが、いまやアメリカのほうがビッグマネーをつかむチャンスがあるわけですよね。

郷野 でも、自分の中ではそんな実感は全然ないです。それよりもさっき言ったように、あとがない感じのほうが凄く大きいですから。だって、UFCは2連敗したら終わりですから。やっぱり、切羽詰まった感はありますよ。

——やっぱり不安はつきまとうんですね。

郷野 経済的な面じゃないですかね。それこそケガして試合ができなくなったとき、負けが続いて契約を切られたときに、格闘技以外の収入がないわけだから。ケガが多いオレは、一寸先は闇ですよ、一番それを実感してますね。

——最後に、経験豊富な郷野さんにおうかがいしますが、PRIDEが一番ダメだったところってなんですか？

郷野 それは、なくなっちゃったことじゃないですか。

——なるほど（笑）。

郷野 舞台として理想的でしたよね。ファイトマネーにしても、選手の扱いにしても。UFCなんて、選手の扱いはなかなかぞんざいですからね（笑）。そんな最高の舞台だったのになくなっちゃったってとこが、PRIDEの一番ダメなとこですよ。

［08年8月23日／都内・GRABAKA大久保ジムにて収録］

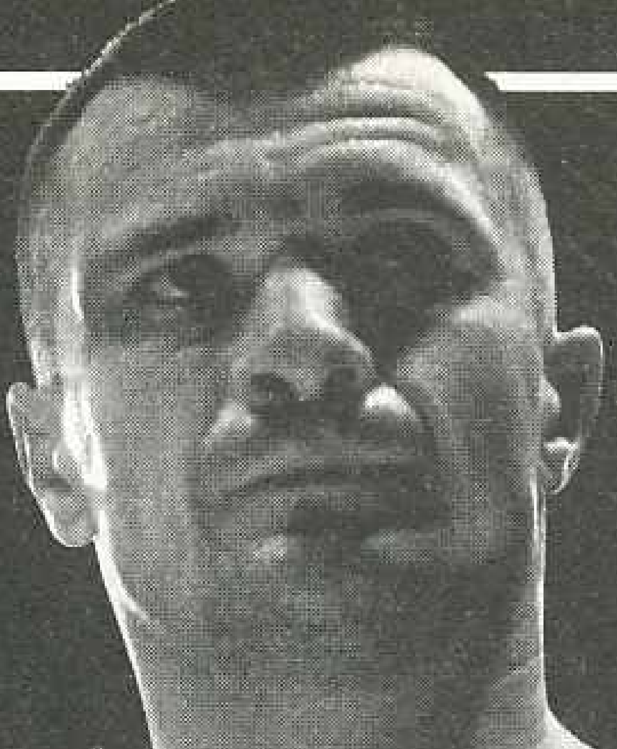
郷野聡寛が選ぶPRIDEベスト3

1 エメリヤーエンコ・ヒョードルvs ミルコ・クロコップ

2 マウリシオ・ショーグンvs アントニオ・ホジェリオ・ノゲイラ

3 オレvs ゲガール・ムサシ

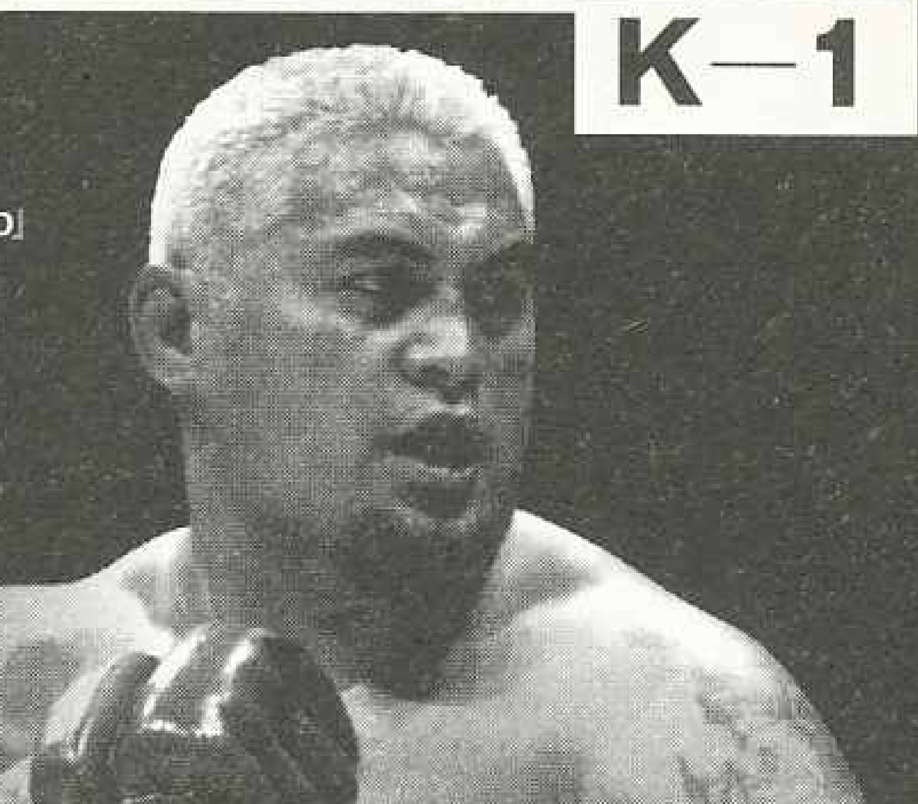
ヒョードルvsミルコが歴代1位でしょ。その中でヒョードルがミルコの蹴りをしっかり脚を上げてカットしたのはさすがと思った。あの日はショーグンが優勝したミドル級GP決勝といい、PRIDEが一番熱かった日かな。そのミドル級GPでのショーグンvsホジェリオも、心技体ともに高いレベルにあるトップ選手同士の死力を尽くした闘いで凄まじかった。そしてオレのムサシ戦。入場～試合～マイクと、けっこう完成度高かったでしょ？ 当初、あの大会は地上波のゴールデンでやるって話だったけど、もし実現してたらオレももっと人気者になれたのにね。



ミルコ・クロコップ

99年K-1GP準優勝のK-1戦士が、01年8月の藤田和之戦が転機となって総合に転身。04年『PRIDE GP』での1回戦KO負けや、05年のヒョードル戦での敗戦など、つまずきを見せるたびに這い上がり、06年『無差別級GP』で悲願の優勝。UFCを経て現在はDREAMを主戦場とするが、かつての勢いが見られないのが寂しいところだ。

2006.9.10『PRIDE無差別級グランプリ2006 決勝戦』
○vsジョシュ・バーネット（1R 7分32秒 グラウンドでのパンチ）
2006.9.10『PRIDE無差別級グランプリ2006 決勝戦』
○vsヴァンダレイ・シウバ（1R 5分22秒 KO）
2006.7.1『PRIDE無差別級グランプリ2006 2ndROUND』
○vs吉田秀彦（1R 7分38秒 TKO）
2006.5.5『PRIDE無差別級グランプリ2006 開幕戦』
○vs美濃輪育久（1R 1分10秒 TKO）
2005.12.31『PRIDE 男祭り 2005 頂―ITADAKI―』
×マーク・ハント（3R終了 判定1-2）
2005.10.23『PRIDE.30』
○vsジョシュ・バーネット（3R終了 判定3-0）
2005.8.28『PRIDE GRANDPRIX 2005 決勝戦』
×vsエメリヤーエンコ・ヒョードル（3R終了 判定3-0）
2005.6.26『PRIDE GRANDPRIX 2005 2ndROUND』
○vsブラヒム・マゴメドフ（1R 3分53秒 TKO）
2005.2.20『PRIDE.29』
○vsマーク・コールマン（1R 3分42秒 TKO）
2004.12.31『PRIDE 男祭り 2004 ―SADAME―』
○vsケビン・ランデルマン（1R 0分41秒 フロントチョーク）
2004.10.31『PRIDE.28』
○vsジョシュ・バーネット（1R 0分46秒 肩の脱臼）
2004.8.15『PRIDE GRANDPRIX 2004 決勝戦』
○vsエメリヤーエンコ・アレキサンダー（1R 2分09秒 KO）
2004.7.19『PRIDE 武士道 ―其の四―』
○vs大山峻護（1R 1分00秒 KO）
2004.5.23『PRIDE 武士道 ―其の参―』
○vs金原 弘光（2R終了 判定3-0）
2004.4.25『PRIDE GRANDPRIX 2004 開幕戦』
×vsケビン・ランデルマン（1R 1分57秒 KO）
2004.2.15『PRIDE 武士道 ―其の弐―』
○vs山本宜久（1R 2分12秒 TKO）
2004.2.1『PRIDE.27』
○vsロン・ウォーターマン（1R 4分37秒 KO）
2003.11.9『PRIDE GRANDPRIX 2003 決勝戦』
×vsアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ（2R 1分45秒 アームバー）
2003.10.5『PRIDE 武士道』
○vsドス・カラスJr（1R 0分46秒 KO）
2003.8.10『PRIDE GRANDPRIX 2003 開幕戦』
○vsイゴール・ボブチャンチン（1R 1分29秒 KO）
2003.6.8『PRIDE.26』
○vsヒース・ヒーリング（1R 3分17秒 TKO）
2002.4.28『PRIDE.20』
△vsヴァンダレイ・シウバ（5R終了 引き分け）
2001.11.3『PRIDE.17』
△vs髙田延彦（延長 2R終了 引き分け）



2006.12.31『PRIDE 男祭り 2006 ―FUMETSU―』
×vsエメリヤーエンコ・ヒョードル
（1R 8分16秒 チキンウィングアームロック）
2006.7.1『PRIDE無差別級グランプリ2006 2ndROUND』
×vsジョシュ・バーネット
（1R 2分2秒 チキンウィングアームロック）
2006.5.5『PRIDE無差別級グランプリ2006 開幕戦』
○vs髙阪剛（2R 4分15秒 TKO）
2006.2.26『PRIDE.31』
○vs西島洋介（3R 1分18秒 TKO）
2005.12.31『PRIDE 男祭り 2005 頂―ITADAKI―』
○vsミルコ・クロコップ（3R終了 判定2-1）
2004.12.31『PRIDE 男祭り 2004 ―SADAME―』
○vsヴァンダレイ・シウバ（3R終了 判定2-1）
2004.10.31『PRIDE.28』
○vsダン・ボビッシュ（1R 6分23秒 TKO）
2004.6.20『PRIDE GRANDPRIX 2004 2ndROUND』
×vs吉田秀彦（1R 5分25秒 アームバー）

マーク・ハント

そのタフネスぶりから"スーパーサモア人"の異名を誇る01年K-1GP王者。立ち技に続いて総合でも頂点を極めようと、04年にPRIDE移籍。大晦日の『男祭り』では、ヒョードルをはじめ一線級のファイターたちと好勝負を繰り広げている。さらにボノちゃんのお友だちとして『ハッスル』にもシレっと参戦。今年4月には格闘技界の大連立効果により、5年ぶりにK-1に復帰した。

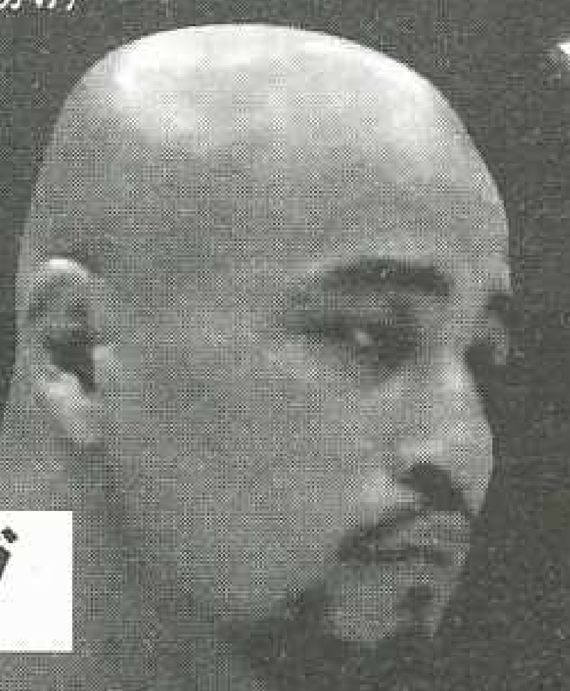
他ジャンルから最強を目指し
"世界最高峰のリング"へ――

PRIDEをまたいだ男たち

1997.10.11-2007.10.4
PRIDEは何を変えたのか?

さまざまなジャンルの格闘家が一堂に会す、
壮大なる"異種格闘技戦"の場であったPRIDE。
最強を追い求めて闘争本能に導かれるがまま、
未知なる闘いの領域である"世界最高峰のリング"に
踏み込んだ、男の中の男たちを一挙紹介!

構成／鈴木佑　撮影／乾晋也



ボクシング

西島洋介

「西島洋介山」の名で活躍した日本ボクシング界重量級のパイオニアだったが、05年6月にPRIDE参戦を表明。しかし新リングネームの「陽海山」に以前の所属ジムからクレームがつき、結局は本名を名乗ることに。総合転向1戦目は大会メインという破格のデビューを飾ったが、いまだ勝ち星はなし。所属する高田道場の高田延彦代表の意向で今年2月にはK-1転向が示唆されるも、参戦実現には至っていない。

2006.10.21『PRIDE.32』
×vsフィル・バローニ（1R 3分20秒 TKO）
2006.9.10『PRIDE無差別級グランプリ2006 決勝戦』
×vsエヴァンゲリスタ・サイボーグ（1R 3分24秒 スリーパーホールド）
2006.5.5『PRIDE無差別級グランプリ2006 開幕戦』
×vs吉田秀彦（1R 2分33秒 トライアングルチョーク）
2006.2.26『PRIDE.31』
×vsマーク・ハント（3R 1分18秒 TKO）

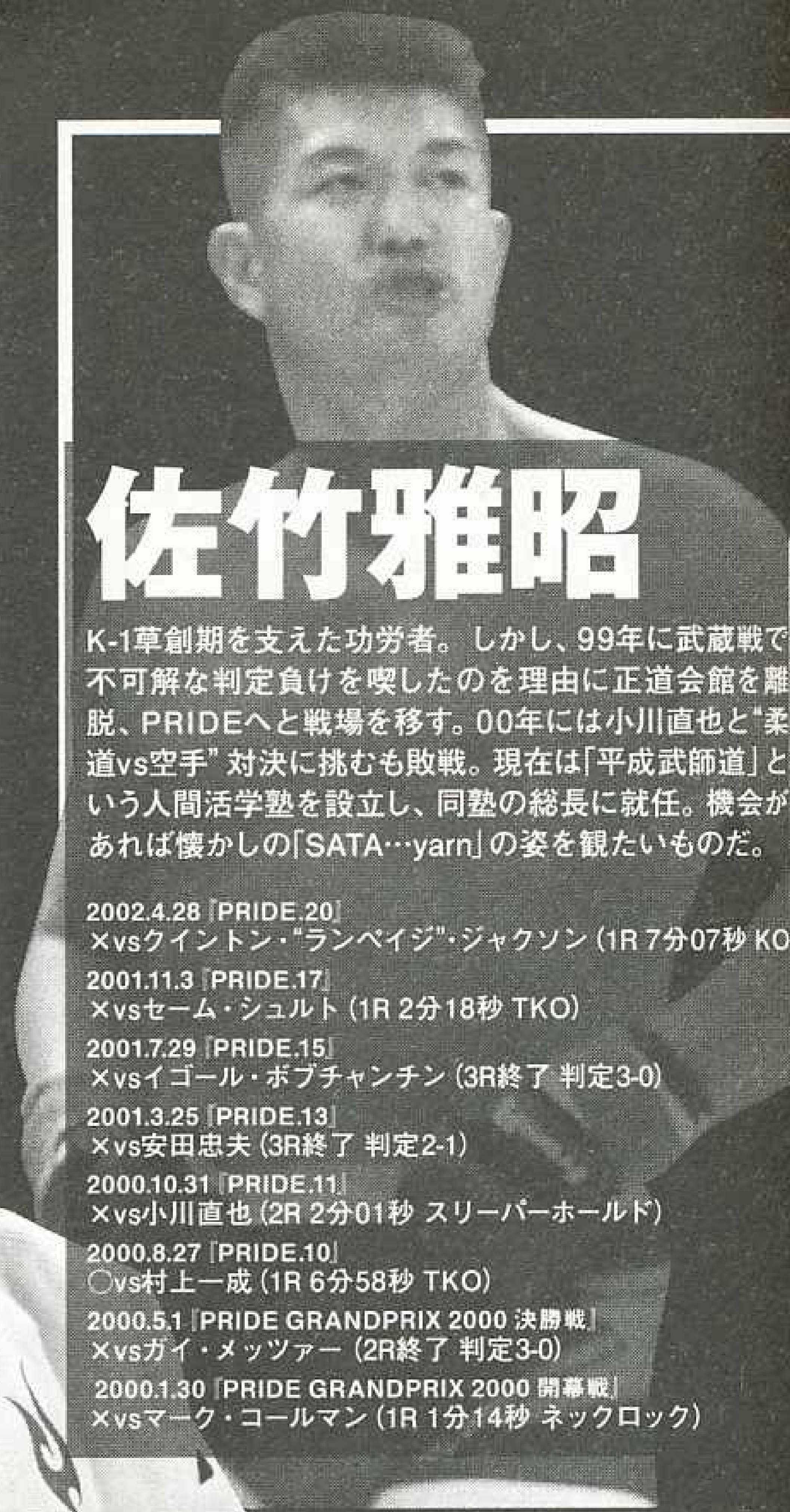
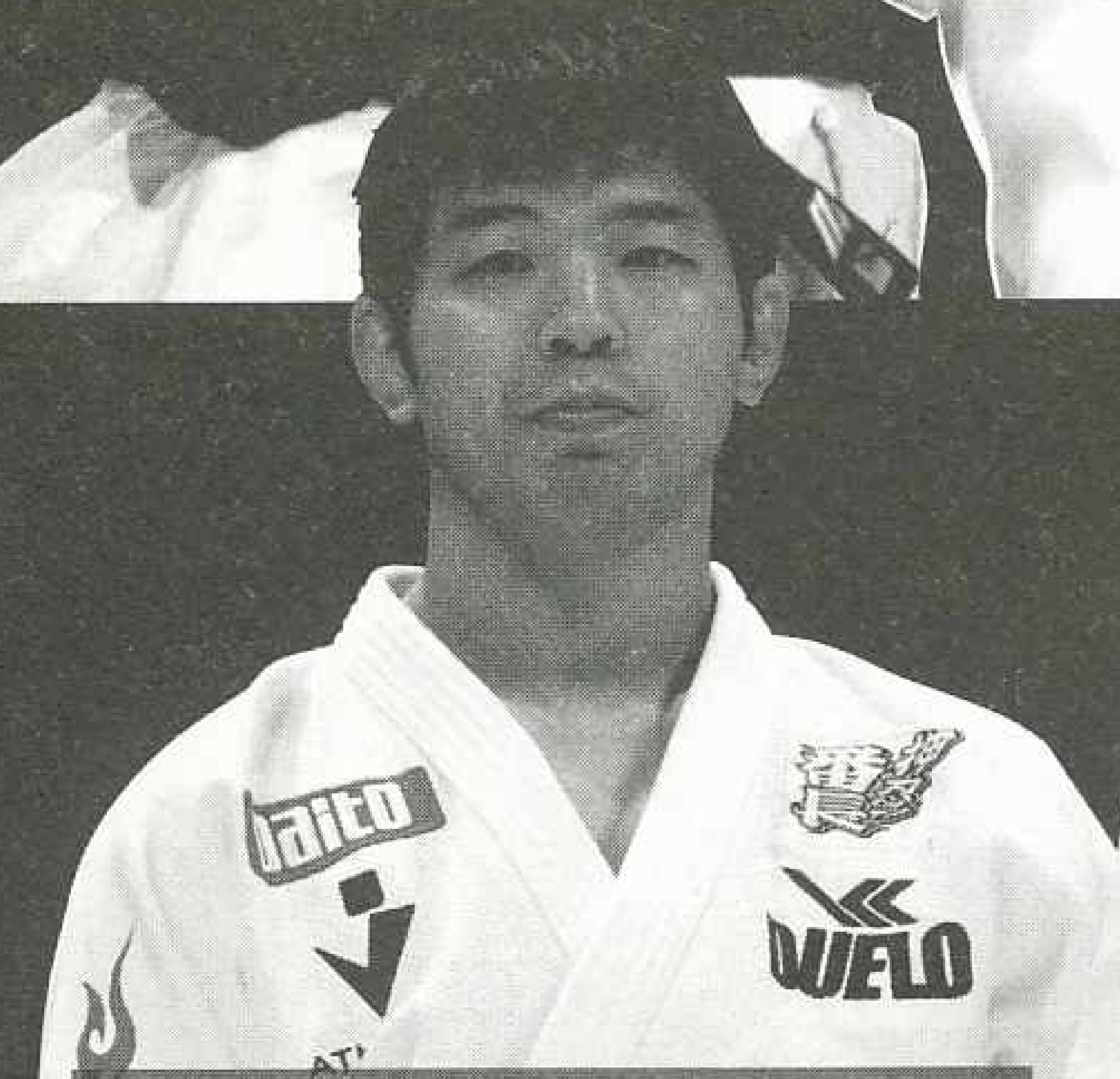
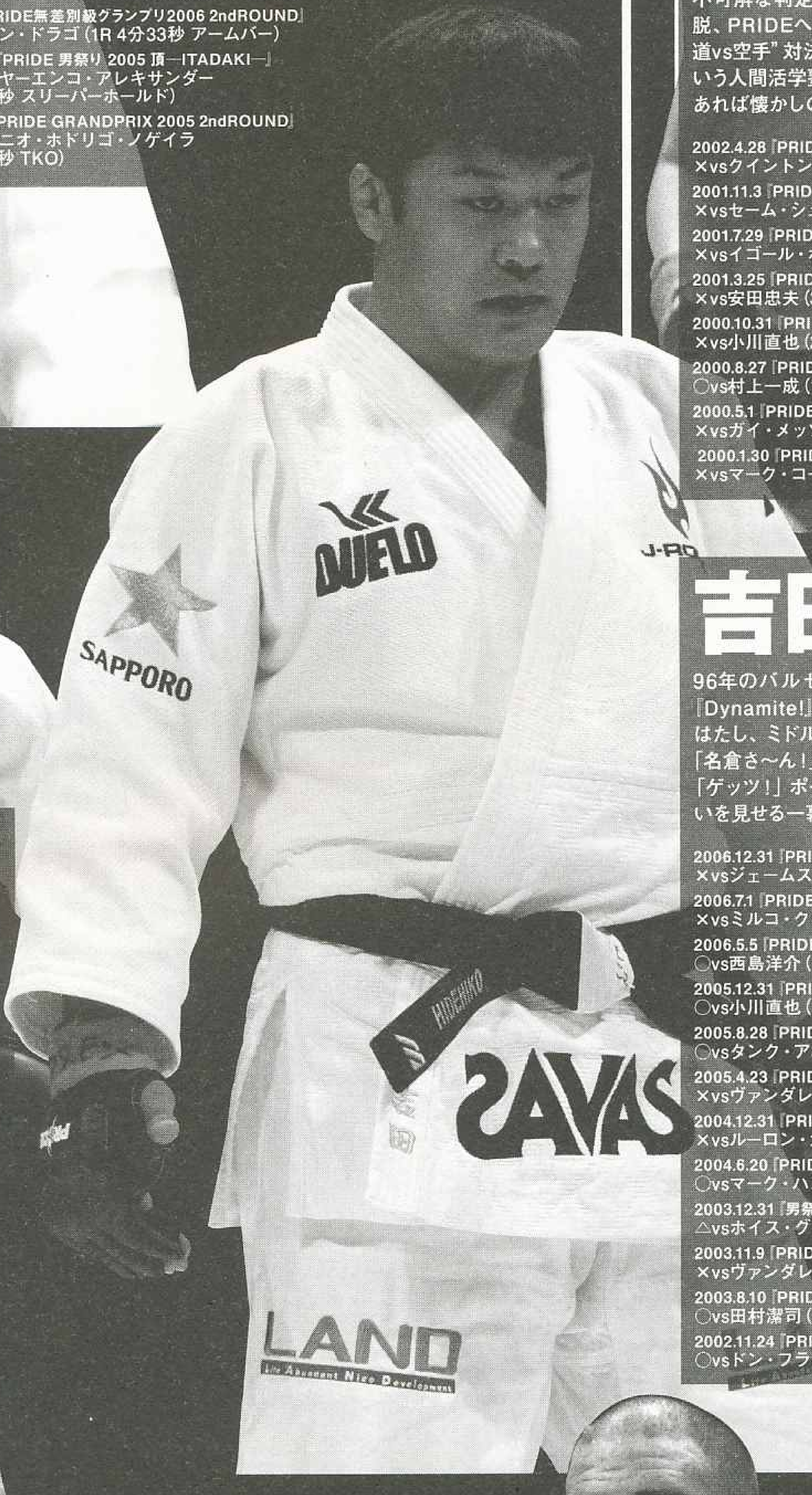


芸能界

金子 賢

芸能人としてPRIDEに参戦した唯一の男。05年『男祭り』では同中継の瞬間最高視聴率を叩き出し、大晦日視聴率戦争の功労者に。その後、『HERO'S』や『Dynamite!!』に参戦するが全敗。当時の前田日明HERO'Sスーパーバイザーから「新人なのに挨拶をしない。アマチュアからやってこい!」と激怒される一幕も。07年からは俳優業を再開。ある種、00年代の格闘バブルを象徴する選手であった。

2005.12.31『PRIDE 男祭り 2005 頂―ITADAKI―』
×vsチャールズ・"クレイジー・ホース"・ベネット（1R 4分14秒 アームバー）



柔道

パウエル・ナツラ

五輪に3大会連続出場(うちアトランタ五輪で95kg級金メダルを獲得)をはたし、鳴り物入りでPRIDEデビュー。初戦でアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラとの柔道vs柔術対決に臨むが、TKO負けを喫して総合の洗礼を浴びる。PRIDE戦績は1勝3敗とあって、その真価を発揮するには至らず。今年8月に『戦極』初参戦。

2006.10.21『PRIDE.32』
×vsジョシュ・バーネット(2R 3分04秒 アンクルホールド)
2006.7.1『PRIDE無差別級グランプリ2006 2ndROUND』
○vsエジソン・ドラゴ(1R 4分33秒 アームバー)
2005.12.31『PRIDE 男祭り 2005 頂—ITADAKI—』
×vsエメリヤーエンコ・アレキサンダー
(1R 8分45秒 スリーパーホールド)
2005.6.26『PRIDE GRANDPRIX 2005 2ndROUND』
×vsアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
(1R 8分38秒 TKO)

佐竹雅昭

K-1草創期を支えた功労者。しかし、99年に武蔵戦で不可解な判定負けを喫したのを理由に正道会館を離脱、PRIDEへと戦場を移す。00年には小川直也と"柔道vs空手"対決に挑むも敗戦。現在は「平成武師道」という人間活学塾を設立し、同塾の総長に就任。機会があれば懐かしの「SATA…yarn」の姿を観たいものだ。

2002.4.28『PRIDE.20』
×vsクイントン・"ランペイジ"・ジャクソン(1R 7分07秒 KO)
2001.11.3『PRIDE.17』
×vsセーム・シュルト(1R 2分18秒 TKO)
2001.7.29『PRIDE.15』
×vsイゴール・ボブチャンチン(3R終了 判定3-0)
2001.3.25『PRIDE.13』
×vs安田忠夫(3R終了 判定2-1)
2000.10.31『PRIDE.11』
×vs小川直也(2R 2分01秒 スリーパーホールド)
2000.8.27『PRIDE.10』
○vs村上一成(1R 6分58秒 TKO)
2000.5.1『PRIDE GRANDPRIX 2000 決勝戦』
×vsガイ・メッツァー(2R終了 判定3-0)
2000.1.30『PRIDE GRANDPRIX 2000 開幕戦』
×vsマーク・コールマン(1R 1分14秒 ネックロック)

吉田秀彦

96年のバルセロナ五輪78kg級金メダリスト。02年『Dynamite!』での総合デビューを経てPRIDE参戦をはたし、ミドル級戦線で活躍。リング上で「Gackt〜!」「名倉さ〜ん!」と親交のある芸能人の名前を叫んだり、「ゲッツ!」ポーズを披露するなど、自由奔放な振る舞いを見せる一幕も。PRIDE消滅後は『戦極』に参戦。

2006.12.31『PRIDE 男祭り 2006 —FUMETSU—』
×vsジェームス・トンプソン(1R 7分50秒 TKO)
2006.7.1『PRIDE無差別級グランプリ2006 2ndROUND』
×vsミルコ・クロコップ(1R 7分38秒 TKO)
2006.5.5『PRIDE無差別級グランプリ2006 開幕戦』
○vs西島洋介(1R 2分33秒 トライアングルチョーク)
2005.12.31『PRIDE 男祭り 2005 頂—ITADAKI—』
○vs小川直也(1R 6分04秒 TKO)
2005.8.28『PRIDE GRANDPRIX 2005 決勝戦』
○vsタンク・アボット(1R 7分12秒 片羽絞め)
2005.4.23『PRIDE GRANDPRIX 2005 開幕戦』
×vsヴァンダレイ・シウバ(3R終了 判定1-2)
2004.12.31『PRIDE 男祭り 2004 —SADAME—』
×vsルーロン・ガードナー(3R終了 判定3-0)
2004.6.20『PRIDE GRANDPRIX 2004 2ndROUND』
○vsマーク・ハント(1R 5分25秒 アームバー)
2003.12.31『男祭り2003』
△vsホイス・グレイシー(2R終了 引き分け)
2003.11.9『PRIDE GRANDPRIX 2003 決勝戦』
×vsヴァンダレイ・シウバ(2R終了 判定3-0)
2003.8.10『PRIDE GRANDPRIX 2003 開幕戦』
○vs田村潔司(1R5分06秒 袖車絞め)
2002.11.24『PRIDE.23』
○vsドン・フライ(1R 5分32秒 アームバー)

瀧本 誠

00年のシドニー五輪81kg級金メダリスト。04年大晦日の『男祭り』で総合デビュー、試合後に「総合をなめてました!」と赤裸々にマイクアピールしたのはあまりにも有名。舞台を『戦極』に移してからは連敗中、本人は「限界を感じてます」と早すぎる決断を考えているようだが……?

2007.4.8『PRIDE.34』
○vsゼルグ"弁慶"ガレシック(1R 5分40秒 アームロック)
2006.6.4『PRIDE 武士道 —其の十一—』
×vsゲガール・ムサシ(1R 5分36秒 ドクターストップ)
2005.12.31『PRIDE 男祭り 2005 頂—ITADAKI—』
×菊田早苗(3R終了 判定0-3)
2005.10.23『PRIDE.30』
○vsユン・ドンシク(3R終了 判定3-0)
2005.6.26『PRIDE GRANDPRIX 2005 2ndROUND』
×vs田村潔司(3R終了 判定3-0)
2004.12.31『PRIDE 男祭り 2004 —SADAME—』
○vs戦闘竜(3R終了 判定3-0)

大相撲

大刀光

元前頭16枚目の力士であり、廃業後はプロレスラーとして活動。00年『PRIDE GP』に参戦、入場曲に相撲甚句を使用して会場を盛り上げる。ちなみに同日、控室で煙草をふかしていたためモーリス・スミスに注意されたとか。なお、GP1ヵ月後にEWFなる団体が開催した「誇りグランプリ」では優勝をはたす。

2000.1.30『PRIDE GRANDPRIX 2000 開幕戦』
×vsゲーリー・グッドリッジ(1R 0分51秒 ギロチンチョーク)

レスリング

ルーロン・ガードナー

00年のシドニー五輪でアレキサンダー・カレリンを破って金メダルを獲得。04年大晦日の『男祭り』で吉田秀彦と"金メダリスト対決"に臨み、総合デビュー戦ながらも判定勝ちを収める。残念ながら総合はこの1戦のみで、もっとPRIDEでの活躍を期待されたファイターでもある。

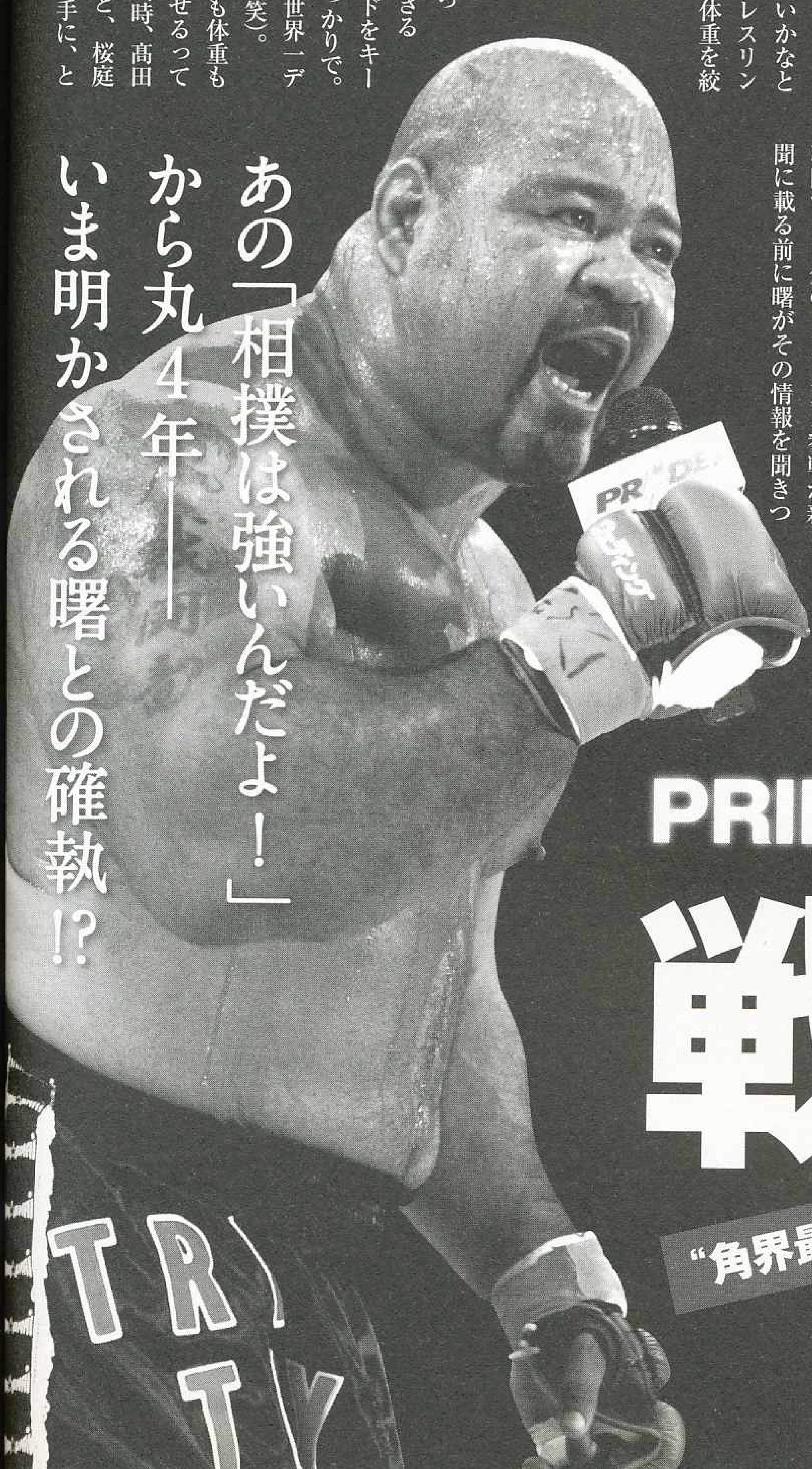
2004.12.31『PRIDE 男祭り 2004 —SADAME—』
○vs吉田秀彦(3R終了 判定3-0)

PRIDEをまたいだ男たち

戦闘竜の場合

“角界最強のケンカ屋”

聞き手／鈴木佑　試合写真／乾晋也



あの「相撲は強いんだよ！」から丸4年——
いま明かされる曙との確執!?

PRIDEには前ページで紹介した大刀光をはじめ、角界からも多数の選手がそれぞれの理由で参戦。ちなみに同じ角界出身の曙がK—1参戦を決めたのは、訪ねてきた谷川貞治FEG代表に支度部屋から外の電柱の側まで連れ出され、いきなり契約書を見せられたという〝力技〟がきっかけだったとか。

では「相撲は強いんだよ！」の一言で、土俵際となっていた〝相撲最強説〟に「待った！」をかけた戦闘竜の場合は、何がきっかけだったのか？　さらにはPRIDE参戦が角界に与えた影響、そして知られざる曙との確執までを激白！

——今回はPRIDEに他ジャンルから参戦した選手として、戦闘竜さんにお話を聞きたいと思います！

戦闘竜　よろしくお願いします。

——戦闘竜さんはPRIDEで力士から総合格闘家に転向したわけですが、そもそものきっかけは？

戦闘竜　自分が03年の11月場所で相撲引退を発表したときに、ちょうど曙がボブ・サップと大晦日に闘うことが話題になっていたんです。そうしたら千代大海が「おまえも転向しろ！　絶対やれるよ」って勧めてきて。

——力士仲間が声をかけてきたわけですね。

戦闘竜　千代大海が当時DSEの社長だった榊原（信行）さんと知り合いだったので、連絡をとってくれて。自分はそのときは冗談で終わるかと思ってたんですけど、榊原社長から本当に電話があったんですよ。

——社長直々に！

戦闘竜　最初は自分も曙に合わせて大晦日デビューって話もあったんですけど、このまま断髪式をやらずに相撲ファンに別れを告げるのは嫌だったから、それはお断りして。じゃないと曙みたいに相撲関係者から嫌われちゃうから（笑）。

——なるほど（笑）。でもデビュー戦が『PRIDE GP』っていうのも破格でしたよね。

戦闘竜　優勝を考えずにとにかく一戦一戦を頑張ろうって思ってましたね。GPっていうのは頭になかったです（笑）。

——そのときは相撲の技術を活かせると思いました？

戦闘竜　自分は相撲時代に張り手でKOすることも少なくなかったから、総合もスタンドから始まるわけだし、スタイル的に合うんじゃないかなとは思いましたね。もともとレスリングもやってたし、練習して体重を絞れば問題ないかなって。

——寝技に対しての抵抗感は？

戦闘竜　GPのときは寝技の練習はほとんどやってなかったです（笑）。相手がジャイアント・シルバだったから、限られた時間でできる対策としてマウントやサイドをキープしてパウンドする練習ばっかりで。

——デビュー戦がいきなり世界一デカい格闘家だったっていう（笑）。

戦闘竜　でも、相撲は身長も体重も関係ないからデカくても倒せるっていう自信はありましたね。当時、高田道場で練習してたんですけど、桜庭（和志）選手や山本（尚憲）選手に、と

にかくパワーは凄いから押さえつければ相手はどうにもならないって。

——PRIDEに参戦したきっかけとして、相撲出身の選手たちが結果を残せてなかったっていうのはありますか？

戦闘竜　それはモチベーションになりましたね。同じ角界出身として結果を出さなきゃいけないって。曙なんかずっと連敗してたし。

——先ほどから曙さんには辛辣ですけど……お二人のあいだに何かあったんですか？

戦闘竜　うん、あった！（キッパリ）。でも、相撲時代は凄い仲よかったんですよ。

——え、じゃあ何が原因で関係が悪くなったんですか？

戦闘竜　自分のPRIDE参戦が新聞に載る前に曙がその情報を聞きつ

自分の姿を見て総合転向に興味を持った力士が相談してきました

けて、本人から連絡が来たんですよ。

——はー、それはまたどういった用件だったんですか？

戦闘竜　「K―1でもおまえをほしいって言ってる、俺が連絡させるよ」って言われて。でも結局K―1側からは連絡がなかったんです。

——う〜ん……どういうことなんでしょうね？

戦闘竜　たぶん同じ角界出身だから、曙はこっちを意識してちょっかい出したのかもしれない。自分は総合の先輩として曙にアドバイスしてもらいたかったんです。でも、こっちからの電話も出てくれなくて……結局それ以降は交流がなくなりました。曙がK―1で無様に負けるたびに、彼を許せない気持ちも大きくなっていきましたね。

——同じ角界出身同士なのにそんなことがあったんですね。

戦闘竜　もうPRIDEもないし、いまだったら言ってもかまわないでしょ（笑）。

——時効だ、と（笑）。戦闘さんがデビューしたときの角界の反響はどうでした？

戦闘竜　魁皇は「これ以上ケガしてほしくない」って気遣ってくれて、千代大海と武蔵丸は絶対いけるよって応援してくれました。

——角界では戦闘竜さんのケンカ最強説ってありましたよね。

戦闘竜　相撲の地方巡業でたまに体育館とかでボクシングを遊び感覚でやったりするんですけど、みんな「戦闘竜には敵わない」って言ってましたね。相撲でも立ち合いで真っ正面からこないで逃げる力士には、支度部屋で「次は絶対潰してやるからな！」とか脅したりして（笑）。

——角界の裏番長ですね（笑）。そんな戦闘竜さんですから、角界でも「あいつなら総合で通用する」って印象があったと思うんですよ。

戦闘竜　自分は（エメリヤーエンコ・）ヒョードルやミルコ（・クロコップ）みたいな戦績は収めてないけど、元力士としては一番結果を残している自負はありますね。

——一番インパクトがあったのは、KO勝利したあとに「相撲は強いんだよ！」っていう名言が飛び出した『PRIDE 武士道』の試合（2004年10月14日・マル・ザ・ツイン・タイガー戦）ですね。

戦闘竜　あれがあったからまだ選手として自信があるんですよ。

——なるほど。いま振り返ってみて、PRIDEに参戦したことは成功だったと思いますか？

戦闘竜　それは凄く思いますね。もともと相撲のときは高齢のファンが多かったんですけど、PRIDEに上がってからは若いファンが増えたし。

——それこそ当時のPRIDEはゴールデンタイムで放送されてましたからね。

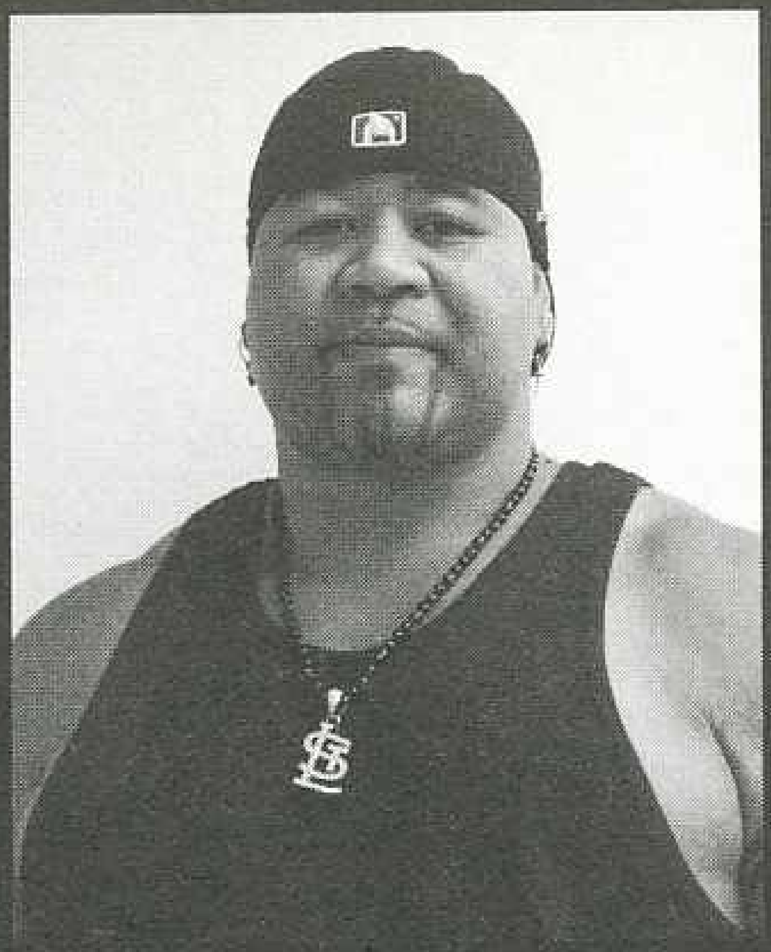
戦闘竜　いい時期に上がれたのは財産ですね。

——逆にPRIDEに悪いイメージってありますか？

戦闘竜　それはないです。ただ、瀧本誠戦（2004年12月31日）やズール戦（2005年10月23日）とか、自分の試合内容で悔いは残りましたけど。PRIDEには本当に続いてほしかったです。

——PRIDEがなくなって次の舞台を探そうとは思いました？

戦闘竜　ほかに大きな舞台は『HERO'S』とK―1しかなかったですから、自分から持ちかけましたよ。で、K―1のオファーをもらって去年出場したんです。



せんとりゅう■本名ヘンリー・アームストロング・ミラー。1969年7月14日、アメリカ出身。15年間にわたり角界で活躍したのち、04年4月の『PRIDE.GP』で総合デビュー。PRIDE消滅後は『ケージ・レージ』やDEEPに出場、07年にはK-1にも参戦。176cm、111kg。

——金泰泳戦ですね（2007年8月5日）。では、機会があればDREAMにも出たい、と。

戦闘竜　そうですね。曙が負けた相手でもいいですよ、ボビー・オロゴンとか。「横綱が芸能人に負けるなよ！」って。

——ホントに辛辣ですね（笑）。ちなみに総合への転向を戦闘竜さんに相談してきた力士はいますか？

戦闘竜　たまに興味を持った若手力士が相談してきましたよ。

——そういうことを考える選手がいたということは、やっぱりPRIDEは角界に影響を及ぼしたんですね。

戦闘竜　そうですね。PRIDEはなくなったけど、もしまだ存続していれば上がりたい力士はいたと思いますよ。いまは『戦極』やDREAMもありますけど。

——どちらの舞台も中軽量級が盛り上がってますけど、ヘビー級選手にも活躍してほしいところですよね、それこそ力士出身のような。

戦闘竜　自分も41〜42歳くらいまでは続けたいと思ってますし。自分は桜庭選手と同じ歳なんですよ。

——まだまだ現役としても頑張りたい、と。ちなみに角界を引退したあとに総合やプロレスに転向すると、相撲協会との付き合いは難しくなったりするんですか？

戦闘竜　仲違いしてる選手もいますけど、自分は応援してもらってますね。「相撲は強いんだよ！」ってマイクアピールは、角界にとってありがたかったって、関係者にも言ってもらえましたし。

——それは選手冥利につきますね！

戦闘竜　あのあと、力士の結婚式とかに行くと、偉い親方なんかが「こっち来い！」って呼ぶんですよ。それで緊張して向かうと「おまえ、よく頑張ってるな！」って励ましてもらえたり。

——角界としても戦闘竜さんのPRIDEでの活躍に注目してたんですね。たまにスポーツ新聞とかで「朝青龍が総合に転向か!?」なんて記事が載ったりしますけど、戦闘竜さんから見て総合で通用しそうな力士っていますか？

戦闘竜　何人か思い当たりますけど、相撲と総合は全然違う競技ですからね。使う筋肉も違うし、アマチュアの力士や筋肉質でやせ型の力士のほうが合うかも。

——相撲出身者はまず体型を変化させないとダメだ、と。

戦闘竜　あとはディフェンス技術。自分はいつか道場やジムを開きたいと思ってるんですよ。相撲を引退した力士で総合やK―1をやりたい選手にいつでも指導できるような道場を作りたいなって。

——指導者としての道も考えてるわけですね。

戦闘竜　そうです。だからスポンサーも探さないと（笑）。力士出身の強い選手を育ててみたいですね。

——大相撲と総合への恩返しとして今後は後進の育成をしたい、と。

戦闘竜　はい。いま、相撲は大麻問題とかでイメージが悪くなってるんで、それを自分の力で少しでもよくなるように協力したい。強い選手を育てていけば総合も相撲協会も盛り上がると思いますし。

——「相撲は強いんだよ！」を、これからも実践していきたいわけですね。

戦闘竜　それを他の力士にも試合に勝って言ってほしいですね。まぁ、曙は言えないだろうけど（笑）。

【08年8月22日／都内・『落合南長崎』駅近くの『COCOS』にて収録】

"修斗"から見たPRIDEの功罪

「修斗の選手育成力に頼らないとPRIDEは興行できないんだろっていう感覚はありました」



日本修斗協会事務局長

若林太郎

1997.10.11-2007.10.4
PRIDEは何を変えたのか？

五味隆典に桜井"マッハ"速人、そして青木真也――PRIDE武士道で主軸となったのは、競技性を重んじる修斗の出身選手たちだった。興行としてメガイベントと化すも、その激闘の数々がまるで夢物語だったかのように消滅したPRIDEを、"修斗の番頭さん"はどのように見つめていたのか？　若林太郎氏が"世界最高峰のリング"の功罪を語りつくす！

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／乾晋也

――今日は「PRIDEの功罪」というテーマで、PRIDEとはある意味対極にいたともいえる若林さんに、あえて語ってもらおうかな、と（笑）。

若林　あえてね（笑）。まあ、私の場合は道場サイドということに加えて、修斗協会の事務局長やアマチュア普及委員長という役割もあるので、その立ち位置によってとらえ方が若干違うところがあるんですよね。プラス個人的な感情もありますし。

――難しいとは思いますがすべてを引っくるめた観点から、単純に功と罪のどちらが大きかったと思いますか？

若林　う～ん……（熟考）、プラマイゼロですかね。

――功もあるけど、同じぐらい罪も多い、と（笑）。

若林　功の部分で言うと、メディア展開が巧みな人たちが運営に関わったことで、総合を大きなイベントとして定着させることに成功したと思います。一般世間に対する周知という点では大きな意味があったんじゃないですかね。

――選手の知名度はもちろん、総合格闘技自体の認知度は確実に上がりましたよね。

若林　もちろんそれは待遇面にも反映されたでしょうし、選手にとっては大きな舞台で注目されたのは凄くいいことだったんじゃないかなと思いますよ。

――プロとしての評価なわけですしね。

若林　ただ結局、どんなにいいことでも継続しないと意味がないんですよ。それをすべて打ち切るようなかたちでPRIDEはなくなってしまった。さらにマイナスのイメージも残してしまったという意味では、功の部分が罪に相殺されたイメージが僕の中にはありますね。

――では、PRIDEが1997年に誕生したときはどのように感じました？

若林　いや、もう、「新しいU―JAPAN？」って印象でした（笑）。

――また、うさん臭い打ち上げ花火の格闘技イベントが出てきたぞ、と（笑）。

若林　ホントにそんな感じでしょう。マッチメイクもルールも進行もメチャクチャだし。でも、ヒクソン・グレイシーvs髙田延彦は技術的な論議は置いといて、入場シーン一つとってもビッグイベント感がありましたよね。

――あの時点でも史上最大規模の総合格闘技イベントではありましたよね。

若林　でも、それを除けば三流イベントだったと思いますよ。なんとなく有名な選手を寄せ集めてるだけで世界観はないし。大会自体がヒクソンvs髙田戦ありきで、その辻褄合わせでやったってことでしょうし。

――まあ、第2回大会があるとは思いませんでしたからね。だから『PRIDE・2』開催の話を聞いたときに、『PRIDE・1』ってK―1みたいなイベント名じゃないんだって驚いた記憶があります（笑）。

若林　一番じゃなくて二番を目指すイベントなのか、みたいなね（笑）。ただ、僕はPRIDEは会場でほとんど観てないんですよ。長すぎる演出が嫌いだから、早送りできないとどうも（笑）。アマ修斗の大会が増えて、PRIDEと開催日が重なることが多かったのも観に行かなかった要因の一つですけどね。

――PRIDEに対する認識が初期と比べて変わった時期はありました？

若林　五味（隆典）選手をエースとして成り立ったあとのPRIDE武士道は、競技的なほうに向かってましたよね。アメリカの若い選手や関係者からは「PRIDE

PRIDEに修斗の選手が出場したときは エセ修斗やるんだって思いましたよ

武士道こそ最高のイベントだ」って声もありましたし、僕もいいイベントに見えるだろうなっていうのはありました。でも、PRIDE武士道も最初はメチャクチャでしたけどね（笑）。

——中軽量級に特化してない時期ですね。

若林　特化したあとも「うわ、競技志向になってきちゃったよ、肝心なことわかってないのに」みたいな思いはありましたけどね。あと、出場選手の顔ぶれを見て思ったのは、下手したらDEEPより修斗に近いんじゃないの？　って（笑）。まぁ、なんでも継続性を考えたら競技的にしていかないとどうしようもないもんなんですよね、基本的に。

——では逆にPRIDE武士道が誕生する以前のPRIDEは重量級中心でしたけど、修斗にとっては対岸の出来事って感じでした？

若林　なんていうんですかね……たとえばK−1が成功した一つのポイントとして、「世界最強」というわかりやすいキーワードを使ったことがあると思うんです。でも、じつはそれは禁断の言葉で、全人類の中で一番強いことをすべての選手が目指してしまうと、体重差のあるマッチメイクも組まないといけなくなる。そうすると選手が壊れる可能性が非常に高くなるわけで。たとえばボクシングの場合の世界最強は、それぞれの階級の中でという認識が観る側にもあると思うんです。その点、PRIDEは「世界最強＝無差別」というのをパッケージとして推し進めてしまった弊害が凄くあったんじゃないですかね。で、いまさらになって総合は中量級が熱いとか言われても、個人的には何をいまさらって感覚はありますね。

——いまの専門誌にありがちな論調というか。でも、総合格闘技というものを一気に広めるためには、無差別も仕方がない部分もあると思いますけど。

若林　だからいびつなんですよ。レベルの高い格闘技は、ある程度の適正体重という括りがあってこそ盛り上がるんだから。柔道は別として、ほかの格闘技でも日本は重量級で結果は出てないわけですし。いまさらマスコミが「中量級の時代」とか謳ってるのは「いまさらやっと気づきました」って言ってるようなもんだと思いますね。

——べつにいまじゃないだろう、と。

若林　そういう世界観がPRIDEにあったことで、代理店やテレビ局側は自ずと「世界最強」というコンセプトを求めてきますよね。それによって選手が寿命を縮めてしまったり、ケガによりチャンスを逃してしまったりっていうのがじつは相当数あったと思うんですよ。

——まあ、そういう犠牲の上に繁栄があったことは確かですよね。

若林　一部には山本〝KID〟徳郁選手のように階級を越えて対応できる選手もいますけど、それは特殊なケースですよね。

——興行優先で選手の管理面がうまく機能してなかった、と。

若林　だからもう少しスターも作れたはずだし、選手も大事にできたという意味で、そこの部分は〝罪〟だと思いますね。やっぱり打撃のある競技で無差別は考えられないですよ。

——ダメージも残りやすく危険性も高いことは確かではありますね。

若林　試合頻度やマッチメイクを含めて、プロレス的な露出を展開していったことが選手を壊した部分はあると思うんですよね。それは根本的には競技が発展していくうえでは正しくない。もちろん単純な方法論として、違う階級同士の王者を闘わせれば盛り上がるのはわかります。でも、イベントを続けていくという前提ならば、それぞれの試合ごとにテーマを見つけたり、試合間隔を空けたり、選手数を増やすようなかたちにしていかないと最終的な発展はないので。そういうことを踏まえて、いまDREAMや『戦極』で中量級の流れが受け継がれてるとは思うんですけど、個人的にはちょっと遅すぎた感はありますね。

——そういう興行と競技のせめぎ合いの中で、後者の比重が大きくなっていくと、興行規模が小さくなってしまう問題もありましたよね。

若林　いや、結局単純な話、アメリカにお金で負けただけじゃないですか？　でも、いまの流れとして青木真也vs宇野薫やエディ・アルバレスvsヨアキム・ハンセンが受け入れられているのはいいことだと思いますけどね。

——それもPRIDEを観続けることでファンの目が肥えていったのはありますよね。

若林　そうですね。UWFがあったからいまの総合への道が開かれたっていう言い訳ができるように。とにかく無理なマッチメイクで誰も死ななくてよかったなっていう思いが強いですね。

——PRIDE武士道に多くの修斗の選手が出場していったときはどんな気持ちでした？

若林　あぁ、エセ修斗やるんだなって思いましたよ（笑）。DEEPが誕生して以降、総合のイベントは修斗の選手を使えばなんとかなるという流れができてましたからね。ただ、いまもそうですけど選手を引っぱられてもあんまり不安はないんですよね。そりゃあムカつく瞬間とかはありますよ。まあていのいい引き抜きではありましたから。でも修斗で育った選手に高い契約金を払ってくれるんだから、選手にとってはいいことだっていう部分もありますし。

——それは、選手サイドにとったら、修斗がやってくれないことをPRIDEはやってくれていたという部分でもありますよね。

若林　現時点ではそうですね。ただ結局、たとえばテレビサイドのおかしな要求を飲むとか、ヤクザと付き合うとか、そういうことを僕らはしたくないんで（キッパリ）。そういうことをPRIDEはやってきたんじゃないですか？　これは書けるかどうか知らないですけど。

——週刊誌でさんざん取り上げられた部分ですね。

若林　僕らはそういうのが嫌なんですよ。理不尽な要求を飲んだり、ヤクザとお友だちになってまでお金持ちにはなりたくない。でもこういうことをいくら言っても結局報じてもらえないじゃないですか？『kamipro』ですら『週刊現代』を肯定したり、事実関係を調査掲載したりできないわけで。

TARO WAKABAYASHI

PRIDEは修斗王者の次なる目標の舞台として洗脳しようとしたと思います

――なんでウチが週刊誌記事の事実調査をしなきゃいけないんですか（笑）。

若林　でも、それを素通りして「PRIDEの功罪」を語ることに意味があるのか？っていうのは僕にはありますけどね。書けますすか？　書けないじゃないですか？黒い交際の話だってみんな陰ではしてたのに。

――でも、皆さん聞きかじった噂話をしてるだけですけどね。

若林　こういうことを言うと、そんなのは青臭い意見だって批判する人がいるのもわかるんです。べつにどこで誰がヤクザさんと付き合おうと、それは彼らの自由ですから。それはそれで勝手にやってもらえばいいかなっていう部分もあります。僕らは僕らで選手を作るシステムを完璧にして、かつ大きなイベントを手がけられる人間をこれから育成していけばいいわけですから。でもPRIDEがなくなったときには「ざまぁみろ！」とはまったく思わなかったですね。なくなることのマイナスのほうが大きいと思いましたし。

――マスから総合が終わったと思われる危険性が極めて高いですよね。

若林　そういう可能性もありましたよね。あとは、いまアマ修斗でも17～18歳とか若い平成生まれの選手がいるんですね。彼らの中にはヒクソンを知らないで、ヴァンダレイ・シウバを観て総合にハマってたりするんですよ。きっと僕たちがプロレスを観て猪木最強だと思って格闘技にのめり込んだのと同じで、テレビでPRIDEが放送してなければジムの門を叩かなかった子もいるでしょうから。そういう意味では、ゴールデンで放映する総合は昔でいうプロレスの役目をはたしてますよね。

――いまはそうやってテレビでPRIDEを観ていた人たちが修斗のジムに通い、選手になるケースが凄く多いんじゃないですか？

若林　そういう点で多少は儲けさせてもらったのかもしれませんね（笑）。そういったところでは〝功〟の部分も大きかったんじゃないですかね。だからPRIDEに選手を引っぱられても、じつは悔しくもないし脅威でもないし、頑張ってくださいっていうだけなのが正直なところです。

――PRIDEという舞台は修斗王者の次の目標みたいなところがあったと思うんですが？

若林　そういう洗脳をしようとしていたとは思います。でも、どこのイベントの王者も引き抜くんだから、修斗にかぎったことじゃないんでしょうけど（笑）。

――でも修斗もPRIDEの末期には協力関係を築いていたみたいなところはありましたよね？

若林　修斗としての協力関係は、一切なかったですね（キッパリ）。PRIDE側は



第8代修斗世界ウェルター級王者の川尻達也は『PRIDE武士道-其の七-』（05年5月22日）でPRIDE初登場。その参戦表明会見で、榊原信行DSE社長（当時）は「現役の修斗王者にPRIDEに出てもらうことは、PRIDE設立当初からの悲願」と語った。

二人の王者がタイトル返上 興行としての修斗の課題

PRIDE武士道のリングには修斗で活躍した選手が多数参戦したが、その中でも〝PRIDE愛〟を貫き通したファイターといえば、ひたすらその再開を待ち続けた川尻達也、石田光洋であろう。この二人の共通点、それはPRIDE参戦時に現役の修斗世界王者であったことだ（ちなみに青木真也もPRIDE参戦時に現役王者であった）。

しかし、そのことによって修斗が興行として少なからず〝打撃〟を受けた事実がある。06年の『男祭り』、川尻はギルバート・メレンデス戦で左母指中手骨基部骨折（全治2カ月）となり、出場が予定されていた07年2月の修斗横浜大会を欠場。さらに保持していた世界ウェルター級王座も防衛期限を越えるために返上することに。

そして石田光洋も2月の修斗へ出場予定だったが、『男祭り』で五味隆典にKO負け。修斗コミッションの「KO負けしている選手は60日間出場停止」という規約により、自動的に防衛期限を守れなくなったため、川尻同様に不本意なかたちで環太平洋ウェルター級王座を返上。

現在、修斗世界ライトヘビー級王者のシアー・バハドゥルザダが『戦極』のリングに参戦しているが、いくら団体やイベントの顔役である王者と言えども、興行の規模や待遇面などから出場するリングのプライオリティを決めるのは、やむをえないことなのかも知れない。今後、プロモーションとしての修斗が、この問題にどう取り組むのか注目である。



選手には現役期間だけでなく最終的に

そういうふうに演出してたみたいですが、

でも、それと競技的なことや選手の育成は

そういうふうに演出してたみたいですが、実質的な協力関係はなかったです。サスティン代表の坂本さんは毎回のようにPRIDEを観に行ってましたけど、修斗協会として協力関係になったことは一回もないですね。映像を貸すとかそういうレベルでの協力はしてますけど。

——あの協力体制というのはDSEとサスティンの関係だったと。

若林　とくにサスティンも協力関係だったとは聞いていません。が、付き合いぐらいはあったでしょうね。

——では、若林さんからすると、サスティンは何をやってんだろっていう感じですか？

若林　興行的に協力関係が必要ならば頑張ってください、と。それはプロモーターの一つの生き残り方法ですし、修斗協会からNGを出してるわけではないですから。たとえばもし、坂本さんがPRIDEと協力して修斗で何かやろうとしてもダメなものはダメ、っていうだけの話で。

——そのあたりは一線を引いていたわけですね。

若林　啖呵を切らせてもらえるなら、PRIDEは一生懸命DEEPを畑にしようとしてたけど、結局は修斗の選手育成力に頼らなければ、興行できないんだろっていう感覚はありましたね。

——その修斗はサスティンのような興行会社と修斗協会というコミッションから成り立ってるわけですが、これからプロ興行としてどのように運営していくのがベターだと思いますか？

若林　興行は大きいものも必要ですから、DREAMや『戦極』、もしくはUFCのようなものを目指すべきだと思いますよ。それは単純にショービジネスですから。

でも、それと競技的なことや選手の育成はまた別のことで。優先順位をつけたときにPRIDEは〝興行〟を選んだわけですよね。僕らの場合は最初に選手育成とか競技という軸を大切にしよう、興行的な軸に目を向けるのはその次という認識なんです。とりあえずはお金持ちにはなってなくても食べていける状態なんだから、まずは競技性の確立を目指すべきということですよ。



わかばやし・たろう■1965年7月8日、大阪府出身の北海道育ち。日大芸術学部を卒業後、電通ブロックスに入社。92年にリングスに入社するも数ヵ月で退社。オフィス・ミツルギを経て、設立当初のK-1に携わる。94年からは修斗のマッチメイクやイベントディレクターを務める。現在の肩書きは日本修斗協会会長&アマチュア普及委員長。同時に番頭としてパラエストラ東京を運営。

——でも選手は、現役の期間は短いんだから、強い選手ほどお金持ちを目指しますよね？

若林　もちろんそれはそうですよ。ただ結局、選手には最終的に人生というスパンで考えてほしいんですよね。PRIDEに引き抜かれたとか言われましたけど、選手が戻ってこられる場所にすれば勝ちだっていうのはありましたから。彼らは選手育成に価値観を見いだせなかったというか、地道なことやらなくたって修斗から

TARO WAKABAYASHI

選手には現役期間だけでなく最終的に人生というスパンで考えてほしいんです

引っぱっちゃえばいいっていう意識だったんでしょうね。一応、DEEPもアマチュアの大会を開催してますけど。

——選手育成がなければ、それはどんなに隆盛しても一時的なものでしかない、と。

若林　僕らは育成面だけじゃなく、選手が現役引退後に開いた道場が成り立っていくような世界観を構築することが一つの目標なんです。選手を作っている以上、それはたとえば僕らが死んだあとも続けて残っていくようなかたちにしないと。リッチになれるかどうかは、そのあとに考えるべきことで。

——では、いま目指そうとしているのはそういった土台をしっかりしたものに作り上げることだと？

若林　僕はそうですね。いまのままアマチュアは競技的な部分を整備していく。ただプロとしては、僕自身は東京なんかのイベントを大きくしていきたいっていうのはありますよ。そのほかに地方都市でも小さい興行でいいから年一回やるとか。だからその両面をどっちも転がしていくっていうことでしょうね。

——プロ興行としては、もう少し大きくしていきたいという気持ちはあるわけですね。

若林　じつは修斗のプロ選手って350人くらいいるんですよ。それに毎年30～40人ずつプロになっていて。デビューしたなら完全な地元じゃなくても、地元に近い地区大会や大都市で選手が現役中に最低一回、できれば年に一回は友だちや親族の前で試合ができるようなプロ興行のベースを作りたいんですよね。だからいまは札幌、仙台、名古屋、大阪、広島、博多、などで年一回ずつ大会を開催することを目指してます。

——となると地域密着型というか、本当にPRIDEとは真逆のベクトルで格闘技の発展を目指しているというか。

若林　そうですね。面倒くさいし利益にならないし、ビジネスとして考えたときに正直あんまりうまみはないのかなとも思うんですよ。でも、僕には道場というベースがあるし、これは修斗に対する〝愛〟なんで（笑）。

——なるほど（笑）。

若林　あとは僕自身にブランド志向はないですし、そういう意味で修斗は僕の適正に合った場所なんでしょうね、過去に関わったことのあるリングスでもK−1でもなく。まぁ、修斗にしろ、なくなりはしましたけどPRIDEにしろ、みんなそれぞれ世の中での役割があるということなんじゃないですか。

——実際に修斗みたいなものがなかったら格闘技界は成り立たないって部分は大きいですよね。

若林　いや、そんなことないですよ。僕らがやらなかったら、もしかしたらほかの誰かがやってたかもしれないし。修斗がなかったら格闘技界は……なんていう、おごりたかぶりはまったくありませんから（笑）。

【08年8月17日(日)／都内某所にて収録】

PRIDEが総合の発展にもたらしたものとは?

日本レスリング協会会長・国際レスリング連盟副会長

福田富昭が語る 競技としての総合格闘技

古くよりマット界と交流が深く、数々の逸材を輩出してきたレスリング界。かつてはPRIDEとも提携を結び、協力体制を築いていた。ここでは日本レスリング協会会長の福田富昭氏に、当時のPRIDEとレスリング界の関係を振り返ってもらいながら、PRIDEは総合の発展においてどんな役割をはたしたのか語ってもらった。

文／鈴木佑　写真／乾晋也



北京五輪に沸いた今夏、格闘技界にとって注目に値する出来事があった。8月10日、北京市内において国際レスリング連盟（FILA）が総会を開き、「FILAはあらゆる格闘技を統括する」との方針を確認。その中で、ビーチレスリングやグラップリング、ベルトレスリングや各国の民族格闘技に加え、FILAが公認するレスリングスタイルの種目として、総合格闘技（MMA）が初めて正式に採択されたのだ。FILAでは3年以内に、公認するすべてのレスリングスタイルの世界選手権をスタートさせたい意向を持っているだけに、これからの総合の発展に大きな可能性が生まれたかたちだ。将来的に総合が五輪種目として認可されることも、まったくの夢物語であるとは言えないだろう。

レスリング界は以前よりプロレスや総合格闘技と深いつながりを持ち、後期のPRIDEとも協力体制を築いていた。ここでは日本レスリング協会会長であると同時にFILAの理事も務める福田富昭氏の証言をもとに、PRIDEとレスリング界の蜜月期がどのようなものであったか、そしてその関係性は結果的に総合に何をもたらしたのか振り返ってみる。

1997.10.11-2007.10.4
PRIDEは何を変えたのか?

PRIDEがまさに絶頂期にあった04年大晦日の『男祭り』。その日、前述の福田氏とFILAの会長ラファエル・マルティニティ氏がリングに上がり、FILAとPRIDEを運営するDSEが提携し、選手派遣などで協力体制をとっていくことを発表した。この日はシドニー五輪レスリング金メダリストのルーロン・ガードナーが吉田秀彦との金メダル対決を制したこともあり、今後のレスリング界の強豪によるPRIDE来襲にファンの期待も高まった。

福田氏はPRIDEとFILAが結びついた経緯をこう振り返る。

「きっかけとしては、世界戦略を当時進めていたPRIDEから話を持ちかけられたことですね。ご存知のとおり、もともとレスリングからはプロレスに転向するケースは多かったのですが、まだ総合への転身は少なかった。レスリング協会としても、選手のために総合への道も開拓しようと考えていた時期だったこともあり、提携に至ったわけです」。世界最高峰のリングにふさわしい強豪を発掘しようとするPRIDE側と、レスリング選手の新たな活躍の場を広げようとしていたレスリング協会の思惑が一致したわけだ。

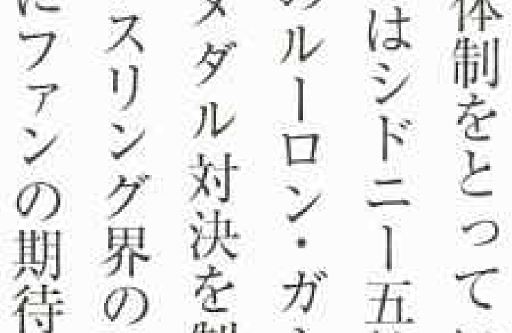
インドアスポーツとしては大規模となる4～5万人の観衆を集め、異常なまでの熱を生み出していたPRIDE。その独特な空間に接したラファエル氏の様子を「これだけのファンを集められるとは凄いスポーツだ、今後の展開を考えなければと興奮してましたね」と、福田会長は当時のPRIDE隆盛を懐かしむように語る。

FILAとの提携により、榊原信行DSE代表も05年3月にウズベキスタンで開催されたレスリングのワールドカップや、同年5月に中国で開催されたアジア選手権を視察。レスリング界との関係性をより確固たるものにしていった。

同年10月21日には、榊原社長はFILA主催の〝パンクラチオン〟（サブミッション・組み技の世界最強を決める大会）を、DSEが制作・運営する意向を明言。「FILAがやるからには世界中のレスラーが参加し、（エメリヤーエンコ・）ヒョードルや（アントニオ・ホドリゴ・）ノゲイラなどのプロ選手も出場することになるでしょう」と、その壮大な構想を発表した。

総合にとどまらず、さまざまな局面でファイターたちがボーダレスに活躍できるように、DSEとFILAは格闘技を取り巻く環境を整備していく。

ビーチレスリングに五味隆典が電撃参戦!?



文中で「五味をビーチレスリングの国際大会に出場させたい」と発言しているように、レスリング協会が認可するレスリングスタイルの中でも、福田氏がとくに力を注いでいるのがビーチレスリングだ。レスリングの普及を図る目的で福田氏自身が発案したもので、05年から全日本トーナメントが開催されている。第1回大会には永田裕志や中西学がゲスト出演、昨年は五味と山本KIDがそれぞれのチームを率いて参戦（結果はKIDチームの勝利）。ビーチレスリングは今年10月26日にインドネシアのバリ島で開催される『第1回アジアビーチゲームス』（主催／アジアオリンピック評議会）で、ビーチバレーやトライアスロンなどと同じように一競技として採択。また、日本オリンピック委員会（JOC）後援によるジュニアオリンピックでも、ビーチレスリングは競技種目として認可を受けている。徐々に認知が広まっているレスリングスタイルだけに、これから総合格闘家やプロレスラーの参加も充分に考えられる“一般スポーツ”だ。五味がビーチの世界王者になる日もそう遠くはない?

翌06年の4月12日、山本〝KID〞郁徳
を絶やしてはならないと思い立った福田
琢磨していますが、招聘している選手はア
過去にはレスリング協会としてプロ興

翌06年の4月12日、山本〝KID〟郁徳を輩出したレスリングの強豪校・山梨学院大レスリング部が、世界初のパンクラチオンチームを結成。前年のDSEとFILAのパンクラチオン構想を受けるかたちで、そのチーム発足式には高田延彦PRIDE統括本部長らDSE関係者が出席。

未来のPRIDEファイター育成につながるこの試みに高田本部長はエールを送り、DSEが全面的にバックアップをすることを発表した。総合の今後の発展を見据えて、DSEとレスリング界はますますつながりを強化していった。

だが同年6月5日、フジテレビがDSEに契約の全面解除を通告、俗に言う〝フジテレビショック〟が発生する。それに伴うスポンサー離れによって大揺れとなるDSEであったが、日本レスリング協会として福田氏は「我々は変わらずPRIDEをバックアップしていく」と、協力維持の声明を発表。選手交流において需要と供給の太いパイプを持った両組織の関係性の深さをうかがわせた。

しかし、翌07年3月27日、存亡危機に陥ったPRIDEはUFCを運営するズッファ社のオーナー、ロレンゾ・フェティータ氏に身売り。その後は大会が一向に開催されず、さらにノゲイラやヴァンダレイ・シウバをはじめ、外国人選手は次々にUFCと契約。そして同年10月4日にはPRIDE日本事務所が突如閉鎖、実質的に〝世界最高峰のリング〟は消滅してしまう。福田氏は「結局、PRIDEがああいう自体になり、二つの組織のあいだで実現に向けていろいろと動いていた話もすべて立ち消えていったわけです」と、その協力関係の終焉を無念そうに振り返る。

このPRIDE消滅を受け、総合の火種を絶やしてはならないと思い立った福田氏は、日本の総合のさらなる発展のために日本総合格闘技協会を発足。PRIDE崩壊の理由の一つとされる資金面や運営面の不透明な部分をなくすため〝公明正大〟を旗印に、総合の世界に本格的に踏み込むかたちとなった。最終的には「真剣勝負である総合格闘技が一般新聞紙上やNHKで取り上げられるように競技として確立させる」と〝一般スポーツ化〟を目指し、現在は今年3月に旗揚げした『戦極』と協力体制を敷いている。



04年の『男祭り』のリングでラファエル氏は「世界でもっともレベルの高いPRIDEのリングへ、世界中のオリンピックのメダリストたちを送り込みます」と宣言。福田氏も「本当のレスリングの強さをこのリングで証明します」とアピールした。

福田氏はその活動と並行して、冒頭にあるようにFILAで総合が格闘技の一種目として採択されるために尽力。今後のビジョンについて「FILA主催で総合の国際大会を将来的には開催したい。もちろん試行錯誤を繰り返しながら、先を見据えて取り組んでいくことが重要です。現在、日本ではDREAMと『戦極』が切磋

総合を広く一般に普及させたという意味で PRIDEの存在意義は大きかった

琢磨していますが、招聘している選手はアメリカやブラジルなど限られた国が多い。そうではなく、さまざまな国からも参加できるように総合を国際的な視野を持ったスポーツというものに持っていければと考えています」と語る。

〝興行〟として華々しいまでの規模を誇ったPRIDE。いま福田氏は、PRIDEが広く一般に浸透させた総合への認識を基盤に、さらに総合が競技として確立するように取り組んでいる。「PRIDEはスタートが興行であり、ショーでした。しかし、本当の競技として確立させるためには、ショーではなくスポーツとして運営していくことが重要です。そのほうが息も長いでしょうし、そこにファンがついてくるような格好にしなければならない。商売として最初から成立させようとすると、これは難しいですよ」

女子レスリングの創設に初期から関わり続け、五輪種目にまで発展させた福田氏だけに重みのある発言だ。

「女子レスリングだって84年から着手して、04年に五輪の正式種目にするまでに20年かかりましたからね。最初は選手も一人、二人からのスタートで世界王者を出すまでには5年間待たなければならなかった。でも、王者が一人誕生するとあとがどんどん続いて、世界選手権で活躍するようになる。その世界選手権も何十ヵ国と参加するようになり、五輪種目となっていったわけです。ただ、まったくゼロからのスタートだった女子レスリングとは異なり、総合の場合は全国のクラブの数や選手人口など基盤がありますからね。それに既存のプロ興行と協力していくことも考えられますし、そういった意味で総合は大きな可能性を秘めていると思います」

過去にはレスリング協会としてプロ興行との協力のもと、さまざまなイベントを手がけたこともある福田氏。レスリング協会はアマとプロの敷居が存在しない〝風通しのいい〟組織ということもあり、臨機応変な試みが期待される。

「いろいろ仕掛けていこうと考えていますよ。たとえばビーチレスリングの国際大会に五味隆典を日本代表として出場させるとか。山本KIDのアマレス出場だって、僕が声をかけたことで実現した経緯もありますし」

総合の競技化を目指しつつ、興行的にも注目を集めるような仕掛けも視野に入れている福田会長は、「そもそもPRIDEとの提携も、いまお話ししたような多岐に渡る構想があってのことでした。お互いの協力の輪を世界に広げ、興行としても競技としてもより大きなものにしていこうとしたわけです。しかし、PRIDEが志半ばであのような終焉を迎えたので仕切り直しとなった。でも今回、総合がFILAで認可されたということは、総合を広く一般に普及させたという意味で、PRIDEの存在意義は大きかったということだと思います」と語る。

総合を〝興行〟と〝競技〟の側面から見たときに、メガイベントとして〝興行〟の部分ばかりが取り沙汰されるPRIDEだが、レスリング協会との可能性を考えると、結果的に〝競技〟としての発展にも大きな役割をはたしたと言えるのではないだろうか。

【08年9月27日／都内・某所にて収録】

ふくだ・とみあき■1941年12月29日、東京都出身。65年のレスリングフリースタイル・バンダム級で優勝。現役引退後は指導者となり、84年のロス五輪ではフリースタイル監督を務めた。03年日本レスリング協会会長に就任。07年10月、日本総合格闘技協会の発足とともに会長に就任・FILAの副会長も務める。

kamipro SHOPPING

Back Number

[kamipre特選劇場]

特集主義第2弾「悪役とは何か?」現代の各界のヒールを徹底分析!!



No.128 亀田興毅インタビュー

リニューアルした特集主義第2弾は"悪役特集"! 95ページにわたり、マット界、ボクシング界、柔道界、芸能界、各界の悪役を業界の著名人がぶった斬り! その表紙&巻頭を飾ったのが日本の国民的悪役、亀田興毅!! 希代の大ヒールがその胸中を存分に語った。

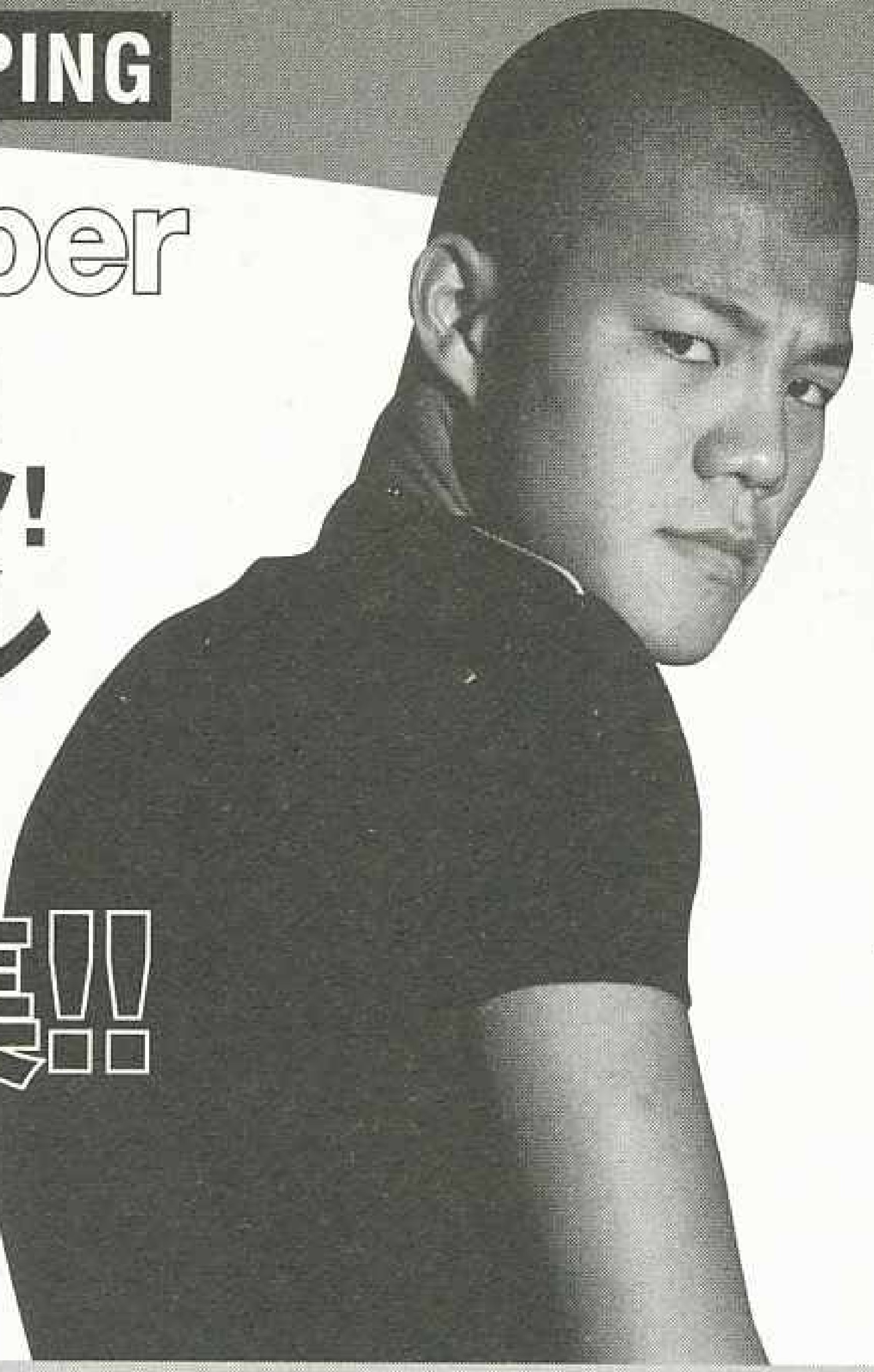


江夏豊インタビュー

さらには野球界の"憎まれ役"江夏豊にも取材を敢行! 腕一本でノシ上がり、"20世紀最高の投手"と称された大投手が"一匹狼の流儀"を激白! そのほかにも長州力、デーモン小暮、梨元勝、ミスター高橋、やくみつるが登場し、各界の"悪役"を徹底分析!

シャー、オラーッ!! 見てみぃ!! このメンツ!

リニューアル第2弾は"悪役(ヒール)"特集!!



悪役(ヒール)はツライで…

注 **No.92** 以降の「Kamipro」は http://www.enterbrain.co.jp でお買い求めください。

元祖! 紙のプロレス Back Number すべて50%OFF!!

No.14 ~~780yen~~⇨390yen
特集 神秘とは何か?
佐山聡・大槻ケンヂ・プロボディガード清水白鳳・鈴木みのるたち格闘神秘を膨らます!/遠藤幸吉インタビュー

No.15 ~~780yen~~⇨390yen
特集 インディペンデントの逆襲
あんた誰? 山口昇試練のインディー・レスラー10番勝負!/K-1とは何か? 石井館長・ターザン山本・サダハルンバ

No.17 ~~780yen~~⇨390yen
特集 実況パワフル北朝鮮
あの北朝鮮での「平和の祭典」を語りまくる! アントニオ猪木&長島勝司・村松友視・破壊王・ブル中野

パンクラス公式読本「矛」「盾」 ~~1260yen~~⇨630yen
97年当時のパンクラシストが勢ぞろい!! ゴッチさん、佐山聡、なぜか馬場さんも登場するパンクラス公式読本二部作!!

紙のプロレス RADICAL Back Number No.16➡No.87

「紙のプロレスRADICAL」のバックナンバーは電話で注文できます!
03-5368-1797 [販売元]㈱ダブルクロス (平日13:00〜19:00)

No.16 1999.03 780yen
格闘ノストラダムス!
[表紙:前田日明]前田道場新エース・金原弘光/怪物か!? それとも……藤田和之座談会/壮絶なる格闘人生・藤原敏男

No.32 2000.10 840yen
"新"プロレスとは何か?
[表紙:小川直也]田村潔司に快勝! A・ホドリゴ・ノゲイラ/ドラゴンの大爆笑10 藤波語録/ラッシャー木村

No.34 2001.01 840yen
『猪木祭り』いよいよ開幕ーッ!
[表紙:小川直也]田村潔司に快勝! ノゲイラインタビュー/ドラゴンの大爆笑10 藤波語録/ボブ&オバチャンチン

No.35 2001.02 840yen
純プロレスを徹底検証!
[表紙:サクマシン(イラスト)]ZERO-ONE本格始動 橋本真也/プロレススーパースター列伝 ジョー樋口/杉浦貴

No.36 2001.02 840yen
燃えよ、闘魂の火種!!
[表紙:橋本真也(イラスト)]ノアから独立! 高山善廣を確認せよ!!/ヴォルク・ハン——ノゲイラに狼の伝言

No.38 2001.05 840yen
小川直也は是か非か?
[表紙:髙田延彦(イラスト)]忘れ物の正体は。髙田延彦/ヴォルク・ハンの最強の遺伝子 E・ヒョードル

No.39 2001.06 840yen
前田日明は是か非か?
[表紙:前田日明]前田道場新エース・金原弘光/怪物か!? それとも……藤田和之座談会/壮絶なる格闘人生・藤原敏男

No.40 2001.07 880yen
地上最強のプロレスとは?
[表紙:アントニオ猪木]蘇れ! Uインター&キングダム伝説! 高山善廣×金原弘光/熱いこの叫びを聞け! 大谷晋二郎

No.41 2001.08 880yen
"最後の黒船"WWF来襲!!
[表紙:ビンス・マクマホン・ジュニア]リングス10周年! ヴォルク・ハンが振り返る/真樹日佐夫×三池崇史

No.42 2001.09 880yen
アントンパワー大爆発!!
[表紙:アントニオ猪木]ドン荒川×橋本真也のトンパチ伝承対談/"ヒャッホーの真実"辻よしなり/高山×宮戸×金原

No.43 2001.10 880yen
聖戦『PRIDE.17』迫る!!
[表紙:桜庭和志]ブラジリアン・トップチーム3大柱インタビュー/金原弘光×サスケの新日本プロレス学校同窓会

No.44 20001.11 880yen
サク連敗と『PRIDE』の未来
[表紙:桜庭和志、ヴァンダレイ・シウバ]その修羅場の数々! シーザー武志/怪物伝承対談! 高山善廣&杉浦貴

No.45 2001.12 880yen
一寸先はハプニング!!
[表紙:アントニオ猪木(ホームレス姿)]悪魔の書、現る! ミスター高橋/ジェラルド・ゴルドー人生相談

No.47 2002.02 880yen
WWE日本侵攻、5秒前!
[表紙:ビンス・マクマホン・ジュニア]"天才"武藤敬司が『紙プロ』驚愕の初登場!/噂の馳浩がミスター高橋本を語る!

No.48 2002.03 880yen
桜庭、満開の日は近い!
[表紙:桜庭和志]奇跡のメガトン対談! 小川直也vsノゲイラ&スペーヒー/和田最強伝説が遂に現実に! 金原弘光

No.49 2002.04 880yen
究極の格闘技大戦争勃発!
[表紙:ミルコ、ヒクソン、小川、桜庭]和田さん快勝記念鼎談! 高山&金原&和田/菊田早苗とは何者か!?

No.50 2002.05 880yen
50号記念企画てんこ盛り号
[表紙:桜庭和志]「地方発世界」開始! 小川&橋本/リングスロシア軍団の軌跡/パンクラス取材解禁!

No.51 2002.06 880yen
揺るぎなきプロレスの確立
[表紙:橋本真也]両国国技館だよ、全員集合! 橋本真也/『PRIDE』の魅力をマン開! 小池栄子/武藤敬司人生相談

No.52 2002.07 880yen
戦慄の『LEGEND』前夜!!
[表紙:橋本真也、小川直也]全身プロレスラー・高山善廣/USAの渡世人ドン・フライ/ロシアン・トップチーム

No.53 2002.08 880yen
『Dynamite!』ド直前号!
[表紙:桜庭和志]ノーフィアー×無謀美・対談!! 高山善廣×箕輪輪育久/独占肉弾スクープ! マック・ガファリ

No.54 2002.09 880yen
『Dynamite!』を大総括!
[表紙:アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ]"首の皮一枚"ホイス&エリオグレイシー/ジョシュ・バーネット

No.55 2002.10 880yen
髙田vs田村、夢限大の真剣勝負!
[表紙:髙田延彦]「真剣勝負」発言から7年、田村潔司が激白!/金原が『PRIDE』参戦!/メガトン級の男、ボブ・サップ!

No.57 2002.11 840yen
驚ガクの6周年記念号
[表紙:高山善廣]サップとタイマン勝負!! 高山善廣/新たなる"U"が始動!! 田村/ミスター高橋×大槻ケンヂ

No.58 2003.01 880yen
夢の対談、大連発号!
[表紙:武藤敬司&船木誠勝]夢幻のファンタジー対談 武藤×船木/Uスタイル対談 田村×高阪/宮戸×安生×鈴木健

No.59 1999.03 840yen
最後の皇帝、『PRIDE』上陸
[表紙:エメリヤーエンコ・ヒョードル]いざノゲイラ戦!! E・ヒョードル/アメリカン・ドリーム ダスティ・ローデス

No.60 2003.02 880yen
『PRIDE』は変貌&再生する!
[表紙:エメリヤーエンコ・ヒョードル]ノゲイラ撃破!! E・ヒョードル/驚愕の格闘芸術対談!! 武藤敬司×須藤元気

No.61 2003.04 880yen
ゼロワンvs新日5.2戦争!
[表紙:橋本真也&小川直也]裏番組をブッ飛ばせ! 橋本真也×小川直也/1年間の沈黙を破った!! ヴォルク・ハン

No.62 2003.05 880yen
ミルコの首をカッ斬ってみろ!
[表紙:ミルコ・クロコップ]ヴァーと登場! 佐々木健介/現役復帰? 船木誠勝/ヒョードルが藤田を一刀両断!

No.63 2003.06 880yen
マット界、超絶リボーン!!
[表紙:橋本真也&小川直也(イラスト)]「お前は男だ」劇場炸裂! 髙田延彦/『PRIDE』REBORNを大総括!!

No.64 2003.07 900yen
PRIDEミドル級GP直前!!
[表紙:桜庭和志]"異次元格闘技戦戦"田村潔司×吉田秀彦を大展望!!/『PRIDEミドル級GP』出場全選手インタビュー

No.65 2003.08 880yen
皇帝vsミルコ闘争本能決定戦!
[表紙:ミルコ・クロコップ]最後の皇帝大炎上! ヒョードル/ミルコついに皇帝戦へ/闘魂ストーカー、イズマイウ

No.66 2003.09 880yen
ミルコ『武士道』電撃出陣!
[表紙:ミルコ・クロコップ]ミルコ緊急インタビュー/マッハを破った男、長南亮登場!/『東スポとは何か?』

No.67 2003.10 880yen
ミルコvsノゲイラ、迫る!!
[表紙:ヴァンダレイ・シウバ]ノゲイラ戦緊急インタビュー! ミルコ/『PRIDEミドル級GP』決勝戦インタビュー

No.68 2003.11 880yen
大晦日・格闘技大戦決定!!
[表紙:髙田延彦PRIDE統括本部長]大晦日三つ巴決戦に出撃宣言! 髙田延彦/曙とは何者か!?/桜庭和志

No.69 2003.12 900yen
『ハッスル1』開催ド直前!
[表紙:橋本&小川]出てこい! 泣き虫! 橋本&小川/『泣き虫』著者、金子達仁登場!/田村潔司/美濃輪育久

No.70 2004.01 880yen
04年末の格闘戦争を大総括!
[表紙:ミルコ・クロコップ]シウバに近藤有己が宣戦布告!/健介&北斗WJの真実を語る!/紙プロ大賞&語録発表

No.71 2004.02 880yen
『ハッスル2』で大フィーバー!
[表紙:ハッスルイラスト]『PRIDE GP』優勝宣言! ミルコ&ノゲイラ/川田利明初登場!/猪木vsアミン戦の真実

No.72 2004.03 840yen
『PRIDE』に格闘ロマンを見よ!
[表紙:ヒョードル、ミルコ、ノゲイラ]GPの大本命をオランダでキャッチ!! エメリヤーエンコ・ヒョードル/山本KID徳郁

No.73 2004.04 880yen
最も過酷な道を行く男!!
[表紙:小川直也]GP出場決定、緊急インタビュー! 小川直也/PRIDE・GP出場全選手 パーフェクトガイド

No.74 2004.05 880yen
感じろ、ハッスル魂!!
[表紙:小川直也]PRIDE・GPでハッスル成功! 小川直也/リベンジロード発進!! 桜庭和志/ミック・フォーリー

No.75 2004.06 880yen
英雄誕生の気運高まる!!
[表紙:小川直也、桜庭和志、吉田秀彦]シルバ戦直前に大ハッスル宣言! 小川直也/奇蹟の独占インタビュー! 髙田総統

No.76 2004.07 880yen
プロレス爆発へ最後の挑戦!
[表紙:桜庭和志]小川の"盟友"と"宿敵"が奇蹟の対談!! 破壊王×ノゲイラ/厳しくも、飄々と戦路を進む! 桜庭和志

No.77 2004.08 880yen
小川vsヒョードル決定!!
[表紙:小川直也]「相手がヒョードルだろうと俺はハッスルする!!」小川直也/狙うは皇帝の首ひとつ! ミルコ

No.78 2004.09 840yen
PRIDE GP徹底総括号
[表紙:小川直也]衝撃の敗戦直後、独占インタビュー! 小川直也/小川の敗戦をどう見る!? 髙田延彦/谷川貞治

No.79 2004.09 840yen
髙田総統がビターンと降臨
[表紙:髙田総統]キャプテンに休息無し! 小川直也/特別付録・髙田総統ポスター/谷川さんも推薦『曙は是か否か?』

No.80 2004.10 880yen
守護神ミルコが外敵狩り!
[表紙:ミルコ・クロコップ]ミルコ独占インタビュー/ハッスルお家騒動、小川直也/「袋とじ企画」グリズリー岩本

No.81 2004.10 880yen
究極のSADAME、迫る!!
[表紙:桜庭和志]ヒョードルの弱点を発見!? ノゲイラ&ノゲイラママ/新日本でハッスル成功! 小川直也/草野仁

No.83 2005.01 880yen
ミルコ激白! 打倒皇帝!
[表紙:ミルコ・クロコップ]04年『PRIDE男祭り』を大総括/05年ハッスル大進撃発表! 小川直也/橋本×船木対談

No.84 2005.02 880yen
RTTが皇帝に宣戦布告!!
[表紙:セルゲイ・ハリトーノフ]"殺人落下傘"が3強越え宣言!! セルゲイ・ハリトーノフ/田村潔司がPRIDE GPを語る

No.85 2005.04 860yen
『PRIDE』vs『HERO'S』開戦!
[表紙:前田日明&髙田総統]PRIDE GP2005特集 桜庭、田村、髙田/パンクラス2大王者対談 髙坂剛×近藤有己

No.86 2005.04 860yen
PRIDE GP直前大解剖号
[表紙:ヴァンダレイ・シウバ]大物再会! 超U級対談が実現!! 船木誠勝×田村潔司/ダンプ松本が全女解散を語る!!

No.87 2005.05 860yen
PRIDE GP開幕&大総括!
[表紙:吉田秀彦]敗れてなお咲く花あり! 吉田秀彦/船木誠勝×宇野薫/金原弘光×池田大輔

通販方法 No.91までのバックナンバーは書店で扱っておりません。下記の通信販売をご利用ください。❶「kamipro Hand」で注文 ❷電話注文⇨03-5368-1797 ❸メール注文⇨kapra@kamipro.com


※通信方法はすべて代引きとなります。手数料は315円です(代引き金額によって異なります)。※送料は一律500円(何冊でも可。離島山間部は除く)となります。※郵便振替は現在受け付けておりません。ご了承ください。

PRIDEの“忘れ物”

「PRIDEで一つだけ実現できなかったカードがあります」、07年4月8日『PRIDE.34』。
この大会を最後に勇退するDSE榊原代表が、リング上でこう語ったカード、桜庭和志vs田村潔司戦。
直接対決は実現しなかったが、この二人のPRIDEでの歴史を振り返るのに、
お互いの存在を抜きにして語ることはできないだろう。
UWFインターから、別の道を通過してたどり着いた、二人にとってのPRIDEとはなんだったのか？



桜庭和志 vs 田村潔司



PRIDEが唯一実現できなかったカード

桜庭和志vs田村潔司に向けたリング外の攻防

文／堀江ガンツ　撮影／菊池茂夫

超ド級のビッグカードを次々と実現させ、格闘技の夢舞台、まさにドリームステージであったPRIDE。

そんなPRIDEが唯一、何度も実現に動きながら実現させられなかったカードがある。それが桜庭和志vs田村潔司戦だ。

このカードが最初に持ち上がったのは、『Dynamite!!』、『猪木ボンバイエ』と3イベント同日開催となり〝狂乱の大晦日〟として、いまもファンの記憶に残っている2003年12月31日、第1回の『PRIDE男祭り』。

このとき、『Dynamite!!』は曙vsボブ・サップという文字どおりの爆弾カードを発表し、『猪木ボンバイエ』も高山善廣vsミルコ・クロコップ（結局中止）、藤田和之参戦など、目玉をいくつも用意。それに対し『男祭り』は、フジテレビの要請により急きょ開催が決定したこともあり、メインカードが用意できていなかった。そこで急きょ持ち上がった夢のカードが桜庭vs田村だったのである。

しかし、この時点でもUWFを経ていない純PRIDEファンにとって、桜庭vs田村戦は、それほどピンとくるカードではなかった。ましてやUWFインターの先輩後輩で、合宿所時代からの犬猿の仲。日本人対決を望まなかった桜庭が、唯一「素手でも顔面を殴れる」と言った相手という対立構造は、大晦日のお茶の間を相手にするにはわかりにくすぎる。

それでもPRIDEは、当人同士の複雑に絡み合った感情。そして、プロレスから総合格闘技へ脈々と続いていった歴史という求心力を打ち出すことで、曙vsサップとは真逆の価値観を打ち出そうとしたのだ。そして、この単なる強さを競うだけではない、ファンが想像力と思い入れをもって観る試合を提供することが、PRIDEのPRIDEたるゆえんとなっていく。

しかし、この桜庭vs田村戦。当人たち……とくに田村側の強いこだわり、複雑な感情から、実現交渉は難航をきわめた。榊原信行DSE代表（当時）は、田村のジム、『U-FILE CAMP』に通いつめて交渉にあたり、12月17日の田村の誕生日にはケーキを持参し、「♪ハッピーバースデー、タ～ムちゃ～ん」と誕生日を歌って祝いながら交渉したという逸話もある。

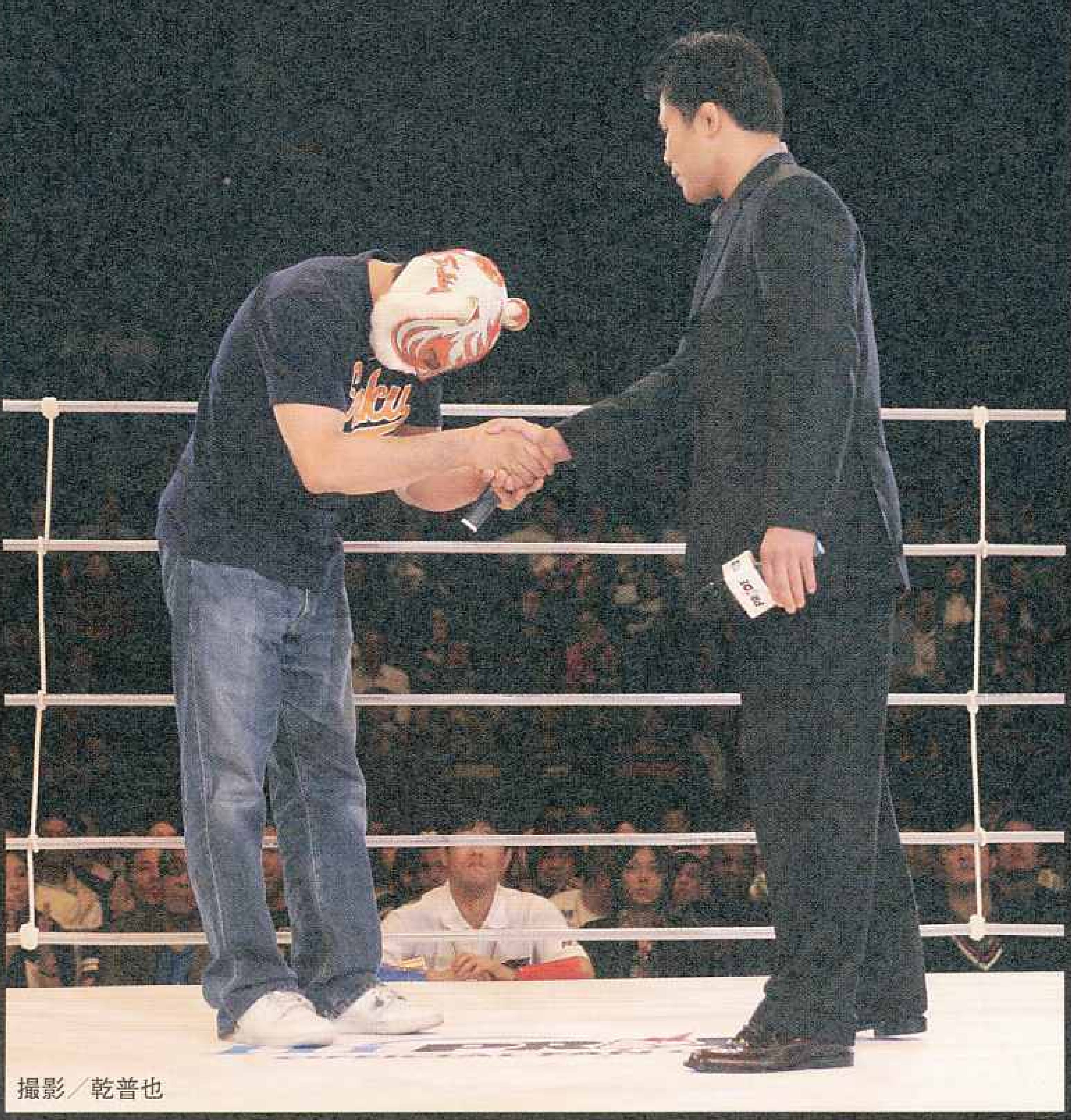
そんな榊原代表の熱意で、当初は準備期間の短さもあり桜庭戦に難色を示していた田村も「タッグマッチだったらいい」と条件つきで、承諾。そしてこの案を桜庭も受け入れ、桜庭和志&松井大二郎vs田村潔司&上山龍紀戦が内定。タッグながら、ついに桜庭vs田村が実現するかと思われた。しかし、このカードはフジテレビが「タッグマッチではPRIDEがプロレスと同じようなものに見られてしまう」と強く反対したため、またしても暗礁に乗り上げてしまう。

結局、大会数日前に桜庭はホジェリオ・ノゲイラと、田村はロニー・セフォーとの対戦が決定。桜庭vs田村は年末の期限ギリギリまで粘りながら、結局は実現には至らなかったのだ。

翌2004年は、11月上旬に行なわれた『男祭り』開催発表記者会見で、桜庭が大晦日に闘いたい相手として「色でいうと〝赤〟」と、田村潔司をコスチュームの色で〝指名〟。再び桜庭vs田村戦が浮上した。しかし、またしても田村の交渉は難航する。

桜庭和志・田村潔司　大晦日の対戦相手

桜庭和志		田村潔司
アントニオ・ホジェリオ・ノゲイラ	2003年	ロニー・セフォー
ヴァンダレイ・シウバ→中止	2004年	欠場
美濃輪育久	2005年	欠場
秋山成勲	2006年	ミノワマン
船木誠勝	2007年	所英男


撮影／乾普也

07.4.8『PRIDE.34』のリング上でガッチリ握手を交わした桜庭和志と田村潔司。田村はこのとき、「桜庭と僕にしかできない夢の懸け橋が実現できたらと思います」と発言。はたして今年の大晦日、ついに実現するのか?

ここでDSEは、前年、最後の最後までカードが決まらなかった反省から、桜庭vs田村戦を11月いっぱいで早々にあきらめ、桜庭vsシウバの4度目の対戦を発表。しかし、このカードも桜庭のケガにより中止。この年の大晦日は桜庭、田村とも試合をすることはなかった。


そして2005年。この年、DSEは田村潔司の意を汲むかたちで、有明コロシアムでU-STYLE Axisというの系のプロレス興行を開催。そういった蜜月関係から、今年こそは田村も桜庭戦を承諾するものと思われていた。しかし、田村はこれを『Axisをやってあげたから、桜庭戦をやれというのはお門違い!』と拒絶。この年は、小川直也vs吉田秀彦戦という因縁の日本人対決が組まれており、そこに桜庭戦が〝食われる〟ことを懸念したことも、対戦拒絶の理由だったと言われている。

その翌年、桜庭は『HERO'S』に電撃移籍。これで桜庭vs田村戦は完全に幻のカードになってしまったかに思われた。ところが2007年4月、DSE体制のPRIDE最終興行である『PRIDE・34』で、榊原代表に呼び込まれるかたちで、田村と桜庭のツーショットが実現。近い将来の対戦実現機運が突如高まった。


そして今年、新イベントDREAMが誕生。桜庭と田村は再び同じ舞台を主戦場にすることとなり、9・23『DREAM・6』で挨拶に立った桜庭は「今年の大晦日は、そろそろ田村さんとやってもいいんじゃないかと思います」と、何度目かの対戦アピールを行なった。

はたしてPRIDEがどうしても実現させられることができなかった桜庭vs田村を今年の大晦日、ついに観ることができるのか?

まさに桜庭vs田村、やれんのか!である。



わられるのか――。



PRIDEから引き継がれた“最難”の宿題

幻のピースは、はめら

IQレスラー

桜庭和志

PRIDE特集号となれば、桜庭和志の言葉は絶対に欠かせない。PRIDEとともに輝き、大フィーバーを巻き起こした桜庭があれほどまでに快進撃を見せた、その根本を探ると同時に、今回はPRIDEでかなわなかった田村潔司との“幻の対戦”についても迫ってみた。

聞き手／井上崇宏　撮影／菊池茂夫　試合写真／乾晋也、平工幸雄

——今日は少しだけ昔話をしたいんですが、かつてUインター、キングダムという団体でプロレスラーとして闘ってきていて、97年にPRIDEというものが誕生しましたよね。で、桜庭さんも『PRIDE・2』から参戦しておおいに活躍をされるわけですけど。桜庭さん、当時いくつでしたっけ？

桜庭　たしか28～29歳ですね。

——バリバリですよね。時代の流れでプロレスとは違う、いわゆる総合格闘技というものの台頭期にバリバリの20代で出会った桜庭さんの人生なんですが。

桜庭　ええ。

——そのときって、「やった！　俺、こういうのが得意じゃん！」みたいな感覚ってありました？

桜庭　うーん、高校からやってたアマレスも真剣勝負でしたからね。質問はそういう意味ですか？

——いえ、プロレスラー・桜庭和志のスタイルとして「総合のほうが自己表現をしやすいな」という気持ちってありましたよね？

桜庭　僕が好きだったタイガーマスク（佐山聡）は真剣勝負だと思って観てたんで、そもそもお客さんの前でやる闘いっていうのは真剣勝負だろう、っていう……。

——自分の頭の中のイメージをそのまま実践したというか。

桜庭　そうですね。子どもの頃にタイガーマスクを観て「僕もこうなりたい」って思ってた頃のことをただやっただけですね。

——そのタイガーマスクが新日本を辞めて、のちにスーパー・タイガーとなって第一次UWFに登場するんですが、そこでたぶん桜庭さんもUWFのほうにちょっと視線が向いたと思うんですけど。

桜庭　そうですね。全部タイガーからですね。

——で、桜庭さんは高校、大学とレスリングをやって、プロの世界に入りましたよね。そこで、Uインターでの合宿生活だったり練習方法だったりとかっていうのが、のちにPRIDEのような世界へとうまくスライドできた要因となった部分ってありました？

桜庭　Uインターが？

——たとえば、レスリングやってても新日本の「闘魂クラブ」に行く人だっていたし、全日本に入る人もいるわけじゃないですか。プロレスラーになるのに、いろんな道があったわけですよね。



桜庭　ああ、ありましたね。あのね、僕がタイガーマスクに憧れたっていうのは、あの華やかさに憧れたわけじゃなくて、強さに憧れたんですよ。だから、僕もホントに強くなりたいと思った。そこで、なんでUインターを選んだかっていうと、「日本人選手がいっぱいいるから練習がいっぱいできる。こりゃ強くなれるぞ」と思っただけです。まあ、入ってみたらちょっと違いましたけど……。

——違いました？

桜庭　レスリングの練習みたいにみんなでガーッとスパーリングとかやってるのかと思ってたんですけど、各自が個々に練習をしてたんですよ。まあ、後期のほうはみんなでスパーリングするようになりましたけど、最初の頃は「なんか違うな」って思いましたね。だけど「まあ、入ったからいいや」みたいな（笑）。

——バラバラっていうのは、スパーやってる人もいれば、ウェートやったりしてる人もいるっていう？

桜庭　そう。で、スパーリングやるのも、練習生を捕まえての練習ですよ。極めたら放して、またそこから極めるっていう。

——「ズルい！」っていう（笑）。

桜庭　そうそう、「これはズルいぞ！」って（笑）。普通アマレスとかだったらフォールしたら、またスタンドから再開じゃないですか。それとかグラウンドでの時間が決まってるんで、10秒、20秒経ったらスタンドでっていうのがあったんですけど、延々とグラウンドで「いてててて！　いてててて！」ですからね。「そりゃ逃げられねえわ！」って（笑）。もう、それはズルく考えたら、「頼む、もう極めるだけ極めてくれ！　それで終わってくれ」みたいな。

——時間がすぎるのを待つしかない（笑）。

桜庭　そうそう。ただ、ディフェンスの練習はしっかりできますけど、最初の頃はそんなノリでしたね。でも後期の、エンセン（井上）さんとか安達（巧＝現・日本体育大学レスリング部監督）さんとかがたまに練習に来るようになってからは、みんなでスパーリングとかやるようになりましたけどね。

——なるほど。それとハッキリ言うと、90年代以降のプロレスって「リアルな強さはとりあえず不問」みたいな傾向がありましたよね。

桜庭　ああ。それは高校のときに感じたかな？　高校の顧問の先生が国士舘大学の出身だったんで、毎年春ぐらいに国士舘に合宿に行くんですよ。それで、ある年に名前は言わないですけど、大きいプロレスラーがそこに練習に来てたんですね。

——大学にレスリングの練習に来てたんですか。

桜庭　ええ。「うわー、本物だ！」みたいな感じで見てたんですけど、大学生にボロンボロン投げられてるんですよ。「あれ……？」って思って。

——その体験はデカいですよね。

桜庭　しょうがないとは思うんですけど、「それにしても投げられすぎじゃないの？」っていう。あまりにも体格差があるのに短い時間でガンガン投げられてたんで、「え～っ？」っていうのはありましたね。あれは心にドーンって衝撃がきました。

——そういえば僕、当時のUインターの道場に一回だけお邪魔させてもらったことがあって、練習風景を見させてもらったんですけど、そのときも桜庭さんがおっしゃるように、スパーリングやる人、ウェートやる人っていうふうに分かれてましたね。その中で桜庭さんがずっとボーウィー・チョーワイクン選手と立ちでこう……。

桜庭　ああ、じゃれ合ってたんでしょ？（笑）。

——あの光景は僕にとっての衝撃だったんですよ（笑）。

桜庭　みんながそれぞれでやってるから。僕はまだ下のほうだったし、練習生とかはほかの先輩が捕まえてるから、僕はボーウィーと「コノヤロ、コノヤロ！」って練習を……してるフリ（笑）。

——二人でニヤニヤしながらやってて。見てて「なんで誰も注意しないんだろう？」って思ってまして（笑）。

桜庭　でも、あれは練習です！

——完全に節穴でした（笑）。

桜庭　「俺は強くなるぞ！」って腕立てをいっぱいやる人いるじゃないですか？　そんなの強くなんないですよ。僕は考えながら練習してたんです。だってボーウィーは強かったんだもん。アイツ、70キロちょっとの体重なのに組んだら凄く力が強いんですよ。だから僕が「コノヤロー！」ってキックやると、キックは向こ



『kamipro』No.123の桜庭変態座談会で、Uインター時代、桜庭がボーウィーと"じゃれ合ってた"ことが語られたが、桜庭によるとやはりあれはれっきとしたトレーニングだったことがあらためて語られた。サク、恐るべし!!

うのほうが強いじゃないですか。で、倒

れちゃったみたいな体験ってあったんで

たね。「僕はいつでもいいですよ」って。

煽り上げるからな」っていう主催者

予想
田村
とは

うわー！　なんだ、このインタビュー!?
僕が嫌いだなんて、いつ言いました？

うのほうが強いじゃないですか。で、倒すとやっぱりイマイチなんですけど、やっぱり寝ても力は凄く強くて。そうやって、二人で笑いながらやってたのが遊んでるように見えたんじゃないですかね。

――それもたまたま僕が行ったその日がそうだったんじゃなくて、当時は毎日そういう練習だったんですよね。

桜庭　そうそう。ボーウィーは強かったですよ。

――Uインターマニアの僕としては、もっとその頃のお話をうかがいたいところなんですけど（笑）、昨日はDREAMの会場にいらっしゃいましたね。リング上で挨拶もされましたけど。

桜庭　はい。

――桜庭さんって、一貫してトーナメントには否定的で、やるなら闘う意味のあるワンマッチでという意向があるじゃないですか。昨日の船木誠勝vsミノワマン戦っていうのは、わりとそういう意味のあるカードに仕上がったなと思ったんですけど。

桜庭　ああ。でも、僕はパンクラスのことはよくわかんないんだけど……。

――わからない人にも試合前のVTRとかでうまく煽り上げますよね。両者の関係性や立ち位置とかも紹介して。桜庭さんもPRIDEのそういう、たとえ強引だとしても試合に意味を持たせて闘いを盛り上げるという部分も好きだったみたいなことを言ってましたよね。

桜庭　ええ、そうですね。プロレス的な、たとえば一連の長州vs藤波戦みたいな。

――桜庭さん自身は、ああいうプロモーションに意図的じゃなくて本気で乗せられちゃったみたいな体験ってあったんですか？

桜庭　それはあんまりないですね。

――そこは冷静なんですか。

桜庭　ええ。ただ、あのヴァンダレイ（・シウバ）のしょっぱなのヤツはホント腹立ちましたけどねえ。

――ええと……「桜散る」でしたっけ？

桜庭　いや、試合が終わるたびにバックステージでヴァンダレイが「サクラバ！　サクラバ！」ってカメラに指差してるヤツ。「腹立つなあ、コイツ！」と思って（笑）。あのときはフジテレビのスタッフにも言ってましたね。「これ！　なんスか、コイツ！」って本気で怒ってた。あれはムカついてましたねえ。

――本気で煽られた、と（笑）。で、ムカつくといえば、田村さんについてなんですけど……。

桜庭　ちょっと！　なんスか、その入り方!?

――いま、完全に無意識で言っちゃいました……。昨日もリング上で「そろそろ試合してもいいと思うんですが……」って言ってましたけど、その前々日に田村さんと会ったらしいですね。

桜庭　ええ。こないだ『SRS』の収録で。

――『SRS』の最終回ですね。桜庭さん、田村さん、佐藤ルミナさん、吉田（秀彦）さん、藤田（和之）さん、武蔵さんという豪華な共演だったそうで。そこで「お二人の対戦もそろそろ……」みたいな話を振られて、桜庭さんが「いや、僕はいつでもいいですよ」って言ったんですよね？

桜庭　ええ。ちゃんと目を見て言いましたね。「僕はいつでもいいですよ」って。そうしたら田村さん、「じゃあ、やります」って言ってましたね。

――おっ！　田村さん、「やる」って言いましたか！

桜庭　言いましたよ。オンエア観たらたぶん流れるんじゃないですか？

――楽しみにしときます。そもそも桜庭vs田村っていうカードは、初のPRIDE大晦日開催となった2003年の『男祭り』で初めて話題になったと思うんですけど。

桜庭　2003年って、僕が誰とやったときですか？

――ホジェリオですね。

桜庭　ああ！　思い出した。榊原さんから「絶対に田村戦でいくから」って言われてたんですけど、向こうが「できない」って。

――大会直前のギリギリまで交渉をしてたんですよね。

桜庭　あ、そうそうそう。

――で、結局ホジェリオとやらされて。

桜庭　いや、やらされたっていうか僕が選んだんですけどね。3人ぐらいの候補の中から。そういうときに、なんかイージーな相手を選ぶのも腹立つじゃないですか。「あ、桜庭、弱いの選んだよ」って言われたくないんで、「じゃあ、ホジェリオでお願いします」って。

――PRIDEって、そういうファイターの心意気みたいなものを奮起させたり、逆に言えばファイターを追い込んでいく磁場が確実にありましたよね。それこそ、「やれんのか！」っていう。それで「その代わり、出てくるからには上手に煽り上げるからな」っていう主催者とファイターの関係性が凄く絶妙な感じで。

桜庭　そうですね。まあ、ホジェリオには見事にボコボコにされましたけどね（笑）。最後は立てなかったですから。

――それで、翌年の大晦日『男祭り』はそれこそ『SADAME』というサブタイトルもつけられたほどで、「今度こそ桜庭vs田村戦実現！」っていうムードだったわけですけど、そこもまた田村さんは対戦を拒否しましたね。結局あの年は桜庭さんはシウバと闘うことになってたんですけど、練習中にアバラを折って欠場してるんですよね。

桜庭　ああ、そうですね。

――『SADAME』のときは当時、榊原さんも会見で「今年は桜庭vs田村を絶対やりますから、マスコミの皆さんも煽ってください」とか言ってて。そしてのちのPRIDE最後の大会となった『PRIDE・34』のリング上でも、「この二人の対戦をどうしても実現させたかった」と言ってましたよね。で、昨日は桜庭さん自身もリング上で「そろそろ……」って発言をして。

桜庭　最後にスカしてやろうと思って。向こうがOK出したら、「いや、俺はやらないよ～」って。

――それ、みんなドン引きしますよ（笑）。あのー、そもそも桜庭vs田村戦ってなんでこんなに待望されてるんでしたっけ？

桜庭　……はい？　僕は知らないですよ。僕がやりたいって言ったわけじゃないし。

――周りはなんでやらせたいんだと思います？

桜庭　……Uインターのアレとかじゃないですか？

――Uインターのアレ？

桜庭　3回やったときの。

――要はあの3連戦がちょっと伝説的な試合として語られてるっていう部分ですか。

桜庭　それじゃないんですか？

――確かにそれはあると思います。それと、これは桜庭さんが公式の場で言ったわけでも直接聞いたわけでもないんですけど、要は田村さんのことが嫌いだ、と。

桜庭　…………。

――業界周知の事実として、桜庭和志という男は田村潔司という人が大嫌いなんだ、と。何がそんなに嫌いなんですか？

桜庭　うわ～っ！　なんだ、このインタビュー!?　僕が嫌いだなんて、いつ言いました？

――いや、あくまで伝聞なんですけど。たとえば「唯一、日本人で素手でボコボコに殴れる男」みたいな話も昔、耳にしましたけど……。

桜庭　……それも伝聞ですよね？

――あと、PRIDE初期の頃に行なわれたとあるトークイベントで「いまやっ



『PRIDE.29』で、アリエフ・マックモドと対戦した田村。相手の戦意喪失という予想外の展開で、試合は田村のTKO勝利に。この試合を解説席で観ていた桜庭が「田村さん、こんな試合をしてもつまらないと思うんで～」と突然マイクを取ったことは有名だが、なんとこれが単独犯であることがこのインタビューで明かされた。

僕の気持ちっていうのは……もしかしたら青木くんと似た感じなんですかね?

SAKU

たら、ルールも違うので田村さんの顔面が血まみれになるかもしれない」って発言してますね。

桜庭　それ、僕が言ってました? 若いなあ……。(小声で)まあ、小さい塵がいろいろ積もって山になったみたいな感じですよ。

――その塵っていうのはいったいなんなんですか?

桜庭　今日はこういうインタビューなんですか?

――いえ、話の行きがかり上……(笑)。

桜庭　ホント、塵なんで聞いてもおもしろくないことです。しかも山になってるから、いまから話しだすと、朝までかかりますよ。

――そもそも、ファンが「桜庭vs田村戦が観たい」っていう願望を最初に持ったのって、あの桜庭和志のキラーモードも観てみたいっていう興味からだったと思うんですよ。感情丸出しの桜庭が観たいぞ、っていう。

桜庭　じゃあ(佐藤)大輔さんに言って、そういうVTRを作ってもらいます?

――でも、その気持ちがいまも持続してるかって言ったら、してないですよね?

桜庭　「やれと言われればやります」って感じです……。

――「ぜひともやりたい」みたいな気持ちはない?

桜庭　とくにないです。昔からないですよ、「やりたい」っていうのは。ただ、「周囲がやれと言うのであればやりますよ」っていうだけで。

――2005年2月の『PRIDE・29』で田村vsアリエフ・マックモド戦後に「こういう試合をしてもおもしろくないと思うんで、僕と試合をしてください」ってマイクで田村さんに呼びかけましたよね。

桜庭　……あれは完全に自分のアドリブでやりましたね。主催者とか誰かから「言ってくれ」とかってのはまったくなかったです。

――単独犯?

桜庭　単独犯。たしか、僕の近くに浅草キッドさんとかが座ってて、いきなり僕がリングに上がったのでビックリしてましたよね?

――桜庭さんのどんな思いがそういう行動に走らせたんでしょう? おそらく、昨日のリング上でのアピールのほうはわりと今年の大晦日イベントのPR的な意味合いが強かったと思うんですけど。

桜庭　ええ。今回は100パーセント自分の意思というわけではないですね。

――ただ、それを口にしたってことは、当然桜庭さんも田村戦に関しては能動的なわけで。

桜庭　はい、全然いいです。

――なんとなく、桜庭さんサイドからは何度もラブコールを送ってるのに、それに対して田村さんはずっと拒絶の姿勢というか、何かあたかも桜庭さんがフラれてるというような印象を与えてきちゃってますよね。

桜庭　え〜、なんだそれ……じゃあ、これはハッキリと書いてください! べつに僕、「好き好き好き」って言ってるわけじゃないんで。ただ周囲に「やらせたい」とか、「観たい」って人がいるから「じゃあいいですよ」って言ってるだけの話ですよ! ……こんなこと言ったらおもしろくないですか?

――いえ、大丈夫です。

桜庭　だから、べつにみんなが観たいと言わなければ僕からは何も言わないし。だから………(しばらく沈黙)、青木くんが昨日の試合で言ってたことっていうのは、僕もわかりますよ。

[なお、このインタビューは青木真也との対談が実現する前に収録したものです]

桜庭　僕の気持ちっていうのは……もしかしたら青木くんと似た感じなんですかね? あと出しジャンケン的な部分が見えるんで……。

――青木選手がいまDREAMのリングで思ってるような感情が、桜庭さんはPRIDE時代からある、と。

桜庭　まあ………そうです(ボソッと)。でも、青木くんの気持ちは本人しかわからないと思うので、勝手にここで話をするってのもアレなんだけど。あれ? でもそういうのって普段ないですか?

――ありますけど、でも僕らは「気が合わないヤツはべつにほっときゃいいや」ってかわせるんですよ。観客がいないですから(笑)。

桜庭　そうかあ。でも煽ってんのは皆さんじゃないですか?

――いや、それはファンの要請ですよ。

桜庭　ひどいなあ……。で、自分たちはそういう場面はかわすんでしょ?

――だからみんな格闘家に憧れてるんですよ。

桜庭　ああ、そういう意味でね。って、なんだよそのまとめ方……!

――だから格闘家って素晴らしいんですよね。観る側の欲求があればどんな相手とでも試合しなきゃいけないじゃないですか。

桜庭　まあ、それはありますね。本当なら嫌な人とかとは話もしたくないですもんね。でも仕事柄、肌を合わせないといけない。「嫌いなのになんで組み合っちゃってんの?」みたいな(笑)。

――ホント、特殊な職業ですよね。

桜庭　なんか、今回はへんなオチになりそうですね。

――いやいや(笑)、今日は大事なヒントをいっぱいいただけたと思います。今年の大晦日こそは桜庭vs田村戦が観たいですね。

桜庭　そうですか。もし決まったら……、僕はすぐブラジルに飛んでシュートボクセでまた"元祖バーリ・トゥードの合宿"に行ってきます(笑)。

【08年9月24日/都内・ラフター7にて収録】



さくらば・かずし■1969年7月14日、秋田県出身。92年、UWFインターナショナルへ入団。97年12月、UFC-Jヘビー級トーナメント優勝。98年からはPRIDEへ参戦。90分の死闘を繰り広げたホイス・グレイシー戦をはじめ、一連の"グレイシー狩り"は桜庭フィーバーとともにPRIDE人気を押し上げた。因縁の田村潔司とは、03年、04年、05年と3年にわたりいずれも大晦日を騒がせたが、結局実現はせず。DREAMでの実現なるかが注目される。180センチ、83.6キロ。

桜庭和志PRIDE全試合結果

○ vsミノワマン(1R 9分39秒 チキンウィングアームロック)『男祭り2005』
○ vsケン・シャムロック(1R 2分27秒 TKO)『PRIDE.30』
× vsヒカルド・アローナ(2R終了 ドクターストップ)『PRIDE GP 2005 2回戦』
○ vsユン・ドンシク(1R 38秒 TKO)『PRIDE GP 2005 開幕戦』
○ vsニーノ・"エルビス"・シェンブリ(3R終了 判定 3-0)『PRIDE GP 2004 2回戦』
× vsアントニオ・ホジェリオ・ノゲイラ(3R終了 判定 3-0)『男祭り2003』
○ vsケビン・ランデルマン(3R 2分36秒 腕ひしぎ十字固め)『PRIDE GP 2003 決勝戦』
× vsヴァンダレイ・シウバ(1R 5分01秒 KO)『PRIDE GP 2003 開幕戦』
× vsニーノ・"エルビス"・シェンブリ(1R 6分07秒 TKO)『PRIDE.25』
○ vsジル・アーセン(3R 2分08秒 腕ひしぎ十字固め)『PRIDE.23』
× vsヴァンダレイ・シウバ(1R終了 ドクターストップ)『PRIDE.17』
○ vsクイントン・"ランペイジ"・ジャクソン(1R 5分41秒 裸絞め)『PRIDE.15』
× vsヴァンダレイ・シウバ(1R 1分38秒 TKO)『PRIDE.13』
○ vsハイアン・グレイシー(1R終了 判定 3-0)『PRIDE.12』
○ vsシャノン・ザ・キャノン・リッチ(1R 1分08秒 アキレス腱固め)『PRIDE.11』
○ vsヘンゾ・グレイシー(2R 9分43秒 チキンウィングアームロック)『PRIDE.10』
× vsイゴール・ボブチャンチン(1R終了 TKO[タオル投入]『PRIDE GP 2000 決勝戦』
○ vsホイス・グレイシー(延長 6R終了 TKO[タオル投入]『PRIDE GP 2000 決勝戦』
○ vsガイ・メッツァー(1R終了 試合放棄)『PRIDE GP 2000 開幕戦』
○ vsホイラー・グレイシー(2R 13分16秒 チキンウィングアームロック)『PRIDE.8』
○ vsアンソニー・マシアス(2R 2分30秒 腕ひしぎ十字固め)『PRIDE.7』
○ vsエベンゼール・フォンテス・ブラガ(1R 9分23秒 腕ひしぎ十字固め)『PRIDE.6』
○ vsビクトー・ベウフォート(2R終了 判定)『PRIDE.5』
△ vsアラン・ゴエス(3R終了 ドロー)『PRIDE.4』
○ vsカーロス・ニュートン(2R 5分19秒 ヒザ十字固め)『PRIDE.3』
○ vsバーノン・タイガー・ホワイト(3R 6分53秒 腕ひしぎ十字固め)『PRIDE.2』

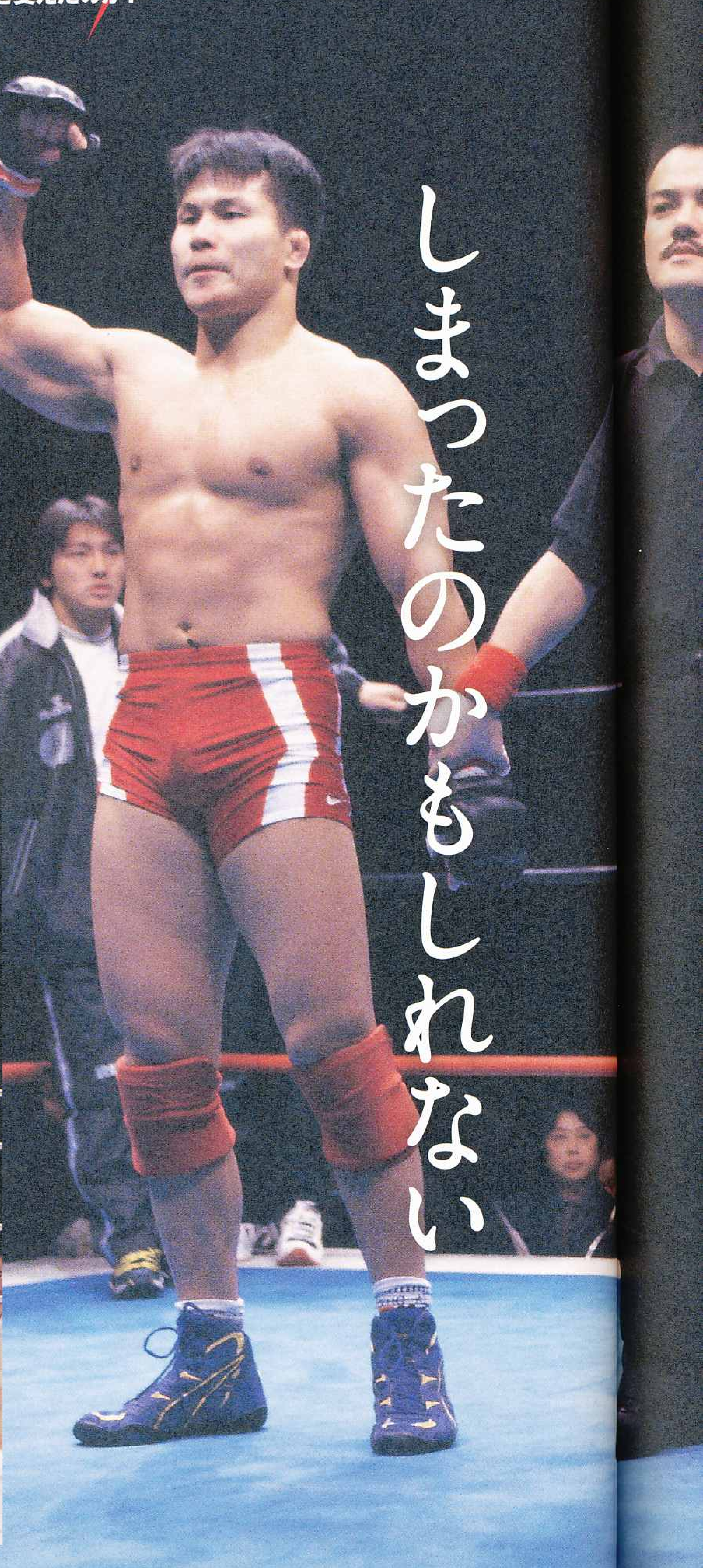


田村潔司

俺や桜庭がグレイシーを倒すことで〝U〟を終わらせて

聞き手／堀江ガンツ　撮影／森鷹博、乾晋也

しまったのかもしれない





桜庭が〝グレイシー・ハンター〟と呼ばれ、PRIDEマットでグレイシー一族をはじめとした柔術家を次々と破って人気を得ていったのと同時期、リングスKOKトーナメントでヘンゾ・グレイシーを破り、当時、桜庭とことあるごとに比較された田村潔司。

その田村は、PRIDEがマット界の中心となってからも、UWFに強いこだわりを持ち、グラウンド状態でのパンチや踏みつけという、バーリ・トゥードの闘いを否定。PRIDE初参戦時は、そういった闘いを好むファンに対して「バカだと思う」と、過激な発言をした〝反PRIDE〟の急先鋒だった。

その後、桜庭と〝目に見えないライバル抗争〟を繰り広げながら、要所要所でPRIDEでも好勝負を残し、自身も〝PRIDEファイター〟となっていったが、PRIDE10年の歴史をいま田村はどう捉えているのか?

PRIDEがU系、リングス、そして田村潔司に与えた影響を語ってもらった。

――今回は「PRIDEがマット界に与えた影響」というテーマなんですけど、U系ってプロレス界の中でもとくにPRIDEの影響をモロに受けましたよね？

田村　そりゃ、すごい影響受けたよね。

――そもそも『PRIDE.1』で髙田vsヒクソン戦が発表されたとき、危機感ってありました？

田村　どういうこと？

――もし、髙田さんが負けたら、U系もプロレス界も大変なことになるんじゃないか、という危機感です。

田村　いや、そういう危機感はそんなに持

ってなかったね。なんも考えてなかったんじゃないかな（笑）。

——そうですか（笑）。ある種、別世界の出来事って感じですか？

田村 別世界ではないけど、俺はリングスでやっていて、他団体というか、まだPRIDEがどんなイベントなのかもわかってなかったからね。

——それがマット界の中心になるとも思ってないし。

田村 そうそう。だから、個人的に髙田さんを応援したいっていう気持ちだけだよね。

——では、グレイシーに対してはどういう感情を持っていました？

田村 やっぱり仲間であり先輩である安生（洋二）さんが道場破りでやられてるから、悔しい気持ちはもちろんあったよね。

——「誰かが倒さなきゃいけない」とは当時から思ってました？

田村 そうだね。安生さんが道場破りでやられたことで、Uインターという会社自体はイメージ的に大打撃を食ったと思うから。安生さんか髙田さんに、どこかしらでやってほしいという気持ちはあったと思うんだけど、俺はまだ団体を代表するような立場じゃなかったから、自分がやるとは思ってなかったね。

——でも、やっぱりU系にとってグレイシーというのは脅威ではありましたよね？

田村 そうだね。その頃、プロレスラーが強さを求めていた団体っていうのは、たぶんUインター、リングス、パンクラスの3つぐらいだったと思うんだけど、やっぱり髙田さんが負けたってなると、その系列のパンクラス、リングスっていうのは同じようにイメージ的なダメージを被るし……グレイシーは宇宙人みたいな感じだったよね。

——自分たちの世界以外からの侵略者という意味で。

田村 だからリングスとUインターはもともとライバル団体みたいな感じで、敵同士だったと思うんだけど、グレイシーが出てきたことで心情的に一致団結してU vs グレイシーっていう構図が生まれたと思うんだよね。

——たとえるならば、米ソ冷戦時代に、突然宇宙人が侵略してきたことで、地球を守るために米ソが協力するみたいな感じですか？

田村 まあ、それは大げさすぎ（笑）。

——団体内の闘いもいいけど、グレイシーを倒さなきゃどうしようもないっていうムードになってましたよね。

田村 なんかあったよね。だから、俺たちU系の選手に当時、一番求められていたのは、グレイシーを倒すってことだったんだよね。それはやっぱり、髙田さんや安生さんが負けた敵を討ってほしいということだったんだろうし。

——そのフラストレーションがとにかく大きかったわけですよね。

田村 だから、こう言ったら申し訳ないけど、髙田さんの2連敗があったからこそ、桜庭がスターダムにのし上がったわけで。安生さんの道場破り失敗と、髙田さんの連敗がなければ、桜庭があそこまでブレイクすることはなかったと思う。

——髙田さんの巨大な敗戦があったからこそ、桜庭さんが救世主になりえたということですね。

田村 そう。それにあれがあったから、当時、桜庭と俺と船木さんが、それぞれ別の団体にいながら、グレイシーという敵に対して、見えない共同戦線みたいな気持ちになったわけだからね。

——あの桜庭 vs ホイス、田村 vs ヘンゾ、船木 vs ヒクソンが2000年上半期3カ月のあいだに連続して行なわれたのは、偶然で

PRIDEは素晴らしい世界だったと本心から思うよ

すけど、まさにUWF vs グレイシーの全面対抗戦みたいでしたよね。

田村 だからサクがホイスを倒して、次にやったのが船木さん？

——そうですね。その前に田村さんがヘンゾを倒してますけど。

田村 あっ、桜庭 vs ホイス戦の前に俺がヘンゾとやってるんだ。じゃあ、最初に倒した俺が一番凄いじゃん。

——ダハハハ！　何をいまさら（笑）。まあ、グレイシー打倒という意味では、桜庭さんがその前にホイラーに勝ってますけどね。

田村 あ、そうか。でも、ホイラーは数に入れちゃダメだな。

——ホイラーはノーカンですか（笑）。

田村 だって、あれは体重差がありすぎるでしょ。ホイラーなら、あの頃のUインター出身選手だったらみんな勝てただろうし。

——最初にグレイシーに勝ったのは自分だ、と（笑）。田村さんはヘンゾに勝って、桜庭さんもホイスに勝って、巨大な外敵だったグレイシーを退治したわけじゃないですか。そのことで、また"U系"の時代が続くんじゃないかと思いました？

田村 まあ、続くんじゃないかと思ったけど、興行は難しいね。一回ああいう刺激を経験しちゃうと、「もっともっと」という感じになっちゃうから、それまでどおりの闘いじゃ、飽き足らなくなっちゃったよね。

——グレイシーを倒して一件落着して、もとのリングス内の闘いに戻るんじゃなくて、U系 vs グレイシーの興奮があまりにも大きかっただけに、桜庭 vs グレイシーの一連の抗争を軸にしたPRIDEの人気が爆発しちゃったところがありますよね。

田村 だから、桜庭 vs ホイス、船木さんとヒクソン、それから俺とヘンゾとか、みんなひっくるめて、総合格闘技の刺激をファンに与えちゃったんだよね。そして、ファンがみんなそっちの方向に向かっちゃった。

——そういう意味では、桜庭さんと田村さんがグレイシーに勝ったことで、逆にUWFスタイルの興行を終わらせちゃった部分もあるんじゃないですか？

田村 それはあるかもしれないね。あのU vs グレイシーで、ファンの人の嗜好が（U系から）そっちに変わっちゃったんだと思うな。やっぱり、時代によっていろんな移り変わりがあるから、それはしょうがないんだけど。UWFの人気が出たときは、新日本のスタイルは古いっていわれたし、それと同じようにPRIDEの人気が出たら、UWFの試合を組んだとしても昔と同じようにお客さんが来るかといったら来ないからね。それは時代がそうなっちゃったんだから、しょうがない。

——刺激を知ってしまったらもう戻れないということですよね。

田村 う～ん、そうね。さっきも言ったけど、一度刺激を味わっちゃうと「もっともっと」になるからさ。いま、格闘技界があまり盛り上がってないように感じるのも、PRIDEの刺激を味わっちゃってるから、物足りなく感じちゃうんだよね。

——それはあるでしょうね。

田村 やっぱり、前がよすぎたんだろうね。PRIDEがないいまの現状が悪いんじゃなくて、PRIDEが本当に凄すぎたんだよ。いまの日本の格闘技界も充分素晴らしいとは思うんだけど、PRIDEと比べちゃうからいけない。

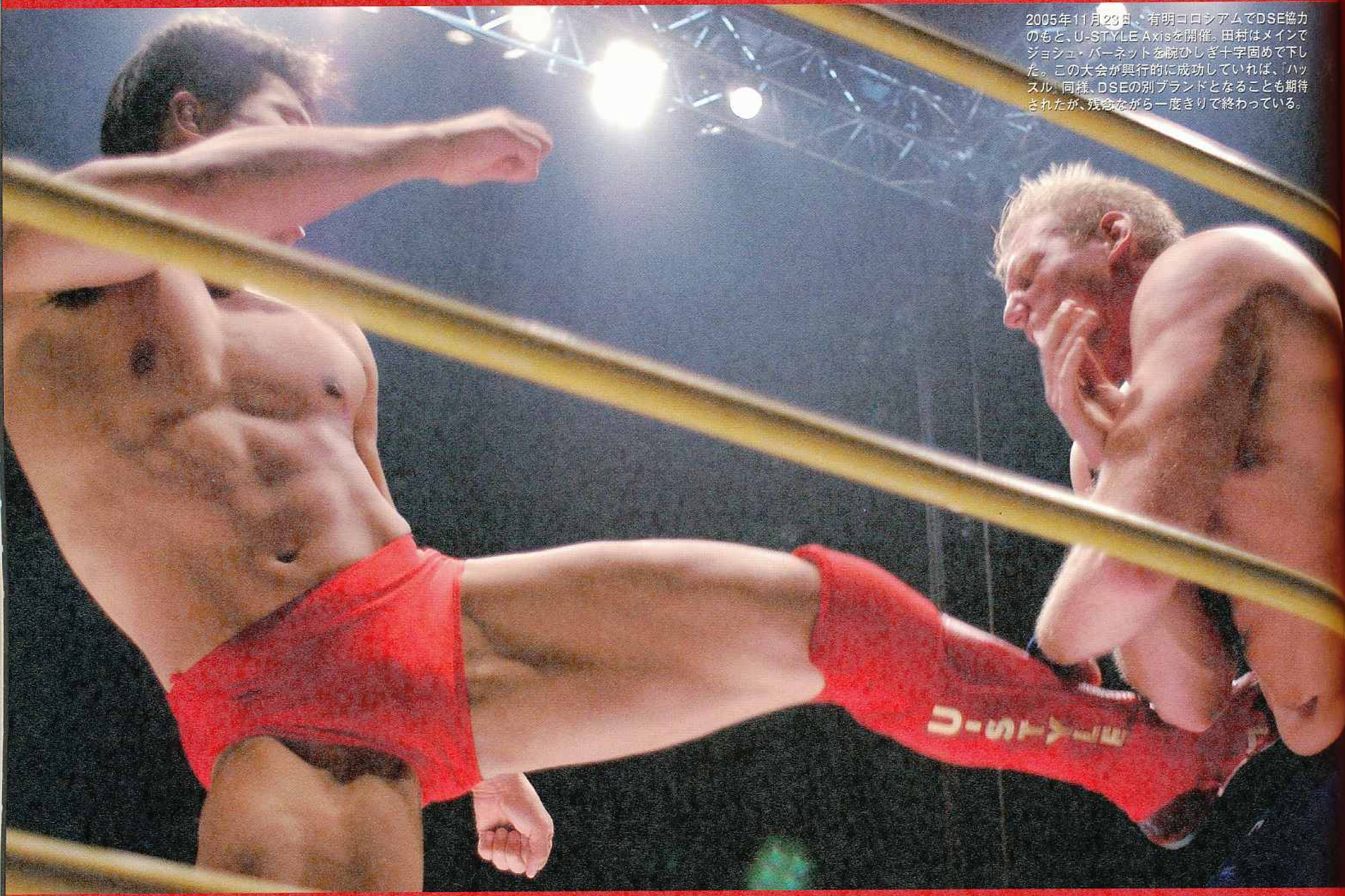
——PRIDEを基準に考えるんじゃなくて、あれは特別と考えなきゃホントはいけないんでしょうね。

田村 やっぱりなくなってみて初めて気づくことって多いんだよね。あんな凄い舞台は、もう作ろうと思ったって作れないんだから。そういうことを考えると、俺も自分の



キャリアを振り返って、UWFだったり、イ

（直也）さんだったり、髙田さんもそうだけ



2005年11月23日、有明コロシアムでDSE協力のもと、U-STYLE Axisを開催。田村はメインでジョシュ・バーネットを腕ひしぎ十字固めで下した。この大会が興行的に成功していれば、「ハッスル」同様、DSEの別ブランドとなることも期待されたが、残念ながら一度きりで終わっている。

たむら・きよし■1969年12月17日、岡山県出身。第二次UWF、Uインター、リングスを渡り歩いた生粋のU戦士。2007.4.8『PRIDE.34』では、桜庭和志とともにリングに上がり、近い将来の対戦を期待させた。大晦日に今年こそ桜庭戦が実現するかが注目される。180cm、86kg。

キャリアを振り返って、UWFだったり、インターだったり、リングスだったり、それぞれ思い入れはあるけど、その一つにPRIDEも入ってるからね。

――PRIDEにもUWF、インター、リングスなんかと同じような思い入れがありますか？

田村 それはもうなくなってるから言えることで、やっぱり、あらためて素晴らしい世界だったな、と。これは本心で思うよね。

――最初に参戦してきたときは、PRIDEの闘いを否定していた田村さんも、終わってみると思い入れが生まれていましたか。

田村 まあ、ずっと否定するわけにいかんでしょ。否定したまんまだったら、最初にシウバとやったあとは上がらなかっただろうし、上がり続けたっていうのは、そこが素晴らしい舞台だと思うからだしね。だから、そういうPRIDEがなくなったっていうのは、俺にとっても寂しさがあるよね。

――いやあ、田村さんの口から「PRIDEがなくなって寂しい」って言葉が出るとは思いませんでしたね（笑）。

田村 そう？ やっぱりPRIDEが作り上げた世界観って凄かったじゃん。やっぱりお客さんの熱も違うし、大晦日に民放3局で格闘技番組をやったこともあったわけでしょ。もうああいうことはありえないだろうし、そういうのを振り返ると「偉大だったんだな」って思うよね。まあ、PRIDEはマット界にいろんな影響を与えてると思うよ。

――いまでも、その影響はありますか？

田村 あるね。やっぱり『ハッスル』なんかでも、PRIDEがあるからその対極である『ハッスル』が光った部分ってあると思うんだよ。だから、PRIDEがなくなっちゃうと『ハッスル』の存在意義も問われるような気がするんだよね。『ハッスル』って小川（直也）さんだったり、髙田さんもそうだけど、PRIDEとリンクする部分が凄くあったわけじゃん。その相乗効果でどちらも盛り上がってたと思うんだけど、それがないから、いま『ハッスル』は少し元気がないように見えるんじゃないかな。

――確かにそれはあるかもしれないですね。っていうか、田村さん、『ハッスル』に詳しいですね（笑）。

田村 いや、べつに毎回観てるわけじゃないけどね（笑）。PRIDEの影響をやっぱり『ハッスル』が一番受けてるんじゃないかな、と思って。

――あと、『ハッスル』以上に影響を受けてるとしたら、U-STYLE Axisぐらいですかね（笑）。

田村 そんなん一回しかやってないじゃん！（笑）。

――どうなんですか、これからのU-STYLEっていうのは？

田村 まあ、U-STYLEはPRIDEみたいに大きなイベントってわけじゃないから、調布のアリーナから地道にやっていきますよ。ま、とにかくPRIDEみたいなリングに上がれたっていうのは、俺にとっても光栄だよね。ホントにそう思うよ。

【08年8月27日 都内・U-FILE CAMP調布にて収録】

田村潔司が選ぶPRIDEベスト3

1 ミルコ・クロコップvs エメリヤーエンコ・ヒョードル
2 ――――
3 ――――

非常にわくわくした。

（田村談）

語録の中の語録たち、出てこいやぁ〜!

髙田延彦語録

〜アイ・アム・プロレスラーから統括本部長まで〜

PRIDEといえばこの人、統括本部長の髙田延彦だ!
“世界最高峰のリング”の象徴であり、その誕生から消滅までを
ファイター、解説者としてつぶさに見つめてきた髙田は、
PRIDEの世界の重要な語り部としての役割も担ってきた。
そんな髙田の“鳥肌”ものの名(迷)言を徹底網羅!
字は細かいですが、少しだけ時間をください!(髙田統括本部長調)。

構成/鈴木佑　写真/乾晋也



自分にとってはこれがスタートです

【97年10月11日、『PRIDE.1』でのヒクソン・グレイシー戦後のコメント】

⬆ヒクソン・グレイシーに完敗したあとに報道陣に向けて発したコメント。大会キャッチフレーズだった「この戦いを見終わったら、20世紀も、もう終わっていい」を完全スルーしたこのスタート宣言どおり、ここからPRIDEの壮大なる闘い絵巻が始まるのであった!

もう二丁でも、もう五丁でも、勝つまでやりたいね

【98年10月11日、『PRIDE・4』でのヒクソン・グレイシー戦後のコメント】

➡髙田は『PRIDE・1』からまるまる1年後の同じ日、同じ会場で、同じ相手のヒクソンに敗北を喫す。しかし、1回目は本人がよく語るように「何もできず」というよりは「何も用意せず」に終わったが、2回目は本人的に手応えがあったのか表情も明るく、コメントもやたらにポジティブ。さらに「お金お金と言わずに、武道家として(ヒクソンには)次も出てもらいたい。『2回も負けてる奴の言葉かよ』って言われそうだけど(笑)」と、自虐ネタでオチをつける心の余裕も。吹っ切れた?

チンピラだよ、チンピラ

【99年4月29日、『PRIIDE.5』でのマーク・コールマン戦後のコメント】

⬆『PRIDE.5』で突如乱入、ギョロ目をひんむいてオラオラモードで挑発してきた“暴走柔道王”小川直也を、髙田は街のチンピラ扱い。ちなみに小川は当時自身が保持していたNWA世界ヘビー級のベルトを投げつけてきたものの、髙田はそれを丁寧に拾いあげて「はい」と、冷静に小川に渡し返す。これには小川も拍子抜けしたのか、素直にそれを受け取って思わずキョトンとしてしまったのであった。

桜庭、おまえ、男の中の男だよ

【02年11月24日、『PRIDE・23』。メインを務めた桜庭和志に対して】

➡自らの引退試合をセミファイナルにして、メインを桜庭に託した髙田。この期待に勝利で応えた桜庭に対して髙田は田村以上の賛辞で評価! せっかく頭を丸めてまでして相手を務めた田村の立場は……。

チャンスにだけは、やけに恵まれてきた

【99年7月8日、『週刊宝石』】

➡PRIDEでは敗戦ばかりが目立つ髙田だが、ヒクソン2回にホイス・グレイシー、マーク・ケアーやイゴール・ボブチャンチンと、当時の一線級の強豪と次々に対戦。その自らの格闘技人生を髙田は冷静にチャンスに恵まれたと分析。なお、『PRIDE 最強の証明』(河出書房新社刊)のインタビューでは、「どうせなら結果のほうで運をちょうだいと言いたいんだけど」と、こちらもごもっともな分析をしている。

みんな玉を抜かれてるね

【02年9月24日、『PRIDE.16』での大会終了後のコメント】

⬆01年8月、藤田和之がミルコ・クロコップにTKO負けしたことを憂慮し、髙田はミルコの相手に名乗りを挙げた!　さらに「もし、ミルコにかかっていくという選手がいるのならどうぞ譲ります。小川なり中西でも、健介でもいいしね」と、自身の古巣である新日勢を無闇に挑発、挙げ句のはてには去勢扱い!　結局、ミルコ戦は髙田が出陣するのだが、試合は膠着状態のまま引き分け。『週刊プロレス』の表紙では「こんな試合しやがって!」と書かれてしまうのであった。

並みの選手なら、倒れてますよ!

【02年4月28日、『PRIDE.20』でのヴァンダレイ・シウバvsミルコ・クロコップの解説にて】

⬆「並みの選手なら〜」という言い回しも髙田がよく口にするフレーズ。打撃中心の攻防なら見出しのように使用し、寝技中心の攻防なら「並みの選手なら(関節を)取られてますよ!」、体重差がある試合なら「並みの選手なら潰されてますよ」と臨機応変に活用。並みの解説ならここまで用いることのない髙田用語である。

田村、おまえ、男だ!

【02年11月24日、『PRIDE.23』での田村潔司戦後のコメント】

⬆髙田の代名詞と言ってもいい名言の初出。恩讐を越えて、自分の介錯に臨んだ田村に、髙田は最高の賛辞。さらにメイン後には髙田の呼びかけでリングに元Uインター勢が集結! しかし最後はなぜかアントニオ猪木が出てきて「1、2、3、ダー!」で強引にフィニッシュ! IGFに元Uインター勢の参戦が取り沙汰されているが、このときに種が巻かれたか?

鳥肌立った!

【03年6月8日『PRIDE.26』でのエメリヤーエンコ・ヒョードルvs藤田和之の解説にて】

⬆解説席での髙田から矢継ぎ早に飛び出すことでおなじみのセリフ。「強い!　強い!」や「凄い!　凄い!」という感嘆の言葉に続いて叫ばれる場合が多く、どんな言葉よりもダイレクトに視聴者に届くキラーフレーズである。なお、さらに感動にターボがかかると、「鳥肌が止まりませんよ!」「全部鳥肌立ってる!」などに発展。いまや髙田は日本一の“鳥肌使い”と言っても差し支えないだろう。

1997.10.11-2007.10.4
PRIDEは何を変えたのか?

少しだけ時間をください！

【03年8月10日、『PRIDE GP2003開幕戦』開会宣言】
➡現役引退から半年後、髙田はPRIDE統括本部長に就任。リング上でスポークスマンとして会場を盛り上げる役割を担うが、その口癖の一つとして有名なのが「少しだけ時間をください！」。主に開会式で自身の口上が長くなった際に用いる言葉であり、場内はその髙田の〝熱さ〟にドッと沸いたものだ。ちなみにハッスルのリングでは髙田総統が、後楽園ホールの使用延滞料を気にして「もう時間がないんだよ！」と、髙田統括本部長とは真逆のことをアピールする姿がよく見受けられる。

あえて一言だけ言います。去る者は追わず！

【03年11月9日、『PRIDE GP2003決勝戦』】
➡PRIDEエグゼクティブ・プロデューサーだったアントニオ猪木が、大晦日に『猪木ボンバイエ』を開催するためにPRIDEから撤退したのを受けて、髙田はかつての師にきっぱりと決別宣言！ この年の大晦日は、『男祭り』、『Dynamite!!』、『猪木ボンバイエ』の三つ巴となったが、『猪木ボンバイエ』は惨敗。その後、選手契約などをめぐり裁判沙汰にまでなる始末。もし髙田が去る者を追っていたらそんな事態にはならず、さらに永田さんもヒョードルと対戦せずに済んだのかもしれない？

今回のインタビューは、熱がない！

【03年8月21日、『週刊プロレス』】
⬆髙田に『PRIDEミドル級GP開幕戦』に向けたインタビューを“佐藤ちゃん”こと『週プロ』の佐藤正行編集長（当時）が行なったところ、髙田は原稿チェックで大部分を削除！ 佐藤編集長は「無難にやっておこうという意識が電波として、髙田本部長に伝わったのだろう」と誌面で推測。プロレス専門誌も総合の扱いに戸惑いが生じていたデリケートな時期だったのかもしれないが、そこをスパっと斬り込んだ髙田はまさに“男”なのであった。

おまえ、侍だよ

【03年10月1日、『PRIDE GP2003決勝戦』抽選会】
⬅03年『PRIDEミドル級GP決勝戦』の公開抽選会にて、吉田秀彦が自らPRIDEミドル級王者のヴァンダレイ・シウバを準決勝の相手に指名したことに髙田は感激。興奮をあらわに。ちなみに髙田総統は越中詩郎のことを「おまえ、侍だよ！」とは、まだ言っていない。

男の中の男たち、出てこいやあ！

【03年12月31日、『男祭り』開会宣言】
➡数ある髙田語録でも名言の中の名言なのが、これでもかとのけ反りながら絶叫するこのセリフ！ 03年大晦日の『男祭り』では、髙田はさいたまスーパーアリーナの屋根の上から開会宣言。この名言を会場内の観客たちと一緒に叫ぼうと、タイミングを合わせる練習を呼びかけるのだが、まだ浸透していなかったこともあってかうまくいかず。「（屋根の上で）寒いんだから！」と、叫ぶ髙田の姿が印象的であった。

おい、島田！ おまえ、しょっぱいよ！

【03年11月9日、『PRIDE GP2003決勝』】
➡03年の『男祭り』のCMとして、髙田が「おまえら」と叫んだ後に、会場の観客が「男だー！」と叫ぶシーンを撮影するために、島田裕二レフェリーが段取りを説明するが、観客と息が合わずグダグダに。すると髙田は島田にダメ出し、そして颯爽とジャケットを脱ぐと、中には「男の中の男」Tシャツが！ バッチリCM撮影が終わると、「最後に一つだけ、わがまま言わせてください。オレがPRIDE統括本部長だー！」と絶叫！ 決まった！ 見事に島田レフェリーを露払い扱いにして、観客をおおいに盛り上げたのであった。

ぶち壊したね！ これがPRIDEだね！

【04年4月25日、『PRIDE GP2004開幕戦』でのミルコ・クロコップvsケビン・ランデルマンの解説にて】
➡ランデルマンがミルコから番狂わせを起こした試合での、髙田の興奮きわまる発言。前後のやりとりとしては、長坂哲夫アナ「ぶち壊しました！ 木っ端微塵にぶち壊しました！ 鳥肌立った！ イエイ！」、髙田「木っ端微塵にぶち壊しました！」、長坂哲夫アナ「これがPRIDEです！」、髙田「これがPRIDEだね！」……実況の言葉を連呼することで、その熱を増幅させるのも髙田流解説のテクニックなのだ。

ゲーリー、これやめんの!?

【03年12月31日、『男祭り』でのゲーリー・グッドリッジvsドン・フライの解説にて】
⬆「PRIDEの番人」として名を馳せたグッドリッジは、この試合で引退することを表明。しかし、引退試合ながら27秒でKO勝利を収めたグッドリッジに対して、髙田はもったいないよとばかりにフレンドリーなコメント。それでもゲーリーは“これ”をやめて、そして翌年にはアッサリK—1のリングで復帰。「男だ!」とは言い難いムーブを展開した。

プロデューサーの清原さーん。おい、清原、立たんかい！ このイベント戦争に打って出る気はあるのか、ないのか！

【03年11月9日、『PRIDE GP2003決勝戦』】
⬆03年大晦日に『Dynamite!!』そして『猪木ボンバイエ』が開催されることが早々と決定。残るPRIDEの針路について、髙田はリング上からマイクでフジテレビプロデューサーの清原氏に公開質問! 同プロデューサーは「行きます」と答え、すかさず髙田は「清原、フジテレビ、おまえらは男だ!」とサムアップ。このように髙田統括本部長劇場は、いつなんどき、誰のことでも巻き込みかねないのである。

去年使ったフンドシをあげようか？

【05年8月5日、『PRIDE YEAR BOOK 2005』（エンターブレイン刊）より】
⬆ムックの対談企画で「今年（の大晦日）は僕が太鼓を叩きますから、髙田さんは試合をしてください」と迫る吉田に対し、髙田は見出しのように即答。しかし、吉田は「フンドシはちょっとなあ……」と、髙田の男気あふれる使用済みフンドシのプレゼントを拒否。そりゃそうだ。

鉛の空気でしたよ！

【05年8月28日、『PRIDE GP2005決勝戦』。エメリヤーエンコ・ヒョードルvsミルコ・クロコップの解説にて】
➡PRIDEファンが待ちわびた一戦であるヒョードルvsミルコ。この世紀の一番の直前、タイトルマッチ宣言のためにリング上にがった髙田統括本部長は、両者の張り詰めた空気感を金属にたとえて表現。要するに重い空気ということだろうが、髙田の声を通すとより重みを感じるから不思議なものだ。

ランペイジいるかい？

【04年8月15日、『PRIDE GP2004決勝戦】
⬆この大会でPRIDEミドル級王者のヴァンダレイ・シウバは近藤有己に完勝。その試合後にリングに上がった髙田は、シウバの王座防衛戦の相手としてクイントン・“ランペイジ”・ジャクソンを、さも近所の友だちに声をかけるかのように、なんと日本語で呼び出す! しかも髙田が試合をやるかどうか両者に問いただすと、こちらも日本語で「ヤルゥ!」と即答! この単純明快でグローバルなコミュニケーションに会場は熱狂の渦と化したのであった。

興奮してるんですよ！興奮してんの！

【05年8月28日、『PRIDE GP2005 決勝戦』でのマウリシオ・ショーグンvsヒカルド・アローナの解説にて】

➡ショーグンの圧勝に髙田はおなじみ「鳥肌立った！」を絶叫した後、興奮したシュートボクセ・アカデミー勢がリングに雪崩れ込んできた模様を、それこそ興奮しながら解説。興奮が興奮を呼ぶとはまさにこのことか。

来るよ！止まった！

【06年5月5日、『PRIDE無差別級グランプリ1回戦』藤田和之vsジェームス・トンプソンの解説にて】

➡開始ゴングと同時にダッシュして相手にぶつかっていくのが持ち味のトンプソン。遠足前日の子どものように、髙田はその姿をゴング前からワクワク期待。それに応えるようにトンプソンはゴングと同時に走り出すが、藤田の目の前で突如停止！　拍子抜け！　の様を視聴者にイチイチわかりやすく解説、というか、思ったことをすぐ口に出してしまうお茶目な髙田なのであった。

五味君がいない武士道は、コーヒーにクリープが入っていないどころの騒ぎではない！

【06年2月15日、『PRIDE 武士道－其の拾－』会見】

➡PRIDE武士道のエースである五味が会見上、「今年は試合数を絞っていきたい」と語ると、統括本部長として髙田は「それは困る！」と前置きし、PRIDE武士道にとって五味がいかに重要かを髙田らしく表現。まさにコーヒーだけに、違いのわかる男のたとえである。

「むしろ、いい展開じゃない！」というのが実感である

【06年6月6日、髙田延彦フォトノート『日々是発見』】

➡06年6月にフジテレビがPRIDEの放送から全面撤退したことを受けて、髙田はPRIDE公式HPで、まったく意に介してないとばかりの強気な見解！　いわく「PRIDEの生命線は絶対的にライブの中で作り上げる高い熱だからね」と、ポジティブにも程がある持論を展開。統括本部長たるもの、たとえ解説席でははしゃいでも、緊急事態で周囲が騒いでいるときには落ち着き払う必要があるのだ！

PRIDEは永久に不滅です

【06年6月8日、PRIDE公開記者会見】

➡フジテレビ放送撤退を受けて、PRIDEはファン公開の緊急会見を開催。その席で髙田は、かつて野球少年であったからか、長嶋茂雄の「読売巨人軍は永久に不滅です！」になぞらえるようにPRIDE存続を宣言！　ちなみに会見にはファイターが50人以上も登壇！　そのうちPRIDEに参戦経験のない選手が3分の1以上も含まれていたが、この際ノー問題！

人間じゃない……、人間じゃないです

【05年8月28日、『PRIDE GP2005 決勝戦』でのエメリヤーエンコ・ヒョードルvsミルコ・クロコップの解説にて】

⬆PRIDE屈指の強豪対決に対して髙田がポツリと漏らしたセリフ。ちなみに髙田はこの後もヒョードルに対して「バケモンだね！」と聞きようによっては失礼な解説。また、この「バケモンだね！」と「人間じゃない」のあいだを埋める表現として、ヒョードルには「動物だよね！」という解説を行なったことも。結局、ヒョードルはいったいなんなのだろうか?

背を向け合っている場合じゃない。言っておきますが、私は本音ですからね

【07年11月28日、『やれんのか！』カード発表会見】

⬆格闘技大連立によって、髙田は谷川貞治イベントプロデューサーと4年半ぶりに握手！　03年以降、多数の軋轢があったPRIDEとK－1だけに、髙田の皮肉まじりのコメントにはサダハルンバも思わず苦笑いを浮かべていた。んあ～。

ちょっと話しかけないで

【07年4月8日、『PRIDE・34』でのドン・フライvsジェームス・トンプソンの解説にて】

⬅PRIDE男塾塾長のフライとラッシュパワーが見ものであるトンプソンの壮絶な殴り合いを前に、実況アナに「心が熱くなりませんか？」と振られた髙田は、解説放棄ともとれるこの発言！　この返しに対して「わかりました」と答えるアナ、男だ！というよりも、大人だ！

大みそかのパフォーマンス？今年はアレ一本。お尻を引き締めなきゃ

【07年12月9日、『第7回髙田道場ダイヤモンドキッズカレッジ』】

⬆『やれんのか！』の開会パフォーマンスには何をやるのかを問われた髙田は、新宿2丁目界隈が喜びそうな発言。もちろん当日は魅惑のお尻全開で勇壮に太鼓を叩いてみせた。

（桜庭とは）これから酒を飲んだり、飯を食ったりもできない

【06年7月12日、『GOETHE』8月号】

⬆06年5月に起こった桜庭の『HERO'S』移籍に関して髙田が心境を吐露。移籍劇の数日後に桜庭が髙田道場に現われ、「（髙田への報告と）順序が逆になり申し訳ない」と詫びたことを明かしたうえで、「桜庭、おまえ、やっちゃったな、という思いですね」と、その無念さを語ったのであった。現在は大連立でPRIDEと『HERO'S』が合体、DREAMが誕生したわけだが、髙田と桜庭の師弟交流も復活しているのだろうか?

野球でいえば、ロレンゾが二つの球団を手にしたようなものです

【07年3月27日、PRIDE重大発表記者会見】

➡六本木ヒルズに多くのファンを集めて行なわれた公開会見で、PRIDEは商標権、営業権、著作権、選手契約等のすべての権利が、UFCのオーナーであるロレンゾ・フェティータ氏に移管されることを発表！　しかし、「PRIDEはUFCに買収されたのではありません」と語った髙田は、やっぱり野球少年であったからか、見出しのコメント。耳からウロコのわかりやすいたとえではあったが、どうやら実際は手にしたようなものではなかったようだ。

（統括本部長は）あだ名みたいなもんだ。一応呼んどこう、みたいな

[07年12月20日、「『kamipro』No.118]

⬆PRIDE消滅後、その遺志を継いだかたちで行なわれた『やれんのか!』でも、“統括本部長”に就任した髙田延彦。もはや肩書きはあだ名みたいなもんだと自覚している模様。ちなみに、その一ヵ月前の本誌117号でのインタビューでは、統括本部長と呼ばれると「気をつけてよ!　PRIDEがああなった以上、私はもう統括本部長を名乗れないからね」と、ダメ出しをしておりました。


私は試合直後から一貫して「あの裁定には一切問題なし!」と言っている

[2008年3月8日、『格闘技通信』]

⬆『やれんのか!』で、その結果が物議を呼んだ三崎和雄vs秋山成勲について髙田は一貫して裁定を支持。試合終了直後には解説者という立場を忘れてリングに上がり、「和雄」と親しみを込めて呼んでいる三崎と抱き合って喜んだ髙田。髙田自身は「あのシチュエーションで（自分を）偽るのは難しい（笑）」と、解説よりも本能優先であるとコメント。さすがです！

PRIDEがプロレス界に与えた多大なる影響

PRIDEはプロレスを殺したのか？



「PRIDEの出現によって、プロレスは終わった」という言い方をされることがよくある。確かにPRIDEには多くのプロレスラーが出場し、敗れていくという“圧倒的現実”を見せることで巨大化していった部分はあるだろう。しかし、プロレス衰退の原因は本当にPRIDEにだけあるのだろうか。ここでは、PRIDEや総合格闘技に関係が深いプロレスラーに、PRIDEがプロレス界に与えた影響について語ってもらった。



高山善廣

プロレスラーの凄みを総合で見せつけた男が語るプロレスとPRIDE

聞き手／堀江ガンツ　撮影／菊地茂夫　試合写真　乾晋也

PRIDEをはじめとした総合格闘技のリングに、これまで数多くのプロレスラーが上がり、多くが辛酸をなめてきた。

その一連のプロレスラー敗戦が、プロレス人気の低迷、それに代わるPRIDE人気の爆発の一つの要因となったことは間違いないだろう。

中には藤田和之、安田忠夫のように総合によって名を上げたプロレスラーもいたが、その勝利が必ずしもプロレス界にフィードバックされたとは言いがたかった。

そんな中、唯一、高山善廣だけはドン・フライ戦をはじめとしたPRIDEでの闘いで名を上げ、それをプロレスで存分に活かし、〝プロレス界の帝王〟と呼ばれるまでになった。しかも、総合格闘技では4戦全敗にも関わらずである。

まさに、勝敗を超えたド迫力の闘いで、格闘家を食ってしまった男。はたして高山は、どのようにしてPRIDEを〝利用〟したのか。そして、PRIDEがプロレス界に与えた影響とはなんだったのか。

――今回は「PRIDEがプロレス界に与えた影響」というテーマでうかがっていきたいんですけど、高山さん自身、PRIDEの影響が凄く大きいレスラーの一人ですよね。

高山 やっぱり影響は大きいですね。一言で言えば、PRIDEに出ることで深夜タレントからゴールデンタイムタレントになったような（笑）。

――それまでの高山さんは深夜タレントでしたか（笑）。

高山 プロレス中継も深夜だし、観てる人もごく一部だったじゃないですか。それがPRIDEに出ることによって、一般の人も高山善廣という存在を知ってくれたっていう意味ではね、さっきの表現が当てはまるんじゃないかな。

――もともと高山さんが、PRIDEというかバーリ・トゥード的なものに興味を持ったのはいつ頃ですか？

高山 興味だけだったら、UFCが最初に出てきたときからありましたよ。「こりゃヤベえな」「俺にはできねえな」って（笑）。

――まあ、最初は素手で顔面を殴って、金的までOKでしたからね（笑）。

高山 ねえ。シャムロックが出たとき「よくやるな。あいつキ○○イだよ」って思ってましたから。

――では、総合格闘技が自分に関わる出来事だと、視界に入ってきたのは、やはり髙田vsヒクソン戦があった『PRIDE・1』ですか？

高山 いや、いまだから言うけど、あのときは傍観者でしたね。

――あ、そうなんですか⁉

高山 もちろん髙田さんを応援してはいましたけど、当時、俺はちょうど



ドン・フライ戦で満足してないよ

本当は勝って桜庭のマネをしたかった！

全日本に上がり始めたときで、「髙田さんはそれやるんだ、でも俺はこっちがあるから。違う道行っちゃうな」って思ってたんですよ。それに、髙田さんの強さを信じてたから、勝つ可能性もあるだろうと思ってたしね。

――ある意味、別世界でもあるし、それほどの危機感でもなかった。

高山 うん。俺は全日本に上がってたからわかるんだけど、全日本や新日本を観てるプロレスファンって、髙田vsヒクソンにあんまり興味を持ってなかったんだよね。

――確かにそうかもしれないですね。

高山 だから、ヒクソンに髙田さんが負けたからプロレスが低迷したかっていうと、それは違うと思うよね。それはプロレス界の言い訳であって。PRIDEという巨大な対抗勢力が生まれたにも関わらず、ちゃんとした策がなかったっていう、昔ながらの営業戦略をずっとやり続けただけだったことが原因だったと思う。

――逆に言うと、あそこで髙田さんが勝ってても、PRIDEがあのまま続いたら、同じように既存のプロレスを打ち負かしてた可能性がある、と。

高山 だと思いますよ。だって、もしヒクソンに勝ったとしても、髙田さんがプロレスに帰るかっていったら、帰らなかったと思う。ヒクソンに勝った髙田延彦がエースとしてPRIDEが続いてたら、それはそれで、人気が出ていたかもしれないし、母体もKRSのままだったかもしれない（笑）。そんな感じですね。

――要は総合格闘技という、見た目はプロレスに似たようなものが、興行として完全に成り立ってしまったことが、プロレス界にとって大きかった。

高山 だと思うんですよね。K－1が出てきたときもちょっと脅威だったけど、K－1とは棲み分けができたじゃないですか。だけどPRIDEっていうのはね、パッと見、ホントにプロレスだからね。しかも、「最強を証明したいなら、PRIDEに上がるしかない」みたいなマスコミの操作とPRIDE側の罠にハマッて、続々とプロレスラーが出ていったでしょ（笑）。

――あれでPRIDEが太っていきましたよね。

高山 初期のPRIDEはプロレスラーがいなかったら成り立たなかったもんね。もちろん最初から総合格闘家で強い選手もたくさんいたけど、そいつらだけだったら、あんな盛り上がりはなかったし。

――ホントにプロレスのお株を奪うようなかたちで、人気を得ていきましたよね。

高山 PRIDEは、新しい日本のキング・オブ・スポーツですからね。しかもPRIDEは、そのあと猪木さんを引き上げちゃったじゃない。新日本が猪木さんを干すから（笑）。

――アントニオ猪木の遺産をなぜか新日本じゃなくて、PRIDEが受け継いじゃったという（笑）。その舞台に高山さんも上がろうと思ったのは、何がきっかけだったんですか？

高山 やっぱり桜庭がガーンと上に行き始めて、PRIDEが地上波でも流れるようになったことだよね。当時、深夜じゃなくて、一般の人が観られる時間帯に地上波で流れていたのは、K－1とPRIDEしかなかっ

たから。で、K－1に出るのはちょっと難しいけど、PRIDEだったら頑張れば俺もできるかなって思って。

——それこそ、ゴールデンタイムタレントになることを虎視眈々と狙っていた、と（笑）。

高山　昔、（ジャイアント）馬場さんが「ニューヨークでトップを取ったら全米からオファーが来て、どこに行ってもメインだった」って話をしてくれたんだよね。で、僕にとってのニューヨークがPRIDEだな、と思って。それからやっぱり、高田さんが出て、桜庭が出て、あと田村さん、金原さんがリングスでやってて、俺が全日本に出てることを「高山は総合が嫌だから逃げたんでしょ？」って言われるのもムカついてたんですよ（笑）。それでやろうかな、と。

——もともとPRIDEに上がるっていうのは、向こうからオファーがあったんですか？

高山　いや、当時は俺、ノアの所属選手だったから「PRIDEに上がりたい」っていう希望を三沢（光晴）さんに言ったの。

——へぇ～っ！　高山さんから三沢さんにお願いしましたか。

高山　そしたら三沢さんが「いいよ」って。

——あ、簡単ですね（笑）。

高山　「いいよ。じゃあどうすればいい？」って言われて、当時はDSEの社長が森下さんだったから、「森下さんに会ってください」って言って、会いに行ってもらって。そういう意味でも三沢さんには凄い感謝しますよ。

——高山さんのPRIDE参戦希望を認めるっていうのは、三沢さんになんらかのビジネス的な勝算があったんですかね？

高山　いや、あの人はそういうビジネス的な勝算とかじゃなくて、選手がやりたいものはやらせてあげたいっていう、単純にそれだけだと思うんですけどね。だから最初は日本テレビとノアの契約だと、所属選手の放映権は日テレの独占契約だから、もし俺がPRIDEで試合をしてもフジテレビの電波に乗らない可能性が高いって言われてたんですよ。

——それは困りますね。

高山　困りますよ。テレビで流れなかったら、PRIDEに出る意味が半減どころか、だいぶ薄れますからね。だから「それは困る」って三沢さんに相談したら「だったら所属は抜けて、フリーとしてウチに上がり続けてくれればいいよ」って、全部向こうから言ってくれたの。

——そこまで許してくれましたか！　男気ありますねぇ！

高山　ホントにありがたくてね。だから、そういう意味では、あの人には頭が上がらない。リング上ではぶん殴ってるけどね（笑）。

——リング上では頭上げっぱなしだけど（笑）。確かに最初の藤田（和之）戦、そしてドン・フライ戦がなければ、いまの高山善廣は……。

高山　ないでしょうね。いまみたいなネームバリューは得られなかったでしょう。

——PRIDEには、最初は一回だけ上がるつもりでしたか、それともレギュラー的になるつもりでしたか？

高山　最初は一回やって、もうそれで終わりでいいやって思ってましたね。自分はこういう試合もできるっていうことを証明すれば、ある意味、目的達成というかね。そう思ってたんだけど、いざ上がってみたら、これはまだまだやらなきゃいけないなって。

——血が騒いじゃった、みたいな。

高山　なんかね、ちょっと違う快感があって。負けたっていうものあったと思うけど。

——そして第2戦はセーム・シュルトですよね。

高山　K－1絶対王者ですよ（笑）。

——いま思うとよくシュルトとやりましたね。

高山　あれはね、単純に見た目がおもしろいなと思って。俺が見上げて闘うことってほとんどないから。

——絵面としておもしろいからやりましたか（笑）。

高山　そういう画がほしいっていう、単純な理由で、のちのK－1チャンピオンと、あんなちっちゃいグローブで殴り合っちゃいました（笑）。ホント、打撃もらって失神したのってあれが最初で最後だもん。

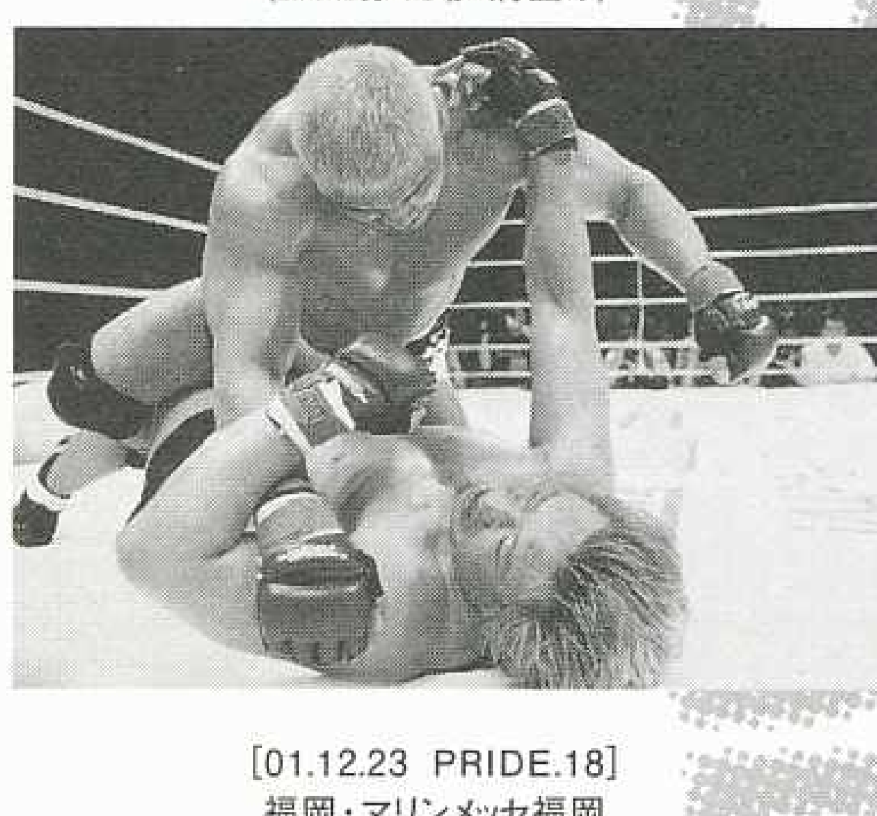
——しかも、意識が飛ぶっていうより、あまりの痛みで失神したって感じなんですよね？

高山　どうなんだろう？　最後は覚えてない。でも、試合中はパンチをもらいながら、痛くて痛くてしょうがなかった。もうホントに頭が割れるんじゃないかと思って。それぐらい凄かった。

——そんな経験をしても、まだPRIDEに上がり続けようと思ったのは、なぜなんですか？

高山　セーム・シュルト戦でホントに何もできなかったのが、すげえ悔しかったの。でも、2連敗して「また出してください」とも言えないし、どうなるかと思ってたら、急に「マーク・コールマンが倒れたから、ドン・フライの相手がいなくなりました」っていうニュースが来て、「あれっ？　もしかしたら俺に話が来るかも」って思ったんだよね。そしたらホントに来て。それが試合の10日か1週間ぐらい前。でも、これはいくし

[01.5.27 PRIDE.14]
神奈川・横浜アリーナ
×vs藤田和之
（2R 2分18秒 肩固め）



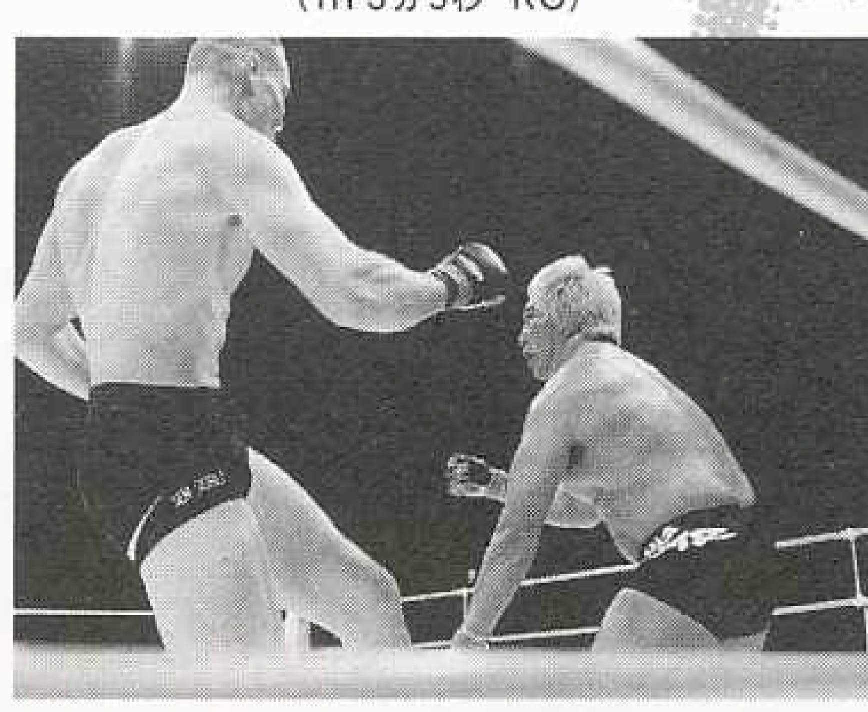
高山のPRIDEデビュー戦は、のちに"真・猪木軍"の盟友となる藤田和之を首相撲でつかまえてパンチとヒザ蹴りを叩き込み、ド迫力のどつき合いに。そのシンプルながらわかりやすく激しい闘いぶりは、PRIDEに新たな価値観をもたらした。

[02.6.23 PRIDE.21]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
×vsドン・フライ
（1R 6分10秒 TKO）

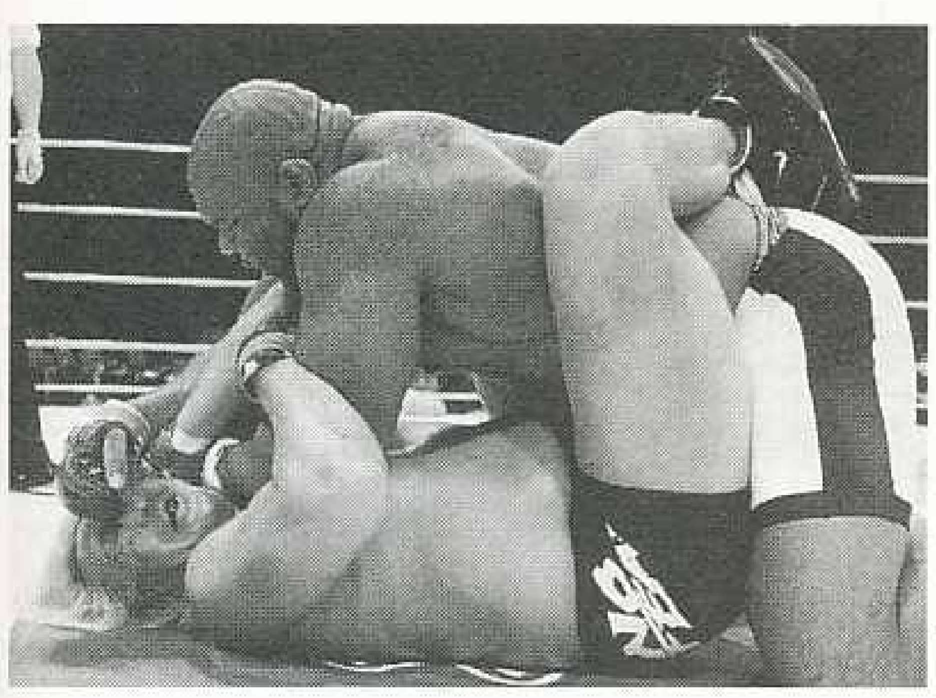


これぞPRIDE史上に残る、壮絶な男と男の真っ向勝負。M・コールマンの欠場により急きょ、フライ戦を受諾した高山は、ゴングと同時にひたすら足を止めての殴り合い！　この勝敗すら超越した激闘により、高山は敗れたもののプロレスラーとして大ブレイクをはたした。

[01.12.23 PRIDE.18]
福岡・マリンメッセ福岡
×vsセーム・シュルト
（1R 3分9秒 KO）



藤田戦での闘いぶりが認められ、再びPRIDEのメインに登場。のちのK－1スリートタイムス王者セーム・シュルトとの摩天楼対決が実現。高山は殴り合いから組技に持ち込みたかったが、シュルトの強烈な突きと前蹴りによって、高山が倒壊した。



[02.12.31 INOKI BOM-BA-YE2002]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
×vsボブ・サップ
（1R 2分16秒 腕ひしぎ十字固め）

フライ戦で名を上げた高山は、なんとその年の大晦日のメインに登場。当時、世間を巻き込むほどのブームを起こしていたボブ・サップと対戦した。結局、高山の総合戦績は4戦全敗だが、そのすべてがメイン。これは、勝敗を超えた快挙である。

かないな、と。

PRIDEは一見さんが観てもおもしろかった。

ら雑な言い方なんだけど、強さがダ

かないな、と。

——だからこそ、試合も真っ向勝負の殴り合いになったというか。

高山　いや、あれは作戦じゃなくて。あっちが殴り続けるから、こっちも殴り続けただけなんですよ。向こうが殴るのやめないから、こっちもやめられない。ああいう試合をしようとかは考えてなくて、ああなっちゃったの。

——闘いの中で、意地の張り合いになったわけですか。

高山　で、セーム・シュルトと比べたらパンチが痛くないから大丈夫かなと思って（笑）。

——じゃあ、セーム・シュルト戦があったからこそ、フライとの名勝負があったとも言えるわけですね。

高山　うん、やってなかったら、ちょっとビビッちゃってたと思う。PRIDEの試合とかに慣れてない選手だと、パンチがかすっただけで倒れて「おまえ、それ絶対KOじゃないだろ」ってヤツもいるじゃない。俺はそういうのはないね。

——一番痛いのを食らってるから、ちょっとやそっとじゃ、ビックリしない、と。

高山　そうそう、一番痛い目に遭ってて最後の最後まで立ってたから。ドン・フライのパンチも、あれに比べりゃ痛くねえだろ、と。

——敗戦を糧にするっていうのは、ホントにプロレスラーですね。

高山　あそこから世の中が俺を引っぱり回すようになったからね。

——PRIDEや総合格闘技に出たプロレスラーってたくさんいますけど、ホントにプロレスラーとしてのステップアップに総合を利用できたのって、じつは高山さんだけなんじゃないか、と思うんですけど。

PRIDEは一見さんが観てもおもしろかった。プロレスだって本来そういうものだったんだよ

高山　ああ、なるほど。

——安田さんなんかも『INOKI BOM-BA-YE』で一度スポットが当たりましたけど、そのあとプロレスでは続かなかったですからね。

高山　それはね、もともとプロレスラーとしての資質がないからじゃないですか？　PRIDEでボーンと勝ったとしても、プロレスに戻ったときにプロレスがうまくないと意味がない。俺はほら、PRIDE出る前にタッグチャンピオンとかになって、メインイベントにも上がってたから、それは違うと思うな。

——確かに当時、プロレスのリングでメインを張ってるような人がPRIDEのリングに上がるっていうのは珍しかったですよね。

高山　そういう意味で髙田さんぐらいでしょ、プロレスのトップでPRIDEにも上がったのって。

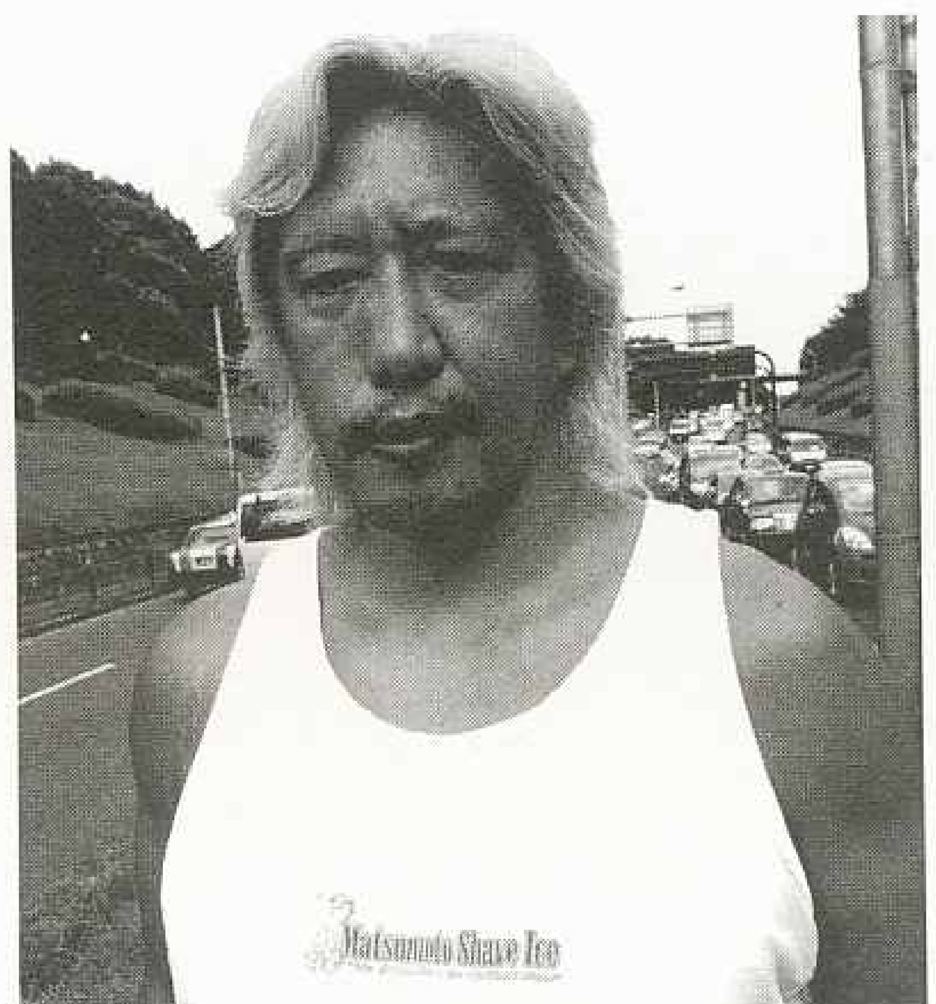
——あとはPRIDEじゃないですけど、永田さんが大晦日に二回やってますけどね。まあ、永田さんの場合はステップアップとはいきませんでしたけど……。

高山　まあ、彼は所詮、永田裕志ですから（笑）。

——ダハハハ！　でも、その二回がミルコとヒョードルっていうのがネタとして強いですよね。

高山　それを自慢にしてるからね。「あの二人とやった」って。でも、それは「やった」んじゃなくて「やられた」だけじゃねえかって（笑）。なんかへんなブッサイクな女がね、「キムタクと寝たの」とか言ってたら「やられただけだろ、バカヤロー」みたいなね。

——確かに（笑）。高山さんはドン・フライ戦で名を上げて、大晦日にはボブ・サップとも闘って、そのあとミルコ戦が流れたのを最後に、総合からは離れましたけど、あれは高山さんの中で「目的達成」って感じだったんですか？



たかやま・よしひろ■1966年9月19日、東京都出身。92年にUWFインターでデビュー。97年より全日本プロレスへの本格参戦を機にプロレスラーとして開花。01年にPRIDE初参戦し名を上げ、プロレスでも新日本のIWGPとNWF、ノアのGHCのベルトを腰に巻き、"帝王"と呼ばれる。04年に脳梗塞で倒れるが、06年に復活をはたした。196cm、125kg。

高山　目的達成はしてないよね、結局一回も勝ってないし。本当の目的はPRIDEっていう舞台で勝って、桜庭のマネをしたかったの。PRIDEのリングで勝って「プロレスラーは強いんです」って叫ぶ。それが言えたら、ホントの意味で目的達成だったんだけどね。まあ、それを目指してたことで、自然と自分の地位が上がってはいったけど、ホントの目的は達成してないよね。

——なるほど。逆に言うと、帝王・高山善廣でもPRIDEでは勝てなかったっていう部分も若干プロレスに影響した部分は……。

高山　それはあったかもしれないね。ただ、俺が勝てなかった選手もプロレス界に何人かいるからね。そういう意味では、ホントのトップではないから。

——そんな中、強さとか勝負論ではPRIDEには勝てないんだから、プロレスはそれ以外のことをやらなくちゃいけないってことで、『ハッスル』が出てきたり、ほかのプロレス団体もそういう考えが浸透していきましたけど、そのことってどう思います？

高山　それはある意味、営業戦略としては間違いではないんだけど、それって結局、突き進む先が、凄い先端が尖ってて細かくいっちゃってると思う。だから雑な言い方なんだけど、強さがダメだからおもしろさとか、別のことをやったことでパイが狭くなったと思うんだよね。昔のプロレスは強さもおもしろさもすべてを兼ね揃えてたイメージがあったじゃないですか。

——ある意味、いまの総合とエンターテインメント系のプロレスが合体したような感じではありましたよね。

高山　そして、単純におもしろかったと思うんだよね。なんの予備知識もない人が観ても興奮するようなものだった。それがプロレスはどんどんマニアックになって、マニアしかわからなくなったのが問題だと思う。PRIDEは一般の人が観ても「凄い」「強い」「おもしろい」って思えるものだったから。プロレスもかたちは違っても、一般の人が「すげえ！」「おもしろい」って思えるものにしなきゃダメだよね。

——本来ならプロレスこそ、一般にわかりやすいものなはずですからね。今日はありがとうございました！

【08年8月21日／都内・TARLUMにて収録】


高山善廣が選ぶPRIDEベスト3

1　桜庭和志vs ホイス・グレイシー

2　アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラvs ミルコ・クロコップ

3　ミルコ・クロコップvs ジョシュ・バーネット（3回目）

ベスト3はどれも名勝負なんだけど、それが簡単に勝負がつかないで、お互いに動き続けたところが凄いよね。最後まで客を飽きさせないプロの試合だったと思う。こうやって見ると、PRIDEっていうのは、その歴史の前半はサクが主役で、後半はミルコが主役のイベントだったって気がするね。二人ともその階級のチャンピオンじゃないのに、そういう選手が主役っていうのが、ボクシングなんかにはない部分で、そこがPRIDEのおもしろさでもあったと思うね。



永田裕志

俺たちが負けたことでいまの新日本がある。ケガの功名ですよ(笑)

総合格闘技によってもたらされた新日本の崩壊と再生

聞き手／堀江ガンツ　試合撮影／乾晋也（ミルコ戦）、平工幸雄（ヒョードル戦）

長州さんはヒクソンをドームで叩きたいと思ってたんでしょうね

PRIDEの"負の影響"を最も受けたプロレス団体といえば、それは間違いなく新日本プロレスだろう。

90年代、4大ドームツアーや両国国技館7連戦など、いまでは想像もできないような企画を次々と実現させ、我が世の春を謳歌していた新日本。しかし、2000年にアントニオ猪木がPRIDEエグゼクティブ・プロデューサーに就任。そこからPRIDE、そして『猪木祭り』等、総合格闘技に新日本のレスラーが次々と選手が送り込まれ、新日本プロレスのリング上の秩序も乱れてしまい、急速に興行人気を落としていった。

そんな"格闘技路線"最大の被害者といえば、我らが永田さんをおいてほかにいないだろう。IWGPヘビー級王座の防衛記録を作り、"ミスターIWGP"と呼ばれながらも大晦日にミルコ、ヒョードルに秒殺負け。王者のイメージはズタズタに引き裂かれてしまった。

それでもめげずに好勝負を重ね、白目むき出しの"キラー永田"として復活した姿はある意味、昨今の新日本復活の象徴ともいえるだろう。

そんな永田さんが内側から見た"格闘技路線"時代の、新日本プロレスへのPRIDEの影響を赤裸々に語ってもらった。

――『PRIDE・1』が開催されたときって、ちょうど永田さんがWCWに参戦しているときですか？

永田 そうなんですよ。アメリカにいましたね。でも、向こうにいても髙田さんとヒクソン・グレイシーがやるって情報だけは入ってきて、素直に「これは凄いイベントだな」と。大きなイベントの目玉カードとしては、最高じゃないかと思いましたね。

――あのカードが発表されたとき「トップレスラーがヒクソンに負けたら、プロレス界が大変なことになる」っていうような危機感はありませんでしたか？

永田 そういうのはなかったですね。グレイシー柔術やヒクソンの実力自体があんまりわかってませんでしたから。想像力は刺激されましたけどね。それで当時、アメリカでも総合格闘技が広まってきてた時期でしたから、あのカードは現地のプロレスラーのあいだでも話題になってましたね。ああいうの好きな連中がいて。

――永田さん自身は、自分とは関係ないというか、別世界の話だと思ってましたか？

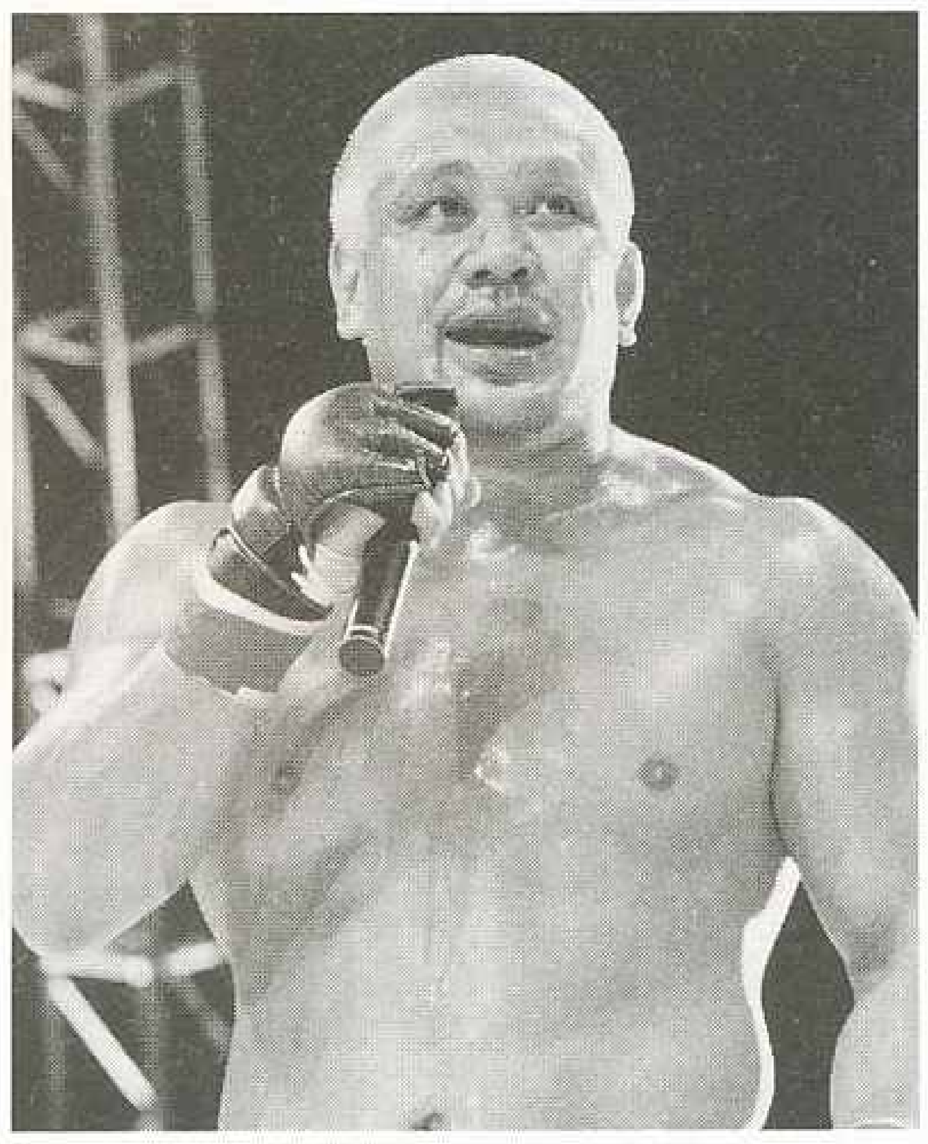
永田 距離はあるだろうなって思ってましたね。だから、あんまり自分が関わるとか、その当時はまだ僕もペーペーでしたし、そういうのは全然なかったです。

――では、総合格闘技が、自分たちに関わるものとして気になりだしたのはいつ頃からですか？

永田 やっぱり藤田（和之）選手がPRIDEに参戦するようになってからですよね。ちょうど猪木さんが、PRIDEのなんとかプロデューサーになったりして。

――エグゼクティブ・プロデューサーですね。

永田 そのうち石澤（常光）選手が自分の意思というか、駆り出された部分もあるんでしょうけど、猪木さんの力で出たじゃないですか。そのへんからやっぱり、そういう雰囲気になってきて。


"猪木からの刺客"第1号として、PRIDEのリングに上がった藤田和之は、"霊長類ヒト科最強の男"と恐れられたマーク・ケアーを下し、新日本の若手選手からマット界のトップへとたった1試合で大躍進した。この藤田の成功が、新日本のレスラーのさらなる総合出陣を加速させたが……。

――否が応にも総合に巻き込まれ始めたというか。

永田 総合格闘技っていうことで言えば、藤田選手がまだ新日本所属だった頃、新日本にヒクソンを呼んで、中西（学）さんとか藤田選手あたりがやるって企画はあったみたいで、そういう噂は聞いていたんですよ。

――そういえば、長州さんがインタビューで「ヒクソンなんていうのは中西とかがやったら一発だ」「新日本の選手だったら問題ない」みたいな発言をしてましたよね。

永田 表立って「ヒクソンと中西をやらせる」っていうような話は僕らには入ってきませんでしたけど、その頃、中西選手が突然、毎日走りだしたんですよ（笑）。

――ダハハハハ！　明らかに気合いが入り始めましたか（笑）。

永田 凄くわかりやすかったですね（笑）。ただ、その一方で長州さんは「俺の目の黒いうちはああいうのには触らせない」って言われてたんですよ。でも、猪木さんがPRIDEエグゼクティブ・プロデューサーになって、長州さんが「俺の目の黒いうちは……」って言ってたものが崩れ始めたんです。

――なるほど。そのへんから90年代の長州政権プロレスが内部的に崩れ始めたんですね。

永田 要は猪木さんが力を持ったってことですよね。その力をつけたのは、僕は藤田和之くんだったと思うんですけど。

――長州さんが「俺の目の黒いうちは……」って言ってたのは、やはり総合と絡んだらおかしくなるっていう危機感があったんでしょうかね。

永田 そうですね。だけどヒクソンvs中西戦ってマッチメイクをプランニングしてたっていう部分で、どっかで叩いちゃおうっていうのがあったと思うんですよね。

――それはもちろん新日本にヒクソンを呼んでっていうことですよね？

永田 そうみたいですね。新日本のドーム興行でそのイベントをやるみたいなことを言ってましたね。

――要はヒクソンをUインターと同じ目に遭わせようという考えなんでしょうね。

永田 それに近かったかもしれないですね。ドームの目玉とするにはこのうえない材料だったかもしれない。やっぱりUインター以降、ドーム大会の目玉っていうのを常に探してましたからね。そこに白羽の矢が立ったのがヒクソンだったんじゃないでしょうかね。

――そういうカードが持ち上がるということは、アマチュアで全日本王者クラスまでいったプロレスラーなら、グレイシー相手でも問題ないっていう認識が、新日本内部にもあったっていうことなんですか？

永田 そうかもしれないですね。総合格闘技に対する認識が、やっぱり当時の新日本プロレス、そしてプロレス界は甘かったんだと思います。案外簡単に考えてるというか。

――では、石澤さんがハイアン・グレイシーに負けたときは、やはり衝撃でしたか？

永田 やっぱり闘い方が慣れてないっていうか、これは生半可じゃ無理だろうなとは思いましたね。プロレスの闘い方を一回捨てて、総合を身体に覚えさせないと厳しいだろうなって。あの試合が一つのきっかけとなって、そういう状況はわかりかけてきたんですけど、そのためにどういうトレーニングをしなきゃいけないかってことについては、まだ無知でしたね。

――総合の練習をするといっても、普段、プロレスをやりながらになるわけですしね。

永田　巡業中の試合前とか、オフのあいだの合同練習とかで、そういうトレーニングはやってますけど、プロレスのシリーズやりながらでは時間的に限界がありましたから。

——しかも、そうこうしてるうちに、総合格闘技の市場規模がどんどん大きくなって、それに伴ない技術進歩も急速に進んでしまって。

永田　世界的に底辺がおもいきり広がったんですよね。髙田さんとヒクソンが最初にやってから3年ぐらいして、僕はもう一回アメリカに行ったんですよ。そのときアトランタ周辺に総合格闘技のジムがたくさんできてて、驚きましたね。3年前はほとんどなかったのに。そうやって、総合の技術は急速に進歩する中、僕らは総合格闘技の闘い方をまだそんなに認識してなかった。それなのにPRIDEの興行的にはプロレスラー待望論ばかりが広がっていってしまった気がしますね。

——そんな中で2001年の大晦日に永田さんはミルコとやるわけですけど、あれはやっぱりミルコ戦を飛躍のきっかけにしようとしたわけですか？

永田　最終的にはそうですけど、やっぱり周りに焚きつけられましたよ、正直言って。

——ダハハハ！　とくにどなたに焚きつけられたんですか？

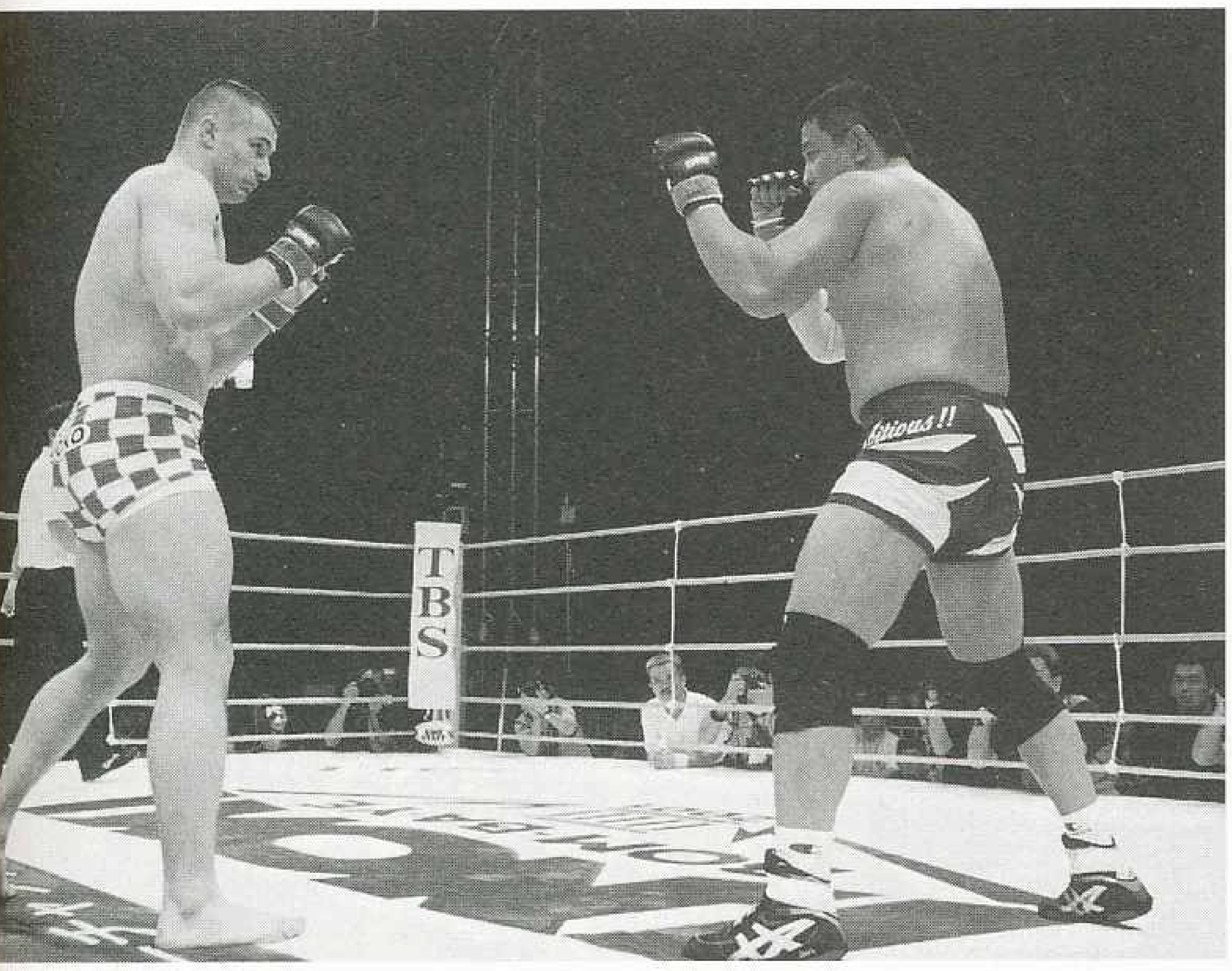
永田　藤田君と『週刊ゴング』の金沢さんですね（笑）。

——GKが焚きつけましたか（笑）。

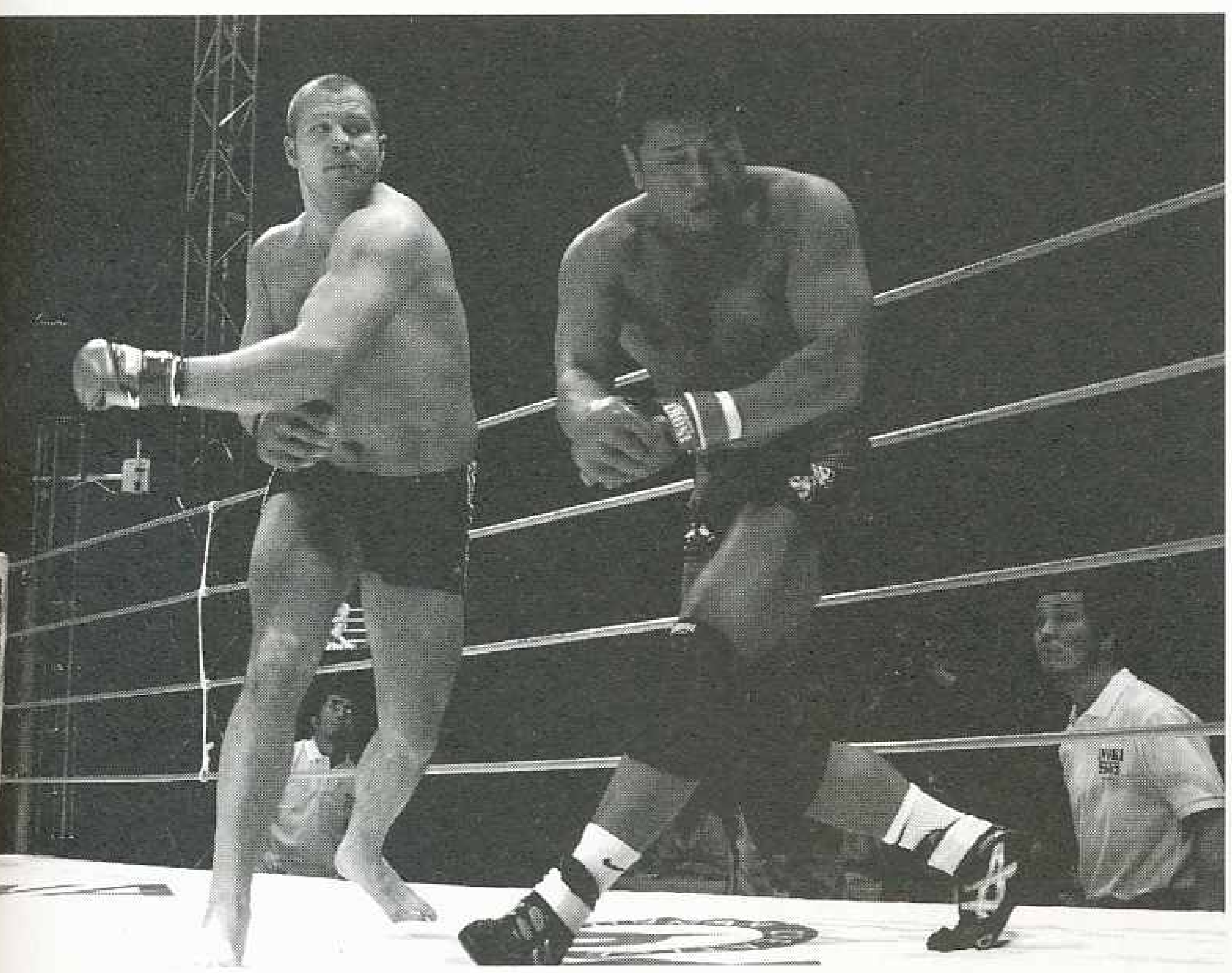
永田　あの二人は仲がいいじゃないですか。まずは藤田君が「石澤先輩やりましょうよ」とか「永田先輩やりましょうよ」とか、よく言ってたんですよ。

——仲間がほしかったんですかね。

永田　一人じゃ嫌だから巻き込んだんじゃないですか（笑）。そしたら金沢さんも「いや、これはチャンスだからやったほうがいい。できるよ、君なら！」とか「今回ばかりはやったほうがいい」みたいに言ってきて。やっぱり新日本から誰かがいかなきゃならないとは思ってましたし、自分がそういう場に出ていって、結果はどうあれ勝負してみるのも一つの手かな、と。だから焚きつけられながらも、ここで一発なんかやってみたいと思って、勝ちにいきましたから。やったことに対して後悔はないですけどね。自分でやろうと思って決断したことですから。



[01.12.31 INOKI-BOM-BA-YE 2001]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
×vsミルコ・クロコップ
（1R 0分21秒 TKO）
K-1vs猪木軍全面対抗戦と銘打たれた『猪木祭り』に、永田さんも猪木軍の一員として出陣。この年、藤田和之をヒザ蹴りで破り大きく名を上げたミルコと対戦。寝かせばなんとかなると周囲も永田さん本人も思っていたが、結果はハイキック一発で秒殺負け。この鮮やかな負けっぷりは、いまでもTBSのDREAM中継のたびに観ることができる。



[03.12.31 INOKI-BOM-BA-YE 2003]
兵庫・神戸ウイングスタジアム
×vsエメリヤーエンコ・ヒョードル
（1R 1分2秒 TKO）
伝説のズンドコ興行、2003年の『猪木祭り』。永田さんは当初出場予定がなかったが、高山vsミルコ戦消滅により、急きょ出場するハメになり、大会数日前まで対戦相手がノゲイラ、マイケル・マクドナルドなど二転三転したのち、ヒョードルに正式決定したのが、なんと試合前日！ あまりにも悲惨な状況で、再び秒殺負けを喫してしまった。

——でも、勝負をかけるには、あまりにも準備期間が短かったですよね。

永田　試合が大晦日で、話があったのが11月半ば、正式に決まったのが12月に入ってからですからね。それでもやってしまったのは、僕自身の認識の甘さもあったんだと思います。だから、11月〜12月の巡業中にダン・デバイン（ドン・フライの弟子）に稽古つけてもらったり、（ケンドー・）カシンにアドバイスもらったりしたんですけど、カシンからは「やめとけ」って言われたんですけどね（笑）。

——周りが焚きつける中、石澤さんだけは冷静でしたか（笑）。

永田「そんな甘いもんじゃない」って、彼はわかってたんじゃないですか。僕もそういうことを理解しつつも、まあイケイケでしたから（笑）。

——ミルコ・クロコップは強いけれど、寝かしてしまえば……みたいな認識だった時代ですからね。

永田　だからね、藤田くんが僕を焚きつけるとき「先輩、ミルコには髙田（延彦）さんのタックルが通用するんですよ」って、そういうこと言うんですよ、あいつ。

——ダハハハ！　レスリング出身じゃない髙田さんのタックルが通用するんだから、元レスリング全日本王者の永田さんならまったく問題ない、と。

永田　そう。「先輩が倒せないわけないじゃないですか！」って、そういうこと平気で言うんですよ。

——そう言われて、永田さん自身も「まあ、そうかな？」と（笑）。

永田　うまく丸め込まれましたね（笑）。でも、やってみてミルコが予想以上に総合格闘家として進歩してましたし、僕の認識が甘かったって、あらためて痛感させられましたけどね。あのへんから業界全体が、徐々に認識の甘さをわかってきたんじゃないですか。

——プロレスラーが短期間特訓しただけじゃ勝てないって、ファンも関係者もわかりましたよね。でも、そこから完全に路線変更になるのかなと思ったら、新日本はその後もけっこう総合と絡んでいくんですよね。

永田　僕自身は勝っても負けても一回きりの気持ちでやったんですよ。だけど、周りがそれを許さない雰囲気になってましたね。

——総合の市場がどんどん大きくな

藤田くんと金沢さんに焚きつけられたけど カシンだけは「やめとけ」って言ってましたね

っていった時期ですから、ビジネス的にここで引いたらもったいないっていうのも、あったんですかね。

永田　総合人気に便乗して、もう一回プロレスを上げたいっていうのもあったかもしれないですね。ただ向こうの土壌でした。向こうの手の平に乗っちゃった。ホントはこっちの手の平に乗せなきゃいけなかったのが、やっぱりそこが……。

――利用しようとしながら逆にどんどん利用されちゃって。

永田　ええ。イニシアチブを握ることは残念ながらできませんでしたね。それで新日本も長州さんたちがいなくなって、新しい体制になったとき、上井（文彦）さんあたりが「総合格闘技に勇気をもってチャレンジしていく」みたいなテーマを掲げ始めたんですけど、じゃあそのためにどうすればいいのかって認識がまったくないんですよ。

――ダハハハハ！　スローガンだけで、勝つための具体策がない（笑）。

永田　そう。「ストロングスタイルは負けてはならない」とか「新日本は背を向けてはならない」とか、そういうことを言うだけならいつでも言えるじゃないですか。じゃあ、そのためにはどうしたらいいか、どういうドレーニングをすればいいか、そういったことが、それを掲げる人たちには、わかんなかったですからね。

――まず練習設備を整えて、興行スタイルを見直してってところからやらなきゃいけないわけですよね、ホントは。

永田　そうですよ。総合要員にあたる選手に道場でみっちり総合の練習だけをさせて、プロレスとは分けるのか。もしくは所属レスラー全員が総合で勝つための練習をするなら、興行スタイルから何から全部変えなきゃいけない。さらに、それで発生するギャランティの見直しとかもしないといけないし、ホントは大変なことなんですよ。でも、そういうのがまったくなく、ただ「やれ」と。

――それでリング上もなんだかメチャクチャになってましたよね。

永田　だから、口には出さなくても「そうじゃないだろ」って思ってた選手もいたでしょうし、「そういうときだからこそ俺はやる」っていう中邑真輔みたいな選手もいましたし。総合でちょっと名前を上げたら、ホントはまだプロレスで覚えなきゃいけないことがたくさんあるのに「俺は一流だ」って思っちゃう人が出てきたりね。けっこうそういうのがあって、迷走してましたね。

――そして、徐々に観客動員も落ちていって。



ながた・ゆうじ■1968年4月24日、千葉県東金市出身。92年レスリング全日本選手権優勝後、新日本プロレス入門。01年にIWGP王座を奪取し、10度防衛の記録を達成。新日本のエースに君臨。その一方で、総合ではミルコ、ヒョードルに秒殺負けを喫し、苦杯をなめた。現在、新日本の名勝負製造機として、白目を剥きながら奮闘中。182cm、108kg

永田　徐々に泥沼の深みにハマっていった時代でしたね。ただ、プロレスのクオリティだけは落としちゃいけないと僕は思ってましたし、ほかの選手でもね、棚橋（弘至）なんかが必死に闘ってるのがファンに伝わっていきましたし、いろんな選手がプロレスをしっかりやるっていう部分でリングを活性化させたのは救いでしたよね。蝶野（正洋）さんとか天山（広吉）も頑張ってたし、中西さんだって総合やK—1で負けて自信なくしてたけど、それでもなんとかしようと一生懸命やってましたしね。

――それがあったからこそ、徐々に新日本が復活していったんでしょうね。

永田　ホントに「しっかりしたプロレスを見せていこう」ってなったのは、2003年の『INOKI BOM—BA—YE』が終わってからですね。あれ以降、新日本の選手が猪木さんに無理矢理、担ぎ出されることもなくなったし、世間的にもプロレスと総合格闘技は別物なんだなっていうことが、僕らが痛手を負うことでわかったと思うんですよ。僕らが負けたダメージっていうのは、やっぱりプロレス界には大きかったと思いますけどね。

――でも、新日本も永田さんもよくあそこから復活しましたよね。

永田　僕自身は、総合みたいなものに取り組みながらも、目的は「プロレスラー永田」のレスラー像を作るための一つの糧だという気持ちでいろいろチャレンジしてましたから。確かにファンの期待を裏切ってしまったのは心苦しかったですけど、そこでレスラーが見せるべき姿っていうのは、立ち上がるところですよね。そういう部分では、どんな逆境にもめげず立ち上がろうっていう強い心というか、レスラー永田を作ってくうえでプラスになった部分はありましたね。

――へんな話、ミルコ戦、ヒョードル戦での負けが、永田さんの〝味〟になってる部分もありますからね（笑）。

永田　ハハハハハ！　そうですか？（笑）。

――あれがあったからこそ、反動でここ数年の永田人気があるんじゃないですかね。

永田　そういう時代でも、しっかりとしたプロレスをやってきたのは、確かに何年かしてから評価されましたよね。IWGPを10回防衛したときも評価はされましたけど「だからなんなの？」みたいな感じもあったんですよ。いい試合をするのなんてあたりまえだって。でも、そのあと、いろんな人がベルトを巻きましたけど、ファンの人たちを納得させて、感動させた選手ってあまりいなかったと思うんですよね。それで過去の記憶がよみがえったとき、僕にきたんじゃないですかね。

――いまの新日本プロレスというのはそういう面で信用を少しずつ取り戻してるっていう感じですよね。

永田　そうですね。若い選手も伸びてきてる中で、僕らが踏ん張ることで、昔のファンの人たちも見てくれて、少しずつ帰ってきてくれてるみたいな雰囲気もありますしね。

――総合に翻弄されて、一時期グチャグチャになったおかげで、いま逆に方向性がしっかり定まるようになったというか。

永田　だから、ケガの功名じゃないですか。僕はミルコ戦、ヒョードル戦で大きなケガをしちゃった感じですけどね（笑）。

【08年8月28日／都内・新日本プロレス事務所にて収録】

永田裕志が選ぶPRIDEベスト3

1 藤田和之vs マーク・ケアー

2 石澤常光vs ハイアン・グレイシー（2回目）

3 安田忠夫vs 佐竹雅昭

やっぱり僕らが仲間が出場したとき、会場に行って応援してますから、そのときの印象が強いですね。まず1位の藤田君vsケアーは、藤田君が総合に転向して、僕自身も会場で観て、彼の総合の順応ぶりに驚かされましたね。石澤vsハイアンは、石澤選手のリベンジに素直に喜べたので。安田vs佐竹は、なまくらな安田さんが必死に練習して、頑張った勝利だったので本当に嬉しかったですね。

柴田勝頼

あの強い石澤さんが負けて打撃をやらなきゃって思い始めたんです

“新日本の若手”が見たPRIDEの衝撃!!

永田さんインタビューを読んでいただいてもわかるとおり、新日本プロレス内部にも大きな影響を与えたPRIDE。

そんな中で柴田勝頼は、自身はPRIDEのリングに上がるチャンスはなかったが、間接的に大きな影響を受けたプロレスラーの一人と言えるだろう。

『PRIDE・1』が開催された年に新日本プロレスに入門した柴田は、先輩レスラーが次々とPRIDEのリングに駆り出されていく姿、そして新日本内部の混乱をどう見ていたのか？

その後、新日本プロレスでの次期スターの座を捨てて、総合格闘技の世界に身を投じることになる男が、新日本を襲ったPRIDEの影響について語ってくれた。



聞き手／堀江ガンツ　試合写真／乾晋也

――今日は「PRIDEが新日本プロレスと柴田勝頼に与えた影響」というテーマでうかがっていこうと思うんですよ。

柴田　確かに自分にとって、PRIDEというのは凄いデカい影響がありましたね。

――ちょうど柴田選手が新日本に入門した頃、PRIDEが生まれたんですよね？

柴田　そうなんです！　最初は何事かわからなかったですけどね。UWFとも違う、新しいジャンルというか格闘技が生まれて。「どういうことだ⁉」みたいな感じで。でも、常に興味はありましたね。

――それは新日本のほかの選手もPRIDEのことが気になってたんですかね？

柴田　みんな興味があったはずですよ。なぜかっていうと、初期PRIDEの頃は、PRIDEの大会があるたびに、移動のバスの中で録画したビデオをみんな観てましたから。

――そうだったんですか！

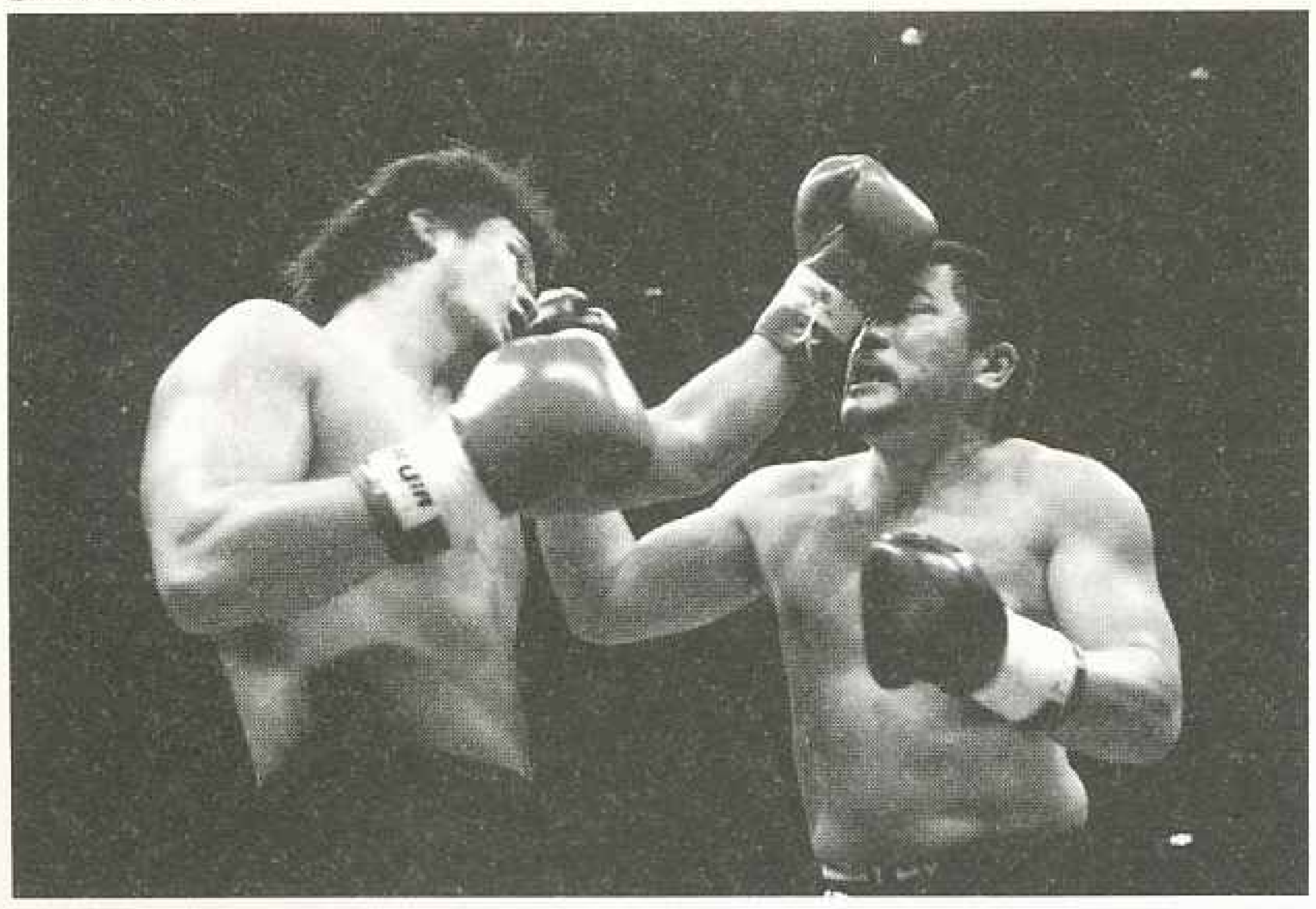
柴田　で、PRIDEのビデオを観たあと会場入りするじゃないですか。そうすると、みんなその日の練習がセメントになるんですよ（笑）。

――ダハハハハ！　すっかり影響されて（笑）。

柴田　極め合いとかレスリングの練習ばかりになって。みんなビデオを観て燃えてるんだなって。おもしろかったですね。

――PRIDEとかにすぐ影響されるっていうのは、新日本プロレスならではでしょうね。

柴田　そうですね。高田（延彦）さんも新日本出身じゃないですか。やっぱり気になるわけですよ。だからPRIDEっていうのは、出てきたとき凄く新鮮であり、脅威でもありましたよね。自分たちにできないことをやってるというか。でも決して他人事ではないような感じで僕は見てました。



© Yukio Hiraku

2003年11月3日、新日本の横アリ大会で、柴田は天田ヒロミとK-1ルールで対戦。敗れたもののダウンを奪うなど大健闘。打撃の才能を見せるが、当時は総合の練習ができる環境になかったという。

――なるほど。いまは関係ないけど、もしかしたら将来、絡む可能性があるかもしれないような感じですか？

柴田　あの頃は、自分はまだ新弟子だったんで、新日本から誰かPRIDEに出ていくことがあるんじゃないかって思ってました。それで、そのあと藤田さんがPRIDEに出たじゃないですか。あのとき自分は初めてPRIDEの会場に行ったんですけど、藤田さんが出たことで、マット界が凄いことになるんじゃないか、いま凄いことが起ころうとしてるんじゃないかって思いましたね。

――新弟子時代、柴田選手も藤田さんと道場で練習する機会があったと思うんですけど、道場内でもやはり「藤田は強い」っていう認識は、みんなあったんですか？

柴田　ありましたね。ホントにレベルが違いました。あと、自分の中では石澤（常光＝ケンドー・カシン）さんがPRIDEに出たらどうなるんだろう？っていう興味が凄くあったんですよね。

――藤田選手同様、石澤選手も道場内での強さには定評があった、と。

柴田　でも、石澤さんはハイアン・グレイシーに負けちゃって、あれだけ強い石澤さんが負けたのは、正直、ショックでしたね。あそこから、たとえプロレスの試合に使えなくても、打撃を身につけなきゃいけないって凄く思いましたね。

――当時は、道場の練習でも若干、格闘技の練習を取り入れ始めたりとか、そういった変化ってありましたか？

柴田　PRIDEもそうなんですけど、ちょうのあの頃、小川vs橋本戦というのがあったじゃないですか。

――99年1月4日、東京ドームでの通称〝1・4事変〟ですね。

柴田　あのときUFOの格闘家と乱闘になって、みんな「このままじゃいけない」って思ったと思うんですよ。危機感が生まれたというか。それでレスリングの練習やセメントの練習が始まったり、そういうのはありましたね。

――〝国防意識〟みたいなものが高まったというか。

柴田　だからPRIDEみたいなものが誕生して、小川vs橋本戦みたいなことを起こって、それが一気に来た感じで、凄い激動でしたね。僕なんか前座で第一試合やってただけですけど、凄いことが起こってるということだけはわかったんで、興奮してましたね。

――当時、道場で格闘技の練習を教えていたのはどなたなんですか？　長井（満也）さんとかですか？

柴田　長井さんが入ったのはもっとあとですね。当時だとコーチだった飯塚（高史）さんでしたが……、みんなで考えながらやってましたね。ただ、いま思えば総合格闘技のなんたるかを知ってる人がいなかったんですよね。だから、結果的には総合の練習をしてるつもりで、アマレスとかサンボの練習をやってるような感じだったと思います。

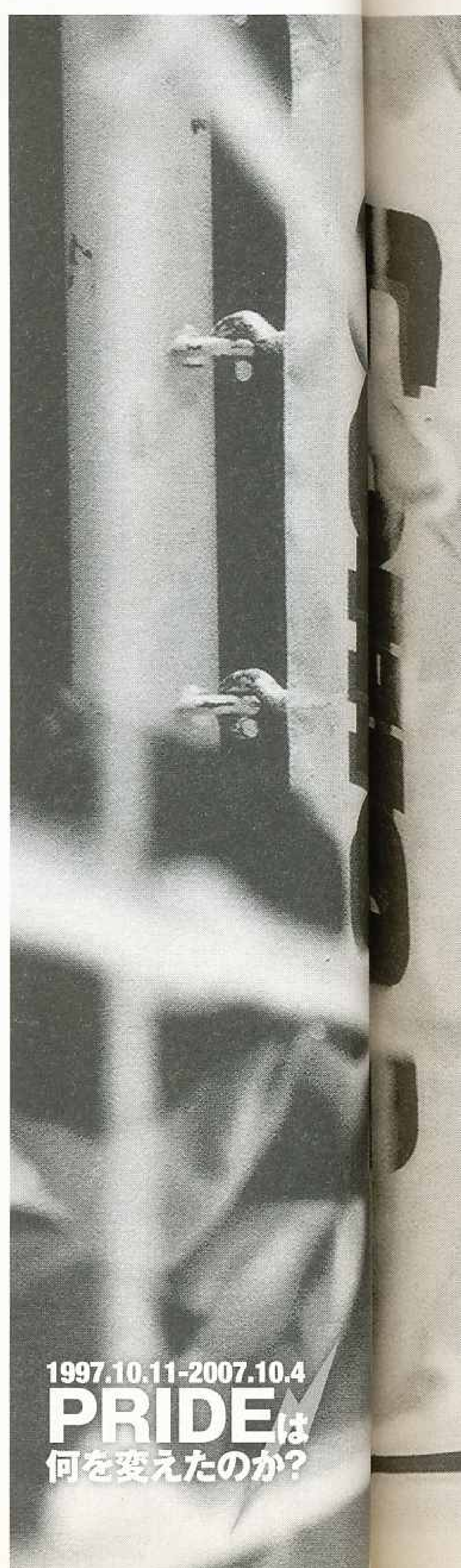
――レスリングのトップ選手はいても、総合経験者がいなかった、と。

柴田　それが、ちょっとしてから長井さん、成瀬（昌由）さん、柳澤（龍志）さんとか、格闘技をやってた選手が新日本に入ってきて。一緒に練習をやるようになって、自分はとにかく打撃がやりたくて仕方がなかったんで、打撃を教えてもらって、それでK-1ルールで一回試合を組んでもらったりしたんですよ。

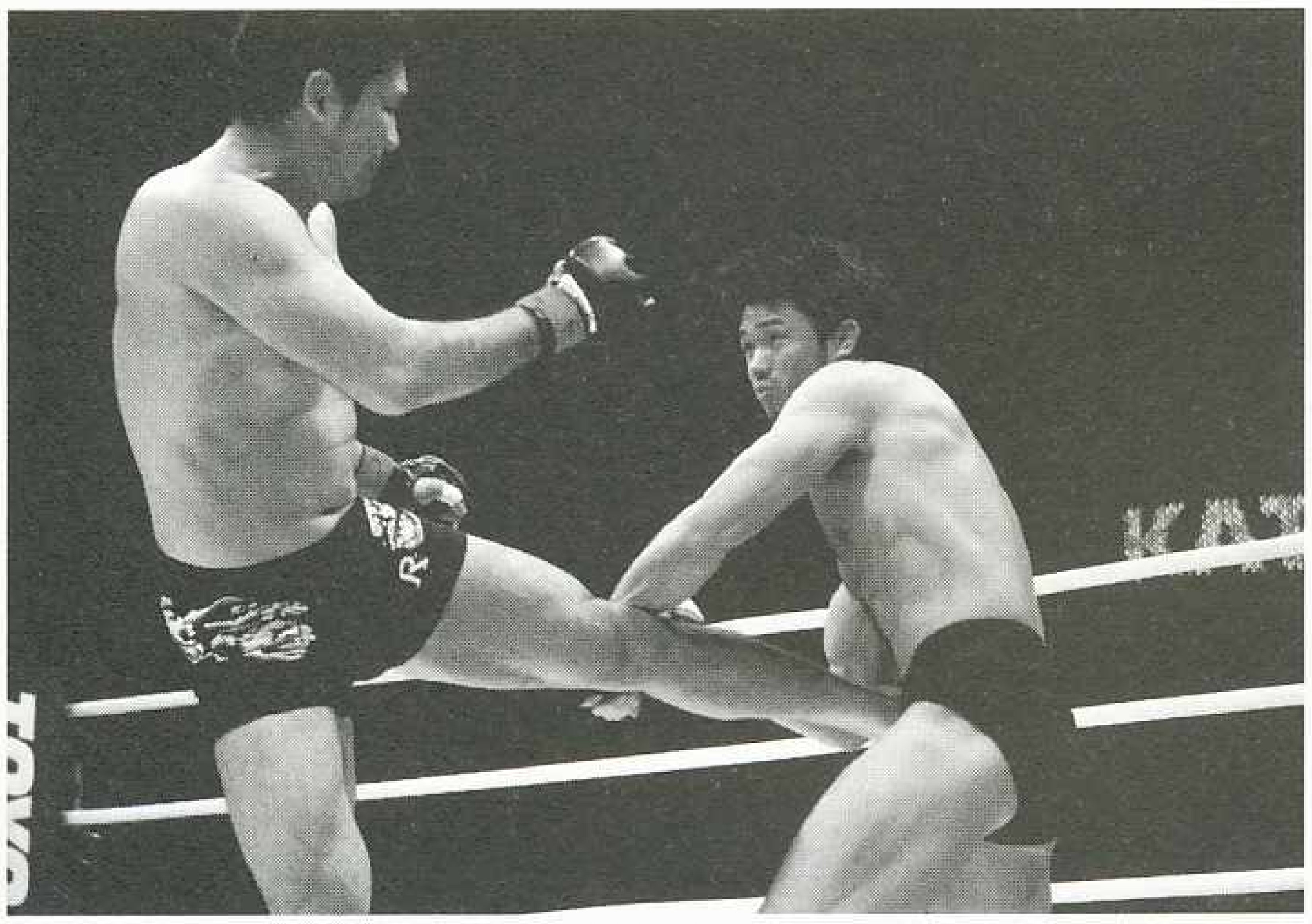
――天田ヒロミ選手とやってるんですよね。

柴田　そうです。その試合に向けて、長井さんに付きっきりで教えてもらったりして。それまで、総合格闘技を教えられる人って、新日本にはホ

移動バスの中でPRIDEのビデオを観るとそのあとの練習がセメントになるんですよ（笑）



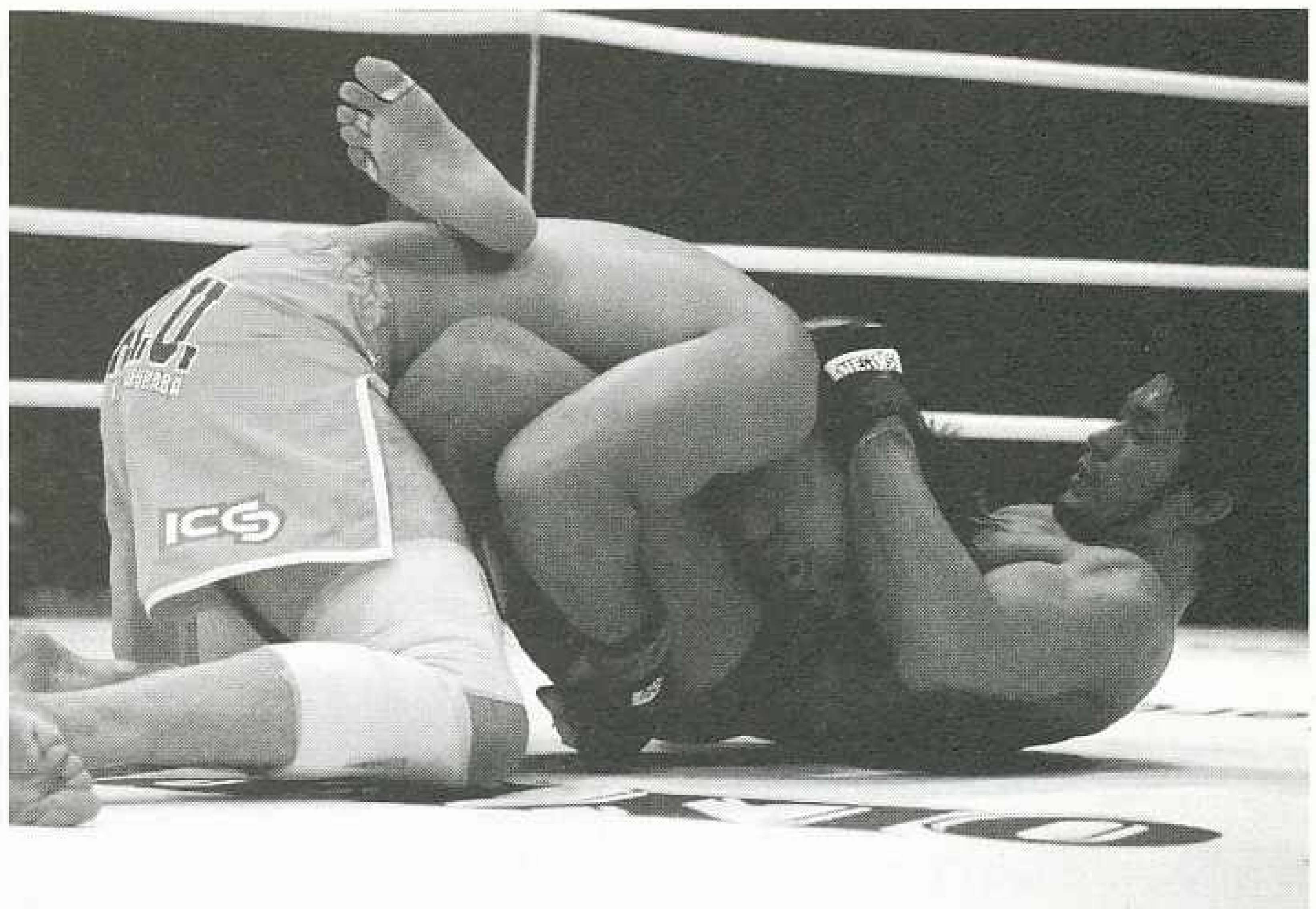
ントにいなかったんで、長井さん、成瀬さん、柳澤さんには、みっちり教えてもらえて、楽しかったですね。
――でも、教える人がいない中で、石澤さん、安田さん、永田さんなんかが総合の試合をするときって、どうやって練習してたんですか？
柴田　総合の試合に出る前は、だいたいロスに行ってマルコ・ファスさんに習っていたみたいです。あとは、普通のシリーズにドン・フライとか、ブライアン・ジョンストンが来てたんで、巡業中も試合前にいろいろ教えてもらったりしてましたね。ちょうどその頃、道場にサンドバッグを導入したりして、けっこうみんなそういう練習をしてたんですよ。
――じゃあ、ある意味、当時の新日本道場で総合格闘技の練習が流行ったみたいな感じですか？
柴田　流行りですね、完全に（キッパリ）。でもこれは新日本らしいなと思いましたけどね。やっぱりプロレス界でPRIDEとかに出るとしたら、新日本の選手ってなるじゃないですか。そういった試合を無視しないで挑んでいくのが新日本らしいってことじゃないかな、と思います。
――柴田さんは、そういった状況下で、総合格闘技への興味がどんどん大きくなっていっちゃった感じなんですか？
柴田　いや、当時はまだそういう試合ができる実力がないっていうことが自分でもわかってたんで、もっといろんな練習をしなきゃいけないって思ってましたね。でも、いつかはやろうとはずっと思ってたんですよ。年末とかに総合格闘技へ出てい



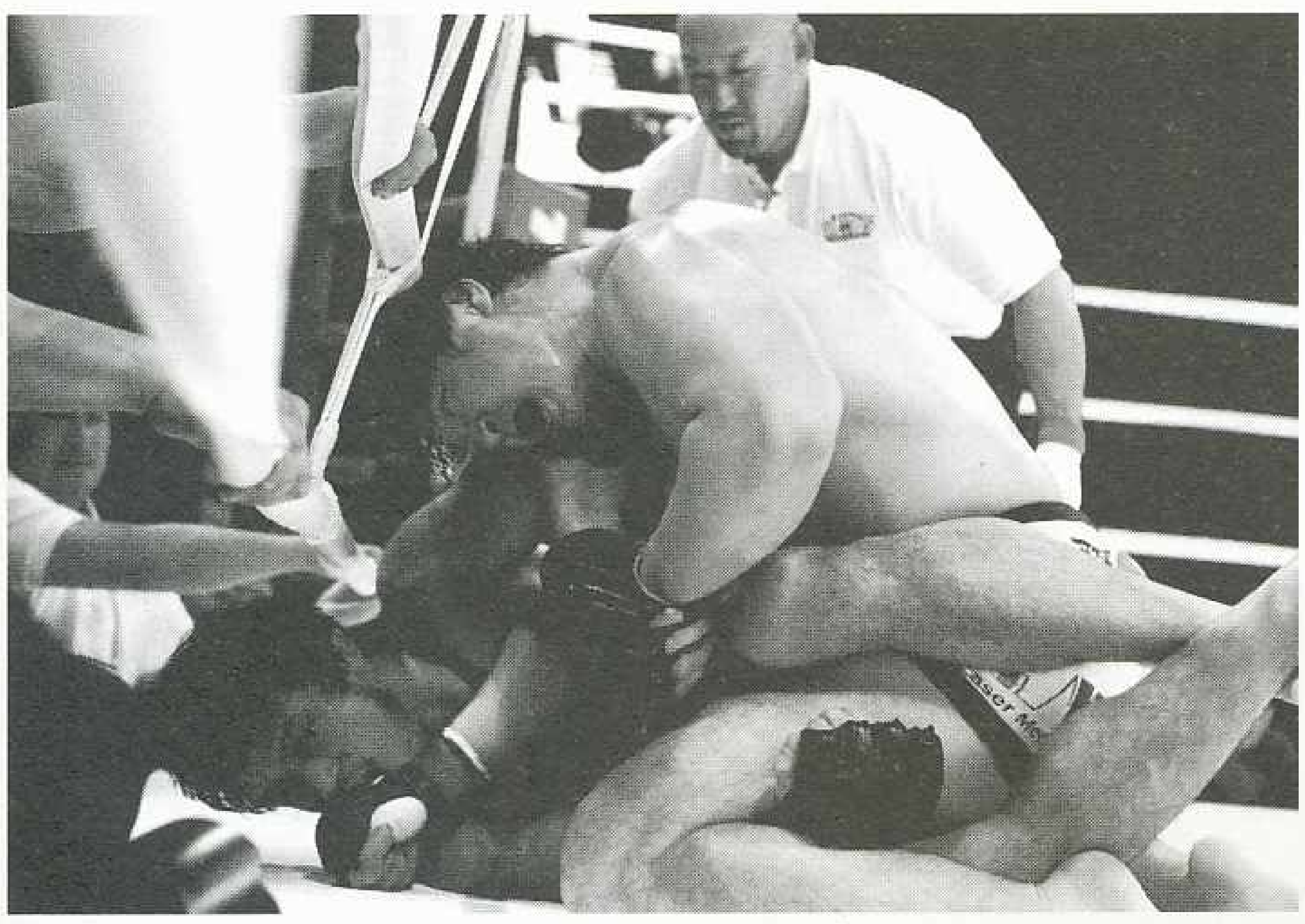
[07.3.12 HERO'S]
愛知・名古屋ガイシホール
○vs山本宜久
（1R 0分9秒 TKO）
船木とのトレーニングの成果を試すべく、『HERO'S』に出陣した柴田は、元リングスのヤマヨシと対戦。柴田は先輩ヤマヨシの挨拶代わりのミドルキックに右フックを合わせて、なんと秒殺KO勝ち！ コーナーに戻って咆哮する姿から"狂犬レスラー"と名づけられることとなった。



[07.7.16 HERO'S]
神奈川・横浜アリーナ
×vsハレック・グレイシー
（1R 3分5秒 腕ひしぎ十字固め）
『HERO'S』第2戦では、かつて"プロレス界の天敵"と呼ばれたグレイシー一族のハレックと対戦。一度はパンチでグラつかせたものの、胴タックルからテイクダウンを奪われると、マウントからの腕十字という、まさに初期プロレスラーvsグレイシーを再現するかのようなかたちで敗れてしまった。



[07.9.17 HERO'S]
神奈川・横浜アリーナ
×vs桜庭和志
（1R 6分20秒 腕ひしぎ十字固め）
第3戦ではなんと桜庭戦というビッグチャンスを与えられた柴田。総合格闘技の実績ではとてつもなく大きな隔たりがあるが、柴田は臆することなく向かっていき、寝技で下になっても桜庭の顔面にパンチを入れていく。そのあと逆襲されることとなるが、柴田はサクのキラーな部分を引き出すことに成功した。

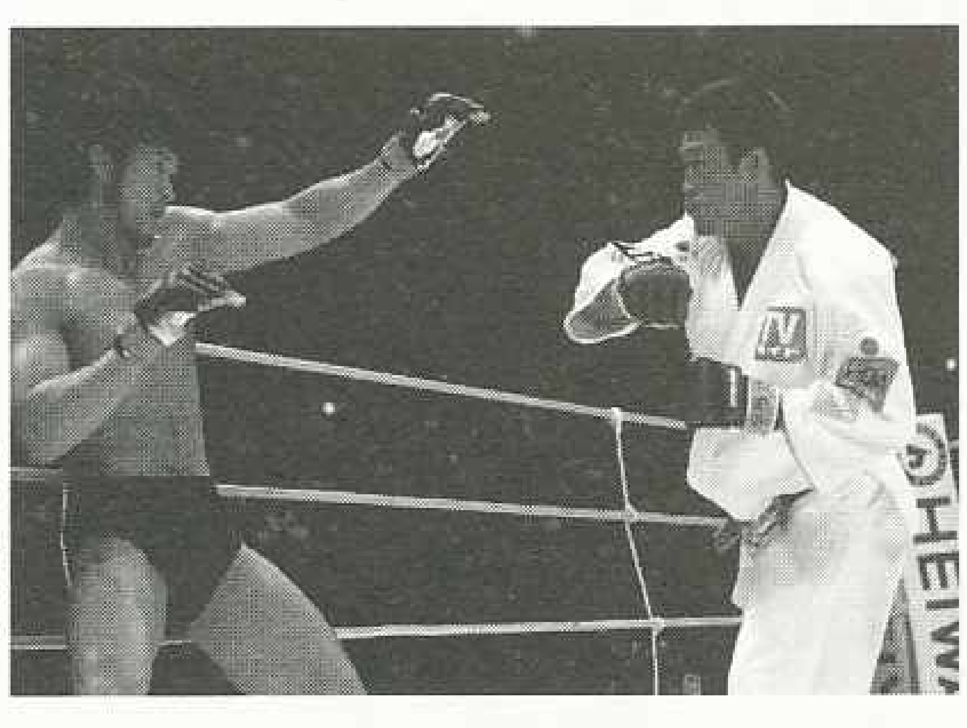


[07.10.28 HERO'S KOREA]
韓国ソウル・ジャンチュン体育館
×vsホ・ミンソク
（1R 1分31秒 KO）
連敗を喫した柴田は、『HERO`S』の韓国大会に出場し、ミノワマンとの対戦経験もあるホ・ミンソクと対戦。そのタフネスぶりには定評があるミンソクと、真っ向から殴り合いを挑むが、殴っても殴ってもひるまないミンソク相手に最後は力つきてTKO負け。痛い星を落とすことになってしまった。



[08.5.11 DREAM.3]
神奈川・さいたまスーパーアリーナ
×vsジェイソン・ミラー
（1R 6分57秒 TKO）
DREAMミドル級GP1回戦で、優勝候補の一角にも挙げられていたメイヘムと対戦。柴田はフロントチョークを試みるが、それを外されるとメイヘムの寝技地獄にハマってしまい、ポジションを取られながらピースサインをされるという屈辱を味わってしまう。最後までタップはしなかったが完敗だった。

[08.7.21 DREAM.5]
大阪・大阪城ホール
×vs秋山成勲
（1R 6分34秒 袖車絞め）
4連敗中の柴田は、"志願"というかたちで、"魔王"秋山成勲戦が実現。柴田はこの試合に巨大な覚悟をもって挑んだが、試合は緊張感あふれる攻防が繰り広げられたものの、最後は袖車絞めで絞め落とされ、完敗。試合後、「柴田勝頼は死にました」というコメントを残した。



PRIDEは桁違いに強い藤田さんが闘うリングってことで、もの凄く遠く感じてましたね

くプロレスラーの先輩の姿を見て、これを他人事にはしたくないっていうのがありましたね。

——志願兵みたいな感じですよね、「次は俺が」みたいな。

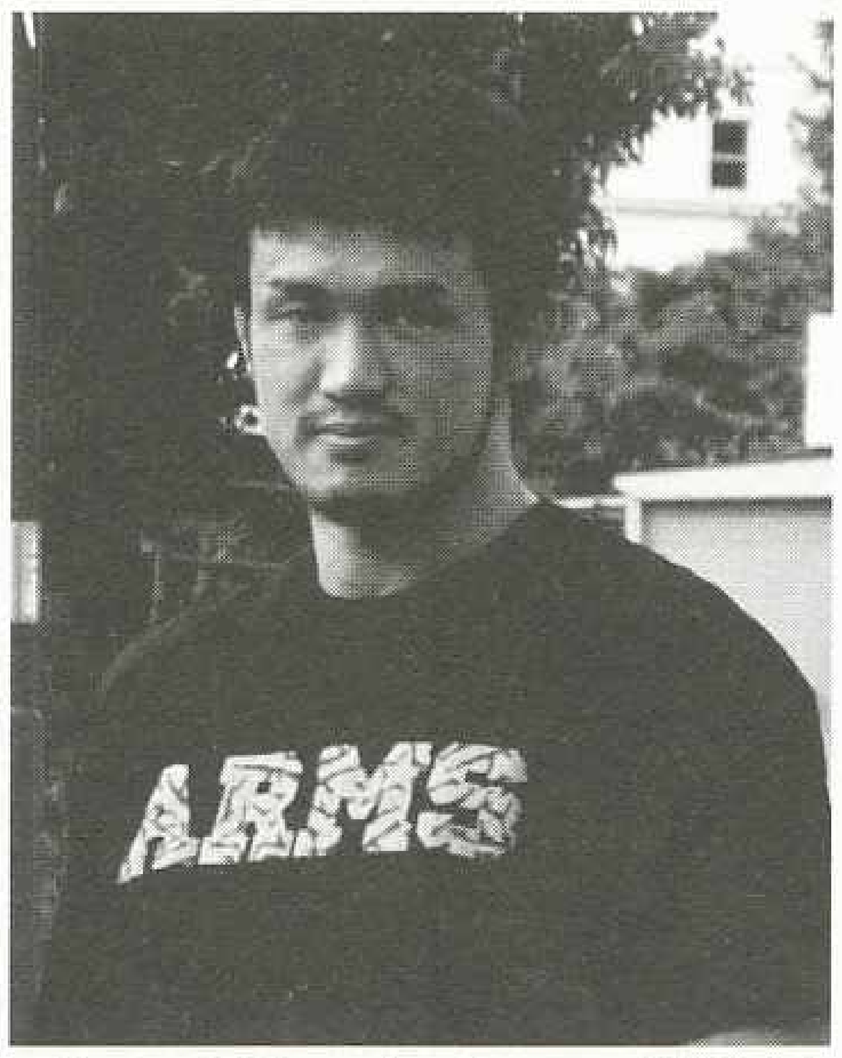
柴田　そうですね。それで本来なら、強くなるために総合格闘技の道場とかに出稽古に行くのがよかったんでしょうけど、当時はなかなか踏み出せなくて、知り合いのキックボクサーに打撃を教えてもらうって感じでした。

——なまじっか新日本の柴田勝頼っていう名前があるだけに、総合格闘技の道場には行きづらかった、と。

柴田　なんかへんなプライドがあって、当時はとくにそうでしたね。総合格闘技の新人として一から教わるのがどうしても……。これが藤田さんみたいに強い人なら、どこの道場に行ってもスパーリングをバンバンできるんでしょうけど、それは規格外ですからね（笑）。だから逆に言うと、PRIDEっていうのは、あのもの凄く強い藤田さんとまともにスパーリングやったり、試合やったりする人が上がるリングなんだって感じで、なんか凄く遠くに感じてましたね。

——手の届かない舞台として、憧れなんかもあった感じですか？

柴田　そうでしたね。強い選手がいるのはもちろん、PRIDEってイベントの完成度が高いじゃないですか。煽りVとかも凄く好きでしたね。だからDREAMに来て最初にビックリしたのは、DREAMってイベント制作のスタッフがPRIDEと一緒じゃないですか。その人がルールミーティングの最後に「私たちは最高の舞台を作ります。選手の皆さんは最高の試合をしてください！」って言ったんですよ。凄いプロ意識というか、これはちょっと……すげえなって思いましたね。



しばた・かつより■1979年11月17日、三重県桑名市出身。新日本プロレスで活躍したレフェリー・柴田勝久の息子。新日本プロレス、ビッグマウス・ラウドを経て07年3月から『HERO'S』に参戦。元リングスの山本宜久を9秒でKOするが、以後は4連敗。10.23DEEPでの滑川康仁戦で再起を誓う。184cm、84kg。

——柴田さんは新日本を辞めたあと、ビッグマウスでの試合や、『WRESTLE-1』での秋山準選手との試合とか、いわゆる格闘プロレスで評価が高かったと思うんですよ。でも、その格闘プロレスを捨てて、総合格闘技一本に決めたのは、何かきっかけがあったんですか？

柴田　やっぱり船木さんと一緒に練習をやり始めたのがデカかったですね。それまでは総合格闘技の練習をするっていっても、何をやったらいいのかわからない状態で練習してたのが、だんだんかたちになっていったんですよ。

——いままで、ある種自己流でやってたのが、初めて体系的に総合の練習ができ始めたというか。

柴田　そうですね。模索しながらやっていたことに対して、なんか悩みがなくなったっていうか、そんな感じですね。で、そういう練習をやっていくうちに、いろいろ試したいなっていうのがあって、2年間練習して「総合の試合がやってみたいです」ってことを言って、それでいまに至るって感じですね。

——では、いまはいろいろ回り道もありながら、〝理想のプロレス〟にたどり着いた感じですか。

柴田　そうですね。これはなるべくしてなったと思いますね。

——新日本に入門して、バスの中でPRIDEを観てたときからの流れでいまに（笑）。

柴田　なんか不思議ですけどね。いま、PRIDEに出てた選手と試合したり練習したりしてるじゃないですか。それがホント不思議な感覚なんですよ。やっぱり人間、どこでどうなるかわからないですね。

——最後に柴田選手が『HERO'S』で総合をやる前に、結局実現はしませんでしたけど、スーパーUWFっていうのをやるって話があったじゃないですか。あのスーパーUWFってどんなものだったんですか？

柴田　わっかんないんですよ！

——柴田選手でもわかりませんか（笑）。

柴田　あれはまったくわからないですね。自分でもスーパーUWFってなんだろうって思ってましたから。

——スーパーUWFの言い出しっぺである前田（日明）さんからは説明はなかったんですか？

柴田　ないです。でも、新日本を辞めたあと一回ドームに出たとき、なんか前田さんにすっげえ怒られたんですよ。俺が直接怒られたっていうか、話が違うみたいな感じで揉めて。でも、どんな感じだったんスかねえ、スーパーUWF。

——いや、ボクに聞かれてもわかりません（笑）。

柴田　たぶん、やるのは確実に俺だろうなとは思ってたんですけど、何をやるんだろうって。わかんなかったですね。「総合格闘技でもなくプロレスでもないのか？」っていう。

——UWFスタイルでもないわけですよね、スーパーですから。

柴田　はい。スーパーですからね、さらになんか凄いことになるはずだったんでしょうね。でも、誰も観たことがないし、誰もわからない。だからスーパーUWFについてはなんにも語れないです、残念ながら（笑）。

——逆に幻想が広がりますよね。実現してたら、いったいどんな試合になってたんだろうって。

柴田　いや、ホントに幻想広がりますよ！　ただ、どういうルールで、どういう意識でやるものなのかは、誰にもわからないような気がします。

——では、スーパーUWF幻想が広がったところでお開きにしたいと思います。ありがとうございました！

【08年8月29日／都内・某所にて収録】

柴田勝頼が選ぶPRIDEベスト3

1. 桜庭和志vs カーロス・ニュートン
2. 高山善廣vs ドン・フライ
3. 藤田和之vs マーク・ケアー

自分は理想のプロレスを求めて、いま総合格闘技をやってるんで、やっぱりPRIDEの試合でも“最高のプロレスだ”って思えるものを選んでますね。1位の桜庭さんとニュートンの試合は、もうビデオで数えきれないほど繰り返し観ましたね。動きが止まらなくて、教科書のような試合だと思います。2位の高山vsフライ戦は、二人ともプロだと思いましたね。ただ勝つだけじゃない、プロってやっぱりそういうもんじゃないですか。3位は藤田さんとケアー。当時、最強と言われていたケアーを日本人が倒すってことは、革命的だったと思います。やっぱり藤田さんはケタ違いですね。

PRIDE出現による最大の“被害者”が激白!

プロレスは死んだ! 俺も“死んだ”!

1997.10.11-2007.10.4 **PRIDEは何を変えたのか?**



元・新日本プロレス執行役員

上井文彦

PRIDEの出現によって、格闘プロレスは死んだのか――。そんなテーマを、最も“ダメージ”を受けたと思われる元・新日本プロレスで、その後もまさに格闘プロレスを“推進”してきた上井文彦氏に直撃した。しかし、話はなんとも意外な方向に……? とにかくまだまだ熱い上井さんの言葉を聞け!

聞き手/堀江ガンツ　試合写真/平工幸雄

――上井さんにはPRIDEの出現によって格闘プロレスは死んだのか、ということをお聞きしたいと思います。

上井　なるほどね。でも、僕が話してもいいのかな?

――ええ、新日本プロレスの格闘プロレス路線を作ったのは上井さんですから。で、上井さんは90年代の新日本プロレス黄金期の営業マンとして活躍されていましたが、営業時代はPRIDEが誕生しても眼中になかった感じですか?

上井　眼中にないというか、僕が営業の頃はPRIDEはなかったか、できたばかりだったし、当時は格闘技といえばK−1という感じでしたけどね。で、K−1ができる前は全日本プロレスと新日本プロレスがあって、マット界では僕らが一番左の極層だったんですよ。

――伝統的なプロレスの全日本、過激な革新プロレスの新日本でしたよね。

上井　UWFという左も生まれたけどすぐ消えたし、次にK−1が左にきたけど、これはキックボクシングだからまだよかったんです。でも、**PRIDEっていうのは、見た目はプロレスに近いじゃないですか。**

――となると、プロレスの比較対象になりますよね。

上井　PRIDEはもう完璧に強さというものを打ち出した。これはマット界の極左が生まれたということですよ。それでも初期のPRIDEは、みんな膠着しておもしろくなかったけど、試行錯誤していった結果、あんなにおもしろいものになった。最強のイメージがあって、しかも地上波ゴールデンのいい時間帯に放送される、そしたらもう新日本プロレスに興味なんてなくなるじゃん!

――完全にお株を奪われたような感じですよね。

上井　そう。**新日本プロレスは「キング・オブ・スポーツ」を**旗印にしてたでしょ? 要は「俺らが最強だよ」ってことだったんですよ。でも、いつのまにかそういうイメージがかたちだけのものになって、**選手の心にも「強さにこだわることはない」って感覚が浸透してしまった。**

――プロレスと格闘技の棲み分けが進み、そのあと、猪木さんも現場を離れることになりましたよね。

上井　そこでもまた、控室の雰囲気から変わっていきましたからね。昔、猪木さんがいた頃は、控室に俺みたいなレスラーではない営業マンが入ったりしたら、全員シーンとなるんですよ。なんかね、「こいつ何しに来やがった」っていう目で見られるんですよ、俺、社員なのに(笑)。

――そこまで緊迫してましたか(笑)。

上井　でね、**一番恐いのはやっぱ猪木さんなんですよ。**だから、控室に入って客入りなんかを猪木さんに報告するときは、もう猪木さん以外何も見ないで直進するのみ! 用が済んでそのままドアをガチャって閉めるんだけど、そのときに汗がドドーッて出る、と。そういう張りつめた世界だったんだよね。それが、その後はだんだん空気が変わってきた。要するに、新日本プロレスの存在価値が薄れたんですよ。

――ましてや2000年以降は猪木さんがPRIDEのエグゼクティブ・プロデューサーになりましたからね。

上井　猪木さんはそこが凄いんですよね。もっと言うと、猪木さんを起用したPRIDEが偉いというか。あれでますます新日本プロレスはダメなんだという図式になったよね。**猪木さんの「強い」っていうイメージをPRIDEにとられた**わけだから。

――では、上井さんは新日本プロレスに「強さのイメージ」を取り戻すために、格闘技路線を敷いたわけですか?

上井　結果的には目を背けちゃったかなと思ってるけど、IWGPはいまのままじゃ弱いからNWFを作ったんですよ! 猪木さんには「なんで?」って言われたんですけど、「どう見てもいまのIWGPチャンピオンじゃ弱い。**活を入れる意味でもNWFを作りたい**」って。

――IWGPチャンピオンは弱いから、かつて猪木さんが全盛期に腰に巻いていたNWFを復活させましたか。

上井　そうでしょ? IWGP王者はプロレスの王者であり、格闘技の王者じゃなきゃダメなんだから! で、「誰を使ってベルトを争わせるんだ?」って聞かれたんで「藤田、高山、安田」って答えたんです。猪木さんは安田が好きですからね。**そこに「高阪剛を入れますよ!」って言いましたよ!**

――純プロレス経験がないTKを入れるところが凄いセンスですね(笑)。

上井　僕の中では高阪剛が参戦しなかったらやるつもりなかったんですよ! なぜかと言ったら、リアル系の匂いのする選手が入ることによってプロレスラーがどれだけ強いのかを浮き上がらせたかったんです! 総合にも出た選手がいるNWFのトーナメントで王者を決めて、**最終的にはIWGP王者がNWF王者に勝てばよかったんですよ!**

――プロレスのリングで総合出身のNWF王者をIWGP王者が破り、序列を変えてしまおう、と。

上井　でも、結果は惨敗と言っていいよね……。なぜかというと、総合の技術が想像以上に進みすぎていて、技術を教える人ももういなかった。結局、新日本プロレスのレスラーは、あれだけの練習に耐える人たちだから、最初から総合の技術を教えてたらもの凄く強いんですよ! でも、残念ながら、柴田勝頼がいまも勝てないのも、結局何年間かのプロレスが染みついているからかもしれませんね。初めから総合の練習をしてる選手じゃない。これはもう時すでに遅しという感じですよね。

――それは上井さんの誤算だった、と?

上井　**いや、誤算ではないと思います。だって、勝てると思ってたから。**

――それが誤算だったんじゃ……。

上井　だって、オリンピックに出た選手なんかもいましたからね。プロレスラーは絶対に強いと思いますよ! まともに1年間ぐらい総合の練習だけをやらせたら勝ってたかもしれないですよ! ただ、総合の練習を教える人間がいなかった。

プロレスラーでも総合をできますよという部分を見せたかったんですよ

――そうなんですか。

上井　ただ、姿勢として僕は新日本プロレスはPRIDEから目を背けちゃいけない存在だと思ってた。ボロボロになってでも闘ったほうがいい。会社の中の会議でも「負けたらどうする？」って声がありましたけど、**僕は「勝つまでやればいいじゃないですか」って言ったんですよね。**

――では、上井さんは本当に新日本プロレスを総合格闘家に負けない組織にもう一回しようと奮起された……。

上井　（さえぎって）そりゃそうですよ！　だって俺らの頃のレスラーは強かったもん。いまでも「俺はたまたま第一試合をやらされているだけで、本当は俺が一番強いんだ」というレスラーはいますからね。藤原さんも栗栖さんも荒川さんもみんなそうですよ！

――NWFのトーナメントは格闘プロレスだったと思うんですけど、それが『ROMANEX』や『アルティメットクラッシュ』まで行き着いたのは？

上井　『アルティメットクラッシュ』はプロレスラーでも総合できますよという部分を見せたかったんですよ。あれは**おおいなる実験！**　でも、蝶野正洋が賛同しなかったらできてなかったですよ。蝶野は絶対に反対すると思ってたけど、蝶野に企画書持っていったら、「上井さん、これおもしろいじゃないですか」って（笑）。

――蝶野さんが賛同しなかったら社内的には反対が出ますよね？

上井　反対が出るというか、蝶野がイヤだということはしたくなかった。でも、蝶野がいいって言うんだったらね。だから、そこでチョイスすべきは格闘技を勉強できる選手、たとえば高阪さんとかを呼んで、（ドルゴルスレン・）スミヤバザルとかも話をできたからね。人選としてはそういうメンツにしようというか。

――しかし、『アルティメットクラッシュ』をやってしまったばっかりに、プロレスとの違いが如実にわかっちゃったという弊害はなかったですか？

上井　僕はそうは思わないですね。あのあとの村上和成vsエンセン井上の試合も逆に盛り上がりましたからね。そういう意味では『アルティメットクラッシュ』がなかったら、その後の新日本プロレスは展開的にしんどかったですよ。だから『アルティメットクラッシュ』をやったことは悪いことだとは全然思ってないし。

――ただ、団体を挙げてみんながこれをやっていくんだ！　という感じにも見えなかったんですよ。

上井　まあ、自分がある程度意思決定をできる立場だったからいろいろ考えてやったけど。だから、**基礎は作ったけど完成はしてないですよね。**　俺も途中で作るのやめて新日本プロレスを出ていったし。あとは、やっぱりPRIDEの勢いにはかなわなかったですよ。だからいまの新日本プロレスも誰も強さなんて求めていない。俺がいま新日本プロレスを観て唯一「強い」という意味での可能性があると思うのは矢野通だけですよ！

――や、矢野ですか!?

上井　矢野はアマレスの実績もあるし、身体もデカい！　**やっぱりデカい人間が強いですよ。**　俺だったらね、GBHの試合介入なんてやらせないでね、G1公式戦、とくに永田裕志戦なんてね、**矢野がアマチュアレスリングの格好で出てくるんですよ！　それで「永田、真剣勝負しよう」と。**

――G1公式戦で真剣勝負！

上井　だって、あのタイガー・ジェット・シンだって、猪木さんと一騎打ちのときは、ストロングスタイルで挑んだりしたんですよ！　それと同じで、いつも反則ばっかりしてる矢野が、永田と手に汗握るレスリングの攻防をやったら、矢野のイメージが一気に変わる！　俺だったらそうするね！



「K-1にも通用する!」と、上井さんがイチオシなのが、この矢野通。かつて、「真壁刀義あたりに総合をやらせるとかね!」と語ってくれたI編集長を彷彿とさせる提案だ。

――ある意味、確かに観客の見る目が変わるかもしれませんね。

上井　俺は古い人間だし、時間が止まった人間が言うのもおかしいけど、僕はそういうふうに感じた。あとね、もう一人凄いレスラーがいますよ！

――誰ですか？

上井　**カンムリワシ（用高）ですよ！**

――カ、カンムリワシ……？

上井　沖縄プロレスにいるんですよ。あれはいい選手。新日本プロレスのジュニアヘビー級戦線に入っても一番強いよ。ただ者じゃない。**K―1に出たって通用するよ。**

――K―1でも通用しますか！

上井　ウソだと思うんだったら観に行ったほうがいい。**沖縄プロレス恐るべしだよ！**

――カンムリワシですか……今度、確認させていただきます。で、PRIDEの話に戻してよろしいでしょうか？

上井　どうぞ。

――結果的に新日本プロレスの上井さんがやっていた格闘技路線も志半ばで終わってしまって、もうプロレスはエンターテインメント的な考えが主流になったと思うんですが、それはPRIDEによってプロレスが強さを主張できなくなったからだと思いますか？

上井　プロレスは死んでるよ……（寂しそうに）。お客さんが入らないからね。興業をやる以上はお客さんが入らないとダメ。そういう意味では癌が全身に回っているイメージですよね。その**ウィルスを吹きつけたのがPRIDEかもしれないし、あるいは吹き飛ばしたのもPRIDEかもしれないし。**

――でも、上井さんとしては格闘プロレスは死んでないという結論ですよね？

上井　死んでないかもしれないけど、プロレスは死んでますよね。いまプロレスを観てない人間が言っちゃいけないけど、僕みたいにプロレスを好きな人間がプロレスを観なくなったら死んでるってことでしょう。まあ、逆に僕みたいな古い人間が死んでるのかもしれないなあ（笑）。

――そうですか（笑）。

上井　でも、これだけは言える。PRIDEがやったこと本当に偉大です。興行をやってた僕から見ても、よくあれだけくじけずにあそこまで隆盛をきわめてね、いまK―1やDREAMがやってることはPRIDEが種をまいたものが育ったという感じじゃないですか。だから、PRIDEスタッフの努力と辛抱強さには本当に喝采を送りたいですよね。やっぱり続けるっていうのは大変なことだからね。そういう意味ではね、お笑いだけで8年間やってる西口プロレスなんかも凄いよね。俺が言えるのはそれだけかな。

【08年8月27日／都内・某所で収録】

上井文彦が選ぶPRIDEベスト3

1. エメリヤーエンコ・ヒョードルvs 藤田和之
2. アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラvs ジョシュ・バーネット
3. 高瀬大樹vs アンデウソン・シウバ

❶藤田はヒョードルを倒すチャンスがありましたよね! あれはお互いの「相手を倒しにいこう」という姿勢が存分に出た試合だったと思います。ある程度ポイントを押さえれば勝てるという試合もあるけど、プロモーターにとっては、やっぱりガンガンいく積極的な試合が観たいですよ。❷ジョシュは新日本プロレスにいたときから「ノゲイラと試合をしたら噛み合うと思う」って言ってましたからね! ❸アンデウソンといえば、いまやUFCのチャンピオンですよ! そういう意味でも、高瀬勝利という大番狂わせの試合は入れたいですね。



新日本プロレスフロントが見たPRIDEのハード面

PRIDEはマット界のシルク・ドゥ・ソレイユでした

新日本はPRIDEにイベントのクオリティで負けてしまったんです

「プロレス界の人はみんな、PRIDEについてリング上のことばかり言ってましたけど、僕はイベント的に新しいものが始まったな、と見てましたね」

新日本プロレスライセンス事業部の武田有弘氏は、PRIDEがマット界で勢力を拡大していた当時のことをこう振り返る。

「PRIDEというイベントは斬新でスケール感があって華やかで、回を重ねるごとにクオリティが上がっていって、お客さんも増えていきましたよね。PRIDEのほうがイベントとしてのクオリティが高くなって、ハード面で新日本は負けてたんですよね」

90年代、黄金期を迎えていた新日本プロレス。PRIDEが誕生した97年もnWoブームに沸いており、東京ドーム大会も毎回満員。一方、PRIDEは高田vsヒクソン戦という超ド級のカードを組みながらドームに空席が目立った。

それが、桜庭和志が台頭していった99年、2000年あたりから、PRIDEがどんどん巨大化していって、それに対して新日本は少しずつ観客動員を落としていった。その理由を武田氏は、プロレスが総合格闘技に押されたのではなく、イベントとして新日本がPRIDEに押されていったと分析している。

「当時のプロレス団体の仕事というのは、極端に言えば、営業部隊がどれだけチケットを売るかっていうことだったんです。だから、そこに人員を割いていた。それに対してPRIDEは、とくに営業がいるわけじゃなく、どういうイベントを作るか、そのコンセプトを決めて、いかにプロモーションするかということに時間を割きますよね。だから、イベントの作り方として正反対のものができてしまったんですよ」

PRIDEがスケール感のあるイベントを次々と開催する中、新日本プロレスも引き続き東京ドーム大会を開催していたが、そこにはどこかイベントとしてのマンネリ感がただよっていた。新日本プロレスというイベントについて、もう一度、コンセプトを作り直す時期にきていたのだろう。

「でも、それはわかってもらえない時代でしたよね。『カードも選手も関係ない。どんな大会でも俺たちがチケットを売る』っていう、体育会系の会社でしたから。それが新日本の最大の強みであることは、いまでも変わらないと思います。でも、その営業力に頼るんじゃなくて、だからこそ、営業マンがもっとたくさんチケットを売れるように、イメージを刷新して、クオリティの高いイベントを作ることに力を入れるべきだったんですけどね」

そんなジレンマがある中、武田氏の目にはPRIDEというイベントはどう映っていたのか。

「PRIDEって、マット界のシルク・ドゥ・ソレイユだと思うんですよ。あれって、簡単に言うとサーカスじゃないですか。でも、サーカスという言葉から連想される場末のイメージはなくて、客層、ビジネスの手法も違う。要はサーカスなのにサーカスじゃない、新しいパフォーマンス、芸術を観ているような気にさせるんですよね。PRIDEもやってることは総合格闘技だけど、単なる格闘技興行ではなく、新しいイベントを作り上げた。僕はそう思います」

01年に武田氏は、武藤敬司らとともに新日本プロレスを退社。それは、ソフト面、ハード面で当時の新日本と考えの相違があったことが原因だった。

「武藤さんはプロレスでPRIDEを超えるショーを作るっていう考えだったんですよ。でも、当時の新日本は競技自体をいじって、プロレスを総合みたいに見えるようにして対抗しちゃったんですよね。そういう競い合い方が僕たちとは違ったんです」

その言葉どおり、武藤らが離脱後、新日本は格闘技路線を敷き迷走していく。そして05年、創始者アントニオ猪木がオーナーの座を降りて、ユークスの子会社となる。そこから、新日本はハード面改革に着手。武田氏も外部スタッフとして、新日本に復帰をはたした。

「新日本は会社自体が変わって、いろんな意味でふっきれたんじゃないですか。プロレスを見せるんだ。プロレスは素晴らしいんだ。それに花を添えるためにハード面を強化しよう。初めて来た人にもわかるように、煽りVなんかもしっかり作ろう。PRIDEをお手本にして、それをプロレスに活かそうとしているのがいまの新日本なんです。まさにリボーンですよね」

格闘技にはないプロレスの素晴らしさを打ち出しながら、演出等ハード面ではPRIDEのいい面を吸収する。PRIDEの影響をソフト、ハードの両面で受けながら、いま新日本プロレスは生まれ変わろうとしているのだ。



PRIDEから遠く離れた場所で

鈴木みのる

“PRIDE”以前を創り出した男たち

1997.10.11-2007.10.4
PRIDEは何を変えたのか?



ここまで、さまざまなレスラー&格闘家、関係者にPRIDEについて語ってもらってきたわけだが、特集の最後に登場するのは、PRIDEとは直接的な関係はないが、パンクラス旗揚げメンバーとして、PRIDEをはじめとする総合格闘技の歴史を間近で見てきた鈴木みのるだ。旗揚げから15年、現在はプロレス界で大暴れする、みのるにとってのPRIDE、そして総合格闘技とは!?

聞き手／堀江ガンツ　撮影／乾晋也

PRIDE以前、「日本の総合格闘技イベントと言えば？」と聞かれ、頭に浮かぶのは修斗とパンクラスか。しかし、〝プロ興行〟という意味では、日本武道館や両国国技館といった大会場でも興行を開催してきたパンクラスのイメージのほうが強いだろう。

新日本プロレスでデビューした船木誠勝と鈴木みのるが新生UWF、藤原組を経て理想の団体を創り上げるべく93年に旗揚げしたパンクラス。

そのパンクラスと同時期に旗揚げされたUWFインターナショナルのエース・高田延彦とヒクソン・グレイシーの一戦からスタートしたPRIDEというリングは、パンクラス同様、桜庭和志らプロレスラーの活躍によって大きく飛躍を遂げた。

プロレスラーが総合格闘技ルールで闘うという概念を広く知らしめたのがPRIDEだとすれば、それよりも先に、その価値観を構築したのはパンクラスの鈴木みのる、そして船木誠勝という二人のプロレスラーだったと言えるだろう。

PRIDEとは直接的な接点はなかったものの、そこから遠く離れた場所で、新たな価値観を築き上げてきたみのる、そしてパンクラスの歴史は、PRIDEという舞台にも少なからず影響を与えて来たはず。〝PRIDE〟以前を創り出してきた男、鈴木みのるに話を聞いてみた。

——今日は「〝PRIDE〟以前を創り出した男たち」というテーマで、鈴木さんの目から見たPRIDEや、PRIDEがパンクラスに与えた影響を語っていただければと思います。

パンクラスが変わった一番の要因は菊田とかグラバカが入ってきたこと

鈴木 ただ、俺自身はPRIDEは一度も上がってないですからね。まあ、いろんな意味でもパンクラスへの影響は大きかったっていうのは間違いないですけど。

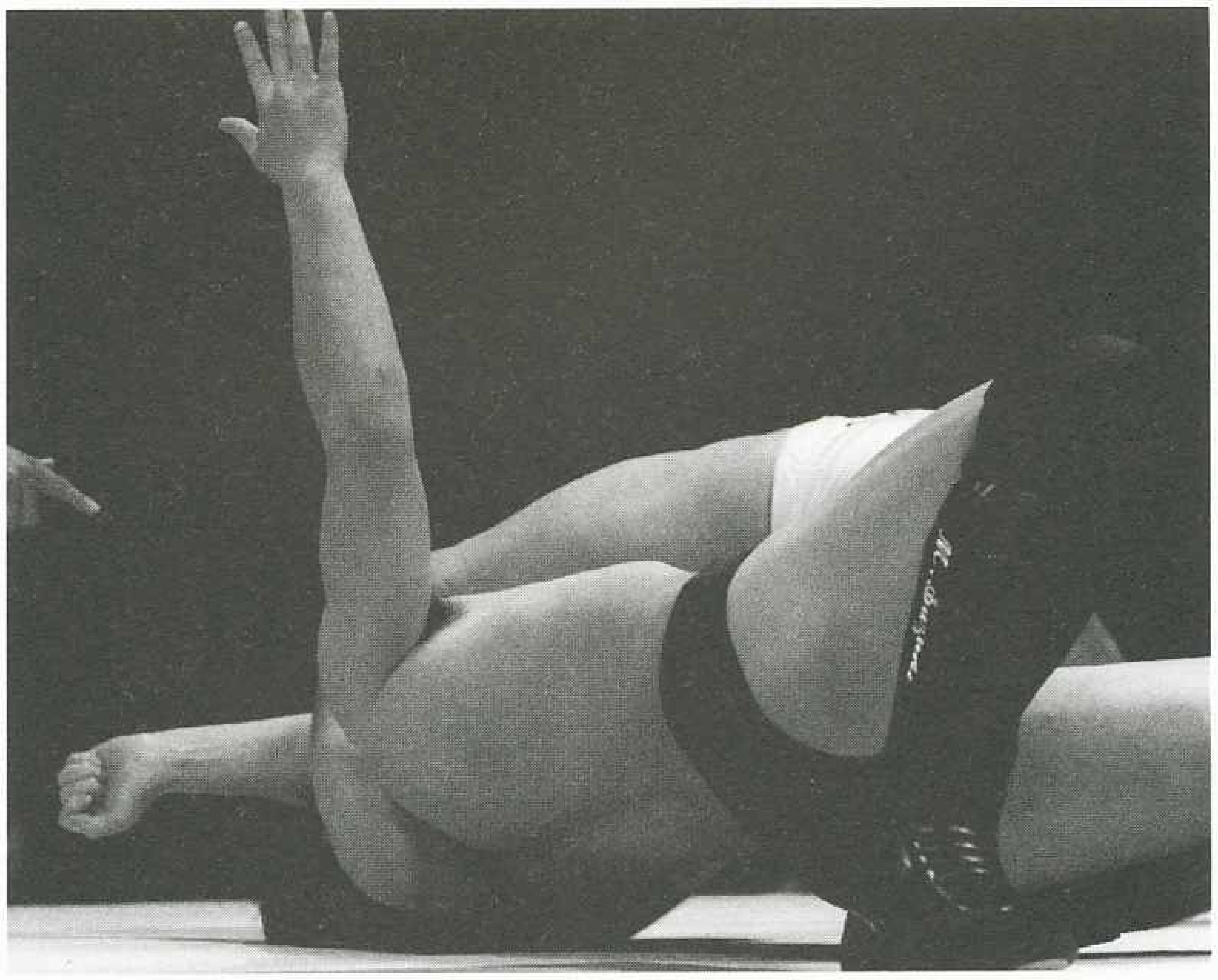
——パンクラスからも多くの選手がPRIDEのリングへ上がったりしてますからね。

鈴木 それもそうだし、パンクラスの興行的な面だとか、もっと言えばウチのジムとかにも少なからず影響はあったと思いますしね。

——確かにエースの近藤有己選手とかがPRIDEに参戦することによって、マッチメイクだったり集客に影響があったでしょうからね。

鈴木 まあ、PRIDEだけが原因じゃないでしょうけど、ぶっちゃけ、影響はありましたね。

——パンクラスのビッグマッチの会場だった日本武道館も00年12月の船木誠勝引退興行以来、使用してないですし、両国国技館も03年8月の近藤vsジョシュ・バーネットのタイトルマッチがメインだった大会がいまのところ最後になってますからね。


PRIDEから派生したDREAM、『戦極』、そしてUFCとさまざまなイベントに選手を送り込んでいるのが、みのるの評価も高い菊田率いるグラバカ。みのると菊田は99年12月にパンクラスで激突、肩固めで菊田が勝利を収めている。

鈴木 へぇ～、もう5年もやってないんだ。最後の武道館の頃って、もうPRIDEはやってましたよね。

——00年はマーク・コールマンがPRIDE・GPがあったり、小川直也選手が参戦したりしてますね。PRIDEではないですけど、船木vsヒクソン戦を行なった『コロシアム2000』も同じ年ですね。

鈴木 そうか、そうか。まだPRIDEができる前、ウチが旗揚げしてすぐの武道館とかビックリするぐらいチケットが売れたんですけどね。

——鈴木さんがモーリス・スミスに勝ったときですね。ボクもチケットを買って観に行きました（笑）。

鈴木 お買い上げありがとうございます。あのときなんて、招待券なしで1万枚以上売れましたからね。いまじゃ、ありえないですよ。

——パンクラスに限らずですけど、いまは武道館を満員にできる団体って、ほとんどないですからね。

鈴木 ですよね。グッズの一日の売上げが1500万超えてたんですよ。いまから考えると「なんじゃそりゃ」って話で（笑）。でも、「いつまでもこのままじゃないぞ」って冷静に言ってくれたのは尾崎社長でしたね。

——尾崎社長だけは冷静だった、と？

鈴木 そうッスね。「しっかりアマチュアを育てて、アマチュアの選手から上げていかないと競技としては成立しない」とか、「アマチュアの人たちが観に来るものにしないとプロとして上に行けない」とか、そういうことを旗揚げ直後からいろいろと言ってくれて。早い段階からボクシングのシステムを目指してたんですよ。

——アマチュア構想は旗揚げ直後からあったわけですね。

鈴木 ありましたね。ただ、そういうのを聞いてると、「あ～、いつか俺も弾き出されるんだなぁ」って考えてましたけど（笑）。

——でも、そういう構想を現実化させたのが、今日の取材場所のP's L

鈴木みのるを読み解くパンクラス5つのキーワード

決意の旗揚げ

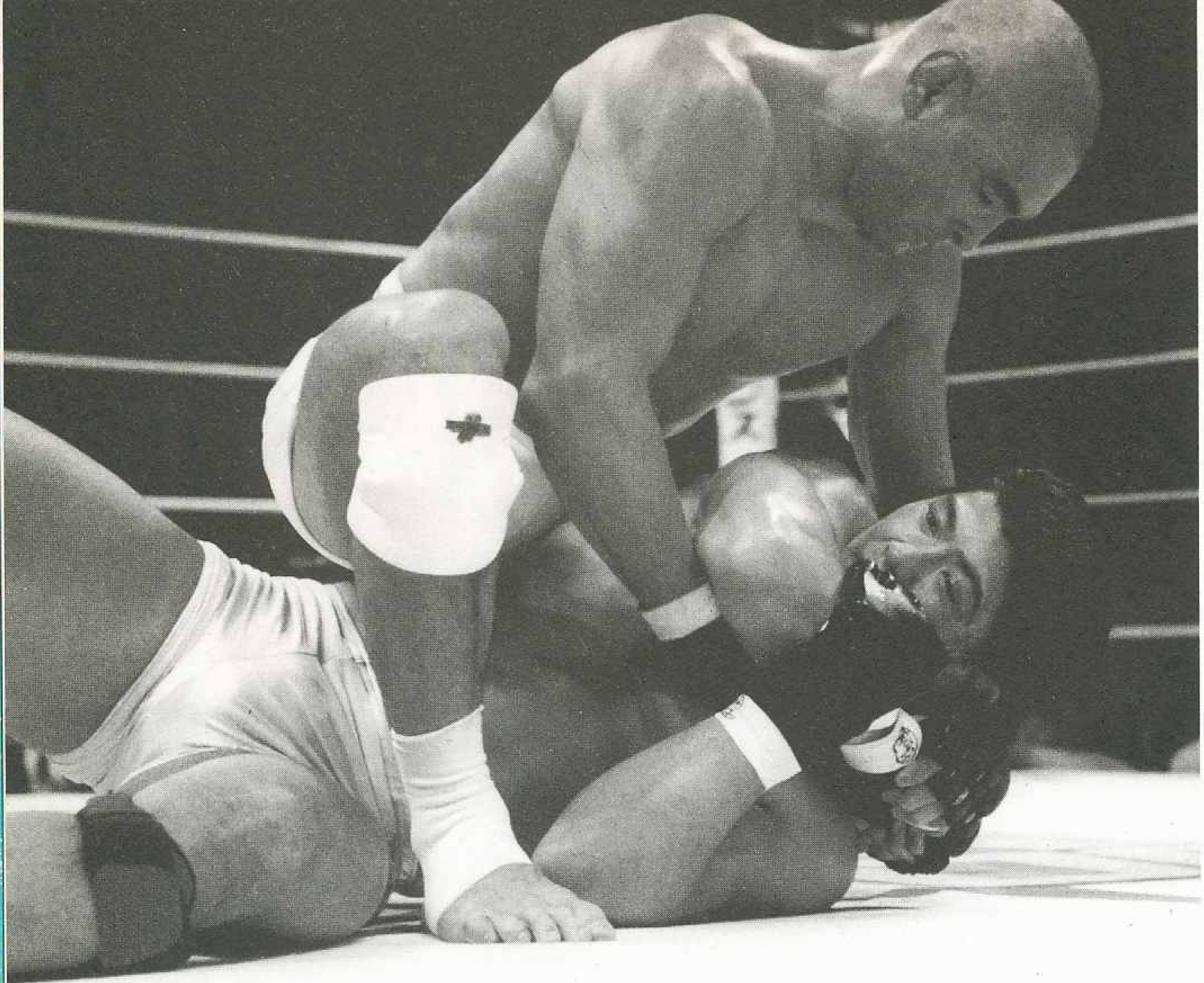


93年に藤原組を退団したみのると船木が中心になって設立したパンクラス。同じくUWFから分裂したかたちで旗揚げしたのがPRIDEの源流ともいえるUインター。髙田、桜庭、松井をはじめ多くの選手がキングダムを経てPRIDEへ参戦している。

バルチャ戦士とバーリ・トゥード


いま現在、みのるの他団体での総合ルール最後の試合となっているのが02年3月のDEEP名古屋大会でのソラール戦（急所攻撃でみのるの反則勝ち）。ソラールは翌月の『PRIDE.20』では菊田との因縁対決に挑むアレクのセコンドとして登場！

AB東京をはじめ、横浜や大阪でス
京は今年の10月から原宿のゴールド
ったですからね。
——パンクラスルールの試合をして
運命のライガー戦



AB東京をはじめ、横浜や大阪でスタートさせたジム経営なんですね。

鈴木　たしか、東京道場を始めたのが97年の夏とかだから、それこそPRIDEを見て、総合格闘技に興味を持った人もたくさんウチに来ましたからね。もう、わかりやすいんですよ。桜庭（和志）がホイス（・グレイシー）に勝ったあととかに会員が増えたり。そういう意味ではPRIDEに感謝してますよ。

――ただ、残念ながらP's LAB東京は今年の10月から原宿のゴールドジムに移転になるみたいですが。

鈴木　そうッスね。（ジムの2階の）事務所も来週いっぱいで閉鎖ですし。

――やっぱり寂しくなるんじゃないですか？

鈴木　仕方ないッスね。これも時代の波ですよね。それこそ、一時はブームなんて言われたPRIDEだってなくなってしまったわけだし。まあ、総合格闘技の道場もウチが始めたばっかりの頃は東京にはほとんどなかったですからね。

――当時は数えるほどでしたよね。

鈴木　そういうのもあって、始めてすぐに会員が300人になって。一時期は500人いましたからね。

――500人って凄いですよね。その頃のパンクラスは道場経営で儲けてたってよく聞きますけど（笑）。

鈴木　だから、都内の一等地（広尾）の道場を維持できてたんですけどね。

――PRIDEというイベントは約10年で終わってしまったわけですけど、鈴木さんと船木さんが中心になって立ち上げたパンクラスは今年で15周年を迎えるんですよね。

鈴木　よくやってますよねぇ……。その間、多くの団体が生まれては消えの繰り返しでしたからね。

――興行規模は縮小したとはいえ、プロレス・格闘技で15周年を迎えられる団体って一握りだけですからね。

鈴木　まあ、自分が選手として関わったのは旗揚げから10年だし。それに、いまは自分が持ってたパンクラスの権利とかは全部後輩たちに譲ったんですよ。だから、もう口も出さなければ、手も出さないというか。

――もう手も出しませんか（笑）。

鈴木　結局、俺がいると、いつまで経っても鈴木のパンクラスのままなんで。絶対にそれはよくないと。新しい選手もせっかく出てきてるんで。要は、新陳代謝をちゃんとするということですね。それもまあ、ギクシャクしながらやってきたと思うんで。

船木さんがヒクソンに負けたあと、自分が仇討ちをしようと思ってた

――パンクラスルールの試合をしている頃は、まさかフリーの大物としてプロレス界を荒らし回ってるとは思ってなかったんじゃないですか？

鈴木　思わなかったですねぇ……。それも、やっぱり10年の経験があったからっていうのは大きいと思うし。いま思えば、パンクラスというものを作って始めた人間、船木さんとか、俺とか高橋（義生）とか。その中で思い返すと、プロレスラーとして関わってきたパンクラスって感じがしますね。

――プロレスラーとしてということ？

鈴木　自分は「パンクラスはプロレスのこういうスタイルなんですよ」っていうのを語弊があるような、難しい言い方をしてたと思うんですよ。

――「18番目の団体ではなく、このスタイルの最初のプロレス団体」みたいなことも言ってましたね。

鈴木　あくまでも自分の中ではプロレス団体としてのパンクラスという認識だったんですよ。それが変わり始めたのは菊田（早苗）が加入したのが相当大きかったと思いますね。

――菊田さん率いるグラバカですね。

鈴木　菊田は発想が俺らとはまったく違うんですよね。

――違うでしょうね（笑）。

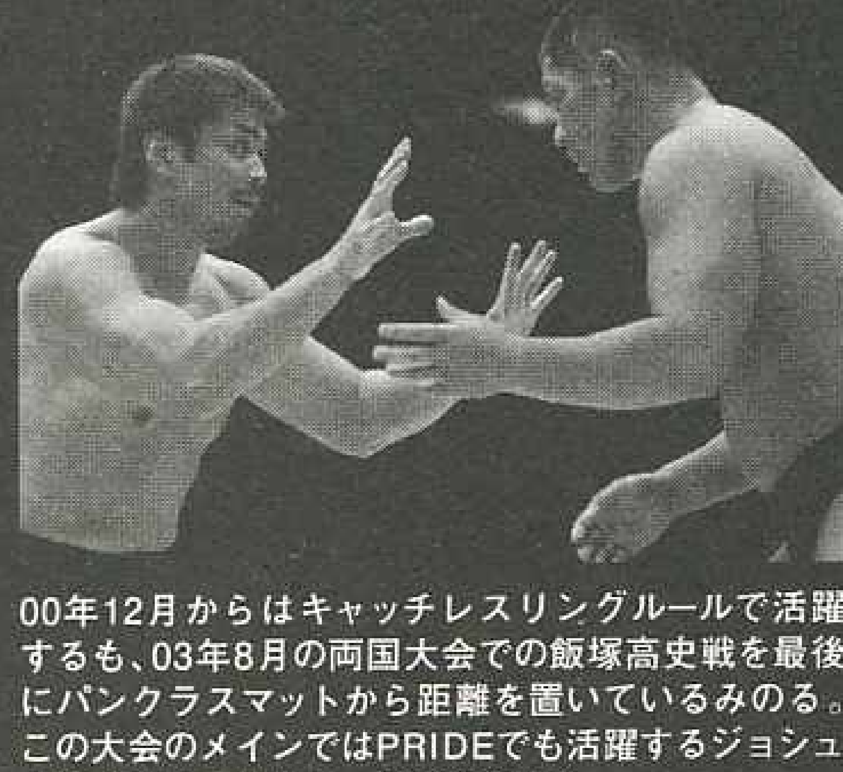
鈴木　格闘技というか、スポーツとしての競技という発想を凄く持ってるんで。彼らが入ってきたことによって選択肢が増えたというか、ドンドン変わりましたね。一緒に始めた選手たちもそっちの道に行ったり、

運命のライガー戦



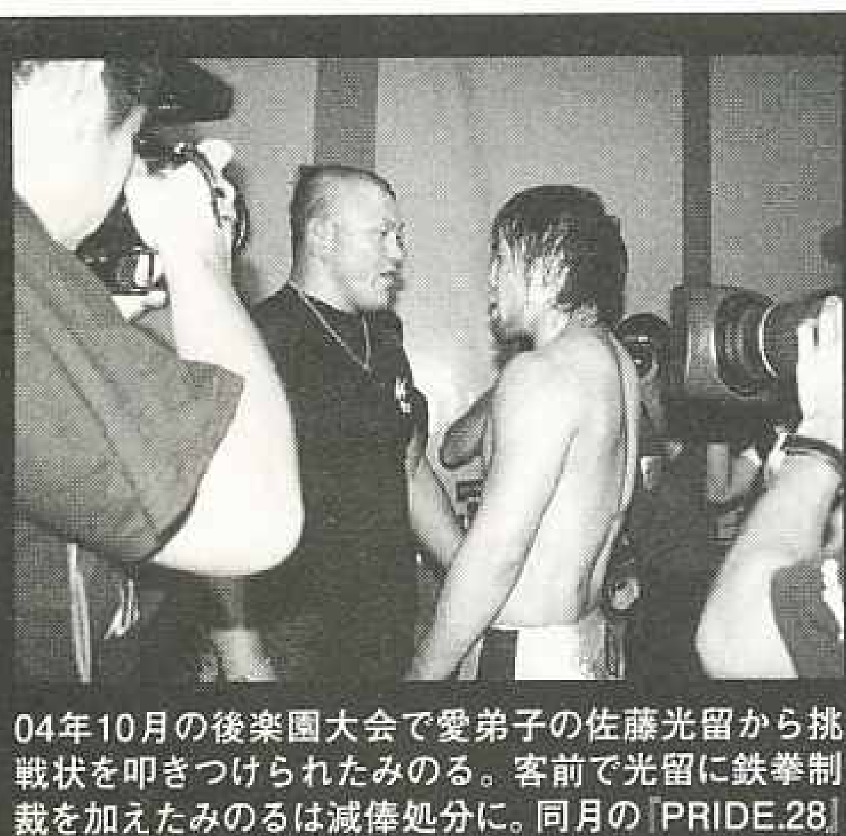
みのるにとってパンクラス総合ラストマッチとなっているのが02年11月のライガー戦。同じ月には『PRIDE.23』東京ドーム大会が開催され、かつて、みのるとも同じ釜のメシを食べた高田延彦が田村潔司相手に引退試合を行なっている。

キャッチレスリング



00年12月からはキャッチレスリングルールで活躍するも、03年8月の両国大会での飯塚高史戦を最後にパンクラスマットから距離を置いているみのる。この大会のメインではPRIDEでも活躍するジョシュと近藤がタイトルマッチで激突した。

後輩からの挑戦状



04年10月の後楽園大会で愛弟子の佐藤光留から挑戦状を叩きつけられたみのる。客前で光留に鉄拳制裁を加えたみのるは減俸処分に。同月の『PRIDE.28』にはパンクラス無差別級王者のジョシュがPRIDEに初参戦するも、肩の脱臼でミルコに敗戦。

完全にシフトチェンジして、いまも総合格闘家として生きてますからね。船木（誠勝）さんや高橋もそうだし、引退しちゃったヤツもいるし。だから、自分だけですね、戻ったのは。

——高橋さんはIGFに出てますけどね。

鈴木　あ、そうか（笑）。でも、いまから思うと不思議ですね。海外遠征に10年ぐらい出てたような気分で。

——なるほど。新日本プロレスでデビューして、違う世界で活躍して、またプロレスに戻ってきたわけですからね。ほかにはいないですよね。

鈴木　（総合格闘技を）一回や二回だったらできるんですよ。「覗いてみたい」って言って覗いたヤツもたくさんいるし。「覗いてみたい」って言って、そのままそっち側の人間になっちゃった藤田（和之）とかもいますからね。桜庭（和志）もそうだし。

——PRIDEを覗いたプロレスラーもたくさんいましたからね。

鈴木　高山（善廣）もそうだしね。いろんな人がいて、いろんな考えがある中で、自分がいまプロレス界でやってるっていうのが、これも自分の道なんだなとは思いますけどね。

——逆に言うと、多くのプロレスラーがPRIDEなど総合の世界を覗く中で、鈴木さんはその流れと逆行するかたちで、パンクラスミッションを設立してプロレス界に戻ったかたちになりますよね。そのときは凄い決断が要ったんじゃないですか？

鈴木　確かにいろんな思いがありましたね。自分を守るために強がっていろんなことを言ったりだとか。まあ、いまになって考えると、正直言ってどうでもいいですけどね。

——どうでもいいですか（笑）。

鈴木　それで、今日はPRIDEと、船木さんの話をしてくれってことだったんで、言おうと思ってたことがあるんですよ。

——なんでしょう？

鈴木　正直、プロレスをやるときに、自分の中で思ってたことがあるんですよね。これは、ず〜っといままで黙ってたことなんですけど。

——今日、初めて語ると？

鈴木　そうですね。船木さんが『コロシアム2000』でヒクソン（・グレイシー）に負けたときに、自分が仇討ちがしたかったんですよ。

船木さんがミノワに勝った瞬間、ちょっと感動しちゃいましたね



みのるにとって盟友と愛弟子の対戦となった『DREAM.6』での船木vsミノワマン戦。現在はそれぞれの道を歩む3人の"プロレスラー"がリング上で対峙する日は来るのだろうか？　そして、船木とヒクソンの再戦の可能性はあるのか？

——鈴木さんがヒクソン戦ですか！

鈴木　これはホントのホントですよ。どうしても仇討ちがしたくて、すぐに言ったんですよ。あのとき、控室に船木さんと（尾崎）社長がいて。社長に「俺がやりたい」って言ったら「わかったから、ちょっと待て」って。そのときは船木さんが突然辞めるって言い出したじゃないですか。

——試合後に突然引退発表をしてしまいましたからね。

鈴木　そう。それどころじゃなかったみたいで。それで、しばらくしてあらためて社長とゆっくり話したら、「いまの鈴木みのるじゃあ、ヒクソンは呼べない。仕事にならない」ってハッキリ言われたんですよ。

——あぁ、あの頃は結果が出てませんでしたからね。

鈴木　試合に出たらケガしたり負けたりの繰り返しをしてる引退間際のベテラン。ロートルってヤツですからね。でも、自分なりに頭の中でいろんなことを考えたんですよ。それで「この状態で自分の名前を上げるためにはどうしたらいいんだろう？」って。そこで頭に浮かんだのが「プロレスに行こう」ってことで、それがきっかけだったんです。

——要はヒクソンとやるために、名前を上げたい、と？

鈴木　そうッスね。名前をとにかく売りたいっていうか。それで、プロレスに転向して一年ぐらい経って、次の年に、高山（善廣）とプロレス大賞のベストタッグとか賞をもらって、「まだ無理ですかね？」って社長に聞いたら「まだ無理」って言われて。その翌年だったかに船木さんがパンクラスを離れることになったんですよ。

——当時、パンクラスの顧問だったのが、完全に離れたんですよね。

鈴木　そうです。俳優をやるために、タレント事務所に移って、もうパンクラスの仕事はしないってなったときに船木さんにポロッて言われたんですよ。「そういうことは考えなくていいよ。おまえが苦しむ必要は何もないし、おまえはおまえの道を行けばいいんだよ」って。それで、す〜っと胸のつかえが取れたんですよね。

——「そういうこと」っていうのはヒクソンへの仇討ちのことですか？

鈴木　そうッスね。なんかヤキモキした状態で2〜3年過ごしてたんですけど、船木さんのそのひと言でモヤモヤが取れたら三冠チャンピオンになったり、MVPも獲れて。次から次へと「もう休ませてよ」っていうぐらいに仕事が舞い込んできて。なんか不思議な感じですよね。

——ある種、プロレスに対して素直になれたというか。

鈴木　なれましたね。それからですね。「俺、プロレス大好きなんだ」って素直に思えるようになったのは。

——ちなみに、いまはもうヒクソン戦をやる気はないですか？

鈴木　いまは、もういいッスね。やっぱり船木さんが復帰したことで、ヒクソンとやりたい気持ちはすべて消えました。逆に船木さんには、ぜひもう一度ヒクソンとやってもらいたいですけどね。勝手なファンの思い入れみたいな感じですけど（笑）。

——その船木さんの復帰後、初勝利となった『DREAM・6』のミノワマン戦はご覧になりました？

鈴木　観ましたよ。全日本（プロレス）の巡業に出てたんで、観れないと思ってたんですけど、たまたまホテル

鈴木みのるが選ぶPRIDEベスト3

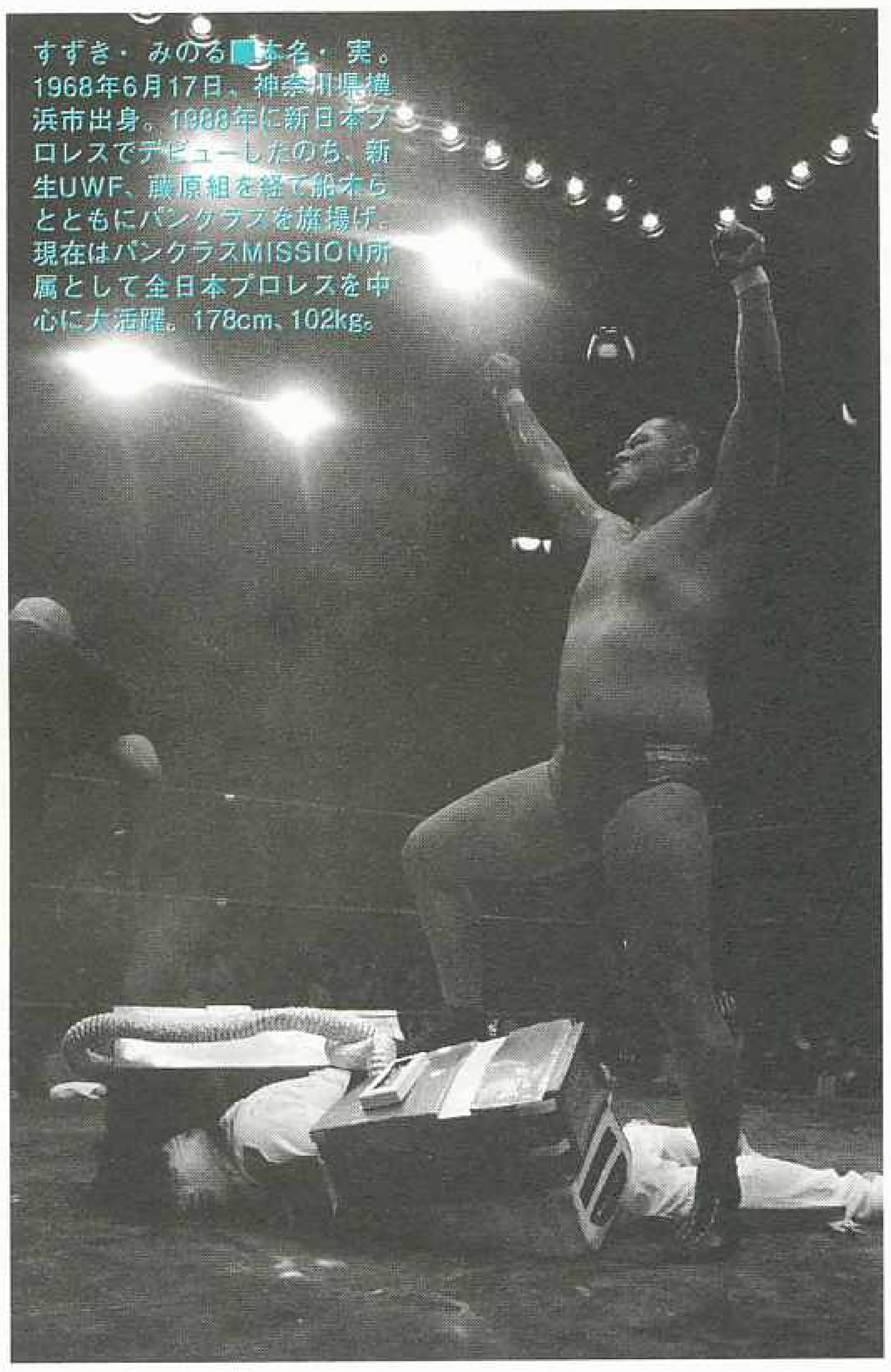
1 高山善廣vs ドン・フライ

2 桜庭和志vs ホイス・グレイシー（1回目）

3 近藤有己vs マリオ・スペーヒー

1位の高山vsフライは、プロレスでも総合格闘技でも人の試合では滅多に感動しない俺が感動させられた試合ですね。ひと言「スゲー！」っていう。あの試合にはいろんな意味で影響を受けました。桜庭vsホイスは1位とは違う意味で「スゲー！」って感じた試合ですね。3位の近藤vsスペーヒーは大晦日に実家で酒を飲みながら観てたんですけど、この試合は1位とも2位とも違う意味で「スゲー！」と思った試合ですね。3試合ともホント「スゲー！」と思います。

のテレビをつけたら偶然、船木さんの入場のシーンだったんですよ。
——凄いタイミングですね。
鈴木 観始めたら、終わりまで観ちゃいましたね。おかげで、待ち合わせには遅れちゃいましたけど。
——ご覧になられて、どうでした?
鈴木 終わった瞬間、ちょっと感動しちゃいましたねぇ……。
——それは船木さんが勝ったことに対してですか?
鈴木 年もあれから食ったし、ずいぶん顔もジジイになったし……。けど、ボコボコにされた船木さんが「明日また生きるぞ!」って叫んだときと凄いダブって見えましたね。死ぬために闘うんじゃなくて、生きるために闘ってたっていうか。
——煽り映像は観てないですか?
鈴木 観てないですね。誰かから聞いたんですけど、なんか工事現場で働いてたとか言ってたんでしょ。
——そうなんですよ。カッコつけの船木さんらしからぬ発言があって。
鈴木 冷静に思い出すと、入場してきたときの顔つきがパンクラスでしょっちゅうやってたときの顔になってましたけどね。桜庭戦のときのような悲壮感も感じなかったし。でも、逆にミノワは完全に飲まれてましたね。昔、この道場にいる練習前のミノワみたいな顔をしてましたね。
——新弟子時代に戻ったというか。
鈴木 そんな感じでしたね。まあ、ミノワもまだまだですね(笑)。
——鈴木さんは、船木さんやミノワマンとリング上で再会することって、この先あると思いますか?
鈴木 ないんじゃないですか。佐藤光留みたいに「俺もプロレスに行くんだ」ってなったヤツはどっかで会うかもしれないけど、そうじゃない人とはたぶん会わないですね。
——ちなみに船木さんは、「俺と鈴木はプロレス界で一緒にいないほうがいい」って言ってましたね。
鈴木 へぇ~。でも、そうなのかもしれないな。仮に全日本プロレスに上がってきたら、やりづらいなぁって思うし(笑)。ただ、船木さんとは15年ぐらいは一緒にいたと思うんで、一緒にいれたことを逆にいまは大切にしたいし、誇りにも思うし。仲間以上というか、親兄弟以上みたいな感じの関係なんで。
——親兄弟以上ですか。鈴木さんとしては、もう総合格闘技は引退したという感じなんですか?
鈴木 たぶんね、俺は一度も総合格闘家になってないんですよ。プロレスラーがやる総合格闘技だったんですよ、試合のレベルも。自分なりの限界まではやったと思うんですけど。


すずき・みのる■本名・実。1968年6月17日、神奈川県横浜市出身。1988年に新日本プロレスでデビューしたのち、新生UWF、藤原組を経て船木らとともにパンクラスを旗揚げ。現在はパンクラスMISSION所属として全日本プロレスを中心に大活躍。178cm、102kg。

——それこそ、PRIDEに何度か参戦した高山(善廣)さんや小川直也さんと同じような感じですか?
鈴木 近いと思いますよ。俺がプロレスをやるって決めたときも、社長が「リング上でちゃんと引退式やってから、プロレスに行け」って言ったんですけど、「俺は引退するわけじゃない」って突っぱねたんですよ。
——プロレスラーが総合格闘技からプロレスのリングに移るだけで、引退ではない、と。
鈴木 でも社長は「『総合は引退します。次の仕事としてプロレスに転向します』とやらなければ、プロレス自体を否定してきた過去を全否定することになるよ」って言って聞かなかったんですけどね。でも、最終的には「プロレスもやっていく新しい部署を作ればいいんじゃないか」って理解してもらって。要は妥協案ですね。
——なるほど。
鈴木 だから俺がパンクラスでやってたことっていうのは、ホントにプロレスの延長なんですよ。言葉は悪いけど、ガチンコプロレス。
——パンクラスはガチンコプロレスでしたか。
鈴木 わかりやすく、『kamipro』読者ならではの言葉で言うとね。あんまりいい言葉じゃないけど、俺らがやりたかったのは、ホントにそれですから。当時、プロレスラーがガチンコをやるっていうのが、新しい価値観だと思ってやってたんで。
——それが、いまの総合格闘技につながってるわけですからね。PRIDEも高田延彦vsヒクソン戦がスタートで、隆盛を極めたのが桜庭和志というプロレスラーですからね。
鈴木 ですよね。だから、新しいものを作るときって新しい価値観が必要だと思うんですよ。菊田たちは新しい価値観をパンクラスに持ち込んで、パンクラスのリングを変えていったし、桜庭はバーリ・トゥードにプロレス的な考えっていう新しい価値観を持ち込んでPRIDEもあれだけの人気になったと思うし。
——それは言えますよね。
鈴木 だから、いまPRIDEという舞台はなくなっちゃいましたけど、新しいものを作り出さずして、桜庭以上のスターを生み出すっていうのは難しいと思いますよ。新しい時代の新しいスターは新しい価値観も一緒に作っていかなきゃいけないと思うんで、ホント大変だと思いますよ。
——PRIDE以降でスター性を感じる選手って誰かいますか?
鈴木 いまはDREAMだと青木(真也)っていう選手が頑張ってますよね。『戦極』だとパンクラスの北岡(悟)とか、いままで日の目を見なかった選手たちが頑張ってますよね。ただ、彼らが新しい時代を作るなら、PRIDEとか『HERO'S』の延長じゃダメなんですよね。新しい価値観も作らないと、プロとしての総合格闘技っていうのはダメになると思う。それはパンクラスの新しいチャンピオンの川村(亮)もそうですけどね。
——鈴木さんたちも新しい価値観を作ろうと思ってパンクラスを立ち上げた、と?
鈴木 当時はそう思ってましたけど、昔からあったUWFという価値観のちょっと先をやっただけでしたけどね。だから若い彼らも、ちょこっとでもいいから新しい価値観を作ってもらいたいですね。

【08年10月3日/都内・パンクラス事務所にて収録】

濃厚な10年間を3ページでムリヤリ検証!!

PRIDE 一周忌 座談会

創刊当時からPRIDEをプッシュし続けたきた『kamipro』ですので、当然PRIDEを語るぞ!! というわけで、あの"奇跡の10年"を本誌編集部員たちはどう見てきたのか? 3ページに凝縮してお届けします。ダン! ダン!! ダダン!!!

斉藤　今回は「PRIDE一周忌」座談会ということで。PRIDEの初期は立ち上げ前から取材をしていた坂井ノブ、全盛期は堀江ガンツ、最後の暗黒期は自分がそれぞれ中心になって振り返りたいと思います。

ノブ　え〜っと、まず『kamipro』といえばPRIDE。PRIDEがあったからできた雑誌なんだよね。髙田延彦vsヒクソン・グレイシー戦によってマット界が大きく変わる、それを伝えるのがおもしろいんじゃないかということで『kamipro』が立ち上がったという背景があったわけです。

ガンツ　間違っても創刊号の表紙だったターザン山本のために立ち上げたわけじゃない（笑）。

ノブ　うん。ただ、編集部にはそういう雰囲気は皆無だったけどね。会長（前編集長、山口日昇のあだ名）はそういう話は外でしてたしさ。でも、当時は俺は新人だったけど「これはおもしろくなるぞ！」っていう感覚はあった。

斉藤　でも、『PRIDE・1』は実券で5000枚も売れなかったという話ですね。

ノブ　あのときの東京ドームはガランとしてた雰囲気だったもんね。90年代新日本の華やかで超満員のドーム興行と比べたら、「格闘技ってダメなんだ……」って思ったなぁ。そのあとにUFC—Jで桜庭が勝ったときも会場はガラガラでさ。

ガンツ　2階席は1列目しか人がいなかったもんね。その人数の少なさでウェーブをやったりして（笑）。

ノブ　PRIDEというか、あの当時の総合格闘技って、ぜんぜんチケットが売れてなかった。桜庭にしても（カーロス・）ニュートン戦はマニアの評価こそ高かったけど、むしろビクトー・ベウフォートに勝ってからだよね、PRIDEと桜庭の顔がガッと売れ出したのは。

ガンツ　でもビクトー戦って、一見楽勝に見えるけど、かなり紙一重だったらしい。最初にタックルいったところをボコボコやられて、そのときにビクトーの拳が折れたから、もうそのあとは桜庭のやりたい放題になったんだけど。ビクトーのボクシングテクニックを考えると、かなりのギャンブルだったって。

ノブ　じゃあ、ビクトーの骨が折れてなければ、PRIDEの隆盛もなかったかもしれない、と。

ガンツ　運も味方につける勢いが桜庭にはあったんだろうね。

斉藤　そもそも『PRIDE・4』が終わってから、主催がKRSからDSEに変更になって、けっこうな空白の期間があったじゃないですか。

ノブ　う〜ん。いったいどうなってるのかわからなかったよね。一年目のド新人だからさ。でも、当時は髙田が負けてどん底に落ち込んでたから「PRIDEと心中する気はない」っていう気持ちもあってさ。

ガンツ　PRIDEをきっかけに立ち上げたのに（笑）。

ノブ　そう（笑）。それが『kamipro』なりの敗戦ショックだったといまになって思うんだけど、その声明が6号。蝶野が表紙&巻頭インタビューで、次はTAKAみちのく、テリー・ファンクだったかな。つまり純プロレスもありなんじゃないかって。nWo人気の絶頂期だったし。

斉藤　『kamipro』の歴史を振り返ると、20号ぐらいまでは、小川vs橋本の"1・4事変"の衝撃で転がしていたところはありますよね。ほかにも事件やビッグニュースが毎月起こってて、まあ、マット界に元気があったわけですね。

ノブ　PRIDEに関しては『SRS・DX』（現在は休刊）のほうがガンガンやってた気がするよね。

ガンツ　それこそK—1やPRIDEのためのオフィシャルマガジンができたっていうことだよね。

斉藤　要するに『Kamipro』がマスコミの立場からPRIDEにアプローチしたとすれば、『SRS・DX』はPRIDEに関わっていた谷川さんや柳沢（忠之）さんたちが作った雑誌だったということですね。

ノブ　そこらへんから俺はPRIDEをあまり担当しなくなったんだよね。

ガンツ　でも、大刀光のPRIDE出場には絡んでるよね？

ノブ　ああ、それは俺がやった記事がきっかけだったから、そのときはもう全力で応援したよ。

斉藤　経緯を知らない読者に簡単に説明すると、相撲幻想があふれるインタビュー記事が発端で大刀光のPRIDE出場が決まった。しっかし、おおらかな時代ですよね。大刀光がGP本戦出場で、ヴァンダレイ・シウバがリザーブですよ？

ノブ　そうだよね。大刀光も「相撲取りが転がされるわけないじゃん」「パンチなんか使わない。張り手で充分だ」って豪語してたからね。

ガンツ　そういえば、大刀光って控室でタバコを吸ってほかの選手に怒られたんでしょ？（笑）。

ノブ　そうそう！　いま考えるとDEEPメガトントーナメントみたいなレベルの話なんだけど、当時は幻想がバリバリあったからね。いい時代だったな〜。

斉藤　はいはい、話を戻すと、当時はPRIDEがブレイクする前夜だったじゃないですか。

ノブ　それはやっぱり夜明け前の興奮はあったよねぇ。ただ、やっぱり仕事だからね。まあ、無邪気にさ、願掛けに行ったりとかはできないよね（笑）。

ガンツ　ちょっと、オレもべつに仕事始めてから、絵馬を書いたりしてるわけじゃないよ！（笑）。

ノブ　でしょ？　そういう心境でPRIDEを観たことは一度もないんだけど、大会が終わったあとの切ない気持ちは初期からずっとあったよね。そもそも『PRIDE・1』の試合直後にガッツ石松さんに取材をさせてもらって、「人に夢と書いて『儚い』って読むだろ？　人の夢なんて儚いものなんだよ！」って言われたのは強烈に印象に残ってるよ。

斉藤　たとえば何かしらの価値観が揺らいだり生まれたりしたら、それはその興奮をそのまま読者に伝えたいわけじゃないですか。

ノブ　それは大刀光が負けたときかなあ……。

ガンツ　そんなことかいっ!!（笑）。

ノブ　いや、デカいよ。自分の書いた記事でPRIDEに出ることになって。ホントに申し訳がないから、大会当日は朝から大刀光に密着してたもんね（笑）。だから、勝つことがカタルシスになったのは、桜庭がUFC—Jで勝ったときと、桜庭vsホイス。あとは髙田がヒクソン戦に勝ってりゃなあ……。結局、あのロスは取り戻せないんだよね。

斉藤　あれですよね、なんか桜庭とか田村とかに思い入れはないですよね？

座談会出席者

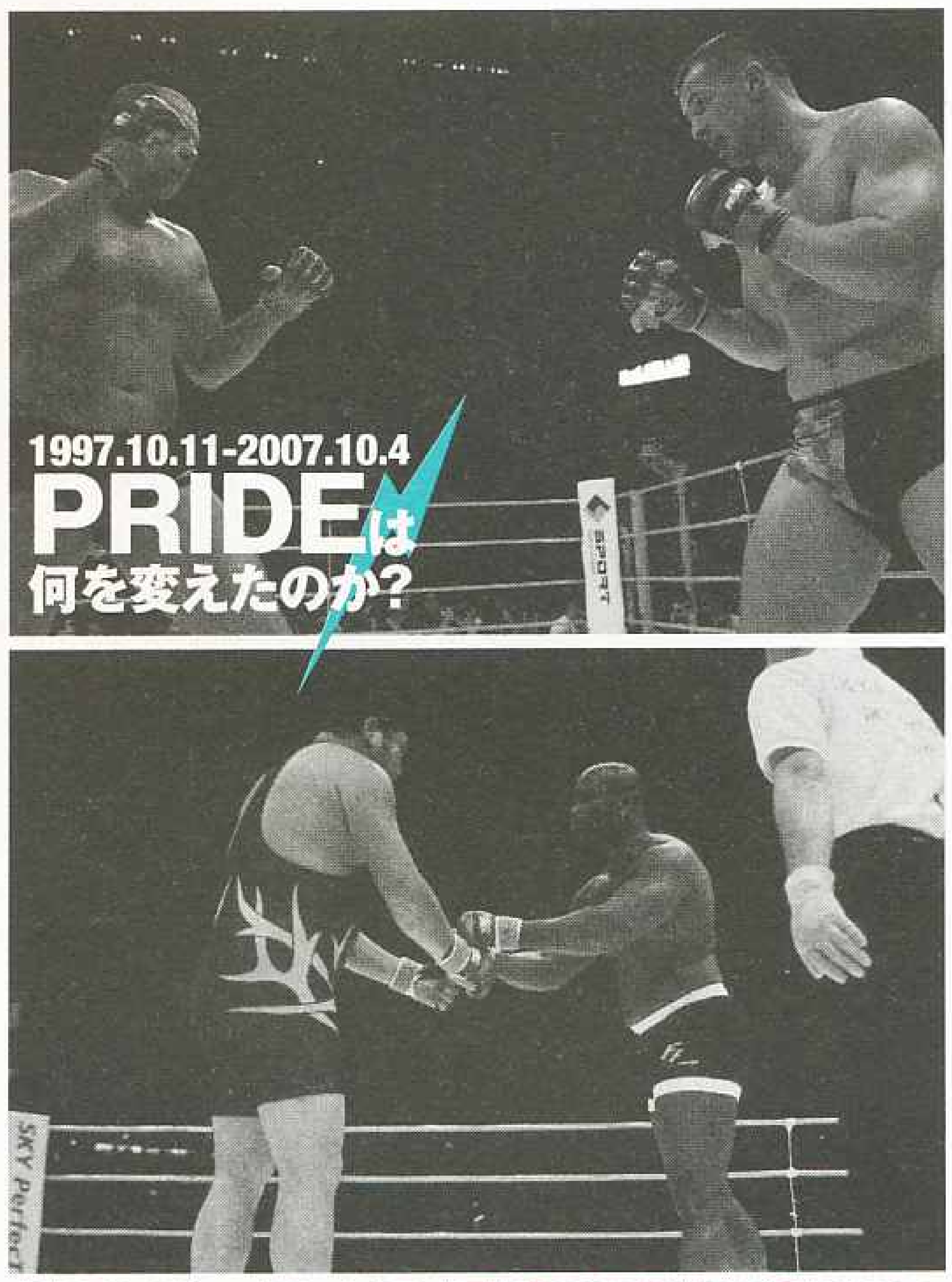
坂井ノブ
『kamipro』携帯サイトおよびオフィシャルウェブサイト責任者。PRIDE以前から『kamipro』に携わる編集部最古参。PRIDEの担当は大刀光とか。

堀江ガンツ
髙田延彦のヒクソン戦の勝利を願って絵馬書きや願掛けを行なっていた、本誌変態座談会主宰者。PRIDEの担当はミルコ、オーちゃん、BTT、RTTなど一流どころ。

ジャン斉藤
編集長就任後はまったく活動してないが、ズンドコ興行マニア&アントンの永久電機研究家。PRIDEの担当はとくになしで来た球を打つタイプ。青木真也くらい。

ノゲイラ、ミルコ、ヒョードルに小川まで投入するんだから奇跡だよ

ノブ　なくはないけど、たぶん体内にUの遺伝子は受け継いでないから。
斉藤　べつに普通の人はUの遺伝子なんか受け継いでないよ。
ノブ　そうなんだけどさ、うん。……やっぱり大刀光かなあ。プロレスでもなんでもかんでも飲み込んで大きくなっていくときのPRIDEが一番強烈に刷り込まれちゃってるから。
斉藤　そういう時代を経てPRIDEの全盛期が訪れた、と。ここでUの遺伝子の出番です。
ガンツ　ええと、当時からPRIDEはおもしろかったけども、PRIDEの何がおもしろいって、世界のとんでもない人が集まって凄い大きな物語になってるところがおもしろいわけでしょ。でも、その世界観はじつはリングスのほうが色濃かった。
斉藤　確かにKOKのほうが世界最高峰の雰囲気がありました。
ガンツ　PRIDEは高田延彦や桜庭和志の物語だったから。それが一気に世界最高峰の舞台に変貌したのは、ヒョードルとかミルコとかノゲイラが集まりだしてから。『kamipro』からすると、リングス時代からヒョードルとかノゲイラをしっかり扱ってたっていうのはラッキーだったよね。読者からしてもPRIDEに上がる前からのドラマを知ってたわけだから、初参戦当初から思い入れを抱きやすかっただろうし。
斉藤　あとリングスでいえば田村潔司ですね。田村の本質的な部分はほかの媒体はどこも扱ってなかったですね。
ノブ　田村は扱いづらいでしょ。
斉藤　わかんないですもんね。
ノブ　俺もわかんない(笑)。
斉藤　まあ、Uの遺伝子は受け継いでないから(笑)。
ガンツ　でも、田村っていうのは強い弱いを超えて、桜庭との関係やUWFからの歴史、さらにへんなこだわりがある活字になる選手だったからこそ、ウチはガッチリ扱えたというのがあるよね。
斉藤　さっきの物語の話でいえば、前期が桜庭なら、後期はミルコの物語ですよね、PRIDEって。
ガンツ　K-1ファイターで寝技ができないミルコが世界最強を目指して、その前に続々とライバルたちが立ち塞がる。何度も挫折しながら立ち向かっていくストーリーだもんね。だからPRIDEは単なる格闘技イベントじゃなかった。その象徴がミルコというか、PRIDE後半の主人公だよね。



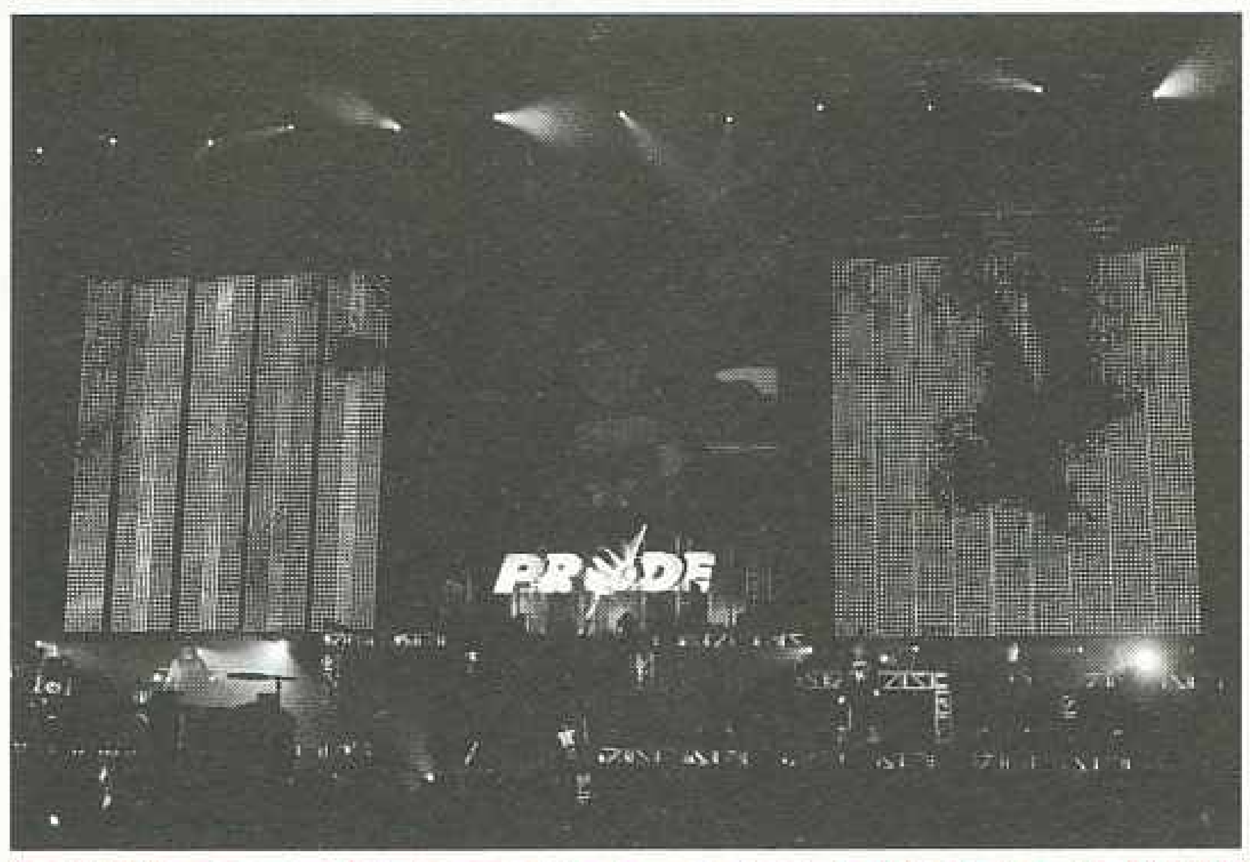
本誌のインタビューがきっかけで、大刀光のPRIDE GP出場が決定! いいのか、そんなんで!?　いずれヒョードルvsミルコの世界最高峰の一戦が行なわれるとは思えないいいかげんさだが、それがPRIDEの魅力の一つでもあった。似たようなケースに谷津嘉章もあり。オリャ!

斉藤　ミルコが物語を背負ったのは、代理人の今井さんのセンスによるところは大きくないですか?
ガンツ　そうだね。今井さんって「全権代理人」という肩書きでしょ?　これってマネージャーやブッカーというのを超えて、ミルコのすべてをプロデュースしてたってことなのよ。今井さんって、もともと映画のプロデュースとか、権利ビジネスをやってる人で、どうやって売るかっていうのを常に考えてた人だから、ミルコの考えやイメージが広く浸透したし、うまくいったんだと思うけどね。
斉藤　ミルコに限らずやっぱりスポークスマンやブレーンの存在って大切ですよね。ハリトーノフなんか、そういう存在がいないから伸び悩んでるところはありますし。昔はロシアン・トップチームということだけでハッタリが効いたけど。
ガンツ　このあいだのDREAMを観ると、残念ながら普通の強い選手になっちゃった感じ。リングス・ロシアの歴史の上にハリトーノフはいたから、実像より大きく見えてたんだけどね。
斉藤　パコージンさん追悼となった『DREAM・6』なんですから、着てくるのはゴールデングローリーのTシャツじゃないですよねぇ……。マイクでも何も触れなかったし、う〜ん、残念というか。それはこっちが勝手に幻想を抱いてるだけかもしれないけど。
ノブ　誰かアドバイスすればいいのに。
斉藤　だからガチンコといえども、トップファイターって、プロレス的演出がしっかりしてますよね。
ガンツ　それぞれが巨大な物語を背負ってるし、それをファンも共有できていた。ミルコとノゲイラ、ヒョードルが同じ時代に同じリングにいる。それだけで奇跡でしょ。彼らがやってることを過剰に熱をもって伝えるというか。そこに小川直也の参戦があったからこそ、PRIDEが単なる世界最強を決める競技大会に収まらない、いい意味で、プロレス的空間を作り上げた。ヘビー級3強時代に小川直也まで投入してるんだから、これもやっぱり奇跡だよ。
斉藤　そんな絶頂の時代があって、『週刊現代』の報道、フジテレビショックがあって暗黒時代が訪れるわけですけども。自分が編集長になったのが2007年の10月なんですけど、最初に飛び込んできたのが「PRIDEがどこかに買収されるかもしれない」っていう話なんです。
ガンツ　ホント、あの頃は毎日そんな情報が飛び交ってた。
斉藤　だから、PRIDEの末期の『kamipro』の役割というのは、PRIDEがいつ死んでもいいように煽っていた感はあったんですよね。もちろん存続するのが一番なんですけど、「いつ終わってもおかしくないよ」という原稿と、榊原代表の刺激的なインタビューを毎回やってた記憶があって。
ガンツ　そういう衝撃的なやつを連発して、心の準備をするようにしてた。
斉藤　最近やってる谷川さんの「視聴率が獲れなかったら……」インタビューもそうだけど、べつに打ち合わせしてるわけじゃないんだけど、そこらへんは"プロレス"をやってる感じはあったんですよね。……いや、こっちの勘違いかもしれないけど(笑)。
ガンツ　向こうもそういう話をしたいと思ってるし、こっちもそういう話を聞こうとしてるっていう感じだよね。
斉藤　かといってすべてを出すというのは、スクープとフライングの違いもあって難しいですよね。
ノブ　出さなかったら出さなかったで、ほかに抜かれるかもしれないしね。
斉藤　いきなり壊れないように壊していくというか。末期はそのボリューム調整が非常に難しかったですね。
ガンツ　報道しなきゃいけないけど、ストレートにやっちゃうとジャンルにとっても凄いダメージになるっていう。
斉藤　ちょっと話は戻りますけど、PRIDE崩壊のきっかけになった『週刊現代』問題ってやっかいでしたよね。
ノブ　まあ、『週刊現代』問題も、いま相撲界がやられてることに比べたら全然ヤワなのかなって気はしないでもないけど(笑)。まあ、与えた衝撃はとてつもなく大きかったけど。
ガンツ　でも、やっぱり性質は一緒だよ。
斉藤　あの〜、PRIDEがクロだったとしたら、どこもかしこもクロなんじゃねえの?　っていう気はしますよね。これ、言いすぎですか?(笑)。
ノブ　だから結局、誰が得したの?　っていう感じだよね。PRIDEが潰れて。
斉藤　大局的に見ると、誰も得してない

とにかく魔法がかかった時代でした
西島vsハントで爆発するんですよ

んですよ、これが。
ガンツ　単なるネタの一つでしょう。巨大なタブーに切り込むというより「ここなら、書いちゃっても大丈夫でしょ」っていう。正義でもなんでもないよね。
斉藤　なんかもの凄く迂闊なことをしゃべってる気はするけど（笑）。まあまあそういうことがあって、あの当時はいろんな情報が飛び交ってましたね。大晦日に再び地上波がつく、つかないという話があったときに、「DSEの名刺を持った人間が暴力事件を起こした」というデマが流れたり。
ガンツ　とにかくPRIDEに復活してほしくなかった人は多かったということだよね（笑）。
ノブ　しかし、なんであんな大変な時期にアメリカで2回も大会やってんだよね。鬼気迫るモノがあったけど。
斉藤　うん、やらざるをえなかったんでしょうね、あれは。あそこでアメリカに打って出なかったら、ホントに終わっちゃうっていう。しかし、よくやったよね、アフリクションですらあんなにドタバタしてんのに（笑）。しかもあれ、すべて日本からの持ち込みですよ。
ノブ　全部持ち込むっていう発想が凄いよね。普通はそこまでやらないでしょ！
ガンツ　ＰＲＩＤＥっていうソフトはこうじゃなきゃダメっていうこだわりが強い証拠だろうね。なくなったいまだから言うわけじゃないけど、それは素晴らしい選択だったと思うよ。だって、アメリカでしょうもないPRIDEをやられて、それをPRIDEシリーズって言われてもね。アメリカでやってもホントのPRIDEだったということは、誇りにすべきですよ。
斉藤　で、最後の六本木会見なんですが、あのときは『kami-pro』の発売日を遅らせて榊原代表のインタビューを掲載したんですね。
ノブ　確か遅れに遅らせて、会見翌々日に発売したんだよね。
斉藤　まあ、まったくの別件を探っているうちに当時広報だった笹原さんと話をして。「………いや、じつはもっと凄いことがあるんですけど、締め切りはいつですか？」「17日です」「その締め切りじゃあ、ちょっと難しいですね」というやりとりを経て、発売日を延ばした結果、インタビューが取れることになって。ただ、取材するまで具体的に何をするのかは絶対に教えてくれなかったんですよね。だいたい察しはついてましたけど。
ノブ　しかしさ、新生PRIDEってやると思ってた？
ガンツ　俺はやると思ってた。
斉藤　当時の周辺情報を聞くかぎり確実にやる気でしたよね。
ガンツ　だから、単純にロレンゾの認識不足だったんだろうね。
斉藤　詳しいことは12ページから書いてますけど、話を聞いてると、結局は実働部隊がUFCの人間じゃないですか。やっぱりUFCの人間からすれば、PRIDEに愛情は注げないですよね。
ガンツ　あんな凄い団体だったのにね。
ノブ　俺、PRIDE初期よりも末期のほうがファンに近い感覚だったと思う。業界の常識を覆すようなことばっかりだったから「これはスゲエ！」っていちいち驚いてたもんなぁ。
斉藤　自分は「どう終わるんだろうなあ……」っていう感覚でしたねぇ。あと、ここまで広がったものをどうやって畳むんだろうか？　っていう。

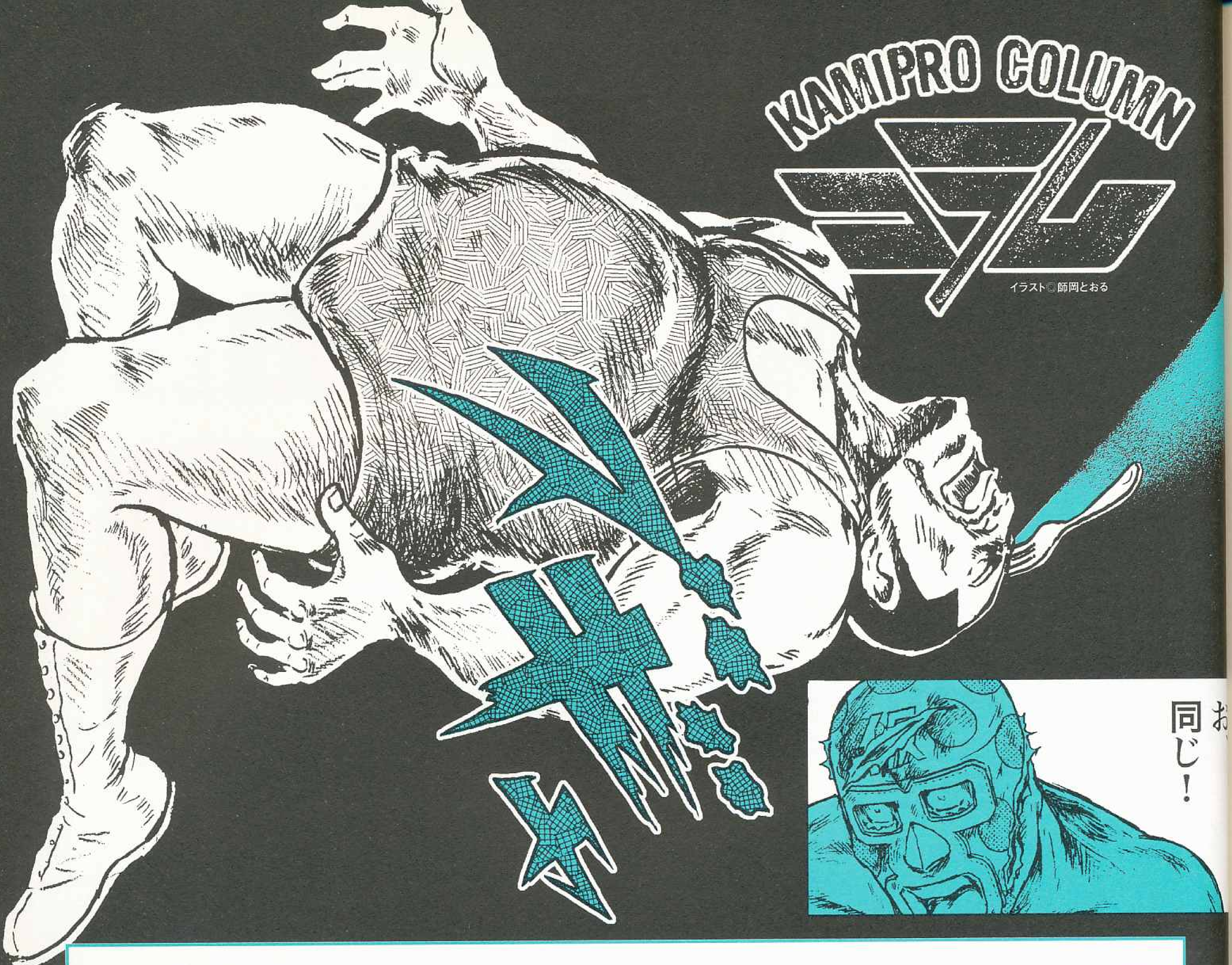




瀕死状態なのに、アメリカで二度にわたってイベント開催! しかも世界観直輸入!!　おそるべきこだわりを持ったイベントだった。こんなイベントがもう観られないなんて。いや、DREAMでも『戦極』でもいいからあの魂を見せてくれ!

ノブ　結局、畳めなかったっていうか、グシャって潰れちゃって。
斉藤　まあ、畳めるわけがないんですけど。『PRIDE・1』から『PRIDE・34』まで、濃密な10年間でしたからね。
ガンツ　凄い話だよね。新日本プロレスの上野毛道場から始まったものが、いまではUFCにまで融合しちゃってるんだからね（笑）。
ノブ　そう考えるとね、もう初期とは別もんだよね。どっかでプロレスじゃなくなっちゃったんだよね。
斉藤　それは時代の要請でもありますよね。あのままプロレス的なものがここまで膨れ上がったかというと、絶対にそんなことはないだろうし。いまのMMAにプロレス的な価値観がないかといえば、そんなことはないだろうし。魔王なんか確実にプロレス的手法で膨れあがってるじゃないですか。
ガンツ　そう、大刀光と同じだよ（笑）。
斉藤　それをちゃんと物語として、選手や関係者たち、もちろん我々マスコミも紡いでいくかどうかですよね。
ノブ　そこは錬金術というか、打ち出し一つで全部が変わる。
斉藤　ウチの魔法は、かけられた本人からすれば迷惑だったりしますけど。
ガンツ　魔王とか魔王とか、やっぱり魔王とかね（笑）。
斉藤　とにかく魔法がかかった時代でしたね。いまはハッキリ言って、DREAMも『戦極』も魔法はかかってないし、これからみんなでかけていかなきゃならないんですけど、でも、魔法がかかってると思ってる選手や関係者ってたくさんいるじゃないですか。
ノブ　いるねぇ。
斉藤　そういう方はぜひPRIDEという団体の歴史を振り返ってもらって魔法とは何かを考えてほしい（笑）。「あの頃はよかったねぇ……」の後ろ向きじゃなくて。
ガンツ　魔法って、ある一時期だけかかるんだよね。小川にしても、桜庭にしても。PRIDEって、その魔法が途絶えたことがなかったですもんね。
斉藤　西島洋介vsハントでさえ爆発するんですよ？（笑）。
ノブ　だからホントに、ドリームステージだった。
斉藤　じゃあ、最後にベストマッチを挙げます？
ノブ　大刀光vsグッドリッジかなあ。
斉藤　まだ言ってる（笑）。
ガンツ　俺はミルコvsノゲイラ、それかミルコvsヒョードルか。どっちだろうなあ、う〜ん、ノゲイラかな。
斉藤　自分は小川vsヒョードルです。あれは試合後のマイクを含めて凄かった。オーちゃん、マイクは持ってくれるなと思ったんですよ。絶対にカッコ悪いこと言うだろうなと思ったから。そこを含めてスリリングでしたね。しかも衝撃だったのが、オーちゃんにとって「ハッスルする」っていうのはホントにポーズをやることだったんだっていう（笑）。
ノブ　まあ、吉田秀彦戦でもそんな調子だったしね（笑）。
斉藤　それは軽くショックだったけど、頭を下げてカッコ悪いけどやってること自体がハッスルなんだから、オチはついてましたし。
ノブ　……俺、ちょっと、髙田vsヒクソンの1回目にしとく（笑）。
斉藤　いやいや、この10年間で、アナタの思いは大刀光に集約されてるという事実は、もう変えられません（笑）。
ノブ　でも、一番、気持ちが入ってたのは事実だからなあ。
ガンツ　肯定するのかよ⁉（笑）。
【08年10月11日／『kami-pro』編集部にて収録】





金ちゃんのどこまでやるの？


イラスト◎中川画伯

第28回 格闘技界のワセリン問題の巻

10月1日、パンクラスの後楽園ホール大会で、金井一朗選手と対戦したんだけど、判定負けでした。

なんか判定負けが続いちゃってるな。最近は、試合前に見る夢まで、いつも判定負けなんだよね。毎回、「また判定負けかよ～」ってガックリしたところで、パッと目が覚めて、「あ～よかった。夢だったか～」って、ほっとするんだけど、それがまた正夢になっちゃうんだよ（苦笑）。

つらいよね～、判定負けばっかりで。今回は5分2ラウンド制で、ちょっと時間が足りなかったな。あともう何秒かでもほしかったけど……。まあ、自分の悪いところはいっぱいあるから、それに気づかなきゃならないんだろうね。もう昔のように闘ってたら勝てないってことだろうから、スタイルを変えなきゃいけないとも思ってるんだけどね。

あとね、これはちょっと話がそれるけど、今回はマット界に言いたいことがあるんだよ。

日本では秋山（成勲）のクリーム塗布事件があってから、顔にワセリンを塗っちゃいけないことになってるんだけど、やっぱりワセリンは塗らなきゃダメだよね。

今回、俺は顔が3カ所切れて、血だらけになったんだけど、こんなのワセリンさえ塗ってたら、切れてないと思うんだよね。総合のグローブってエッジのところが硬くて、ただでさえ切れやすいのに、ギリギリまで減量して身体中の水分と油が抜けて肌が乾燥してるから、すぐに切れちゃうんだよ。ましてや、俺みたいに長年闘ってると、以前切れたところは切れやすくなってるから。今回なんかも全部、古傷が開いちゃってるからね。

リングス時代は、リングインする直前にレフェリーがワセリンを目の周りだけ塗るようなシステムがあって、UFCもだいたい同じだと思うけど、それをやらないとダメだよね。顔面パンチがある競技にとって、ワセリンって、ホントは「塗っちゃダメ」じゃなくて「塗らなきゃダメ」なものなんだよ。

もちろん身体にオイルやクリームを塗るのは論外だけど、目の周りにワセリンを塗ってもべつにすべらないからね。あれだけ顔にワセリン塗ってるUFCで全然問題になってないんだから、わかるでしょ？

規制すべきなのは、身体や脚にオイルを塗ることで、そこはしっかり監視しなきゃダメだけど、ワセリンはサブレフェリーかなんかに塗ってもらうのに限って、OKにするべきだと思うんだよね。

この前、アリスターとやったミルコなんかも目尻を切ってたけど、目尻が切れるっていうのは、パンチがかすって切れるんだよね。かするっていうのは、避けてるわけだから、ダメージはないんだけど、見た目の印象が悪いし、それで試合がストップされる可能性もあるんだから、これはよくないよ。

ましてや、いまの総合っていうのはボクシングの攻防が基本なんだから、ワセリンは塗らなきゃダメだよ。そういう点では、日本はルール整備の面で遅れてると思う。

まあ、だけど、これも秋山が身体中にクリームなんか塗って、ヌルヌルさせたからいけないんだけどね。

というわけで今回は、格闘技界のために、ワセリン問題について提言させてもらいました。

とりあえず俺自身は、これにめげずに頑張っていきますよ。次の総合格闘技の試合は決まってないけど、11月23日のIGF名古屋大会でプロレスの試合に出る予定です。まだ、契約を結んでないので、どうなるかはわからないけど。

では、また来月！

Hiromitsu Kanehara
◎本音炸裂コラムほぼ毎日更新中!
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/

DDT外伝 by高木三四郎社長
リングを捨て町へ出よう!?
第5回 はるな愛ちゃんとMIKAMI

今月のコラムのネタは、はるな愛さんとMIKAMI選手のラブロマンスについてなんかどうでしょう？」と『kamipro』編集部のチョロ氏より連絡があった。マッスル坂井に軽く、昔話で「MIKAMIが、いま売れっ子のはるな愛ちゃんに惚れてて、チョメチョメいろいろとあったらしい」という話をしたら、いつの間にかチョロ氏まで情報が行き渡っていたのだ（笑）。

ここまで読んでなんのことかわからないであろう読者諸君に簡単に説明すると、DDTが旗揚げした年（1997年）に行なわれたビアガーデンプロレスに、はるな愛ちゃんが世界初のニューハーフマネージャーとして参戦していたのだ。

当時は飯島愛ちゃんの事務所に所属していて、そこの社長と俺様が仲がよくて、「何かしらはるな愛ちゃんを露出できないだろうか」というところからきた企画だった。その、はるな愛ちゃんにMIKAMIが一目惚れをした、というところから今回の話につながるんだけど……。



今年7月に都内・赤坂サカスで行なわれたイベントでは"魔王"秋山成勲に「アッキー、付き合ってください！」と告白するも笑顔でかわされてしまった、はるな愛だが、はたして、MIKAMIとの恋の真相は!?

確かに当時MIKAMIは「はるな愛ちゃんと結婚したいんですよ。どうしたら結婚できますかね」とか「どうやらアチラの方々の結婚とは養子縁組のことらしいんですよ。自分、養子になりたいです」とか言ってたのは事実だ（笑）。

ただ、付き合ってたり、身体の関係があったかは定かではなかった。あくまで推測の域を出てなかったのだ。そう思ってたら10月3日付のMIKAMIのブログに真相らしきことが書いてあった。

「俺と春奈＝現：はるな愛ちゃん。当時はラブラブでした（いまも?）。会社とコアなファンには知られてたけど（爆）。『ふたりの愛ランド』よく歌ったなぁ。今度はリング上でデュエットしたりしてね（笑）。言うよね～(^^)v」

……。なんて売名チックな文章なんだろう（爆）。だいたい、はるな愛ちゃんの昔の芸名は春菜愛。間違っても春奈ではない。ちなみに会社が知ってたのはMIKAMIが一方的に惚れてたことぐらいだ。ラブラブかどうかはわからないけど、一方的なラブがあったことだけは確かだ。しかも決定的なことに、はるな愛ちゃんと再会したときにMIKAMIの話をしたら、最初軽くMIKAMIの存在を忘れていたのだ（笑）。

そんなわけで俺様は絶対にはるな愛ちゃんとMIKAMIのあいだには何もなかったと思っている。何もないのに何かあったかのごとく、さりげなく自己PRをする。MIKAMIとはそういう男なのだ。しかしMIKAMIって……言うよね～（爆）。

Sanshiro Takagi ◎DDTプロレスリングの社長兼レスラー。1970年1月13日、大阪府出身。趣味は高級時計収集。更新頻度もかなり多めで好評の高木三四郎の「新宿御苑ではたらく社長レスラーのブログ」アドレスは→http://blog.livedoor.jp/t346/

---

kamipro Handで好評連載中!

ニュース特選！★kamiの1週間

傑作編

大晦日は"石井祭り"!? 大相撲のあの問題がK-1 MAXに飛び火?

（10.7更新分より）

『kamipro Hand』で毎週火曜日更新の人気連載「ニュース特選！　Kamiの1週間」。このコーナーでは、プロレス&格闘技好きなカントリーロックバンド「アニーラッズ」のボーカルの松さんとギターの竹内さんが、1週間のマット界で起こった気になる出来事を語りまくり!　興味を持った方は『kamipro Hand』にレッツ・加入!!

スポーツ界激震の"石井祭り"とは!?

竹内　いや～、大変なことになったな！

松　ひさびさのビッグニュースだね。

竹内　でも、悲しいな。ずっとあのままでいてほしかったよ。

松　あと4年はとどまってほしいという気持ちがある人も確かにいるだろうね。

竹内　ホントだよ。いや～、残念だなあ。宇都宮の餃子像が移転作業中に転倒、真っ二つに壊れちゃって。

松　大変なことって、柔道金メダリスト石井慧のプロ転向じゃないのかよ！

竹内　そっちはやるのかやらないのかハッキリしないけど、餃子像はハッキリ壊れちゃってるんだから。

松　そういう問題かよ！

竹内　このタイミングで宇都宮の餃子像が壊れるとは、『ハッスル』栃木大会に何か悪いことが起こらなきゃいいが……。

松　考えすぎだ！

竹内　もしくは「プロレス界を根こそぎブッ壊す」と宣言した高田総統の破壊活動の一環なのかも。

松　プロレス界と餃子像はまったく関係ないよ！　石井のプロ転向問題で大騒ぎになってる中、餃子ネタで引っぱるな！　でも、ホントに石井はどうなるんだろうな。大晦日参戦はないみたいだけど。

竹内　やっぱり谷川さんがいろいろ考えてるんじゃないの？「僕が新しい館長をプロデュースしたい」って言ってたから。

松　それは石井違いだろ!!　俺が言ってるのは石井慧のほうだよ！

竹内　違うの？　せ～の、ダイナマイッ!!

松　やかましい！

竹内　大晦日はまさに『石井祭り』だな。

松　だから、大晦日参戦はないっつうの！　それに紛らわしい言い方するな！

大相撲とK-1MAXの意外な共通点とは!?

竹内　先週、もう一つ大きな話題といえば、10・1『K-1 WORLD MAX』決勝トーナメントだな。

松　魔裟斗が驚異的な頑張りで二度目の優勝。凄く感動したけど、ジャッジ問題でミソがついたのは残念だな。

竹内　まあ、いつものことですよ。

松　そういうことを言うんじゃないよ！しかし、魔裟斗vs佐藤嘉洋の判定が下ったあと、会場からは物が投げられた。

竹内　そして佐藤がマイクで「この八百長野郎！」と絶叫。

松　してないよ！　北尾か！

竹内　次の『週刊現代』で元・若ノ鵬による今回の件の証言が掲載される予定だ。

松　それは大相撲の問題だよ！　それに大相撲とK-1のジャッジは問題の質が全然違うよ。ただ、このままじゃ魔裟斗や頑張ってる力士がかわいそう。K-1も相撲協会もしっかりしてほしいね。

竹内　そうだよ。八百長やるならバレないようにやってほしい。

松　それじゃダメだろ！　八百長じゃないって言ってんだろ！

竹内　なお、『kamipro』編集部編、監修・マッスル坂井の単行本『八百長★野郎』は10月31日（金）発売です。

松　宣伝かよ！　いいかげんにしろ!!

GO FOR BROKE! 獄門記

No.1 Commentator MASA RU-CHA 第6回

オリンピックはエンジョイする場所じゃない！

――前回に引き続き、今回もマサさんがフリースタイルレスリングヘビー級の日本代表として、東京オリンピックに出場したときのお話をうかがいたいと思います！

マサ　あんまり思い出したくないんだけどな～。いい思い出ないよ。

――でも、若い頃のマサさんはオリンピック出場のことだけを考えてたんじゃないですか？

マサ　大学3～4年の頃はそうだったね。とにかく日本中がオリンピックのことばかりだったからさ。俺もひたすらそれを目指していた。だいたい東京オリンピックっていうのは、もともと1940年にやるはずだったのよ。それが戦争で中止になって、その後、戦争が終わってずいぶん経って、1964年にやっと開催されたものだからね。

――なるほど。待ちにまったオリンピックだったわけですね。

マサ　だから国を挙げてのイベントだったし、選手たちの気合いも凄かった。だから、あのときの日本選手団は凄かったよ。15個ぐらい金メダル獲ったんじゃなかったかな（正確には計16個で、アメリカ、ソ連に次いで世界3位）。俺はメダルに縁がなかったけどね……。

――また悔しさがよみがえってきましたか（笑）。

マサ　思い出しちゃったよ（笑）。とくにレスリングは一番たくさん金メダルを獲ったからね。あの頃はボクシングも強かった。重量級はいなかったけど、軽量級は強い選手がたくさんいたからね。



1964年の全日本アマチュアレスリング選手権97キロ以上級で、フリースタイル、グレコローマンの両方を制し、ついに東京オリンピック日本代表の座をつかんだときのマサさんとご両親のショット。ヒゲのないマサさんの満面の笑みが素敵だ！

――でも、メダル獲得はならなかったとはいえ、あの東京オリンピックの日本代表に選ばれたっていうのは、ご両親もかなり喜んだんじゃないですか？

マサ　そうね。それまでがどうしようもなかったから、よけい喜んだんじゃないの？　馬鹿息子よ（笑）。

――高校時代はかなりワルで鳴らしたらしいですもんね（笑）。

マサ　まあ、俺が親孝行できたのは、オリンピックに出たときと、レスリングで（明治）大学に進学したときぐらいよ。

――それ以外は、高校までは池袋の路上で暴れて、大学卒業してからは全米のリング上で暴れ回って（笑）。

マサ　そうそう（笑）。

――でも、先ほどオリンピック出場が決まったときのマサさんとご両親のお写真を見せていただきましたけど、そのときはホントに自慢の息子だったでしょうね。

マサ　そうかなあ（照れ笑い）。

――マサさんは今年の北京オリンピックはご覧になりましたか？

マサ　テレビで観たよ。でも、あんま観たくないんだよ。また思い出しちゃうから。

――メダルが獲れなかった悔しさを思い出しちゃいますか（笑）。

マサ　あれは忘れらんないよ。でも、オリンピックも変わったよな。自由な雰囲気でさ。いまはなんか入場行進なんかでも自由に笑いながら入ってくるじゃん。俺たちの時代は、ビシッと列を乱さぬ行進で「かしら～右！」よ。

――一糸乱れぬ軍隊スタイルの行進なんですね（笑）。

マサ　そうそう、帽子とって軍隊スタイル。いまはバラバラ歩いてるけど、あの頃は列を乱すことは許されなかったからね。「もし帽子を落としても、絶対に拾うな。そのまま行進しろ」って何度も言われてたから。そういう帽子を落としたら列の一番後ろで拾う係とかもいたからね。

――とにかく完璧な行進をすることが第一なわけですね。

マサ　そうそう。一糸まとわずね。

――マサさん、「一糸乱れず」です。「一糸まとわず」じゃなくて、「一糸乱れず」です。「一糸まとわず」じゃ、素っ裸になっちゃいますよ（笑）。

マサ　あ、そうか（笑）。だから、レスリングの練習だけじゃなくて行進の練習もやったからね。

――やっぱり国の代表として、そういったところも厳格だったんですね。

マサ　そう。俺たちは国を代表して、国のお金でオリンピックに行かせてもらってるわけだからね。だから最近の選手がよく言うじゃん。「オリンピックをエンジョイしたい」とか「楽しみたい」とか、あんな言葉が出てくること自体、俺は理解できない。

――ああ、オリンピックは楽しみに行く場所じゃない、と。

マサ　オリンピックは国を代表して勝ちにいく場所でしょ？　これから闘いに行くのに、楽しくやるの？　楽しく勝てたらいいけど、楽しんで負けてたらしょうがないじゃん。

――確かにそうですね。

マサ　おそらく欧米人が使う「エンジョイ」って言葉をそのままはき違えてるんだろうな。連中はとにかく勝つためにはなんでもやる、勝利至上主義なんだよ。その裏返しで「エンジョイ」って言葉を使ってるのに、日本の選手はそれをわかってないのがけっこういるんじゃないの？

――そうかもしれないですね。

マサ　オリンピック選手っていうのは、試合に出るために億単位で国のお金を使って海外に行って、いろんな人の世話になって出るわけでしょ。少しでも上の記録を出したい、一回でも多く勝ちたいって思わないのかな。楽しむために税金使われちゃ、日本の皆さんもたまったもんじゃないでしょ。

――マサさんの時代は「出るからには絶対に勝て！」って感じだったんでしょうね。

マサ　そうね。「負けたら坊主。下の毛まで」それが約束だったから、そのとおりやったよ。

――マサさんは勝負にこだわったからこそ、いまだに東京オリンピックが悔しいんでしょうしね。

マサ　絶対に勝つって気持ちでやってたからね。でも、国を代表して世界と闘うってそういうもんでしょ。それは、いまも変わらないと思うけどね。中途半端な気持ちじゃ勝てないよ。それをわかったうえで、若い選手には頑張ってほしいね。

――なるほど。東京オリンピック代表からのエールということで。今日はありがとうございました！

Masa Saito　◎60年代末～80年代前半、アメリカンプロレス黄金期を腕一本で渡り歩いたプロレスラーの中のプロレスラーにして、男の中の男。カルピスが大好きだが、いまは甘いものを控えている。



イラスト◎ゴローちゃん

永遠の40歳・つるセコ中年こと捉ポルシェの『萌え萌え女々苑』。今回のゲストはユニオンプロレスのチェリーさん！　永遠の何歳なのかわからない、年齢不詳美女レスラーの実年齢&その他の謎に迫る！

捉　チェリーさんは小2の頃からプロレスラーを目指してたってことですが？

チェリー　普通は小学生って、歌手とかお嫁さんになりたいとか言うけど私一人、「絶対プロレスラーになる」って言ってて。そのために部活で器械体操をやったり、柔道も習ってたんですよ。

捉　柔道は本格的にやってたんですよね。

チェリー　高校は柔道推薦で入って、卒業したらプロレスラーになると決めてやってたんですけど、17歳のときにケガをしちゃって諦めざるをえなくなってしまって。

捉　練習はかなり厳しかった？

チェリー　はい。ケガしても治療に行く暇もないからドンドン悪化して、歩くのも困難なぐらいヒザが悪くなって。こんな身体でプロレスのテストを受けても、スクワットもできないと思って一度諦めました。ホント、柔道が地獄の入り口で（笑）。優勝しても怒られましたから。

捉　それは、試合内容が悪いとかで？

チェリー　気合いが入ってないとか、投げ方が悪いとか。あと、なぜか下着まで注意されたり（笑）。

捉　「色気づいてんなよ！」と（笑）。

チェリー　いまだったら社会問題になるようなことも平気でありましたよ。相撲とかで取り上げられてるじゃないですか。

捉　かわいがりですか？

チェリー　あんなのザラだったんで。私と同い年は誰もいなくて、女子は先輩だけだから、それこそ毎日かわいがりで。それがいま試合で役に立ってるのかなぁって。顔とか殴られたり蹴られたりしても全然大丈夫なんですよ（笑）。

捉　俺なら3日で逃げる自信があります！　あと、チェリーさんといえば、年齢を非公開にしてるおかげで、年齢ネタでよくいじられてますよね。

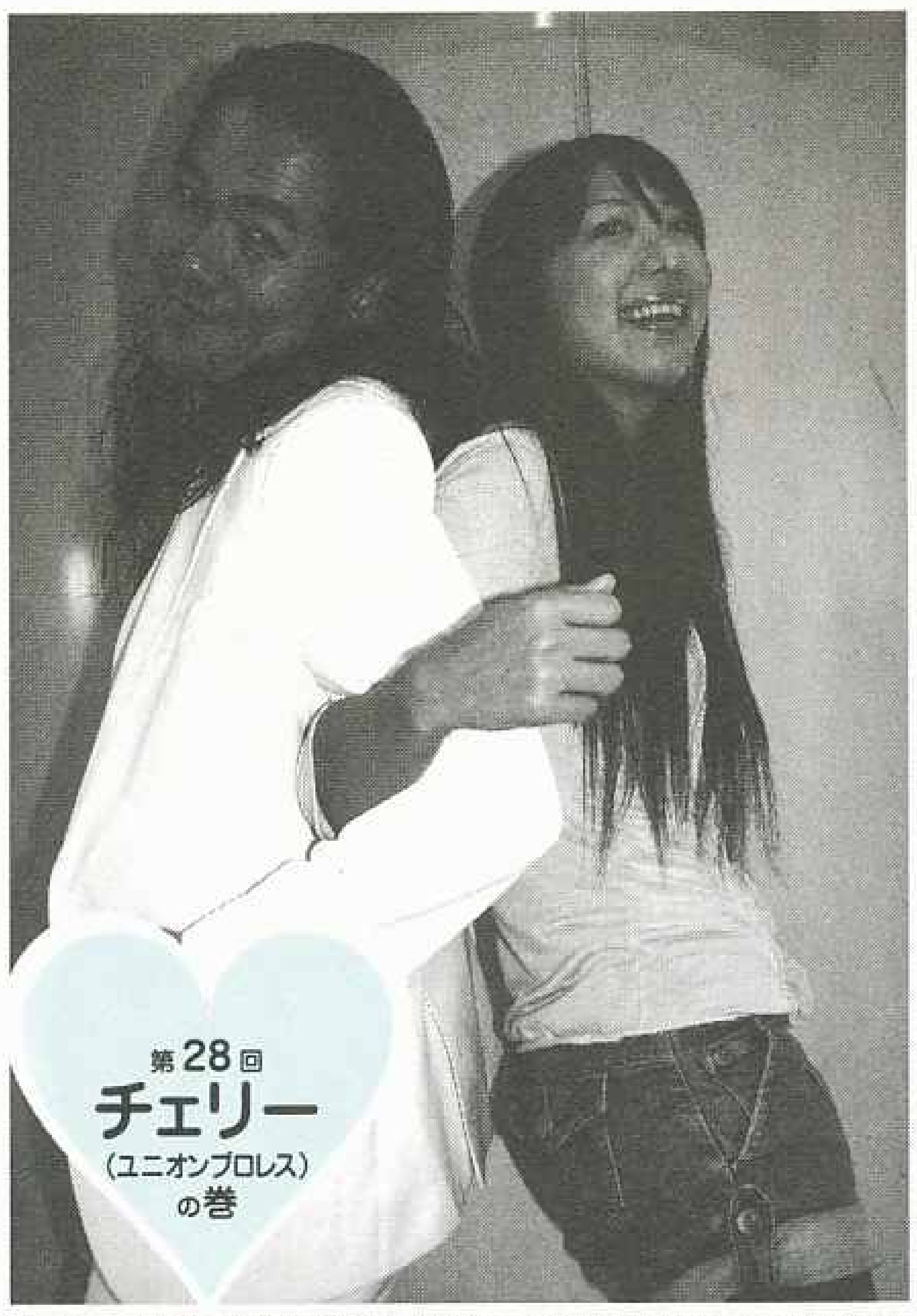
チェリー　女子プロをやる前に、キャットファイトをやってたんですけど、当時働いていたマッサージ店が格式あるところで、店バレを恐れて本名と歳を非公開にしていたのが、そのままになってるだけなんですけどね（笑）。

捉　でも、店バレはもう関係ないんじゃないですか？

チェリー　いまはもう大丈夫だと思うんですけど、せっかくここまでファンタジーが浸透したんで、そのままにしておこうかなって（笑）。

捉　何年か前のアンケートを見たら「復活してほしいテレビ番組」に『元気が出るテレビ』、「着メロは？」という項目で「原田知世」と答えていて……。あの、もしかして、いま40歳の俺とあまり歳は変わらないんじゃ？

チェリー　いや、そこまでは（笑）。よく男子レスラーとかが投げ技をするときに「チェリー○歳！」とか言うんですけど、笑いを取れると思ってけっこう高めの年齢を言われるんですよ。でも、観てる人はそれがホントだと思っちゃうみたいで（笑）。



チェリー■本名・年齢・出身地、非公開。5月14日生まれ。小さい頃からプロレスラーを目指すも紆余曲折ありキャットファイト界で活躍。マスクド・チェリーなるリングネームでキャット界初の4冠王に輝く。04年6月にDDTで念願のプロレスデビュー。その後、ユニオンプロレスに移籍し、現在は息吹をはじめ、さまざまなリングで活躍中。157cm、52kg。
ブログアドレス→ http://blog.livedoor.jp/cherrypafe55/

捉　小2からプロレスファンだそうですけど、誰のファンだったんですか？

チェリー　それを言うと年齢がバレちゃうんですけど（笑）。

捉　そこまで隠しますか！　お母さんに頼んで会場に連れていってもらったときは、吉田万里子選手がまだ若手で、水色のコスチューム時代だったとか。

チェリー　そうです。白の帽子とか被ってたときで。あと私、ブル中野さんのデビュー戦とかも観てますよ。まだ本名の中野恵子さん時代の。

捉　そ、それはかなり子どもの頃の記憶だとしても……ファンタジー、大丈夫ですか？

チェリー　そうですね（笑）。でも、ブルさんが急に頭を半剃りにして、子どもながらにビックリした記憶がありますね。

捉　中野さん、半剃りにしたときはさすがに泣いたらしいですよ。やっぱり、髪は女の命ですからね。

チェリー　私も高校時代は頭は五分刈りでしたよ。

捉　エッ!?　女子なのに？

チェリー　はい。ウチの学校は試合のたびに気合いを入れるってことで髪を切らなきゃいけなかったんで。

捉　気合い入りすぎですよ！　伊調千春ぐらい？

チェリー　ほとんど角刈りですね。水前寺清子みたいな（笑）。

捉　これまた年齢を感じさせるたとえで（笑）。そういえば以前、家族構成を聞かれて、「父（ヒロシ）、母（ガサツ）、姉（鬼畜）」って答えたそうですけど……家族、仲悪いんですか？

チェリー　普通ですよ。姉はホントに鬼畜ですけど。

捉　そんなにひどいことを？

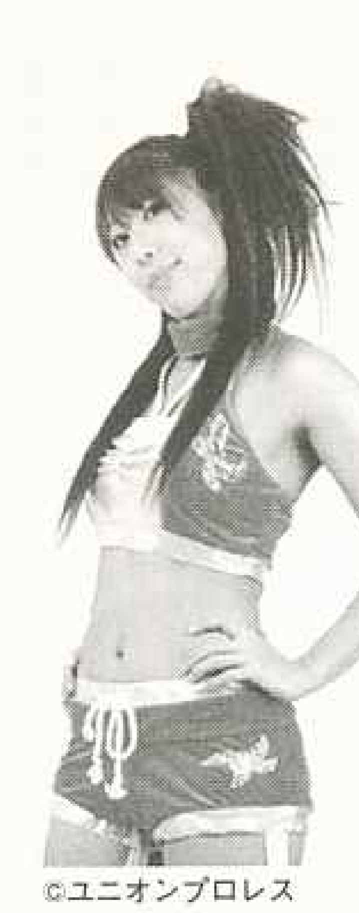
チェリー　お姉ちゃんとは3つ離れてるんで、子どもの頃、力じゃかなわないじゃないですか。それをいいことに凄いストレス解消されまくっていて。腕を脱臼させられたりとか。

捉　家庭内にもかわいがりが！

チェリー　子どもたちだけでバスに乗って、駅の近くのデパートに出かけたんですよ。で、行きのバスに乗る前に、意味なく腕を取られてアームブリーカーのかたちで「バキッ！」ってやられて。

捉　猪木vsジェット・シンだ！

チェリー　私はちっちゃい頃から凄く打たれ強くて、注射とかされても転んでも泣かない子で。さすがに脱臼は凄く痛かったんですけど、それでも泣かなかったんですよ。脱臼したままバスに乗ってデパートに行って、しかも帰りは置いていかれて、まだ小さいのに一人で帰ってきましたからね。脱臼したまま（笑）。


©ユニオンプロレス

ご覧のとおり、露出度の高いコスチュームで注目を集めているチェリー。お尻が見えるきわどいバージョンもあるが、本人は「それでお客さんに覚えてもらえれば。見たくない人には申し訳ないですけど」と、なぜか恐縮。

捉　それは鬼畜です！

チェリー　家に帰ってから親が私の腕を見て「エ～ッ!?」って驚いてましたからね。あと、へんな沼みたいなところで一緒に歩いてたら、お姉ちゃんがズブズブって足から落ちたんですよ。そしたら、いきなり「キャー！」って私の肩を押して、自分だけ助かって、私は沼の中に潜っちゃったこともありましたね。

捉　底なし沼！　底が丸見えじゃないほうの！

チェリー　なんとか頑張って抜けたんですけど、「靴が中に埋まっちゃって取れない！」って叫んでるのに、置いていかれたりとか。数え上げたらキリがないぐらいで。ホント、女子プロレスラーになったら、いつかやっつけてやると思ってて。

捉　じゃあ、お姉ちゃんをリングに上げちゃいましょう！

チェリー　そうしたら、公に成敗できますからね。いつか、必ずお姉ちゃんをやっつけてやります！

捉　目標がおかしな方向に！（笑）。

Okite Porsche◎捉ポルシェ■捉ポルシェのバンド『ロマンポルシェ。』がまたまた北海道ツアー！　12・6（土）旭川カジノドライブ（0166－26－6022）、12・7（日）札幌HALL SPIRITUAL LOUNGE（011－221－9199）。その他の情報は捉ポルシェブログを死ぬ気でチェック！【http://blog.excite.co.jp/porsche/】



イラスト◎エロコエロオ

第8回 川田さんと『TOCHIGI』から広がるハッスル地方LOVE

Yuzuru Sato ◎1976年、静岡県生まれ、千葉県育ち。クラブミュージックなど音楽の解説を書いたり放送作家をやったりしています。山本篤さんのKIDムーヴに悶絶。所さんの物語は少年マンガみたいな展開になってきました。

ハッスルGPの決勝戦が栃木で本当に開催されるようです。

振り返ればハッスル栃木開催の機運が妙に盛り上がってしまったのは、川田さんが『ハッスル・エイド2008』で、『TOKIO』の替え歌『TOCHIGI』でド派手なパフォーマンスを見せたあたりから。

『TOKIO』はジュリーでおなじみの沢田研二さんの代表曲で、カブキロックス「O・EDO」やスズキ「エリオ」のCMなど、替え歌で使われる定番ネタ。ただ、調べていくと、『TOKIO』が『TOCHIGI』になったのには、替え歌の枠を越えた深い意味があるようです。

糸井重里による『TOKIO』の歌詞は、「欲しいなら何もかもその手にできるよA to Z」というくだりが示すように、高度経済成長からバブル経済に転換する時代やデカダン化する東京を見事に切り取った「中央重視」の曲と言えます。

一方、『TOCHIGI』は一聴するとはなわの『佐賀県』と同じ自虐系ご当地ソングに思えますが、じつは自虐的な部分は「住みたくない県第3位」「どこにあるのかわからない」「影の薄さは日本一」の3点のみ。それ以外は栃木の名所名物をわかりやすく紹介する、ツンデレで言えばデレ過多な「地方重視」の曲です。

つまり『TOCHIGI』は中央重視の『TOKIO』を、全国の教習所と提携した「ハッスルどライヴ」など、ハッスルが目指す地方重視という真逆の内容に変換。それを地方を大事にした馬場イズムの継承者である川田さんが歌い、ハッスルの今後の方針を示唆するという、味な仕掛けが施された曲だったのです。

さらに川田さんが『TOKIO』をネタとして選んだのも偶然ではありません。というのも同曲は、ジュリーの本質である「変化」を体現する曲であり、それは川田さんの歴史に通じているからです。

ザ・タイガース、PYG、ソロ、そして『太陽を盗んだ男』での怪演やパルコのCMのヌード披露など、ジュリーは常に自分を変え、人気を獲得してきました。中でも『TOKIO』は阿久悠さん、大野克夫の歌謡コンビをメインから外し、電子音を用いたロック路線へ大胆に移行した同名アルバムの象徴であり、電飾&パラシュートといった派手な演出を施し、元イエローモンキーの吉井和哉さんなどにも影響を与えるなど、アーティストとしての評価を確立した楽曲なのです。

一方、川田さんも保守的な全日の中で「籠の中の鳥は羽ばたけない」と宣言し、当時Uインターの高山とバトル。さらに分裂後の全日では新日との対抗戦の軸となり、ハッスルでは歌と踊りを披露するなど積極的に自らを変化させていきます。

そんな二人の性格は「ファンに貢いでもらうような汚れには絶対ならない」(ジュリー)や「エンターテインメントはどれだけお客さんに個性を見せられるかってこと」(川田)という発言にもよく表われています。つまり二人はファンを大事にしつつ、『俺だけの王道』を行くわがままなエンターテイナーなのです。

ところで、地方重視は素晴らしいのですが、交通の便も悪い宇都宮市清原体育館での開催はやはり博打です。ただ、その一方で音楽業界では「栃木、群馬、福島で受けるCDは全国でヒットする」なんて法則もあるそう。最近モヤモヤ気味の『ハッスル』ですが、はたして栃木でGPの決勝開催は成功するのか。そう、ジュリーの曲になぞれば、ハッスルはまさに「きわどい季節」を迎えているのかもしれません。



鉄火場ゴングショー 賭博とは極上のプロレスである

田中太陽の八本場

力道山と競艇

Taiyou Tanaka ◎日本プロ麻雀協会所属のフリープロ。"観戦記の鬼"として一部の麻雀ファンのあいだで根強い人気を誇る。

「強い者は、いつも寂しいものだ。人生は勝負だ」

日本プロレス界の父・力道山はそのように語ったという。今日においてはこの"強い者"という定義もさまざまなものになりつつあるが、昭和のガス灯時代にはもっと純度の高い概念であったに違いない。そんな中、リングの内外を問わず"強い者"であり続けた力道山に日本中が魅せられたわけだが、当人が感じていたのはやはり寂しさだったということか。

今昔を問わず、頂点に立つ者は常に孤独なのである。プロレスは単純な勝ち負けのみで語られるべき世界ではなく、力道山の"強さ"もそのように単純なものではないが、この達観は一流のギャンブラーにも通ずるものがあるだろう。

さて、その力道山だが、じつは意外なところで賭け事の世界と関わっている。漫画『モンキーターン』のヒットや女性選手の台頭などで近年にわかに注目を集めているジャンル、競艇である。

競艇発祥の地は、長崎県大村市といわれている。これには諸説あるが、黎明期の競艇選手たちがみな大村養成所出身で、このころ競艇といえば大村か、琵琶湖というのが定説であったようである。

そしてこの大村市は、朝鮮から日本に渡ってきた力道山が最初に住んだ土地としても知られている。ここで金信洛(キム・シルラク)は百田家の養子となり、そこからすべてが始まったのである。

つまりプロレスと競艇は、ともに長崎県大村市から生まれたジャンルといっても過言ではないのだ! この運命的な偶然が何をもたらしたかというとくになにももたらさなかったのだが、昭和30年ごろ大村競艇にて『力道山賞争奪戦』というものが開催され、そこに力道山本人がプレゼンターとして来場したりはしているようだ。当時の力道山といえば国民的英雄であり、また競艇自体もまったく知られていない競技だったことから、ゆかりの土地でなければこのようなイベント開催は困難であったと思われる。

競輪狂の豊登とは異なり、あまりギャンブル関係の話は残っていない力道山だが、じつはこのようなかたちで種目そのものの普及に貢献していたのだ。いまでもメジャー競技とまではいっていない競艇だが、選手の平均収入はあらゆるプロスポーツの中でも上位といわれるほどの一大ジャンルにまで発展。その背景には力道山の後押しがあったかもしれないし、なかったかもしれない。たぶんなかった。

ところで長崎といえば、原爆の被災地である。原爆被害者の鎮魂、恒久の平和を願ってつくられた平和公園と、平和記念像の存在は誰もが知るところと思われる。右手を上空に、左手を水平に伸ばした像のポージングはたいへん印象的だが、じつはこの平和記念像、力道山がモデルといわれているのだ。

筋骨隆々に彫りあげられた像の姿は、なるほどプロレスラーの鍛えぬかれた肉体を連想させる。よくよく見れば振り上げた右手が空手チョップの構えに見えなくもないが、これはまったく関係ないばかりかそういう趣旨のデザインですらないようだ。右手は原爆の脅威を、左手は平和を表わすなど、ポーズにもいちいち意味があるとのことである。

戦後の日本人は、外国人をバッタバッタとなぎ倒す力道山の活躍に胸躍らせたというが、一方でその"強さ"は、平和を託されるに足るものでもあったということか。英雄であり平和の象徴であり、ときには競艇のプレゼンターでもあった力道山は、やはり偉大すぎるにもほどがあるのであった。

ショー・ミー、ショー・ミー、ロンリー、ベイビー、ヘイ！ というわけで、ユーたち、元気かい!?　オレは元気いっぱい60億分の1って感じだぜ!!　60億分の1といえば、この前、ヒョードルが日本に来てたんだって？　オー・マイ・ゴッド……。ちょうどその頃、オレは寄生虫博物館に行ってたんだよ……。でも、オレは寄生虫に教えてもらったんだ。そんなことで、ウジウジするなってな。……ウジ虫だけに、ウジウジ……プ、ププッ!!（笑）。ユー、いま「なかなか腕を磨いたな」と思っただろ!?　アッハッハッハ！　ダジャレ教室の成果をいきなり発揮しちまったぜ！　じゃあ、気分のいいところで始めるとするか！　レッツラ・ゴー！



127号へのお便り紹介

ダンプ松本の記事がよかった。あの記事はヒールの悲哀が感じられてとてもおもしろかった。

【大阪府・山崎知恵さん・主婦・40歳】

D ダンプの記事はオレも読んだぜ！「プレゼントをその場で踏みつけろ！」って話だろ？　だから、オレもファンの娘からもらったプレゼントをその場で踏みつけてやったぜ！　ヒッヒッヒッヒ。でも、ぶん殴られて流血しちまったけどな……。

梨元さんのインタビューがおもしろかった。「政治家を見たら、みんな悪いヤツだと思ったほうがいい！」という部分は、いまの政治を見ていると本当にそう思う。この不景気をどうにかしろ！

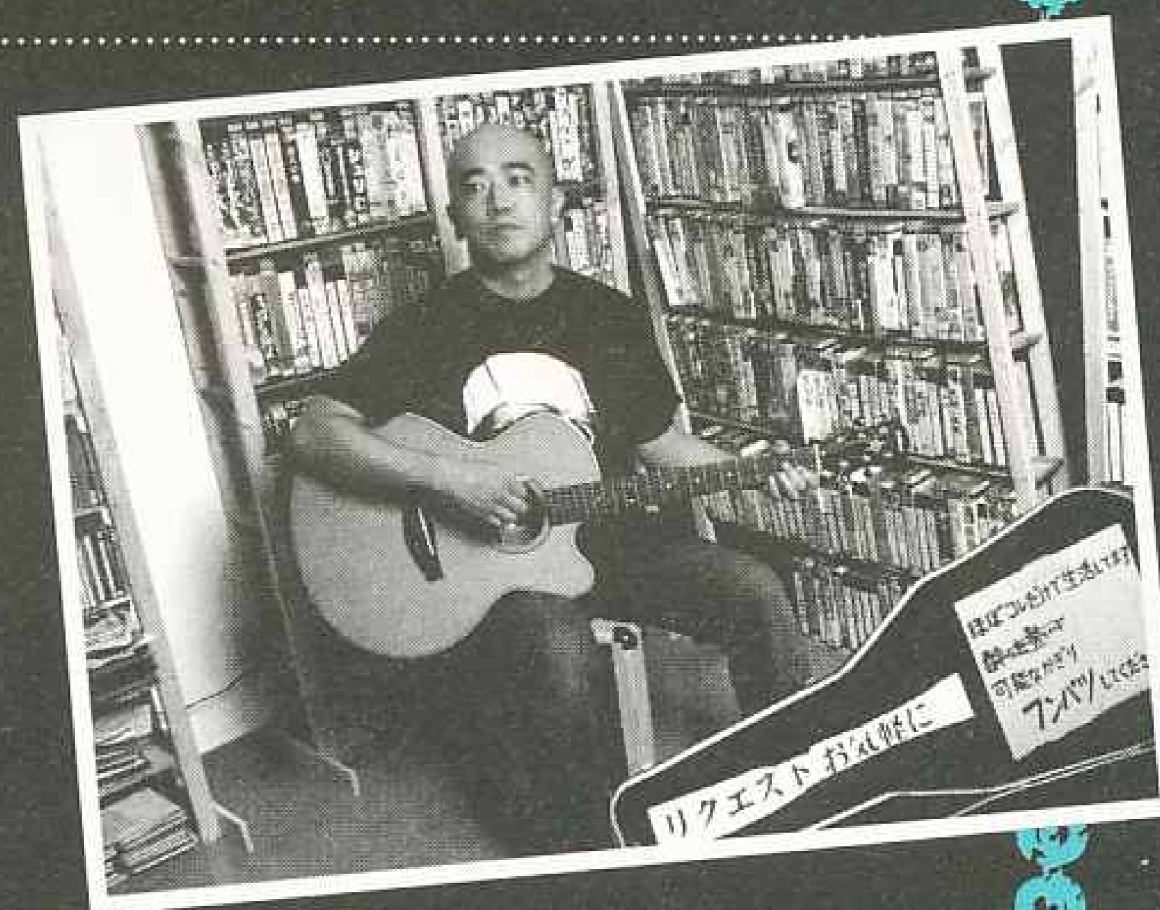
【東京都・あのなのなさん・フリーター・22歳】

D 不景気といえば、この前、財布に20円しか入ってなかったから超あせったぜ。だって、チロルチョコも買えなかったんだからな。でも、オレはマイ・マザーから常々言われてるんだ。もし、困ったことがあったら、「ボ、ボ、ボクはおにぎりが好きなんだなあ」って言えってね！

ミスター高橋のインタビューがおもしろかった。「本を出して後悔？　あんた、バカじゃないの？」ってところが素晴らしかったです。ここが一番ミスター高橋の感情が見えたところじゃないかなと思ったからです。

【群馬県・ズッパさん・会社員・40歳】

D 感情が見えただって!?　生意気なこと言いやがって!!（怒）。人間、見透かされたときが一番腹が立つんだよ！　オレもこの前「オマエ、本当は日本人だろ？」って言われて怒り狂ったからな！　だってよお！　オレ、レゲエマンなんだぜ（小声で）。思わず、「あんた、バカじゃないの？」って言ってやったぜ!!



ヒール特集はどれもおもしろかったです。中でも、外山恒一氏へのインタビューは強烈でした。「革命」や「ファシズム」なんて単語をサラリと（たぶん）話す様は想像の範疇を越えております。知人になりたくないタイプです。

【栃木県・稲葉修さん・会社員・35歳】

D 知人になりたくないタイプだって？　それはあんまりだぜ、ボーイ……。オレもよく言われる言葉だから、どんなに傷つくか、コーイチの気持ちが痛いほどわかるぜ……。それだったら、オレのどこがダメなのかをハッキリ言ってほしいぜ。なあ、ランペイジ弟！　教えてくれよ!!

ヒール特集の中の〝いい人〟天山広吉選手のインタビューがおもしろかったです。GBHの分裂の理由が血液型にあったとは驚きです。次回は天山選手の奥さんの登場に期待しています。

【兵庫県・春名義行さん・会社員・41歳】

D いま、日本では血液型ブームらしいな。でも、そんなんで人生を決めてしまっていいのかと、オレはいつも思ってる。でもよお、やっぱりどうしようもないことがある場合もあるんだ。オレはいっぱい蚊に刺される。A型だからな……。

127号はボノちゃんのインタビューが最高だった。ボノちゃんもいろいろ悩みながらプロレスしてるんだなということがわかった。この前の坂田亘戦は、そんな鬱憤が見え隠れした試合だったと思う。『ハッスルGP』はボノちゃんに優勝してほしかったなあ。

【埼玉県・ほのボノさん・OL・30歳】

D ボノちゃんもいろいろ悩みながら成長してるんだな……。泣けてくるぜ！　それにしても、そんな純粋なボノちゃんに対して目の輝きを失なってるヤツがいるなんて!!（怒）。オレはそっちのほうが許せない!!

郷野聡寛の『戦極』インタビューがよかった。横田一則がハゲであることが、いかに本人と郷野にとって大事だったのかということがわかった。確かに、よく見るとハゲだと思う。ちょっと髪

カミスペ127号
おもしろかった記事
RANKING

NO.1 亀田興毅

NO.2 ダンプ松本

NO.3 江夏豊

NO.4 天山広吉

NO.5 語ろう！ 北岡悟

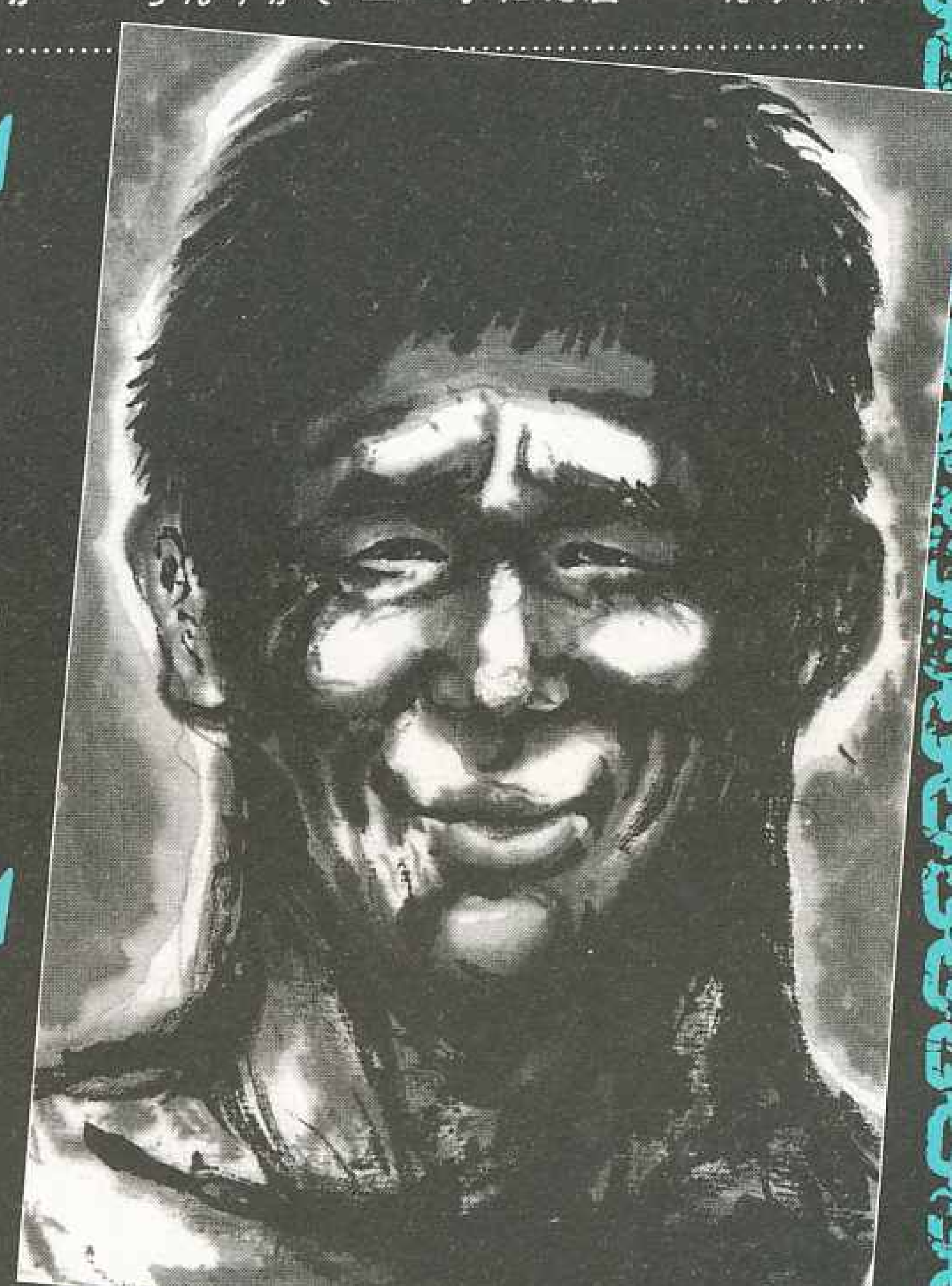
ワースト1位
ターザン山本!×夢香姫

ハッキリ言って、ヒール特集はオレにとってもおもしろかったぜ！　これを読んだ中での一番のヒールはブッチギリでミスター・テンザンの嫁だな!!　あと、今回は特別にワースト1位も載せといた。その理由は、『kamipro』読者なら察してくれるよな！　クックックック……。

今月のトップ賞！



大阪府・剣洋人さん／こっちも凄いじゃないか!!　いったい全体、どーしたらこんなに忠実に人物描写ができるのか、オレにも教えてくれ～!!



大阪府・剣洋人さん／こ、こ、これは!!　ヒロトは『kamipro』の企画意図をガッチリわかった上でサトルを描いたということがよくわかるぜ！　ユーはジーニアスだ!!

今号の
読者ペイジ・ジャクソンは、
なぜかターザン山本!×夢香祭りだったな……。
次からは気をつけるぜ!!



ファンキーでクレイジーなアイツが
読者のメッセージを
Check it out!!
"読者ペイジ"
ジャクソン

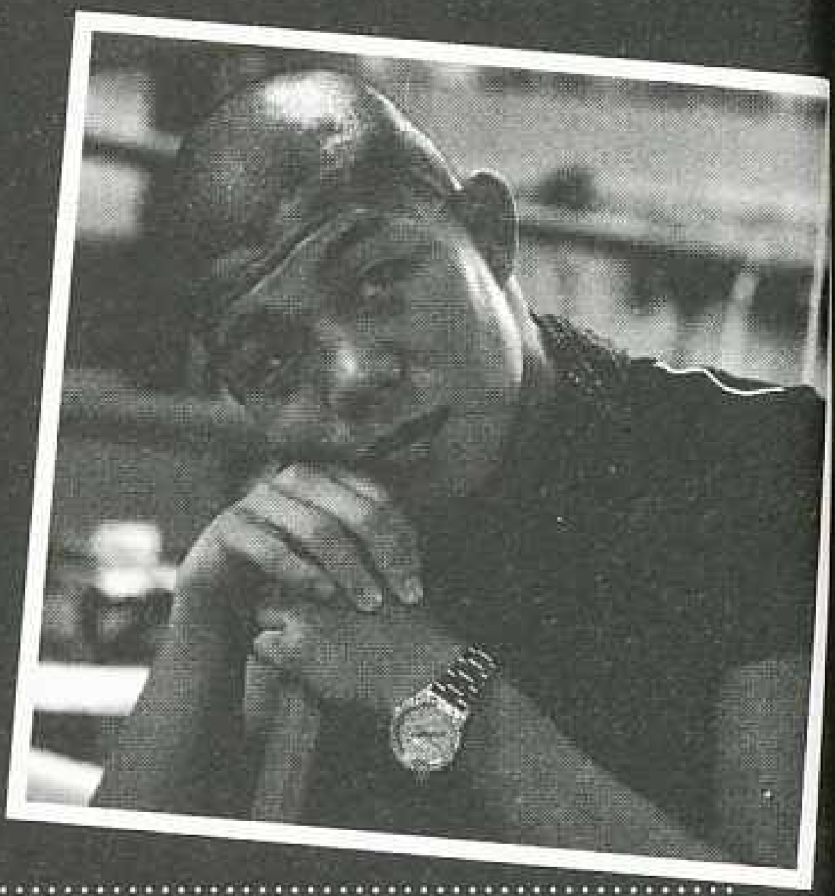
を伸ばしたほうが、よりわかりやすいのではないかと思うので、ヒマなときに検討してもらいたいと思う。
【福岡県・やたらめったらさん・フリーター・35歳】

D 確かに、ハゲってのは髪が伸びてるほうがわかりやすいからな！　カズノリってヤツも、ハゲキャラでいくんだったら、そのくらいやったほうがいいぜ！　TBS『あらびき団』に出てくるホノカ・アン（安穏野香）ぐらいのインパクトを待ってるぜ!!

語ろう！　北岡悟を読んで、DEEPで北岡さんがピットブル・モンテイロに勝ったあとのマイクについて、解説席にいた青木さんが「北岡さん、マイク長すぎ……キモいですね」って言ってたのを思い出しました。でも、北岡さんはキモくないです。みんな、早く慣れてください。
【千葉県・高橋朋子さん・販売員・29歳】

D サトルは、もうオレの中でも弾けまくりだ!!　あのマイクパフォーマンスはまさにゴッドの領域だ。お客の声援も考慮に入れて、マイクとマイクの間隔に気を使うなんて、サトルはマイクをするために生まれてきたようなエンジェルだぜ！

石井慧さんの「五輪のプレッシャーなんて、斉藤先生のプレッシャーに比べたら屁のツッパリにもなりません」とか「ゆとり教育について、ガツンと言いたいですね」とか、いままでの柔道家にない、ユニークなコメントがとてもおもしろかったです。私はラッシャー木村さんのマイクパフォーマンスが好きなんですが、今度、特集してほしいです。
【北海道・鎌田周一さん・自営業・39歳】



D まったくサトシってヤツは、人騒がせなメダリストだぜ。でも、言ってることは確かにおもしろいよな。オレも言ってることはおもしろいと思ってるんだが、これが、あんまり笑いはとれないんだ。ロンリー、ベイベーって感じだな。

見た目は異様なのに、コメンテーターの中で最も常識的かつまともなことを言っているデーモン小暮は凄いと思った。生活感を意図的に抑えているプロ根性にも感心。あと、ひさしぶりに西島洋介がインタビューされてるなと思ったら、外山恒一だった。
【宮城県・毒柴さん・変態宮城支部長・37歳】

D 世の中、奇抜な格好をしているボーイズのほうが、いくらかマシって話だ。だから、普通の格好をしているヤツには気をつけろ!!　というわけで、オレはわりかしまともだって話だな。アッハッハッハ!!

長州力さんのインタビューがおもしろかった。長州力さんのプロレスに対する見解を拝見できてとてもおもしろかったですし、「おまえ、そんな話何十年しゃべってんだよ！」とか「おまえがしゃべったからよみがえったじゃねえか！」とか、ときどき長州力さんがキレるところもとてもおもしろかったです。
【北海道・鎌田周一さん・自営業・39歳】

D チョーシューというヤツは、「何コラー！　タココラー！」っていうヤツだろ？　オレも一回、チョーシューと「コラ、コラ」言い合ってみたかったんだ。

でも、それはきっと実現しないから、とりあえずこないだ渋谷のモヤイ像に向かって言ってみたけど……、まったくおもしろくなかったぜ!!

亀田興毅の人間宣言インタビューがおもしろかったです。デビュー当時からファンだった亀田選手が、この頃はすっかり悪者でしたが、この記事を読んでやっぱり彼は素直だと痛感しました。ボクシング界のことをマジメに考えているということも感じました。
【神奈川県・吉田知枝さん・主婦・48歳】

D 人間宣言ってのは穏やかじゃねえな！　カメダはそんなにひでぇヤツと思われてたのかい？　人間ってヤツは、あんまりだぜ!!　そりゃ、ベムだってベロに「人間にはならないほうがいい」って言うわな！

『kamipro』リニューアル大賛成派です。しかも、装丁が変わって読みやすくなりました。これからも「守るだけでなく、創り出せ！」という感じで、プロレス界を根こそぎブチ壊すような雑誌にしてほしいと思います！
【タナさん・会社員・33歳】

D 「守るだけではなく、創り出せ！」というのはいい言葉だな！　気に入ったぜ!!　オレの中でNo・1の格言は「七転び八起き」だったんだが、一気にトップに躍り出たな!!



最狂のヒールカップル、ターザン山本！×夢香姫がよかった！『kamipro』No・127に登場した数多くのヒールの中で、夢香姫は関わりたくないヒールNo・1です。しかも、名前から夢にもでてきそうで、毎日、ぶるぶるしながら生活しています。ターザンは全然怖くないんですけど、キモイです。
【大阪府・肘枕さん・大阪○○○に内定・26歳】

D ビーナス・ユメカといえば、ますます夢に出てきそうなイラストが届いてるぜ！　ユーは絶対に見ないほうがいいな!!　オレはもう手遅れだ。

目撃情報が止まらない！

★9月28日の『戦極～第五陣～』の日の朝5時頃に、アリスター・オーフレイムが六本木の交差点で外国人女性とタクシーに乗るところを目撃しました！ ボクも別のタクシーに乗ってしまったため、彼女だったかどうかは謎です。【東京都・のとさん】

D 貴重な目撃情報サンキュー！ しかし、この「のとさん」というのは、非常に親近感が湧くんだが、まさかオレの親戚だったりしないよな……。もしや、生き別れの兄貴じゃ……。兄貴だったら、絶対に連絡くれ!!


東京都・プロレスラブさん／これはまたハリガネロックなシンヤ・アオキだな。まったくワオワオしやがって!!(笑)。

おハガキ募集!!

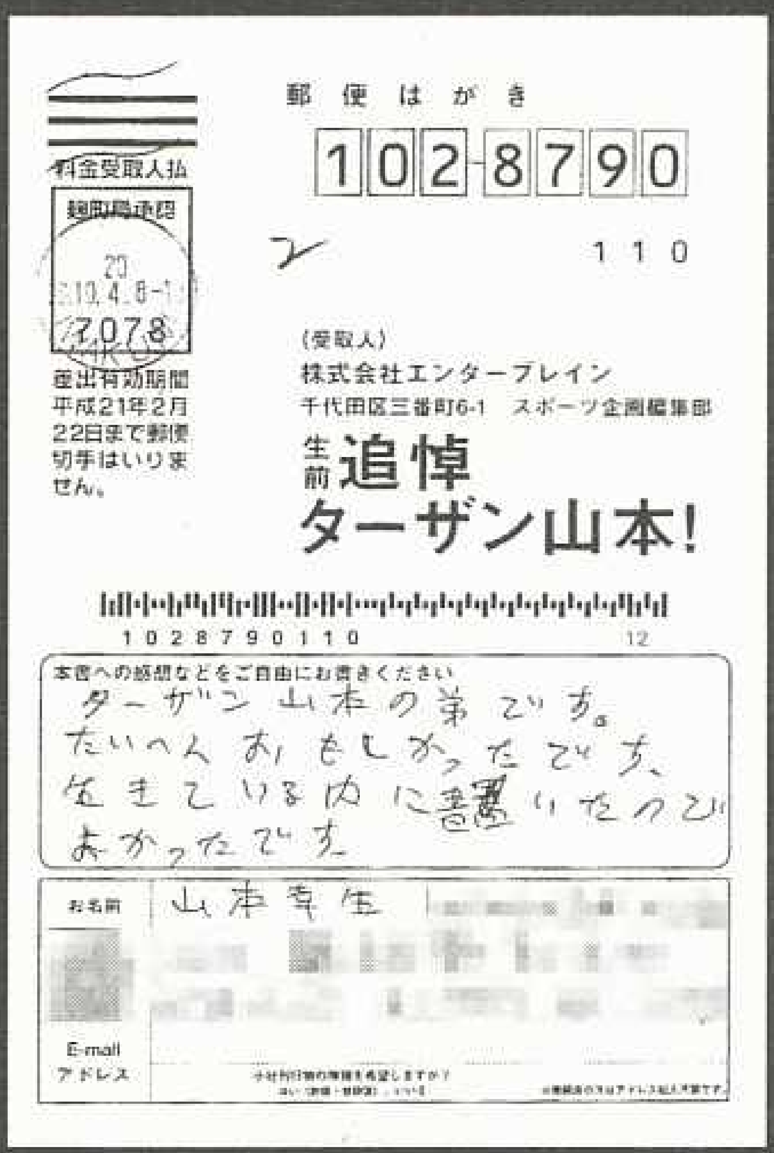
おハガキ、どんどん送ってくれよ!
ケータイからでもOKだぜ!!
どんな意見、感想、苦情、抗議、
お悩み、ダメだしでも、ぜーんぜんキャッチするから安心しろって!　待ってるぜ!

こんな情報も24時間どんと来い!
ってヤツだ。
- 譲ってほしいもの
- タレコミ情報
- 選手に対するコメント、試合の感想
- その他、オールOKだ!!

以上、すべてのお便り・
イラストのあて先&メールアドレスは
radical@kamipro.com
〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6
パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス kamipro編集部
「似顔絵地獄」係まで。

携帯サイト『kamipro Hand』からの
投稿もできるぜ。

『生前追悼 ターザン山本!』に
衝撃のお便りが!!


郵便はがき
102-8790
110
料金受取人払
差出有効期間 平成21年2月22日まで郵便切手はいりません。
（受取人）
株式会社エンターブレイン
千代田区三番町6-1　スポーツ企画編集部
生前追悼 ターザン山本!
1028790110
本書への感想などをご自由にお書きください
ターザン山本の弟です。
たいへんおもしかったです。
生きているうちに書いてもらえてよかったです。
お名前　山本幸生
E-mail アドレス


あなたの職業をひとつだけ選んで答えてください
1.小学生　2.中学生　3.高校生　4.大学生　5.予備校生
6.各種専門学校生　7.会社員　8.自営業　9.公務員
10.フリーアルバイター　11.主婦　12.その他（　　）
本書のことをどこで知りましたか（複数回答可）
1.新聞、雑誌等の広告を見て（媒体名　　）
2.雑誌等での紹介記事を見て（媒体名　　）
3.店頭で見て　4.人にすすめられて
5.その他（　　）
本書をお買い求めいただいた書店を教えてください
書店名（㈱フタバ図書　　）
本書を購入された理由をお聞かせください（複数回答可）
1.ターザン山本！が好き　2.ターザン山本！"追悼"祈念として　3.kamiproが好き
4.内容に興味があった　5.タイトルと表紙が目についた
6.その他（　　）
本書についての感想をお聞かせください
内容について　大変よい　よい　普通　わるい　大変わるい
カバーデザインについて　大変よい　よい　普通　わるい　大変わるい
値段について　大変よい　よい　普通　わるい　大変わるい
総合評価　大変よい　よい　普通　わるい　大変わるい
小社のプロレス・格闘技既刊本を買ったことはありますか？
1.今回が初めて
2.ある
本書の中でおもしろかったページは？（複数回答可）
（古関夢香　　）
オモテ面に本書への具体的な感想をお書きください。

今年4月に発売された『生前追悼 ターザン山本!』のアンケートハガキで、なんとターザン山本!のヤンガー・ブラザー（実弟）を名乗る人物からハガキが来たって言うじゃないか!!　な～んてこった い!　詳しくは明かせないが、ヤンガー・ブラザーの住所も山口県になってるって話だぜ。お便りをよく見ると、突っ込みどころ満載なんだが、「おもしろかったページは?」→「古関夢香」にはまいったぜ……。しかし、これはホントにホントのヤンガー・ブラザーなのかが心配だ……。もしホンモノなら、たまには本人に連絡してあげてやってくれ!

団体INDEX

※50音順及びアルファベット順

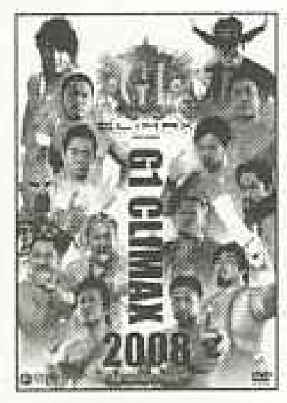
マット界の周辺情報をお届け!!

kamipro Info

DVD

新日本プロレスが『G1 CLIMAX』のDVDを発売!

本気になった老舗団体の底力を完全版DVDで振り返れ!



今年で18回目を迎えた、新日本プロレス真夏の祭典『G1 CLIMAX』が早くもDVDで登場! 友情のテンコジタッグ結成で参戦の実現した小島聡、悪の限りをつくすGBH、前年度覇者の棚橋弘至、そして快進撃を続ける後藤洋央紀らの熱戦を収録! 地上波未放映試合、さらにオリジナルインタビューを加え収録時間は、なんと480分! 会場で観られなかったキミもこのDVDでプレイバック!

★『G1 CLIMAX 2008 DVD-BOX』(ビデオ・パック・ニッポン)
★定価5,040円(税込) 10月24日発売 ★収録時間480分

DVD

『戦極』の名場面がセブンイレブンで買える!

『戦極』が第一陣～第四陣のダイジェストDVDを限定発売!



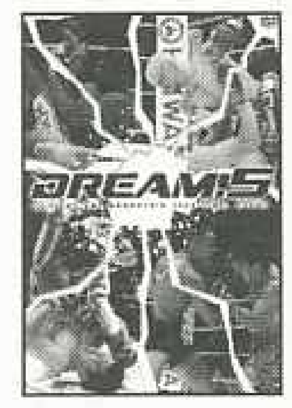
12月に第二陣～第四陣のDVDを大挙リリース予定の『戦極』が、それに先駆けて全国のセブンイレブンにて『戦極』のダイジェストDVDを限定発売! 気になる内容は第一陣～第四陣までの試合のハイライト、そして吉田秀彦、五味隆典など看板選手のコメントや素顔を収録したもの。特番や週に一回のレギュラー番組「戦極G」がスタートした『戦極』の勢いを体感すべし! シャキーン!!

★『戦極～The Record of Genesis～』(ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン)
★定価1,980円(税込) 発売中 ★発売所/全国セブンイレブン各所

DVD

7.21『DREAM.5』のDVDが早くも登場!!

激闘! 感動! 大どんでん返しのライト級GPの結末を見届けよ!



世界のTKこと、高阪剛をして「もう、ワケがわからん!」と言わしめた、名勝負続出の7.21『DREAM.5ライト級GP決勝ラウンド』がDVDで登場!! 号泣しながら入場した宇野薫を変態的関節技で完封する青木真也とのドラマ。壮絶なドツキ合いを展開した川尻 vs アルバレス戦。そしてダークホース、ハンセンと青木による決勝戦でのまさかの結果……。珠玉の激闘の数々を完全保存せよ!

★『DREAM.5 ライト級GP 2008 FINAL ROUND』(TCエンタテインメント)
★定価5,040円(税込) 発売中

BOOK

プロレスと力道山を徹底分析!

英雄の光と影、人気に翻弄された力道山の素顔に迫る一冊!



またも新たな力道山本が登場! 著者の岡村氏はかつて『力道山と日本人』という著書で力道山を通して、戦後論、プロレス論、日本人論、在日朝鮮人論など、さまざまな視点からの考察を試みた人物。今回は徹底的にプロレスにこだわり、戦後の日本を背負って立った英雄の光と影、テレビ人気に翻弄された力道山の素顔を描き出す。オールドプロレスファン必読!

★『力道山 人生は体当たり、ぶつかるだけだ』岡村正史著(ミネルヴァ書房)
★定価2,625円(税込) 発売中

BOOK

アントニオ猪木が名言集を発売!

悩める現代人の子羊たちよアントン珠玉の名言に耳を傾けよ!



アントンが新たな名言集を発売! 困難に直面すると"死"を選択してしまいがちな現代人に、アントンが"生"の意味を綴り、壁の越え方を伝授。ブラジル移民となって奴隷のような生活からプロレス界入りし、酸いも甘いも噛み分けたアントンのたくましい言葉の数々は、迷い戸惑う現代人に強烈なメッセージ性を放つ。いまこそアントンの言葉に耳を傾けるんダーッ!!

★『花が咲こうと咲くまいと生きていることが花なんだ』
★アントニオ猪木著(経済界) ★定価1,575円(税込) 発売中

CD

「ワールドプロレスリング」でおなじみ!

新日本プロレス中継のタイアップ曲がリリース!



新日本プロレス中継番組「ワールドプロレスリング」(テレビ朝日系列)のファイティング・ミュージックを提供しているBAZRA(バズラ)がニューアルバムをリリース! もちろんこの中継番組のタイアップ曲「千回目の日曜日」もアルバムのタイトルトラックとして収録! あの棚橋弘至も熱狂的なファンという3ピースロックの奏でるビートを聴いて、気持ちを盛り上げよう!

★BAZRA「千回目の日曜日」(カッティング・エッジ)
★定価2,300円(税込) 発売中

BOOK


人気シリーズ、待望の第11弾!!

本誌でおなじみ! 作家・夢枕獏のスーパーノベル最新作が登場!!



本誌でおなじみの夢枕獏さんの『新・魔獣狩り』シリーズの第11作目、"地龍編"が登場! 天下人秀吉、怪僧天海、奇人平賀源内までもが関係し合い、日本の覇権をめぐる"闇の歴史"を生み出してきた空海の秘宝を奪い合うスーパーノベル。いよいよ決戦の地、東北へ! キミもこれを読めば「いや～、よかったねぇ」(獏さんふうに)と感心すること間違いなし!?

★『新・魔獣狩り11(地龍編)』夢枕獏著(祥伝社)
★定価880円(税込) 発売中



金メダリストがもたらした混沌（カオス）とは!?
（北京五輪柔道）

どうなる年末年始決戦
マット界大混乱の噂

今年も残すところあと2ヵ月あまり。
年末年始に開催されるビッグイベントに向けて、マット界周辺も騒がしくなってきた。
世間の注目を集めた石井彗のプロ格闘家転向はひとまずお預けとなったが、
どうやらさらなる“何か”が蠢いている模様。
いったいマット界に何が起ころうとしているのか、気になる噂&真実を徹底検証!

試合写真／乾普也、平工幸雄、山口比佐夫



「Dynamite!!」「戦極」「新日本プロレス」「ハッスル」「UFC」……

いったいどこのリングがおもしろい!?

大　いよいよ年末年始決戦に向けてマット界が動き出した感じがするね。本誌が店頭に並ぶ頃には発表されているはずだけど大晦日には『Dynamite!!』、年明けの1月4日には『戦極』のニューイヤーイベントと、新日本プロレス恒例の東京ドーム大会が開催される。

中　『ハッスル』も去年に続いて大晦日に地上波放送が内定したみたいだな。大会は12月30日に両国国技館で開催予定らしい。UFCも12月27日にラスベガスで行なわれるし、どの団体もどんな仕掛けをしてくるか注目だな。

小　でも、石井彗の総合転向をめぐる一連の騒動は残念と言いますかなんと言いますか……。

中　いやあ、北京五輪柔道金メダリストだけに、ひさびさに世間を巻き込む起爆剤になるような逸材だったけど、その顛末には思わずため息をつきたくなったな……。もともと石井は総合格闘家志望だし、実力に加えてキャラもプロ向きだから、その去就に関してマスコミも色めき立ってた。

小　そもそもの騒動の発端は10月5日の『スポーツ報知』が一面で、石井が大晦日にプロ格闘家デビューするって記事を飛ばしたことですよね？

大　そうそう。複数の団体が水面下で激しい石井争奪戦を繰り広げていて、推定1億円の契約金を用意しているDREAMが一歩リードっていう具体的な話まで出たこともあり、これはプロ転向か？　って一気に注目が集まったんだよね。

中　その記事が出た同じ5日に、世界柔道団体選手権が開催された東京武道館で石井はプロ転向を否定。でも、急きょ7日に石井が国士舘大学で会見を行なうってリリースが流れてきたときには、これはひょっとしたら……って思ったけどな。

大　その前日の段階で、NHKが石井の総合転向について報じたこともあって、信憑性が増したんだよね。でも蓋を開けてみれば、石井は総合転向の意志はあるものの、いまは学業に専念したいってコメントして。

小　単位を取るためめって、普通の大学生の悩みですよね（笑）。

中　会見での石井からは普段の威勢のいい言葉は聞かれなかったな。両脇を全柔連（全日本柔道連盟）のお偉方に囲まれて、なんか捕らえられた宇宙人みたいな感じでさ（笑）。

大　今回の騒動は一気に過熱して、急速に萎んだ感じだったね。大晦日に向けて話題性もあるし、マット界にとって明るいニュースだったんだけど。

中　それだけにため息もつきたくなるってもんだよ。

大　マスコミの多くもその会見前日までは石井がプロ転向を発表すると思ってたんだろうけど、よくよく考えると国士舘の敷地内でそんな会見をやるわけがないんだよね（笑）。

中　そりゃそうだよな（笑）。

大　その時点で柔道現役続行の会見になるってピンとくるはずなのに、それすらもテンションが上がって気づかないっていう（笑）。

小　そもそも今回の騒動って何が要因でこんなことになったんですかね？

大　一言で表わせばすべてが〝フライング〟だったってことかな。石井という逸材を通して報道が過熱しすぎて。

小　確かにフライング発言かもしれないですけど、世界柔道団体選手権のときに全柔連の強化委員長が「（石井が）プロの世界へ行きたいなら強化選手から外す」ってコメントを出した時点で、全柔連が石井を突き放したって思ったんですけどね。

大　だからそのコメントも本来であればしかるべき場所でちゃんと発表することであって、囲み会見レベルで言うようなことじゃないんだよね。要は全柔連がマスコミ慣れしてなかったっていうか（笑）。おもわず口を滑らせて、感情のままに言っちゃったんじゃないかな。だからその記事だけ見ると、石井が退路を断たれたっていうふうにも思えるけど、じつはそんなことはなかった、と。

中　石井本人もフライングだったし、全柔連の石井を強化選手から外す意向っていう発言もフライングだったってことだよな。

大　憶測でしかないけど、たぶん石井が全柔連の偉い人に呼ばれて「（総合転向の）意志があるのか？」って聞かれたときに「あります！」って答えたのを、記者の前でポロッて言ったのが広まったんじゃないかなって気

魔王秋山に真・破壊王と暴走柔道王が加わって一大勢力に？



はするよね。

小 しかし、もったいないですね。大晦日は出てほしかったな〜。21歳の石井が次のロンドン五輪を目指すとして、そのあとに総合転向しようとしたときの格闘技界はどうなっているのか……。

大 一寸先はハプニングだからね（笑）。でも、業界周辺の話を聞くかぎり、今回の石井に関してはDREAMも『戦極』も、状況的にどうなっているかわからなかったみたいだね。

中 やっぱり石井はトップスターだけに、全柔連をはじめ周辺がゴチャゴチャしていて一筋縄じゃいかないんだろうな。

大 今回の報道が半年後、マット界にとってプラスになるのかどうか注目だね。どうしてもこの話に噛みたいって人間がたくさん出てくるだろうし。だから石井が総合に転向するのは業界にとっていいことだけど、この騒動がこれからはたしてどう転がっていくか。

小 夢のある話ではありましたね。これまでの柔道からの転向組と石井が違うのは現役バリバリってことですよね、坂口征二以来の（笑）。

大 たしかにビッグ・サカ以来だ（笑）。まぁ、とにかく総合に転向するにしろ、石井が全柔連ときっちり話をつけてからの話だよね。そういえば谷川（貞治）さんが「（石井君と）僕は一度も会ったことないんですよ」ってずっと強調してたのがおもしろかった（笑）。

小 それは全柔連に対して「僕たちは何もしてませんよ」っていうアピールですね（笑）。実際に会ったかどうかはわからないですけど。

中 石井絡みだと、9月の末に（エメリヤーエンコ・）ヒョードルとの夢の顔合わせが実現しかけるも、開始2時間前に中止になるなんてこともあったよな。

大 それが今回の騒動の導火線になったって話もあるんだよね。それによって石井と恩師である斎藤（仁）監督との仲に亀裂が入ったんじゃないかっていう。とにかく石井をめぐる話はもの凄く複雑なことになってるね。

小 なんか聞いてるだけで厄介な問題ですね（笑）。

中 あと、石井が総合の練習を高校の先輩である秋山成勲と一緒にやってるって情報が前に『東スポ』に出てたな。本人は総合の練習はしてないって否定してたけど。

大 もしかしたら秋山の所属するチーム・クラウド入りもありえるかもしれないね。いまは秋山つながりで和術慧舟會とかで練習しててもおかしくないけど、聞いたところによるとクラウドも道場を作ってるらしいし。

中 魔王が本拠地をついに構えるのか、まさに悪魔城（笑）。そこに真・破壊王が加わるかもしれないと。

小 真・破壊王ってなんですか？

大 小川直也命名の石井のニックネームらしいよ（笑）。石井は小川とも親交があるから、もしかしたら小川も一枚噛む可能性があるかもね。

中 ここにきて暴走柔道王まで加わったら、吉田道場をしのぐ柔道の一大勢力ができるな。王様だらけでまさにチーム・キングス（笑）。

大 それはいい表現じゃないな（笑）。しかし、石井の去就は気になるところだよね。秋山じゃなくて小川とくっつく可能性も充分に考えられるし。小川の後見人は元UFOの社長で芸能界にも強い影響力を持っている川村（龍夫）氏だから。

小 タレント性のある石井にとってもいろいろ可能性が広がりそうですね。でも、石井は全柔連とのしがらみがなくならないとどうにもならないんですよね？

大 そういう意味だと、しがらみと一切関係なさそうなUFCなら石井をリングに上げられるかもね。ダナ・ホワイトにしてみれば「ゼンジューレン？ そんなジョーク団体なんて知るか！」って感じだろうし（笑）。もしかしたらDREAMや『戦極』より可能性は高いかも。

中 まぁ、なんにしろ石井について

座談会出席者

【大】
学生の頃からこの業界でキャリアを重ねてきたベテラン。英語が堪能なため、外国人選手の通訳を務めることもしばしば。1年に5回は取材を兼ねてタイへ旅行。いまイチオシの格闘家はDEEP女子ライト級王者のMIKU。

【中】
もともとは実話誌系をフィールドに活動していたが、気づいたらマット界に深く関わっていた四十路男。業界に強力な情報網を持つ事情通であり、地獄耳の異名をとる。最近気になる格闘技イベントは『THE OUTSIDER』。

【小】
まだキャリアは浅いがそれをカバーするフットワークの軽さ、取材力には定評がある。実際に某ジムで総合を習う実戦派でもあり、主にネット媒体を主戦場に活躍中。趣味は加圧式トレーニングとマイクロダイエット。

は学校でしっかり単位を取ってもらってからプロに来てもらおう（笑）。

大　さっき話にも出た秋山も年末年始に向けて仕掛けたよね、9月23日『DREAM・6』の試合後に吉田秀彦戦の対戦表明をブチ上げて。しかも翌日には「実現するならどこのリングでもいい」なんて言うもんだから、FEG関係者がちょっとピリピリしてたみたいだけど。

中　青木真也も相当ピリピリしてたな（笑）。自称DREAMの大黒柱として魔王征伐に乗り出そうとしたら、「興味がない」って一蹴されてさ。

小　しかし、あの秋山の発言の真意ってなんなんですかね？

大　単純に秋山が駆け引きしてるんだろうね。業界筋の話だと、外岡真徳戦で秋山はFEGとの契約が切れたらしいから、あのアピールは自分の価値を高めるための牽制だったんじゃないかって見方もある。実際に秋山にはUFCだったり韓国だったり、いろんな団体からオファーがあるって話だし。『戦極』側も否定はしているけど、もしかしたら水面下で参戦に向けた話が進んでてもおかしくはない。

中　本当、秋山はそのへんの駆け引きがうまいと言うかなんと言うか。本来ならば春先ぐらいから噂にあった『Dynamaite!! KOREA』が、本誌の締め切り段階でもいまだに開催が正式発表されてないのも、主催者側と秋山が条件面で折り合いがつかず、まとまってないからかもしれないな。

小　秋山って対戦相手も明らかに選んでますよね。噂レベルではミノワマン戦のオファーも蹴ったって聞きましたけど。

大　まぁ、秋山の場合は計算なのか天然なのかわからないけど、主催者側にとっても一筋縄じゃいかない選手なんだろうね。年末年始も『Dynamaite!!』に上がるのか、『戦極』なのか、もしかしたら韓国進出を視野に入れているUFCに上がる可能性も充分に考えられるし。大きな声じゃ言えないけど、UFCが秋山をリサーチしてるって話もあるくらいだから。

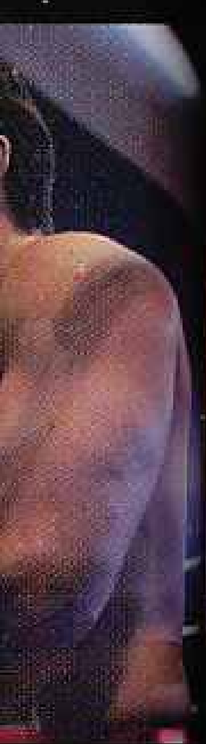
中　韓国に地盤がある秋山としては、現地での興行を考えているFEGやUFCとは駆け引きがしやすい状況だよな。

大　確かに。究極的には秋山は韓国で自主興行がしたいんじゃないかな、自分が主役になって。

小　FEG側としては秋山を引き留めたい部分はあるんですかね？

大　さっきの石井についても同じことが言えるけど、そこまで無理してでもっていうのはないんじゃないかな。チャンスがあれば石井にも秋山にも上がってほしいだろうけど、谷川さんは前から無駄なファイトマネーの高騰による引き抜き合戦は歓迎してないし。そこまで悪い意味でのリスクを背負うつもりはないだろうね。いまの格闘技界の状況でそれをやったら諸刃の剣になりかねないし。

中　そういう意味では秋山の1月4日『戦極』参戦もまったくない話ではなさそうだよな。でもDREAMから移籍したらファンの反感は買いそうだけど。プロはイメージ戦略も問われるのに、秋山はそこをわかって





新日は1.4ドーム大会を例年どおり開催。最近は超巨大ビジョン設置など、演出面で力を入れているだけに豪華絢爛なオールスター戦に期待！　目指せ集客6万5000人！（主催者発表）。



『やれんのか!』と同じ日、同じ会場で開催された『ハッスル祭り』。ほしのあきやミルコ・クロコップの登場もありおおいに盛り上がった。今年はどんな隠し球が？　そして髙田将軍はどこに行ったのか？



UFCは11月、12月、そして来年1月と3ヵ月連続でラスベガス大会を開催！　レスナー中心に賑わいだしたヘビー級戦線をはじめ、注目カードのマッチメイクが予測される。ダナの高笑いも止まらない！

ヒョードルがUFCと契約？皇帝がオクタゴンに乗り込む！

ないような気がする。

小　でも、もともとイメージは悪いし、そこまで深く考えないんじゃないですかね（笑）。だからこそ魔王というか。

大　それは言えるかも（笑）。まぁ、あの秋山の吉田戦アピールは完全にスタンドプレーだよね。あの発言を受けて吉田は「他団体だから無理でしょ」ってコメントしてるけど、それは裏読みする必要もなく額面どおりに受け止めていいと思う。

中　そもそも吉田は飛ばすようなコメントをする選手じゃないもんな。そうなると秋山が次に上がるリングが気になるところだな。世間の注目度を考えたら年末年始にはどこかしらのリングには上がりたいだろうし。

大　秋山にしてみれば自由に動くためにも、〝『HERO'S』の秋山〟、〝DREAMの秋山〟っていうふうに色をつけられるのは嫌なんじゃないかな。たとえるなら、髙田延彦がヒクソン・グレイシーと闘う頃に〝キングダムの髙田延彦〟と思われたくなかったのと同じように（笑）。

小　なるほど、それはわかりやすいたとえです（笑）。

中　色をつけてくれるな、色は自分でつける、と。そうなると海を渡る可能性も考えられるよな。

大　そうそう。海の向こうと言えば、ついにヒョードルがUFCと契約するんじゃないかって話があるよね。

小　え、じゃあアフリクションとの契約はどうなるんですか？

大　10月11日（現地時間）にラスベガスで予定していたアフリクションが中止になって、代表のトム・アテンシオは1月17日の大会でヒョードルにはアンドレイ・アルロフスキーと対戦してもらうってコメントしてるけど、その大会も正式には開催が発表されてない。そこでヒョードル側はアフリクションが契約を履行できないという判断のもと、その契約を破棄するんじゃないかって話みたいだね。

中　もともとヒョードル側とUFCはずっと交渉してたんだよな。UFCの希望は独占契約なのに、ヒョードル側はロシアで自主興行がしたいっていうのもあって、細かい部分で合意に達していなかっただけで。どこかで折り合いがついたってことだろ？

大　おそらく。UFCが譲歩したって話だけどね。ダナ・ホワイトにしてみればアフリクションはヒョードルさえいなければ、その興行規模からいって対抗組織でもなんでもないって思ってるだろうし、ヒョードルを引き抜くことですっきりさせたい部分もあるんだろうね。

小　それこそただのTシャツ屋だと（笑）。でもどのくらいの金額で契約するんですかね？

大　とんでもない額みたいだよ、○億円レベルで、それこそヒョードルとの対戦を希望しているランディ・クートゥアーが嫉妬するぐらいの。

中　それが原因でまたクートゥアー

がUFCから離れないか心配だな（笑）。でもUFCと契約したらヒョードルが日本に来られなくなる可能性は充分にあるよな。
小　ここ5年連続で大晦日は日本で試合をしていただけに寂しいですけど、ついに皇帝がオクタゴンに乗り込むと思うと楽しみですね！
大　UFCがいまのところ正式発表しているビッグカードは11月15日の『UFC91』でのランディ・クートゥアーvsブロック・レスナーのみだけど、12月27日の『UFC92』ではアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラvsフランク・ミアも予定されているし、ほかにもヴァンダレイ・シウバvsクイントン・"ランペイジ"・ジャクソンとか、キラーカードを揃えて勝負をかけてくるんじゃないかな。
小　う〜ん、日本でも生観戦してみたい！
中　日本のイベントでいうと、『Dynamaite!!』では昨年の船木誠勝に続いて今年も大物の復帰戦が噂されてるな。
大　須藤元気だね。他誌で本人が「復帰するならインパクトのある大晦日」ってコメントも出してるしね。そもそも須藤の復帰は今年の初めくらいから囁かれていて、DREAMの解説者を務めたのはその布石じゃないかってことはずっと言われていた。
小　復帰を考えるに至った理由ってなんなんですかね？
中　おそらく策士の須藤のことだから"格闘家"っていう肩書きがあるほうが、本を書くにしろ俳優をやるにしろ注目度が違うって思ってるんじゃないかね。ただ策士だからこそ裏の裏をかいて復帰しないかもしれないし。
大　まぁTBS側としたら、須藤みたいな華のある選手は大晦日にほしいところだろうね。
中　DREAMに対して1月4日にビッグイベントを開催する『戦極』だけど、いま予定されているのは五味隆典vsライト級GP優勝者、三崎和雄vsミドル級GP優勝者のタイトルマッチのみ。何か隠し球は用意してるのかね？



昨年大晦日に開催された『やれんのか!』では、大連立効果によりヒョードルvsチェ・ホンマンや秋山成勲vs三崎和雄など夢の対戦が実現。オープニングでは高田延彦『やれんのか!』統括本部長による和太鼓の演舞が行なわれたが、もう見られることはないのだろうか？



昨年の『Dynamite!!』は桜庭vs船木をメインに大阪ドームで開催。魔裟斗や山本KIDなどスターが勢揃い、谷川さんイチオシのK-1甲子園も行なわれた。

大　現状は『戦極』広報の國保尊弘氏が前から言っている北京五輪のアマレスの大物を招聘するって話だけかな。まだ具体的に動きは見せてないけど、柔道界とレスリング界に強いパイプがあるだけに、思わぬ大物の参戦もあるかもしれない。
小　10月からは地上波レギュラー番組の『戦極G（ゴールド）』が始まったり、キング・モーみたいな華のある選手が登場したりと勢いもありますし、今後の展開に期待したいですね。
中　でも、同じ1月4日といえば忘れちゃいけないのが新日本プロレスの東京ドーム大会だよ！　今回は"東京ドーム進出20周年記念大会"ってことで、全日本プロレスをはじめ、ZERO1・MAX、ドラディション、TNA、さらには最近交流が復活したノアも巻き込んで、まさに"プロレスオールスター戦"を開催するわけだし。
大　かつてのドーム大会は、他団体に対する"土下座外交"で無理矢理その場をしのいでいた感もあったけど、今回のドームは新日にかつての"盟主感"があってのオールスター戦だから、ちょっとワケが違うよね。ちゃんと天山広吉vs飯塚高史の抗争にしろ、武藤敬司の持つIWGP王座をめぐる闘いにしろ、練り込んだうえでドームにまでつながるように作られたストーリーだし。
小　でも逆にそれだけの団体が集まってのイベントとなると、プロレスの底力を発揮して、よっぽどのものを見せてほしいところですね。
大　新日本が"業界の盟主"として、プロレス復興の序曲を見せてくれるかお手並み拝見だね。
中　でもそのプロレスオールスター戦と別のところで世間と闘ってる団体もあるよな。昨年の大晦日にまさかの地上波中継を敢行した……
小　『ハッスル』ですね！
中　今年は『ハッスル』の象徴でもあったインリン様が引退して、いままでの芸能人路線から方向転換しつつあったけど、大晦日のお祭りイベントとなれば何か大きな仕掛けを考えてるんじゃないか？
大　現時点で聞いた話によると、あの山本モナにオファーをかけてるらしいね。
中　おぉ〜、魔性の女か！　容姿、キャラクター、世間へのアピール度……インリン様と比べても遜色ない逸材って言っていいな！
大　もちろん所属は髙田モンスター軍だろうけど（笑）。あとは北京五輪のテコンドーでレフェリーを蹴飛ばしたキューバの選手（アンヘル・マトス）にも声をかけてるらしい（笑）。
小　ダハハハハ！　それは『ハッスル』らしいですね（笑）。ということは去年は金村キンタローがミルコ・クロコップに蹴飛ばされましたけど、今年は野口（大輔）レフェリーあたりが蹴飛ばされるかも（笑）。
中　まぁ、いずれにしろここにきて年末年始のイベントの輪郭がなんとなく見えてきた感じだな。
大　マット界も冷え込んできたとか言われがちだけど、やっぱり大晦日くらいは業界を活性化させるような盛り上がりに期待したいね。



11.1『戦極～第六陣～』ライト級GPに向け

緊急結成!

北岡悟を優勝させる会

構成／松下ミワ　写真／乾晋也

11.1『戦極～第六陣～』ライト級GP優勝者大予想!

▶佐伯繁［DEEP代表］

［北岡 悟］

ウチのチャンピオンだった横田には頑張ってほしいけど、実際に優勝するのは北岡じゃないかな。理由? アイツは頭がおかしいから!

▶今成正和

［北岡 悟］

ほかの3人は組んだことがないんで、どれぐらい強いかわかんないですけど、一緒に練習してる北岡選手が勝つと思います、たぶん（笑）。

▶青木真也

［北岡 悟］

優勝して有頂天になって"どうかと思う"状態の北岡悟を見たいですね。優勝マイクにしてもズバリ"怖いもの見たさ"! 北岡劇場開演ですよ!!

▶鈴木みのる

［北岡 悟］

期待も込めて優勝は北岡かな。最近いろんな意味でノッてるし、ああいう状態のときは多少不利な場面があっても最後は勝てちゃうんだよね。

▶ジャン斉藤［編集部］

［北岡 悟］

プロは入場シーンで魅せるべきだし、入場こそが最大の見せ場だと考えます。あの自己陶酔入場は銭が取れる! 必見であります。

▶坂井ノブ［編集部］

［北岡 悟］

おおっぴらに「キモい」を連呼してるのに怒らずに取材に応じてくれる度量の大きさに感服! 優勝して『戦極』の大黒柱になっていただきたい。

▶阿修羅チョロ［編集部］

［北岡 悟］

「マイクも優勝できるように頑張ります」という横田のマイクも楽しみなんですが、風は北岡に吹いてるような気がします。風になれ!

▶堀江ガンツ［編集部］

［北岡 悟］

北岡の強さの秘密は、ゴツくて手足が短い体型にある。これはカール・ゴッチが最も関節技を極めにくいと語った小杉俊二に通じるものがある。

▶真下義之［編集部］

［北岡 悟］

「哀 ふるえる哀～♪」30代男子にはたまらない名曲『哀 戦士』をあえてGackt版で入場するこの男こそ、『戦極』のニュータイプ!

▶松下ミワ［編集部］

［北岡 悟］

北岡選手はもっと凄まじい自己表現力を秘めているのではないかと思います。優勝した勢いで未知なるパフォーマンスを見せてほしいです。

▶鈴木祐［編集部］

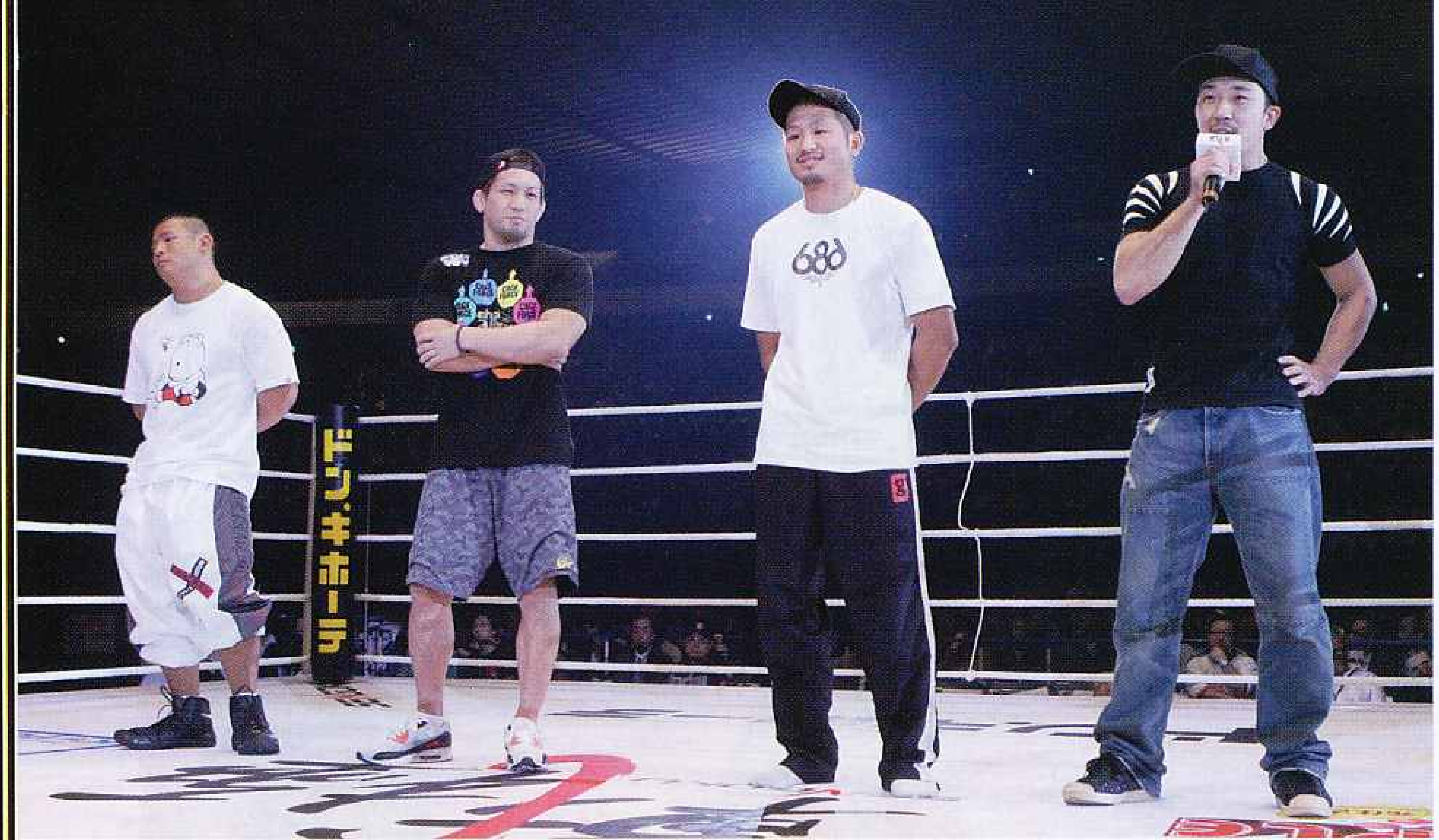
［北岡 悟］

キモ強で優勝した暁にはリングネームを"キモ"に変更! 元祖キモのマネージャーのジョー・サンばりにキモさをキメてほしいです。

▶大川義之［編集部］

［北岡 悟］

実力拮抗の4人の中で試合直前まで80キロを誇る北岡が体格面で有利。あとは足関節とギロチンでキモ強キャラを炸裂させてほしい!



『戦極～第五陣～』の休憩明け、和やかなムードでリングに登場したS4。だが、北岡の表情を見てほしい。和やかなのはクマのTシャツだけで、北岡本人からは「S4」というくくられ方に対する怒りがビンビンと伝わってくる。

北岡悟のパフォーマンスが気になるのはなぜだろうか――。

8・24『戦極～第四陣～』ライト級GP1回戦、クレイ・フレンチ戦後のマイクアピール以降、北岡のパフォーマンスが気になってしょうがない。勝利に酔いしれるあの表情、そしてシャウトするような声で発せられる強すぎるメッセージ。北岡のパフォーマンスは、マイクとマイクの微妙な間がおとずれるたびに緊張が走り、どこか目を背けたくなる。断っておきたいのだが、これは決して批判ではない。むしろ、その現象を分析したいのだ。

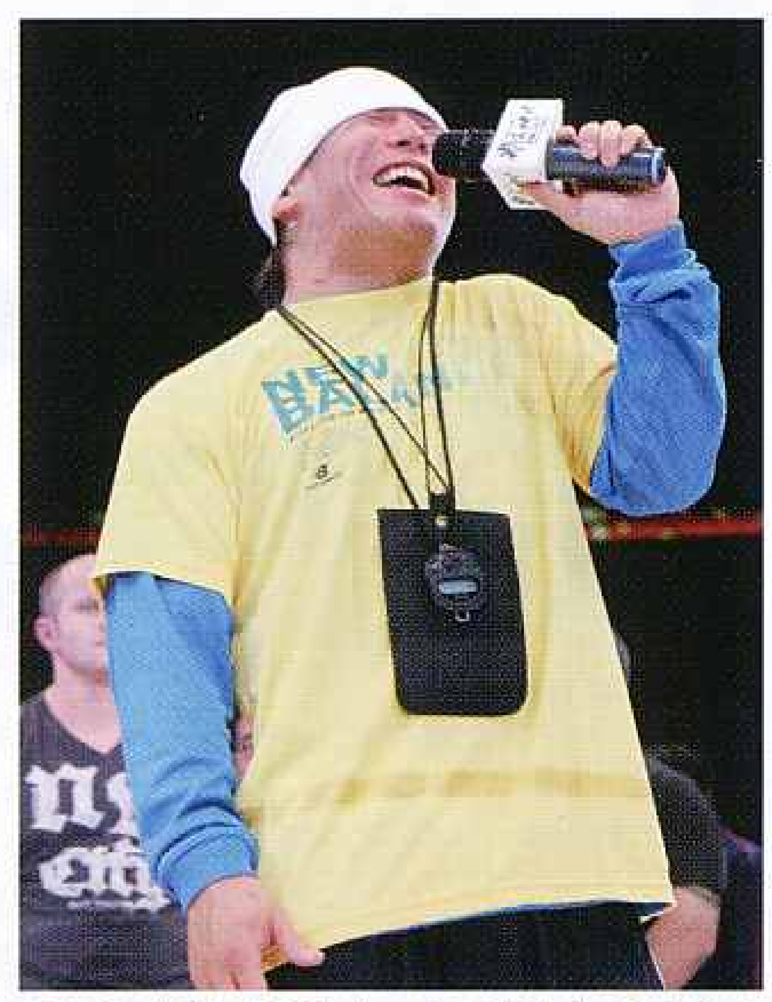
では、なぜ目を背けたくなるのか。それは北岡の姿を自分と重ね合わせてしまうからではないだろうか。人間、自己表現の度合いはさまざまだが、北岡ほどお腹いっぱいに表現する人も珍しい。しかし、たいていの人は自分の感情をむき出しにするのはどこか居心地が悪く、隠そうとする。だが、北岡を見ていると、封じ込んだはずの自分を見たような錯覚に陥り、いたたまれない気持ちになってしまうのではないか。

北岡といえば、『戦極』ライト級GP1回戦での衝撃の一本勝利が物語るように、その実力といえば一級品である。北岡の練習仲間でもあるあの青木真也も、しばしば北岡に尊敬の念を示すようなコメントを寄せていたりするのだ。ところが、やはり目立ってしまうのはその実力や試合内容よりも入場シーンやマイクパフォーマンス。それは、北岡の表現力が格闘技界の常識内からいい意味で〝はみ出しまくっている〟からだ。

北岡の独走パフォーマンスといえば、いまに始まったわけではない。たとえば07年の夏、船木誠勝が大晦日『Dynamite!!』での現役復帰を宣言したときのことを思い出してほしい。自身の公開練習において北岡は船木に挑戦状を叩きつけている。その際に、「船木誠勝殿　12月31日に現役復帰される貴殿に挑戦を表明させていただきます」と毛筆でしたためられた文章と同時に、北岡が出場するパンクラスの大会のチケットを船木と谷川FEG代表に送りつけているのだ。しかし、船木&谷川代表には完全に無視されてしまっている……。だが、北岡にとっては行動に移し、アピールしたことのほうが重要なのである。

また〝けじめのイベント〟となった『やれんのか！』のエンディングでは、参戦者以外の選手にもマイクを渡されたことをいいことに、名前も名乗らず「ボクも出たかったです！」と満面の笑みで絶叫。PRIDEファンにとって北岡は「はてな」な存在だったのか、会場の反応は正直薄い。しかし、他人の目はどうでもいい。これぞ北岡の自己表現力なのである。

『戦極～第五陣～』でのマイクパフォーマンスでもそうだ。ライト級1回戦4選手を「S4」と呼ばれたのに対し、「ひとくくりにされるのはイヤだ」と嫌悪感を露わにしている。


これが、「ボクも出たかったです!」と『やれんのか!』終了後のリングで絶叫したときの北岡だ。顔が真っ赤なところからも、北岡の無念さが伝わってくる。"60億分の1"ヒョードルが後ろにたたずんでいるこの構図がまた素晴らしい。

こうした北岡のパフォーマンスは、冒頭には「目を背けたくなる」と書いたが、その一方でドキドキハラハラする部分があり、「次はどんなパフォーマンスをしてくれるのか」と、好奇心が止まらない。それは〝隠れた自分〟が見つかる好奇心なのかもしれない。

もし北岡が『戦極』ライト級GPの優勝を勝ち取ったときにはいったいどこまで凄いことになるのか、また優勝者が五味隆典と闘えるという当初のルールからすると、五味に対してはどんなアピールがなされるのか。どれもこれも、「どこまでいってしまうのか」という不安と同時に「どこまでもいってほしい」と願う気持ちがある。北岡が優勝するということは、ある種、そういった興奮にも出会えるということだ。

北岡に優勝してほしいのは、実力証明と同時に、その部分への期待の表われでもある。ここに「北岡悟を優勝させる会」を立ち上げたのは、そういった理由からでもあるのだ。

北岡への好奇心は、〝隠れた自分〟を発見できる好奇心でもあるのだ！

北岡悟の入場曲『哀 戦士』を歌おう！

機動戦士ガンダムⅡ ～哀 戦士～

作詞／井荻麟　作曲／井上大輔

哀 ふるえる哀
それは別れ唄
ひろう骨も 燃えつきて
ぬれる 肌も 土にかえる
荒野をはしる 死神の列
黒くゆがんで 真赤に燃える

哀 生命の哀
血の色は 大地にすてて
新たな 時をひらくか
生き残る 哀 戦士たち
荒野をはしる 死神の列
黒くゆがんで 真赤に燃える

※死にゆく男たちは
守るべき女たちに
死にゆく女たちは
愛する男たちへ

☆何を賭けるのか
何を残すのか
I pray, pray to bring near
the New Day

哀 かなしみの哀
いまは 残るだけ
名を知らぬ 戦士を討ち
生きのびて 血へど吐く
疾風のごとき 死神の列
あらがう術は わが手にはない

［※印くりかえし］

戦う男たちは 故郷の女たちに
戦う女たちは 信じる男たちに

［☆印くりかえし］

JASRAC／出 0813311-801



北岡 悟

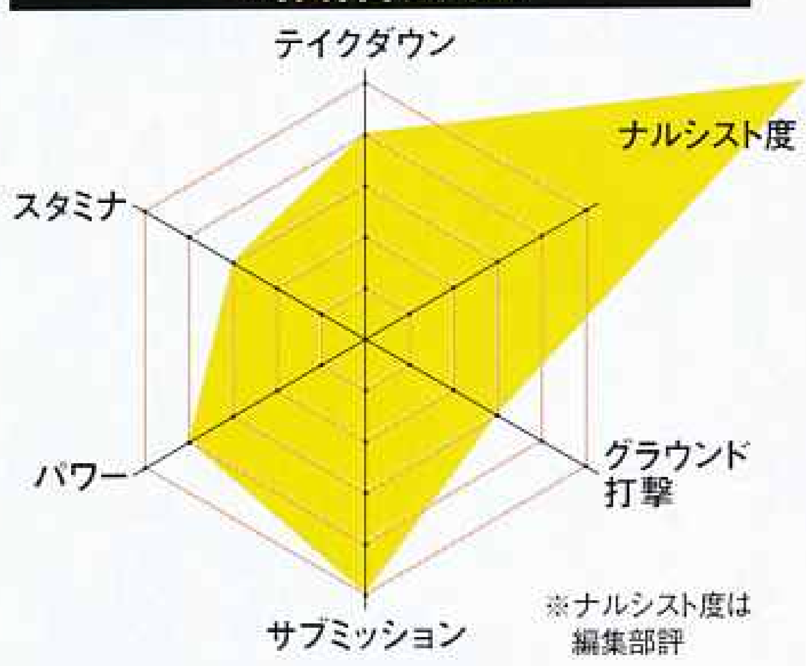
所属	パンクラスism	生年月日	1980年2月4日
出身地	奈良県	身長／体重	168cm／70kg
バックボーン	柔道		

北岡の寝技は一発勝負タイプ その技を試合のどこで出すかが肝！

北 岡が得意なのはフロントチョークとか、1回戦でクレイ・フレンチに勝ったアキレス腱固めとかなんですけど、北岡の寝技は一発タイプの寝技なんですよ。だから、一発で仕留められるその技をどこで出すかが肝になると思うんですね。言ってしまえば、北岡の寝技は打撃のような寝技というか、"強い"寝技なんですよ。

反対に、この一発が出せなかったら、光岡戦ということでいうと、危ないと思いますね。そこで得意なところじゃない部分で勝負しようとしても、墓穴を掘るだけだと思うんで、北岡はどれだけ自分の我を通せるかが勝負ですね。北岡の打撃ですか？　うーん、個人的にはあんまり見たことないけどなあ（笑）。

5段階評価



※ナルシスト度は編集部評

過去5戦の戦績

08.08.24『戦極～第四陣～』
○クレイ・フレンチ
（1R 0分31秒 アキレス腱固め）

08.05.18『戦極～第二陣～』
○イアン・シャファー
（1R 0分50秒 フロントチョーク）

08.01.30 パンクラス
×井上克也
（3R終了 判定1-2）

07.09.05 パンクラス
○ジェイソン・パラチオス
（3R終了 判定2-1）

07.04.13 DEEP
○ファブリシオ・"ピットブル"・モンテイロ
（2R 2分37秒 肩固め）



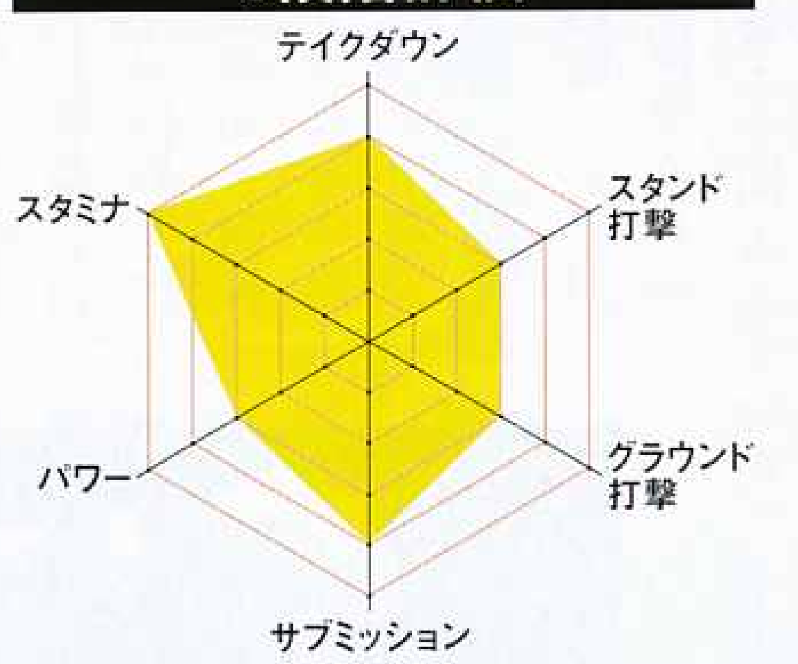
光岡映二

所属	和術慧舟會RJW	生年月日	1976年1月1日
出身地	愛知県	身長／体重	171cm／70kg
バックボーン	レスリング		
タイトル歴	第2回 PRE PRIDEトーナメント優勝		

相手を追い込む詰め将棋戦法 そのための選択肢を多数持つ強者

光 岡の寝技はポジションをしっかり取りにいくとか、ガードに入ってもしつこくパスを仕掛けるとか、相手に攻撃をさせないように一つ一つ詰めていく闘い方なんですよ。要するに、詰め将棋のような感じ。そうするための選択肢をいくつも持ってる選手で、たとえば寝技で両手がふさがってるときに「もう一本手がほしい」という局面があるんですけど、そういう場合に光岡はアゴや頭を使ったりして相手をコントロールできるんですね。あと、1回戦のホドリゴ・ダム戦で一発当ててスリーパーで一本取りましたけど、あそこでスリーパーを選ぶというのも光岡のいいところだと思います。パウンドだったらホドリゴは息を吹き返してたと思いますよ（笑）。

5段階評価



過去5戦の戦績

08.08.24『戦極～第四陣～』
○ホドリゴ・ダム
（1R 3分13秒 裸絞め）

08.05.18『戦極～第二陣～』
○イ・グァンヒ
（1R 4分15秒 裸絞め）

07.11.08 修斗
○ヨアキム・ハンセン
（3R終了 判定2-0）

07.09.08 CAGE FORCE
×朴光哲
（3R終了 判定1-2）

07.06.09 CAGE FORCE
○タクミ
（1R 3分30秒 TKO）



TKに聞く 戦極ライト級GP

まず、北岡vs光岡なんですけど、これはお互い組んだら勝負をかけられる選手同士なんですけど、ハッキリ言って噛み合わないですよ（笑）。というのは、お互い寝技が得意な選手なんですけど、寝技の種類が全然違うんですね。一発で仕留める寝技の北岡に対して、光岡は徐々に極めにいくタイプでしょ。これは北岡からすると、非常に面倒くさい寝技になるでしょうね。その前に、北岡がそれに付き合わずに極めてしまうかもしれない。だから、お互いにどういう展開に持っていくのかはちょっと楽しみですね。どっちがワガママかという勝負になると思います。

それから、横田と廣田に関しては、まあ普通に打撃の展開になるのかなあ。でも、お互いに「打撃でくるだろうな」というのが一つのフェイントになってますからね。どっちがそのフェイントを考え抜けるかという、その準備ももうすでに練習でやってると思いますね。で、廣田の場合はスピードと威力の乗ったパンチを持ってますけど、横田はその廣田に対してあんまり自分のスタイルを変える必要はないのかなあと思いますね。彼は気づかないうちに強くなってしまえるタイプだと思うんで、狙ってないのに当たってしまうパンチとか、攻撃から攻撃に移るときの「キワの攻撃」の技術をそのまま活かせばいいかなと思います。

勘のいい打撃と「キワの攻撃」が鍵 生まれ持った才能が噛み合った状態

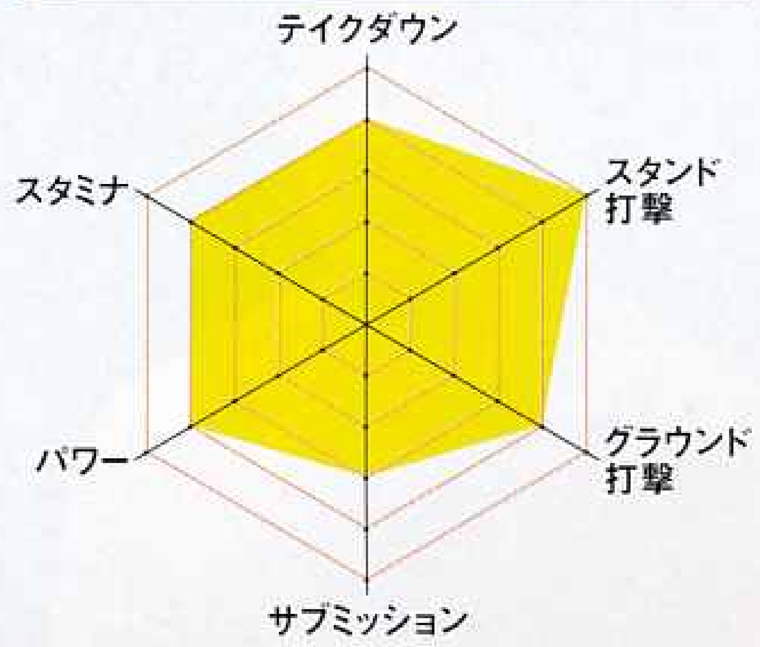


横田一則

所属	GRABAKA	生年月日	1978年4月3日
出身地	千葉県	身長／体重	172cm／70kg
バックボーン	柔道		
タイトル歴	第3代DEEPライト級王者		

横田の打撃は、ちゃんと狙って当ててるというよりは、打ったらそこに顔があったという感じの打撃なんですよね（笑）。勘がいいんでしょうね。ただ、いつもしっかり打ち抜いているので、それがいちいちプレッシャーになってるんですよ。あと、横田のいいところは「キワの攻撃」が普通にできてるところなんです。要するに、テイクダウンを失敗したあとの打撃の入れ方とか、いまの総合では凄く大事な部分なんですけど、それが自然とできてるんですよ。1回戦のポーヤン・コセドナー戦は練習ができてないと言ってましたけど、その試合であれだけの動きができてたので、彼は生まれ持った才能がうまく噛み合ってる状態なんだろうなと思いました。

5段階評価



過去5戦の戦績

08.08.24『戦極～第四陣～』
○ポーヤン・コセドナー
（3R終了 判定3-0）

08.05.19 DEEP
×ハン・スーファン
（1R 3分38秒 KO）

07.08.05 DEEP
○ミノル・ダヴァレス・ツチヤ
（1R 3分53秒 腕ひしぎ十字固め）

07.02.16 DEEP
○帯谷信弘
（3R終了 判定3-0）

06.12.20 DEEP
○Barbaro44
（3R終了 判定2-0）

“初速と最後の速度”が変わらない 豪腕パンチは練習のたまもの！

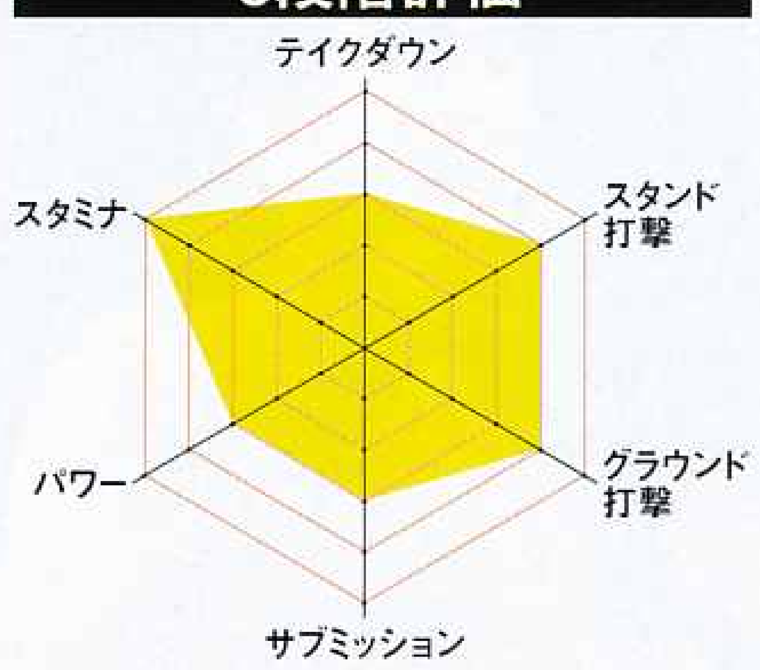


廣田瑞人

所属	GUTSMAN修斗道場	生年月日	1981年5月5日
出身地	長崎県	身長／体重	171cm／70kg
バックボーン	ボクシング、柔道、相撲		
タイトル歴	2004年 全日本アマチュア修斗選手権大会ウェルター級王者 2005年 修斗ウェルター級新人王 第2代CAGE FORCEライト級王者		

廣田はね、これはきつい練習ちゃんとしてるなあっていう試合をするんですよね（笑）。でね、彼の打撃は野球でいうと、初速と最後の速度が変わらないというのかな。要するに、スピードが上がってるわけじゃないんだけど、最初とあんまり速度が変わらないので、試合終盤になるとスピードとパワーが凄いように見えるんですね。これはフィジカル、体力的な部分が凄く助けてくれてると思うんですけど、ああいう試合をやられると、相手は心が折れがちになりますよね。で、ライト級の場合の打撃は身体が反応する打撃から、さらに微調整ができないと世界レベルでは勝っていけないんですけど、廣田はもうその入り口にはちゃんとたどり着いてますね。

5段階評価



過去5戦の戦績

08.08.24『戦極～第四陣～』
○ライアン・シュルツ
（2R 4分45秒 KO）

08.04.05 CAGE FORCE
○鹿又智成
（1R 1分00秒 TKO）

08.02.11 CAGE FORCE
○ジョニー・フラシェ
（2R 0分08秒 TKO）

07.12.01 CAGE FORCE
○シン・ドゥギ
（1R 0分16秒 KO）

07.08.05 修斗
×天突頑丈
（3R終了 判定0-3）

で、トーナメントということで、体力の部分も考慮しないといけないと思うんですけど、一番ダメージなく勝ち上がるタイプは北岡かなあ。北岡が勝つとしたら一発の極めで勝つでしょうからね。逆に、それで勝てなかったら勝てないですよ。ほかの3人に関しては、いずれにしても普通に体力の削り合いをして、ボロボロになって勝ち上がってくるような気がします。光岡も勝つとしたら短期決戦ではないでしょうし、横田vs廣田も打撃でダメージを負ってるでしょうしね。

その打撃という部分でも、ライト級といってもパンチ力が落ちるとかそういうことはないと思いますね。やっぱり打撃戦でもダメージなく上がってくるということはないですね（笑）。

vs五味隆典戦ですか？　そうだなあ、個人的な話なんですけど、一番おもしろそうなのは北岡かなあ。北岡だったら一本取れるか取れないかなんで。ま、あたりまえの話ですけど。だから、試合展開としては、五味がKOで勝つのか、北岡が一本取るのかというわかりやすい決着になると思いますね。

ただ、五味戦ということで考えると、トーナメントでどういう勝ち方をして勝負に挑むのかというのもありますね。このトーナメントでも凄く成長できますからね。ポッと五味と闘うよりも、苦労して勝ち上がった選手が対戦するほうが、いろんな展開の可能性はあると思いますね。まあ、本人たちはまだそこまで考えてないでしょうけど（笑）。

カズの得意な畳みかける攻撃で“いい場所”を探れば突破口アリ!

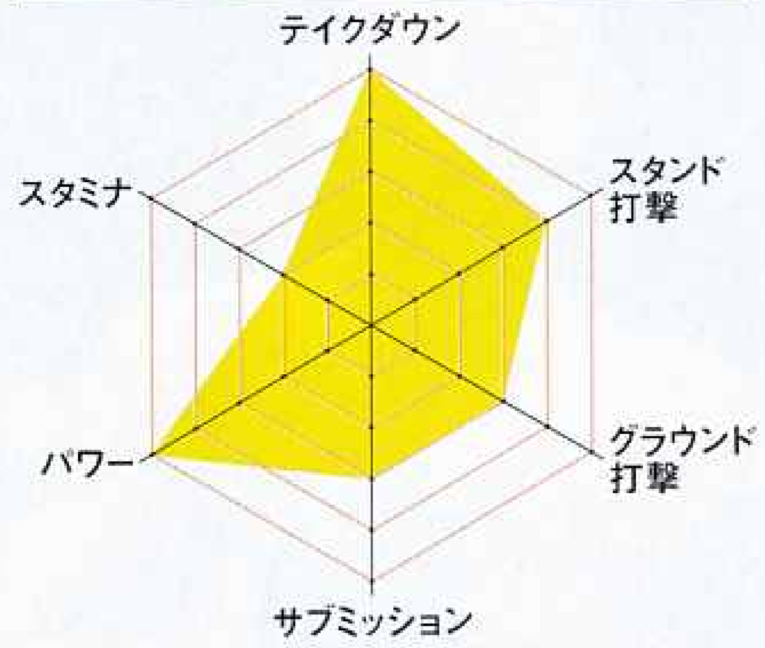


中村和裕

所属 吉田道場
出身地 広島県
バックボーン 柔道
タイトル歴 2001年 全日本サンボ体重別選手権大会100kg級 優勝
2002年 全日本実業団体重別選手権大会100kg級 優勝
ドイツ国際柔道大会 優勝
生年月日 1979年2月21日
身長/体重 178cm/83kg

カズは攻めながら自分のいい場所を探っていくタイプで、相手の反応で展開を変えるというより、自分からどんどん攻めて相手がディフェンスだけに回ってくれるのが理想なんですよ。それだけの圧力はありますからね。あと、1回戦のポール・カフーン戦は83キロに落とした初めての試合でしたけど、凄くキレがよくなってるんです。前はパンチの重さで勝負してたんですけど、スピードと回転もついてるので、コンビネーションも2つ、3つと打っていける状態ですよね。自分の軸の位置をつかんだんじゃないかな。それはカズ自身も前回の試合で感じてるはずですよ。なので、カズの得意な畳みかける攻撃を作っていけば突破口は開けると思いますね。

5段階評価



過去5戦の戦績

08.09.28『戦極～第五陣～』
○ポール・カフーン
(3R終了 判定3-0)

08.05.24『UFC84』
×ソクジュ
(1R終了時 TKO)

07.09.22『UFC76』
×LYOTO
(3R終了 判定0-3)

06.12.31『PRIDE男祭り2006』
×マウリシオ・ショーグン
(3R終了 判定0-3)

06.10.21『PRIDE.32』
○トラヴィス・ガルブレイス
(2R 1分16秒 TKO)

一回、自分の流れを引き寄せれば試合をラクにコントロールできる!

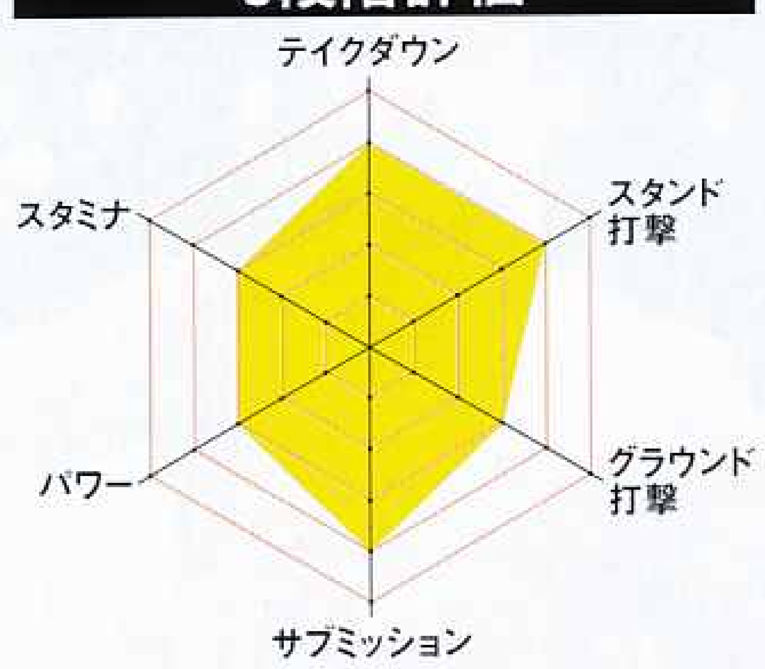


佐々木有生

所属 GRABAKA
出身地 北海道
バックボーン ムエタイ、空手
生年月日 1976年9月12日
身長/体重 183cm/83kg

佐々木はスタンドも、寝技も、テイクダウンもなんでもできる選手だと言われるんですけど、ここにきて、その一つ一つの「流れの技術」が凄く伸びてると思うんですよ。だから打撃にしても寝技にしても、それぞれの攻撃が強く見えるんですね。1回戦の近藤戦もテイクダウンから、最後チョークで極めるまでが強かった。そういう中に打撃も混ぜられる状態にあるんです。だから、試合としては、一回、自分の流れを出せれば、あるいはいい寝技の展開を作れれば、佐々木自身がラクに試合をコントロールできるんじゃないかと思います。突破口をどこで見出すかがポイントですけど、そこさえつかんでしまえば、あとは自分のペースで試合できる選手ですよね。

5段階評価



過去5戦の戦績

08.09.28『戦極～第五陣～』
○近藤有己
(2R 1分08秒 裸絞め)

08.05.18『戦極～第二陣～』
×ジョルジュ・サンチアゴ
(3R 2分10秒 腕ひしぎ十字固め)

07.07.26 DEEP
○ソ・ボグック
(1R 1分46秒 腕ひしぎ十字固め)

06.08.17『UFC Fight Night 6』
×ディーン・リスター
(3R終了 判定0-3)

06.05.06 Pain and Glory 2006
○ポール・テイラー
(1R 腕ひしぎ十字固め)



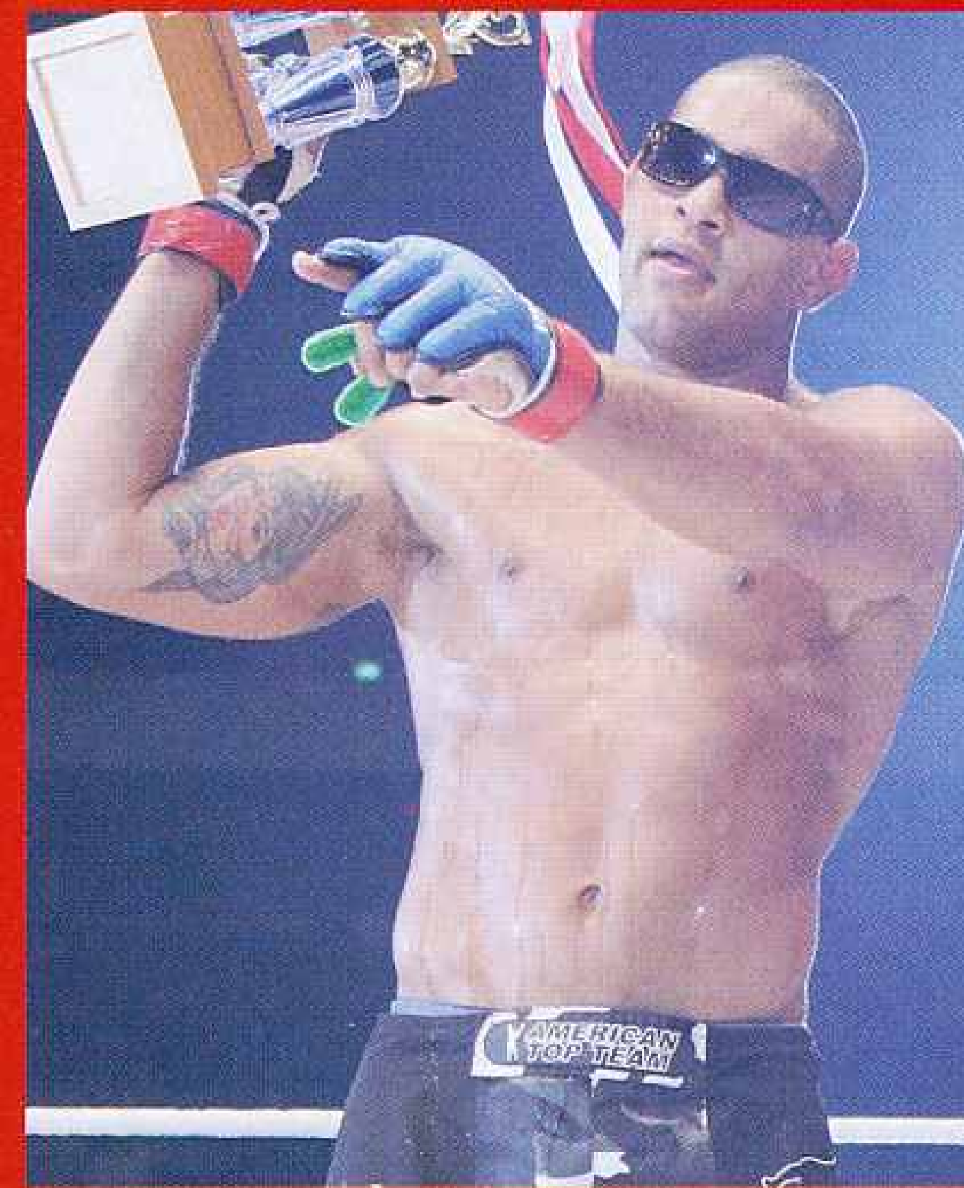
TKに聞く 戦極 ミドル級GP

(※この解説は本誌・阿修羅チョロの謎の“情報操作”により中村vsサンチアゴ、佐々木vsシアーの対戦になるという前提で語っていただいている。決勝で対戦する可能性も含めて広い心を持ってお読みいただきたい……)

ミドル級は、やっぱりサンチアゴが優勝候補……ですねえ(しみじみと)。

そのサンチアゴと闘うカズなんですが、これはね、カズにとっては非常にマズイ相手だと思うんですよ。ハッキリ言って、ピンチです! 要するに、カズは相手をディフェンスに回らせて、自分がガンガン前に出ていければいいんですけど、サンチアゴはカズにとっては攻めてるはずなのに、なかなか手応えを得られずに、逆にサンチアゴに攻められてるっていう展開に陥るんじゃないですかね。サンチアゴのディフェンスはそういうディフェンスなんで。さらに、サンチアゴは攻撃も多彩ですから、カズにとっては守り疲れる相手でもあるんです。あとはもう一つ、スタミナの問題で、カズはスタミナがないですからねえ。一発一発全力でやるヤツって、そういう宿命を背負ってるんですけど。だから、カズに勝ち目があるとしたら、相手にかまわず得意の畳みかける攻撃がいかに出せるか。それしかないと思います!

それから、佐々木とシアーなんですけど、シアーはタイプ的に「ガチャガチャやる」選手なんで、確かに一発の攻撃は重いんですけど、佐々木として



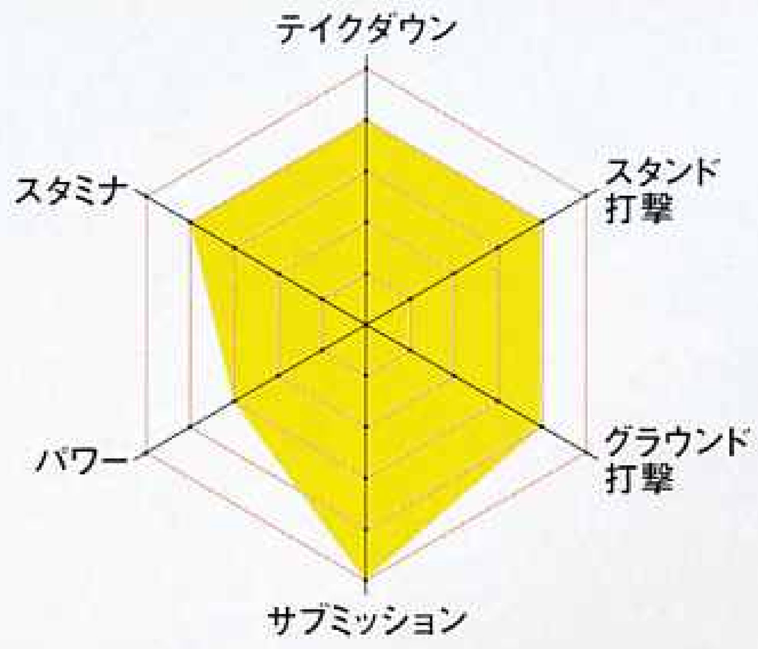
ジョルジュ・サンチアゴ

所属	アメリカン・トップチーム	生年月日	1980年10月9日
出身地	ブラジル	身長／体重	185cm／84kg
バックボーン	ブラジリアン柔術、柔道		
タイトル歴	2007年 ストライクフォース ミドル級トーナメント優勝		

攻撃もディフェンスも「うまい」！ “優勝候補”は最もやりにくい難敵

「強い」というよりも「うまい」という印象ですね。サンチアゴは攻められてしまっても、最低限のディフェンスというか、致命的な攻撃をもらわないような守り方をするんです。それはスタンドでもグラウンドでも同じで、相手としては攻めてるのに攻めてる感じがしない、これをやられてしまうともう根負けしてしまうんですね。で、自分が攻撃するときは、凄く技が多彩なんですよ。打撃にしても関節技にしても。その多彩ゆえに、切り替えが早いし一つの技に固執しないんですよね。相手にとっては一つ技をしのいだのにまた技を出してきたという感じになるんで、これは攻撃するにしてもディフェンスするにしても、ホントにイヤなタイプですよね（笑）。

5段階評価



過去5戦の戦績

08.09.28『戦極～第五陣～』
◯ローガン・クラーク
（2R 3分55秒 肩固め）

08.05.18『戦極～第二陣～』
◯佐々木有生
（3R 2分10秒 腕ひしぎ十字固め）

07.11.16 ストライクフォース
◯シーン・ソロモン
（1R 0分24秒 KO）

07.11.16 ストライクフォース
◯トレバー・プラングレイ
（1R 2分31秒 TKO）

07.09.01 AOW
◯ジェレミー・ホーン
（1R 3分02秒 三角絞め）



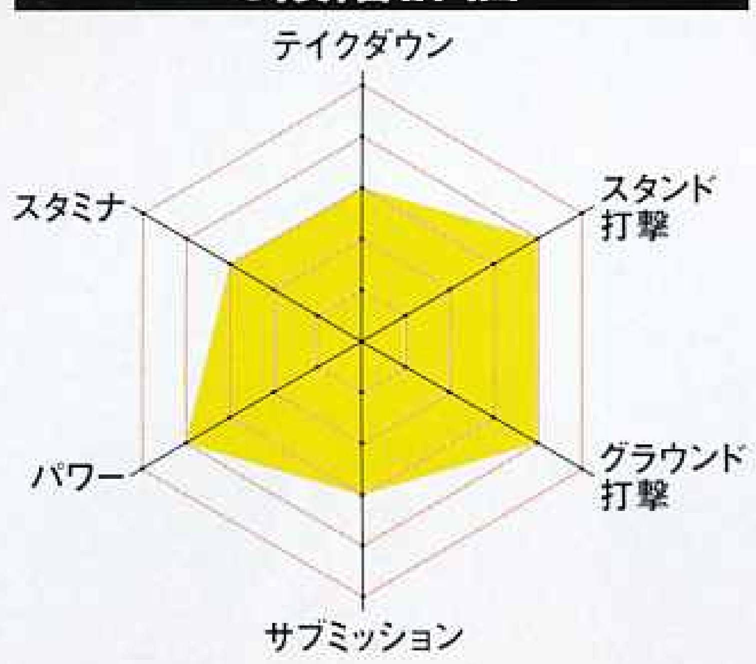
シアー・バハドゥルザダ

所属	ゴールデン・グローリー	生年月日	1984年4月17日
出身地	アフガニスタン	身長／体重	180cm／83kg
バックボーン	キックボクシング		
タイトル歴	第5代修斗世界ライトヘビー級王者		

4人の中で一発の威力はナンバーワン 技術を補う身体の強さと必勝法アリ

シアーは僕らの言葉で言うところの「ガチャガチャやるタイプ」なんですね。要するに、ほとんどの動きが型にはまらない感じなんですよ。以前、三崎和雄と闘ったときに三崎の目に一発いいのが当たりましたけど、あれもガチャガチャやる中でドン！と出たパンチなんですね。それは4人の中で一番強いし怖いんですけど、逆に言うと、それしか持ってないんですよ（笑）。でも、それで勝ち上がってきてるというのは、それだけフィジカル、身体の強さがあるということなんです。でないと、体力がもちませんから。シアーは一個一個完成された技術はないんですが、それに従わなくても勝てるだけのスタイルが備わってるんですね。

5段階評価



過去5戦の戦績

08.09.28『戦極～第五陣～』
◯エヴァンゲリスタ・サイボーグ
（1R 0分22秒 TKO）

08.03.05『戦極～第一陣～』
×三崎和雄
（2R 2分02秒 フロントチョーク）

07.11.17 Ultimate Glory 6
◯ネイサン・スカウタレン
（1R 4分17秒 TKO）

07.07.15 修斗
◯山下志功
（3R終了 判定3-0）

07.05.20 Ultimate Glory 3
◯カート・ベルシュエレン
（1R 0分45秒 TKO）

は一回テイクダウンをとるなり寝技の展開に持ち込むなりすれば、もう自分のペースに引き込めるんじゃないかと思いますね。というのも、シアーは正直、しっかりまとまった技術というのがないんで、佐々木が一度仕掛けられれば、そこで一気にいけなくても、あとはうまく佐々木ペースで転がっていくと思うんですよ。それをどこで見出すかが見どころだと思いますね。

それで、決勝なんですけど、やっぱりミドル級ともなると、パンチの破壊力がどうしてもライト級とは変わってくるので、ハッキリ言って一発ジャブをもらうだけでもキツいんですよ（笑）。ダメージもそうですけど、なんだかんだ言って、4人とも自分から圧力をかけるタイプなんで、そういう部分でもスタミナは削られていくと思いますよ。

『戦極～第六陣～』

埼玉・さいたまスーパーアリーナ
11月1日（土）開始16:00予定

決定対戦カード

［ライト級GP］①北岡悟vs光岡映二　②横田一則vs廣田瑞人
ハン・スーファンvsホルヘ・マスヴィダル（リザーブマッチ）　①の勝者vs②の勝者
［ミドル級GP］③中村和裕vs佐々木有生　④ジョルジュ・サンチアゴvsシアー・バダドゥルザダ
竹内出vsジョー・ドークセン（リザーブマッチ）　③の勝者vs④の勝者
［ワンマッチ］五味隆典vsセルゲイ・ゴリアエフ　キング・モー（出場予定）

チケット料金

VIP席 100,000円（専用入場ゲート・特典つき）／RRS席 30,000円
戦極シート（S席）17,000円（特典つき）／SS席 17,000円／S席12,000円／A席 7,000円

お問い合わせ　ワールドビクトリーロード　TEL.03-3369-2211



魔裟斗、2度目の世界王座奪還!

“野良犬”K-1MAXを語る

全日本キックGM兼カミプロ立ち技委員会委員長

小林聡

こばやし・さとし■1972年3月16日、長野県出身。07.3.9全日本キック後楽園大会で、藤原ジムの後輩・前田尚紀とのファイナルマッチを最後に現役を引退。 現在は全日本キックボクシング連盟のGM（ゼネラル・マネージャー）として活躍。役者としても活動中。キャッチフレーズは野良犬。

魔裟斗の5年ぶり2度目の世界王座奪還で大盛り上がりとなった10.1『K-1 WORLD MAX』武道館大会。準決勝での佐藤嘉洋との“日本最強決定戦”、さらに決勝のアルトゥール・キシェンコ戦と2度のダウンを喫するも、魔裟斗は見事世界王者に返り咲いたのだった。異常な熱気を生んだ今回のK-1 MAXを語るのは、なんと全日本キックGMのこの男ですよォォ!!

聞き手／阿修羅チョロ　撮影／乾晋也

正直、今回は佐藤に勝ってほしかった。そしたらMAXは冬の時代が来る(笑)

——今回、某専門誌に対抗して、『kamipro』立ち技委員会というものを設立しまして、小林さんには委員長として魔裟斗優勝で幕を閉じたK—1MAXについて語ってもらえればと思っています。

小林 自分が委員長なんですか？（笑）。

——勝手に決めさせてもらいました。一人立ち技委員会という感じになってしまいますけど（笑）。

小林 まあ、『kamipro』だったらいいかな。一人なら誰にも文句は言われないし、反論もナシってことで（笑）。

——現在は全日本キックのGMを務める小林さんに聞くのも失礼だとは思うんですが、『kamipro』では、あまりキックは取り上げてないんですよ。

小林 それをわかって『kamipro』を愛読してるんで。逆に立ち技のことか語ったりしてる雑誌は、あんまり見ないんですよね。なんか、鬱陶しくなるっていうか。それこそ、なんとか委員会とか座談会をやったりしてるじゃないですか。

——小林さんはそういった企画はあまり好きじゃないんですよね？

小林 好きじゃないっていうか、語ろうと思えば、いくらでも語れますけど、その輪に加わりたくないっていうか。俺がK—1に加わりたくなかったと同じで。

——一緒にされたくないと？

小林 べつにバカにしてるんじゃなくて、なんでもそうですけど、〝名選手、名監督にあらず〟じゃないですけど、やっぱりトレーナーをやるならトレーナーの勉強しなきゃダメだと思うし。そういう視点で言うなら、よくそういう座談会に出てる吉鷹（弘）さんとかは凄い尊敬してるし。

——某誌の立ち技委員会の一員ですね。

小林 だから、安易にそういう人と関わるのは向こうにも失礼だし。それに誌面っていうのは残るものなんで、あんまり簡単に発言はしたくないなっていうのもあるし。

——言わんとすることは、なんとなくわかりました。

小林 自分はただ単に「おもしろけりゃいいや」って思って観てるだけなんで（笑）。

——『kamipro』のスタンスもそんな感じなので、その視点で語っていただければと。

小林 そうッスよね。ヘタに技術を語ったり、試合リポートやるんじゃなくて、選手の人間性を出したりしたほうがファイターにとってもモチベーションが上がると思うし。たぶん、読んでる人もそっちのほうがおもしろいと思うんですけどね。



注目の日本人対決、魔裟斗vs佐藤嘉洋戦は序盤から両者ともにアグレッシブに攻めまくるも、3R、佐藤が左フックでダウンを奪い大番狂わせ……かと思われたが、その後、反撃のラッシュを見せ執念で延長ラウンドに持ち込んだ魔裟斗がフルマークの判定勝ちで決勝進出！



決勝戦は昨年の王者アンディ・サワーを準決勝で下したアルトゥール・キシェンコと魔裟斗の一戦。佐藤戦に続いて2Rにダウンを喫した魔裟斗は立ち上がると怒濤の反撃を見せ、またしても延長ラウンドへ持ち込み、最後は判定で見事優勝！　次の舞台は大晦日か!?

——というわけで、早速ですが、先日のK—1MAXについて語っていただければと思ってます。現役時代から小林さんは〝K—1に背を向けた男〟と言われたりしてましたけど、今回の大会はテレビで観たんですよね？

小林 観ましたよ。全部早送りで（笑）。

——そうなんですか（笑）。では、早送りで観た感想を聞かせてください。

小林 大月（晴明）の試合の結果が知りたかったんで観たんですよ。さすがにGMとして知らないとまずいなぁと思って（笑）。

——大月選手は小林さんがGMを務める全日本キックの選手ですし、かつて対戦経験もありますからね。

小林 そういうのもあって、ず〜っと早送りで観てたんですよ。「大月、いつ出て来んのかなぁ」って思いながら。

——残念ながら、最後までテレビでは放送されなかったみたいですね（笑）。

小林 そうなんですよ（苦笑）。まあ、そういう試合だったたってことでしょうね。あと、佐藤と魔裟斗の結果は気になりますよ。「どっち勝つのかな？」ぐらいは。

——「どっちが勝つかな？」ぐらいの興味ですか？

小林 まあ、どっちが勝ってもいいっていうか。魔裟斗が勝ってもおもしろくないし、佐藤が勝っても……、いや、今回はどっちかっていうと、佐藤が勝ってくれたら「おしいしいな」って思って。

——それはどういう意味ですか？

小林 佐藤が勝ったらMAX冬の時代が来ると思って（笑）。

——え〜〜、佐藤選手が勝ったら、MAX冬の時代が来るっていうのはどういう意味なんでしょうか？

小林 いやいや、なんでもそうじゃないですか。やっぱり、嫌いなタレントが出てるとチャンネル動かせないじゃないですか。嫌いだけど、観ていたいっていうか。そういうのってあるじゃないですか。インディーのプロレスラーでもいますよね。

——あまりにもしょっぱすぎて、逆に気になってしまうと（笑）。

小林 そうそうそう。そういうのもあって、気になってしょうがないというか。だから、勝ってほしかった（笑）。MAXのためにも。「佐藤がトップになったらどうなるんだろう？」って興味はあるんで。

——佐藤選手に関しては辛口ですけど、早送りで観る限り、試合内容はどう思われました？　評価は凄く高いですけど。

小林 まあ佐藤も頑張るだろうなって思ってたんですけど、勝たなきゃダメでしょ。こんな大チャンスに。彼にはもう人生に2度とないチャンスですからね。

——2度とないチャンスでしたか（笑）。

小林 まあ、戦前の舌戦も含めて魔裟斗ありきだったからね。べつに彼一人で光れるわけじゃないんで。佐藤って「僕の試合は素人にはウケないけど、玄人にはウケる」とか言ったり、マスコミもよく「玄人好み」とか言うじゃないですか。

——よく言われますね。

小林 どっちもウケないッスよ！　申し訳ないけど、俺は玄人ですけど（笑）。

——よく存じ上げてます（笑）。

小林　でも、全然ウケないッスよ。で、関根勤って、昔から佐藤を評価してるけど、あれはわざとでしょ？

——いやいや、そんなことはないと思いますけど（笑）。

小林　だって、関根勤の佐藤最強論ってなんなんですか？「一分間に何発も攻撃できる」とか言ってたことがあったんですけど、それって、ただ単に攻撃力がなくて的確に当ててないってことじゃないですか。ただ、ムダ打ちしてるだけですよ。種のない射精してるだけっていうか（笑）。

——厳しいこと言いますね（笑）。

小林　でもやっぱり、どんなジャンルでもそうだけど、銭を取れるのがプロだと思うんですよ。プロだったら、試合に限らず、たとえば練習でも銭を取れなきゃダメなんですよ。でも、彼の練習は銭取れないでしょ。たまにテレビとかでも流してますけど、「あの練習観て感動しますか？」って話で。……まあ、あんまり言うと嫌いも好きのうちってことで、好きだと思われるからイヤなんだけど（笑）。

——そう思う人も中にはいるかもしれませんね。

小林　俺が藤原（敏男）先生に教わったのは「プロなら感動を与えろ」っていうことで。前田日明さんもなんかの本で言ってたけど、これはGMとして全日本キックの選手にも言いたいんですけど、俺たちはお客さんから銭を取ってるんだから、お客さんに生かされてるっていう意識をもっと持ってほしい。俺らは、べつに米とか野菜を作ってるわけじゃないから、ハッキリ言って、世の中になくてもいいものなんですよ。





魔裟斗vs佐藤戦では、3R、佐藤が左フックでダウンを奪い、場内が騒然となるも、そこから魔裟斗が猛反撃を見せ、試合は延長ラウンドへ。勝ったと思った佐藤の応援団からはリングへペットボトルなどが多数投げ込まれ、角田信朗レフェリーが激怒するという一幕も。

——まあ、極論するとそうなりますね。

小林　そうでしょう。じゃあ、何を与えるすか。選手の勝ち負けなんか、お金を払ってる人からしたら、次の日からの人生にはなんにも関係ないんですよ。それに、いまは格闘技がブームみたいなところがあるけど、テレビに出たからとか、ちょっと勝ち上がったからといって感動も与えられないのに、「浮かれてんじゃねえよ！」って選手が多すぎるっていうか。

——そういう意味では、魔裟斗vs佐藤戦は、お互いにリスクを恐れず打ち合って、お客さんに感動を与えられた試合だったと思うんですけどね。

小林　それはいいことじゃないですか。

——小林さんは引退するまでK—1には背を向けて来ましたけど、魔裟斗選手に対しては、MAXを一から作り上げてきたってことで評価されてましたよね。

小林　凄いと思いますよ。だって、何もないところから自分で道を切り開いてきたわけで。俺は「K—1嫌い」って思われがちだけど、ルールがどうたらとか、そういうことを言ってるんじゃなくて、要は生き方の問題ですからね。

——たまたまK—1とは自分の生き方と合わなかっただけだ、と？

小林　そうそう。K—1ルールはヒジがないからイヤだとか、そういうことを言ってるんじゃないんですよ。ルールなんて、観てる人には関係ないですから。俺は生き方がそういう生き方なだけで。くだらない理由で、背を向けてきたわけではないし、言うつもりもないんで。K—1だろうがキックボクシングだろうが、いい試合はいい試合だし、アマレスのルールだって、わけわかんないですけど、伝わってくる試合もあるじゃないですか。浜口京子の生き様とか感動させられるし。

——生き様はもちろん、気合いもビンビン伝わってきますからね。

小林　やっぱり、生き方の問題であって。べつにK—1だから背を向けたとか、ヒジがないから背を向けたってよく言われる

10.1 K-1 MAX　超ダイジェスト

○大月晴明vs梶原龍児×
（3R終了 判定3-0）



小林GMも注目していたのがK-1 60kg級第二戦目に挑んだ全日本キックの大月晴明とチームドラゴンの梶原龍児の一戦。最終ラウンドでの壮絶な打ち合いを制した大月が判定勝ちを収めるも、大月は不満げに首をかしげつつ退場。

○ユーリ・メスvs小比類巻太信×
（3R 2分59秒 KO）



ケガで欠場を続けていた小比類巻が「太信（たいしん）」と改名し、オランダの実力者ユーリ・メス相手に復帰戦。試合は序盤からユーリのパンチに苦しめられた小比類巻が、残り時間わずか1秒というところで左フックを食らい撃沈！

○ブアカーオ・ポー．プラムックvsブラック・マンバ×
（1R 2分18秒 KO）



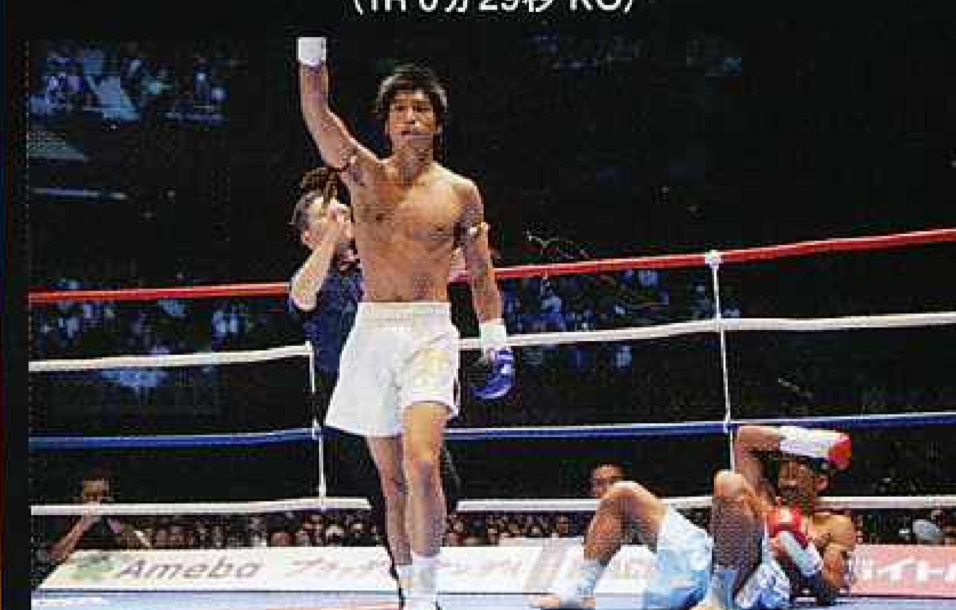
一回戦で佐藤嘉洋にまさかの敗戦を喫したブアカーオがDREAMでも活躍するブラックマンバとリザーブマッチで激突。果敢に攻め立てるマンバに対し、ブアカーオは強烈なフックを連発し、1Rで貫禄のKO勝ちを収めた。

○アルトゥール・キシェンコvsアンディ・サワー×
（延長R終了 判定3-0）



大会前日にロングスパッツの着用が禁止となってしまった前回覇者のアンディ・サワー。本戦はドローとなり、延長ラウンドへ突入した、この一戦、手数で勝り、決勝へコマを進めたのはウクライナの21歳、アルトゥール・キシェンコ！

○上松大輔vs大宮司進×
（1R 0分29秒 KO）



セミファイナルで行なわれたのはISKA世界ライト級王座決定戦、上松大輔vs大宮司進戦。開始早々、上松は右ミドルを効かせると左のヒザ蹴りを連発し、わずか29秒でKO勝利。敗れた大宮司は、試合後、引退を表明！

けど、そういうちっちゃい男ではないんで。時代に合わなかったとか言う人もいるけど、「時代だから」とか「ブームだから」って言って自分の時代も作れないようなヤツに言われたくないし。自分の人生がすべて時代になっていければいいと思うんですよ。それこそ魔裟斗みたいに。

——魔裟斗選手は間違いなく時代を作ってきた選手ですからね。

小林　仮に今回負けたとしても、K—1MAXっていうのは魔裟斗が切り開いてきた道ですからね。そこは凄く認められるし。だから、さっきも言ったけど、ルールとかは関係ないんですよ。ただ、俺はキックルールが一番好きってだけで。K—1だって、凄い感動を与える試合はありますからね。

——そうですよね。

小林　ただ、ライト級で言うと、ムエタイっていうのはホントに選手層がK—1とは全然違うんですよ。そこに目を背けちゃダメだなって思ってただけで。そこにはホントにはてしないロマンがあるし、自分は孫悟空が好きだったんで、天竺にたどり着きたいって思ってたんで。

——それはロマンですよね（笑）。ルールといえば、魔裟斗vs佐藤戦では、佐藤選手がダウンを奪ったのに、そのあとに魔裟斗選手が反撃したってことで、通常なら10—8となるところが9—8となって延長になったことが、物議を呼んでまして。

小林　いいんじゃないですか、べつに（興味なさそうに）。

——佐藤選手の応援団からは納得がいかないってことで、延長になったらペットボトルがリングに投げ込まれたんですよ。

小林　ああ、そうらしいッスね。下品な応援団ですね（笑）。

——角田信朗さんも「ファンのマナーが悪い」ってことで、ブログでかなりエキサイトしてましたけど。

小林　それはそのとおりじゃないですか。神聖なリングにペットボトルなんか投げちゃダメですよ。

——K—1はこのあいだの試合に限らずなんですが、どうしても「魔裟斗に勝たせるようなジャッジをしてるんじゃないか」って思われがちなイメージがあるんですよね。



今大会で勝利し、大晦日の『Dynamite!!』への出場権をゲットしたのが嶋田翔太、卜部功也、日下部竜也、HIROYAのK-1甲子園4人衆（誰が呼んだかK4）。抽選の結果、準決勝はHIROYAvs嶋田、日下部vs卜部の対戦に決定！

小林　まあ、いいんじゃないですか。それにお客さんって必ず負けたほうの味方になりますからね。プロレスファンなんかはとくに（笑）。でも、あそこで佐藤の勝ちになったら納得します？

——それはそれでペットボトルが投げ込まれるかもしれないですね。

小林　かなりジャブも当たってたような気がするし、ダウンがなかったらフルマークで魔裟斗の勝ちだと思うし。それにダウンを食らってても魔裟斗はすぐ立ってたでしょ。早送りで観てたんで、ダウンしたのもわかんなかったぐらいだから（笑）。

K-1ファイター、キックボクサーに限らず、魔裟斗を見習ったほうがいい

——ダウンしたのは気づきませんでしたか（笑）。

小林　すぐ立てばタイだったらダウンを取らない場合もあるし。それに、魔裟斗って気を発するじゃないですか。

——と言いますと？

小林　お客さんからも気をもらって、その気を味方につけるところも彼の強さだと思うし。あの一体化した会場の空気って、なかなか崩せないと思うんですよ。逆に佐藤は勝ちたいんだったら、そのぐらいの男にならないとダメってことですよ。

——なかなか、そこまでの男になるのは大変そうですけどね。

小林　結局は一回ダウン取ったっていっても、そのあとに倒せない佐藤がダメなんじゃないですか。

——判定で文句を言われたくないなら、倒し切らなきゃいけないってことですね。

小林　そういうことですよ。

——小林さんは現役時代は、判定は嫌いというか、判定になるぐらいだったら、白黒つけたいっていうタイプでしたよね。

小林　それこそ、俺はリスクを犯してまで倒すのが格闘技だと思ってるんで。で、攻撃が最大の防御だと思ってるから、べつに判定を考えたことがないっていうだけで。あと、判定になっても、だいたい自分の顔は腫れてますよ。勝った試合でも。

——そういう意味では、佐藤戦、決勝の（アルトゥール・）キシェンコ戦と、アグレッシブな試合をした魔裟斗選手もかなり顔を腫らしていましたね。

小林　魔裟斗は倒しに行ってましたよね。そうじゃないと自分より強い相手には勝てないと思うし、執念を感じましたよ。

——執念の勝利でしたか。


小林　あれだけの試合をやるのは執念ですよ。技術なんか、これっぽっちしか変わんないですから。俺がムエタイの王者に勝ったときなんかも執念のひと言だし。そういう意味では、キックの選手も魔裟斗を見習ったほうがいいと思いますね。

——小林委員長からの提言としては、K—1もキックボクシングも関係なく、お客さんを感動させるような試合をもっと見せてくれってことですかね。

小林　プロを名乗るなら、そうあってほしいッスね。俺はキックで食ってきたからこそ、そういうことを言ってるんですけどね。客あってのモノだから。あとは猪木さんじゃないですけど、「もっと馬鹿になれ！」って感じですね（笑）。

——小林委員長、本日はありがとうございました！

【08年10月7日／都内・築地本願寺第一伝道会館にて収録】



呪いなきプロレス特集 ラインナップ

- 10.13 新日本プロレス両国大会詳報!
- ハッスル女子ファン座談会
- カリスマブロガーが語るハッスル座談会
- 10.6 マッスル自主興行で何が起きた?

呪いなきプロレスの現在(いま)

長らくプロレスは総合格闘技に勝負論を奪われ、
ミスター高橋本で観客論にシフトを余儀なくされた呪われたジャンルだった。
だが、いまこうした呪いやコンプレックスから
自由で新しい"呪いなきプロレス"が芽生え始めている。
今回はそんな新潮流を各団体からピックアップ! これが、呪いなき新世界だ!!

構成／真下義之　大会撮影／平工幸雄



天山vs飯塚派!!

拮抗する「武藤ワールド」と「天山vs飯塚劇場」、観たいのはどっち？

文／真下義之　大会撮影／平工幸雄

10.13新日本プロレス 両国国技館
［チェーンデスマッチ 時間無制限1本勝負］
○飯塚高史 vs 天山広吉×
（21分24秒 レフェリーストップ）

呪いなき新日本プロレス劇場に異変アリ……!?

10・13新日本プロレスの両国国技館大会は、天山広吉vs飯塚高史の血で血を洗うズンドコ抗争劇が大舞台に進出！　武藤敬司がベルトを奪取した相手・中邑真輔の挑戦を受けるIWGP王座戦がラインナップされた。

まず、本誌がプッシュしている天山vs飯塚は、決着戦のクラシカルスタイルであるチェーンデスマッチという手法を復刻。

この試合形式の発表後、じつは『kamipro』編集部内で危惧されたのは「チェーンデスマッチに名勝負なし」という定説。この難問に答えを出したのは、見違えるほど極悪の表情をたたえた飯塚と大流血しながら気合い満点の天山。「名勝負なし」のセオリーをブチ壊すように、20分間ノンストップの決闘を展開。

「デスマッチで20分超え」というと中だるみしそうだが、丁寧につむいだドラマの“溜め”が効いているためか、攻防にも説得力がある。さらに、GBHに場外へチェーンで引っぱり下ろされる天山、ムーンサルトにいくところを引っぱり下ろされる天山、SMの亀甲縛り的に巻かれたあげく締めあげられる天山と、練り込まれた攻防とテンションが噛み合った好勝負に。

7月のランバージャックデスマッチで後楽園ホールを熱狂させた抗争劇は、両国クラスでも熱を届けることに成功した。

一方、1・4東京ドームのメインを飾るであろうIWGP王座戦。この物語をつむぐドームの結末が、今後のプロレス界の盛衰の行方を握っていると言ってもいいほど責任重大な試合であり、今回はその序曲となるハズだったが、流れに急ブレーキをかけるようなフィニッシュを迎える。



本誌は断然、

10.13新日本プロレス 両国国技館
[IWGPヘビー級選手権試合 60分1本勝負]
○武藤敬司 vs 中邑真輔×
(21分39秒 フランケンシュタイナー)

新日本プロレス大会日程
『レッスルキングダムⅢ in 東京ドーム』
東京・東京ドーム
2009年1月4日(日) 開始16:00

チケット料金
ロイヤルシート/20,000円(スペシャルグッズ付)
アリーナA 10,000円/1FスタンドA 5,000円/1FスタンドB 3,000円
シニア・小中学生(1FスタンドB) 1,000円(当日のみ・要学生証)

お問い合わせ
新日本プロレスリング株式会社 TEL.03-6407-3111

いまの新日本プロレスにおいて武藤と中邑の二人は、武藤の言う「規定演技」に収まらない「自由演技」的なムードの強い選手。試合は天山vs飯塚とは好対照な、いびつな中に個人芸の光る試合となった。

ＩＷＧＰ王座戦という基本フォーマットをなぞるような、淡々とした15分間が儀礼的にすぎたあと、一気にスパークした武藤が、中邑をフランケンシュタイナーというアッサリした味つけで下してみせた。

そもそも今年4月の武藤の戴冠劇は新日本がユークス体制となったあと、徹底した中邑&棚橋弘至プッシュ路線を突然、ギアチェンジしたような衝撃があったもの。だが、1・4東京ドームの主役候補と目されていた中邑のリベンジを簡単に一蹴したことで、防衛ロードは2周目に突入。

試合後、次の挑戦候補のアピールもなく、武藤はリング上にベルトを置き去りにしたうえで、コメントルームでは「相手がいねぇ」とボヤき、全日本プロレスの両国大会をアピールするなど、唯我独尊の武藤ワールドを展開。次なる挑戦者は、武藤の世界に互角に対峙できる大物を準備する必要がありそうだ。

こうして、アドリブ一大芸の天才プロレスラー・武藤劇場と、不器用ながらもデスマッチを共同作業的に作りあげていった天山vs飯塚という二つの世界。いったいこれからのプロレス界にとって、どちらのプロレスが求められているのか?

依然として1・4東京ドームの結末次第で、プロレス界が命運は決するのは間違いないが、勝負論なき時代の呪いなきプロレスの最重要課題は、どこまで自由な発想で勝負できるのか? ということ。

このさらなる巨大な難問への返答は、2カ月後に出る!!

ハッスル後楽園大会に
"新種"のファン誕生!!

呪いなき
ハッスル女子ファン座談会



「プロレスファン以外の層を獲得する」ことを公言していた『ハッスル』。実際、後楽園ホールでは、非プロレスファンのまったく新しいファンも生まれている。今回はそんなコンプレックスなき『ハッスル』大好き女子たちが集結!!

司会／真下義之　撮影／堀江ガンツ　大会撮影／平工幸雄

呪いなきプロレスの現在（いま）

――え〜。今日、集まっていただいた皆さんは、「『ハッスル』大好き!」ということでよろしいんでしょうか?

一同　大好きでーす!（と声を揃えて）。

――皆さんは、普段は会社にお勤めされてる普通のOLさんで、ここ数年でハッスルファンになったと聞いてますが。

マリコ　もう、『ハッスル』を優先するために仕事を調整してますから（笑）。

――仕事より優先順位が上! どのくらい頻繁に会場に行ってるんですか?

エリカ　このメンバーだと、後楽園ホールは、毎『ハッスル』ですね。

――後楽園は皆勤状態。皆さん、もともとプロレス好きじゃないと思うんですけど、最初に観たときはどうでした?

マリコ　去年の『ハッスル・マニア2007』（横浜アリーナ）を初めて観たんですけど。ホントに「楽しい〜!」って。プロレスって裸みたいな格好で、汗だくでやってるイメージしかなかったけど、さわやかだし、"観たことある人"も多かったし。

ヒロコ　確かにテレビで観たことある人は多いよね。

マリコ　HGやインリン様、『ハッスル・マニア』は小池栄子も出たじゃないですか? あとオリラジ（オリエンタルラジオ）まで出てたし。逆に「隣にいるオジサン、誰?」って（笑）。

――あ、川田（利明）さんはご存知なかった、と。

マリコ　はい。知りませんでした。

エリカ　私は、凄く詳しくはないけど、数年前にアメリカにいたときにWWEを観てたので、「日本でもTAJIRIが観れる!」って観に行ったら、『ハッスル』自体が凄いおもしろくて。日本だとWWEは、地上波もやってないけど、『ハッスル』はいつでも観に行けるのがいいなって。

ヒロコ　私はPRIDEが好きで、小川（直也）がいた頃から『ハッスル』は知ってたんですけど、最初は「下品だな〜」って大嫌いだったんです。でも、会場に行くうちにハマって。きっかけはEricaちゃんなんですけど……。

――はぁ。きっかけはアジャ・コングのErica?

ヒロコ　私、ミニーマウスに憧れてるんで、あのお尻と水玉模様に惹かれちゃって（笑）。それに、いままでプロレスは血が流れたり、ケガしたり痛いのがイヤだったんだけど。そういうのより、こういう誰もケガをしないほうがいい!

エリカ　そうそう。安心して観れるよね! あんまりハラハラしたくないし。

――プロレスではハラハラしたくないですか（笑）。

ヒロコ　あと飛んだり跳ねたりが多くて、動きがスピーディーなのもいい!

――ちなみに、一番好きな選手は?

エリカ　私はやっぱりTAJIRIさん! いまだに一番好きですね。



ヒロコ
都内・某会社勤務。このメンバーの中では、『ハッスル』観戦歴は最長の約3年。好きなレスラーはTAJIRIとErica。昨年はなんと後楽園ホール全大会を観戦!



エリカ
都内・某会社勤務。帰国子女でアメリカで出会ったWWEにハマり、帰国して『ハッスル』にハマる。観戦歴は約1年。好きなレスラーはやっぱりTAJIRI。



マリコ
都内・某会社勤務。『ハッスル』観戦歴は約1年。いままでプロレスは大の苦手だったが、現在は大阪プロレスにまで追っかけ観戦するほど、KUSHIDAに夢中。

ヒロコ　先に言われちゃったけど、私もＴＡＪＩＲＩファンですね。

マリコ　……私はＫＵＳＨＩＤＡ選手なんです（と照れながら）。動きも格好いいし、グッズ売り場で握手してもらってから「クッシー、かわいい！」って。

――ＫＵＳＨＩＤＡじゃなくてクッシー（笑）。

マリコ　いままでプロレスラーって、黒タイツを穿いてマッチョタイプって印象が強かったから、「絶対無理！」って思ってましたけど……。

――クッシーは違いますか？

マリコ　違います！　試合後に、グッズ売り場でクッシーめがけてダッシュして。Ｔシャツ買って、サインしてもらって、握手してもらって、写真撮ってもらったり。ウフフフフ。

エリカ　私もサインがほしくて、パンフレットとかキャップを買ったりしてますね。でも、あんなに気軽にサインをもらえるなんて嬉しいし、ファンとの距離がメチャクチャ近いじゃないですか！

ヒロコ　私もＴＡＪＩＲＩ選手が来るときは、「この機会を逃すか！」って、突撃しますから。

――皆さん、グッズ売り場でエンジョイしまくってる、と。会場では、「総統」コールとかもやってるんですか。

マリコ　します、します！　おもいっきりやってます。

ヒロコ　私はやってないなぁ。

エリカ　私もやらない！　私は自分がハッスル軍の一員だと思ってますから（笑）。そのぐらい感情移入してるし、モンスター軍に負けると悔しいですもん！

――す、凄い思い入れですね……。

マリコ　私はクッシーファンだけど、たとえばＨＧとモンスターＣが試合をしたら、Ｃをメッチャ応援しますね。

――じゃあ「Ｃ！」コールとかも。

マリコ　超やりますよ！　「まだかな、まだかな～」って、手でＣのマークを作って待ってますから（笑）。

――ちなみにいままで、一番盛り上がったのは？

マリコ　インリン様の引退試合は泣きましたね。ホント、マジ泣きしましたから！

ヒロコ　メチャクチャ泣いてたよね（笑）。私はちょっと古いけど、ＧＭ総選挙とかやってた頃がおもしろかったな。

――ありましたね。坂田（亘）とＲＧと佐藤耕平とかが討論会とかやったり。いまやってる『ハッスルＧＰ』はどうですか？

マリコ　あ～……、あんまり好きじゃない（キッパリ）。

エリカ　「なんでハッスル軍同士でやるんだろ？」って。どっちを応援していいかわからなくなるし。そもそもなんでトーナメントをやってるのか、意味がわかんない。

ヒロコ　最終的に誰と誰が残ってるのか、凄くわかりにくかったから、興味も持てなかったし。

痛いプロレスより、こういう誰もケガをしないほうがいい!!（ヒロコ）

――この前、名古屋大会で準決勝をやりましたけど、そこらへんの興味は？

エリカ　とくになかったですね……。

ヒロコ　私もなかったなぁ。

マリコ　私は一応、ホームページでチェックしました。「あ、ゼウス負けたんだ」って（笑）。

――じゃあ皆さんは基本的に後楽園で観る『ハッスル』が一番おもしろいわけですね。普通のプロレスファンみたいに、全体の流れが気になるわけじゃなく、「その場が楽しければオッケー」って感じで。

エリカ　そうですね～。後楽園に行けば、「前回の様子」ってストーリーを復習してくれるから「それでいいや！」って。

マリコ　あれは確かにラクだよね。

エリカ　だから普段から情報を追いかけなくても、「いつでもついていける」って感じで。あのコーナーがなかったら、調べるかもしれないけど。



ハッスル女子ファンのあいだで人気を二分(?)するのがTAJIRIとKUSHIDAの師弟コンビ。スピーディでトリッキーなムーブは"非プロレスファン"にもわかりやすく、キャッチーなのだ。

会場で流れを復習してくれるから、情報は追いかけないです（エリカ）

マリコ　復習してくれないと、行くのが途切れるかもしれない。「わからなくなってきたから、もういっか」って。

ヒロコ　昔はもうちょっと流れが気になりましたけど。「坂田はホントにエスペランサーと闘えるのか？」とか、そういう関門がちゃんとあったけど、ＨＧが川田と闘ったときの栃木の三人衆？　あのへんから、ちょっと……。

――鬼怒川三人衆ですね。鬼蜘蛛の「鬼」、ザ・モンスターＣの「Ｃ（怒）」、最後がザ・キヌガワン・ピラニアン・モンスターというじつにザックリした展開で。

ヒロコ　ああいう、その場限りのネタが増えてきたあたりから、あまり気にならないですね。

マリコ　最近はちょっとわかりにくいですよね。ただ、私はいまだにこの人（川田を指しながら）が強いのかどうかすらよく知らないんですけど……。

――いやいや、川田さんは日本を代表するトップレスラーですよ！

マリコ　へぇ～。そうなんですか（興味なさそうに）。

――ちなみに皆さんは、ほかのプロレスには興味ないですか？

マリコ　大阪プロレスはこの前、新宿ＦＡＣＥに観に行きました。……クッシーを観るために（笑）。でも大阪プロレスもお笑いっぽかったから、ホントのプロレスがどういうものかはわからない。

――じゃあ、「もっと凄いプロレスがあるよ！」って言われたら、観たいですか？

一同　…………（押し黙って）。

――あ、べつに興味ない（笑）。

ヒロコ　う～ん。実際に観てみたら、おもしろいのかもしれないけど。

エリカ　ドラゴンゲートとかはスピードがあって、おもしろそうですけど。

――いまのところは『ハッスル』だけで充分ですか。じゃあ、最後に今後の『ハッスル』に望むことをお願いします！

ヒロコ　えーと。Ｅｒｉｃａちゃんを復活させてほしい！　＼(>O<)／チエちゃんはいるけど、女の子で引っぱっていく人がいないんで。

エリカ　私はもっとバカなこととか、派手なことをやってほしい！　せっかくありえないキャラがいっぱいいるのに、最近はこぢんまりしちゃってますから。昔、ＷＷＥで観たトラックで会場を壊したり、タンクからビールを放水するとか。ムチャをしてほしい。

マリコ　個人的に、クッシーにもうちょっとしゃべらせてほしいですね。あまりおもしろいことは言えないと思うけど（笑）。ああいうかわいい子が増えれば、女性ファンももっと増えるんじゃないんですか。最近は、声援も増えてますし。

ヒロコ　マリコちゃんは後楽園で一番、大きい声で叫んでるよね。「クッシ～～！」って。

――あ、百田男みたいな感じで（笑）。

エリカ　この前、ＴＡＪＩＲＩにタッチしたら、「オヤジはいいよ！」って野次ってたから、ビックリしたよ。

マリコ　すみません。あのときは、ちょっと泥酔してまして……。

――そのへんはしっかり反省していただいて、引き続き『ハッスル』をエンジョイしてください！

【08年10月3日／kamipro編集部にて収録】



特濃90年代プロレスファンがハッスルを語った!!

カリスマブロガー座談会

プロレスから世間へと勝負を挑んでいた『ハッスル』が、最近少し鳴りをひそめている。
そんな状況をファンはどう思っているのだろうか？
プロレスを題材として扱うブロガーさんたちを招いて最近の『ハッスル』をどう思ってるか聞いてみました。

司会／坂井ノブ　試合写真／平工幸雄

――皆さん、今日はハッスルブロガー座談会ということで、お集まりいただきました。まずは自己紹介からよろしくお願いします！

ブラック　プロレス専門ブログ『BLACKEYE2』をやってます。名前は杉です。変態世代の30代です（笑）。

アイアン　『MMA IRONMAN』のジーニアスです。僕も30代中盤です。いろいろ書いてるうちに海外の格闘技情報ばっかり書くようになって。最近、『ハッスル』熱は醒めてるんですけど（笑）。関東の大会はほとんど行ってますね！

カクトウ　『カクトウログ』のSAKAiです。僕も皆さんと同世代ですね。おもに新日本プロレス中心なんですが、『ハッスル』も後楽園にときどき行ったり、ビッグマッチもだいたい行ってます。

――皆さん、同世代ですから、同じようなプロレス経験をされてるのかなって。

ブラック　自分の場合、W★INGとかインディー好きなんで。かなりヒン曲がってますけど（笑）。

アイアン　僕はインディーも女子プロもUWF系もなんでも観た結果、普通のプロレスが受け付けなくなったんですよ。基本的に四天王プロレスが大嫌いで、ノアの記事は一行も取り扱ってないですから！

カクトウ　僕は高校まで四国にいた地方のファンで、新日本が年に2回くるかどうか。あとはテレビと『週プロ』で。大学に受かったら、「第二次UWFを観に行くんだ！」みたいなモチベーションで。

――なるほど。今日は、本題の前にプロレス&格闘技ブロガーの実態のお話も聞きたいんですが、皆さんはほぼ毎日記事をアップされてますよね。

ブラック　いや〜。大変ですね（しみじみと）。

――もしかして、いまの時間帯（平日21時）は、ホントはこんなことしてる場合じゃないかもしれない（笑）。

アイアン　ちょうどネタを探して、巡回してる時間ですね。海外ネタとか、「どの記事を訳そうか」って考えたり。たいしたニュースがないときは時間もかからないけど。ひどいときは夜9時から始めて、終わったら夜中の1時、2時とか。4時間以上かかったりしますから。

――4時間以上も！　半分仕事状態ですね。ネタ的にはいまは総合のほうが強いですか？

カクトウ　アクセスでいえば、総合が多いですね、プロレスが1万アクセスとすると、『戦極』の旗揚げ戦は3万アクセスとか。ただ、自分はやっぱりプロレスファンですから、総合のほうがアクセスあ

座談会出席者プロフィール



BLACKEYE2
（ブラックアイ・ツー）
管理人　杉
URL　http://beye2.com/
プロレス・格闘技の情報や「プロレスとカテゴライズされる可能性があるモノ」まで含めてニュースを紹介する。とくに大手メディアがまったく拾わないようなインディー情報にも精通している。



MMA IRONMAN
（エムエムエー・アイアンマン）
管理人　ジーニアス
URL　http://sadironman.seesaa.net/
MMAの海外ニュースが中心で、プロレス関係のニュースはあまり多くはないのだが、『ハッスル』のネタは追い続けているブログ。本文中でも語っているように首都圏近郊の『ハッスル』の会場にはよく足を運んでいる。



カクトウログ
管理人　T.SAKAi
URL　http://kakutolog.cocolog-nifty.com/kakuto/
プロレス・格闘技の情報を紹介するサイトで、前田日明の情報はとくに強い。会場にも足を運び、会場から速報を行なうことも。プロレス愛あふれる書き込みが多い。

ると寂しいなぁって。
——『BLACKEYE』さんは、この中で一番プロレス寄りのブログですが。
ブラック この中では、『ハッスル』の記事のアクセスは一番あるんじゃないですか。というか、『ハッスル』に限らずみんな芸能人ネタは好きなんですよ。芸能人が試合をやるウワサがあったら、詳しく知りたいじゃないですか。昔、アクセスが凄く多かったのが、「赤井秀和の娘が『ハッスル』参戦熱望!」という記事。ウワサだけで終わりましたが(笑)。
——なるほど。ちなみに聞きづらいですけど、ブログって儲かるんですか?
ブラック アフィリエイトとかですよね。皆さんやってらっしゃいますけど、たいしたことないですよ……。
アイアン とてもそれだけで生活できるレベルじゃないですね。実際、ブログでアフィリエイトやってる人の約7割が月に1万円以下らしいんですが。それに比べりゃ多いですけど。そこがモチベーションじゃないですよ。
ブラック 自分は始めたのが早かったから、野望もありました(笑)。最初の頃はアフィリエイトの説明で「10万円くらい簡単」とか書いてあったから。でも、調子いいときでも……ウン万円くらい。
——お金じゃない部分で稼働しているわけですね。で、あらためて皆さんは『ハッスル』をどう観てました?
ブラック 僕はWWEも好きなんで、「日本でエンタメを本気でやったら、通用するのか?」って部分で『ハッスル』は旗揚げから注目してました。

「日本でエンタメを本気でやったら、通用するのか?」って旗揚げから注目してました(BLACKEYE2)

アイアン 意外かもしれないけど、『ハッスル』はけっこう本気で応援してるんですよ。プロレスをもう一度メジャーに引き戻すには、芸能人や世間を巻き込むような「ハッスル的手法しかない!」と思ってますから。
カクトウ 僕は限界をわかりつつ、しがみついてる頑固な新日本ファンなんで(笑)。最初は「『ハッスル』はプロレスじゃない」って、完全無視だったんです。でも和泉元彌の参戦あたりから、「さわらずに無視するのはよくないな」と記事として取り上げ始めた。ただ、僕みたいなスタンスの読者から「『カクトウログ』が『ハッスル』を取り上げるなんてガッカリした」って声も届きましたけども。
——じつはこの3つのブログってまったくスタンスが違いますよね。一番、『ハッスル』で盛り上がったのは、どのあたりですか?


いつも華麗でゴージャスだったインリン様が、5.24『ハッスル・エイド2008』では花道ならぬ通路を歩いて入場した。確かに、ちょっと寂しい。この大会はステージも設置されず、ファンや関係者のさまざまな憶測を呼んだ。

ブラック 僕は『ハッスル・エイド2006』。ザ・エスペランサーが登場する前のタマアゴのくだり。フジテレビショック後の不安定な状況で、タマアゴの中身も二転三転して、「どうなっちゃうの?」っていうスリリングな状況を巻き込んだうえで、「凄いものを観たな」って。
アイアン 僕は『アサヒ芸能』(徳間書店)で台本が流出したとき、それをネタにするような柔軟な姿勢が凄いなって。プロレス頭を駆使して乗りきったと思うし。あと直接は観てないけど、小川(直也)がインリン様にフォール負けしたときは興奮しましたね。髙田総統の言う「プロレスを根こそぎブチ壊す!」ってのを完全に体現していたから「すげえっ!」って。
カクトウ 僕はやっぱり和泉元彌ですね。「試合にならないだろう」と思って半分バカにするつもりで観に行ったら、心の底から笑ったし、その笑いが感動につながるくらいのものがリング上で展開できるんだってホントに感心しましたから。
——よくわかりました。ところで、最近の『ハッスル』はどうですか?
アイアン う〜ん。まず、僕はインリン様の引退のときの絵に納得してないんですよ! インリン様が普通に入場してきたけど、あれは花道作らないとダメですよね。アリーナでお客さんと同じ目線に立っちゃうインリン様は魅力半減というか。花道が作れないならオープンカーで入場するとか、御輿で入場するとかいくらでもやり方はあったのに。
ブラック まぁ、そこは『ハッスル』をやってる人はみんな思ってるだろうから。逆に「よっぽど大変なんだろうな」って。
アイアン ただ、観る側からしたら非日常的な世界を求めて行ってるのに、あんまり大人の事情とか連想したくないじゃないですか?

『ハッスル』ってお金と体力がセットなビジネスモデルだったと思うんですよ(カクトウログ)

カクトウ ……僕も最近は観ていて寂しい部分はありますね。『ハッスルGP』も最初は髙田総統が「勝敗だけでは決めない」と言ったのに、普通に試合で勝敗が決まってるから、「どこかで仕切り直すのかな?」と思ってたら、そういう動きもないし。
——むしろ最近は、プロレス側に寄ってますよね。
カクトウ 観る側も「次の仕掛けはなんだ?」とテーマを探している状態で。そこで、あきらめかけている人と、テーマを探しながらとどまっている人がいて、"首の皮一枚"状態なのかなって。
ブラック あの『ハッスル』だけに「何かあるんじゃないか?」と期待はしてるんですけど。やっぱりTAJIRIさんの「サイコロジー」発言の影響は凄く大きいんですかね。
——ああ、「バック・トゥ・レスリング」の姿勢を表明した『kamipro Special 2008 SPRING』のインタビューですね。いまの路線に影響があったなら、心苦しいんですけど。
ブラック あれを読むと『ハッスル』こそ正しい!」って思える。興行も「毎回、サプライズばかりで過激になるとネタが薄くなるから、徐々に盛り上げて、『ハッスル・エイド』とか『ハッスル・マニア』でドカン! と爆発するようにしている」と。そういう刷り込みがあるから、ファンは「大晦日まで様子を見よう」って部分はあるんですけど。
——では、今後にどういう期待を寄せてるんでしょうか?
ブラック いまは残念ながら、『ハッスル』の十八番だった世間に向けて何かをやっている感が少ないですね。『東スポ』に載っていた、「新日本の1・4東京ドームの裏で大会をやる、やらない」っていうのも、「なんで新日本やノアの相手をするのかな?」って。それに『ハッスル』がプロレスに乗り込むのはいいけど、『ハッスル』自体がプロレスに向かうのは、どうなんだろうって。試合内容がよくなってるのはわかるんですけど。
——『ハッスル』の試合内容は評価されてるんですか?
ブラック ただ、『ハッスル』は対世間やテレビ番組へのベクトルが一番重要だと思うんです。試合内容だけで勝負するなら、ドラゴンゲートのほうがお茶の間ウケはしそうだし。『ハッスル』だから地上波がとれたはず。
カクトウ あと、去年の大晦日のゴール


ファンの立場からほぼ毎日ブログを書き続けているお三方。それぞれプロレスや『ハッスル』に対するスタンスは異なるのだが、「現状のままだと『ハッスル』はヤバい」という意見は一致した。

これは呪いなき時代の『私、プロレスの味方です』なのか……？

デン放送が決まったときに『週プロ』で坂田（亘）が「他団体がなんでいままでの路線でやってるのかわからない」みたいな発言をしてて、そこまで言いきっていたのに、「普通の試合に回帰して、普通のプロレス団体の方向に進んでいる」という部分には疑問もあります。プロレスって主張とセットで観る部分もありますから。

アイアン　これは、僕の友人が言ってたんですけど、「団体って苦しくなるといい試合をやろうとする」って。「いまの『ハッスル』はまさにそれだな～」と。四天王プロレスの誕生も全日本プロレスから天龍（源一郎）が抜けたときだし、天龍革命も長州（力）が抜けたのがきっかけですし。

——そういう試合から、急上昇した例もありますけど、『ハッスル』の場合、その方程式が当てはまるのかどうか。

ブラック　ファンも『ハッスル』はメジャーにガンガン上がるところに魅力を感じてついていった部分があるんで、『どハッスル』（テレビ東京系）の放送が終わって、インリン様がいなくなって……。となると、テンションを上げていく仕掛けに期待したいですよね。いままでは、リング上はエンタメだけど、リング外は世間に向けてゴールデンタイムに挑戦するようなガチンコ感が見えましたから。

アイアン　ただね。じつは後楽園ホールに行ったら満足できるし、そこそこおもしろいじゃないですか。それに後楽園特有のハッスルファンも固定されてきてますし。

——じつは、この前のページでプロレスを知らない、後楽園に通ってるハッスルファンの女性たちに話してもらったんですけど。ホントに後楽園だけで満足してるんですね。そんな彼女たちも『ハッスルGP』にはダメ出ししてましたけど。

アイアン　やっぱり勝負論みたいなものって『ハッスル』の世界に合わない気がするんですよ。

ブラック　もうね……。極論ですけど、大会の途中で誰かが出てきて、「『ハッスルGP』はやめよう！」って言ってもいいと思うんですよ。

——あ～。『ハッスルGP』決勝の栃木大会は、初開催とか特殊な場所で「何が起こるんだ？」っていうところで注目されてますけど、『ハッスルGP』の本質的な部分で注目が集まってるわけじゃないですし。



"エース" 坂田亘と "妖精さん" 小池栄子の感動的なラストシーンなどを見てもわかるとおり、ハッスル世間へ届かせるには絶好の素材。今後どうやって展開していくのか注目だ!

カクトウ　僕は、坂田に関しても、スコット・ノートンに勝ったり、格上の選手に勝っても、ちょっと説得力が足りない感じはありますね。『ハッスル』って、リハーサルの存在も匂わせてたりして、純プロレス的な試合で説得力が得られづらい空間を作りあげちゃいましたから。そこをおもしろさで突き抜けたのが小池栄子の妖精さんだった。そういうふうに『ハッスル』ってお金と体力がセットなビジネスモデルだったと思うんですよ。

ブラック　いま芸能人を呼ばないのは、あえてやらないのか、やれないのか。たいした芸人が呼べないから、呼ばずにプロレスを煮詰めようみたいなノリなのか。

——いままで戦略的だっただけに深読みしたくなりますね。

ブラック　スーパーHGの展開を見ていても煮えきらない部分があるし。ただ、ニセHGの不気味さはおもしろいし、この前はダンプ松本もよかったですよね。いまや『ハッスル』ではIWA JAPAN勢が大活躍で（笑）。

——なぜかIジャワールドが爆発してますか（笑）。ちなみに今後、『ハッスル』の力になるような芸能人はいますかね？

カクトウ　やっぱりインリン様みたいに主義主張がありそうなタレントがいいですね。インリン（・オブ・ジョイトイ）が凄いのはいまもプロレス的な話題の作り方をしてるじゃないですか。

——あ～、インリンさんはいまもプロレス界の住人というか、一人『ハッスル』って感じで。

カクトウ　だから、よかったんだろうなって。いま、オーディションで募集してる中から、おもしろい人が出てくるのかには、期待したいですけど。

——それから、『ハッスル』の軸である髙田総統はどうですか？

アイアン　髙田将軍がなかったことになってたり、エスペランサーは死んじゃったし。総統でやれる選択肢がどんどん狭まってますよね。いまは総統劇場でギャグをやるしかない状況になってるんで。……いっそ「髙田総統が死ぬ！」っていう展開もアリかなって。

——ああ、そういうおもいきった針の振り方はおもしろそうですね。

ブラック　でも、インディーとかはお金がなくてもやってますし、『ハッスル』はもっとアイデアだけで勝負できる可能性は全然あると思いますよ。

12月30日予定の両国大会には期待したいし、何ごともなく普通に終わってほしくない（MMA IRONMAN）

——アイデアがあればなんでもできる！『ハッスル』はコンセプトがしっかりしてるから、お金をかけなくても、いろいろ工夫できるハズですし。

アイアン　だから、12月30日に両国大会をやるウワサもありますけど。そこは期待したいし、逆に年末で何ごともなく普通に終わってほしくないですよね。

ブラック　それはホントにそう思います。だから年末は期待しているファンも多いし、正念場ですよ！

——まさに『カクトウログ』さんの言った首の皮一枚状態、と。そこは意見が一致しましたね。いや～、でもこれだけ語れるってのは皆さん、活字プロレスがベースな部分はあるんですか。

ブラック　そこがないと「プロレスで語ろう」とは思わないですよね。そこを知らない20代の人とはノリが違う。

アイアン　「おもしろかったね、だけで終わったらダメだ」っていう部分はありますね。

——でも、さっき言った後楽園好きの『ハッスル』ファンの女子たちは、ホントに「おもしろかった！」だけで終わるんですよ。ほかの大会は気にしないで、「次の後楽園いつ？」みたいな。

一同　へぇ～～……（とあっけにとられて）。

——驚いたのは会場で前の大会の説明とがあるから、「会場に行くだけでいい」って感覚になってるんです。だからプロレス雑誌も読まない、ネットもほとんど見ない。基本的に情報収拾をしようとしていないんですよね。そこは感覚的には新しいんだけど、いままでの活字プロレス的な方法論だと、僕らはまったく太刀打ちできないなって。

アイアン　ましてや、そういう人たちがブログで感想を書いたりしないでしょうし。

——いや、『mixi』とかでは書いてるんですよ。「今日、おいししいもの食べた！」みたいな感じで（笑）。

アイアン　あ～、そういうスイーツな感覚なんだ。それは全然わからないなぁ！

——もう、ハンパな二極化じゃないですよね。

カクトウ　ホントはそっち側もビジネスとして、たんまり巻き込めればいいんでしょうけど。『ハッスル』には、そういう可能性もあるんだから、頑張ってほしいですね。

——そのへんの動向も含めて見守っていきたいと思います。今日はありがとうございました！

【08年10月3日／『kamipro』編集部にて収録】

ハッスル今後の大会スケジュール

10月26日（日）栃木・宇都宮市清原体育館（17:00）
11月20日（木）東京・後楽園ホール（19:00）
11月22日（土）茨城・水戸市民体育館（17:00）
12月24日（水）東京・後楽園ホール（19:00）
12月25日（木）東京・後楽園ホール（19:00）
※カッコ内は開演時間

お問い合わせ
ハッスルエンターテインメント
TEL.03-3221-2431
www.hustlehustle.com/

kamipro books

これは呪いなき時代の『私、プロレスの味方です』なのか……!?

八百長★野郎

プロレスの向こう側、マッスル

『kamipro』編集部編
マッスル坂井 監修

呪いなきレスラー・マッスル坂井がプロレスのすべてを語った!?

あのマッスル坂井が、ミスター高橋本にカミングアウト隠謀論、プロレス大相撲化構想から、「プロレスのお約束」までズバリ答えた、徹底インタビュー敢行!!

大槻ケンヂ、菊地成孔、森達也、杉作J太郎がプロレスの虚実に迫る!!

元プロレスファンの知識人、大槻ケンヂ、菊地成孔、森達也、杉作J太郎がいまこそプロレスというジャンル、『マッスル』を語るロングインタビュー掲載!!

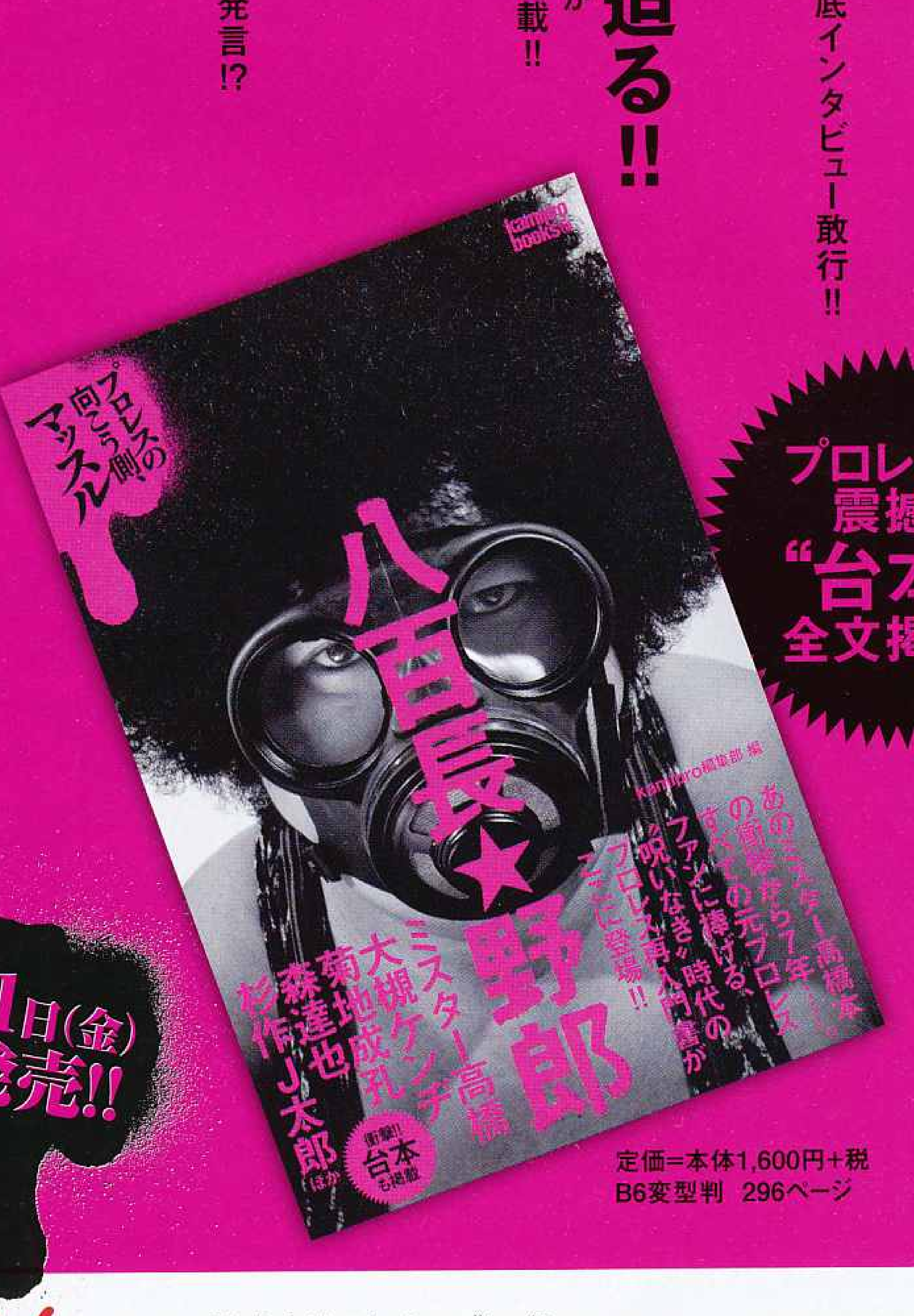
「三者三様」であの超大御所がまさかのカミングアウト発言!?

緊急開催!! 「マッスル三者三様」に集まった異色メンバーとは? さらに、あのプロレス界の超大御所・菊池孝までが、まさかのぶっちゃけ発言!?

ミスター高橋×マッスル坂井 禁断の男たちがついに初遭遇!!

ミスター高橋とマッスル坂井、マット界の問題児(?)が初遭遇!! ほか高木三四郎インタビュー、ハチミツ二郎も参加の「マッスル狂座談会」など企画大充実!!

プロレス界震撼!! “台本”も全文掲載!!



10月31日(金) 堂々発売!!

定価=本体1,600円+税
B6変型判 296ページ

enterbrain 株式会社エンターブレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町 6-1 TEL.0570-060-555 (代表) [通信販売のお問い合わせ先] http://www.enterbrain.co.jp/

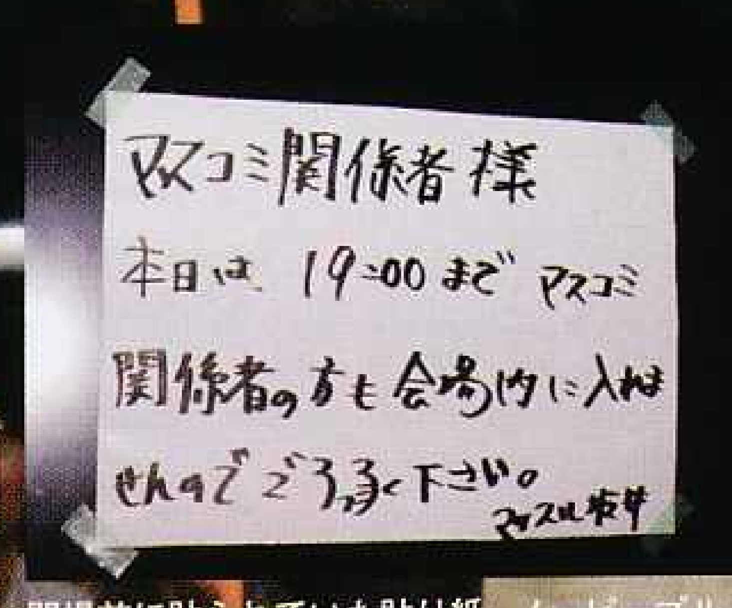
"呪いなきプロレス"が演じた"呪われたプロレス"とは?

プロレス界最大のタブー!? ミスター高橋が突如解禁!!




「実況解説の予算がなかった」今大会。急きょ、実況を村田晴郎アナ。解説は試合をしながらアントーニオ本多が担当! この流れで村田アナはプロレスデビューするハメに!


今回もチケットは完売。マッスル坂井自主興行という大会名とハコの規模から、「ミニマムな大会」という予想をくつがえしたネタ&衝撃満載なじつに『マッスル』的大会となった。



開場前に貼られていた貼り紙。ノーピープル、ノーマスコミで鶴見亜門自主興行が開催される配慮、という建て前だったが、今回のネタバレを危惧した厳重な警戒体制だったのか?


大喜利でミスター高橋は「ジャイアンツの球団名変更は?」の問いに「アンドレ・ザ・ジャイアンツ」。「妖怪ぬりかべの弟の名は?」の問いに「セメントボーイ」と抜群の回答!



前日の『キングオブコント2008』で優勝したバッファロー吾郎と「時空を越えて」映像で大喜利対決を行なった坂井。この大喜利がミスター高橋の毒を緩和する伏線にもなっていた。



すべての試合に乱入した海賊男は、大会ラストでミスター高橋を強制拉致、という「ミスター高橋っぽいオチ」を展開。「やめろ!　高木!」という言葉が会場中に鳴り響いた。

衝撃のラストシーン、マッスル坂井と高木三四郎の〝覚悟〟を観た

文／真下義之　撮影／平工幸雄

「おもしろき　こともなき世を　おもしろく」。この日の大会中、マッスル総合演出の鶴見亜門は、高杉晋作の辞世の句を引用した。

『マッスル』はプロレスの仕組みに関する部分も取り込み、異常な熱量で展開するエッジの立った団体。停滞するプロレス界にさまざまな劇薬を注入しながら「おもしろく」してきた運動体だ。だが、その「おもしろさ」の追求の過剰さがときに賛否両論を巻き起こす。

この日は〝マッスル坂井自主興行〟というタイトルだったが、感覚的には通常の『マッスル』。いや、通常以上の衝撃を含んだ大会となった。01年に著書『流血の魔術 最強の演技 すべてのプロレスはショーである』（講談社）でプロレスの舞台裏を暴露、存在自体が〝タブー〟扱いだったミスター高橋をリングに上げてしまったからだ。

大会のクライマックス。誰もが予期しなかったミスター高橋の出現に、どうリアクションしていいのか戸惑いを隠せない場内。笑っていいのか悪いのか……。マッスル坂井も、「マズい、マズいって！」と困惑気味のポーズ。プロレスで体感したことのない不思議な緊張感が張りつめた。

このあと、一転してミスター高橋と「大喜利で勝負！」と十八番のアプローチを行なうことで、『マッスル』の観客にもわかりやすい方法で興行として軟着陸させてみせたマッスル坂井。

だが、この大会を観終わったあと感じたのは、「ミスター高橋はホントにタブーだったのか？」ということ。今回の展開に一部プロレスマスコミから否定的な反応もあったようだが、高橋本の発売から7年が経過、いまや細分化されすぎたプロレスファンと、高橋本を知らない新しい世代にとっては、タブー感はかなり薄まっている現状がある。それは大会後の報道でも超大事件とは扱われていないのを見てもあきらか。いったいプロレス界は何をそんなに恐れていたのか……。

一方、タブーに挑んだマッスル坂井。いままで自己表現の場である『マッスル』で坂井は、自分のそのときどきの気持ちや気分に正直になることで、プロレス界において「やらなくていいこと」や「面倒なこと」にあえてズブズブと足を踏み入れてきた。今回の件も、突然のようだが、『マッスル』史の流れの中では必然だった、と言えるかもしれない。

この日のラストで明かされたように、そもそもミスター高橋とマッスル坂井の対談は『マッスル』の単行本『八百長★野郎』（小社刊）にて、本誌編集部がセッティングしたもの。だが、そこから二人の交遊が始まり、最終的にリングに上げるということは、本誌もまったく予期していなかった。

その『八百長★野郎』のインタビュー内で、坂井はプロレス界にはびこる「しゃべちゃっていいハズなのに、しゃべっちゃいけない」ことへのストレスを表明している。そして、そのストレスを昇華した表現が、『マッスル』であることも。

おそらく坂井はミスター高橋と接見したことで、業界からタブー扱いとなっていることへの違和感を抱え込み、「いま、これを表現しなくてはいけない」という思いに至ったのではないか。

本来は、総合格闘技やミスター高橋本といった〝呪い〟から自由な〝呪いなきプロレスラー〟の代表格であるマッスル坂井。だが、この日は、一見〝タブー〟に固執する呪いのかかったプロレスのフリをしながら、呪いなきプロレスにキッチリと着地させてみせた。

だが、坂井は愉快犯的に「おもしろがって」いるわけではない。それが顕著だったのが、ラストで海賊男が乱入、ミスター高橋を連れ去ったシーン。

海賊男に対し、ミスター高橋が「やめろ！　高木！」と連発していたことから、この日の展開はマッスル坂井の独断ではなく、多団体とも交遊のあるDDTのボス・高木三四郎も〝覚悟〟を決めたうえでの決断だったことがサラリと提示されていた。

「おもしろき　こともなき世を　おもしろく」。呪いなきプロレスはただ自由で楽しいわけではない。

呪いなき新時代を推進するうえで「おもしろく」するための腹のくくり方。そこにある種の凄みさえ感じた〝マッスル坂井自主興行〟だった。


■送料は1回のご注文につき全国どこでも、何種類、何個でも、A欄の商品は税込735円、B欄の商品は無料
(但し、トレーニングバッグを含む場合は税込1,575円、特大トレーニングバッグ・スーパースタンディングバッグを含む場合は税込3,150円)
A タイ国No.1ブランド、世界のツインズ
TWINS SPECIAL
ツインズ ボクシンググラブ(ひも式、最高級本革製)
TB-8 8オンス 左右1組 税込¥7,140
TB-10 10オンス 左右1組 税込¥7,140
TB-12 12オンス 左右1組 税込¥7,140
TB-14 14オンス 左右1組 税込¥7,140
TB-16 16オンス 左右1組 税込¥7,140
ツインズ ヘッドガード(最高級本革製) ■サイズ/L
頭頂部ゴム式、後頭部マジックテープ式(セーフティパッド付き)ですから、簡単に脱着できます。
HGA-650 アゴカバー付きタイプ 税込¥8,925
HGB-700 アゴカバーなしタイプ 税込¥10,290
ツインズ スパーリンググラブ(マジックテープ式、最高級本革製)
カラーNO.1
カラーNO.2
カラーNO.3
カラーNO.4
TS-8 8オンス 左右1組 税込¥8,160
TS-10 10オンス 左右1組 税込¥8,160
TS-12 12オンス 左右1組 税込¥8,160
TS-14 14オンス 左右1組 税込¥8,160
TS-16 16オンス 左右1組 税込¥8,160
ツインズ パンチンググラブ(親指カットタイプ、最高級本革製)
TP-320 左右1組 税込¥3,980
■サイズ/M·L
NSH-650 ニュースーパーヘッドガード 税込¥5,800
後頭部マジックテープ式
■カラー/赤·黒·白
本革製
HG-350 ヘッドガード 税込¥3,675
表面:ポリウレタン製 後頭部マジックテープ式
■カラー/赤·黒
ALS-400 ソフトパンチングミット 税込¥4,200
■サイズ/縦24cm×横20cm×厚さ7.5cm
表面:ポリウレタン製
左右1組
脱着簡単…手を差し込むだけ。特殊構造により抜けにくい仕組みになっています。肘、肩にかかる衝撃を緩和させる構造になっています。
SALS-300 小型ソフトパンチングミット 税込¥3,150
■サイズ/縦21.5cm×横17cm×厚さ5cm
表面:ポリウレタン製
左右1組
ピンポイントの正確なパンチのトレーニングに最適です。
SPM-380 特製パンチングミット 税込¥3,990
■サイズ/縦25cm×横19cm×厚さ5.5cm
表面:ポリウレタン製
左右1組
脱着簡単…手を差し込むだけ。特殊構造により抜けにくい仕組みになっています。
BTB-1400 中身入り 特大トレーニングバッグ 税込¥14,700
■サイズ/直径38cm×170cm
■重量/約50kg
チェーン付き(取りはずし可)
スペシャルオイリーキャンバス製
BTBN-950 中身なし 特大トレーニングバッグ 税込¥9,975
MT-1500 中身入り ムエタイトレーニングバッグ 税込¥15,750
■サイズ/直径36cm×120cm
■重量/約25kg
本革+キャンバス製
チェーン付き(取りはずし可)
STB-900 中身入り 特製トレーニングバッグ 税込¥9,450
■サイズ/直径36cm×107cm
■重量/約22kg
外側素材4重構造により人体に似た弾力性があり、素手でたたくことも可能です。チェーン付き(取りはずし可)
①ビニールネットシート製
②EVA(緩衝材)
③スポンジ
④強化キャンバス
OTB-680 中身入り 大型トレーニングバッグ 税込¥7,140
■サイズ/直径36cm×107cm
■重量/約22kg
キャンバス+合成皮革(防水)製
チェーン付き(取りはずし可)
BT-800 中身入り 球形トレーニングバッグ 税込¥8,400
■サイズ/直径約56cm
■重量/約25kg
チェーン付き(取りはずし可)
スペシャルオイリーキャンバス製
TB-850 中身入り トレーニングバッグ 税込¥8,925
■サイズ/直径36cm×91cm
■重量/約20kg
チェーン付き(取りはずし可)
スペシャルオイリーキャンバス製
SST-200 スーパースタンディングバッグ 税込¥21,000
■サイズ/直径42×高さ180cm(土台部:直径68×高さ36.4cm)
■打撃部=表面:PVC、内部:硬質スポンジ 土台部=強化プラスチック
土台部水入れ式
従来の土台部に砂を入れるタイプと違って、水(約115kg)を入れるタイプですから大変便利です。(砂を入れる場合は約140kg)
内部に硬質スポンジ使用
従来のウレタンチップと違い硬質スポンジを使用することにより耐久性が一段とアップしました。
180cm
土台に砂を入れるタイプは面倒ですよ!
パンチンググラブプレゼント!
(色はおまかせ下さい。)
DB-300 ダブルエンドボール 税込¥3,150
■サイズ/直径24cm
■合成皮革製 ゴムひも·取り付け金具付
ボールはPVC製
DGM-550 ダブルグリップメディシンボール 税込¥5,775
■直径/約27.5cm
■重量/5.46kg
ゴム製ですから汗が染みず、革より強く型くずれは全くありません。ダンベル運動等、トレーニング方法は無限です。
練習方法DVD付き
MB-380 メディシンボール 税込¥3,990
■直径/約23cm
■重量/8ポンド=約3.6kg
●PVC製
パワーアップや打たれ強いボディ作りに
SB-100 スピードバッグセット 税込¥8,300
ネジ釘で壁に取り付けるタイプです。
ボールはPVC製→
GHS-315 本革製ヘッドストラップ 税込¥3,150
打たれ強くなるためには首の強化が大切です。
※プレートのご注文はお電話でお問い合わせください。
MP-50 マウスピース 税込¥525
最初に80度位のお湯に浸けて自分の歯形に合わせて使用してください。
※ケース入り
BA-600 Aタイプ バンデージ 税込¥630 コットン非伸縮織 5×274cm
BB-750 Bタイプ バンデージ 税込¥787 コットン非伸縮織 5×450cm
BC-800 Cタイプ バンデージ 税込¥840 コットン伸縮織 5×450cm
左右1組
※マジックテープ式
DM-1000 ダミーミット 税込¥10,500
■サイズ/100×82×厚さ10cm
スペシャルオイリーキャンバスは、キャンバスを合成樹脂でコーティングした大変丈夫な素材です。
スペシャルオイリーキャンバス製
株式会社モリヤ
MORIYA INC.
〒649-0434 和歌山県有田市宮原町新町435-2
TEL.0737-88-8059 定休日 日曜·祝日
●受付時間/AM9:00~PM7:00(土曜日はAM9:00~PM3:00)
FAX.0737-88-5611 年中無休 24時間受付
http://www.moriya-inc.com
●送料…1回のご注文につき(全国どこでも、何種類、何個でも)、A欄 の商品は税込735円。(ただし、ご注文にトレーニングバッグが含まれる場合は税込1,575円、特大トレーニングバッグ·スーパースタンディングバッグが含まれる場合は税込3,150円)、B欄 の商品は無料。
▼ご注文は次のいずれかの方法で左記へお申し込み下さい。
①電話·インターネット·ハガキ·ファックスで(代金引換)
商品の配達人に、商品代金+送料+代引料(1回のご注文につき税込315円、ただし商品代金が税込31,500円以上の場合は税込525円)をお支払い下さい。
②現金書留か郵便振替(00950-6-13351)で
いずれの場合も商品名·数量·電話番号を明記して(商品代金+送料)をご送金下さい。
■不良品は送料当社負担で、交換いたします。お客様のご都合による返品は未使用に限り、送料、返金料、お客様負担にてお受けいたします。(商品到着後1週間以内にご連絡の上、返送して下さい。)
※印刷の特性上、カタログの商品写真と実際の商品の色は異なる場合があります。
※お客様の個人情報は商品、カタログ等の発送以外に使用致しません。
全商品生産物賠償責任保険付
⇩QRコード⇩
ご利用いただけるカード(決済手数料当社負担)
▲日本全国道場·ジム·クラブ·サークル様御用達モリヤの格闘技用品 カタログ(御請求無料)

■送料は1回のご注文につき全国どこでも、何種類、何個でも、A欄の商品は税込735円、B欄の商品は無料
(但し、トレーニングバッグを含む場合は税込1,575円、特大トレーニングバッグ・スーパースタンディングバッグを含む場合は税込3,150円)

A フルコンタクト空手着 (上下セットは白帯付)



FK-380 (00号のみ下衣はゴム式) アイボリー空手着 (白帯付)

税込価格 サイズ(号)	(上衣)	(下衣)	上下セット(白帯付)
00	¥2,100	¥1,890	¥3,990
0・1	¥2,394	¥1,596	¥3,990
2・3	¥2,520	¥1,680	¥4,200
4・5・6	¥2,646	¥1,764	¥4,410
7・8	¥2,772	¥1,848	¥4,620
9	¥2,898	¥1,932	¥4,830

■素材/綿100%
■上衣9.5号帆布平織精練地
■下衣9.5号帆布平織精練地
■洗濯後収縮率/
アイボリー:縦11%前後、横3%前後。
純白:縦5%前後、横2%前後。

FKW-500 (00号のみ下衣はゴム式) 純白空手着 (白帯付)

税込価格 サイズ(号)	(上衣)	(下衣)	上下セット(白帯付)
00	¥2,940	¥2,310	¥5,250
0・1	¥3,150	¥2,100	¥5,250
2・3	¥3,465	¥2,310	¥5,775
4・5・6	¥3,780	¥2,520	¥6,300
7・8	¥4,095	¥2,730	¥6,825
9	¥4,410	¥2,940	¥7,350

道着サイズ	
00号	111〜120㎝
0号	121〜130㎝
1号	131〜140㎝
2号	141〜150㎝
3号	151〜160㎝
4号	161〜165㎝
5号	166〜170㎝
6号	171〜175㎝
7号	176〜180㎝
8号	181〜185㎝
9号	186㎝〜

※各流派の織マークは、型代(初回のみ)税込¥26,250、1枚税込¥31(1回に3,000枚の場合)でお受けいたします。(縫い付け代は無料。3,000枚未満の場合は、御相談下さい。)
※刺繍/5㎝角、3文字税込¥1,260が目安です。詳しくは、お電話でお問い合わせ下さい。

軽くて丈夫! 補強部分の強化に配慮して縫製しています。



純白伝統派空手着 (上下セットは白帯付)

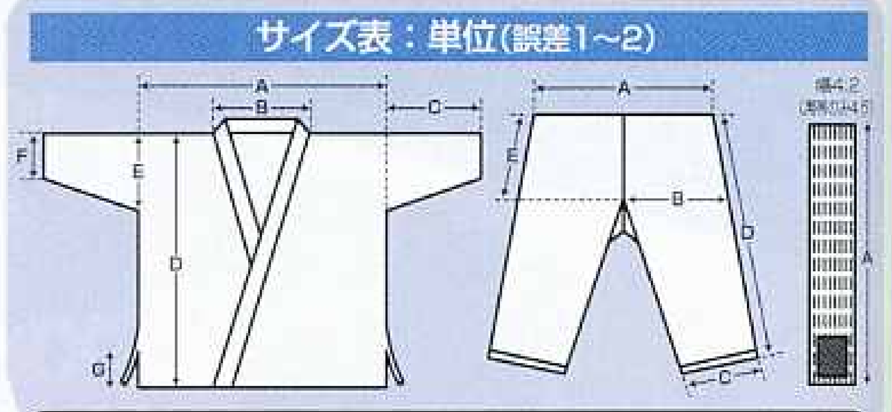
TK-500 (00号0号のみ下衣はゴム式) 純白伝統派空手着 (白帯付)

上衣、下衣とも10オンス
綿100%平織精練地

税込価格 サイズ(号)	(上衣)	(下衣)	上下セット(白帯付)
00・0・1	¥2,887	¥2,363	¥5,250
2・2½・3	¥3,176	¥2,599	¥5,775
4・5・6	¥3,465	¥2,835	¥6,300
7・8	¥3,754	¥3,071	¥6,825
9	¥4,042	¥3,308	¥7,350

※刺繍/5㎝角、3文字税込¥1,260が目安です。
詳しくは、お電話でお問い合わせ下さい。

サイズ表:単位(誤差1〜2)



洗濯後収縮率/縦5%前後、横2%前後

サイズ(号)	身長目安	上衣 A	上衣 B	上衣 C	上衣 D	上衣 E	上衣 F	上衣 G	下衣 A	下衣 B	下衣 C	下衣 D	下衣 E	帯 A
00	111〜120	42	12	28	55.5	22	15	17	31	21.5	20	64	18	190
0	121〜130	44	12	29	59.5	22	15	19	33	23	21	70	18	204
1	131〜140	47	13	32	64	24	16	22	36	24	22	75	18	214
2	141〜150	50	14	35	68	24	16	23	38	25.5	23	79.5	19	236
2½	151〜155	53	15	39	72	26	17	25	40	27	24	84.5	22	236
3	156〜160	55	15	41	76	27	17	26	44	27.5	24.5	89.5	22	256
4	161〜165	57	17	43.5	80.5	29	19	28	46	29.5	25	98	22	271
5	166〜170	59	17	44.5	82.5	30	19	30	48	30	26	101	24	285
6	171〜175	61	17	45.5	85.5	30	20	31	50	33	28	105	25	313
7	176〜180	63	17	46.5	88.5	32.5	20	32	52	34	28.5	109	27	332
8	181〜185	65	18	47.5	91.5	33	21	33	54	34.5	30	113.5	29	350
9	186〜190	67	18	48.5	95.0	33	21	34	56	37	30	118.5	30	375

※お願い:他社の号数区分と違いますので、ご注文の際は身長目安に注意して下さい。

0号ゴム式下衣

FKR アイボリー下衣 税込¥2,100
FKWR 純白下衣 税込¥2,625

CB-80 カラー帯0〜9号 税込¥840

■カラー/黄・オレンジ・赤・緑・青・紫・茶

カラー帯サイズ(幅×長さ)	
0号	4.2×204㎝
1号	4.2×214㎝
2号	4.2×236㎝
3号	4.2×256㎝
4号	4.2×271㎝
5号	4.2×285㎝
6号	4.3×313㎝
7号	4.3×332㎝
8号	4.3×350㎝
9号	4.3×375㎝

※黒帯は長さ約45㎝短い寸法の色帯に限定です。

SBB-200 特製黒帯2〜9号 税込¥2,100



PM-380 ポリカーボネイド面 税込¥3,990

■表面:ポリウレタン製
前面:ポリカーボネイド製
■サイズ/一般用 フリー
■カラー/赤・白



FHP-350 フルコンヘッドプロテクター 税込¥3,675

■サイズ/幼児用・少年用・一般用
■カラー/白・赤
■表面:ディップド 内部:NBR製 通気穴が大きく快適です。



KSU-800 拳サポーター薄手 左右1組 税込¥840

■サイズ/幼児用 少年用 一般用



SUK-800 拳サポーター超薄手 左右1組 税込¥840

■サイズ/幼児用 少年用 一般用 スポンジの厚さ3㎜



LG-180 レッグガード 左右1組 税込¥1,890

■サイズ/幼児用 少年用 一般用



拳サポーター薄手、超薄手、レッグガードは、点線部を縫いつけていますので、試合中や洗濯後に、内部のスポンジがずれません。

FCG-350 女性用チェストガード 税込¥3,500



フルコンヘッドプロテクターと同じ材質です。マジックテープ式で脱着簡単
■フリーサイズ
■表面:ディップド 内部:NBR製

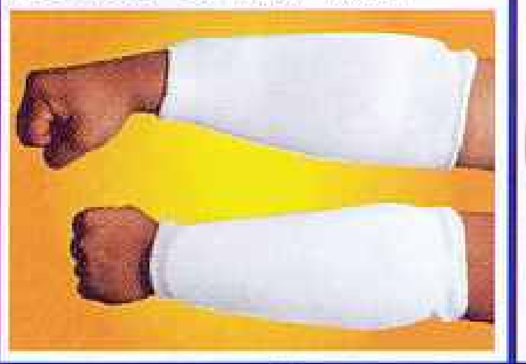
ES-100 ひじサポーター 左右1組 税込¥1,000

■サイズ/少年用、一般用



FG-120 前腕ガード 左右1組 税込¥1,200

■サイズ/少年用、一般用



LS-180 ローキックサポーター 左右1組 税込¥1,500



■サイズ/少年用、一般用

HS-120 ひざサポーター 左右1組 税込¥1,260



■サイズ/少年用、一般用

GS-125 グローインサポーター 税込¥1,312



■サイズ/幼児用 少年用、一般用

JCP-300 幼児用チェストプロテクター 税込¥3,150



硬すぎず、柔らかすぎず練習に最適
■表面:PVC
裏面:ナイロン
内部:スポンジ+EVA

LG-350 ローキックガード 左右1組 税込¥3,500

脱着簡単



■表面/ビロード内部EVAとスポンジの二重構造

GMP-220 本革製パンチンググラブ 税込¥2,310

■カラー/赤・黒・白
左右1組



GMPJ-220 本革製パンチンググラブ女性・少年用 税込¥2,310

■カラー/赤・黒
左右1組



PGB-220 本革製パンチンググラブB型 税込¥2,310

■カラー/赤・黒
左右1組



SUG-3500 スーパーアルティメットグラブ 左右1組 税込¥3,675

■サイズ/一般用フリー
■本革+ネオプレーンゴム



マジックテープ式

GKM-380 ビッグミット 税込¥3,990

■サイズ/35×60×厚さ9㎝
スペシャルオイリーキャンバス製



GKM-380 本革製キックミット 税込¥3,990

■サイズ/42×21×厚さ10㎝
大変丈夫なムエタイプロ用キックミットです。



KP-150 キックミット 税込¥1,575

■サイズ/45×23×厚さ11㎝



KPJ-150 キックミット幼児用 税込¥1,575

■サイズ/30×15×厚さ8㎝

表面素材に丈夫なナイロンを使用、ビニロン、キャンバス等とくらべ、強さが一段とアップいたしました。



KT-120 キックターゲット 税込¥1,417

ポリウレタン製



ABP-100 アブパンチ (空気入れ付き) 税込~~¥10,500~~ ¥2,800

パンチ力を高める腹直筋と外斜腹筋を強化。
折りたたみ可



○シートの高さ5段階調節可
○ボールの高さ5段階調節可
○フットパッドの高さ3段階調節可

CP-100 コーチ用プロテクター 税込¥10,500

■表面:ポリウレタン製
※パンチングミットは含まれていません



SK-350 円筒型キックミット 税込¥3,500

■サイズ/直径23×長さ34.5/42.5㎝×厚さ5㎝



■ナイロン製

KT-300 スプリングミット 税込¥3,000

寸止めの練習にも有効です。



■ナイロン製
■サイズ/打撃部:直径15㎝×41㎝(全長61㎝)

JDM-500 幼児用ダミーミット 税込¥5,250

スペシャルオイリーキャンバス製
■肩掛け式(柱に巻き付けは不可)
■サイズ/65×51×厚さ8㎝



TLG-180 タイスタイルレッグガード 税込¥1,890

■カラー/赤・黒 左右1組



■マジックテープ式 ■フリーサイズ
■ポリウレタン製

B

JM-180 ジョイントマット



■カラー/青・赤
■サイズ/100×100×厚さ1.5㎝
■重量/1.35kg
■硬度/40°±3
■組み合わせ、取りはずし簡単
■2辺、耳の部分付き(取りはずし可)
■防護性と保温効果抜群
■片面スベリ止めつき
■素材/EVA

素材サンプルご請求無料

送料無料		
1〜24枚	各1枚	税込¥1,890
25〜49枚	各1枚	税込¥1,680
50枚以上	各1枚	税込¥1,554

TM-500 タタミマット



■カラー/オリーブグリーン(青畳色)・赤
■サイズ/100×100×厚さ4㎝
■重量/4kg
■硬度/40°±3
■組み合わせ、取りはずし簡単
■2辺、耳の部分付き(取りはずし可)
■防護性と保温効果抜群
■両面タタミ模様スベリ止めつき
■素材/EVA

素材サンプルご請求無料

送料無料		
1〜24枚	各1枚	税込¥5,250
25〜49枚	各1枚	税込¥4,725
50枚以上	各1枚	税込¥4,410

RR-300 突き、蹴り用ラバーロープ 税込¥3,150

■サイズ/幅3㎝×長さ209㎝×厚さ5㎜



SK-200 正拳トレーナー 税込~~¥2,000~~ ¥800

■ラバー取りはずし調節可



次回はウェイトトレーニング用品の広告です。カタログ(御請求無料)

kamipro SHOPPING

通販カタログ



Kamiproマスクアシャツ[☆]
[S·M·L·XL ホワイト×レッド]¥3,990(税込)



マッスル スターウォーズ Tシャツ[☆]
[S·M·L·XL イエロー]¥3,150(税込)



青木フンドシ Tシャツ[☆]
[M·L·XL ブラック]¥3,990(税込)



一、十、百、戦極!! 戦極!! Tシャツ[☆]
[M·L·XL ブラック]¥3,990(税込)



マサ斎藤Tシャツ[☆]
[M·L·XL ブラック]¥3,150(税込)



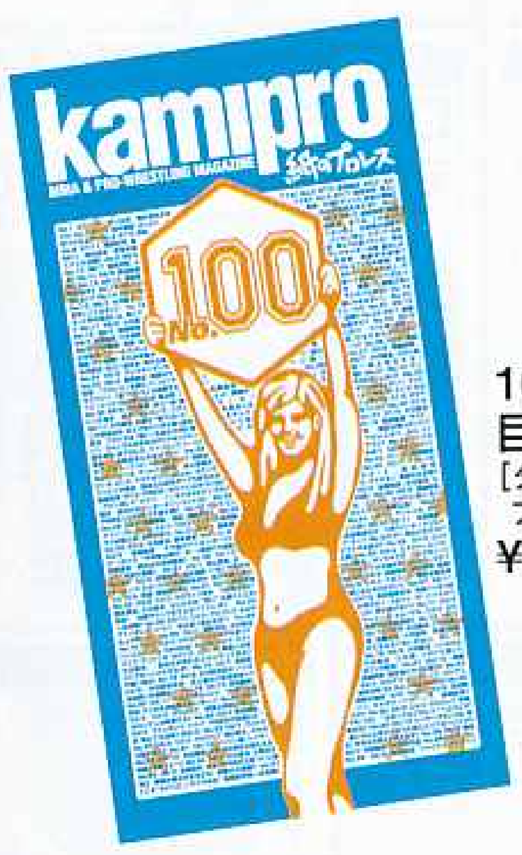
I編集長“殺し”Tシャツ[☆]
[M·L·XL ブルー]¥3,990(税込)



インリン様女神「LOVE」Tシャツ[☆]
[M·L·XL ホワイト]¥3,990(税込)



インリン様女神「LOVE」Tシャツ[☆]
[Lady's M ホワイト]¥3,990(税込)



100号記念特製
巨大バスタオル
[タテ132cmヨコ68cm
ブルー×オレンジ]
¥3,150(税込)



“殺し”キャップ
[フリー ネイビー×ホワイト]
¥3,150(税込)



ザ・モンスター℃ Tシャツ
[130·140·XS·M·L ブラック]¥3,675(税込)



高田総統と愉快なモンスターズ Tシャツ
[XS·M·L·XL ブラック]¥3,990(税込)
※ イラストと実際の商品は異なる場合がございます。

『kamipro』通販方法

- 通販はすべて代引きです。お支払いは、現金、デビットカード、クレジットカードの中から選べます。
- 全国どこでも送料一律500円です。
(何枚でも可。離島・山岳部の方はお問い合わせください)
- 代引き手数料は315円です。
(代引き金額によって異なります)

[ご注文の方法]
詳しくは『kamipro Hand』の通販コーナーをご覧ください。ご注文後、確認メールを送りますので注意してご覧ください。

[問い合わせ]
(株)ダブルクロス TEL.03-5368-1797
(平日13:00〜19:00)

[kamiproオリジナルTシャツ サイズ表]
☆マークのものがKamiproオリジナルTシャツです

(単位はcmです)

サイズ	S	M	L	XL
身丈	66	70	74	78
身巾	49	52	55	58
袖丈	19	20	22	24



※価格はすべて税込みです



ボノちゃん どすこいTシャツ
[100·120·140 グリーン]¥3,150(税込)
[XS·M·L·XL グリーン]¥3,990(税込)



坂田亘 LOVE & HUSTLE Tシャツ
[100·120·140 レッド]¥3,150(税込)
[XS·M·L·XL レッド]¥3,990(税込)



MONSTER K "ON STAGE"Tシャツ
[100·120·140 ブラック]¥3,150(税込)
[XS·M·L·XL ブラック]¥3,990(税込)

kamiproHandで カンタン注文!!

[販売元]ダブルクロス

ケータイサイトで
セール実施中!
いますぐアクセス!!
★非会員でもショッピング可能!!

アクセス方法

DoCoMo iMenu ▶ メニューリスト ▶ スポーツ ▶ 格闘技/大相撲 ▶
※もしくは「kamipro」で一発検索
au トップメニュー ▶ カテゴリで探す ▶ スポーツ ▶ 格闘技 ▶
SoftBank メインメニュー ▶ メニューリスト ▶ スポーツ ▶ 格闘技 ▶
WILLCOM 趣味&スポーツ ▶ スポーツ ▶ 総合 ▶
エンターテイメント ▶ TV・メディア・本 ▶ 本 ▶

kamipro Hand

[QRコード]

石井慧級の超大物プレゼントを大放出!

kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①～⑧の質問の答えをご明記の上、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は2008年11月25日以降発送予定です)。

【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦石井慧はどこのリングに上がってほしいですか?⑧石井慧が誰と対戦する試合を観たいですか?

【宛先】〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス『kamipro』編集部
「振り出しに戻って考える」係まで

※応募締切は2008年11月17日(月)当日消印有効

PRESENT*01



1名様　サイン入り

坂田亘 LOVE&HUSTLE Tシャツ

[ハッスル／レッド／¥3,990(税込)]

坂田の得意技スーパーキックに入る直前のポーズを切り取った少年マンガふうのイラストがキュート。サイズはMです。こちらもサイン入り!

PRESENT*02



1名様　サイン入り

ボノちゃんどすこいTシャツ

[ハッスル／グリーン／¥3,990(税込)]

ボノちゃんのかわいらしいキャラがカレッジふうのイラストで描かれたハッスルTシャツ。サイズはLです。1歳児にしては字がうまい!

HUSTLE■http://www.hustlehustle.com/

PRESENT*03



2名様

桜庭和志×青木真也サイン色紙

夢の顔合わせとなった両者が一枚の色紙にサインを入れた歴史的な逸品を大放出!
当たった方は一生モノです。家宝にしちゃってください!

DREAM■http://www.dreamofficial.com/

PRESENT*04



1名様

オンラインゲーム 北斗の拳ON LINE

[ガンホー・オンライン・エンターテインメント株式会社／¥6,090(税込)]

基本プレイ料金無料(アイテム課金式)のオンラインRPG。劇場版に登場する装備アイテムなどを入手できるパッケージソフトをプレゼント!!

北斗の拳ON LINE■http://www.hokutonoken-online.jp/

PRESENT*05



1名様

TOKORO×LITTLE VOLK Tシャツ

[リバーサル／ブラック／¥5,040(税込)]

リバーサルがサポートする所英男選手のTシャツ。ニックネーム「小さなヴォルク・ハン」のヴォルク(狼)がモチーフです。サイズはLです。

PRESENT*06



1名様

リバーサル エンブレムTシャツ

[リバーサル／ブラック／¥5,040(税込)]

シャープかつエレガントな雰囲気のリバーサルエンブレムTシャツ。上品な感じを着こなしちゃってください! サイズはMです。

REVERSAL■http://www.rvddw.com/

PRESENT*07



3名様

ダイヤモンドキッズカレッジTシャツ

[髙田道場／ホワイト／非売品]

参加者だけがゲットできるレアなTシャツです。サイズはS、M、Lで各一枚です。DKC次回は12/19埼玉県草加市で開催。詳細はHPで!

髙田道場■http://www.takada-dojo.com/

kamipro128 応募券
まずは卒業

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

こちらでも毎週プレゼント実施中!! http://kamipro.com/



kamipro 紙のプロレス

No.128
2008年11月5日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョロ
松下ミワ
真下義之
大川義之
スズキィ
八木賢太郎（釣魚おすそ分け対応のため非番）

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
ジャイ子
能登“読者ペイジ”ジャクソン

編集次長（チョロ仕事被害者の会）
松林 貴

デザイン大将
出田さん（TwoThree）

デザイン司令長官
金井ヒサくん（TwoThree）

デザイン
松坂マツくん
谷タニやん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
白木みのる（以上、TwoThree）

トメさん
はなえちゃん（以上、さおとめの事務所）

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
山口比佐夫
吉場正和
平 専英
戸成嘉則
大甲邦喜

お勘定&衣料部
ニュー林様

秋のスイーツ
入江モンブラン（TwoThree）

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

助っ人営業
上野宏樹

業務部
樽本“せんだいカラー続行”義之

編集庶務
原 正典
山内ユリコ

終身名誉編集庶務
高木由美子

編集チアガール
金川奈津子
宮沢美奈

編集チアマダム
廣橋“韓流薬膳”久美子

発行所
株式会社エンタープレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）

印刷
図書印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

■広告掲載のお問い合わせは下記まで
株式会社エンタープレイン
スポーツ企画編集部 ☎03-3265-7166

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート]
☎0570-060-555
（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00～17:00）
メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンタープレイン（URL: http://www.enterbrain.co.jp/）、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。



NEXT ISSUE

特集以外にも気になる大晦日情報満載!

No.129は11月22日（土）発売予定!

※地域によっては多少発売が遅れマッソー!



ka
No.128
2008年11月5
発行人
浜村弘一
編集人
斉藤慎一
編集統括本部長
ジャン斉藤
編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョ
松下ミワ
真下義之
大川義之
スズキィ
八木賢太郎
終身名誉バイザ
吉田 豪
助っ人
ジャイ子
能登"読者
編集次長（チョロ
松林 貴
デザイン大将
出田さん（Tw
デザイン司令長
金井ヒサくん
デザイン
松坂マツくん
谷タニやん
廣田ブンち
野口ノグッ
白木みのる
トメさん
はなえちゃん
カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
山口比佐夫
吉場正和
平 専英
戸成嘉則
大甲邦喜
お勘定&衣料部
ニュー林様
秋のスイーツ
入江モンブ
雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠
助っ人営業
上野宏樹
業務部
樽本"せんた
編集庶務
原 正典
山内ユリコ
終身名誉編集庶
高木由美子
編集チアガール
金川奈津子
宮沢美奈
編集チアマダム
廣橋"韓流
発行所
株式会社エ
〒102-843
☎0570-0
印刷
図書印刷株
協力
BUSHIDO
FightSpor
■広告掲載の
株式会社エ
スポーツ企

kamipro 2008 128
"世界最高峰のリング"消滅から一年――!
PRIDE大好き超愛してる!!



2008年11月5日
発行人/浜村弘一　編集人/斉藤慎一　発行・発売所/株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
印刷・製本/図書印刷株式会社

enterbrain

特別定価: 本体895円 +税
雑誌 61956-63 Ⓗ2009.2
Printed in Japan 図書印刷

9784757745148
ISBN978-4-7577-4514-8
C9476 ¥895E
1929476008954

…石井慧プロ転向騒動の裏側!!

…mipro

enterbrain MOOK

2008
128
特別定価 940yen



…リング"消滅から一年——!

…DE大好き
…してる!!

kamipro 2008 128

"世界最高峰のリング"消滅から一年——!
PRIDE大好き超愛してる!!
いまでも胸踊るダン! ダン!! ダダダン!!!

2008年11月5日
発行人／浜村弘一　編集人／斉藤慎一
発行・発売所／株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
印刷・製本／図書印刷株式会社

eb! enterbrain

特別定価：本体895円＋税
雑誌 61956-63 Ⓗ2009.2
Printed in Japan 図書印刷